
Lost gear and broken pendulums

真梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lost gear and broken pendulums

【コード】

N3400N

【作者名】

真梨

【あらすじ】

藍染との決戦から一か月。突然、黒崎一家が姿を消した。消滅した一護の霊圧、届いた手紙、消えた崩玉。

すべては、一心の出生に由来した。

32年の時を経て、すべてが動き出す

一護は無事なのか。

仲間たちと再会できるのか。

8 / 5 S 1 5 真夏の夜の夢 掲載開始

瑠亜咲矢（by 瑠亜様）に拙作のオリキャラを出して頂きました。
詳しくは活動報告まで。

ねつ造警報発令です！

- ・一護メインにも関わらず当分一護が出てこない(汗)
- ・オリキャラはいずれ登場しますが当分出てきません。
- ・大長編になる可能性大…
- ・cp要素は雨織、一護はいずれオリキャラとひつつきます。
- ・現世組が32年をとります。
- ・あるキャラが死にます。いずれ。しかも複数。
- ・曳舟元十二番隊隊長についてねつ造設定多数。

それでも良い方、ぜひご一読ください。

感想、お待ちしております。

「Lost gear and broken pendulums」

男により狂わされた振子は

少年によりあるべき姿に戻される

再び狂わされるまでの

ほんのひと時の間

歯車の欠けた振子は狂い

失われた歯車は二度と帰ることはない

狂わされた振子の4つは

その立場ゆえに誰よりも早く真実を知り

その立場ゆえに葛藤に苛まれる

狂わされた振子の1つは

その能力ゆえに真実を知らされ

その能力ゆえに自ら流れに身を投じる

狂わされた振子の2つは

その賢しさゆえに自ら真実にたどり着き

その賢しさゆえに自らの口を閉ざす

そして残りのすべては

狂ったままに時を進む

真実を告げられるその日まで

l u m s
l o s t
g e a r
a n d
b r o k e n
p e n d u

まずは、詩。プロローグですね。

一応、過去篇に入る時の原作の詩を参考にしています。

こちらは、未来へと振れるわけですが。

この詩にそって、第一部は展開していきます。

それでは、宜しく願います。

a s e n s e o f i n c o n g r u i t y (前書き)

1話です。

現世組が出てきます。

藍染との決戦から一ヶ月後の話です。

a s e n s e o f i n c o n g r u i t y

藍染との戦いが終わった。

苦しい戦いを終えた後の尸魂界は、静寂に満ちたものだった。

ルキアは、十三番隊の隊舎で夜警の任を果たしながら空を見上げ、
思いを馳せる。

一護が、いなければ。

尸魂界も現世も虚圏も、今頃全て藍染のものだっただろう。

霊王の首も、そのものに。

とんでもない奴だと思う。

そもそも、考え方からしてどこがおかしいのだ。

こちらの意を汲めと思ったのは一度や二度の話ではない。

ただの生意気なガキなのだ。あいつは。

ただ、だからこそ、とんでもない奴なのだ。

三千を超える死神たちの頂点に立つ隊長。

その全ての力を持ってしても敵わなかった藍染を、一護は倒して見
せた。

護るという、その強い意志のもとに。

自分が力を与えた少年が、世界を救った。

ただの偶然出会っただけだけど、それでもそれは誇りだ。

彼の仲間として、共に戦うことができるのも。

そつと胸に手を当て、一護のことを想う。

刹那、微かな違和感を感じた。

だがそれも、瞬間的に消え失せる。

「……………一護……………?」

ルキアはまだ気付かなかった。
その違和感に気付いたのが、自分だけではないということ。
その違和感は、気のせいではないということ。

織姫は、部屋から空を見上げていた。
すっかり冬になったせいで、風がひどく冷たい。

それでも窓を開け放っているのは、直接その景色を見たいから。
見なれた部屋。見なれた街。見なれた学校。見なれた友達。
戦いが終わって、全てが、自分の知っているままだった。
ううん。全てじゃない。

助けられなかった人もいた。
それでも、街は、世界は、護られた。
自分を護ってくれた少年によって。

「黒崎くん。」
自分の手をその胸に抱き込むように握る。
それはさながら祈りのようで、しかし本人は気付いていない。

「…ありがとう。護ってくれて…！」
目尻に、涙がにじむ。
だめだな、最近泣き虫になっちゃった。
心の中で苦笑して、涙を拭う。

織姫は、今度こそ祈りのように目を閉じて、一護のことを想った。
しかし、去来するさまざま思い出の最後に映ったのは、
寂しげに笑う、一護の姿だった。

「…黒崎、君…？」

呟いた織姫の声を、風がさらった。

雨竜は、通りから空を見上げていた。

半年前の自分は、今の自分を嗤うだろうか。

死神とともに戦った自分を。

ましてや、仲間として。

自分にとって、滅却師であることは誇りだ。

人でありながら、人を異形から守る存在としてあれる自分が、誇りだった。

今でもそれは変わらない。

だがそれ以上に。

死神とわかり合うことができた、初めての滅却師であることが誇りだ。

今までの滅却師も成し遂げなかった、その偉業を成せたことが誇りだ。

そして、そのきっかけになった仲間兼クラスメイト（そして認めたくないがライバル）を想う。

藍染の一件が終わってから少し様子がおかしかったが、ようやく落ち着いてきた。

「早く、本調子に戻れよ。」

呟く。

「君みたいなのが今まで以上に不安定な霊圧を垂れ流しているのを見るのは不快なんだ。」

素直じゃないと自分でも認めつつ、無意識に一護の霊圧を追う。

だが、その霊圧がこれまでにないほど不自然に静まっているのを感じて眉をひそめた。

「…黒崎…?」

チャドは、夜道を歩いていった。
ふと足を止め、澄んだ空を見上げる。
日本の月は、アブウエ口とともに見たのとは少し違う気がする。
同じ月なのに、不思議だ。

「…一護…」

月の名を持つ刀を背負う友。

一護が死神になる前から、自分が力を手に入れる前から、自分たちは戦友だった。
互いのために拳を振るうと約束したその時から。

自分をはるかに凌ぐ力と、そして頑固ともいえる固い意志。
その強さで、空座町を護りきった。

だからこそ、不安になる。

尸魂界の誰もが一護を英雄と称える。
だけど、違う。

一護は、一護なんだ。

一護は不器用だから、自分の思いを上手く伝える事が出来ない。
そして、自分もそれ以上に不器用だから、代わりに思いを伝える事が出来ない。

それが悔しくて仕方がない。

一護が苦しんでいるのはわかるのに。
あの時、あの戦いで何があったのか、一護は口を閉ざしたまま話そうとしない。

上手くそれを聞く術を持たぬ自分は、待つことしか出来ない。
それが悔しい。

ふと、風が首元をすりぬけた。
冬にもかかわらず、温い風が。

嫌な、予感がする。

視線を落したチャドは、家路を急ぎ始めた。

違和感を感じたのは、彼らだけではない。
同じ時、違う場所で。

一護を知る者たちは、それぞれに違和感を感じた。
しかし、気に留める事もなく忘れ去る。

それが、一護の残した最後の痕跡とも知らずに。

一護は、死神化して電柱の上にあった。
それが、いつぞやのルキアの姿と重なるとも知らず。

そしてまた、空を見上げる。

この月は永遠に変わらないのだろう。
らしくもなく感傷的なことを考える。
月のまぶしさが目に染みた。

視線を落とし、住宅街を見渡す。

わずかに、心が揺れた。

ためらいが、消えたわけではない。

自分がしようとしていることが、何を導くのか。
それが解らぬ訳ではない。

仲間二度と会えなくなる道へ踏み出そうとしているのだとわかっている。

それが、仲間たちを裏切るに等しい行為になるであろうことも。

緩く頭を振った。

後ろ向きになる自分を叱咤する。

決めたじゃないか。

それでも、進むと。

護ると、決めた。

それに、

立ち止まるのは性分じゃない。

大丈夫だ。

ここには、仲間たちがいる。

自分がいなくても、護ってくれる。

自分がいなくても、護り合ってくれる。

だから、大丈夫だ。

一護は、迷いを振り切るように電柱から飛びおりた。

そして、後ろに気配を感じて振り向く。

しばしの沈黙を経て、そこに立っていた男に頷いて見せた。

静寂を映した一護の顔は、まるで別人かと思うほど・・・に満ちてい

る。

男は、ゆくゆくは己の主となる者の、その片鱗を垣間見た気がした。

一護が驚くのに構わず跪く。

「参りましょう。」

心のうちで別なる言葉を呟きながら、一護に言った。

この器、未だ完ならず。

而して我、主と見定めたり

a s e n s e o f i n c o n g r u i t y (後書き)

誰だよ、一護は当分出てこないとか言った奴。
フツーに出てくるじゃないか(殴)

しかももう一つ宣言破ってるし。

それが何かは(微妙に)ネタバレを含むので言いませんが。

そしてチャドの偽物率が高い…

精進します(泣)

タイトルの日本語訳は「違和感」
何度も本文中に出てきます。

次話も早く投稿できるといいなあ。

感想、お待ちしてます。

あ、本文中の「・・・」が何かは、内緒です。
そのうち解ります。

ヒントは、日番谷がいずれ言うセリフ(ヒントじゃねえ。
(

o v e r t u r e t o t h e d i s c o v e r y (前書き)

2 話です。

1 話の翌朝、学校が舞台です。

overture to the discovery

翌朝。

いつものように始まる学校。

石田が登校すると、すでにほとんどの生徒がそろっていた。

「おはよう！石田君！」

織姫が石田に向かって手を振る。

軽く手を上げてそれに応え、自分の机に荷物を置いてから歩み寄った。

「おはよう…黒崎は、まだきていないのか？」

織姫の机に周りに集まっているのは、たつきと茶渡、水色、啓吾の4人。

いつもならいるはずの一護の姿がないことを不思議に思った。

「ああ…一護の家、留守だったんだよね。」

急な用事でもできたのかな、と水色がぼやく。

「留守？」

石田が問い返すと、たつきが頷いた。

「チャイム鳴らしても、誰も出なかったんだってさ。」

「誰も出ないって…妹さんもか？」

再び問うと、水色が頷く。

「そ…しばらく待ったんだけど、誰も出てこなかったからそのまま学校来ちゃったんだよね。」

親戚で不幸でもあったのかな、と水色が言う。

「病院の方に張り紙はしてなかったの？」

誰もいないのなら休診の張り紙がしてあるはずだ、とたつきが言った。

「ん？今日木曜日だからもともと休診じゃなかったっけ。」

「あゝそっか。あそこ休診木曜日だ。」

「病院つて木曜休診多いよね。」
「知らず知らずのうちに会話が逸れ、他愛もないものへと変わっていった。」

やがてチャイムがなり、担任の越智が教室に入ってきた。

「おはよう！出席とるよ！……今日は黒崎が欠席なだけだな？」
越智が出席簿にすらすらと印をつけていくのを見ながら、織姫は隣の席の雨竜に呟いた。

「欠席だつて。…何か、あつたのかな？」

「せんせー。一護が欠席つて連絡あつたんですか？」

ちょうどその時、啓吾が越智に質問した。

「ん？ああ、なんか家であつたらしくてな。明日休みますつて昨日のうちに保護者の方から連絡があつたんだよ。つーわけで黒崎は欠席な。…はい、授業始めるよ。」

ざわざわと教科書やらノートやらの準備の音がする教室の中で、チャドと雨竜と織姫はちらりと目を見かわした。

「…あつたらしいね。…まあ、死神がらみではなさそうだけど。」
雨竜はクイと眼鏡を上げて呟いた。

昼休み。

いつものように屋上で昼食をとる。

近頃は一護・チャド・啓吾・水色に雨竜と織姫、たつきが加わるようになり、その組み合わせに空座一高の七不思議とまで言われるようになったのは、余計な話である。

「たつきちゃ〜ん！今日のお弁当はね！」

「あーはいはい。今日も美味しそうだね。」

何を食べるかすら言わず発された突っ込みに織姫はにっこりと笑った。

「でしよ〜？も、この焼き鳥とアンコの組み合わせがね！」
焼き鳥とアンコ。

チャドはその発言を聞かなかったことにしたらしいが、雨竜はむせ込んだ。

「大丈夫？石田君。よく嚙んで飲みこまなきゃダメだよ？」

「う…うん」

まさかその食べ合わせにむせ込んだなんて言えません、と顔に書いてある雨竜にたつきは溜息をついた。

「…家族でいないってことは、別に尸魂界がからんでるわけではないんですよ？」

料理の上手い女の子に作ってもらったお弁当をつつきながら水色が雨竜に尋ねた。

水色も、たつきも、啓吾も、あの藍染との決戦の後、全ての事実を知らされた。

ただ巻き込まれただけなら、記憶を消せばそれで済むことだ。見えもしない霊のことなど知らない方が平和でいい。

だけど、彼ら3人は霊を見る事が出来る。

一護が死神であることも、雨竜やチャドや織姫がそれに関わっていることも、戦いに巻き込まれる前から知っていた。

だからこそ、身の安全を図るために事実を話す事が尸魂界から許可された。

「異例ではあるがな。」

そう呟いたルキアの姿は記憶に新しい。

ルキア達は現世駐在の任を終え、すでに転校手続きを済ませてある。あの戦いの犠牲者は現世では事故死として処理された。

全てが、元の通りとは言わないまでも回り出した。

「ああ。…尸魂界は黒崎にしか興味はないからな。…それに、あいつに用があるのなら、たいていは僕らにも用があるだろうし。」
雨竜は自分の弁当をつつきながら答える。

「なら、いいんだ。また物騒なことに巻き込まれているんじゃないかってちよつと思つたから。」
そういう水色に、啓吾が頷く。

その姿を見て、雨竜達は複雑な気持ちになった。

彼らは、戦いを目にしたことがあつても、戦つたことはない。

その点では、織姫以上に甘いともいえる。

だからこそ、尸魂界のことをあまりよく思っていない節がある。

自分の友達を巻き込むな、とでもいう感じだろうか。

それは誤解だと何度言つても納得してくれなかった。

ついでにいうと、事実を話した後の反発もすごかった。

自分と茶渡くんは、まだいい。

虚圏が出るまでに井上さんに怪我を治してもらつてあつたから。

というより内蔵の半分を潰された後だったから全国で二番目に強い女子高生の鉄拳ぐらいなんでもない。

井上さんだつて平手を甘んじて受けていた。

3人もそれだけのことをしたという自覚はある。

ただ、藍染を倒した後の、しかも死にかけていないとはいえ満身創痍でくたくたの一護すら容赦なく殴つたと聞いたときは驚かされたし、心底恐ろしいと思つた。

「にしても、おかしいなあ。」

雨竜が遠い目で回想にふけつてしていると、水色がケータイを見て言つた。

「どうしたの？」

「メールの返信が来ないんだよね。一護から。電話しても出ないし。忙しいのかなあ。」

「だったら、と啓吾が言つた。」

「放課後、一護の家に行つてみようぜ？どうせみんなヒマだろ？」

その一言で、6人の放課後の行動が決定した。

overture to the discovery (後書き)

今度こそ一護は出てきませんでした。
よかった(汗)

タイトルの日本語訳は「発覚への序曲」
何が発覚するのは、次の話です。
つってもわかりますよね？

こういう予測を感想とかに書いていただけると嬉しいです。
ああ、そんな風に思う人もいるんだ。って参考にできますし。

本文中に、たつきが一護を殴ったって書いてありますけど、私の脳内ではこんな感じですよ。
藍染倒した 友達のとこ戻った 虚圏からみなさんが帰ってくるまでに
です。

いやはや容赦ない！ケガ治ってないから
今度の今度こそ啓吾や水色が止めに入ってくれないのでは…
彼らだって訳わからない度最高潮ですしね。

でもきつと一護もそれだけのことをしたっていう自覚はあるでしょうね。

それでは、次話も早く投稿できるよう頑張ります。

感想いただけると嬉しいです。

t h a t i s w h a t a s e n s e o f i n c o n g r u i t y

3話と同じ日の放課後です。

that is what a sense of incongruity

放課後、啓吾の発案に乗って訪れた黒崎医院はまるで人の気配がなかった。

カーテンはぴたりと閉じられており、チャイムをならしても返事がない。

「やっぱり、出かけてるんじゃないかなあ。」

水色が言う。

すると、次の瞬間雨竜の咳きが聞こえた。

「…嘘、だろ……？」

振り向くと、雨竜は真つ青な顔で立ち尽くしていた。

「石田君？どうしたの？」

「霊圧……」

「え？」

「黒崎の霊圧、感じるか？」

雨竜に問われて意識を集中した次の瞬間、織姫はかばんを取り落として地面にへたり込んだ。

茶渡もまた、呆然と立ち尽くしている。

「え……？何？何？」

たつきの声はまるで耳に入っていない。

「うそ、でしょう……？」

一護の霊圧が全く感じられない。

例え現世と尸魂界のように違う世界に居たとしてもその存在だけは

感じる事が出来るはずなのに。
ましてや、あの目立つ霊圧。
それが感じられないというのはつまり

「霊圧が、消滅してる…」

雨竜が呆然とつぶやいた。

霊圧の、消滅。

それが意味することとは

「石田、何がどうなってるんだ？」

たつきの声に振り向く。彼らが居る事をすっかり忘れていた。

雨竜は彼女の目を見れず、わずかにそらして答えた。

「霊圧が、消滅しているんだ。」

「霊圧…？ああ、あの気配みたいなの？」

たつきがいうと、雨竜は頷いた。

「そう。それが消滅している。」

雨竜は復唱するように答えて必死に考えていた。

考える。考える。

……彼らを巻き込まないですむ方法を。

「消滅してるって、どういう意味だ？」

啓吾が言う。

考える。

「石田。」

たつきが静かな声で言った。

「また、隠そうとしてるんじゃないだろうな。」

「…どういう意味だい？」

「そのまんまさ。また、私らをのけものにする気か。」

あまりにも的を射た一言に、雨竜は内心齒噛みした。

嘘は得意じゃない。だから、
ごめん。

一言だけ心の中で詫びた。

「だとしたら？なんだっていうんだい？」

「ふざけんじゃっ…」

「落ちつけ有沢！」

雨竜に殴り掛かるうとしたたつきを啓吾が羽交い絞めにする。

「ふざけないですよ！どうして私達だけまたのけものなわけ？もう隠す必要ないじゃんか！」

雨竜は、クイと眼鏡を押し上げた。

「勘違いしないでほしいな。君たちは霊が見えるとはいえなんの戦力にもならないただの魂魄だ。ただ情報を知っているってだけで思いつかない方がいい。」

啓吾の目が見開かれる。

「そんな言い方っ」

「当然のことだろう？君たちは自分の身を虚から守ることすらできないただの無力な魂魄だ。戦力にもならない者に余計な情報を伝える義理はないね。」

そうして、へたり込んでいた織姫の手をとった。

「とにかく、尸魂界に連絡を取ろう。何かしら情報が手に入ると思う。」

織姫は雨竜を見上げて頷き、立ち上がった。

「茶渡君も、ここに居ても埒が明かない。移動しないと。移動しないままのチャドにも声をかける。」

ふり返って、立ち尽くしたままの三人を見据えた。

「君達が生きていられるのは、たくさんの人たちが戦っているからだ。その努力を無駄にしないためにも、僕達に深くかわらないで

くれないか?... なにより、君達が傍に居れば、僕達は満足に戦うことができない。はつきりいうようで悪いが、足手まといだ。」

啓吾も水色も、そしてたつきも金づちで頭を殴られたような顔をしている。

ごめん。また一言詫びた。

その時だった。

「はいはい、石田サン。そこまでにして一度うちへ来ていただいけませんかね。」

何とも気の抜ける飄々とした声が不意に後ろから聞こえた。

「浦原さん...」

そこに立っていたのは浦原商店の店長にして元十二番隊長兼技術開発局初代局長、浦原喜助。

「事情はわかっています。」

浦原は扇子で口元を隠して言う。

「さつき夜一サンが調べに行ってくれたところです。とにかく、一度うちへ。こちらの持っている情報をお伝えします。」

浦原は、石田の後ろに立つ彼らの友人たちを見た。

「あなたがたは、ご自宅へお戻りください。...それから、自分たちはここへ来なかったし、何も聞いていない。そう誓ってください。」

「なにいつて...」

啓吾の言葉を遮るように扇子を向けた。
「石田サンが言う通りです。貴方がたが関わっても、足手まといにしかならない。本当に黒崎さんの行方を知りたいのであれば、こちらに干渉しないでいただきたい。」

「...とつして...」

たつきが小さく呟く。

「どうして、そうやって言うんだよ。私らだって、アイツのダチだ。どうして、力がないからってのけものにされるんだよ。おかしいだろ。」

こんな時のたつきらしくない静かな声だった。

「……織姫が言ってた。織姫もチャドもあんた達が鍛えてくれたから戦えるようになったんだ。って。私らは鍛えてもらってもない。それなのにどうして最初からのけものにされなくちゃいけないんだよ。」

啓吾の腕を振りほどき、浦原に向かって頭を下げた。

「私を、鍛えてください。何があっても関わられるくらい、強くしてください。お願いします!!」

「…おれも、強くしてください!おれ一護みたいに喧嘩強くないけど、頑張りますから、強くしてください!」

啓吾が続いて頭を下げる。

「…一護は、大切な僕の友達なんです。何が起こっているのか知りたい。教えてください。そのために、僕も強くなりたい。」
水色までもが頭を下げた。

沈黙が流れた。

息をするのも躊躇われるほど、長く重い沈黙が。
それを破ったのは、やはり浦原だった。

「皆サン、アタシと殺し合いをする覚悟はありますか?」

かつて一護に行ったセリフを、かつてと同じ声色で言った。

ピクリとたつきの肩が震える。

「そんな覚悟、ないでしょう?」

浦原の声は淡々としていた。

「知りたいから強くなりたい？頑張る？そんな甘ったれた覚悟で、生き残れる世界だとも？常に命がかかっている戦場なんですよ？…そんな子供じみた意志で生き残れる場所じゃあない。いつもいつも正義のヒーローが勝つなんてのはアニメやマンガの世界の出来事だ。現実には悪が勝つことだってもちろんある。諦めなさい。そんな半端な覚悟じゃ、自分だけじゃなく仲間も危険にさらすことになる。…何より、貴方がたには才能がない。」

織姫が浦原を見た。彼らを巻き込んでほしくないけれど、最後の一言だけは聞き逃せなかった。

「…そんな、言い方。」

浦原は織姫を横目で見る。

「貴方や茶渡サンは黒崎サンの影響を受けて才能を開花させた。だけど、黒崎サンの影響を十分に受ける位置に居ながら、彼らの中の誰も能力の片鱗すら見せていない。…才能に欠けているとしか言いようがありませんよ。」

視線を3人に戻して言う。

「諦めなさい。…そして、誓ってください。貴方がたは今日ここへは来ていないし、何も聞いていない。いいですね？」

無言のままの三人を一瞥して、浦原は踵を返した。

「行きましょう。石田サン、井上サン、茶渡サン。事態は一刻を争うかもしれない。」

三人は、友人達と浦原とを交互に見つめた。

やがて雨竜が歩き出し、チャドも続く。

「たつきちゃん、小島君、浅野君。…ごめんね。」

最後に小さく呟いて、織姫もまた続いた。

「で、情報っていうのは？」

浦原商店でちゃぶ台を囲むように腰かけたのは、浦原、テッサイ、雨竜、チャド、織姫の五人。

その5人の表情はいずれも深刻そのものだ。

「…はつきりいつて、ほとんどありません。アタシたちも、ついさつき気がついたんです。」

知っているのは、と前置きする。

「彼らの霊圧が途絶えたのが、今から十七時間ほど前。つまり日付が変わる前後と言っただけです。」

日付が変わる前後。

その言葉を聞いて、はっと織姫が顔を上げた。

「私、その時間なんか変な感覚がしました。…黒崎君と、何か関係があるのかなって一瞬思っただんですけど、すぐに消えちゃって…」

「僕も感じたよ。なんだかいつもと違う感じがした。何かは上手く言えないですけど。」

「…俺も……」

皆一様に後悔を表情ににじませる。

その時に違和感の正体に気付いていれば、こんなことにはならなかったのかもしれないのに。

「そんな顔しないでください。…アタシも、夜一サンもテッサイさんも同じような感覚に気付いていました。…それがなんなのか、その時はわかりませんでしたけど。」

その場に沈黙が流れる。

「今、夜一サンが搜索してくれています。…このまま状況が動かないようであれば、尸魂界にも協力を要請しましょう。黒崎サンは、この間の戦いで大きな功績を上げている。あちらも動いてくれるはずです。」

チャドはその言葉にひとつ頷いて立ち上がった。

「…探してくる。」

それだけ言っつて、店を出ていく。

「私も。」

織姫も立ち上がった。

ガラガラと戸の閉まる音を聞いて、雨竜は浦原に目を向けた。

「本当に、何も知らないんですよね？」

その眼はひどく静かで、冷たかった。

「はい。」

答えた浦原に頷いて、雨竜も織姫の後を追った。

t h a t i s w h a t a s e n s e o f i n c o n g r u i t y .

長かったですね。ごめんなさい。
浦原さんって書きづらいなあ…

それにしてもなかなか進まないですね。
でもこの調子で続くと思います。

一応プロットをあげたのですが、その量に自分で愕然としました。
書きたいこと片っぱしから入れてたらとんでもない量に…！
終われるのか自分。

タイトルの日本語訳は「違和感の正体」

ようやくわかりました。一護はどこへ行ったのでしょうか。

そんなこんなですががんばります。

感想お待ちしております。

a news of disappearance (前書)

第四話と同じ。およそ3時間後です。

「喜助。」

浦原がお茶を飲んでいると、後ろから声がかかった。

「夜一サン。戻ってらしたんですか。」

傍にあった湯呑に夜一の分のお茶を注ぐ。

「どうでした？」

向かいの柱にもたれて座った夜一に問う。

「何もなかった。足跡一つ残っておらぬぞ。」

不機嫌そうな声音に喜助は眉をひそめた。

隠密機動といえば、ありとあらゆる裏の仕事を請け負う。

脱走者の追跡もまたしかり。

かつてその総司令官を務めた夜一ですら痕跡を掴めないとは。

「居なくなったのが一護サンだけならまだしも、一家全員と言っているとは……」

浦原は一護のことを名字で呼ばなかった。夜一やテツサイとの会話では黒崎が二人登場することも稀ではない。

ましてや、今のこの状況。

「あ奴が関わっているのは、明白じゃな。」

夜一もまた同じ人物を想定していた。

自分を凌ぐ能力を持ち、なおかつ一護を失踪させられるのは一人しかいない。

「一心サン……いったい、何を考えてるんですかね。」

「知らぬわ。……全く、世話の焼ける。」

ちょうどその時、雨竜達が帰って来た。

一様に疲れた表情でちゃぶ台を囲む。

かれこれ3時間も探し回っていたのだ。疲れるのも無理はない。

「外は冷えたでしょう。どうぞ。」

新たに茶を淹れなおしてそれぞれに渡す。

だが誰もそれを手に取らなかった。

暗い顔の一同を見て、浦原は再び口を開いた。

「夜一サン。一度、尸魂界へ行ってください。あちらに何らかの情報があるとは思えませんが、このままでは手が足りない。阿散井サンと朽木サンをこっちによこしてくれるよう掛け合ってみてください。」

浦原が言うと、夜一は頷いて立ち上がった。

「掛け合う必要もないじゃろうがの。あ奴らなら命に背いてでも来るじゃる。」

軽口めいた口調に、それもそうだ、と浦原は苦笑した。

夜一が瞬歩で消えると、浦原も立ち上がった。

「アタシの方でも一度黒崎サンの家を調べてみます。…皆サンは一度家に戻ってください。明日も学校がありますし。」

浦原が言うと、織姫は首を横に振った。

「もう一度さがしに行きます。」

膝の上でぎゅっと握られて真っ白になった手を見てとり、浦原は溜息をついた。

雨竜もチャドも、じっと浦原を見据えている。

止めて聞くようなかわい性格じゃないことは百も承知だ。

「…わかりました。ですが、せめて一度家に戻って温かい格好に着替えてきてください。これから探し回るとなれば、制服は目立ちすぎます。そして、そのまま探しに行かず、こちらに戻ってきて朽木さん達が来るのを待ってください。…いいですね?」

浦原はそう言って隣の部屋へと姿を消した。

尸魂界。

ルキアと恋次は白哉に呼ばれて六番隊隊首室へきていた。

客人だ、としか伝えられておらず、それゆえに窓から入って来た人

物にひどく驚いた。

「夜一殿!？」

「ルキア、恋次。変わりなさそうじゃの。」

したん、と床に降り立ってその髪をなびかせたのは、まぎれもなく四楓院夜一。

「……何用だ。」

低い声に、ルキアは思わず肩をすくませた。

客人がよりにもよって夜一殿だなんて。

相性が最悪じゃないか、と恋次が横でひとりごちた。

見るからに不機嫌そうな白哉を横目に、夜一はルキアと恋次に向かい合った。

「緊急じゃ。…単刀直入に言うぞ。一護の霊圧が消えた。」

それが何を意味するのかわかるまでに、そう長い時間はかからなかった。

「うそ、ですよね?」

ルキアの声が小さく震えた。

目が閉じられているのは、必死に一護の霊圧を探っているからだろう。

「どういうことだ。」

相変わらず低い、しかし不機嫌からくるものではない声に、夜一は溜息をついた。

「そのままの意味じゃ。一護の霊圧が消滅した。所在も知れぬ。…

…家族もろともな。」

「いつから、なんスか?」

「日付の変わる前後と言うところまではわかったのじゃがな。…あとは、まったく行方が知れぬ。痕跡一つ残しておらぬ。」

そんな、とルキアが呟くのが聞こえた。

「……今、石田たちが探しておるが、手が足りぬ。手伝ってくれぬ

か。」

夜一が言うと、恋次は白哉の表情をうかがった。静かに頷くのを見て、夜一に向き直った。

「わかりました。すぐに支度します。」

ルキアも毅然と顔を上げて頷いた。

そのとき、ふわりと地獄蝶が部屋に舞いこんできた。

白哉の指先にとまったそれは、少しして再び飛び去る。

「……隊首会が、招集された。恋次、ここへ残れ。」

突然の指令に、恋次が目を丸くする。

「こんな時間に隊首会ですか？」

すでに就業時間を終え、隊舎内には当直の隊士しかいないと言うのに。

「ああ。……よいな？」

「……わかりました。夜一さん、すみません。」

詫びた恋次に、夜一は首を振った。

「よい。……ルキア、参るぞ。」

「はい。」

ルキアは、悔しそうに拳を握りしめた幼馴染を見て頷いた。

即座に瞬歩でかき消えた夜一を追って、ルキアもまた姿を消した。

白哉も隊首会へと向かう。

一人きりになつた隊首室で、恋次は一護の行方と、そして突然招集された隊首会の内容を考えていた。

こんな時間にわざわざ呼び出すくらいだから、よほど緊急の事態だろう。

早く済めばいいが、と拳に力を込めた。

一護が居なくなった。

夜一たちが動いているということは、今迄のように修行とか誰かを助けに行つたとかそういうことじゃない。

本当に行方が知れないのだ。

そこまで考えて、パンと自分の頬を叩いた。

ぐずぐず考えてても埒が明かねえ。ってかそんなの性分じゃねえし。考えるのを諦めて、大人しく白哉の帰りを待つことにした。

自分に今できるのは白哉が隊首会から持ち帰ってくるであろう厄介事を出来るだけ早く片付ける事。

そして一護の捜索に加わる事。

「体力温存しとくか…」

ルキアからの電話に気付くよう伝令神機の音量を最大にして、恋次は長椅子に横になった。

「井上！」

勢いよく戸を上げて飛び込んできたルキアの顔を見て、織姫はわずかにほほ笑んだ。

「朽木さん…」

明らかに無理をしているのだと一目でわかった。無理もない。

「喜助。何かわかったか？」

続いて入って来た夜一が、先ほどと同じ柱にもたれる。

すでに席についていた浦原は、いいえ、と首を振った。

「なにも、出ませんでした。そちらは？」

「…一護に関しては、何もなかった。」

はつきりと言わない、らしくない仕草に浦原はじつと夜一を見た。

「瀟霊挺で、なにか？」

夜一は、白哉のところへ行く前に立ち寄ったところで聞かされた、とんでもない情報に未だ困惑していた。

軽く息を吐いて、その情報を静かに告げた。

「崩玉が、なくなっただらしい。」

a news of disappearance (後書き)

タイトル日本語訳は「失踪の知らせ」

いよいよルキアと恋次が登場です。

というか、今更気付きましたけど。

2話で恋次の存在忘れてました。

気が向いたら書き足すかもしれません。

多分、乱菊さんにもまされて千鳥足で帰宅途中という情けない構図になるでしょうが。

一護の行方が相変わらず知れません。

というかやっと一心さん（名前だけ）登場。

あらすじに書いてあるのになかなか出てこなくてすみません。

がんばります。

感想、お待ちしております。

t o t h e m e m o r i a l p l a c e s (前書き)

ルキアが合流し、一護の搜索が始まります。

前話の終わりと同じ時刻で始まります。

t o t h e m e m o r i a l p l a c e s

「崩玉が、なくなった…?」

浦原が目を見開く。

「なくなったって、どういうことですか……?」

雨竜が夜一を見る。

「儂も総隊長から聞いたばかりでの、詳しいことはまだわかってお
らぬらしい。」

「崩玉つて、確か鬼道衆が封印の準備を終えるまで何重にも結界が
張られていたんですよね?」

「そうじゃ。……こちらに来る直前に、隊首会に招集がかかったが、
恐らくはそれじゃろう。」

「でも、いったい何で……」

「夜一サン。」

雨竜が問うのを遮って、浦原が言った。

「いつ頃、どのように無くなったんですか?教えてください。」

何かをこらえるような顔の昔馴染みに、夜一は軽いため息をついた。

「心配せんでもよい。…結論から言えば、崩玉について儂らがする
ことはもうない。探す事も、ましてや封印することもな。」

夜一の言葉に、誰もが耳を疑った。

崩玉と言えば、浦原と藍染がそれぞれにつくりだした「願いをかな
える力」をそのまま結晶にしたような代物だ。

その危険さゆえ、鬼道衆により封印されることが決まっていたと言
うのに、彼女はいったい何を言い出すと言うのか。

「無くなったというたがの、紛失したわけではない。持ちだされた

のじゃ。……キリオにな。」

夜一が言つと、浦原が、へ？と間抜けな声を出した。

「キリオって……キリオさんっすか？」

「そうじゃ。あちらがすでに動いてくれているとみて間違いないじやろつ。じゃから心配いらぬ。総隊長もそのようにするつもりらしい。じゃから、もうよい。」

会話には入れない残りの四人は、目をパチクリさせていた。あちらつてどちらだ。ていうかキリオって誰だ。

そんな四人を見てとつて、夜一はわざとらしく咳払いをした。

「ともかく、じゃ。儂らがすることはない。今は、一護の事が先決じゃ。」

一同の顔を見渡して、浦原が続ける。

「皆サンはこれからもう一度黒崎さん達を探してください。アタシの方でも、まだ気になる事がありますから調べておきます。」

頷いたルキアは時計を見上げた。もうすぐ日付が変わる。一護が居なくなつてから、すでに丸一日が経過しようとしていた。

「茶渡君と朽木さんはここから北を探してくれないか？僕と井上さんで南を探す。それでいいよね？」

頷いた三人を見て、雨竜は立ち上がった。

「行こう。」

ルキアは立ち上がると、真っ先に店を飛び出した。

しかし、それから三時間以上たつても、まったく一護たちの足取りは分からなかった。

しばらくして恋次が合流したが、それでも見つからない。

「だめ、こつちにもいない」

井上が言う。

「他に、どこか行きそうな場所を誰か知らないか？」

「……あ、」

石田の問いに、小さくルキアが声を上げる。

「ルキア？知ってんのか？」

恋次の問いかけに、小さくうなずいた。

「……母親の、墓は・・・？」

「母親の墓…？あいつ、母親死んでるのか？」

恋次が言う。

「ああ……あ奴が、九歳の時に、と。」

ルキアは、半年前のことを思い出して僅かに表情を曇らせた。

「事故で亡くなったんだよね。…川に落ちた黒崎君を庇ったって…」

織姫も、たつきから聞いた話を思い出した。

「な……」

恋次が驚いたように言う。

母親がいないのは知っていたが、まさかそんな亡くなり方をしているととは思わなかった。

「……違う。」

しかし、その言葉をルキアが静かに否定した。

石田が小さくうなずく。

「え？でも、たつきちゃんが…」

「表向きには、そういうことになっている。だが、川へ落ちた一護を庇ったのではない。」

ルキアが小さく息を吸った。

「虚に襲われた一護を、庇ったのだ。」

織姫が息をのむ。

チャドにすらもそれは初耳だった。

「僕も、聞いたことがある。…虚と戦うのは、自分の同類を作りた

くないからだ。って。」

石田が言うと、ルキアはそれにうなずいた。

「あやつも、今年の命日までは川に落ちた自分を庇ったのだと思っ
ていた。が、その時と同じ虚に襲われてな。…それで、気付いてし
まった。」

ルキアは、その時のいきさつを手短に説明した。

それは余りにも辛い現実で、一護にとってはなおさらのはずだった。

「……他に、手掛かりもないし。行ってみるか。」

黙り込んでしまった一同に恋次が言うと、ただ皆頷いた。

「恋次、これ…」

ルキアが墓の前に立ちすくむ。

墓の前に立つと、なるほど、一護の霊圧が僅かにだが残っていた。

「ここに、いたってことか……」

チクシヨウト、恋次が言う。

もっと早く来ていれば、見つけられたかもしれないのに。

何もかも後手後手に回っている。

どうしてここまで一護が姿を消そうとするのか、まるで分らなかつ
た。

「朽木さん。あのね、川原には、いないかな？」

織姫が言う。

「川原…？そうか！」

織姫は頷き、訳のわかっていない男たちに説明した。

一護の母親が死んだ川原。

たつきから聞いた話では、母親が亡くなってからしばらくの間、そ
してその後も事あるごとに訪れている場所だ、と。

「そういえば……中学の時から、たまに寄り道していた。」
チャドが同意する。

「…わかった。行こう。」
雨竜が言うと、それぞれまた走り出した。

だが、川原についても人の気配は全くない。
あったのは、やはり残された一護の霊圧。
ルキアが触れると、それは頼りなく揺らめき、消えた。

やがて、東の空が白み始めた。

それほどの時間が経っていたことに、誰も気づいていなかった。
見れば、それぞれ疲れきった顔をしている。

「一度、浦原のもとへ戻ろう。少し休まねば。」
疲れた口調のルキアに、誰もが力なく同意した。

to the memorial places (後書き)

タイトル日本語訳は「追憶の場所へ」

「追悼の場所へ」

という意味も含みます。

一護には、死神としての自分の原点とも言える場所。しかし、彼はすでにここを去っていました。

彼がここで何を思ったのか、それはずっと先の話で明らかにするつもりです。

そしてまた名前だけですが、キリオさんこと「曳舟桐生」さん登場。

彼女もゆくゆくたくさん登場しますよ。

ひよ里とも絡ませたいです。

その前に一護の行方を片づけなくてはいけません。

それでは、感想お待ちしています。

t h e r e a r e n o k e y (前書き)

第六話の少し後の時間帯から始まります。

there are no key

「井上サン、石田サン、茶渡サン。ちょっと辛いでしょうけど、今日は学校へ行ってください。」

僅かな時間仮眠を取った後、浦原は容赦なく三人をたたき起した。

「な…何を言っておるのだ。こんなに疲れているだろう!？」

反発したルキアに、浦原はちらりと視線を向けた。

「彼らの事を思えば、その方がいい。…今回の一護さんの失踪の今迄との違い、解ります?」

ルキアは以外の者にも向けられた問いだが、誰も答えるものはない。

「いなくなったのは、黒崎サンだけではないということですよ。…

家族全員でいなくなったとすれば、警察が動く可能性が高い。」

そう。

今では、一護だけの失踪だった。

あのおおらか過ぎる父親のおかげで警察沙汰にならずにすんでいたが、今回は違う。

「警察が動けば、貴方がたが黒崎サンと同時期に行方をくらましたことぐらいすぐにバレてしまうでしょう。…そうなれば、最も疑われる可能性が高いのは貴方がただ。」

夏休みも、そしてあの戦いの時も。

一緒に居たのだから当たり前だけど、確かにそれは不自然すぎる。

警察が目をつけない方がおかしい。

「そういえば、そうですね…浦原さん。一つ、いいですか?」

石田が、無言で促した浦原に続けた。

「今回の事、不自然な点が多すぎますよね。家族全員で居なくなつたということもそうですけど、何より霊圧が完全に消滅している。

黒崎に自分の霊圧を完全に消す技術はない。…残された可能性は、あいつが死んだという事。」

「石田!」

恋次が鋭い声を上げた。だが、石田は一瞬だけ目を閉じて続けた。
「だがそれにしても不自然すぎる。霊圧が消滅したのなら、そこまでの足取りは追えるはず。だけど、それらが一切ない。まるで拭いとったみたいだ。……霊的な技術を持っている者の手を借りたかと思えない。だけど、それだったら黒崎が家族を巻き込んだ事になる。あいつに限ってそれは絶対はない。」
手に取った湯呑をきつく握りしめた。

「僕は、どういう形にしろ、あなたが関わっていると思っています。……本当に何も知らないんですか？」

誰も、何も言わなかった。

それがずっと続いた後、浦原がおもむろに口を開いた。

「つまり、アタシが黒崎サンたちの失踪に手を貸した、もしくは消した、と？」

石田は何も言わず、まっすぐに浦原を見ている。

「……誤解ですよ、と言いたいところですがね。ほんの少しだけアタリです。」

その言葉に、ルキアが身を乗り出した。

「どういうことだ!？」

「何も知らないわけじゃありません。……隠していることは、あります。この一件の鍵になるような事を、ね。」

そこまで言って、浦原は深くため息をついた。

「ただ、もしそうだとすれば、アタシたちの手で黒崎サンを見つめることは不可能です。あきらめるしかない。」

チャドは促すようにじつと浦原を見た。

「……まだ、確証を得られていません。今日、夜一サンに尸魂界に行って少し調べ物をしてきてもらいます。……貴方がたには、それから報告しますよ。」

そういって浦原は席を立った。

「井上、石田、茶渡。…学校へ、行ってこい。」
しばらくして口を開いたのはルキアだった。

「確かに辛いだろうが、浦原の言うことには一理ある。」
浦原は、軽薄な振る舞いが目立つがこのような場で決して適当なことは言わない。

それは、ルキアもよく知っていた。

「夜一殿ならば、その調べ物もすぐに終わらせることができるだろう。…帰ってくる頃には何かわかつているはずだ。」

織姫は、視線を上げようとはしなかった。

「私と恋次で、他の場所も探しておく。今は自分のことを考えてくれ。あまり学校を休むのは、良いことではないのだろうか？」
彼らが頭がいいことは知っている。

「ただ、現世の学校には出席日数というものがあると聞いた。これ以上、迂闊に休ませない方がいい。」

ルキアはそう思っていた。

なにより、彼らはまだ人間だ。

自分達のように、尸魂界にのみ属しているのではない。

現世での生活を、未だ生を持つ者として生きてほしかった。

3人を送り出してから、ルキアと恋次は再び町内を探したが、どこにもその気配はない。

ルキアは浦原の言った事が気にかかっていた。

「恋次。浦原の言っていた事、どういう意味だと思う？」

隣を歩く恋次は、わからない、と首を振った。

「だけど、あの人が一護を消したってことはねえと思う。…勘だけど、な。」

それつきり、二人とも何も言わなかった。

「おかえりなさい。…どうだった？」

「井上。早かったな。…すまぬ。何も見つからなかった。」

浦原商店に戻ると、すでに織姫たちが帰ってきていた。余程急いで帰ってきたのだろうと思う。

まだ午後四時にもなっていない。

「朽木さん、阿散井。…こっちは知らせがある。」

そう言った雨竜に目を向けると、ひどく厳しい表情をしていた。

「何があつたんだ？」

「…午後になってから学校が動き始めた。妹さんの小学校から連絡がいつたらしい。」

ずっと二人の目元が厳しくなる。

「家に人の気配がないし、明日になっても連絡がないようであれば警察に通報するって。」

織姫の盾舜六花の能力を使って職員会議を盗み聞きしたというのだから恐れ入る。

まずいことになったな、と恋次が呟きかけたその時だった。

「皆サン、揃いましたね。…そろそろ、話を始めましょうか。」

浦原と、それに続いて夜一が部屋に入ってきた。

「まず、今朝皆サンに言ったことなんですが、…黒崎サンのご家族の中で、僅かでも霊圧があるのは誰か、ご存知です？」

唐突な問いを不思議に思うも、ルキアが答えた。

「妹二人だろう。…夏梨の方が高いはずだ。父親は、全くだがない。」

「あー、やっぱりそう思ってますよね。…本当に誰にも話していませんでしたね。」

半ば感心したような口ぶりにムツとする。

「どういう意味だ？第一、それが何の関係」

「あの家族の中で黒崎さんを除けば黒崎さんの父親が最も霊圧が高いんですよ。…やはり、ご存じなかったようですね。」

ルキアを遮って浦原が言う。

その言葉に、誰もが耳を疑った。

「ちよつと待て、あの父親は全く霊圧がないはずだ！霊を見るところか感じることをすらできないのだぞ！」

「消していたんですよ。…とにかく、それについての話は後です。

続きを聞いてください。…黒崎サンや妹サンが霊圧を保有しているのは、父親からの遺伝です。…彼は、アタシや夜一サンに匹敵する霊圧を持っている。」

信じられなかった。

あのどうしようもないバカ親父にしか見えないあの男にそんな能力があるとは思えない。

そこで、雨竜が一つだけ思い当たった。

「ひよつとして、あの戦いの時に浦原さんたちと一緒に戦った謎の死神って…」

「ええ。一心サン…一護サンの父親ですよ。一護サンがあの死神についてだんまりを決め込んでいたのもそのせいです。自分と一心サンだけが厄介事に巻き込まれるのならまだしも、妹さんの事がありますからね。…死神と人間の子供となれば、尸魂界が放っておくわけがない。」

それはサラつと告げられたけれど、その口調にそぐわぬ事実だった。

「まさか。…そんな重罪」

そこまで呟いて、ルキアははつと口を押さえた。

今、自分は一護を。

「ええ。…彼は、尸魂界の掟では、生まれてはならない子供です。

死神と人間の間の子供は、古来から一人残さず抹殺される運命にある。」

「そんな…」

「…黒崎は、それを知って…？」

雨竜の問いかけに、浦原は首を縦に振った。

「おそらく。…ですが、これは失踪の理由ではないと思います。」

「どづいことですか？」

今度は織姫が問うた。

「もしそうなら、もっと早く動き出しているはずです。……あの戦いの終わってすぐなら、尸魂界の機能は完全にマヒしていました。その時に逃げた方が生き延びれる可能性は高い。それに、これはアタシもさつき知った事なんです。…総隊長もこの事実を知っていたんだそうです。その上で、一護サンにそれについて尸魂界が干渉することはないと約束していたと。一護サンも一心サンもあの戦いで大きな功績を上げていますからね。その恩もあつての事でしょう。」

「なら…一体どうして…？」

「わかりません。…一心サンが関わっているということぐらいしか。」

誰もがその事実を受け止めきれないでいた。

一護が純粋な人間でないことも、そのことを話してくれなかった事も。

「それで、アタシの方で黒崎サンの家を調べてみたんです。」

織姫が顔を上げた。

「何か、手掛かりがあつたんですか？」

「…いえ。何も。…石田サンが今朝言った通り、拭いとられたみたい痕跡が消されています。ただ、少し妙なんです。」

「妙？」

「はい。…預金通帳とか、現金とか、現世で暮らして行く上で必要なものが手つかずのまま残されているんです。それに、衣服の類も…まあ元々の量を知りませんが、減っている様子はありませんでした。」

「確かに妙だな…現世で暮らすつもりはないということか？」
ルキアが言う。

「おそらく。…ただ、たとしても妙なんです。一心サンは医者でし

た。なのに、医学書の類が全く残されていないんです。」

「全くないんですか？」

雨竜が言う。

父親の部屋には数えきれないほどの医学書が積まれているというのに、一切無いというのはおかしすぎる。

「医院の部分も調べたんですが、一冊もありませんでした。それだけじゃない。小説とか、あと一護サンたちの教科書とかとにかく本ばかり全て消えているんです。」

「…おかしすぎねえか、それ。」

なぜかさばる本ばかり消えているのか。

確かにそれを考えれば奇妙すぎる。

調べても調べても、一護達が失踪した理由が全く掴めない。

それが、彼らの中に焦りを生みだしていた。

t h e r e a r e n o k e y (後書き)

タイトル日本語訳は「手掛かりはどこにもない」

本当にどこにもありません。

ふざけた言い方ですが一心さんががんばりました。

そして浦原さんの口調に相変わらず慣れません(汗
本当に難しい…

話の進み方が遅くて本当に申し訳ありません。
書きたいことが多すぎるんです。

いったい何話書くつもりなんだ自分。

投稿をまめにできるよう頑張りますので勘弁してください…

それでは感想などお待ちしております。

i t i s a n e a r t h l y s y s t e m t o d i s t u r b)

七話の終わりの次の日から始まります。

翌日、やはり夜を徹した捜索のうちに、彼らは学校へと向かった。そして彼らが最も恐れていた事態が起こった。

朝のHRで越智が生徒達に静かに告げる。

「黒崎と、黒崎の家族と連絡がつかない。誰か、何か知らないか？このままだと、学校から警察へ通報することになる。」

ザワ、と生徒達の呟きが聞こえる。

「失踪？」

「まさか…」

「妹さんいたよね？」

「確かお母さんいないんじゃない？」

「何？離婚？」

「死んだらしーよ。事故だって。」

「まじで！？いつ？」

越智が静かにするように言うと、そのざわめきもやがて静まった。

「わかった。知らないならいい。」

茶渡、浅野、小島、石田、有

沢、井上。HRが終わったら職員室へ来てほしい。じゃ、連絡は以上。各自次の授業の準備しろよ。」

クラスメートの視線を感じながら立ち上がる。

その時、僅かに奥歯を食いしばった事に雨竜は自分で気が付いていなかった。

「で、聞きたい事はわかってるよな？」

職員室に着くと、そのまま隣の会議室へ行くように言われた。

越智が言いたい事はよくわかっている。

「一護の行方、ですよね？」

水色が言うと、越智は頷いた。

「お前ら、仲良かっただろ。…心当たりないか？」

いいえ、とたつきは首を横に振った。

「あいつの家、親戚いないんです。両親の親も早くに死んじゃったみたいで、二人とも一人っ子だから伯父とかもいないって。」

そうか、と言った越智は、らしくもなく眉間にしわを寄せていた。

「井上、石田、茶渡。」

少しの沈黙を経て、越智が三人の名前を呼ぶ。

「こんなこと聞きたくないが…お前ら、今年結構学校休んでるよな。それも黒崎と同時期に。何か知っているんじゃないのか？」

浦原に言われていた通りだった。

だから、答えは用意してある。

「いいえ。知りません。…同時期に学校を休んでいたのも、ただの偶然です。僕は家の用事でしたから。」

「私事です。親戚の人が事故にあって、いつもお世話になっている人だったので、手伝いに行っていました。」

「…俺は、沖縄の親戚のところに行っていた。」

たつきたちが窺うように見てくるのがわかる。

しばらくの間、越智は問うような視線を三人に向けていた。

しかし三人が何も言わないでいると、一つ溜息をついた。

「わかった。…教室に戻っていい。」

六人はそれぞれ席を立ち、教室へ向かった。

「なあ、何で嘘ついたんだ？」

たつきの声に振り向く。

「何でつて…信じてもらえるわけないからだ。霊だのなんだの、君達だって実際に見なければ信じないはずだ。」
雨竜が答える。

「あんたたちの証言で、何かわかるかもしれない。…このままだったら、本当に警察に通報される。」

「だからだ。」

思いのほか早い返事に、たつきは驚いた。

「ぼくたちだけでできる事には限りがある。警察が動いた方が何か分かるかもしれない。」

可能性としては、低いけどね。

そう言った雨竜に、啓吾が言った。

「なあ、死神は協力してくれないのか？」

驚いた織姫に、啓吾が続ける。

「だって、一護はあいつらの仲間なんだろう？だったら、探してくれたっていいじゃん。あの事だって、一護がいなくちゃどうなったかわかったもんじゃないんだろ？」

「朽木さんたちは、協力してくれているよ。」

織姫が言う。

「でも、護廷十三隊でっていうのは難しいと思う。他の仕事もあるし、あつちだってまだ大変なんだから。」

事実、尸魂界の機能は未だ半マヒ状態だった。

ルキアや恋次だって激務続きのところを周りに無理を言っつてこつちへ来ている。

「そんなの、納得いかない。」

「たつきちゃん…」

「一護のことを仲間っていうくらいなら、何やっても探すべきだろ。そんな一方的な利用みたいなの、納得できるか。」

「有沢、言いすぎだ。」

見かねた雨竜が口を挟む。

「あつちにはあつちの事情っていうのがある。君が口を挟むべき事じゃない。」

「そんなのっ」

「組織はそう簡単に動くものじゃない。…君だって、解るだろう？」

「っ……じゃあ、私たちにも手伝わせる。」

「駄目だと言っただろう。君たちでは足手まといだ。」

「あのなあっ」

「たつきちゃん。」

掴みかかろうとしたたつきを、織姫が制した。

「勝手なこと言ってるってわかってる。でもね、巻き込みたくないの。たつきちゃんたちに、関わって欲しくないの。」

織姫は、ぎゅっと唇をかみしめた。

「私は、黒崎君みたいに強くないから…何かあった時に、たつきちゃんたちを護れないかもしれない。そんなこと、あつてほしくないの。」

「そうやって、織姫まで私の事を遠ざけるの？」

「有沢。」

「一護は私のツレだ。あんたは私の親友だ。なのに、」

「有沢、いい加減わかってくれないか。」

雨竜が言う。

「僕達とはつくに一線を越えたんだ。君たちはまだ越えていない。

それなら関わるべきじゃない。」

「勝手な言い分だね。」

水色が言った。

「勝手すぎる。僕達は、何も君達に護ってくれなんて頼んだ事ないよ。」

「それこそ勝手な言い分だろう。君たちは、死神がいなければ今頃生きていないんだ。」

堂々巡りになつてきた会話を、チャドが静かに制した。

「教室へ、戻ろう。」

そう言って歩き出したチャドを雨竜と織姫が追いかける。取り残された三人も、やがて歩き出した。

歯車が、ゆるゆると狂い始めていた。

その日の午後、学校から通報を受けた警察が動き出した。手始めに自宅の搜索、そして家族それぞれの交友関係を洗う中で、やはり事情聴取を受ける事になったのはこの六人。

「本当に、何も知らないんですね？」

「はい。」

「……わかりました、帰って頂いても構いません。」

「失礼します。」

解放されたのは、夜の八時を回ってからだった。

「石田……」

浦原商店に着くと、すでに織姫もチャドもそろっていた。

「……まあ、警察も無能じゃないみたいだね。たった数時間でこれだけの情報をそろえられるんだから。」

ちゃぶ台の上に並べられたのは、恐らくは警察署の捜査資料の写しと思われる大量の紙束。

「夜一さんが？」

「そんなところじゃの。あの程度の警備で情報を隠したつもりらしいが、甘い甘い」

ケラケラと笑う夜一に苦笑する。

「それで、何か手掛かりになるものは？」

「ここ数日の足取りぐらいだな。やはり、あの夜中より後の足取りに関しては全く掴めておらぬらしいが。」

そう言ったのはルキアで、情報をまとめてあるらしい紙を差し出す。

それをざつと眺めて、石田は溜息をついた。

「家の中にもともあった本だけじゃなく、新たに買い足した分もあるってことか。」

行動に関する情報の中で、もっとも目立ったのは本屋に行ったという事。

回数もさることながら、一度に10冊前後の本を買っていると言う事は、買った本は軽く二百に達すると言うことだろう。

本の目録にも目を通すが、文学、思想、社会、歴史、経済、科学、医学、工芸、健康、参考書、芸能など全くジャンルが特定されていない。

「いったい何がしたいんだ…?」

「ただ捜査を攪乱するだけ、という可能性も無くはないのう。」
「そう言った夜一にうなだれる。」

「だとしたら現状手掛かりゼロってことに…」

「なつてしまいますね。…まあ、アタシの方からも報告が一つ。」
「皆が浦原に目を向ける。」

「一護サンの家の中で行動なんですが、妙なんですよ。」
「妙?」

「ええ。ご自分の部屋に居る時なんですが、ずーつとぐるぐるぐるぐる部屋の足を歩き回っていたみたいで。こう、ベッドに座ったり、押し入れの中のものいじったり、とにかくじつとしていなかったみたいなんですよ。」

「は?」

「いや、この行動自体は何か精神的に落ち着けない要素があるときに見られるもので、失踪について何らかの迷いがあったんじゃないか・ってことになるんですけど。」

そこで浦原が一度言葉を切った。

「たまに机に向かったと思うと、何かを書こうとしていたみたいなんです。一日や二日の話じゃない。おそらく戦いの直後からずっとその行動を繰り返していた。何を書こうとしていたのかはわかりま

せん。学校の授業に関するものも含むでしょうし。」

ただ、これを見てみてください、と浦原は一枚の便箋を差し出した。何の飾り気もない罫線だけが書いてある真っ白の便箋。

「…一護サンの机の中に入っていたものです。…これに何かを書こうとしていたところまではわかったんですが、結局ほとんど何も書かなかつたみたいです。」

「…つまり、これに失踪の原因か何かを書こうとしていた可能性がある、と?」

「おそらく。…ほらここ。消した跡があるでしょう?」

目を凝らすと、一行目の左端、つまり一番最初の部分が微かに文字の後を残していた。

「そのままじゃ見えないんで、分析しました。…ごめん・と、そう読めます。」

「ごめん…」

織姫が小さく呟く。

それが何に対して向けられたものなのか。それを知るすべはなかった。

「他には、何もなかったのか?」

ルキアが言う。

「はい。何も残されていませんでした。」

「…明日も、警察に呼ばれるかな…」

織姫が呟いた言葉に、雨竜は力なくうなずいた。

「わからない。…全く、手間をかけさせる。」

警察からの事情聴取は思った以上に消耗させる。

できれば一度きりになって欲しいと思わずにはいらなかった。

「そのことなんだが…三人とも、しばらく一護の捜索から外れないか?」

ルキアが言った言葉に、驚く。

「なんで…」

「警察が疑っているのだろう？…いざとなれば浦原に何とかさせればいいが、それでも何も無いに越したことはない。下手に疑われる要素を増やさない方がいい。」

「そんなの、関係ないよ。」

思いのほか力強い織姫の声に、ルキアは目を細めた。

「黒崎君は、いつだって私たちの事を助けてくれた。警察が私たちの事を疑っても関係ないよ。今度は私達が黒崎君の力になりたいの。」

「警察に行くのは、なれてる…」

チャドも同意した、

「喧嘩になって、しょっちゅう補導された…このぐらい、どうという事はない。」

「何より、今回は本当に僕は関わっていないんだ。…警察だって、僕達をどうこうする事は出来ない。」

ルキアと恋次は顔を見合わせた。

思えば、仲間の為になら命を賭けて戦えるのだ、彼らは。

警察なんて関係ないというのは本心だろう。

でも彼らより長い時を生きているからこそ、閉鎖的な社会に生きているからこそ、世間体と言うものを気にしなくてはならないことは彼らよりよくわかっていた。

そして止めるべきは自分たちだと言う事も。

「駄目だ。…しばらく、大人しく学校へ通え。いいな？」

チャドがぐつと唇をかむ。

「それに、…一護もこんなことを望まぬだろう。あ奴は、周りにこのような迷惑をかけて平気でいられる奴ではない。」

そんなことは、わかっている。

わかっていても、わかっているからこそ、失踪の理由が掴めない。
こんな風に周りに迷惑をかけるとわかっているはずなのに、それで
なお行方をくらます理由が。

「一護は、無事だろうか。」

チャドがようやく口を開いた。
ルキアの瞳が大きく揺れる。

「無事だよ。…黒崎君だもん。きっと、どこかで無事でいてくれる。」

その言葉が、彼らの耳にこだました。

タイトル日本語訳は「妨げるは現世の組織」

本当はもっと警察メインで書きたかったんですけど、難しくて…

前回アップよりいささか時間をいただいたのもそのせいです。

そして結局断念したという…

ついに、警察が動きだしてしまいました。

一家での失踪となればそれも仕方のないことですからね。

探そうとするほうが追いつめられるという何とも悲しい現状です。

正直書こうかどうか迷ったんですけどね、動かないほうがおかしい
だろうということでした。少しだけ書かせていただきました。

それでは感想などお待ちしております。

a wish which written down the letter

八話の終わりとはほぼ同じ時刻から始まります。

コポコポと浦原がお茶を注いでいる。

不意に、夜一の目が一瞬戸口の方を向いた。

「夜一サン？どうかしましたか？」

「いや…」

夜一はそれだけ言うと立ち上がり、ガラリと戸口を開ける。
しゃがみ込んで何かを拾ったように見えた。

戻ってきた手に握られているのは、白い封書。

「それは…？」

「そこに落ちておった。今しがた誰かが通ったようじゃ
ほれ、と浦原に渡す。」

浦原はそれを受けとり、中から一枚の便箋を取り出した。
封もされていないその封筒も、取り出された便箋も、何の飾り気も
ない罫線だけの真っ白のもの。

「それ…」

「一護のと同じもの。」

そうルキアが言おうとした時、浦原が口を開いた。

「一護サンからです。」

「なんと書いてある！？」

身を乗り出すようなルキアの問いに浦原は答えなかった。
代わりにちゃぶ台の上我便箋を広げる。

その便箋を、誰もが食い入るように見つめた。

みんなへ

ごめん。

心配かけてるみたいだな。

それに、警察とかのことで迷惑掛けてるって聞いた。

本当にごめん。

正直、俺もまだ混乱してる。

事情も半分くらいしかわかってねえし。

だから文が読みづらかったらごめん。

俺も、俺の家族もとりあえず元気にしてる。

詳しい事情は書けないんだけど、親父の事はもう多分浦原さんから聞いてるよな？

今は親父の方の親戚と一緒にいる。

いろいろ事情があつて、家の事を手伝うことになったんだ。

現世にも、尸魂界にも、もう二度と戻る事はないと思う。

勝手だよな。

本当にごめん。

本当はちゃんと全部話すべきなんだろうけど、それもできそうにな
い。

ごめん。

たつきたちにも、謝っておいて。

それと、もう一つ。

俺が今いるところは、内側から開けない限りどうやっても来ること
のできない場所なんだ。
だからみんなじゃ見つけれない。
頼むから、探さないでくれ。
もうみんなに迷惑かけたくない。
勝手だつてわかってるけど、頼む。

それじゃ、さよなら。

黒崎一護

誰も何も言わない。

その文面はあまりにも唐突過ぎて、理解する事が出来なかった。

理解したくなかった、と言う方が正確なのかもしれない。

誰も一護に二度と会えないなんて想像したくなかった。

ガン、と鈍い音が部屋に響く。

チャドが己の拳を壁にたたきつけた音だった。

「……クソッ」

恋次が呟く。

「これでは、何もわからぬではないか」
ルキアが静かに言った。

絞り出すような声だった。

「夜一サン、さっきの気配、追えますか？」
浦原が言う。

はつとルキアが顔を上げた。

この手紙を持ってきたのが誰であれ、今一護がどこにいるのを知っているはず。

だが、夜一は首を横に振った。

「無理じゃ。もともと微かな気配でしかなかった上、動きが早すぎる。」

瞬神・夜一をしてそういわしめるその実力の持ち主。

ましてヤルキアたちが及ぶべくもなかった。

「…ですが、まだ手掛かりが消えたわけではありません。」

浦原の声に、織姫がゆっくりと反応した。

「本当、ですか？」

「はい。…この手紙からわかることがいくつもあります。それを最初から検討していけば、あるいは…」

「やりましょう。…絶対に、見つけ出す。」

雨竜の声が、少しだけ力を帯びた。

「はい。まず一つ目は、私達が今どうしているかが彼に伝わっているという事です。…つまり、こちらの情報を彼に伝える人がいる。

それも恐らくかなり近い人間。…警察に関する情報が伝わるほどですからね。」

「それって、私たちの中の誰かが黒崎くんの居場所を知っていて、それを黙っているって事ですか？」

「ええ。…裏切り者、とまでは言いませんが、それに等しい行為をしている人間がね。」

それから二つ目、と続ける。

「やはり一心サンが関わっているという事。…彼は私達に詳しいことを明かしてはくれませんでした。自分が霊力を持つ者の一族に属しているというのは言っていました。…ただ現世にも尸魂界にも戻らないというのが気になります。」

「確かに…。現世と尸魂界を除けば、あとは虚圏しか…。いや、まさ

か

ルキアは何か思い出したようだが、すぐに自分で打ち消した。

「何か、思い当たるのかい？」

「いや…ありえぬ事だ。忘れてくれ。他に、手掛かりは…？」

「内側から開けない限り、というのも気になりますね。……アタシの方で調べてみます。この手紙自体に痕跡が残されている可能性もありますから、預からせていただいて構いませんね？」

「ああ。頼む。」

ルキアがそう言った時だった。

「悪いが、黒崎の搜索から阿散井と朽木をはずしてもらおう。」

少年の声の不意に聞こえた。

タイトル日本語訳は「手紙に綴られた願い」

一護からの手紙は、仲間を大きく動揺させました。

というか、一護って手紙をこういう風に書くのでしょうか…？

手紙って、話し言葉で書く人と、ですます口調で書く人といませんか？

一護はどっちのタイプなんだろう…って悩みました。

友達にも訊いた結果、話し言葉タイプでいくことに。

最後のところの声、描写で誰だか分りますよね？

そうです、あのお方です。

一か月経って、ボチボチ体は回復したようですね（遠い目

ところで、裏切り者がいるかもしれない。ってところを書いている

とき、こっそり話がない話か思いました。

よろしければどうぞ

「ええ。…裏切り者、とまでは言いませんが、それに等しい行為をしている人間がね。」

浦原がそう言うと、誰もがいつせいに浦原を見た。

「…？どうかしましたか…？」

「……………怪しい。」

「ハイ？阿散井サン？」

ジト目の視線に、浦原の背中を冷や汗が伝う。

「犯人は貴様か！浦原！」

「ご、誤解ですって朽木サン！誤解ですってば！！」

「何を言っ！貴様が一番怪しいだろうが！」

「……………」

無言の圧力に耐えかねたように、浦原が溜息をついた。

「そりゃあ、疑われるような事はたくさんしていますけどね……」

とにかく、と浦原は扇を振ってその視線を断ち切った。

それから二つ目、と続ける。

こぼれ話含めて、感想お待ちしております。

i t i s a s t r i c t o r d e r t o d i s t u r b (前書き)

九話の終わりと同じ時刻から始まります。

「日番谷隊長！？乱菊さん！？」

恋次が驚いて声を上げる。

「どうしてここに？っていうか、今のどういうことですか！？」

「どうもこうもねえよ。総隊長からの一級厳令だ、」

冬獅郎と乱菊はそれぞれちゃぶ台の前に腰を落ち着け、浦原の入れた茶を呑んだ

「一級厳令！？いったい何で？」

「……死神代行・黒崎一護の願いを聞き届け、護廷十三隊をはじめとする四十六室下実行部隊全ての構成員による黒崎一護及びその家族の搜索の一切を禁じる。今しがた出された厳令だ。」

「一体、どうして…？」

ルキアがかすれた声で言った。

「ついさっき、総隊長のところにもこの手紙と同じものが届いた。」

冬獅郎はそう言ってちゃぶ台の上の手紙を示した。

ざっと文面に目を通して、話を続ける。

「内容もほぼ同じだ。いきなり姿を消した事と、それに伴いいくらか迷惑をかけたことへの詫び、現せや尸魂界に戻る事はないという事。それからここだけ違うが…朽木や阿散井たちが自分を探すのをやめさせてほしい、と。」

ルキアが小さく息をのんだ、

「あいつらのことだから、頼んだってやめてくれるわけがない。いつそ命令で禁じてほしい、と書かれていた。」

恋次がぎゅっと拳を握りしめた。

「……総隊長が、これまで大恩ある者の願いゆえ、聞き届けるのが筋であろう。故にこの令を発する。って。」

そう続けた冬獅郎は、彼自身も納得していないように見えた。

「……そういうわけよ。恋次、朽木。一度瀟霊挺に戻りなさい。…

あなたたちだつて、自分の仕事があるでしょう。」
乱菊もまた、納得していないように見えた。

「…従いかねる、と申し上げれば？」
ルキアが言った。

その瞳を見て、冬獅郎は静かに溜息をついた。

「…やめておけ。第一、もう少し周りを見る。……十三番隊は浮竹がまだ回復していなくて混乱している。六番隊は隊首が動けない隊の任務を代行しているだろう。これ以上周りに負担をかけるんじゃない。」

恋次が深くうつむいた。

白哉は周りにものを頼む性格ではない。おそらく副隊長である自分がすべき仕事ですら背負いこんでやっているのだろう。

それに、と冬獅郎が言葉を接ぐ。

「…別に、搜索自体を禁じているわけじゃない。」
言い聞かせるような少し和らいだ口調に、恋次は顔を上げた。

「休日の行動まで、制限しているわけではないからな。…今は瀧靈挺も紛糾していて休みどころではないが、それでも正常に機能し出したら今迄通り休みを取る事が出来るはずだ。だから、今はとにかく戻れ。」

律儀な冬獅郎にしては、精一杯の譲歩なのだろう。

それに、自分たちだつてこれ以上周りに迷惑をかけたくなはない。

「私たちだつて、休みがとれるようになったら手伝う。だから今はね。」

乱菊もそう言うと、恋次もルキアも俯くようにうなずいた。

「すまぬ。井上、石田、茶渡。」

絞り出すような声に、織姫は首を横へ振った。

「大丈夫。私達だけでも探せるから。」

「出来るだけ早く戻るから、無理をしないでくれ。…いいな？」

その言葉に、三人は頷かなかった。

織姫は曖昧な笑みを浮かべ、チャドは目を閉じ、石田は眼鏡を押し上げる。

ルキアが横目で浦原を見ると、彼は扇子で顔を隠しながら頷いた。無茶はさせません、そう取っていいのだろう。

「三人も、ちゃんと学校へ行け。いいな。」

ルキアはそう言って、先に席を立った十番隊の二人を追った。

恋次も、深くため息をついてその後を追う。

後に残されたのは、苦しい沈黙だった。

尸魂界。

その令が発されたと聞いて反発したのは一人二人ではなかった。

「どういう、ことですかっ！元柳斎先生！！」

声を荒げ、次いで胸を押さえて苦しそうにする浮竹を京楽が支えた。ワンダーワイスという破面に貫かれた彼の胸の傷は、まだ癒えていないのだ。

「落ちつけ、浮竹。…山じい、ずいぶんらしくない行動じゃない？」

こんな命令を出すなんて。本当に一護くん之恩義を感じているなら、何を置いても探し出すはずだ。」

「……何故そう言う。」

「だって、おかしいじゃない。技術開発局が言うようにこの手紙が一護くんの手によって書かれたものだとしても、脅されている可能性は消えていないよ？…彼は、優しい子だ。家族を人質に取られていたら抵抗できないんじゃないかな。」

そういうと、元柳斎はほんの少しだけ目を開けた。

「お願いです。蔽令を撤回してください。……私たちには、彼の力が必要です。」

浮竹が言う。

すると、元柳斎は再び目を閉じた。

「そのように言うならばなぜ気付かぬ。…儂らがそうやって黒崎一護を頼りにすることこそ、あの者を苦しめておるのだと。」

はつと浮竹が息をのんだ。
「まだ現世の魂魄…それも年端のゆかぬ少年でしかない。ここで命をもつて探せば、それはこれからもあの者をこちらの理に縛ることになる。…今手を放してやるのが、あの者にとっての幸せになるとわからぬか。」

浮竹も京楽も、呆然と元柳斎を見ていた。

気付いていなかった。

考えてみれば当たり前前の事だ。

彼は 黒崎一護という少年は、まだ現世の高校生だ。

それなのに死神代行として、いや、世界を救った英雄としてしか見ていなかった。

そう、自分達は彼に深くかかわりすぎたのだ。

確かに潮時かもしれない。

彼の為を思えばなおさら。

なのに、それでもと思ってしまうのは傲慢だろうか。

「彼が、私達に関わるのを嫌になったとは思えません。」

浮竹が言う。

静かな声だった。

「先日、朽木から報告を受けました。…彼の母親は彼を虚から庇って死んだのだそうです。…護りたい、という意志もそこから来ているのだらう、と。」

搜索の合間を縫ってわざわざ病室へ来た彼女の様子を思い出す。

「彼は、何より家族想いで、そして仲間想いです。そしてとても優しい。……こんな、仲間を傷つけるようなやり方を好んですとは思えません。何かあったに違いない。どうか搜索許可を出してください。」

「黒崎一護もその父親も、儂らに対抗しうる実力を持っている。その二人を差し置いて妹御をどうこうすることは不可能に近いじゃろう。失踪前に急激な霊圧の上昇も観測されておらぬ。」

「命の撤回は、せぬ。これは最終決定じゃ。」

ぴしゃりと言われた二人は、そのまま退室するしかなかった。

「全く、世話を焼かせるのお……」

のんきとも取れるその言い方とは裏腹に、元柳斎の目は厳しい光を宿していた。

タイトル日本語訳は「妨げるは厳令」

八話と対になっています。

こんなにたくさんの人に心配をかけて、一護はいつたい何を考えているんでしょうね。

書いているのは私なのに、途中でちょっと腹が立ってきました。

次の話で第一章が終わります。

一護が今どうしているのかは、十四話、十五話で明らかにするつもりです。

それでは、感想などお待ちしております。

i t i s f r o m c u r i o u s n e s s (前書き)

十話の終わりの翌朝から始まります。

i t i s f r o m c u r i o u s n e s s

それは、一護が居なくなってから三日目の朝の事だった。

その日はいつもより早く起きて、朝練に行くにも少しだけはやくて、だからいつも朝はつけないテレビを何気なくつけて、

そのニュースを目にした。

私は今、失踪した一家の住んでいた自宅前にきています。

自宅の一部は父親の経営する医院となっており、ここで家族四人で暮らしていたという事です。

警察は現在行方を調査中とのことですが、事件性が高いとみられており…

同じように早く起きていた弟も、新聞に目を通していた父も、朝ごはんの用意をしていた母も、みんながテレビにくぎ付けになった。

長男は今年になってから家出を重ねており…

中学時代から素行に…

警察は彼の交友関係を…

そこで、パンとテレビの電源が落ちた。

ふり返ると弟がリモコンを握りしめていた。

「一護くんは、そんなじゃ、ないのに」

絞り出すような声に、うんと頷くしかなかった。

普段何気なく目に行っているマスコミを、こんなに恐ろしいと思った事はなかった。

一護の家出は、あんた達も含めたたくさんの人を護るためだ。素行が悪いというけれど、あいつから喧嘩をふっかけたことは一度だってない。

いつも非は相手にあった。

いなくなった奴の交友関係を洗うのは普通の事じゃないか。

どうして遊子ちゃんや夏梨ちゃんや、あの父親の交友関係も洗っているのに、一護の事はかりしゃべるのだろう。

髪が、オレンジ色なだけで。

そこまで思って、はっと気付いた。

いる、もう一人。

髪がオレンジ色で、一護と親しくて、なおかつ同じ時期に姿を消していた友が。

そこまで思った瞬間に私はすでに駆けだしていた。

「有沢っ！」

織姫の家に向かう途中でたつきを呼びとめたのは雨竜だった。

「石田！！織姫が！」

「わかってる。……もう浦原商店に避難させたから心配いらない。」
君も来るかと言われたたつきは、驚きつつも黙ってうなずいた。

「織姫！」

雨竜に連れられてあの胡散臭い店に着くと、織姫がちゃぶ台の前に座っていた。

「たつきちゃん!…どうして?」

「ニューズ見て、あんたが大丈夫かなって心配になったから…」

「井上さんの家の近くで見つけてね。…やっぱり、家の周りはすこかったよ。しばらくは戻れないだろうね。」

「どうやら偵察係だったらしい雨竜が後をついで説明した。」

「荷物は後で夜一サンに取りに行っていただけましよう。しばらくはウチに泊まってください。石田サンと茶渡サンもそのように。」
奥から出てきた浦原が言った。

「茶渡君は?」

「今こちらに向かっているようです。じきに到着されるでしょう。」

「…まあ、報道のほうはあとでどうにかしておきます。明後日までには戻るようにしますよ。」

「相変わらず何を考えているのかわからないような笑みを浮かべて浦原は言う。」

「……何とかするって、どうやって…?」

「方法はイロイロあるですよ。」

「無言になった雨竜とたつきを尻目に、浦原は続けた。」

「それはそうと…援軍ですよ。」

浦原が示した襖から出てきたのは、確かに見覚えのある援軍だった。

「君は…岩鷲君!」

「よう、と言った岩鷲は織姫と同じくちゃぶ台の前に腰を落ち着ける。」

「彼にもこちらの捜索に参加してもらいます。瀟灑挺に属している彼なら、何の問題もありませんからね。」

織姫がパツと顔をほころばせた。

ルキアも恋次もいない今、この援軍は心強いのだろう。

「ありがとう!岩鷲君!」

照れたように頭をかいた岩鷲は、さて、と雨竜に向き直った。

「んで?俺ねーちゃんに穿界門に放り込まれただけで詳しい事情分からねえんだけど、どうなってるんだ?一護がいなくなったって事ぐれーしかまだ聞いてねえし。」

「それなら、奥で説明するよ。…行く。」

暗にたつきの存在を示すと、浦原も同意した。

「それなら、二つ先の部屋を使ってください。…これ、新しい情報です。」

手渡された書類をたつきがチラリと見たのは気がつかなかった事にする。

岩鷲を促して部屋を去り、雨竜はやっと息をついた。

間もなく合流したチャドも加わり、岩鷲に状況を説明すると同時に今あがっている情報を整理した。

だが、これといって進展につながるようなものはなく、捜索が行き詰っている事を思い知らされるだけだった。

「ああそつだ。…石田サン、りりん達がどこにいるか、ご存じありませんか。」

岩鷲への説明がひと段落したところで浦原が言う。

「…いないんですか？」

ええ、と頷いた浦原は、やはりそうですかと続けた。

「……実は、三日前から姿を見ていないんですよ。コンさんも。」

「それって、つまり…」

「恐らく一護サン達と一緒にいるということでしょうね。」

考え込んだ雨竜を見て、岩鷲は溜息をついた。

「ったく、一体どうなってやがるんだよ。」

「…ム……………」

父親が原因であるならば、家族で姿を消すのはわかる。

だけど、なぜ改造魂魄の彼らまで連れて行ったのだろう。

「彼らを追う事も出来ないんですか？」

「…難しいですね。発信器とかでもつけておいたのなら別ですが、彼らの霊圧は補足しやすいので付けていなかったんですよ。その霊圧も、今は途絶えてしまつて…スミマセン。」
彼らしくない失態というべきか、それを自覚しているのだろう。
素直な謝罪が漏れた。

「……そろそろ学校へ行きます。…報道があつた以上、下手に休む方が騒ぎになる。そうですね。」
雨竜が浦原に言う。

「ええ。搜索はひとまずこちらに任せてください。岩鷲さんもいることですし。」

ひらひらと扇子を振つた浦原に頷くと、雨竜とチャドは席を立った。

しかしその日もその次の日も。

何日たつても一護は見つからなかった。

いつしか一か月がたつて、一年がたつて、それでも一護は見つからなくて。

高校を卒業する年になつても、

大学に入学しても、

成人しても、

それでも一護は見つからなかった。

いつしか警察の搜索も打ち切られ、
仲間内での搜索も、少しずつ間遠になつていった。

そして、あの日から、六年の月日が経とうとしていた。

it is from curiousness (後書き)

タイトル日本語訳は「それは好奇心から」

マスコミって怖いよなあ。

って思ったときに浮かんだ話です。

とはいえマスコミさんほとんど出てませんね(汗
警察の時と同じく挫折しました。ハイ。

コン達のことなんですけどね、書こうと思ってすっかり忘れていま
した。

本当はルキアに気づいてほしかったんですけどね。
忘れていたので割愛します。ごめんなさい。

次の話から第二章が始まります。

それでは感想などお待ちしております。

第二章が始まります。

一護がいなくなつてから六年後、つまり22歳の時です。

ここからよりパラレル色が濃くなります。

苦手なお方は今からでも遅くはありません。

どうぞ1章の続きはご自分の想像の内楽しんでむことにして、ここから先へ進まないようお願いいたします。

「a pendulum is told the truth」

狂わされた振子の1つは

その能力ゆえに真実を知らされる

己の将来さきにある全てを

贖あがなにすると知らされず

その真実は刃となりて

振子の心を斬り苛み

他者の願いは鎖の如く

振子の意思を戒める

しかし振子は全てを払い

自ら流れに身を投じる

身を裂く行為が生みだす歪みも

歪みをもたらず決別も

壊れた心が与える力も

力が導く誓約も

今はまだ 誰も知りえぬ

天に立つ一人を除いて

r u t h a p e n d u l u m i s t e l l e d t h e t

タイトル日本語訳は「真実を告げられた一つの振り子」

そういえば、第一話のタイトルに日本語訳を付けていませんでした

(汗)

「失われた歯車と狂わされた振り子たち」
です。

一応第二章の序文ということで、またしても詩の形式にさせていた
できました。

ちなみに、第一話も第十二話も各章のタイトルを兼ねております。
タイトル括弧書きのものがそうです。

一つの振り子が誰なのか、お分かりになりますか？

この人物がこの章の主人公になります。

第一話に書かれている「4つの振り子」「2つの振り子」というの
も実は特定の人物(複数)です。

それぞれ誰のことなのか、詩の内容から想像してみてください。

それでは感想などお待ちしております。

t h e l o s t n a m e a p p e a r a n c e (前書き)

十一話の終わりの6年後からはじまります。

t h e l o s t n a m e a p p e a r a n c e

「一護を隊長に、ですか？」

そんな話題が出たのはある昼下がりであった。

十番隊隊首室に居るのは冬獅郎と乱菊だけでなく、修兵・恋次・桃・イズルといった他隊の副隊長。

驚いて訊き返した恋次に、冬獅郎は頷いた。

「ああ。そういう話が出ていた。…もつとも、本人の失踪で無くなつたがな。」

十番隊隊首室には、こうして副隊長が集まる事が多い。

それは乱菊の気質によるものであり、冬獅郎も厳しくとがめはしなかつた。

「そんな話があつたんですか。」

驚いているのは恋次だけではない。

修兵は勢いよくむせ込んだし、桃は手にした茶菓子を口に入れる手前で止めている。

イズルはといえば大きく目を見開いていた。

「あれ以上、隊長を空位にしておくのは不都合だったからな。黒崎なら真面目だし、正解も会得している。…あの戦いで功績を考慮すれば、一気に隊長として登用することも可能だ。」

一護が隊長…というか隊首羽織を来ている姿を想像しているのだから。う。

斬月のせいで数字が見えなくなりそうだな。

「あの時、つてことは、一護が隊長になる可能性があつた隊つて三・五・九のどれかですすよね。」

「ああ。……まあ実現していれば五番隊だっただろうな。」

「え？私!？」

急に話を振られて、手にしていた茶菓子をついに桃が取り落とした。
「何で!？」

「三つの隊の中で、あのとき最も隊長を必要としていたのは五番隊だろう……本人からの希望が無い限り、五番隊隊長として割り振るはずだった。」

当時の事を思い出しているのか、冬獅郎の目が遠くを見た。

「隊首会……つっても、総合救護詰所でやったんだが、二番隊がひどく反対してな……」

大変だった、とぼやく日番谷に乱菊は苦笑した。

その隊首会には覚えがある。

当時はまだ隊長たちの怪我が治っていないで、総合救護詰所で臨時の隊首会を開いていた。

そして確かにあった。碎蜂隊長が暴れた回が。

原因も何も秘されたままうやむやにされてしまったのだが、その時垣間見た卯ノ花隊長の笑顔ときたら。

「一護が隊長になったらいろいろ大変そうっすね……」

恋次もまた遠い目をしていた。

「で？ 雛森はどうなのよ。」

乱菊が嬉々として聞く。

「どつって言われても……うーん……強いから頼りになったと思いますけど……真面目そうだし。」

その後は三番隊だったら、九番隊だったらと話題がうつり、そろそろ仕事に戻れという冬獅郎の号令でお開きになった。

あの戦いが終わってから、一護がいなくなってから、もう6年がたっていた。

彼も彼の家族の行方も一度として掴めなかったし、彼からあの時のような手紙が届くこともなかった。

いつしかこれだけの年月が経って、現世組もとうに成人していた。

もう、彼は自分達の前に現れる事はないのかもしれない。
うっすらそう思うようにさえなった。

一護が隊長になっていたかもしれない。

そんな話をしてから数日がたったある日、冬獅郎はいつものように
隊首室で仕事に励んでいた。

乱菊はいつものように昼寝をしていて、そろそろ起こそうかと席を
立ったとき、窓から地獄蝶が舞い込んできた。

地獄蝶は用件を告げ、再び飛び去っていく。

冬獅郎は用件を済ませるためにも乱菊を起こしにかかった。

「十番隊隊長、日番谷です。」

入れ、と内側からの声を聞いて戸を開ける。

中にいたのは呼びつけた総隊長と、そして見知らぬ女だった。

乱菊と同じだが、彼女と違ってまっすぐに伸びた長い金髪。

そして猫のような紅の瞳。

年の頃は井上と同じくらいか。

死覇装ではないから死神じゃない。

だが、何だこの霊圧は。

抑えられているのに、はつきりとわかる。

隊長格以上だ。

何者だ、一体。

「失礼します。」

それでも表情に警戒はみせず、部屋の中に踏み込んだ。

そのまま総隊長の正面に立つと、総隊長は一つ頷いて用件を切りだ
した。

「急に呼び出して済まなかったの、日番谷隊長。　こちらは、王族特務隊所属の曳舟桐生殿。先々代の十二番隊隊長でもある。」
紹介を受けた女　　桐生は会釈し、冬獅郎もまた反射的に会釈した。

「僕は外す。…用がすんだら声をかけよ。」

総隊長はそう言って部屋を出ていく。

だけど、それはあまり気にならなかった。

むしろ彼女の方がよほど気になる。

王族特務？先々代十二番隊隊長？

どちらかといえば後者の方に驚いた。

現・先代共にキレイな奴だから、正直な感想として普通に見えるこの女が元十二番隊隊長というのは納得しがたい。

だが、そういえば技術開発局ができたのは浦原の代だったか。それなら納得がいく。

そこまで考えて、一つの疑問が浮かんだ。

「……それで、王族特務の方が一体どのようなご用件で？」

そういうと、彼女は少しだけ微笑んだ。

「まどろっこしい話は嫌い？」

「…好きではありません」

「あら、私と気が合いそうね。それなら単刀直入に言っわ。」

そういつて、彼女は一度息をついだ。

「君を、王族特務隊に徴収しに来たの。」

その時、俺がどんな顔をしていたのかは知らない。

後に聞いたところによると、当時の俺にしては最大限の驚き顔だったらしいが、そんなことはどうでもいい。

とにかく俺は驚いた。

「……今、何と。」

「君を、王族特務に徴収しに来たの。……強制ではないわ。あくまで任意だけど。」

ひどく驚いているのに、言葉だけはいつもと変わらず紡がれる。

「どうして、俺なんですか。」

「君こそが相応しいからよ。……どう？受けてくれる？」

「俺はまだ未熟です。そのような大任が務まるとは思いません。」

「それを決めるのは君ではなくて私達。返事は？」

「…お受けできません。」

勝手すぎると思った。

急すぎるし、勝手すぎるし、訳がわからない。

どうして、俺が。

雛森の事もある。

ばあちゃんのこともある。

何より十番隊をどうするというのが。

隊士たちを放って別の任につけというのが、この女は。

いや、王族は。

「俺はまだ未熟です。有難いお話だとは思いますが、お断りさせていただきます。」

受けるといふ選択肢なんて初めからない。

そもそも総隊長がこの話を俺に回したことすら不思議だった。

俺が断ることなんて目に見えているだろうに。

失礼します、と辞去を述べて立ち去ろうとした。

桐生の次の言葉を聞く、その時までには。

「 黒崎、一護君。」

思わず足が止まった。
今、なんと言った。

「 黒崎一護君…彼の方方、知りたくない？」

the lost name appearance (後書き)

タイトル日本語訳は「失われた名前の登場」

曳舟さんが登場しました。

一護の行方は、いよいよ十四話、十五話で明らかになります。

正直まだ迷っているのですが…

あまりにもやりすぎのような気がしてしまっ

ですが！書いちゃいます！

苦情は受け付けません。

警告はちゃんとしましたからね。

それでは、感想などお待ちしております。

i t · s t h e t r u t h a b o u t o n e h e a r t (前書き)

十三話の終わりと同じ時から始まります。

i t s t h e t r u t h a b o u t o n e h e a r t

「どうして、あなたがその名前を知っているのかお聞きしてもいいか。」

声が自然と固くなる。

どうして、どうして王族特務の人間があいつの名前を　　行方を、知っているのか。

それはどういうことなのか。

瞬時に様々な可能性に考えが及ぶ。

「…興味持ったみたいね。どう？聞きたい？」

ふり返って、真正面から彼女の顔を見つめた。

彼女の表情からは何も読み取れなかったが、その目は一種の決意を秘めているように見えた。

辛そうに見えるのは、気のせいだろうか。

「……何故、とお聞きしている。」

「教えてあげてもいいわ。その代わり、条件があるの。」

「この話を受けると？」

そう言うだろうと思った言葉に、彼女は首を横に振った。

「いいえ。……言っただでしょ？これは任意だって。そうじゃなくて、

王族特務の任務内容に関する私の話を最後まで聞いて、その上でもう一度検討してほしい。それだけよ。」

「…それだけでいいんですか？」
不思議だった。

そんな、彼女にとって　　王族特務にとってほとんどメリットのない条件を持ちかけるといふ事は、何か裏があるのか。

特に表情に出したつもりはなかったが、彼女は勝手に言い添えた。

「あ、別にガセネタって訳じゃないから安心して？どう？聞く気になっただ？」

それがガセネタにしろ、話を聞くだけならなんのデメリットもない。冬獅郎は黙って頷いた。

「ありがとう。それじゃ、始めましょうか。昔語りを。」

百年前の事、現在の霊王陛下に三番目の若君がお生まれになったの。

その若君は何事においても他の者より優れていた。

勉強も、武芸も……本当によくできた子で、その才に欠けるところはなかったわ。

それでも、王家の他の人々も彼を妬むような事はなく、他の子供たちと同じように慈しんだ。

だから彼は寛い心も持つことが出来た。

やがて、その若君は外の世界に興味を持った。

彼は当時の霊王陛下の甥で、陛下にも若君がいらっしやっただけから後を継ぐ必要はなかった。

だからかな、周りに何の気兼ねもなく、王土を出奔したの。

それが、五十年前の事。

そして、現世をふらついている時に、ある事故で霊力を失ってしまった。

だけど偶然にも四楓院家のご当主がそれを見つけて彼を保護した。

そして浦原喜助たちの援助を受けて、彼は現世で暮らし始めた。現世で、ただの魂魄として。

彼女は、思いだすように遠くを見ていた。

だが冬獅郎にはわからなかった。

その話が、一護とどうやって関係してくるというのだろう。

浦原喜助や四楓院夜一が出てきたという事は、そこから関係してく

るといふのだろうか。

彼は、自身の出自を四楓院家のご当主にしか話さなかったそうよ。

四楓院家の当主である彼女だけが彼の出自に気付く可能性があるが、
つたの。

浦原喜助を信頼していないわけではなかったけど、彼はただの
元死神だったから。

驚いたそうよ。どうしてこのようなところに、と。

でも彼女はあまり深く考える性格じゃないから、余計な詮索は
しなかった。

そのご当主を知っている冬獅郎は、そうだろうなと思った。
いかにも奔放な彼女らしい。
だけど、一護にどうやって関わってくるのか。

やがて彼は結婚した。

相手は現世の普通の人間の女性で、彼はもう王土にも帰るつも
りはなかった。

ここが自分の居場所だと、思ったそうよ。

だけどね、授かった息子も、双子の娘も霊力を持っていた。

彼の遺伝ね。

特に息子の方はかなり高い霊力を保持していて、彼は危機感を
抱くようになった。

いつかどこかで、その霊力を狙われるのではないかと。

冬獅郎は、まさかと思った。

まさか、そんなはずは。

でもあいつは高い霊力を保持していて、双子の妹達も霊力があって、
それでも、まさか。

長男が九歳になった時、彼が最も恐れていた事が起こったわ。
長男を虚が襲ったの。

妻はそれを庇って死に、長男も心に深い傷を負った。
彼はそれを自分のせいだと思った。

自分のせいで妻は死んだ。
自分が要らぬ霊力を子供に分け与えてしまったせいで。

口の中がカラカラに乾いていた。

どういうことだ、と言いたかった。

けれど口を挟むことはできそうになかった。

その虚は、藍染惣右介の差し金だったのよ。

あの男は現世に死神と人間の血をひく子供が居る事を知っていた。
た。

好都合なことに、死神であった父親には今霊力が無い。

その子供が自分の計画に利用できる事をあの男は知っていた。

何故なら、彼が霊力を失ったのは、あの男のせいだったから。

だから彼は、家族を護るために再び霊力を手にすることを決意
した。

でもうまくいかなくて。

そのうちに、六年が経ってしまった。

あいつが九歳の時から六年が経った。

それはつまり、あいつが十五歳の時。

ここから先は、聞かなくてもわかると思った。

やはり聞かなくてもわかる事だった。

ある死神が、現世駐在の任を受け、そして息子の前に現れた。

一家は虚に襲われ、そして息子は家族を護るために死神の力を

手に入れた、

霊力のない彼は、それをただ見ているしかなかった。

彼は浦原に息子の保護と監視を依頼した。

もう、霊力のない彼一人で守りきれぬ状況ではなかった。

そしてその死神が尸魂界へと連れ戻され、息子が救出へ向かうのを見ているしかなかった。

全て、藍染の掌上だと知っていても、見ているしかなかった。

だけど、その間に霊力を取り戻す事が出来た。

霊力さえあれば、藍染と渡り合う事が出来る。

彼にはそれだけの実力があつた。

冬獅郎は静かに瞑目した。

やがて藍染との決戦が始まり、彼らもまたその戦いに加わつた。

結果としてその戦いは死神側の勝利で終わり、彼らもまた無事だつた。

そしてそれを見計らつたかのように、王土からの知らせが彼にもたらされた。

王土で原因不明の病が蔓延したのだ、と。

それは致死性のもので、大多数の民が犠牲になつた。

王族も例外ではなく、王位を継ぐことのできる王族が次々と死んでいったのだと。

そして今は彼の母親が霊王で、そして残された王位継承者は彼である事を。

彼は、子供たちを連れてすぐに王土に戻らなければならない事を知つた。

それが子供たちの人生を捻じ曲げる事になつても。

それでも彼はやはり王族だつた。

民を護る事の大切さは、王位を次の世代へつなぐことの大切さはよくわかつていた。

桐生は深くため息をついた。

もう、わかるわよね、と小さく言った。

冬獅郎は静かに頷いた。

彼は、一護は、

尸魂界を統べるものになるために、自分達のもとを去ったのだ、と。

タイトル日本語訳は「一心の真実」

何かそのまんまですみません。

何だone heartって。

……………すみません。

やっちゃんしました。

なんだこの設定ふざけるなって方、本当に申し訳ない。

そうなんです。そういうことなんです。

一護は だったんです。

次の話で、一護に関するものを書くつもりです。

彼がどうしてそういう決断に至ったのか、そういう補足も兼ねて。

あ、そうだ。

用語の補足をします。

王土、というのはそのまま王族の住む土地のことです。

一個の国のような感じで、普通の民間人？も住んでいます。

尸魂界…というよりは瀟靈廷に近いようなイメージです。

詳しい補足はそのうち本文で登場します。

それでは感想など、お待ちしております。

b e r r y · s d e t e r m i n a t i o n (前書き)

十四話の終わりと同じ時から始まります。

berry's determination

「護君は、今一生懸命にやっているわ。」

唐突に名前が出て、一瞬面食らう。

「彼は本当に頑張ってる。……文化も習慣も違う場所で暮らすってだけでも大変なのに、学ばなくちゃいけない事がたくさんあるから。」

何となくその姿は想像がついた。

どんな状況でも自分がやるべきこととあれば決して投げ出したりしないその姿勢は変わっていない。

そのことが少しだけ落ち着きを取り戻させた。

「でもね、頑張ったって結果が付いてこない事って、あるのよ。」
桐生が僅かに表情を曇らせた。

「彼は一生懸命やってる。もちろん、その分の結果は少しずつでも着実に出てきている。……でも、それでは足りないの。彼にはたくさんものが足りていない。その筆頭が、経験と時間と、……仲間ね。」

そこでいったん桐生は言葉を切った。

「彼には経験を積む時間も、自分の為に使える時間も無いわ。……霊王になるまでの時間すら、もういくら残されているのかわからないの。」

「……どういう、ことですか。」
久しぶりに聞いた自分の声は、不思議なぐらい頼りなかった。

「……霊王陛下は、ご健勝であられるわ。……でも、もうずいぶんとお年を召していらっしやる。それに、父親の一心君は……一年前から、

体調を崩しているの。」

王土に戻ってから、ずっと無理を重ねていたのよ。と桐生は呟いた。「一心君だけじゃない。妹達も、王土に来てからずっと病気がちな。…一護君ほど、あの二人は霊圧が高くなかったでしょう？それに、あんまり急にいろんな事があつたせいで、参っちゃったみたいでね。」

何も言えずに、冬獅郎は唇をかんだ。

妹のうち一人は、冬獅郎も良く覚えていた。

夏梨。サッカーが大好きで少年のように活発だった。

「夏梨ちゃんは、それでも少しずつ安定してきた。遊子ちゃんよりは霊圧が高かったから。…でも、以前のように元気ってわけじゃないわ。」

夏梨が今そんなことになっていると思うと悔しくて、冬獅郎はまた一層唇をかんだ。

「…一護君をいつでも支えてくれる人は、王族の内にはいないのよ。もちろん私たちも支えているけれど、彼の本当の姿をよく知っている家族は、一護君を支えてあげられない。…一護君は、王宮の外に知り合いはいないわ。当たり前だけど、でも彼を支えてあげられる仲間が、一護君にはいないの。彼が一番欲しているものなの。」

どうしようもなく悔しかった。

あいつは誰よりも仲間と家族を大切にしてきたのに、どうして肝心な時に誰も役に立てないんだ。悔しいと、心の底から思った。

「前にね、帰りたくないの？って聞いたことがあるの。」

今から考えたらさういぶん無神経な質問だわ、と桐生は笑った。

「そうしたら、なんて言ったと思う？」

「……帰ろうと思わない？」

少しの間を置いてそう答えると、桐生は驚いた顔をした。
「どうして?」

どうしてと聞かれても根拠はない。
ただ、自分の知っているあいつならそう言うだろうと思った。
そう告げると、彼女はまた笑った。

「正解よ。…よくわかったわね。…ちなみに理由はこう言ったわ。」

仲間を裏切るような真似までしてここへ来たんだ。

何があってもやり遂げなきゃ、あいつらに合わせる顔が無い。

…変わってない。

何一つ変わってない。あいつのままだ。

信じられないというか、信じたくないというか、理解が追い付かない
というか。

らしくもなくパニック状態になった思考は、落ち着きを取り戻して
いた。

あいつがあいつのまままで在ってくれた事が、自分にとってこんなに
落ち着きを与えるものだとは思わなかった。

またしばらくの間を置いて、桐生が口を開いた。

「…さて、と。こっちの情報はこれで全部。ちゃんと約束果たして
くれるわよね?」

完全に思考の外に追いやられていた条件。

王族特務隊に入る事をもう一度検討する。

さつき相手にとって何のメリットもないと思った条件だけど、今思えば相手にメリットしかない条件だ。

王族特務に入れば知りえる事実しか彼女は話していない。

…そして、言われなくても、もう一度考え直してしまう。

一通り桐生の話を聞いた。

王族特務は、その名の通り王家の守護を主な任務とし、場合によっては大虚の討伐も行う。

隊士は全て護廷十三隊の隊長から選ばれ、その戦闘能力は上位席官だと総隊長すら凌駕する者もある。

そしてもちろん、王族に対して絶対の忠誠を誓う、と。

話を聞き終えて、冬獅郎は長い間黙っていた。

自分が王族特務に入ること、何かしらの利益が一護にあるのなら。

自分がここで持つ全て、一護を秤にかけていた。

「…あの。」

「なに？」

「…その…えっと…」

歯切れが悪い、と自分でも思った。

ただ、あいつの事をどう呼んでいいのかわからなかったのだ。

王族である以上、敬称を使うべきなのだろうけど、はたして彼はそう望むのだろうか。

冬獅郎が言わんとした事は桐生に伝わったらしい。

「…いつも呼んでいた通りに呼んでいいのよ。私だって、一護君って呼んでるでしょ？…彼だけじゃなくて、何でか王家の人ってあんまりそう言うのにこだわらないのよ。だから、気にしないでいいわ。」

「
…黒崎は、何か言っていましたか？」

どうしても、それが聞きたかった。

彼が変わっていないというのは、桐生の話を聞いていればよくわかる。

だからこそ、彼が自分が臣下になる事を望むのだろうか。

王族特務に入るといふ事は、そういう意味だ。

自分の持つものすべてを、王族の為に捧げる。

臣下となって。

だから、どうしても聞いておきたかった。

変わっていないあいつが、自分が臣下になる事をどう思っているのか。

「…伝言を、預かっているわ。」

桐生が言った。

冬獅郎の翡翠の目を、紅の瞳は真っ直ぐに見つめた。

「これを聞けば、君はその言葉にとらわれてしまつかもしれない。

…それでも、聞く？」

ゆっくりと一度瞬きをした。

オレンジ色の夕日が、瞼の裏まで染みた。

「はい。」

そう、と小さく桐生は言った。

「頼む、と。」

冬獅郎は息をのんだ。

あいつは、覚えているのだろうか。

かつて自分が、あいつに同じ言葉を言った事を。

「でも、よく考えてほしい。…ここへ来て、その事を後悔なんてしてほしくないから。」

これだけよ、と桐生は言った。

頷いた冬獅郎は、黙り込んだ。

ここで深く考えもせずには承したら、それこそ突っ返されかねない。何よりよく考えなければいけないと、自分でもわかっていた。

「わかりました。…時間を、いただけますか。」

今度は翡翠の瞳がまっすぐに紅の目を見た。

「いくら仲間の頼みだからと言って、すぐに決められる事ではありません。…何より、あいつもそれを望まないのでしょうか?」

そう言うと、曳船はやわらかく微笑んだ。

「ええ。…一週間後にまた来ます。その時に、返事を聞けるかしら? 時間がかかるのなら、またその時に言ってくればいいから。」

冬獅郎が頷くのを見て、桐生は付け足した。

「それからわかっていると思うけど、このことは他言無用です。…
誰にも話してはなりません。…あ、でも」
でも、と言われて冬獅郎は少し期待した。
誰かに、話してもいいのだろうか。
彼の事を誰よりも心配している仲間に。

だが、次に発された言葉は、彼の予想の遙か上を行った。

berry's determination (後書き)

タイトル日本語訳は「一護の決意」

立場が大きく変わってしまったとはいえ、一護は何も変わってませんよ。

代行時代のままです。

この章が終わったら彼の心情でも書けたらなあと思っています。外伝になりそうです。

そして原作に出てきた「霊王」というワードに過剰に反応してみる

私のイメージとどれほど違うのか逆に楽しみです。

それでは、感想などお待ちしております。

What should I do (前書き)

十五話の終わりと同じ時から始まります。

What should I do

「でも、誰かに相談したかったら、総隊長か…旧五大貴族の当主に
なら構わないわ。」

「……はい？」

自分でも随分と間抜けだと思っ声が響いた。

すると、桐生はガシガシと頭をかいた。

「いやー…その、なんていうかね。……五大貴族の当主って、毎年
正月に王土へ来て霊王陛下に謁見するのよ。秘密裏に。…家族です
ら知らないのよ？当主にだけ、代々伝えられる行事と…かなん
と…」

「……四楓院夜一と朽木白哉は毎年あいつに会っているという事
ですか？」

今度は驚くほど冷たい声が出た。

「…ま、そうなるわね。」

つまり、あの二人は自分達があいつを一生懸命探しているのを見て、
協力する振りをしながらずっとだまし続けていたということか。六
年もの間。

静かに怒りが沸点に達した。

あれだけ多くの人間が探していたというのに。

まして、あの二人はそれを一番近くで見えてきたはずだ。

なのに、ずっとだまし続けてきたと？

「…彼らを責めるのだけは、やめてね。あの二人は何も悪くないわ。」

桐生の言葉に、はらわたが煮えくりかえるかと思った。
どうしてあいつらを庇う。

悪くない、だと？
ふざけるな。

仲間の苦しみを見ていて何もしないような奴が、悪くないとでもいうのか。

そう口にしようとした瞬間、桐生が再び口を開いた。

「一護君の頼みだったのよ。：黙っていてほしい。それが二人にとって：：というか志波空鶴を含めた三人にとって辛い事になるのはわかってる。それでも、黙っていてほしいって。」

「…なぜ…」

「わからないわ。知られたくなかったのかもしれない。かつて掟を真っ向から否定した自分が、掟にとらわれる存在になった事を。」

掟。

そのたった三文字の言葉が、一護にとってどういう意味を持つものなのか、冬獅郎には嫌というほどわかった。

自分の世界を変えてくれた、大切な人を殺そうとしたもの。

それだけじゃない。

大切に思う家族すら容易に奪ってしまうもの。

信頼していた仲間との隔たりを作ってしまうもの。

掟に苦しめられる人々を、あいつは何度も何度も目にしたのだ。

そして、自分も掟を心から恨んだ。

決して断たれることのないと信じていた絆を、いとも容易く引き裂くものとして。

「…それに、その掟が彼らの口を封じている。王家に関わる話は、決して他言してはならぬと定められているから。」
そう言つて、桐生は深くため息をついた。

「彼らにとつても、辛い事よ。自分達は眞実を知っているのに、教えてあげられない。自分の意思一つで、どれだけ多くの人が救われるかわかっているのに。…わかつてあげてくれる？」

冬獅郎は静かに頷いた。

落ちついて考えればわかる事だ。

あの二人が…特に四楓院夜一が、掟の為に仲間を犠牲にするとは思えない。

むしろ逆の行動をずっととつてきいたというのに。

それに、朽木もだ。

彼がルキアや恋次に眞実を告げてやりたいと願わなかつたわけがない。

他の連中の事ならともかく、というのはいかにもやりそうだが。

一瞬でも疑つてしまった事を、申し訳ないと思つた。

六年もの間、彼らは苦しい思いをしながらだまし続けてきたのだ。

「とにかく、相談していいのはその六人にだけ。まあ実質三人だけ

ど。…それ以外は、一切の他言を禁じます。さっきも言つたように

それは掟であると同時に一護君自身の願いでもあるの。いい？」

冬獅郎は頷き、口を開いた。

「…よく、考えさせていただきます。…お話はこれでよろしいでしょうか？」

ええ、と桐生が頷くと、冬獅郎は礼をしてその場を去つた。

夕日に染められた銀髪がドアの向こうへと消える。

それを見て、桐生は軽く息を吐いた。

「…………おちた、みたいね。」

その言葉は誰の耳にも届くことなく、ただ風となって空気を震わせた。

「あ、隊長！お帰りなさい！」

「日番谷隊長、お邪魔してます。」

隊首室にたむろっていたのは、例によって副隊長たち。その変わらぬ姿に、一瞬目眩がしそうになった。

自分と彼らとの間には、もう覆せない隔りがある。

今さらそれに気付いて、もう少し時間を置いてから帰ればよかったと思った。

まだ、受け止めきれしていない部分も大きいというのに。

そしてまた、その変わらない姿にためらいが生まれた。

王族特務になるという事は、仲間と二度と会えなくなるのだ。

俺は、捨てられるのか？

仲間も、部下も、立場も全てを。

でも、捨てなければ、一護を捨てる事になる。

どちらかしか選ぶ事は出来ない。

俺は、どうすればいい？

「隊長？どうしました？…顔色悪いですけど。」

乱菊が心配そうな表情をしている。

「いや…気のせいだろ。気にするな。」

そう言っって内心頭を抱えた。

気にするなど言った時点で顔色が悪いことを肯定しているだろうが。

大丈夫か、自分。

「……なら、いいですけど。お茶飲みます?」

「ん。頼む。」

誤魔化し切れていないのはわかってる。

その上で気づかないふりをしてくれた副官に、心から感謝した。

「そう言えば、日番谷隊長。」

「なんだ?」

「いや、…最近、うちの隊長の様子がおかしいんすよ。何か知らないっすか?」

「朽木がか?」

「ええ。………なんか俺の事呼んだと思ったら、やっぱり何でも無いとか言ったり。ルキアに聞いてみたら、あいつに対してもそうらしいんすよ。」

冬獅郎は、さっき内心抱えた頭をもう一度抱えなおした。

おいこら。誤魔化しきれてねえじゃねえか。何が掟だよ。

「…知らないな。…浮竹あたりにでも聞いてみたらどうだ?何か知ってるかもしれないぞ?」

「そうっすかあ。そうっすよね。聞いてみます。ありがとうございますございました。」

ぶつぶつとひとりごちた恋次に、こいつが単純でよかったと思った。

まだもう少しだけ、一人で考えようと思った。

俺がどうするべきなのか、それは自分で考えなくちゃいけないから。

「ただいま戻りました、殿下。」

曳船はそう言つて膝をつき、目の前に立つ青年に対して礼をした。

「…お帰りなさい。…つていうか今日はもう仕事終わったんで敬語じゃなくていいですよ。むしろやめてください。」

「あら、ごめんなさい。」

相変わらずの一護に桐生は苦笑した。

尸魂界に行つていたせいで、顔を合わせるのは四日ぶりだ。

「…どうだったか、聞かないの?」

そう言つと、一護は本を取ろうと伸ばした手をピクリと震わせた。

「…時間をくれ、といったんじゃないっすか?」

「正解。…よくわかつてるのね。」

「似た者同士ですから。…それに、あいつは優しいし。」

そう言つて、一護は外を眺めた。

ずっと遠くを見るような表情に、桐生は目を細めた。

それからしばらく、二人とも何も言わなかった。

「…あつちがどんなふうだったか、聞く?」

少し遠慮がちに桐生が言った。

一護は、さつき手を伸ばした本の表紙を、そつと撫でた。

迷うように、ふつと目を細める。

「…やめておきます。あいつが来るかどうか決まったら、その時聞かせてください。」

「わかつたわ。…来週、また行くことになっているから、その時になるかしらね。」

桐生が言つと、一護は少しだけ寂しそうに笑つた。

What should I do (後書き)

タイトル日本語訳は「俺はどうすればいい?」

そして一護欠乏症に陥って無理やり登場させました。外伝とか言ってたのにさっそく違うことしてます。

冬獅郎、悩んでいます。

どっちも簡単に捨てられるものじゃないですからね。

それでは、感想などお待ちしております。

b e t w e e n r e a s o n a n d e m o t i o n (前書き)

十六話の終わりの二日後から始まります。

between reason and emotion

あれから、考えた。

自分のすべき事が何か。

でも、決められない。

決められるわけがない。

黒崎は、仲間だ。

でも、他の奴らだつてももちろん仲間だ。

みんな大切で、誰一人だつて失いたくない。

ずっとみんなと一緒にいたい。

共に戦い続けたい。

そして、護りたい。

そのために強くなったというのに、結局何かを捨てなくてはならないのだ、と

諦めにも似た悲しみを感じた。

気がつけば、冬獅郎の脚は無意識にあるところへと向かっていた。

「…十番隊、日番谷だ。…入ってもいいか？」

扉の向こうから返事はなく、しかしすぐに扉が開いた。

白哉はひとつ頷くと冬獅郎を中へと招き入れた。

「…阿散井は？」

「先ほど、十番隊へと向かった。…当分戻っては来ぬだろう。」

また例の会か、と冬獅郎は頭の隅で考え、朽木と向かい合った。

「王族特務にこないかと、言われている。」

白哉は驚いたそぶりも見せずじっと見ている。

話を既に聞いていたのかもしれない。

「……どうするつもりか、きまったのか？」
彼らしくない、少し遠慮した物言いに、ゆっくりと冬獅郎は首を振った。

白哉は、そうか、と言ってお茶を入れた。

「……あいつは、どうしている？」

「元気には、している。……少し痩せたが。」

確かあいつはもともと細身だったと思うのだが。

「……だが、本質は何も変わっておらぬ。為政者には、向いていない。」

ためらうような口ぶりに、そうだろうなと思った。

あの真つ直ぐな性格は、為政者には向いていない。

「素直なところが長所だといわれているがな。」

「……そうか。……なあ、朽木。」

「何だ。」

「俺は……あいつの力になれると思うか？」

考えた上で、ずっと訊きたかった事。

自分が王族特務に入ったとして、あいつの力になれるのだろうか。
かえって枷になりはしないか。

「……それは、関係ないのではないか？」

「え……？」

「兄が力になりたいと思えば、それだけで力になる。……あれは、そういう男だろう。」

狐につままれたような顔をして、冬獅郎は白哉を見つめた。

「全ては兄の心持ち次第、と思うが。」

何も言えなかった。

それだけで、力になれるのだろうか。

あいつは一人だと桐生は言った。

だから、助けになつてやつて欲しい、と。

それは、どういう意味だったのだろう。

「……六年前。」

思考にふけっていた冬獅郎を白哉の声が呼びもどした。

「私は、全てを話そうと思った。…せめてルキアにだけでも。」

冬獅郎が黙っていると、白哉は続けた。

「…ルキアは、ある種の責任を感じているようだった。…自分があの男を巻き込んだために、このようなことになったのではないかと。」

いかにも彼女の考えそうなことだ。

全ての発端は、ルキアが一護に力を分け与えたところから始まるのだから。

「…だが、出来なかった。…四楓院夜一に止められた。」

「四楓院に？」

驚いて尋ねると、ああ、と白哉は頷いた。

「今ここで全ての真実を話せば、ルキアまでも巻き込むことになる。

…他のものに話せぬ苦しみを、味あわせても良いのか、と。」

「…！」

「私は迷った。…真実を知らぬまま苦しみ続ける事と、真実を知って苦しみ続ける事と、どちらがルキアにとって良いのだろう、と。」

そして悩んでいる間に、最初の正月が来た。」

五大貴族の当主は、毎年正月に王土へ来て霊王に謁見する。

そのしきたりをぼんやりと思いだした。

「…あの男は、話さないでくれと言った。…私や、夜一に苦しい思いをさせるのはわかっている。だが、他のものには決して他言しないでくれと。」

そういつて、白哉は深くため息をついた。

「あの男は 黒崎一護は、全てを内に抱え込もうとしていた。…

永劫一人で苦しみ続ける事になっても、どうしても仲間にも自分の全

てを話す覚悟はできない、と。」

信頼していないわけじゃない。

「ただ、俺はあいつらの前では死神代行の黒崎一護のままいたいんだ。」

私は、と白哉は続けた。

「……あの男が、兄を王族特務に呼ぶとは思わなかった。それは兄からここでの全てを奪うことになる。…それでも、そうしたこととは、」
再び、白哉は言葉を切った。

「あの男が、王になる覚悟をしたのだと、私は思う。」

「…王になる、覚悟……?」
のろのろと呟いた。

「ああ。自らの全てを明かし、全てを背負う覚悟を。…兄が王族特務に入れば、兄がそのために払った犠牲をも背負うつもりだろう。」

「…犠牲……」
ギセイ。

それは仲間であり、立場であり、家族であり…ここでの生活を形作る全てだ。

「その覚悟ができなければ、兄を呼ぶような真似はするまい。」

「……」
「……後は、兄が自分で考えるべきだろう。私が話せる事はもうない。」

「…ああ。」

冬獅郎はそう言って席を立ち、部屋を出ようとする。

「……兄が、あの男に負い目を持ち、そのために王族特務へ入るのであれば……それはあの男にとって最大の侮辱となるだろう。……それだけは、忘れるな。」
振り向かずに頷くと、冬獅郎はその場を去った。

負い目、と独り呟いた。

そう、それもある。

あいつにはたくさん借りがある。

藍染の一件も、草冠の事も。

だからそれを少しでも返したいと思ったのも、迷っている理由の一つ。

何せあいつがいなかったら、今頃自分達の誰も生きてはいないのだ。

タン、と屋根をけって近道して隊舎へとかけてゆく。

その勢いは次第に増した。

驚異的なスピードで実力をつけ

いつしか無くてはならない戦力となり

命がけで藍染と戦い、倒した。

その全ては、護るといふ強い意志から。

借りを返すだなんて、そんな理由を、お前は望んでいないんだろうな。

お前にとって護るといふのは、何も特別なことでは無いのだから。もし俺が僅かにでも負い目を見せたら、それこそ激昂するだろう。

誰もいない路地に降り立ち、ぼんやりと空を見上げた。

…明日、休みを取ろう。

ばあちゃんのとこに行って、ゆっくり考えよう。

今日はもう考えないと心に決めて、隊舎の門をくぐった。

between reason and emotion (後書き)

タイトル日本語訳は「理性と感情の狭間」

兄様登場です。

冬獅郎とは意外と気が合うんじゃないかなあと。

まあ、夜一さんよりは相談しやすいですしね、立場とか関係的に。

恋次がいないので自分でお茶を入れました

兄様はお客様に対しての気遣いは上手いと思っています。

で、その兄様は過去に夜一さんに説教(笑)をされたらしいです。

どっちも正論なんですよね。

というか兄様は本当に二つの間で揺れるよなあ…

これが彼の優しさであり弱さなのでしょうかね。

それでは、感想などお待ちしております。

r e t u r n t o o n e s o r i g i n (前書き)

十七話の終わりの翌日から始まります。

「ただいま、ばあちゃん。」
何も変わらない。

だからこそゆっくり考えられる場所。

「おや、おかえり。…ずいぶんと急だね。元気だったかい？」

「うん。ばあちゃんこそ、元気だったか？」

「私は何も変わらないよ。…朝ごはん、食べてきたのかい？」

「…食べてない。何かある？」

「私も今から食べるところだよ。多めに作ったから、一緒に食べようか。」

「うん！」

特に何を相談するわけでもない。

祖母は着物を作って細々と生活していて、冬獅郎はそれを見ながら半日ぼーっとしていた。

時折話すのは、桃の事、乱菊の事、瀧霊挺での何気ない日常。

任務の事はあまり話さない。

あまり心配をかけたくないし、ここに居る時ぐらい戦いの事は忘れなかった。

それは桃も同じで、ここへ来る時は二人とも同僚の話ばかりしていた。

「そういえばね、三・四日前に、松本さんがきたよ。」

「松本が？」

最近非番がなかったはずだ、いつの間に抜けだしやがった、と内心冬獅郎は舌打ちした。

「…お前が、何か悩んでいるようだ、ってね。」

「……へ？」

「聞いたところで答えないだろうから、もし帰ってきたら、相談に乗ってあげてくださいって。」

「……………」
「そういえば昨日、明日は休むと言ったとき、やけに返事が良かった気がする。」

「どうやら、気を使われたらしい。」

それにおされて、ようやく冬獅郎は切り出した。

「ばあちゃん。…俺がさ、仕事で遠くへ行くことになって、もう二度と戻ってこないって言ったら、どうする？」

祖母はきょとんとして、湯呑に視線を落した。

「…どうだろうねえ。寂しくはなるけど、冬獅郎がそうしたいんだったら、仕方ないねえ。」

「……………」

「…そうなりそうなのかい？」

「…来ないか、って言われてる。でも、別に強制じゃないんだ。」

「なら、行きたいと思っっているんだね。」

「…え？」

どうしてそうなるのだろう、と思っていると、祖母はそのまま話続けた。

「いやだったら、もう断っているだろう？…？そうじゃないってことは、行きたいんじゃないのかい？」

「……………」

そうなんだけど、少し違う。

でも、詳しく内容は言えないので黙っていた。

「冬獅郎。」

「…？何？」

「人っていうのはね、いつまでもそのままじゃいられないんだよ。」
何を言われたのかわからなくて戸惑う。

「…子供が大人になるように、冬獅郎たちで言うなら、副隊長や隊長になつていくように、いつまでも同じじゃいられないんだ。」

「…うん。」

「お前は、今変わる事を拒んでいるんじゃないのかい？…いつまでも、みんなと一緒に居たい。自分の住む世界に変わって欲しくない…そう思っているんじゃないのかい？」

「……」

それは冬獅郎にとって、初めて祖母から言われた厳しい言葉だった。
「…私はね、お前よりもずっと長い時間を生きてきたよ。そりゃあ、お前の方がずっと偉いし、ずっといろんなものを見てきたんだろうけど、それでもお前の方がまだまだ子供だ。…でも、いつまでも子供のままだじゃいられないんだ。わかるだろう？」

「…うん。」

「変わるべき時に、変わっていけるのが大人つてもものなんだと、私は思っているよ。」

「…うん。」

ここに帰ってくると、いつもただの日番谷冬獅郎に戻ってしまうのは、わかっている。

だから、ここに来たらどういふ決断を下してしまうのかは、初めからわかっていてた。

日番谷冬獅郎として、一人の自分として。

隊長としての枷を無くした自分が何を選ぶかぐらい、わかっていた。

「……ばあちゃん、俺…行くよ。」

そういうと、祖母は顔をしわくちやにして微笑んだ。

「そうかい。決まったかい。…冬獅郎、おいで。」
手招きされて、祖母の傍に座る。

「頑張りなさい…ばあちゃんは、ずっと応援してるから。どうしてもだと思つたら、ここへいつでも帰つておいで。」
そう言つて、そつと頭をなでられた。

顔を上げる事は出来なかった。

静かに嗚咽を漏らした冬獅郎の背中を、祖母は優しくさすつた。

「お前は、強い子だから…無理しちゃいけないよ、何事もほどほどが肝心なんだ。あれこれ欲張っちゃいけない。…それから、……」

冬獅郎が泣きやむまでの間、祖母はずつと話し続けた。

夏に冷たい物ばかり食べてはいけないよ。

好き嫌いはないけれど、偏つたものばかり食べないようにしなさい。

ちゃんと寝ないと背が伸びないから、ちゃんと昼寝もしなさい。

友達や仲間をたくさん作りなさい。

悩んでもいいから、結論を出さなくてもいいから、無理だけはし
ちゃいけない。

それは周りの人を悲しませてしまうよ。

これが最後だ、とわかつていた。

祖母からこうした話を聞くのも、祖母の前でこうして泣く事も。

もう二度と会えなくなる道へ、自分は踏み出したのだ。

泣き疲れて寝てしまうなんて、全くいつ以来の事だろう。

目が覚めたらすでに日が暮れかかっている、祖母は自分の背中を撫でつつけていた。

「…起きたかい？」

「…うん。」

「お茶にしようか。」

「うん。…」

その日は、ばあちゃんの隣で眠った。

小さい頃は霊圧を操作できなくて、そのせいでばあちゃんを殺しかけた。

今はもうそんな心配はない。

死神が 松本が、気づいてくれたおかげで、今の自分がある。

ばあちゃんが生きていて、仲間達がいて。

そんな日常は、全て彼女が護ってくれた。

ばあちゃんも、雛森も、松本も。

自分の人生を大きく変えてくれた三人に二度と会えなくなったとしても、自分がしなくてはならないことがある。

まだまだ子供だとわかっている。

でも、変わるべき時に しなければならぬことがある時に、自分のすべきことを見極めれたのだ、と思う。

うとうととまどろみながら、そんな風に思った。

「ばあちゃん。」

朝、家から一歩外へ出てふり返る。

「今まで、ありがとう。」

ぐつと頭を下げた。

育ててくれて、愛してくれて、支えてくれて、大切にしてくれて。本当に、ありがとう。

明けかけた空は、一護の色。

その日光が、冬獅郎の髪をも染めた。

「行ってきます。」

すつと顔を上げた冬獅郎の顔は、決意に満ちていた。

祖母はそれを見て、目を細めた。

……あの、小さかった子が。

立派になったものだ。

「……いつてらっしゃい。気をつけてな。」

冬獅郎は踵を返して歩き出す。

ふり返りはしなかった。

今は、少しでも前へ。

一歩でも先へ進んで、少しでもあいつの力になりたい。

ただ、それだけを思っていた。

return to ones origin (後書き)

タイトル日本語訳は「原点へ帰せ」

ということ、冬獅郎はついに決意してしまいました。

いや、本編見てて、こいついいかげん離れろよとか思ったとかそんなことは全然ないです

……ただ、今の環境にいる限りこいつ絶対成長できないよなーと思っただけです。

まああと一護の(まともな)支えになれる隊長って冬獅郎だけじゃないかということ、

剣八とかマユリとか間違ってもアウトですからw

それでは、感想などお待ちしております。

i c e m o o n s d e t e r m i n a t i o n (前書き)

十八話の終わりと同じ日の午後から始まります。

仕事の合間に、ぼつぼつと退位への準備を始める。

総隊長にもまだ知らせてはいない。

一番最初に知らせるべきは桐生だと　一護だと、無意識に思っていた。

「たーいーちよーっ！ねえ、隊長ってばっ！」

「ん？どうした、松本。」

冬獅郎が書類から顔を上げると、いつの間にか乱菊が目の前に立っていた。

「どうした、じゃないですよ！何回呼んでも気づかなかったんですよ？」

「……そうだったか？」

「はい。で、お茶にしません？みんな来てますし。」

乱菊の後ろには、言うまでもなく例の副隊長達。

それぞれ湯呑やら菓子やらを手にして話している。

「そうだな。そうする。」

「それにしても、ずいぶん書類に熱中してましたね。忙しいんですか？」

修兵が言うと、冬獅郎は首を横に振った。

「いや…昨日、急に休みを取ったからその分を片づけていた。…ちよつと終わったけどな。」

「二日分を半日強で片づけたって事っすか。…相変わらず早いなー。」

「そうか？集中してやれば、あのぐらいはすぐ終わるだろう。」

「無理っすよ。そんなの日番谷隊長だけですから。」

「……まあ副隊長が仕事してくれればもっと早く片付くんだけどな。」

「そういつて乱菊を見ると、気付かぬふりでお茶を飲んでいた。」

「…それにしても、ここの隊って隊長と副隊長の仲がいいですよ。」

「何気なく七緒が呟く。」

「そうか？…そういうなら八番隊も十分仲がよさそうだが。」

「…まあ、悪くはないと思いますけど。…でも、ここって何か他と違う気がするんです。ねえ？」

「そう言って同意を求めると、口々に賛同の声があがった。」

「そういえば、他と比べると別格で仲がいいですよ。…っていうか日番谷隊長がやさしすぎるんですよ。副隊長の仕事まで全部やってあげるんですから。」

「修兵が言っつと、乱菊が噴き出した。」

「ちよっ！全部じゃないわよ！ちゃんと少しは」

「少しじゃなくて自分の分ぐらい自分で片づける！」

「えー。だって隊長がやってくれるんですよ。」

「もーん、じゃねえ！お前が書類の流れを止めると必然的に俺の仕事も遅くなるんだよ！」

「…隊長がやった方が早いじゃないですか。一人で仕事やった方が効率がいい人なんですから。」

「それとこれとは関係ねえだろが！お前が自分の仕事をきちつと全部やった方が格段に速いに決まってるだろ！」

いつものように始まった言い争いを、他の副隊長たちは微笑まじげに見ていた。

「やっぱり、仲いいじゃないですか。」

七緒が小さく小さく呟くと、隣に座っていた桃が頷いた。

一方、言い争いをしながら冬獅郎も違う事を考えていた。

こうして、くだらないやり取りができるのも、あと少し。

あいつも、同じ事を思ったのだろうか。

知らされてからの一ヶ月、あと少しだと思いつながら、過ごして
いたのだろうか。

自分はそれに全く気付かなかった。

少し様子がおかしいとは思っていたが、それでもそれだけだっ
た。

すごい、と心から思った。

自分は、今すぐにでもこの心の内を打ち明けたいと思っているのに。

副隊長たちが帰ってから、また仕事に戻る。

「…松本。」

「はい？」

「…この間、流魂街に行ったらしいな。」

「…聞いたやいましたか。」

あーあ、と呟く乱菊を見て、冬獅郎は溜息をついた。

「…余計な気を回さなくていい。…だけど、まあ…ありがとな。」

「え？隊長、今なんて言いました!？」

「なんにもだ。…とつと仕事しやがれ。」

「えー。だってもう終わったんでしょ？」

「今日までの分はな。明日以降の分もやっておくぞ。」

「えー!?!いいじゃないですか、それなら明日で。」

「こつこつのは早めに済ませておくのが一番いいんだよ。…わかっ

たらやれ!いいな!？」

「……はい。」

口答えを諦めた乱菊が渋々席に着く。

「……隊長。」

書類から目線を上げずに乱菊が言う。

「なんだ？」

冬獅郎も視線を上げなかった。

「…もう、いいんですか？」

「…ああ。もう済んだ。」

「そうですか。」

ごめん。もう少ししたら全部話すからな。

それまで、聞かないでくれ。

しばらく仕事をしていて、明日の分もめどがつくころになったころ、冬獅郎は声をかけた。

「松本。」

「なんですか？」

「…草冠の、墓参りに行くんだけど、…来るか？」

「はい。」

何故だか、あの一件以降必ず墓参りに乱菊は同行した。

私も、言いたい事があるんですよてや。

どうしてだと聞いたとき、乱菊はそう答えた。

最近隊長はこうなんです。そういえば、この間こんなことがあったんですよ、って。

お墓の中に居たら、知りたくてもわかりませんからね。

そのお返し、というわけではないけれど、冬獅郎もギンの墓参りに同行した。

墓の中に居たら、知りたくてもわからねえんだろ？

止めようとした乱菊に、冬獅郎はそう言った。

「なら、行くか。」

「はい！」

二人して瀟霊挺のはずれへと歩いて行く。

途中の花屋で二つずつ花束を買い、最初にギンの墓を目指した。

普段はよく話す二人だけれど、この時は自然と口数が少なくなる。
水を汲んで来て、墓石を少し洗って。
花束をささげて、黙って祈る。

もう、お前の墓参りに来ることはなさそうだ。

冬獅郎は、ギンにそう告げた。

もう、松本一人でも十分やっていけるだろ。

最初っから、俺の手なんて必要としてなかったか。

じゃあな、市丸。

松本の事、頼むぞ。

冬獅郎が顔を上げると、まだ乱菊は祈っていた。

しばらくの間、黙って待っている。

「…ごめんなさい、隊長。…長かったですよね。」

「いや。…言いたい事は全部言っちゃったか？」

笑い混じりに尋ねると、乱菊も笑った。

「はい！もうたつくさん愚痴聞いてもらいました。」

「…愚痴聞いてもらうほど疲れる生活をしているとは思えねえがな。」

「そんなことないですよー。ほら、隊長！行きましようよ！」

草冠。久しぶりだな。

なかなか来れなくてごめんな。

あのさ、…俺、王族特務に行くことになったんだ。

だから、もうここにはこれなくなる。

まあ、松本とか雛森がちょくちょく来てくれるだろうから、寂しくはねえだろ？

俺も、頑張るからさ。…応援してくれ。

じゃあな、草冠。

「…行くか。」

「…はい。」

墓は瀟霊挺のはずれの小高い丘にあって、だからそこからは瀟霊挺を一望できた。

「…きれい。」

乱菊が呟いたのは、その瀟霊挺が夕焼けに染められていたから。

「…そうだな。」

白い建物が多い瀟霊挺は、夕焼けに染まりやすい。

一面の橙色を、二人はしばらく見つめていた。

これも、きつと最後。

最後、最後と今日を見つめてきた。

あいつも、きつとこんな風に見つめていたのだろう。

どこか他人事のように、いつもと変わらない日常を。

そうすれば、すぐに来る別れも、辛くないから。

ふと振り返ると、草冠の墓の後ろには、三日月が浮かんでいた。真っ白なはずのそれは、今ばかりは夕焼けに染められていた。

それでもやわらかな色の中で、月だけは硬質な光を放っている。

じゃあな、草冠。

心の中で小さく呟いた。

「行くか。」

「ええ。」

歩き出した二人も、
橙色に染められていた。

ice moon's determination (後書き)

タイトル日本語訳は「氷輪の決意」

氷輪、というのは「冷たく凍ったような月」という意味らしいので。

これで最後、最後って思いながら、冬獅郎は過ごしています。こつこつとって、きつと彼の人生初ですよー！。

多分、一護も同じだったんじゃないかなあ、って。そつこつ風に思いながら、冬獅郎は過ごしています。

第二章は夕焼けやら朝焼けが多い…

そんなに存在感誇示しなくてもいいですよ、一護。なんて思ってみました。

それでは感想など、お待ちしております。

n o t i c e i s a r e t i r e m e n t , b u t a p r o m o t i

十九話の三日後から始まります。

「日番谷隊長の、王族特務への異動が決定した。」
臨時で開かれた隊首会で、総隊長が重々しく告げた。

隊首会が解散になると同時に、浮竹が冬獅郎に駆け寄ってきた。

「驚いたよ。ずいぶん急なんだね。」

「ああ。先週、話を持ちかけられてな。任命書も今もらったところだ。」

そう言つて懐をたたく。

そこにはさつき曳船から渡された書状が入っていた。

「いやあ。相変わらずだなあ……」

京楽が言つと、冬獅郎は首をかしげた。

「何がだ？」

「いや、僕達の同期に王族特務に入ったのがいてね。……曳船つてい
うんだ。あっちで会うと思う。彼女の時も、ずいぶん急だったなあ
つて。」

「その人になら、会った。同期だったのか。」

「うん。霊術院時代からずっと一緒だね。……そうか、会ったのか。」

元気そうだったかい？」

「ああ。」

「……ところで、乱菊ちゃんにはもう言ったのかい？このこと。」

「……いや。これからだ。」

「早く言った方がいいよ。君の口から聞きたいだろうからね。」

「わかつてる。……じゃあな。」

他にも話しかけたそうにしている隊長たちはいたが、冬獅郎はそれ
を無視するようにその場を去った。

「……松本。」

部屋に戻ると、相変わらず長椅子で眠っていた副官に溜息をつく。俺がいなくなつて本当に大丈夫なのだろうか、と思わず不安になつた。

「松本っ！おい！起きろ！」

「…ふあい。…あれ、隊長…？なんですか？…もう終業ですよ…？」

「話がある。いいから起きろ。」

寝ぼけている乱菊に熱いお茶を入れ、完全に覚醒するのを待った。

「…起きたか？」

「はい。で、何ですか？話つて。」

ふう、と一度溜息をついた。

「…落ちついて聞けよ。」

「…はい。」

真剣な様子の冬獅郎に、乱菊も自然と表情が険しくなる。

「…俺に、異動命令が下つた。王族特務に異動だ。」

数瞬沈黙が下つた。

冬獅郎が再び口を開こうとした時、乱菊の表情にようやく変化が見られた。

「…今、なんと言いましたか？」

「王族特務に、異動になつた。と言つた。…俺は、もうすぐ十番隊隊長をやめる。」

「…嘘、ですよね。」

「嘘じゃない。…松本？」

肩をふるわせ始めた乱菊に、思わず冬獅郎は声をかけた。

「だって…どうして…？どうして隊長なんですか！？なんでっ！」

「落ちつけ。…急なことで、すまないと思つている。だが、もう任命書を受けとつた。覆す事は出来ない。」

「なんで…そんな…どうして、相談してくれなかつたんですか…」

震える乱菊の声に、冬獅郎はすつと目を伏せた。

「…勝手に決めて、すまなかった。」

「…断ってください。」

「駄目だ。」

「断ってくださいよ！私たちを見捨てるんですか！？」

「っ…そんなこと言ってないだろうー！」

言葉が足りないのはわかっているけど、一方的に問い詰められたせいで、つい声を荒げてしまった。

「…すまない。…だけど、…これは俺が望んだ事なんだ。受け入れてくれ。」

「…嫌です。」

聴きたくない、と耳をふさいだ松本に、冬獅郎は目をつぶった。

どうしたらいいかっていうんだよ。

ぐつと奥歯を噛んで立ち上がる。

「…松本。」

「……………」

「松本。」

「……………」

「聞けっ！」

「嫌ですっ！」

隣に立ち、無理やり手を引きはがそうとする。
その時だった。

「日番谷隊長　っ！失礼しまーす。」

「失礼しまーす。」

例によってたくさんの副隊長が集まってきた。

全く、タイミングが悪い。

制止しようにもすでに扉は開けられて、そちらに気を取られた冬獅郎は、いきなり乱菊に突き飛ばされた。

「隊長のバカっ！」

言うなり部屋から飛び出していく。

冬獅郎と言えば突き飛ばされた拍子に机で頭を打ち、更には多数の副隊長にそれを見られたことでもう何もする気が起きなくなっていた。

「……………えーと……………」

先頭きつて入ってきた恋次がポリポリと頬をかく。

「…入れ。……………お前らにも、説明する。」

かつてなく不機嫌で低いその声に、副隊長たちはひっと身をすくませる。

「…でも……………」

「いいから、入れ。」

「……………はい。」

今日はよりにもよって全ての副隊長がそろっていて、タイミングから察するに全員が事情を聞いていない。

当てにならない隊長たちだ、と思わずため息をついた。

一通り説明をすると、一斉に罵倒された。

ちなみに罵倒の内容をまとめるところだ。

- ・いくらなんでもその言い方はないだろう。
- ・というか勝手に決めるなんて最低。
- ・今すぐ断れ。更に謝れ。

「……………もう決めた。第一、任命書もこうやって出てる。靈王陛下の御璽入りだぞ。今さら覆るとでも思うか。」

「覆してよ。」

そう言ったのは一番暴れた桃で、すぐに他の副隊長も同意した。

ああ、お前本当に慕われてるんだな。やっぱりすげえよ。

そんな風に思いながら、ブーイングの嵐をやり過ごす。

だって、誰がこんな事を考えるだろう。

雛森はまだわかる。

でも、雀部や伊勢までもが、しかも靈王の命令を覆せなどと出来もしない事を言うなんて。

そんな事を言わせられるのは、松本、お前だけだろう。

そんなお前だから、俺は、ここを任せて行けるんだぜ？

「…日番谷隊長、聞いてますか？」

「…聞いてなかったな。何だ。」

若干機嫌が悪いのは、副隊長たちにも読み取れているのだろう。

僅かにたじろぐ気配がしたが、伊勢がキツと眼鏡を上げた。

「どうして、こんな勝手なことをされたんですか。乱菊さんが傷つかないわけじゃないでしょう…？」

「…わかってるさ。だけど、他にしようがなかったんだ。」

そう言つて立ち上がり、扉へと向かう。

「どちらへ？」

「…松本を探す。時間が無いんだ。」

時間が無い、その言葉で初めて副隊長たちが異動の日取りを聞いていない事に気付いた。

「いつ、異動に…？」

冬獅郎は壁にかけてあるカレンダーを見た。

「…あと、五日だ。」

「…早すぎますっ！」

「早すぎるも何も、あちらの都合だ。仕方ないだろう。」

「仕方ない仕方ないってさっきからそればかりじゃないですか！」

「七緒ちゃん、そこまでにしておきなよ。」

「……京楽…！」

ふいにかかった声に振り向くと、窓から編み笠が見えた。

「…ほかのみんなも、そろそろ隊舎に帰りな。隊長さん達が心配してるよ。」

「……」

「こんなことをして、乱菊ちゃんが傷つかないわけがないって、日番谷隊長が一番よくわかってたはずだ。…それでも曲げられないのなら、僕達が口を挟むべき事じゃない。…わかるだろう?」

「…はい。」

七緒が小さく返事をした。

「京楽。」

冬獅郎が低い声で言った。

「何だい?」

「……ここ、任せてもいいか。」

「構わないけど、乱菊ちゃんを捜しに?」

「やめた。…道場に行く。」

そう言うなり、冬獅郎は瞬歩でその場を去った。

「……荒れてるねえ。」

飄々とした口ぶりで京楽が言う。

「…京楽隊長。」

「…?どうした?檜佐木君。」

「…俺、少しだけですけど、乱菊さんの気持ちわかるんです。…隊長においてかれたときの、絶望が。」

「……」

「日番谷隊長は、東仙隊長みたいに裏切ったわけじゃない…それは、わかってます。でも、副隊長の気持ちを裏切ったっていう点では、結局変わらないんです。」

「…そうかもしれないね。だけど、日番谷隊長だってそれをわかっているはずさ。彼は若いけど、ちゃんと周りを見る事のできる子だよ。…それだけの理由があるってことなんだ。黙って見守ってあげるほうが、彼らの為だと僕は思うよ。」

「……そう、ですよね。」

「そう。…さあ、みんなも帰りなさい。いいね?」

「はい。」

次々と副隊長が消え、残されたのは京楽と七緒の二人だけ。

「七緒ちゃん、帰ろう。」

「…はい。」

冬獅郎は、道場でただ一人木刀を振るっていた。

何分も、何十分も、何時間も。

「……いつまでそこに隠れているつもりだ、松本。」

一息ついて、入口に背を向けたまま言うと、乱菊が道場から入ってきた。

「……隊長。」

「…なんだ。」

「手合わせ、お願いします。」

冬獅郎がふり返ると、乱菊は手に木刀を持っていた。

「ああ。」

本気で、うちあった。

何度も何度も。

何度弾かれても決して屈することなく乱菊は向かって来て、

何度も向かってくる乱菊を、冬獅郎は何度も弾いた。

「刀に、心が入ってねえぞ。集中しろ。」

「…っ！」

カン、と乾いた音がして乱菊の木刀がはじけ飛んだ。

「…もう一戦、お願いします。」

「今のお前じゃ何度やつても同じだ。もっと落ち着いてから来い。」

「そんなこと、わかってますよ！」

「…わかった。だが、少し休むぞ。いいな？」

「…はい。」

壁にもたれて、並んで座りこむ。

「…松本。…理由を聞いてくれないか。」

「……」

沈黙を肯定と受け取って、冬獅郎は話し出した。

「…俺は、お前に言われて死神になった。死神になるまでは、俺はばあちゃんと雛森さえいればいいと思ってた。…でも、今は違う。もっとたくさん護りたくなった。」

「……」
「だけど、肝心な時に俺はいつも護れなかった。……俺は、もっと強くなりたい。だけど、ここには俺はこれ以上進めないんだと思う。」

「…どういう、ことですか…？」

「環境のせいにするつもりはない。原因は俺がただ弱いからだ。…俺は、もっと、強くなりたいんだ。強くなって、護りたいものを護れるようになりたい」

「……そのために、私たちを置いて行くんですか…？」
乱菊がぽつりと言った。

「…俺が置いて行くのは、お前なら置いて行っても大丈夫だからだ。」

「…え？」

「さつき、他の隊の副隊長が来てたろ。…あいつらに、散々に言われたよ。どうしてこんなこと勝手に決めたんだったって。」

「……」

「お前なら、俺がいなくてもちゃんと支えてくれる仲間がいるだろ。…俺は、お前がいるからここを任せて行けるんだ。」

「……無理ですよ。私に、十番隊を背負えって言っんですか？…そんなの……」

「一人で背負え、とは言っていない。他のやつらの手を借りていい。それに、十番隊を背負うのはお前だけじゃない。隊士全員で背負うんだ。……お前らなら、できるはずだ。」

「……」

「…松本。」

「……どうして、みんな私を置いて行くんですか……？」

「松本……」

「どうして……？私は、いつも待っているだけじゃないですか。それで、最後はいつも帰って来てくれないじゃないですか。……私ばかり、どうして置いてかれなきゃいけないんですか……！」

冬獅郎は溜息をついた。

誰の事を言いたいのか、よくわかった。

「……わかった。なら、約束する。……俺は必ずお前に会いに来る。

十番隊長にはもう戻らない。だけど、必ずお前にもとに戻ってくる。」

「……」

「……それじゃ、だめか……？」

乱菊は立ち上がり、冬獅郎に向き直った。

「……もう一戦、お願いします。」

質問に対する返答はしなかった。

だから冬獅郎も答えなかった。

立ち上がって、木刀を手取る。

構えた瞬間、乱菊は真っ直ぐに向かってきた。

道場に、木刀のぶつかる音が鳴り響く。

冬獅郎は、受け流さなかったし、自分からも向かって行った。

隊長と副隊長という関係になってから、全力で打ち合うのは初めてかもしれない。

「……約束、ですよ。」

肩で息をしながら、乱菊が言う。

「ああ。約束だ。俺は必ずお前のもとに戻ってくる。」

冬獅郎が言うと、乱菊は木刀から手を離れた。

カラン、と音を立てて木刀が転がる。

「……今まで、ありがとうございました。あなたのもとで副隊長を務める事ができて、光栄でした。」

乱菊はそう言つて頭を下げた。

「俺もだ。お前が副隊長をやってくれたおかげで、俺も隊長を務める事が出来た。」

冬獅郎も、頭を下げた。

「今まで、ありがとう。」

notice is a retirement, but a promotion

タイトル日本語訳は「通達は退位、されど昇進」

このところ同じ程度の分量にまとめていたのに一気にほぼ二倍に
してしまいました。ごめんなさい。

冬獅郎が乱菊さんに言った理由は、別に嘘じゃないです。

もちろん一護のことが一番大きいですけど、こっちもちゃんとした
理由の一つ。

原作読んでいる限り、彼は多分雛森とかから離れない限りもう一段
階成長できないんじゃないかなあと思ったので。

ということ、こんな風な展開になりました。

それでは、感想などお待ちしております。

a n d a p a r t i n g t i m e c o m i n g (前 書 き)

二十話の終わりの三日後から始まります。

「そっかあ……冬獅郎君、遠くへ行っちゃうんだあ……寂しくなるなあ」

「……ム」

「それにしても、ずいぶん急だな。その王族特務っていうのは。」
冬獅郎と乱菊は現世組に会うため浦原商店へきていた。
すでに退位の準備は終え、各所への挨拶もすんでおり、最後に現世組のところへ来たのだった。

すでに三人は成人しており、地元の大学に通っている。

結局三人とも同じ大学の同じ学部　医学部に入ったと聞いていた。
理由はと言えば、自分たちにできる最大限で誰かを護りたいから。
虚を倒す事もそうだけど、生計を立てていく上で、それで誰かの命を護れたら。

そう考えたのだそつだ。

特に織姫の能力を考えたとき、体構造を把握することは治癒能力を上げるうえでも有効らしいから、そういう意味でも都合がよかったのだろう。

「もう、これで会うこともないだろうな。……あちらに行ったら、戻ってくる事はほとんどないから。」

冬獅郎が言うと、三人とも　分かりづらいがチャドも、残念そうな顔をした。

「……気をつけてね。頑張つて。」

「ああ。」

「……無茶は、するな。」

「わかつている。」

「こっちにきたら、声をかけてくれよ。」

「できたらな。」

僅かに涙ぐんでいる織姫を見て、乱菊がその肩をたたいた。

「何で泣くのよ。二度と会えなくなるって決まったわけじゃないんだし。ね？心配しなくても私はこれからもどんだん現世に来るわよっ！」

「松本……仕事はしろよ。いいな？」

「わかってますよーう。息抜きですって。」

「お前の場合は息抜きが長すぎるんだ。一日の九割が息抜きだろうが。」

「そんなことないですって。ちゃんと仕事してますよ？ね？」

いつも通りのやり取りに、織姫たちは顔を見合せて笑った。

離れ離れになってしまうと聞いたから心配したのだけど、これなら大丈夫そうだ。

「……心配しなくても、あんまりこっちに入り浸らないように見張っておくよ。」

「何よ石田。人が仕事しないみたいない言い方して。ヒドくないですか！？隊長！」

「何もひどくないな。当然の反応だろ。頼むぞ、石田。」

「ええー！隊長までそうやって言うんですかあ？」

「前科を考えてから物を言え！」

本当に、相変わらずで。

相変わらず過ぎて、織姫はまた涙が込み上げてきた。

「……出発は、明後日だったよね？」

「ああ。明後日の明朝だ。」

「……うわぁー。どうしても明後日なんだろう……。」

織姫が机に向かって深くため息をついた。

「……どうかしたのか？」

「お見送り、行けないの。……どうしても外せない試験があって。ごめんね。」

そのことか、と冬獅郎が笑った。

「見送りも何も、俺はむこうじゃ退位って扱いになってるからな。誰にも会わずに行くんだ。気にしなくていい。」

「…そうなんですか？」

雨竜が訊くと、乱菊が頷いた。

「そうなのよー。隊士たちも反発がすごくてね…こんなに若いのに引退って言って信じるわけないわよねー。」

なるほど、とチャドが頷いた。

「もう少しましな言い訳を思いつかなかったのかい？」

「ましも何も、総隊長からそういう風に言われちゃったんだ。…おかげで隊舎の居心地が悪い。」

「そんな…冬獅郎君は何も悪くないのに…」

隊首会での報告の翌日に十番隊の全隊士を集めて告げたのだが、それ以降何とも言えない視線が突き刺さるようになっていた。

「まあ、俺がいなくなったらすぐにましになるだろうからな。後の心配をしなくていいだけ気が楽だ。」

「…：勝手に呼びつけたんだ、後始末まで責任を持ってやってもいいだろうにね。」

「…：一死神の為にそこまでやれるほど、あちらは暇じゃないんだろ。」

雨竜の言葉に、少しだけ気分が沈む。

お前がそう言っているそれは、一護だというのに。

わざわざ現世まできたのもそのせいだ。

松本には、日番谷先遣隊の時にいろいろ世話になったから、と理由をつけたが…まあもちろんそれもあるが、一護に彼らの近況を伝えたいというのが一番大きい。

ごく自然に、今一護に言いたい事を聞きだす事が出来れば、と思うが自分はそこまで口が上手くない。

この事も、ひどく残念でならなかった。

それが表情に出たのだろうか、乱菊がポンツと肩をたたいた。

「隊士たちも、混乱してるだけですって。みんな隊長に感謝してます。…ね？」

「…わかつている。」

勘違いと残念さとが相まって、更に気分が沈んだ。

「あーいたいた。日番谷隊長、探したんすよ。」

「阿散井…？朽木に…斑目と綾瀬川まで…どうしたんだ。」

ガラガラと戸を開けて入ってきたのは死神姿の四人だった。

「どーもこーもないっすよ。瀧霊挺に居る時は忙しそうで全然つかまらないから、こっちにいるとき狙ってきたんです。」

「…それにしても、珍しいメンバーじゃない？」

乱菊が言う。

所属も性格もまるで違う。

なのに、見覚えがあるのはどうしてだったか…

「珍しいって…日番谷先遣隊のメンバーで今までのお礼言いに来ただけっすよ。」

恋次がガシガシと頭をかく。

日番谷先遣隊。

藍染が現世に送り込む破面に対抗するため、尸魂界から派遣された死神。

それは　もう、六年も前になる。

「…わざわざすまなかったな。」

「とんでもありません。…本当に、日番谷隊長には今までお世話になりましたから。」

ルキアがペコッと頭を下げた。

四人も加わって、話は盛り上がった。

メンバーがメンバーだけに、話すのは必然的に先遣隊の時の思い出

話で。

だからこそ、誰もがその違和感に気付いてしまった。いるはずの人がいないという違和感。

気付いてしまったら、もう目をそらす事などできなかった。

「……みんながいるのに、黒崎君がいないって……ヘンな感じがするね……」

会話が途切れたとき、織姫がポツリといった。

「全くだ。今頃どこで何をやっているんだか。」

王土だ。あいつは、王土にいる。

「本っ当！全く散々隊長に世話になっというてお礼も言わないでさー。」

礼を言わなくちゃいけないのは、俺達の方だろう。

言いたくても、言えない。

朽木が言いたかったことが、本当に理解できた。

真実を知ることが、どんなに苦しいか。

「ずっと連絡もよこさないで……たわけめ。」

理由があるんだ。あいつはずっとこっちの事を気にかけている。

「人の顔を覚えるのは苦手だと言っていたけど……まさか帰り道まで忘れてしまったのかな？ねえ、一角。」

あいつは片時も俺達の事を忘れていねえよ。だから、

だから、たとえ軽い冗談であっても、あいつを責めないでくれ

「……日番谷隊長？どうかしましたか？」

一角の声に、冬獅郎は顔を上げた。

「隊長、任せといてください。一護のバカが帰ってきたら隊長の分まで絞めておきますからっ！」

「ちげーよ、馬鹿。」
さつきから微妙に合わない会話に、深くため息をつく。
何を言おうかと考えて、そういえばまだこの面々に言っていない事を思い出した。

「……今まで、ありがとな。」
自然と言葉が口を衝いて出た。

「お前らと一緒に戦えて、よかった。感謝してる。」

「…日番谷隊長…」

「また、いつか一緒に戦おう。…な？」

そういうと、誰もが笑った。

「はい…！」

「モチロンです。」

「ああ。」

「そのあとで、手合わせしてくださいね。」

「絶対ね！」

「日番谷隊長の卍解は美しいから、よろこんで。」

「死神と共闘する約束か…」

「約束つスよ。」

約束。

約束さえあれば、また会えるような気がした。

そしてその時は、一護も一緒だという不思議な確信もあった。

それからもあつという間に日は過ぎて。

すぐに、その日はやってきた。

「来ていたのか。」

「…当たり前じゃないですか。誰だと思っているんです？私の事。」
隊舎内にあてがわれた、冬獅郎の私室。

その部屋を出たところで、乱菊は待っていた。

「…隊首羽織、もう返上されたんですか？」

死覇装のみの姿に、乱菊は目を細めた。

この姿を見るのは、一体いつ以来の事だろう。

「ああ。昨日総隊長に挨拶をした時にな。」

久しぶりにこれだと落ちつかない。

そう言った冬獅郎に、乱菊は笑った。

「最初は、これ着てると落ち着かない…って言ってたじゃないですか。」

「…そうだったな。」

隊長としてまだまだ駆け出しだったころ、そう言えばそんな事を言っていた気がする。

「…今じゃ、あれが当たり前だったんだな。」

「…ええ、私だって、その姿の隊長を見てるのは落ち着きませんか。」

未だに、十番隊隊長は日番谷しかいないと、乱菊は思っていた。

「松本。」

「…はい。」

「…いつか、ここにも新しい隊長が来るだろう。…それが誰であれ…お前であれ、必ずそいつを受け入れてやれ。…俺しか隊長がいな…
いって思っていてもだ。わかるな？」

考えを見透かされたようで、乱菊は目をそらした。

「お前が受け入れれば、隊士の誰もが受け入れてくれる。俺の時も…
そうだっただろう？」

まだ子供じゃないか。

あんなのがうちの隊長だなんて。

総隊長はいったい何を考えておられるのか。

どうせ私たちは“死んだ隊”なのよ。

就任当初の影口は、今でもはっきり思い起こす事が出来る。

あのとき挫けないでいられたのは、すぐ後ろを乱菊が付いてきてくれていたからだ。

「……隊長であることは、辛い事ばかりだ。だから、隊士たちが受け入れてくれないと、務めきることもなんて到底できない。……頼むぞ。」

そう言つと、乱菊はしばらく黙っていたが、やがて力強く頷いた。

「はい!!」

冬獅郎はそれを見て笑った。

今までみたいに大人びたものではなくて、本当の見た目相応の笑顔をだつた。

「じゃあな。」

「はい。…それでは。」

冬獅郎は、全てを断ち切るように瞬歩でその場を立つた。

すぐにその霊圧は鬼道で完全に消され、後を追うことも存在を感じる事も出来なくなつた。

乱菊は、しばらくそこに立ち尽くしていた。

やがて歩き出し、ふと振り返る。

主を失つた部屋は、それでも朝日を浴びてほほ笑んでいるように見えた。

a n d a p a r t i n g t i m e c o m i n g (後書き)

タイトル日本語訳は「そして別れの時が来て」

第二章完結です。

それにしても前の話は分量もさることながら雑さが目立つ…

相当あわてて書き上げたんですよ、連続更新記録達成のために
やっぱり丁寧に書けばよかったと後悔中です。

そのうち手直するかもしれません。

それはまた活動報告でお知らせします。

さあ、いよいよ冬獅郎は王族特務に入隊しました。

第三章はその生活ぶり…というわけでもなく、少し時間を戻りたい
と思います。

ですが、その前に外伝を一本上げます。

それでは、感想などお待ちしております。

S 0 1 大切 前篇（前書き）

一 護が王土に来た二年後の話です。

・ 一 護視点

・ つまり王土でのお話。

S 0 1 大切 前篇

it hasn't stopped raining yet

迷いの檻に囚われて 先に見えるものは無く
足元と背に感じるのは 過去がさし出す記憶の欠片

伸ばした手に光を掴み 前へ進む事を望めば
振り切るべきは迷いと記憶

ひらけた世界に戸惑って 目が眩んでも決して逸らすな
重責に足が竦んでも 自ら背負って歩いて行け

大切なことを見極めて 戦い抜く覚悟を背負おう
刀は決して下ろしはしない

この刀こそが俺の意志

ここに来てから、もうずいぶん経つ。
少しは生活にも慣れた。

政治の話も、少しはわかるようになった。
だからこそなのかもしれない。

俺はここにはいけねえんだ・って、異質な存在なんだ・って、
前より強く感じるようになった。

現世とも尸魂界とも違う服を着て、どこにいても縁がなかったはずの政治の話をして

虚と戦うこともなくなつて

そんな俺が、俺じゃねえような気がして。

だから、俺はここにいちやいけねえんだと思つた。

俺が、王になんてなれるわけがねえ。

今まで何一つ完全に護れなかつたじゃねえか。

俺の中のもう一人の俺でさえ、俺を王と認めてねえのに。

浦原さんが言つてた。

霊王は、楔なんだ・つて。

それを失えば、世界は容易く崩れるんだ・つて。

そんな存在に、なれるわけがねえだろ。

そう、思つた。

王土で3度目の正月が近づいていた。

そんなある日、久しぶりの光景を見た。

3日ほど前から大雪が続いていて、何日かぶりに晴れた朝だった。

細氷 ダイヤモンドダスト …

それは、もうずっと会っていない仲間を思い出させるもので。

一瞬目を見張つて、そしてすぐに視線を落とした。

直視できなかつた。

だけど、次に目に入ったのは池に張つた氷で。

逃げるように逸らした目に映つたのは、赤髪の護衛士の後ろ姿。

そこで耐えきれなくなつて、部屋に入つて戸を閉めた。

戸にもたれるように腰を下ろして、ぼんやりと天井を見上げた。心の奥底にずっとあったのに、気付かないフリをしていた扉。ずっと閉じてあったその扉が、ついに開いたんだとわかった。

雨は、まだ止んでいなかったんだな……

涙は流れなかった。

それよりも溢れ出たのは、何よりも強い願いだった。

謝りたい。　もう一度、逢いたい。

ひどいことをした。

信じてくれてたのに、裏切っちゃった。

後悔がどうしようもなく胸を突いて、表情がひとりで歪む。

もし、今、逢えたら。

謝って。赦してもらえなくても謝って。

ちゃんと全部説明して。

そして、　そして？

無理に決まってるじゃねえか。

会うことは可能かもしれねえ。

だけど、それでも、事情を説明することはできない。

話すことを許されないんじゃないねえ。

ただ自分が怖れているだけだ。

受け入れられることも、受け入れられないことも。

どっちであっても、俺はきつと耐えられねえ。

自嘲のようなため息を吐いて、再び視線を上げた。いつの間にか視線を落としていた。

どのくらいそうしていたのかわからない。

だけど、誰も呼びに来なかったという事は、それほど時間は経っていなかったんだと思う。

それでも、いくらなんでもおかしいと思ったのか、扉を叩く音がした。

「おうい、一護。入るぞー。」

ゆっくりと正面に視線を移すと、返事もしていないのに扉が開き、親父が顔を覗かせた。

「一護？つて、おい、どうした。顔色悪いぞ。」

そうだろうか。

ぼんやり考えて、ふと額に手を当てる。

それほど熱い感じはしなかった。

「熱はねえみてえだけど」

「そういうことじゃない。ホラ、立て。」

呆れた様な顔をして差し出された手を無視して座ったまましていると、親父も少し離れて座りこんだ。

「帰らせてえか。」

疑問ではない、限りなく断定に近いその言葉に、はっと親父の顔を見た。

親父も真っ直ぐに俺を見ていた。

「帰らせてえなら帰れ。俺は止めねえよ。」

言われた意味がわからない。

「何、言つて」

「そういう顔してる」

「違……」

「何が違う。」

「……」

「違わねえだろ」

「……………違う。」

なんだか、無性に腹が立った。

違えだろ。

俺は別に帰りてえんじゃない。

そう思っているのは、俺じゃねえ。

「親父が、俺達に帰って欲しいんだろが。」

そう言つと、親父は鳩が豆鉄砲を食つたような顔をした

「俺にも、それで俺に遊子と夏梨を連れ帰って欲しいんだろ…違うか？」

それが真実だというのは、答えを聞かなくてもわかった。

「そういう顔、してるぜ。」

返事を待たずに続ける。

「俺がさつき思ってたのは……………もう一度だけ逢いたい、逢ってちゃんと謝りたい　それだけだ。別に帰りてえなんて思ってたねえ。それに、逢えたとしてもまたこっちへ帰ってくる。……………俺の帰る場所は、もうここだ。」

「……………お前……………」

「遊子も夏梨もそう言うだろうさ。…俺らは自分の意思でここへ来たんだ。今さら帰れとか、巻き込んだ本人が言うんじゃないよ。」
それは本心だった。

俺の帰る場所は、もう空座町でも、尸魂界でもねえ。…王土^{こゝろ}だ。

「それからもう一つ。」

ピシッと親父を指差す。

「顔色悪いのは俺だけじゃない。……………テメエもだ。」

前と比べて　王土へ来たばかりのころと比べて、ずいぶん痩せた。

そんなことに気付けないぐらい、俺はいつぱいいつぱいなわけじゃねえ。

そういう宣言も込めた。

それがわかったのか、親父はフツと笑った。

「お前に言われるとはな。……最近、よく言われるようになったよ。どいつもこいつも心配しすぎだ。このぐらいでがたが来るようになやわな体してねえのに。」

「……忙しいのか。」

「まあな。正月が近いんだから仕方がない。」

「……」

俺がもつとしっかりしていれば手伝えるのかもしれない。

だけど、ここでは俺はあまりに無力で。

足手まといにしかならない事はよくわかっていた。

何故だか、無性に悔しくなった。

「……親父。」

「ん？」

「忙しいところ悪い。……だけどさ、勉強教えてくれ。俺もつと勉強する。もつとたくさん。……凜さんに教えてもらってるだけじゃ追いつかないぐらい。」

親父の方を見ないで言う。

照れくさいとかそういうのじゃなくて、前を見ていたかった。

「いつかまた逢えるにしろ逢えないにしろ、その時までには俺は胸張っていられるようになりてえ。ちゃんと、いなくなっただけの事はした、心配かけたけどそれだけの、それ以上の事をしたって言えるように。」

だから、と続ける。

「俺に出来る事はなんだったです。もう弱音吐かねえし、迷わねえ。

……やっと、決心ついた。」

そう、俺にできる事はそれしかない。

そんな当たり前の事に気付くまで、何で二年もかかっちゃまったんだろ。

あーあ、時間がもつたいねえ。

そんな時間があったら、もっと別の事に使っていればよかった。

「…頼む。教えてくれ。」

「駄目だ。」

思いのほか早い返答に、それも予想に反したものにぎょつとして親父の方を見ると、アイツはにやりと笑った。

「…なんて、言えるわけねえな。わかった。見てやるから、しっかりやれ。」

「…おう。」

はめられた事が少しだけ気に入らなくて、返事が少し突っかったものになった。

立ち上がり、自分で封じていた扉を開ける。

ダイヤモンドダストはすでに終わってて、

池に張った氷も溶けかかってて、

見かけた護衛士もすでに交替してて。

先ほどまでと全く違った風景に大きく息を吸った。

そう。まだ逢えない。

俺がもう少し強くなるまで、待っていてくれ。

必ず、強くなるから。

そう心の中で誓った。

俺は、王になるよ。

必ず、なつて見せるから。

S 0 1 大切 前篇（後書き）

タイトル（一行目）日本語訳は「雨はまだ降りやまない」
教科書で見かけた例文をそのまま引用しました。

楽しかったです。一護の一人称小説。

ちなみに、ダイヤモンドダストはものすごく寒い地域でしか起きませんから、一護の見たものはきつと勘違いです（笑）

サブタイに書いてある「S 0 1 大切 前篇」というのは

S 0 1 side story（外伝） 0 1 の略

大切 この外伝の名前

前篇 この外伝の前篇

という意味です。

つまりこれからも外伝が増えるだろうと予測してコードのようなものをつけました、という感じですが。

もっとも、役立てるのはおそらく私だけでしょうね

ところで、一護たちの住む王宮ですが、私的には中国古典の世界をモデルにしています。

本文中に分かりづらい描写は避けるようにしますが、なにとぞマニアなものでそこはご了承ください。

それでは、感想などお待ちしております。

S 0 1 大切 中篇（前書き）

二十二話（前篇）の4年後からはじまります。

S 0 1 大 切 中 篇

rolling / rolled

「冬獅郎を、王族特務に……?」

一護がそう言ったのは、ある秋の日だった。

はい、と頷いたのは桐生で、そのまま数枚の書類を示す。

「私以降、120年近く王族特務への徴用は行われておりません。慣例では50〜60年に一度となっておりまして、これは異常と言えます。隊首会は藍染惣右介の暗躍により長く半数を欠いておりましたが、その欠員も埋まり、今も三人を欠くとはいえ後進も育ってきているとのこと。徴用するのであれば資質・能力ともに現十番隊長がふさわしいというのが隊長の考えですが、殿下の方が彼の事をよくご存じでいらっしゃいますので、こうして意見を伺いに参った次第でございます。」

「……………そうか。」

二人がいるのは、一護が仕事に使っている部屋だった。

王土に来て六年、本格的に政治を学び始めてから四年が経ち、先年に倒れた一心に代わって少しずつその責務を担うようになっていた。

「……………お茶飲んでいかないか?休憩にする。」

一護がそうやって言うのは、きまっぴら個人として意見を言いたい時だった。

それを察して桐生が笑う。

「…なら、そうさせてもらおうわ。」

「…まだ、敬語を使われるのに慣れない?」

桐生が笑い混じりに尋ねると、一護は深くため息をついた。

休憩の時など仕事をしていない時は身分にこだわって接する必要が

無い、というのはこちらの慣習である。

裏を返せば、仕事中は身分をわきまえて行動しろ、ということではあるが。

一護もそれに則り　というより仕事中の部分に関しては則らされ、
どうにかこうにか慣れてきたのであった。

「…落ちつかないんすよね。なんか…ヘンな感じ。掟とかやっぱり好きじゃねえし。」

尸魂界に居たときに感じていた違和感。

それは隊長や副隊長に過剰なまでに敬語を使う死神たちの姿だった。
それに加えて、あちらには貴族制度もあった。

それでも気にしないでこれたのは、あのころの自分はその外側の人間だったから。

注意される事はあっても咎められることは無かったのだ。
でも、今は違う。

自分は内側の人間なのだ、認識せざるを得なくなっていた。

「早目になれなさいな。どう足掻いても変わらないのだから、そうやって考えるだけ無駄よ。」

バツサリと切られて、一護はまた溜息をついた。

それぐらい、六年もいればわかる。

「……努力はしてます。でも、三つ子の魂百までって言うじゃないっすか。」

「それもそうね。…で、日番谷君だっけ？彼のことだけど。」
本題をきりだされて、一護は思案顔になった。

「……冬獅郎は、幼馴染と…あと、血はつながってないけど、おばあちゃんみたいながいるんすよ。」

「ええ。調べてあるわ。」

「…冬獅郎が死神を目指したのは、その二人を護りたいから…今は、多分もつとたくさん護りたいんだろうけど。でも、元々はその二人から始まるんです。…アイツが、こっちへ来るとは思えない。」

桐生は黙っていた。

「…それに、多分だけど…俺の事を知ったら、アイツはこっちへ来ると思う。何もかも捨てて。…俺は、そんなことしてほしくない。」

「アイツには、あっちに居ることが必要なんだ。」

「一護君。…一つ、いい？」

「何すか？」

「……その日番谷君は、おばあさんたちの事が大切なよね？なのはどうして、君の事を知れば彼がこっちへ来ると思うの？」

「一護は一瞬キョトンとし、言われてみればと考え込んだ。」

「…どうしてだろ。…わかんねえけど……あいつは優しいから、かな。」

「…優しい？」

桐生がそう言うと、一護は頷いた。

「多分、アイツは…俺がこうしてるってわかると思うんです。……」

「こっ…身分とか、掟とか、そういうのに……」

上手く言えずに考え込んだ一護に、桐生は助け船を出した。

「…絡め取られてる、とか？」

「…そんな感じですよ。…多分、アイツは敏いから分かると思う。それで、わかったら、黙って放っとくような奴じゃないから。」

桐生はそれを聞いて、考え込むそぶりを見せた。

「……それじゃだめなの？」

「………え？」

「だって、別にそれでもいいんじゃないの？王族特務に来る理由なんて、死神になる理由と同じくらい人それぞれよ。…日番谷君の理由がそれであったとして、何か問題があるわけ？」

「さも当然のように言われて、反論が口を衝いて出た。」

「問題って…だってそれじゃあおかしいだろ。……こんな、あいつが来るってわかってやるような確信犯みたいな真似」

「でもそれは君の都合よね？日番谷君が真実を知って、その上で何を選ぶかなんて、例え初めからわかっていたとしてもそれは彼の意

志よ？……それは、君が身をもって体験してきたんじゃないの？」

「……どういう意味ですか？」

身をもって体験したといわれて、訳がわからなくなる。

俺は、そんな風な目にあっただろうか……いや、あった。

桐生が口を開こうとするのを遮って、一護は続けた。

「…藍染の事を、言ってるんですか？」

あれは、一護にとっていまだトラウマとなっている事象だった。

生まれたときから…自分の人生の全てがあいつの掌上にあったなんて、考えただけでも怖気がする。

自然と声が硬くなった一護に、桐生は頷いた。

「…たとえあれの掌で転がされていたとしても、それでも君は自分で選んで行動して、ちゃんと取り戻したでしょう？…途中まで誰かの読み通りだったとして、何が悪いのよ。君は、それでも自分で選んで行動して来たって、胸張って言えるはずよ。」

「…それは、そうだけど、だからこそなんだ。……同じ目にあって欲しくない…ましてや自分が転がす側になんて…」

「ほら、また自分を庇う。」

きつい一言に一護は肩を落とした。

わかっている。

どうして自分がこういう風に言うのか…

それはアイツに同じ目にあって欲しくないからじゃない。

自分を転がす側に…藍染と同じ側にしたくないからだ。

自分には、とうにそんな資格は無いってわかっているのに。

「…確かに、俺は為政者として、民の意志を誘導します。俺はすでに転がす側の人間だ。そんなことは、わかっている…！」

やりたくないとか心のどこかで思いながら、それでも自分は何度も繰り返してきた。

汚い事だと自分を罵りながら。

でも、それはそういう自分をいさめる自分がいるという事で、…そ

れが自分の心を軽くする一種の防衛だということもわかっていた。

「…あのね、こう考えてくれない？……君一人で背負わなくていいって。」

「……？」

それはどの事に関して言っているのだろう。

今俺が一人で背負っていることなんて、あまりにも多すぎる。

「…王族である事も、死神代行であることも、藍染に利用されたことも、家族の事も…君が今一人で背負いこんでるものの全てを、曝け出せる相手を見つけてほしいの。」

何も言わないでいると、桐生は続けた。

「そういう人が傍に居るってだけでいいのよ。別に曝け出す必要はない。でも、そういう人が傍に居るだけでずっと楽になるのは、わかるでしょ？……君はこっちに来てからよくやってる。ううん、こっちに来る前からずっとね。いろんな目にあって、いろんなことを体験して。それでもやってこれたのは、あの頃の君には遠慮なく頼れる仲間がいたからでしょ？」

そう言われて、頷く。

何度も挫けそうになって、そのたびに立ち上がってこられたのは仲間がいたからだ。

何度も死にかけて、それでも生き残れたのは、仲間がいたから。

「こつちでも、そんな仲間を見つけてほしい。でも、そんな時間は君に無いじゃない。時間があっても、今となってはもう不可能。…すでに身分が間に立ってしまったから、一対一で誰かに向かい合うことなんてできないし、向かい合ってもらうことなんてできないでしょ？……だったら、もういっそ頼れる仲間に遠慮なく頼っちゃってほしいの。…君は、私たちにも全てを話すつもりはないようだから。」

そう言われて、一護は視線をそらした。

…そういえば、誰かに頼る事を、いつからか無意識に拒んできた気

がする。

それは別に信用していないからではなくて、自分が抱えている違和感に、触れてほしくないからだった。

いつか王位を継がなくてはならない自分にとって、現世で生まれ育った事は大きな障害になっていた。そんなこと認めたくない。

あつちに居た頃の自分を、仲間を否定するようなそんな事を認めたくはない。

だからこそ、一人で抱え込んだ。

多分きつと、俺が障害を抱えている事に気付いているのは、桐生だけじゃない。

もつとたくさんの…ひよつとしたら俺に関わっているほとんどの人が気付いているのかもしれない。

それでも、触れてほしくなかった。

そんな風に思っている自分を、見てほしくなかった。

だからなおさら、仲間になんか自分を見てほしくなかった。

そつと手に取って慈しむ真似事をして、内実土足で踏み躪っているような、そんな自分を。

冬獅郎を、ここに呼んではいけない。

内なる虚ではないもう一人の自分が叫んだ。

あいつは、今の俺を軽蔑する。

掟を真つ向から踏みにじった自分が、こんな風に掟に囚われているのだから。

仲間を誰よりも大切にしていた自分が、その記憶を否定しようとしているのだから。

俺はまだ、あいつらの前ではあの時の俺でいたいんだ…！

「……その話は、俺が反対したとしたらなかった事になるんですか

「？」

一護は低い声で聞いた。

その心をそのまま表しているようだった。

「…そうね。王位継承者のお言葉とあれば、なかつた事にせざるを得ないでしょうね。」

はつきりとした桐生の言葉が、心に突き刺さる。

どちらにせよ、自分はもう王族で、そして冬獅郎の運命をその掌に握っているのだ・と言われている気がした。

俺は、どうしたらいいんだ…

言葉もなく頭を抱え込んだ一護に、桐生は何も言わなかつた。

S 0 1 大切 中篇（後書き）

タイトル日本語訳は「転がし、転がされ」
…なんか遊んでるみたいなたイトルだなあ……

一護暗ツ！

というか悩みが尽きない子ですね。

あまりにも暗いので私の本能が一人称小説を拒否しました

ということではS 0 1中篇です。

仲間が臣下になるとか絶対拒んだと思うんですよね。

で、こんな風なやり取りがあつたらいいなあ……って。

あ、桐生さんは一護のためを思つて言っているのであつて別に意地悪しているわけじゃないです。念のため。

それでは、感想などお待ちしております。

S 0 1 大切 後篇（前書き）

二十三話の終わりの二日後から始まります。

S 0 1 大切 後篇

don't misread, don't mistake

トントン、と部屋の戸を叩く。

一護達家族は、王宮の東にある建物で暮らしていた。

東宮と呼ばれるその一帯は、代々皇太子　つまり次の霊王とその家族が暮らす場所らしい。

四人の部屋はそれぞれ隣り合っており、一護は仕事が終わってから一心を訪ねたのだった。

「起きてるぞー。」

霊圧で誰だかわかったのだろう、一心が気楽な返事をする。

扉を開けると、一心は寝台の中で身を起こしていた。

「…どうした、暗い顔して。」

無言で首を振ると、まあ座れ、と寝台横の椅子を示した。

一護は仕事が終わるといつも真っ先に一心を訪ねる。

それは一心から政治を学ぶためであった。

聡明だ、天才だと周りから褒めそやされた若かりし頃は、（今でも

疑わしいとはいえ）どうも嘘ではないらしい。

こちらの事を学ぶにつれ、その経歴に驚かされる事は多々あった。

そして、それならと一心に教えてもらうことにしたのである。

もちろん一護の勉強を見てくれる人はいるのだが、よく見知った

父親の方が色々都合がいいのは確かだった。

例えば、一心なら現世の制度と比べて説明することができる。

比較することで学習がしやすくなるのは、政治も同じだった。

そして何より　認めたくはないが、父親の傍の居心地が良かった、

というのも大きい。

なにかと気苦労の多い政治の世界に身を置く一護にとって、家族と

いる時間は僅かなくつろげる時間にもなった。

「……なるほどな。それでそんな暗い顔をしていたわけだ。」

二日前に聞いた冬獅郎の話を見ると、一心はそう言った。

「……一護、お前はどうしたいんだ？」

しばらく考えて一心が言う。

「一心はいつも自分の意見を言うより前に、必ず一護の意見を言わせた。」

それが拙いものでも途中で遮る事は無く、最後まで聞いてから自分の意見を話し、一つずつ確かめていくのが一心のやり方だった。

「……俺は、……冬獅郎が来てくれたら、やっぱりすげー心強いと思う。……でも、そのせいで冬獅郎が少しでも不都合を被るのは嫌だ。」

来てほしいと思う。でも同じぐらい来てほしくないとも思う。「どうしたらいいのかわからない、と肩を落とした息子を見て、一心は内心溜息をついた。」

こんな苦労も、全部自分が背負わせたのだ、と。

だがそれは表情に出さず、続いて自分の意見を言う。

「俺は、……彼に来てもらうべきだと思う。お前には、今少しでも味方が必要だ。……それは、わかるだろう？」

一護は黙って頷く。

「確かに、こっちに来ることで彼が失うことはたくさんあるだろう。だけどな、こっちに来ることで得られるものもあるんだ。お前だって、こっちに来ることで失ったものと、得たものがあるだろう。」

一護は、また黙ってうなずいた。

「難しいけどな。……でも、お前が今一番に考えるべきなのは、自分の事だ。お前は、いずれ王位を継いで王土や尸魂界、現世の頂点に立つんだ。お前の身はお前だけのものじゃない。お前に直接かわりのない人のものでもあるんだ。」

一護はまた小さく頷いた。

「……………お前は、良い王はどんなものだと思う?」

問われて、一護は考え込んだ。

この問答は嫌いだった。

一心だけでなく様々な人が折に触れて聞いてくる。

それはまるで 一護がどんな王になるかを試しているかのようで、品定めされるみたいで嫌いだった。

「…民を護る事が出来る王。」

そして一護はいつもそう答えた。

それしか答えが思いつかなかったし、それが多分自分にとって一番よい在り方だと思ったから。

「護るためには、力が必要だろう。…力はなにも武力だけじゃない。王が民を護るために使うのは、知力や権力だ。それにな、お前を護る力も必要なんだ。護り続けるためには、お前が安全であることも必要だ。」

一護は黙って聞いている。

「力を振るえば、犠牲が付きまとう。それを背負うのも、王の役目だ。……………少しの犠牲を払って多くの利益を得る事も、時には必要だ」というのはもうわかるだろう。」

一護はまた頷いた。

「…今は、冬獅郎君という犠牲を払って、その先で得られる利益を得る事の方が大切なんじゃないか?」

一護は頷かなかった。

頷かずに、黙って考えていた。

「……………親父。」

「どうした。」

「俺にはさ、やっぱり覚悟が足りてねえんだよな。」

それは別に問いかけと言うわけではなくて、確認と言う感じだった。

「…そうだな。」

「仲間を犠牲にして、そうまでしてでもよい王でなくちゃいけない

のに、やっぱりためらっちゃう。」

「ためらう事は必要だ。」

「……わかってる。でも、本当に必要な犠牲をためらうようじゃ、だめなんだろう？」

「……ああ。」

賢くなったと思った。

強くなったと。

だから、一心は黙って息子を見護った。

「払う犠牲を最小限に済ませる事、必要な犠牲は惜しまない事、犠牲にした全てを背負う事。……凜さんが俺に言ったんだ。私が思う

良い王はこうよ・って。」

「……そうか。」

彼女は聡明だ。

まだ若いが、必要なことはきちんとわかっている。

「……俺も、そうだと思う。……覚悟が、必要なんだよ。」

覚悟しなくちゃいけない。

……そう、覚悟を。

赤い髪の仲間の姿が、脳裏に閃いた。

「…………曳船さんのところに、行ってくる。」

一護はそう言っ立ち上がった。

「……おう。」

そう言っ一護を見送った一心は、扉が閉まるのを待つ溜息をついた。

「……強くなったもんだよなあ……なあ、真咲。」

小さく呟く。

生まれた子は、きっと藍染に狙われるだろう。

そんなことは、わかっていた。

生まれてこない方が幸せなのじゃないかと思った。

今なら父親失格だと思う。

それでも、当時は本気でそんな事を考えた。

それでも、一護が生まれたとき、どんなにうれしかったか。どんなにうれしくて、そしてどんなに悔しかったか。

これからの事なんて何も知らないで、ただ母親の傍ですやすやと眠るわが子を見て、悔しいと思った。

自分じゃ護りきれないとわかっていたから。

何も知らせずに、普通の人生を歩ませてやりたい。

普通の、幸福な人生を。

それすら叶えてやれない自分がひどく悔しかった。

それでも、息子は思ったよりもずっとたくましく育った。

今ですら見えない伸びしろを持ち、考えられないほどの速さで成長していつている。

それが誇らしくもあり、そして僅かな慰めでもあった。

「……曳船さん、ちょっといいですか？」

仕事が終わったところの桐生をつかまえる。

「どうしたの？」

小首をかしげた桐生に、一護は言った。

「冬獅郎に、伝えてほしい事があるんです」

「わかった。…任せときなさい。必ずひっこ抜いて見せるから。」

ドン、と胸を叩いた桐生に一護は慌てた。

「ちょ…むりやりはダメですよ!?ちゃんとあいつの意見を尊重してくださいね!？」

「わかっているわよ、そんなことぐらい。」

そう言っただけ桐生は苦笑する。

いい表情になったと思った。

目の前に立つ将来の主は、やはり悩んでいる顔は似合わない。

覚悟に満ちた、優しい顔が一番似合う。
彼をそんな表情にできるまだ見ぬ将来の仲間を想い、桐生は微笑んだ。

S 0 1 大切 後篇（後書き）

タイトル日本語訳は「見誤るな、取り違えるな」

ということでも外伝01完結です。

一護が覚悟していく道のりをちょっとでもかけたかなあと思ってお
ります。

苦勞症ですね、彼は。

ところでこの話、まだ誤字脱字のチェックをしていません（汗
見つけ次第訂正しますので、（今ちょっと急いでるんで）そこは見
ないふりをしておいてください。

それでは、感想などお待ちしております。

] f o u r p e n d u l u m s a r e b i n d W i t h r e g u l i

第三章が始まります。

時間軸は第二章の六年前、第一章と同じです。

Four pendulums are bind with regular

狂わされた振子の4つは

その立場ゆえに誰よりも早く真実を知る

対立する願いの狭間に

身を置く事を定めとして

もとより掟に身を置けど

時に苦痛に引き裂かれ

かつて破りし宿命とあれど

それを背負うは己より無し

しかし振子は全てを掴み

永劫の葛藤に苛まれる

家族も友も

仲間も部下も

裏切る行為と知りながら

世界を救った少年を

世界と切り離さぬために

其が拓けきか細き道が

何処いどこへ向かうものなのか

知れりし者は今にあらずや

t h r e e
f o u r
p e n d u l u m s
a r e
b i n d
w i

four pendulums are bind With regular

タイトル日本語訳は「掟に縛られる四つの振り子」

第一章や第二章と同じく詩の形式にさせていただきました。

それでは感想などお待ちしております。

Midnight Invader (前書き)

第七話と第八話の間の話です。

midnight invader

その時、白哉は自室で書き物をしていた。

藍染が討たれてひと月が経ち、ようやく尸魂界も平穏を取り戻しつつあった。

そう、昨日までは。

昨日の晩、夜一が彼らに伝えたのは“黒崎一護の失踪”というにかには信じがたい知らせだった。

白哉は彼らの搜索の為抜けた副官の穴を埋めるために深夜まで仕事をし、ようやく帰って来たのだった。

そして、また自室で書き物をしている。

明日も早いと分かっているが、これだけは今日仕上げたいと思っていた。

仕事をしているのではない。

朽木家は、五大貴族の中でも特に歴史の編纂に優れており、白哉は激務の合間を縫って一連の事件の事を書き記していたのだ。

そしてそれもひと段落し、筆を置こうとした、その時だった。

「何者だ。」

低い声で誰何する。

その手はすでに傍らの千本桜にのばされていた。

感じたのは、ただの気配。

霊圧ではない。

それはひどくかすかで、意識すればするほど掴みどころが無くなるものだった。

気配のもとはおそらく、…左後ろの壁際。

これほどまでに気配を断てるものを、白哉はほとんど知らない。ただ、猫のような気配ではないから、夜一で無いのは確信した。

でもそれ以上は。
敵か、それとも

だが、警戒し、息をつめた白哉の耳に入ったのは、意外な声だった。

「…………お見事。さすがは朽木家歴代当主のうち最強と謳われるだけはあるわね。」

聞き覚えのある声にハツとして振り向くと、壁にもたれて立っていた人影が手を振った。

「久しぶりね。白哉君。…………ほとんど一年ぶりかな？」

どうして今ここに居るのか、どうやって警備の厳しいこの家に入り込んだのか。

訊きたいことは山ほどあるが、白哉は呆気にとられて名前を呼ぶことができなかった。

「桐生…………」

手を振って微笑んだのは、かつて姉のように、そして師として慕った、曳船桐生だった。

普段の彼からは考えられないほど呆けた顔をしている白哉を見て、桐生は苦笑した。

外見はすっかり変わってしまったけれど、こういうところはまだよく知っているあの頃のままだ。

そんな事を思つて、静止している白哉に声をかけた。

「いつまで呆けてるの。話、始めちゃうわよ？」

白哉はそう言われてはっとする。

「どうして…………ここに…?」

「陛下のお遣いに来たの。警備をどうやって誤魔化したかは聞いても無駄よ？私の十八番なんだから。」

「……………」

どちらも全く答えになっておらず、白哉は無言を通した。

「で、話なんだけど、いい？」

白哉が頷くと、桐生は壁から背を離した。

「付いてきて。残りの四家は呼んであるの。」

残りの四家、とは旧五大貴族の事だろう。

王土では未だに志波家も重んじられている。

数千年続いた家格は、そう簡単に落ちるものではない。

「どこへ？」

問いかけた白哉に、桐生はちらつと笑った。

「総隊長のところよ。大事なお話があつてね。さ、行くわよ」

そういつて歩き出した桐生に、白哉は軽いため息をついた。

どうやら、まだもうしばらくは眠れないらしい。

その話は何であれ、 おおよその予想は付いているが 明日の

為に早く睡眠をとりたいと思った。

まだまだやるべき事は山ほどあるのだから。

「総隊長殿、そして各家のご当主殿。急に御呼びたてして申し訳ございません。主上より至急の命を預かりましたもので、このような時間にお集まりいただきました。」

桐生が案内したのは、一番隊隊舎内の一室だった。

少し探ると、強力な結界が張られているのがわかる。

「……して、霊王陛下の命とは？」

口を開いたのは、口ひげを蓄えた九頭柳家の当主で、桐生はそれに頷いた。

「その前に、一つお聞きいたします。総隊長殿、四楓院殿、朽木殿、志波殿についてはもちろんご存じでしょうが、九頭柳殿、蓮杖殿、……黒崎一護という少年をご存じでいらっしゃいますか？」

その問いに驚いたのは問われた二人ではなく、むしろ元柳斎と白哉だった。

藍染との戦いについて聞かれると思ってだったが、一護の事から真っ先に聞かれるとは思わなかった。

嫌な予感がする、と白哉は拳に力を込める。
失踪について王家が関わっているとなれば、……何があるかと、自分たちに手出しは出来なくなる。

「…聞いてはおります。霊力の高い少年で、身の丈ほどの大刀を背負った、オレンジ髪の死神代行。さきの戦いにおいても並ならぬ活躍見せた。…耳にしたところによれば、昨日家族とともに行方を眩ましたそうですが。」

今度は蓮杖家の当主が口を開き、九頭竜も同意した。

「私も聞き及んでおります。…何でも、朽木殿と刀を交えた事もあるとか。遠くから一度だけ見たことがあります。話とは違つ印象を受けて驚きました。…あまりにも、普通のように。…」
彼らもまた、驚いているように見えた。

「しかし……なぜ、霊王陛下がその少年のことを？」
蓮杖が言つと桐生は頷いた。

「……行方を眩ました、となつておりますが、……彼らは今、私どもの…ひいては霊王陛下の保護下にあります。」
総隊長が珍しく目を見開いた。

白哉は訳がわからず立ち尽くしている。

その一方で、夜一と空鶴はずつと目を閉じていた。

まるで何かを恐れるかのような、およそ彼女達らしくない行動に気付くものは、誰一人としていなかった。

それほどに、誰もが桐生の次の発言に気を取られていた。

「陛下の保護下に？ いったいなぜ。」
蓮杖が促す。

「それは…」

midnight invader (後書き)

タイトル日本語訳は「真夜中の侵入者」

ということまで時間軸を戻しました。

少しだけ触れてきていた、白哉たちが一護の出自を知った時の話です。

そしてついに登場オリキャラ。

まあ、第二話にもいるんですけどね。

微妙に宣言破ってるじゃんとか言ってたのはこれです。

紹介する暇がなさそうなので以下キャラ設定

九頭柳さん

四大貴族、九頭柳家の当主。

口ひげがある、見た目四十過ぎぐらいの人当たりの良いおじさん。

五大貴族の当主の中で一番年上。

蓮杖さん

四大貴族、蓮杖家の当主。

五大貴族の当主の中で一番若い。

二人とも名前は決まってるません。

なんならこの名前使ってたかバンバン言って下さい。

何せこの名字決めるのに一時間以上かかってしまってます…

一応由来はあります。

それはまたおいおい。

それでは、感想などお待ちしております。

u n t o l d t r u t h (前書き)

二十六話の終わりと同じ時から始まります。

白哉は桐生の話を聞いて凍りついた。

まさか。そんなことあるはずがない。

そう思つて、だが心のどこかで納得した。

あの霊力、計り知れない伸びしろ。

そして何よりあの気質。

思えば、あの男は王家の特徴をそのまま体現したような者だった。

そして、その奔放さが疎ましかったあの男と、よく似ているのも納得できた。

なぜなら…

「……信じ難いかとは思いますが、全て真実です。彼はいずれ、王家の中枢を担うことになるでしょう。」

凍りついたままの一同に、桐生が声をかけた。

「…いやはや、なんと言つたものか……」

九頭柳が震える左手を右手で握つた。

当主の中で最も年老いている彼ですら、この出来事は受け止めきれないものだった。

「四楓院夜一、志波空鶴。」

元柳斎が静かに名を呼んだ。

二人もそつと元柳斎に視線を持って行った。

「……知つておつたのじゃな。」

そう隊長が問うと、夜一は頷いた。

「はい。…空鶴から、王土の様子も聞いておりました。」

「…なぜ、王家の人間と知りながらあの戦いに巻き込んだ。」

その静かな声は、むしろはっきり老将の怒りを伝えた。

「藍染は靈王の殺害を目論んでおった！その戦いに王族を巻き込んでどうする！保護し、戦いから遠ざけるべきであつたらう！」

「じゃあ、聞くけどな。」

空鶴が、ぐっと拳に力を込める。

「あいつらの力なしで、あの戦いに勝てたのか？……戦いに勝てなかつたら、どのみち藍染は王土に侵攻しただらうが！」

「志波殿、ご静肅に願います。」

声を荒げた空鶴を、桐生が静かに制した。

「総隊長殿も、どうかお二人を責めませぬよう。……志波殿の仰る通りです。尸魂界がああ戦いに勝利せねば、戦いに参加せず生き残つたとしても、彼らは藍染に弑される運命にあつたのですから。」
それに、と桐生は続けた。

「現世で生まれた身で王位につかねばならぬ以上、むしろこの一連の事件に関わつた事は、彼にとって幸運であつたかもしれません。」
白哉が、ゆつくりと桐生に視線を向けた。

「一体、なぜ。」

蓮杖が静かに問う。

「……尸魂界や死神の事を何も知らぬまま王土に連れ戻されるより、自分の目で見、体感する事が出来たから。ということですか。」
九頭柳が桐生に言った。

「はい。彼の能力は、この半年間で飛躍的に向上しています。それは靈力をはじめとする戦闘の才だけではありません。精神的にも大きな成長を。……これからの彼にとって、この半年間の有る無しは非常に重要でしょう。」

「……しかし……」

なおもいい募る元柳斎を、桐生は再び制した。

「主上は、この一件に彼らが関わつた事について、また四楓院殿と志波殿が、彼らの重要性を知らながら戦いに参加させた事について、責を問う事は無いと。」

「……」

靈王の意となれば、誰であっても覆せない。
それが例え掟に触れる行為であったとしても、靈王がよしと言えばそれでいいのだから。

「……………彼らは、今？」

白哉が訊いた。

その表情は未だ混乱を映していた。

「王宮に。すでに他の王家の方々との面会も終え、今は休まれています。」

桐生は何げなく彼らに敬語を使った。

その事が、違和感とともに白哉に現実を突き付けた。

そう、もうあの者は王族なのだから当たり前だ。

当たり前だが、何故かひどく苦しかった。

どれだけの苦痛に襲われているのだろう。

自らの命を賭して掟を否定したというのに、今はその掟に絡めとられている。

それが、何故だか自分にとってひどく苦しかった。

そんな白哉を見てとり、桐生が口を開いた。

「……………ひどく疲れているみたい。無理もないのだけど。……………多分、一

護君が一番。」

急に敬語がとれて白哉ははっとした。

桐生は悲しそうに眼を伏せる。

「一心君も…遊子ちゃんや夏梨ちゃんもすごく疲れてる。遊子ちゃんと夏梨ちゃんは、ほとんど何も知らない状況からいきなり放り込まれたわけだし、一心君はまさかこんなことになるなんてって感じだし、子供たちは右も左もわからないからすごく気を使ってあげてる。……………でも、一護君はさ、自分が一番疲れてるのに、自分が一番疲れてないって思ってるのよ。」

桐生はあの家族の事を想った。

「一護君、…他の三人もだけど、すごく家族思いじゃない。お互いがすごく大事で。…だから、一護君は自分がすっかりなくちゃいけないって思ってる。一心君が、子供たちを巻き込んだじゃうのを迷ってるってわかってるし、妹達は、本当に何もわからないから。その点、自分は半年かけて知ってきた事もあるし、三人よりはずっと楽なんだって思いこんでる。」

でも、と桐生は続けた。

「この半年間、次から次へと訳わかんない状況に放り込まれ続けて極め付けが来たって感じじゃない。一護君にとっては。それに…今までのと違って、今度のは終わりが無いのよ。」

夜一が、ぐつと唇を噛んだ。

戦いならば、勝利と敗北という終わりがある。

だが、王族として生きる事に終わりはない。

生きる限り多くの義務と掟に囚われ、死した後も史実にその名を残す。

それは永遠だ。

一護は、永遠の戦いに身を投じなくてはならないのだ。

「全部受け入れられるまでには、多分かなり時間がかかると思う。

そもそも、藍染の一件すら消化しきれないわよ、彼。」

白哉が眉間にしわを寄せた。

本当に、どれだけあの者は苦しまねばならないのか。

自分たちは救われたというのに、何もしてやれない。

何も、返せない。

「私、この一ヶ月あの家で暮らしていたの。護衛の為に、他の隊士たちと一緒にね。…私は、一護君の担当だった。彼、誰か他の人の前では、一生懸命繕って何も無いってふりをしてた。だけど、一人になるとずっとふさぎ込んで。これからの事とかを考えてるのか

と思って訊いたんだけど、違ったの。…あの時の戦いの事、考えてるんだって。」

蓮杖はじつと桐生を見ていた。

彼は一護にあつた事は無いけれど、どこか自分に似たものを感じたようだった。

「もつと自分が強かったら。もつと自分が早く修行を終える事が出来れば。…被害はもつともつと小さく済んだんじゃないかって。」

「……馬鹿か、あいつ。」

空鶴が小さく一護を罵倒した。

「んなもん今さらグダグダ考えたってどうにもなんねーだろが。…」

「…かあれがああの時の全力だろ。」

「そういうな。…そういうところは父親そっくりじゃからの。グダグダウダウダと鬱陶しい。」

あまりに容赦がなくて、九頭柳が苦笑した。

「二人とも、そうじゃないだろう。…しかし、…ずいぶんと優しい子のようですね。」

「あれ以上など誰にも不可能じゃ。…むしろ良くやってくれたと思つておるぐらいなんじゃがのう。」

元柳斎までもが同意した。

相手が王族と言つのはひとまず置いておくことにしたらしい。

「だから、お願いがあるんです。彼の重荷を減らすために協力してください。」

「…」

そうして、桐生はその願いと、そして霊王からの命を話し出した。

untold truth (後書き)

タイトル日本語訳は「秘められた真実」

そんなこんなで一護君は悩んでいます。

何でだろう。私の中の一護ってすごく悩みやすいんですね。

そして前話でさらっと流した「九頭柳」と「蓮杖」の由来。

五大貴族の名字ってそれぞれ植物の名前が入っていますよね？

四楓院、朽木、志波（芝）っていう風に。

で、楓は秋、朽木は冬の季語なので（正確には枯れ木）

残りの春と夏の季語である柳と蓮を入れました。

蓮杖は完全に音の響きから決めて、九頭柳は「九頭竜伝説」の九頭竜からとりました。

てなところです。

ちなみに二人とも男ですよー。

それでは感想などお待ちしております。

don't forget (前書き)

二十七話の終わりと同じ時から始まります。

「主上は、このことについて、尸魂界に広く知らせる事はないようにと。今はまだ瀟霊挺の混乱もひどく、情報を上位の者の中で留める事は難しいであろうと。……それに何より、尸魂界において彼らは掟に反した子供です。人間と死神の間の子というだけでこちらでは禁忌視されるというのに、ましてや王族との間の子となれば。ゆくゆく王位を継ぐことを考えれば、こうせざるを得ないと。」

桐生が言うと、夜一が僅かに眉をひそめた。

「つまり…行方不明の扱いのまま、ということになるのか？」

そう言うと、桐生は頷いた。

「そうね。そうせざるをえない。……それに、忘れてはだめよ。王族の事は、固く秘さねばならないの。ましてあんなことがあった後なのだから。」

元柳斎は、半ば無意識のうちに、杖を握る手に力を込めた。

「掟、じゃの。」

「ええ。…王家にまつわる事は、全て中央四十六室と、そして護廷十三隊総隊長、五大貴族当主の内に秘されねばなりません。」

それを聞いて、空鶴は心の内で溜息をついた。

それは本来王族を守るための掟。

世界の楔となる霊王を、いかなることがあっても損なうことのないよう、護るための掟。

そうだというのに、今はその霊王となるべき少年を苦しめようとしている。

「あいつを、これ以上苦しめろって言うのか。」

「…そうとも言い切れないわよ。彼が、自分が王族である事を…い

ずれは王位を継ぐ事を、仲間知られたいと考えると思う？」

白哉は目を細めた。

答えは否。

一護が、そんなことを望むわけがない。

「じゃが、一護とて想像しているはずじゃ。こちらで既に搜索が始まっている事を。」

夜一が言つと、桐生は頷いた。

「ええ。……だから、一護君からお願いがあるの。」
そういつて、桐生は息を継いだ。

「……搜索を、止めてくれ。」

白哉が僅かに目を見開いた。

「これ以上迷惑をかけたくない。もう俺はそつちに戻らないから、時間を無駄にしてほしくないって。」

夜一は小さくため息をついた。

「勝手じゃのう。」

「そうね。あなた達にも、謝っていた。ひどい事頼んですみませんつて。」

搜索を止めれば、反発が来るだろう。

理由も何も、今からでは納得できるようなものは作れまい。

それに、禁じたところで止めるような者どもではないというのに。それを自分たちは、これからずっと見ていかなければならないのだと思うと、自然に溜息が洩れた。

「……じゃが、やらねばなるまい。」

元柳斎が言つと、白哉は頷いた。

「それしか、出来る事は無いのだろう？」

「ええ。それと、これ。…一護君から、預かってきました。」

そう言つて、桐生は一通の封書を差し出した。

「総隊長宛てだそうです。おそらく、同じ内容が書いてあるかと。」

元柳斎は無言でそれを受けとり、とりだした便箋に目を通した。一つ頷き、懐に収める。

それを見ると、桐生は再び二通の封書を取りだした。

「こちらは、隊首会宛て。…もう一通は、浦原商店に届けてほしいと。…浦原商店宛ての方には、探すのをやめてほしいと、隊首会宛てには搜索をやめさせてほしいと書かれているそうです。」

再び元柳斎が一通を手に取り、そのまま懐に収める。

浦原商店宛ての方を夜一が手に取るうとすると、桐生はそれを引っ込めた。

「あなたが預かってどうするの。どんな痕跡も残してはいけくないのよ？私だって鬼道でいろいろ細工しているのだから、直に触ってはだめ。こっちは私が浦原商店の前において行くわ。…折を見て回収してちょうだい。」

「…わかった。」

夜一は力なく手を下し、ぎゅっと拳を握った。

「…正月に、会うことになりますね。」

蓮杖がぼつりと言う。

「一度、会ってみたいとは思っていたんです。…でも、こんな形になるなんて思ってもみなかった。」

「私もだよ。…まさか、こんな形になるなんてね。」

九頭柳が言つと、夜一が肩を落としたり。

彼女は小柄だが、それでも一段と小さく見える。

いつもの快活さがまるでない。

子供のころに戻ってしまったようだ、と九頭柳は思った。

「…詫びなくては、ならないな。」

白哉が言う。

「巻き込んだ事、重荷を負わせてしまった事、何もしてやれぬ事…何もかも。謝りつくせぬが。」

普段の白哉らしくない言葉だった。

こちらもまた、混乱して小さな頃に戻ってしまったように見えた。

「私、春から主上付きに異動する予定だったのだけど、撤回願いを出そうと思ってる。今のまま、東宮付きでいるわ。」
はつと夜一が顔を上げた。

「大丈夫。彼の事を一人にはしない。……私の大切な人達のことも護ってくれたのだもの。今度は私が彼を守るわ。あなた達の分もね。」

夜一が、食い入るように桐生を見つめる。
僅かに、希望が見えた気がした。

「私は隊で一番若いから、まだ今の隊首会に知っている人たちもいる。あなた達の事も良く知っている。……今なら、自信持って言えるわ。隊で私が一番東宮付きにふさわしいですって。」
そういつて桐生は晴れやかに笑った。

彼女は、昔から人を安心させるのが得意だった。

「頼むぞ。」

元柳斎が言う。

「ええ。……それに、私だけじゃないわ。夜一ちゃん、白哉君……あなた達のお姉さんも、彼の事を支えるつもりよ。大丈夫。誰も、彼を一人にはしない。」

今度こそ、夜一の目に力が戻った。

白哉もまた僅かに表情を和らげる。

王族に嫁入りした姉達。

彼女たちなら、きっと一護の事を上手く支えてくれる。

何の疑いもなく、そう思えた。

桐生と、そして姉たちと。

彼女たちがいれば、一護は大丈夫だ。

希望はまだ、潰えていない。

いや、むしろここから増えていくのだ。

「それじゃ、私はそろそろ戻るわ。……何か、彼に伝言ある？」
それを聞いて、白哉は目を閉じた。
伝えたい事。

そんなこと、多すぎる。

自分は決して饒舌な方ではないのに、言いたい事が次から次へと浮かんで来た。

だからこそ、目を開けて首を横へ振った。

「正月に、直接伝える。」

桐生はわずかに眉を上げ、微笑んだ。

「わかったわ。夜一ちゃんと空鶴ちゃんはどうする？」

「正月でいい。」

「儂もじゃ。」

その返事を聞いて、桐生は元柳斎に向き直った。

「総隊長、いかがなされますか？」

元柳斎はいつものように目を閉じていた。

「……迷惑をかけてすまなかった。感謝している、と。」

「わかりました。必ず伝えます。……それでは、お願いしたように。

……頼みます。」

桐生はそういうと一礼し、姿を眩ました。

取り残された彼らは、ただぼんやりとその場に立ち尽くしていた。

窓の外はまだ暗く、日が昇るまでにはまだまだかかるだろう。

白哉は、一つ溜息をつくと瞬歩でその場を去った。

夜一も、空鶴も、九頭柳も、蓮杖も。

みな、次々とその場を去る。

やるべき事が山ほどあるのだ。

約束を、果たすために。

元柳斎も、一つ溜息をついて執務室へと歩き出した。

副官が来るまで、まだ時間がある。
それまでに、いかにして捜索を禁じるかを考えなくてはならなかつた。

don't forget (後書き)

タイトル日本語訳は「忘れるな」

さりげなくいろんな伏線が張られているのは気にしないでください。ちゃんと忘れないように回収します。

うっかり忘れていたようだったら声をかけてください。

素で忘れていることがあるので(汗

事実、コン達も一緒に行っている。というのを危うく書き忘れるところでした。
いや危なかった。

そんなこんなで結構危なっかしいもので、矛盾などあったらご指摘ください。

それでは、感想などお待ちしております。

r e g u l a t i o n o r b o n d (前書き)

二十八話の終わりの少し後から始まります。

桐生から話を聞き終えた白哉は、自室に戻ってきていた。

だが、どうにも横になる気にはなれない。

どうせ眠れたとしてもすぐに起きなければならぬ時刻ではあつたし、そもそも眠れるかどうかすら怪しいものだ。

らしくないなんて、わかっている。

動揺するなんて、らしくない。

いついかなる時も、貴族として誇り高く、冷静沈着でいなくてはならないと己を律してきたというのに。

誰かに聞かれるわけがないのに、白哉は小さく小さくため息をついた。

こんな展開、誰が予想したというのだろう。

藍染が裏切ったこともそうだが、あの男の存在はそれ以上に自分を揺らがせた。

最初は、力無きただの魂魄として。

それも、亡き妻の妹に大罪を犯させた、罪人だった。

あのとき、地に伏して、それでも諦めずルキアを取り返そうとするその目が、記憶をつついたのを覚えている。

あの男に、よく似ている。

そう思った。

そして何より不思議だった。

たった二ヶ月足らずしか共に過ごしていないはずなのに、ルキアとの間に　おそらくは今の自分や恋次とのもの以上の　絆を結んでいるように見えた。

それが、なにより不思議だった。

そして次には、そのルキアの処刑を止めに来た旅禍として。

一ヶ月も経たぬうちに、始解を越え、卅解まで会得して。それがどういう意味を持つのか、恐らくは理解していなかったのだろう。

死神としての常識を一つとして持ちあわせていなかったのが、ひよっとするとあの者にとって最大の勝因だったのかもしれない。

火の灯された庭を見て、ぼんやりと思索を巡らせた。

そして、藍染が離反した後は瀟霊挺にとって無くてはならない戦力になった。

鏡花水月を見ていないというその強みは大きい。

だがそれ以上に、その力の伸びしろと成長速度を見れば、藍染を倒せるのはおそらくあの男だけだと誰もが思っていた。

誰も、口には出さなかったが。

そしてその読みは当たる。

全てが、何か大きな意志により動かされているような気がした。

藍染が自分たちを踊らせた、そのことすら掌上にしていた何かがあるような気が。

そっと目を閉じ、これから自分が相手取らねばならない数々の事を考える。

それはルキアであり、恋次であり、一護を仲間として探し続ける全てだ。

それすらもその意志によるものならば、自分に抗う術はない。

だからこそ、その掌の中心に乗せられたあの男の事が…不憫でならなかった。

あの男は、仲間も、絆も、自分が大切に思う全てを　捨てるよう

な真似をしなくてはならなかったのだ。

この一ヶ月、どのような思いで過ごしていたのだろう。

誰もが平穩を甘受していた中で、再び戦いに身を投じる覚悟を固めていたのだろうか。

恐らくは今生の別れになることを覚悟して、別れを一人告げ続けていたのだろうか。

いずれにしても、不憫でならなかった。

こんな風に誰かの心情を思い遣るのは、ずいぶん久しぶりの事だった。

そして、あの男の失踪に最も心を痛めている義妹の事を思い遣る。

話してやりたいと、痛切に思った。

話さなければ、恐らくルキアは永遠に探し続けるだろう。

情の深い、優しい妹の事だ。

こんな風になったのは、自分の責任だと　あの時のように、思い

続けるだろう。

そんなことには、したくない。

緋真に、ルキアを護ると約束したのだ。

長い時間がかかったけれど、やっと家族らしい関係を築けはじめた。それはあの男のおかげで、だからこそ絆を大事にしたかった。

話そう

全てを話して、お前は悪くないと言ってやろう

庭に下り、穿界門を開けようと千本桜に手をかけた。

「何をするつもりじゃ？白哉坊。」

「……夜一。」

いつの間にか、背後に夜一が立っていた。

「ルキアに言うつもりか？」

言い当てられ、黙り込む。

その沈黙を肯定と受け取って、夜一は溜息をついた。

「よく考える。…ルキアに真実を話せば、最も傷つくのはあ奴じゃ。救われるものなど誰ひとりおらぬ。白哉坊、お主も含めてな。」
ふり返って夜一を見た。

「ルキアは、失踪を自分の責任と感じている。…真実を知らなければ、自分を責め続けるだろう。」

「その方がよほど楽に決まっておると、どうしてわからぬか。」

「どういう意味だ。」

真実を知る方が、楽に決まっているじゃないか。
自分のせいではないと分かるのだから。

「お主…今、どう感じておる？」

夜一は、額を抑えて訊ねた。

「何をだ。」

「全てじゃよ。…今しがた知らされた全てを、どう感じているかと聞いておるのじゃ。苦しいと、感じておらぬのか？」

「苦しいだと？」

苦しくない訳が、ないだろう。

真実を永遠に秘していかなければならないのだから。

そこまで考え、はっとした。

「お主は、その苦しみをルキアに背負わせようとしておるのじゃぞ？」

呆然としたままの白哉に、夜一は続けた。

「しかも儂らと違い、ルキアは王土にゆく事が出来ぬ。所在だけを仲間の内でただ一人知っている事は、ルキアにとって耐え難い苦し

みになるはずじゃ。一護も、自分の今の状況を知られる覚悟など、まだ出来ておるまい。」

確かに、そうだと思った。

夜一の言っている事は正しい。

だけど、正しければすべてよいなんて言えないはずだ。

掟を護る事の正しさと、仲間を護る正しさと。

それは矛盾していても、ともに正しくて、それを教えてくれたのは。

「…掟に触れる事になるのじゃぞ。そうなれば、苦しむのは一護とルキアじゃ。」

「掟を守れと…？貴様が」

「儂に言われたくないと思うのならば、言われぬようにせんか。掟に触れ、仲間まで傷つけてどうすると言つておるのじゃ。」

そう言つた夜一も、どこか自暴自棄になっているように見えた。

「姉上たちが、何とかしてくれる。…それに、時間がかかったとしても、一護が自ら切り開くじやろう。よい方法を、自分の手で。」
そう言つて夜一は目を閉じた。
その肩が、僅かに震えている気がした。

「……………儂は信じるぞ。あ奴は、儂等よりも強い。」
そう言つて、夜一は瞬歩で姿を消した。

「信じる…か」

ふと、庭の梅に目がとまった。

緋真は、自分を信じていたからルキアを託してくれたのだろうか。
今まで、信じるという言葉を重ねて見た事は無かった。

それでも、自分は何かを信じつつづけていたのだ。

それは家の者で、部下で、…家族。

静かに視線を落した。

ルキアに話してはならないと、わかっている。ただ、それは掟以上にそう願われたからだ。

かつてそう願われ、叶えたために五十年の間ルキアに辛い思いをさせたのは記憶に新しい。

自分が、もう一度同じ道を歩んでしまうのではないか。それが不安だった。

夜が明けようとしていた。

一日が、はじまる。

長い、一日が。

regulation or bond (後書き)

タイトル日本語訳は「掟か、絆か」

悩める一護に引き続き、悩める白哉

予想以上に難しく、最後なんて強引に切りました。
ごめんなさい、兄様。

以前第二章で少し触れたのがここですね。
とはいえ夜一さんも苦しんでいます。

原作の展開が予想以上に切なくて、打ちのめされた私の精神状態が多いに反映されております。
あまりにひどくて半分書きなおした次第です。

そしてここから地獄の一人称三連発。通称地獄篇(違っ!)
この人の思考回路なんて理解できる人いないでしょ、って人のも書きます。
がんばります。

それでは感想などお待ちしております。

W i l l f u l W i s h (前書き)

第八話と同じ時間帯です。

タン、と夜一は警察署の一室に降り立った。

そこは広めの会議室で、多くの警察官が行き来していた。

今は魂魄の姿だから、普通の魂魄に姿を見られる恐れはない。

それに甘えて、ゆっくりと捜査書類を探し始めた。

一枚一枚丁寧に書類を見聞していく。

それぞれに黒崎一家の最近の行動やこれまでの経歴が書かれている。

よくもまあ短時間でここまで調べたものだ、と内心感心しながら、

万が一にも彼らの行方につながるものがないか確認していく。

喜助から警察の捜査資料を盗ってきてほしいと言われた時は、好都合だと思った。

他の誰かが　というより喜助自ら盗りに行き、厄介な情報でも見つけられたらことだ。

もつとも、一心や桐生が細心の注意を払っているのだから、人間がそう簡単に行方を掴めるはずもないが。

誰も知られる事もなく簡単に情報を消せるこの状況に、夜一は少し肩の力を抜いた。

白哉坊に説教こそしたが、自分だってまだ迷っている。

一護にとつて一番よい方法がなんなのか、全くわからなかった。

これでいいのか、他の方法があるのか。

事の真相を、自分は当主たちの中で一番早くに知っていた。

他ならぬ、一護の口から。

あの時の、あの表情が頭から離れない。

真っ暗やみの中に、たった一人で放り出されたような、そんな表情。自分は声をかけてやれなかった。

護衛士と家族以外で唯一真実を知っている自分にだけ、出来る事があつたはずなのに。

口を衝いて出ようとする謝罪をのみ込むのが、精一杯だった。

戦いに巻き込んだのは、一心でも喜助でもない。
自分だ。

王土の情勢は空鶴から伝え聞いていた。

勿論、疫病が蔓延した事も。

だから、一心があちらに戻り、王位を継ぐ準備をしなくてはならない事はわかっていた。

それでも尸魂界にはあの親子の力が必要で。

だから自分は渡すべき情報を握りつぶした。

一心たちを逃がさなければ、いや、あの親子を失えば、藍染との戦いに勝利したとしてもどのみち世界は終わるのだということも、全てわかっていて自分は賭けたのだ。

やってはならぬ賭けであることは百も承知。

だがいずれ靈王になるのであれば、どうしても知って欲しかった。

王族は、尸魂界に来る機会を持たない。

現世や虚圏は尚の事。

だからこそ、知って欲しかった。

自分の目で見て、体感して、そして出来る事なら、多くの絆を作つて。

そうすればきっと、良い王になってくれる。

掟に歪まされたこの世界を正す存在に。

自分たちの運命を狂わせたのは、藍染だけではない。

頑迷な掟により、自分も仲間もたくさん傷つけられた。

そんな事が二度と起こらぬようにしてほしいと、自分はまだ幼い少年に我が儘な願いを押しつけたのだ。

必要な情報を選びわけながら、着々と仕事をこなしていく。

ふと手に取ったのは、一心の経歴に関する書類だった。懐かしい、と口角を上げる。

幼稚園から大学まで、全て公立のごく普通の人生。でも、高校までは全て偽造だ。

喜助が苦勞しておったわい、とますます口角が上り上がった。経歴操作だけならともかく、一心がいた、という記憶を前後二学年に不自然にならないように植えつけるのは、骨の折れる作業だったようだ。

全て終わった瞬間にぱったりと気絶した姿は、技術開発局に居た当時以来久しぶりに見たのだった。ふ、と苦笑をにじませる。

次に手に取ったのは、一護の書類。

幼稚園や小学校の部分までを読んで、ある一行に目を止めた。

増水した川に転落し、救助しようとした母親と死別。

一心が真っ青な顔をして、浦原商店に飛び込んできたのはよく覚えている。

真咲が、死んだ。

絞り出すような声に、喜助ともども凍りついた。

一心は見たことがないほど動揺していて、事情を聞きだすのにひどく苦勞した。

辛うじて聞き出せたのは、

一護・虚・川原

という3つの単語だけ。

結局、空須川の川原に向かった夜一が、そこに残る哀しい痕を確認したのだった。

あの時の一護は見ていられなかったが、一心はもつと見ていられな

かった。

一心にとつて何よりも幸運だったのは、三人の子供がいた事だ。恐らく、子供がいなかったら、生きていく事は出来なかっただろう。そうすれば、ここで王家の血は途絶えていた。

何より一護が生き残らなければ、やはり王家の血も途絶えてしまうのだから、これは世界にとつても幸運と言えた。

王家を失えば、文字通り世界は崩壊するのだから。

その書類を置き、次々と他の資料に目を通して行く。

事が少し落ち着いたら、墓参りに行くと思った。

謝らなくては。

あなたの子供たちを、私は濁流に突き落としましたと。

それは、地に頭をすりつけても、許されることではないのだけれど。

例え自己満足であつても、謝らずにはいられなかった。

そして、誓おう。

何を置いても、これからは一護を全力で支える事を。

これまでの償い。これから重責を背負うことへの謝辞。

一護にしてやりたい事は、多すぎる。

その全てを、自分の一生をかけてやっていこうと思った。

仲間を、裏切ることになるのはわかっている。

喜助やテッサイも、碎蜂も、多くの人をだます事になる。

それでも進む。

今や、尸魂界と現世の情報を伝えてやれるのは、自分達だけなのだから。

一護を、世界と切り離させはしない。

迷いと強い意志が混在するその目は、しかしその場の誰にも見えは

しなかつた。

Willful Wish (後書き)

タイトル日本語訳は「我が儘な願い」

ということまで夜一さん一人称でした。

……ちなみに、ここまでの全三十話の中で最も筆が進まなかった人です。

もっとすらすら書けそうだと予測していただけに意外でした。

補足しようと思っただけいつも忘れていたことを一つ。

あの、気になっていた方もいらっしやっただかと思うんですけど、この一心さんって異常におとなしいですよ。

まあ立場がどうなのであんまりバカやってられないし、

そもそも大切の後篇では体調崩して元気じゃないってのもあるんですけども。

実は最初のほう(王土に来てすぐ)はそのテンションで通そうと頑張っ張って、

母親(霊王)に叱られたという裏設定があったりなかったり。

母ちゃんはどこの家でも最強です(遠い目)

それでは感想などお待ちしております。

orders are orders but (前書き)

三十話の少し後の時間帯から始まります。

orders are orders but

懐から手紙を取り出し、何度目かと思うほど読み返した。

だがそこに書いてある文字は変わらない。

元柳斎は、今日何度目かわからない溜息をついた。

王鍵を作らせぬための 王族を守るための戦いに、王族が紛れ込んでいたなど笑い話にすらならない。

もし黒崎一護が戦闘中に絶命していたらと思うと、胃が空く様な感覚がした。

例え藍染が王土に侵攻したとしても、王族特務がいる。

だから王族は安全だ。

だがその前にあの親子が死んでいたら、それだけで世界は終わりだった。

霊王がいなければ、世界は崩壊する。

あらゆる意味で、あの戦いには世界の命運がかかっていたのだ。

そして、素直に惜しいと思った。

あの才能は、今の護廷十三隊に是非とも欲しい。

だからこそ、隊首会で黒崎一護を隊長として即時登用することを提案したのだが。

自分の跡を継げるかもしれないと思う死神が、ようやく現れたと思っ

た。

そしてそれは正しかったのだろう。

霊王となるべく生まれついたのであれば、総隊長の位を継ぐ事など何程のものでもない。

短所は確かに多い。

命令や掟に素直に従う事を良しとしない事。

若さゆえの短慮も目立つ。
何より経験が少なすぎる。
だが時間をかけて育てれば、自分がらんだ通り、いやそれ以上に強く広い器になるだろう。
まさしく、王にふさわしい器に。

次いで桐生の言葉を思い出した。
霊王陛下の、命令。

それは黒崎一護を現世や尸魂界から切り離すものだ。
命令は命令だ。

今迄の自分なら、それがどんなに理不尽なものでもためらいなく従っただろう。

だが他ならぬあの少年が、掟が全てでは無いと言い続けたのを知っている。

命令は、命令だ。

僅かに拳を握りしめる。

だが、それでいいのだろうか。

掟に抗い続けた少年が掟に素直に従ったことが、むしろ元柳斎の心に冷たい刃を突き立てた。

再び、手紙を開いた。

やや悪筆ながらもていねいに書かれたその手紙は、まず謝罪から始まっていた。

自分の想いを一つ一つ確かめながら、ゆっくりと書いていたのだろう。

それが如実に読み取れ、だからこそ一つの結論を出した。
たまには、若さを真似るのもいいかもしれない。

命令には　掟には、従わない。

自分が口を閉ざすのは、ただあの少年が願うからだ。命令や掟は関係ない。

その願いを叶えてやりたいと自分が思うから、ただ口を閉ざす。今さら彼の運命を変えてやる力は自分に無いのだから。

少年の代わりに、力の限り彼の護ろうとしたものを護る。

自分も、自分以外の多くも、たくさん変えられた。

それなら無理に流れに抗う事もないだろう。

自分の思うようにやってみるのも、悪くないと思った。

「雀部。」

「何でしょうか。」

即座に帰ってきた返事に一つ頷く。

「京楽と浮竹を、ここへ。」

は、と短い返事をして雀部は部屋を出て行った。

人を使うのは、あの少年にとっておそらく苦痛になるだろう。

だがそれすらも飲みこむだけの覚悟をしたのであれば、それは世界にとっての僥倖だ。

彼に足らぬ覚悟は、人の上に立つ覚悟のみ。

それすらを手に入れたのであれば、彼は何よりも王にふさわしい。

そして、もう一つ気付いてほしい。

命令で人を従わせるのは容易い。

だが、何よりも重要なのは、従いたいと思わせる事だ。

上に立つ者に求められるのは、尊敬を集められる器量なのだから。

それは難しいが、絶対に必要な事。

隊長たちは、それぞれ己のやり方で隊士たちを従えている。

そのどれもが正しく、正解は無い。

あの少年ならば、己のやり方を見つける事が出来るだろう。そしてその時こそ、心からの忠誠を誓おう。この老いぼれの忠誠がどれほどの力を持つかはわからぬが。

「総隊長、浮竹隊長と京楽隊長がご到着されました。」

雀部がそう言うと同時に、二人が部屋へ入ってきた。

「どうしたの、山じい。こんな急に呼び出して。」

元柳斎はそれに答えず、雀部に席をはずすよう促した。

雀部がすぐにそれにこたえて部屋を出ていくと、元柳斎は小さくため息をついた。

「書簡じゃ。」

半ば投げやりに、隊首会宛ての手紙を机に上においた。

「書簡？」

きよとんとした二人に、元柳斎は続けた。

「黒崎、一護から」

届いた、と言おうとしたのに、すでに書簡は机の上に無かった。

元柳斎は厳しい視線で、書簡を食い入るように読む二人を見つめた。

おそらく、二人は搜索を続けるように言うだろう。

二人だけではない。

恐らく隊首会を開けば、それ以上の数が。

厳令を発すれば、さらに多く。

だが搜索を求める理由もわかる。

家族を人質にとられている可能性も十分ありうるし、何よりこの手紙だけでは意味がわからない。

せめてもつと納得できるような理由をでっちあげてほしかったと思うが、そこまで求めるのはいささか酷だろう。

だが、意味がわからないからこそ、失踪の理由が掴めるまでは今以上の規模での搜索を要請してくるはずだ。

それは、あの少年の願いに反する。

何より、今の瀟靈挺にそんな余裕はない。

世話を、焼かせるのう。

心の内で小さく呟いた。

周りは皆年下ばかりで、そして対立する願いを持っていて。

どちらもがその立場において正当だからこそ、溝は埋まらない。

その溝に身を置かなければいけない事は、この長い人生の中で何度もあった。

だがそれは、いつも苦しい結末のみをもたらした。

いつもいつも、今回こそはよい結末をと思い、そして今回もかとうなだれた。

どうにもならないとわかっていても、それでも願う。

今回こそは、全てが救われる結末を。

そのために必要なものは、全て用意して見せよう。

愛弟子や、部下達も、あの少年も、全てが救われる結末を求めて。

この命に代えても、それだけはやり遂げてみせると誓った。

微かに、浮竹の肩が震えた。

呆然と元柳斎を見る。

「元柳斎先生。…これは、いつたい…」

掠れた浮竹の声が、隊首室に響いた。

orders are orders but (後書き)

タイトル日本語訳は「命令は命令、しかし」

ということ(まさかの)総隊長一人称でした。

二度と書かねえ。なんでこんなにこの人難しいのさ。

…夜一さんほどではありませんでしたが二番目に時間がかかりました。

多少人格が柔らかくなったのは仕様です。

次も(さらに難しいと思われる人の)一人称です。

そこでひとまず一人称シリーズを終わる予定です。

それでは感想などお待ちしております。

i s i t h i s w i l l ? (前書き)

三十一話の少し後、九話の少し前の時間から始まります。

i s i t h i s w i l l ?

日が落ちていく。

それは瀟霊挺のみならず流魂街をも橙に染め上げて、否が応でもあの少年を思い起こさせた。

空鶴は手酌で酒を飲んでいた。

側にはすでに空になった瓶がいくつも転がっているが、空鶴は酒に強い。

未だ素面で、また一杯酒を煽った。

ふと思いついて空瓶を空き地に投げ付けた。

ガシャン、と碎け散る。

それに薄く笑みを浮かべると、空鶴はまた空瓶を投げつけた。

片づけは金彦か銀彦にでもさせればいい。

いざとなれば岩鷲がいる。

そうして空瓶を全部割ってしまうと、あたりに静けさが満ちた。

一護は、兄に似ている。

そんなのは当たり前だ。

自分達のおばが、一護の曾祖母なのだから。

確かに血縁にしては遠いが、似ている理由にはなる。

でも外見以上にその考え方や感性がよく似ていた。

自分の身がいくら危険にさらされようと、間違っていると感じたことには決して屈しない。

それは傍から見れば当然に見えるし、実際自分でそう感じているのだらう。

彼らの周りにはそういう人間が大勢いたし、今もいる。

だが、それはいざとなれば難しい。
組織や掟に迎合する方がよほど簡単だ。

ましてやそれに歯向かい、全てを敵に回す覚悟なんてそうそうでき
たものじゃない。

彼らの場合は環境がいい意味で悪く、更にそれが可能なだけの力を
持っていた。

そして、片方は死んだ。

もう片方だって、死ななかつたのが奇跡なほどの無茶をしでかした。
全てを知った時、その奇跡に深く感謝し、そして何かの意志を感じ
た。

誰の力も及ばない、絶対的な意志を。

本当にこの決意があいつの意志なのか、それを判別することはでき
そうになかった。

全てを知った時 夜一に真実を告げられた時は、ひどく驚いた。
あいつが血縁だったことに対してではなく、夜一がやった賭けに対
してだ。

夜一は、家を潰すような無茶は決してしない。

それは自分の兄と違うところだ。

あの兄は、いざとなれば家なんてどうでもいい、家族の命さえあれ
ばいいと思っっている節があった。

だがあいつは、夜一は、奇妙なバランス感覚を持っている。

家を護ることと、仲間を護る事。

それは決してどちらかに偏り過ぎる事は無い。

どちらも失わないようにするというのが彼女の至上命題なのだから。
だからこそ、その賭けには驚いた。

一歩間違えば あの親子のどちらかが死んでいたら、夜一の首だ
けでは済まない。

四楓院家の取り潰しでも足りないだろう。

滯霊挺そのものが無かったことにされる可能性すら十分にありうる。

尸魂界という世界と、そして王族特務の数人さえあれば、瀟霊挺をもう一度作りなおすことぐらいは王家にとって容易い。もっとも、そうしたところで王位を継ぐ人間がいなくなればそれでオシマイなのだが。

その王位を継ぐ人間があいつだというのも、なんとはなしに複雑だった。

今の霊王は自分達の従妹で、次の霊王はその息子。

かたや自分達は大貴族の地位を追われ今に至る。

なんだか皮肉なものだと思った。

もちろん大貴族の位が惜しかったわけではない。

むしろあんな堅苦しい物は無くても結構。諸手を挙げての大歓迎だ。

夜一が心の中で羨ましがっていることだって、もちろん知っている。

彼女にとって大事なものは、自分が四楓院家の当主であることではなく、四楓院家が存在することなのだから。

だが夜一は決して当主というその立場を投げ出したりはしない。

今迄だってそうだったし、これからはなおさら。

あいつを、支えなくちゃならない。

更に一杯手酌を煽った。

あいつは、王に向いていない。

夜一にあいつの出自について聞いてまず思ったのは、そのことだった。

王という生き物は、全てを護るために最も大切なものを犠牲にしないくてはならない。

それは、あいつにとって耐え難いはずだ。

もちろん歴代の王にとってもそうであったはずなのだけど、あいつは外を知りすぎた。

外を知りすぎて、そしてこれから向かい合わなければならぬこと
に対して無知すぎる。

必要な全てを身につけるまでに、どれほどの時間がかかるのか。
それを考えれば、この16年は長すぎた。

日が落ちきるまで、もう時間がなかった。

一護からの手紙に関する隊首会は、もう終わった頃だろう。

浮竹がここへ来るのも、時間の問題か。

だとしたら、これはまずいかな。

空鶴は空瓶の残骸を見つめた。

浮竹だけならともかく、京楽まで来たら少しばかり厄介だ。

察しのいいあいつなら、朽木のガキや夜一の行動に違和感を覚えて
いてもおかしくない。

自分までこんな事をしでかしていると知ったら、結論にたどり着く
までそう時間はかからないだろう。

仕方ない、と腰を上げたとき、冷たい風が吹いた。

チツと軽く舌打ちをして、近くにおいてあった上衣を引っ掛ける。

寒い。やっぱり熱爛にするべきだったか。

結局金彦と銀彦を呼び、熱爛の用意と空瓶の後片付けをするように
言った。

「よう、珍しいな。」

用意された熱爛を手についた瞬間、客がきたと声をかけられた。

やや不機嫌に通すように言うと、やはりきたのは京楽と浮竹だった。

「飲むか？」

「いや、止めておく。」

「僕もとりあえず。…またあとでくれるかい？」

チツと内心舌打ちした。

京楽まで飲まないとは、結構根が深いな、これ。

あんのクソじじい、こいつらの面倒ぐらい見やがれ。

ひげ面の憎たらしい爺を想い浮かべて、空鶴は眉間にしわを寄せた。

「珍しいな。何かあったか。」

「…一護君が、家族とともに行方不明になった。」

浮竹が硬い声音で言ってくる。

「夜一から聞いている。…で？そんな暗い顔してるって事は何だ？死体でも見つかったか？」

まさか、と京楽は首を横に振った。

「手紙がね、届いたんだ。」

「手紙？」

「…搜索を、止めてほしいと。」

僅かに片眉を上げる。

知らないふりをするというのは、骨の折れる作業だ。

「どういう意味だ？」

「そのままだよ。…もうこっちに関わるつもりはないから、探さないでほしい。これ以上時間を無駄にされるのは嫌だと。」

「道理じゃねえか。」

そういうと、浮竹が厳しい表情で見返してきた。

「…勝手に失踪したんだ。探されちゃ迷惑だつてことなんじゃねえのか？」

そういつて一杯煽った。

「で、あのじーさんはなんて？」

この二人や、夜一・喜助には、あのじーさんで十分に通じる。

一拍置いて、浮竹が答えた。

「搜索を禁止する、と。」

浮竹はぐつと拳に力を込めた。

「あの手紙からじゃ、彼の置かれている状況はほとんどわからなかった。なら、せめて理由がわかるまでは探すべきだ。…何か厄介なことに巻き込まれているのなら、助けるのが」

「償いになるってんなら、違うと思っけどな。」
浮竹が言っのを遮る。

「もし恩を返そうとかそういう風な気持ちで探すんなら、それはどう考えたって迷惑だろ。あいつは俺等よりも断然強いんだから、本当に必要なら力技でなんとかするんじゃないかねえのか？」

浮竹は黙り込んだ。

京楽は、探るような目でこっちを見ている。

さあ、どうやって逃れるか。

だが口を開こうとしたその時、その視線は唐突に断ち切られた。

「姉ちゃん！今のどういうことだよ！」

ぎよっとするほどのバカでかい声が、襖の向こうから響いた。

「うるせえぞ岩鷲！」

怒鳴りつけると一瞬ひるむ気配がしたが、すぐに襖が勢いよく開いた。

「一護がいなくなったって本当なのか!？」

「うるせえつつつてんだろ！」

「本当かって聞いてんだろ！」

見たことのないほどの剣幕に、少し驚いた。

表だってこんななぶつかってくることなんて、今まで無かったはずなのだが。

ギロリと睨むと、弟はそれに負けずに睨み返した。

京楽と浮竹がぼかんと見ているのは気配でわかる。

大方自分と同じ気持ちだろう。

ならば、どうするか。

ぐちゃぐちゃ考え過ぎて、面倒になってきた。

「岩鷲、てめえ今から現世に行ってこい。」

「へ?」

「いいから行ってこい!あっちにいきゃわかる!」

立ち上がって蹴つ飛ばし、更に襖を勢いよくしめると浮竹が嘖き出した。

「相変わらずだなあ。」

「はあ？」

「やつぱり、君も心配してくれてるんだね。一護君の事。」
なるほどな。

つまり、浮竹には一護を探して来いと言った風に聞こえたわけだ。こっちとしては本当に鬱陶しくなったただけなのだが。勝手な誤解にとりあえず感謝して、軽く息を吐いた。

「これ以上は手伝わねえからな。」

「ああ。わかつてるよ。」
しばらく沈黙が流れた。

「酒、飲むか？」

再び勧めると、京楽は素直に頷いた。

「頂こうかな。いや、ここのところ忙しくてね、七緒ちゃんが飲ませてもらえないんだ。」

そう言つて京楽は嬉しそうに猪口を手に取る。

「浮竹は？」

「やめておくよ。まだ本調子じゃないからね。…卯の花隊長に怒られるのはごめんだ。」

そーかいそーかいと軽く返事をする、じゃあ少しだけでもらおうかな、と浮竹も猪口を手に取った。

正直、浮竹からじーさんの命令を聞いた時、動揺した。

「搜索を禁止する。」

それは：発されるのは当たり前で、むしろ発されなかったら殴りこみにも行かなくてはならないのだが、それでも動揺した。

あのためきじじいはやはりためきらしい。

恐らくこの二人がこうやってここに来ることもわかっていて、後始末を押し付けたのだ。

つまりこいつらを止める事と、俺自身の気持ちの整理と。
正月までには、なんとしても本調子に戻らなくてはいけない。
今余計な心配をかければ、もうあいつはもたないだろう。
そういうことを全部見こして、あとは何とでもなれと適当に押し付
けたたぬきに九割の恨みと一割の感謝をこめつつ、空鶴は再び酒を
煽った。

i s i t h i s w i l l ? (後書き)

タイトル日本語訳は「あいつの意志なのか？」

一人称の中でなぜか最も筆が進みました。
なぜでしょう。

空鶴は原作にほとんど出てこないのも偽物率が高かったらすみませ
ん。

むしろ偽物率が高くてもいい分書きやすかったのかも。

夜一さんの原作での奔放さ加減に少しフォローを入れようとしてみ
たりもしました。

彼女もちゃんと周りを考えてると思うんですね。

とりあえずここで一人称シリーズは終わりです。

あと一話で第三章を完結し、外伝をUPしたいと思っています。

それでは感想などお待ちしております。

i t · s n o t f r o m l o y a l t y (前 書 き)

十一話と二十二話の数日後の話です。

i t ' s n o t f r o m l o y a l t y

死神代行・黒崎一護の願いを聞き届け、護廷十三隊をはじめとする四十六室下実行部隊全ての構成員による黒崎一護及びその家族の捜索の一切を禁じるものとする。

そんな敵令を発してから、数日が経った。

当初は次々と敵令の撤回を求めて様々な者がやってきたが、それもずいぶん少なくなっていた。

もともと今の瀨霊挺は機能が半マヒ状態で、それを束ねる上位席官に敵令の撤回を求め続ける余裕などない。だが、未だ一人だけ、諦めない者がいた。

「総隊長 今日も面会を求めていますか。」

雀部の表情にはいささかの感情も見えなかったが、その声には若干の呆れが聞こえた。

「通せ。」

一言命じると、雀部は会釈して部屋を出て行った。

すぐに入ってきたのは、黒崎一護とことさら縁の深かった、彼の命の恩人。

「山田。敵命の撤回は、せぬ。いい加減諦めぬか。」

そういうと、目の前に立った四番隊第七席・山田花太郎は、いいえ、と首を振った。

「お願いします！一護さんを探してください！：絶対、何かあったに決まってるんです！お願いします！」

毎日毎日よくやるものだ、と半ば感心するようにさえなった。

それほど毎日 しかも一日に何度も、こうしてここを訪れては敵命の撤回を求めているのだ。

卯の花に聞いたところ勤務状況に問題は無いというのだから、時間を見つけてはここへ来ているのだろう。

戦いの直後より落ち着いたとはいえ、未だ総合救護詰所に入院している隊士も多い。

さらに上位席官がない分治安の低下が目立ち、こまごまとした怪我は増えていると聞く。

そのために未だ戦場のように忙しい四番隊で、しかも席官であるにもかかわらず勤務に穴を空けないでそれだけの時間を見つけているのだから驚きだ。

少し落ち着いたら、剣術の指南でもしてやろうか。鍛えてやれば案外強くなるかもしれない。

そうやってぼんやりと聞き流せるほどに、花太郎は何度も一番隊隊首室を訪れていた。

しかし花太郎も必死だった。

「お願いです！どうか厳命を撤回してください！」

何度も何度もこの部屋を訪れて、この部屋の主に頭を下げて。

以前は一番隊隊舎に近づくことすら気後れしたのに、今は違う。

気後れはしているのだけど、それ以上にやらなくちゃいけないことがあるとはつきり分かっていた。

一護さんを知るほとんどの人は、僕よりも上位の席官。

何度もここを訪れている余裕はない。

それでも合間を縫ってここへ通ってくれているのを知っている。

僕には、少し苦しいけれど時間はある。

だから、僕がやらなくちゃいけないんだ。

ぐっと拳を握りしめて、目の前に立つ部屋の主を真っ直ぐに見た。

「お願いします！一護さんは僕達の恩人です！どうか探してくださいさ

い！」

じつと見返してくる総隊長は、僕には絶対に及ばない人で。だから、こんなことになるまで面と向かって話したことすらなかった。

今だって少し気を抜けば、「ごめんなさい」と謝って部屋から逃げ出してしまいそうなのに。

でも、一護さんの為だから、と足を踏ん張れる。

今の自分があるのは、あの人のおかげだから。

明らかに無理をしている様相が見て取れて、元柳斎は内心溜息をついた。

ここで倒れさせたら、まずもって卯の花に目をつけれかねない。どうしたものかと思案したところへ、助け船が現れた。

「十番隊、日番谷です。失礼します。」

声と同時に扉が開く。

冬獅郎は花太郎に一瞬目をやると、総隊長の正面に立って書類を差し出した。

「現世地点2987地区においての大虚討伐の報告書です。…藍染との関連は、見られませんでした。」

「御苦労…虚圏も少し騒がしいようじゃからの、その余波と見て良いじゃろう。」

そういつつ元柳斎は書類に目を通した。

その様子をしばらく見て、冬獅郎は花太郎に向き直った。ひ、と一瞬花太郎が怯えるような表情を見せる。

やはり生来の臆病さは直っていない。

あ・き・ら・め・る・な

だから、花太郎はうつかりそれを見落とすところだった。冬獅郎は口だけを動かして、花太郎を励まそうとしていた。驚いた花太郎に一つ頷くと、冬獅郎は再び元柳斎に向き直った。

「総隊長。敵命の撤回を要請します。…いくらなんでも、理由が不明瞭すぎる。納得するわけにはいきません。」

「お願いします！」

まっすぐに見つめてくるその真剣な表情に、元柳斎は目を細めた。

やはり、あなたは王にふさわしいのやも知れませぬ。

寿命の長い死神が構成するこの護廷十三隊は、良くも悪くも変革に疎い。

そんな組織をこれほどまでにかき乱せるのは、もはや才能だ。

だがしかし、この状況を何とかしなくてはならない。

それが、彼との約束。

「この間、久しぶりに知り合いに会ったの。」

何のことだ、と目の前の二人の表情が変化する。

「500年ぶりじゃった。…儂が左腕を失ったと聞いて、連絡をよこしてきたのじゃがな。」

500年、と花太郎が呟いた。

二人のうちどちらも、500年前は尸魂界にいない。

それどころか現世にさえいないだろう。

それほどの時を、儂は生きておる。

「縁というのは不思議じゃ。…途切れたと思ったものが、後で繋がることもある。繋ごうと思えば、すぐさま離れてゆくこともある。

…こればかりは、どうにもならぬのじゃ。」

説教が始まったのだと察して、冬獅郎は眉をひそめた。

「今探したところで、黒崎一護が見つかるとは思えぬ。…じゃが、いつまでもそうとは限らぬ。今は自分のすべきことに集中し、そ

して繋がった時、二度と離さぬようにすればよい。」
言外に嚴命の撤回はしないと云った元柳齋に、冬獅郎は奥歯をかみしめた。

「失礼します。山田、帰るぞ。」

「はい。失礼しました。」

ペコ、と頭を下げた花太郎は冬獅郎を追って部屋を去った。

二人の靈圧が遠ざかっていくのを感じて、元柳齋は溜息をついた。
象徴的な存在でありながら、絶対である靈王。

その命とあれば、死神の誰も逆らうものはいない。

ただ、上手く言えないが、たった一つの存在にだけ、例外があるような気がした。

例えば、今この状況を知れば、部下たちはどうするだろう。

素直にあの少年の出自についての事実を受け入れ、服従するだろうか。

例えば、あの少年がそれから逃げる事を望み、靈王がそれを許さぬとすればどうするだろう。

彼を捕らえ、靈王に差し出すだろうか。

例えば彼が王位に就き、そして彼に関わった全ての者がその事実を知ったとして、

その者たちは、靈王の命に従うのだろうか。

否、と元柳齋は結論を出した。

事実を素直に受け入れることなど、出来ようはずもない。

ましてや、ただ盲目的に服従することなど。

逃れる事を望めば、それがどんな結末になろうと彼の為に全力を尽くすだろう。

そして、靈王の命に従うことなど、しないだろう。
従う理由は、その背に負った靈王という記号の為ではない。
ここで培った信頼が、身体を動かす原動力となるはずだ。

儂自身も、そうだ。

この敵命は、靈王の命令に因るものではない。
ただの形式的な忠義によるものではない。

これは、あの少年に対する礼と、そして信頼。

いつか、事実がより多くの者に広まる事を、老将は静かに願った。

だが、その願いは無残に打ち碎かれることになる。
真実を知るよりも、尚酷い事。
それが起こったのは、それから14年後の事だった。

it's not from loyalty (後書き)

タイトル日本語訳は「それは忠義に囚らず」

そしてなぜかほとんど総隊長の一人称に仕上がってしまいました。

この話で第三章完結です。

第四章は第一章・第三章の十四年後、第二章の八年後です。

でもその前に外伝を一本UPする予定。

今までで一番、というかlost gearの中で一、二を争うほどほのぼのとした話の予定です。

それでは感想などお待ちしております。

S O 2 黒漆の箱 前篇(前書き)

・一護が死神代行になるずっとずっと昔の話です。(過去篇よりも前)

・舞台は尸魂界。

S 0 2 黒漆の箱 前篇

i t ' s i n n o c e n c e , s o i t ' s b a d

それぞれの道 それぞれの未来
見つめるものは違うけど はじまりは全てここにある

陽だまりの庭は好きだけど ずっと子供ではいられないから
見上げた空を翔けてゆきたい

いつか迷い傷ついても ここを立ち上がる糧に
道を違えたとしても 和解の刻が来ると信じて

一人で立つのが難しいなら 互いに支え合えばいい
宿命に抗うことはしない

背負うことこそ 私の誇り

曳船桐生 / 本業・死神 / 二番隊第五席 / 隠密機動第五分隊裏挺隊隊長

「…………お父さん、今なんて言った？」

桐生はこめかみに手を当てて訊き返した。

無論、聞こえなかった訳では無い。

ただ言われたそのことが信じられなかったただけだ。

そして問いかけられた男性は、にっこりと笑って答えた。

「うん。娘の話し相手になってくれないかな？って隊長に頼まれたんだけど。どうかな？」

「どうか、じゃないわよバカ父！娘ってあれでしょ！隊長の娘って事は四楓院のご息女じゃない！何で私にそんな子の話し相手役が回ってくるのよー！」

たっぷり三秒間黙りこくった後、そういつて桐生は箸を振りかざす。左手に持っているのは茶碗だ。

「ご飯時に騒ぐんじゃないの、桐生。…いいお話じゃない。滅多にないんだから、お受けしなさいよ。」

そういつて側にいた女性は卵焼きをつついた。

うん、いい出来。とひとりごちる。

「お母さんそれ意味が分かんないから！」

矛先を変えた娘の叫び声をものともせず、母親はみそ汁をすすった。

「じゃあ上官命令。ね？お受けしなさい。」

笑ってこそいるがその目は本気だ。

仕事の時の鬼三席そのものだ。

「家に職場の上下関係持ちこむなー！ー！！！」

無駄だと分かかっていても叫びたくなる気持ちくらい、わかって欲しい。

そしてこの時、私の職業欄に一つ項目が追加された。

曳船桐生／本業・死神／二番隊第五席／隠密機動第五分隊裏挺隊隊長

副業・四楓院家のご息女の御話し相手

「あっははははははははははー！」

「うっさい笑うんじゃないわよバカ！」
「痛いっ！」

隣を歩くで京楽が向う脛を抑えて痛がる。
そりゃあ痛いわよね、弁慶の泣き所を蹴ってやったんだから。

「で、その御話し相手、いつからなんだ？」

その様子に苦笑しながら浮竹が訊いた。

「今日から。」

ふてくされて返事をする、京楽はまた軽く笑った。

「確かにだいが損な役回りだよねえ。自分とこの隊長の娘さん…しかも五大貴族のご息女ときた。」

「しかもあれだろう…確か少し年の離れた妹さんがいたはずだ。彼女の事も頼まれたのかい？」

浮竹の質問に桐生は表情をさらに暗くした。

「もちろんついでに頼まれたわよ。てゆうか何で私なわけ！？もつと他に居るでしょ！？」

「いいんじゃないの？キミ真面目だし。自分とこの隊の人間の方が人柄良くわかつてるしさあ。」

のんきな物言いの京楽にこめかみがひきつった。

「私の両親は流魂街出身であつて、貴族の血はこれっぽっちも流れてないわよ。野良育ちよ、野良。五大貴族のご息女なんて一生縁無いのが当たり前だしむしろそれで結構！」

「上流階級にいたら世間の事なんて分かんないしさ、へたにそういうの仕事にしてる人よりキミみたいにいろんなところ見てきた人の方がいいって思ったんでしょ。」

キミのこの隊長変わってるじゃない、と京楽が言つと桐生はさらにふてくされた。

「確かにキミは貴族じゃないけど、名門といえば名門だ。…現に父親は二番隊副隊長、母親は第三席。キミだつて五席だろう？」

「霊術院だつて首席で卒業だ。…貴族じゃないが、貴族と同じぐらい血縁にも経歴にも恵まれている。四楓院隊長が目をつけるのも頷

けるってものさ。」

浮竹が言うと、ぶう、と膨れた。

そのせいでいらぬ苦勞を買ってるって事は、二人も良く知っているはずなのに。

「でもまあ、厄介な仕事ではあるよねえ。…へ夕にすれば周りからやっかみを買いかねないし。」

そーゆーのに敏感な人いるからなあ、と京楽がひとりごちた。

「ま、世渡り上手なものもキミのいいところだ。なんとかなるでしょ。」

「また他人事みたいな言い方しやがって。」

ギロリと睨むと、京楽は黙って目をそらした。

「あ、おつた！」

後ろから声が響いて、げ、と京楽がうめく。

「こらあ！仕事せえゆうとんねん！早おやらんかい！」

「わーリサちゃん待って待って今から行くから叩かないでー！」

浮竹と目を見合せて笑う。

「ずいぶん早いと思つたら、仕事終わって無かつたのね。京楽隊長。」

嫌みたつぷりに言つてやると、京楽は心の底から嫌そうな顔をした。

「頼むからそうやって隊長って呼ぶのやめてくれよ。…本当は君の方が早く隊長になるべきだったのに、山じいが手加えたせいでこうなつたんだから。」

「総隊長が判断したんだもの、それで正しいんですよ。…ほら、さ

つさと仕事行く！申し訳ありませんでした、矢胴丸副隊長。」

そう言つて頭を下げると、彼女は手を振った。

「いいっていいって。ていうか曳船さんに頭下げられるの居心地悪いから、やめてくださいよ。」

「席次を重んじるのが二番隊の主義なので。…それでは、失礼します。」

そう言つてすたすたと歩き出す。

もう仕事に戻る時間だ。彼らの同期として、甘んじてはいられない。そう言い聞かせ、パン、と頬をたたいた。

浮竹と京楽が隊長になったのは十年前だ。

その時には私も卍解を会得していたのだけれど、総隊長の判断である二人が先に隊長位に着くことになった。

理由は簡単。

彼らが貴族だから。

三人のうち誰がなつても、霊術院の卒業生として初めての隊長になる。

ならば、少しでも混乱が少ない方　つまり貴族である方がいい。

それはまっとうな判断だし、私も素直に納得がいった。

むしろ反対したのは二人の方で、それでも私が譲らなかつたから、結局二人が隊長になった。

私は今の二番隊第五席という地位で満足しているし、それ以上は望まない。

むしろ、これ以上の厄介事を避ける上ではいい立ち位置だと思つている。

両親が共に同じ隊の上官である事は、実は結構負担だ。

裏から手を回しているんじゃないかとか、陰口をたたかれることも多い。

それでも私には隠密機動が性にあっているし、少なくとも親より上の立場になるつもりはない。

だから、今の立場で十分。

浮竹も京楽も今までと変わらず接してくれるし、彼らの周りの人たちは私たちの事を大目に見てくれている。

不都合を感じるまでは、今の席次で十分だった。

そして、数刻後。

「はじめまして。護廷十三隊二番隊にて第五席を務めております、曳船桐生と申します。」

そういつて目の前に座る姫君に頭を下げる。

初めて見たけれど、なんだか本当に物語に出てきそうなくらいお淑やかなお姫様だった。

「はじめまして。…桐生、と呼んでもいいかしら。」

声もとっても柔らかくて、普段野郎ばかり相手にしている頑丈な鼓膜は思わぬ刺激に喜んでいた。

「はい。桜様。」

そう言つと、くすりと笑う気配がした。

笑い方までなんて可愛いらしいの、この人。

「頭を上げてちょうだい。職責を全うしているあなたの方が、私よりもよほど偉いのですから。…敬称を遣う必要もないわ。ね？」

「しかし、そういうわけには…」

五席の自分よりは、五大貴族の一人である彼女の方がよほど偉い。

いくら彼女がそういつても、ここは社交辞令として受け流すべきだ。自分の中でそう判断してやんわり断つてみるが、相手の方が上手だった。

「父上の事は気にしないで。…御話し相手と言つても、本当は友達が欲しかっただけなの。ね？」

「はあ…。」

「私の事も、桜と呼んでいいから。ほら、頭を上げて？」

勧められるままに顔を上げる。

まっすぐに見つめた先には、それはもう美しい姫がいて、同性であっても見とれてしまった。

そのせいで一瞬言おうとした事を忘れそうになり、慌てて口を開いた。

「しかし…呼び捨ては。」

「…でも、友達になつて欲しいの。」

その顔は余りにも寂しそうで、ああそうだ、この子はいいこの間母親を亡くしたばかりだったと思いだして、つい言ってしまった。

「なら…桜さん、では？」

「あなたの方が年上じゃない。」

「ええと…じゃあ、桜ちゃん、とか。」

窺うように言うと、彼女はぱあっと笑った。

ああもう本当になんて可愛いの！

「これからよろしくね、桐生！」

「…はい。」

やっちゃったーとか心の中で叫んでみるけど、もう元には戻らない。あーあ。

その時、カタン、と小さな音がした。

ふり返ると、布の切れ端が障子の裏に隠れるのが見えた。

「夜一。…ほら、こつちへいらっしやい。昨日話したでしょう？曳船桐生さんよ。ご挨拶なさい。」

桜がやさしく呼び掛けると、ひよい、と小さく顔が覗いた。

うわあちつちやい。猫みたい。

思わずそんな感想がもれるぐらい目の大きくて、子猫のように震える小さい女の子だった。

「はじめまして。曳船桐生と申します。」

そういつて頭を下げると、後ろで桜が苦笑する気配がした。

「あの子に頭を下げる必要もないわ。あなたよりもずっと年下なんだもの。ね？…敬称を使うのもダメよ？」

しっかり先手を打たれて心の中で苦笑する。

この子、世間知らずの割には案外しっかりものかもしれないな。

「夜一ちゃん、って呼んでもいい？」

そう言うと、また女の子は障子の裏に隠れてしまった。

「引っ込み思案な子なんですな。」

問いかけると、桜は再び苦笑した。

「そうなの。…もともとあんまり活発な方じゃなかったんだけど、最近ますますね。…あと、敬語を使わないで。」

「…わかりました。」

少しおどけてみせると、桜は楽しそうに笑った。

そして私たちは親友になる。

ただ少しだけ誤算だったのは、桜と夜一だけでは済まなかったことだ。

例えば 桜と同じで、朽木家の長女である葵や、その弟の白哉。

そして何より 私がまだ小さな頃に没落した志波家の長男・海燕

や、その妹の空鶴。

私の運命を悉く揺り動かした彼らとの出会いは、まさにここから始まった。

思えば、今の王族特務隊・東宮付きという立場も、ここから始まったのかもしれない。

S O 2 黒漆の箱 前篇（後書き）

タイトル日本語訳は「無邪気なだけに性質が悪い」

ということと桐生の一人称小説でした。

ここで適用される主なねつ造設定は

曳舟について

・浮竹や京楽と同期

・二番隊第五席

・両親も死神

その他

・夜一や白哉に姉がいる

・二番隊隊長は夜一のお父さん

つてところですよ。

ちなみに次々と過去の死神たちが登場しますが、彼らについてもねつ造設定多数になりそうです。

それでは感想などお待ちしております。

S O 2 黒漆の箱 中篇（前書き）

三十四話（前篇）の数年後から始まります。

S 0 2 黒漆の箱 中篇

drunk drinks drink

「キリオーっ！」

「夜一ちゃん！久しぶり。…なかなかこれなくてごめんね。桜ちゃんも、久しぶり。」

飛びついて来た夜一を抱き上げ、その後ろを追いかけてきた桜に声をかける。

「もう。約束2回もすっぱかしたじゃない！」

ぶーっと膨れたふりをする桜は、それでも顔が笑っていた。

こんな間合いでいられるほどに親しくなってから、もうずいぶん経つ。

「ごめんって。それにしても、少し合わない間にずいぶん大きくなつたわね、この子。」

ぼんぼん、と夜一の背を叩くと桜は苦笑した。

「そうなの。着物も丈を会わせたそばから大きくなっちゃって。大きめに作っているのに、すぐに着れなくなっちゃうのよ。」

困ったような口ぶりだけど、それは妹の成長を心から喜んでいる姉の顔。

一人っ子の私は、その様子を微笑ましく思った。

「さ、行きましよう？もうみんなついてくるのよ。」

桜の心の底からの嬉しそうな表情に、自然と顔がほころぶ。

「いこうー！」

夜一も嬉しそうな顔をして庭の方を指さす。

この子からこんな表情が見られるようになるなんて、出会ったあの頃は思わなかった。

障子の裏で小さく震えていた女の子はもうどこにもいない。

あんまり元気なせいで困らせられることも多いのだけど、それでも

嬉しいことに変わりはない。

でもね、もちろん物には程度つてもものがあるのよ？

心の隅っこでそう思いながら、私は夜一に頬ずりした。

「あ！きりおだ！」

「ほんとうだ！」

「きりおさん！！！」

口々に言いながら駆けよつてきたのは、まだ私の腰から胸ほどの背丈しかない小さな子どもたち。

「久しぶりね。空鶴ちゃん、喜助くん、鉄裁くん。」

「ひさしぶり！！！」

元気な大合唱に、また笑みが深まる。

本当に、ここは大好きな場所。

四楓院家本邸の二画にある、庭を有した離れ。

月に1・2度、こうして色んな子どもたちが集まれるように隊長が解放している。

色んな子、というのは旧五大貴族の子供たち。

普段は家の奥深くに居るしか無くて、だからどうしても友達が少ない。なる彼らを想ったそれぞれの親の親心だ。

それはすごくいいことだと思うし、実際本当に楽しそうにしている。

でもね、その親御さんたちに聞きたいことが一つ。

何で私がつまめて全員の面倒を見なくちゃいけないわけ？

私だってさ、仕事があるわけよ。フツーに。

今日だって昨日現世での任務終えたばかりで、つまり久しぶりの非番で、だからもっと遅くまで寝てたかったし、髪の毛だって切りに行きたいし、商店街に出来た甘味処に行きたかったし、とにかく

やりたいことはいっぱいある。

それをさ、どういう因果かこんなことになっちゃってるわけ。

も、本当に勘弁してほしい。

「桐生！」

またひとつ、かわいらしい声が響いた。

「久しぶりね、葵ちゃん。…うわあ、白哉くんもずいぶん大きくなつたわね。びっくりしたわ。」

離れから歩いてきたのは、夜一よりもまだ小さい男の子の腕をひいた少女。

五大貴族の例に漏れず、この姉弟もこの集まりに参加している。

「ええ。母上も面倒を見るのが大変になってるの。ずいぶん重くなつたから、抱き上げるのも大変だった。」

そう、と言いながら白哉を抱き上げる。

確かに前よりもずっと重くなった。

掌ほどしかない小さな手で私の顔を無邪気に触ってくる様子に、また笑顔がこぼれた。

「久しぶり。…覚えてるかな？白哉くん、私の名前言える？」

「…キリオ！」

「大正解！」

ぎゅっと抱きしめて頬ずりすると、きゃっきゃと笑って手足をばたつかせた。

「ねー、きりお。きょうはおにごとがいい。」

「やだ！かくれんぼ！」

「ちがうつ！おにごと！」

「かくれんぼっ！」

ばちばちと火花を散らす夜一と空鶴に溜息がでる。

ほんと、毎回毎回よくもめるのね。

ちなみに勝敗は五分五分。
お互いに譲らないせいでもあるけれど、一番大きな理由は同じ年頃の男の子にあった。

「くうかくちゃん、よるいちちゃん、ケンカしたらだめだよー。」
「うるさいっ！」

傍観していた喜助が見かねて口を出すと、瞬時に夜一が反論した。
「きすけはだまって！かんけいないもん！」

「かんけいなくないよ。ぼくもいっしょにあそぶんだもん。」

「かんけいがないっいたらないの！」

「うー。」

くす、と笑いが漏れる。

いつも、喜助が鬼事とかくれんぼが交互にできるよう前回にやった方を覚えていて、どちらかに偏らないよう調整しているのだ。
小さいくせになかなかやるなあと思わせられる。

「きーりーおー！おにごとしよー！！」

「ちがうっ！かくれんぼー！」

ぼけっと考え事をしていて、足元で騒ぐ声に呼び戻される。

「喧嘩しないで、どっちにするかちゃんと決められたらね。」

そう言うと、また空鶴と夜一はどっちの遊びをするかを決めはじめた。

ちなみに、ほとぼりが冷めるまで静観する計算高さも、喜助は持ち合わせていた。

「桐生さん！」

再び名を呼ばれて振り向くと、そこには海燕が立っていた。

彼も桜や葵と同じ年で、私よりも年下。

背はまだ私より小さいけれど、そろそろ成長期が来るころかしら。
動きやすい服を着て、手に持っているのは二振りの竹刀。

それを見てとり、自然と心が引き締まった。

「海燕君。今日も稽古かしら？」

「はい。お願いします。」

彼は、この集まりが始まってから毎回私に剣の稽古を頼むようになった。

霊術院に、入学したいんです。

霊力を持つ者として、誰かを護る仕事に就きたい。

死神に、なりたい。

でも没落した身分では師を付けてもらう事は出来ないから、霊術院に入学するしかない。

だから、稽古をつけてほしい、と。

その目は真剣で、まだ年端の行かぬ少年でしかないのに、年齢にそぐわぬ迫力があつた。

おそらく、うちの隊長や朽木隊長が志波兄妹を呼んでいるのはこのためなのだろう。

正一位の位を剥奪されたとはいえ、志波家の子供が高い霊圧を生まれ持つことに変わりはない。

そして、この幼いながらもしつかりとした志。

自分たちが表立って師をつけてやることもできるけれど、周囲の目を考えれば極秘裏に動く方が彼らの為。

…まあ、結局私が押し付けられたとしか言えないんだけどね。

そして、なら始めましょうか、と言おうとした時、足元から声があった。

「だめっ！きりおはわたしたちとおにごとするの！」

「かくれんぼだっ！」

「かくれんぼはいやっ！」

ぎゃーと再び言い争いを始めた二人を見て、海燕は苦笑した。

「…あの方がいいっすか？」

「いいえ。当分決まらないだろうから、はじめちゃいましょう。…
すぐに静かになるし。」
含みを持たせた言い方をすると、海燕もそれを察して悪戯っぽく笑った。

「なら、お願いします。」
海燕はそう言つて竹刀を差し出し、頭を下げた。

実際、竹刀を使った模擬試合をはじめると、すぐにその場は静かになった。

こういうあたりが、貴族が貴族たる所以なのかもしれない、と思う。普通の女の子なら、こんな模擬試合になんて興味を示さない。でも、桜や葵、夜一、空鶴は真剣にこつちを見ている。

四人ともまだ訓練をはじめてはいないが、ゆくゆくはきちんとした師が多分空鶴には私が つくことになるだろう。

それが可能なだけの霊力と、見合うだけの身体能力が彼らにはある。特に夜一は無意識のうちに瞬歩を会得するという離れ業。それも鬼事をしている間に 成し遂げ、しかも自己流の割に悪い癖がついていない。

これは、隠密機動に是非とも欲しい人材だと思わせるようにさえなつた。

それは隊長も同じなようで、婿養子をとるのではなく、訓練の結果次第では彼女に家督を継がせようと思うと言っていた。

喜助や鉄裁も同じで、特に鉄裁は鬼道に興味を見せるようになった。もう少し成長したら、やはり彼らにも師がつくことになるのだろう。

いつか、彼らが隊首会を席卷することがあるかもしれないと思えるほどに、彼らにはそこ知れぬ才能があつた。

そして、と目の前の少年に集中する。

伸びる速さで言うなら彼に勝るものはない。

たった数年で、それも月に数回見るだけで、これほど強くなるとは思わなかった。

この分なら霊術院に入学したとしても、修業年限を待たずに卒業できるだろう。

右から迫る一撃を避け、次に繰り出された突きを受け流す。

一つ一つの力は鍛錬のたびに増している。

言われたとおり自分でも鍛えているようだ。

そして隙も、まだまだとはいえずいぶん減った。

真っ直ぐに振り下ろされた一太刀を弾き、同時に袈裟がけに振り払う。

のけぞった海燕の足元を払い、倒れた彼の首元に竹刀をつきつけた。

「はい、おしまい。前よりもずいぶん上手くなっていたわよ。」

手を貸して助け起こすと、海燕は不服そうな顔をした。

「でも負けました。」

「当たり前よ。私は本職なの。まだ院生でもない子なんかになんて

負けません。」

ますます不服そうな顔をした海燕の頭に手をのせる。

「それでも実際強くなっているわ。…膂力も上がってる。惜しいの

は足元に注意が言っていない事。今はこんなに足場のいいところだ

けど、実戦はそうとは限らない…むしろ足場の悪いことの方が多い

わ。今度はそこに注意することね。」

「はい。ありがとうございます。」

頭を下げた海燕に微笑む。

「どういたしまして。」

そういうなり、夜一の甲高い声が響いた。

「おにごとーっ！」

教え子の成長を喜ぶ余韻すらくれないのね、と心の中で苦笑した。

「…で？今日はいつたい何があったんだい？」

海燕の相手をし、更に夜一の鬼事につきあつてから数時間後、私は京楽と浮竹と一緒に酒を飲んでいた。

「で？じゃあ、ないわよ！ふざけんああのくそがきつ！」「かーつと酒を一杯煽る。

「おねーさん！もう一杯持つてきて！」

隣の客の注文をとつて立ち上がった女性に声をかける。

酒の種類を伝えると、それはきらしているのだと告げられた。

「なら、『春ヶ峰』にしたらいい。口当たりが良くておすすめだよ。」

「じゃあそれで、と注文すると、すぐに運ばれてきた。

京楽が言つたように確かに口当たりがいい。今度も頼んでみようかな、と思う。

「ほら、女の子がそうやってやけ酒を煽るんじゃない。…酒のほうだつて迷惑だろう。」

浮竹はそう言いながらつまみの料理を口に放りこむ。

「そうそう。キミ、僕達と居るとつい忘れちゃうみたいだけど、同期とはいえキミは僕等よりもずっと若いんだからね。」

「わあつてるわよ。んなこと。でもさあ、こつちの方がたのしいんだもん。」

ちよつとろれつが回らなくなつてきたせいで、飲みすぎたかもと自覚する。

それでも、とまらない。とまるもんか。

「で、さつきもきいたけど…っていかくそがきつていつたい何があったのさ。」

そーそーそれよ、と焼き鳥の串を振りながら、促されるままに話し始める。

「昼間にさあ、鬼事したわけよ。」

「それはまた、…ずいぶん楽しそうじゃないの。子供らしくて。」
「けっ、というとまた二人にたしなめられた。」

「うるさいわよ、楽しいもんか。…瞬歩つかって屋敷の外に逃げられたときには血の気が引いたわ。」

「あー、と京楽が言う。」

「私だって仮にも隠密機動なのよお！？なんであんな小さな子供おっかけて瀟霊挺中を走り回らなくちゃいけないわけ？」

「だけど精一杯の主張も、簡単に退けられる。」

「さすが四楓院の血だなあ。キミを振りきれるとはたいしたもんだ。」

「

「将来が楽しみじゃないか。こういうのは楽観的にとらえた方がいいぞ。」

「……」

それぐらい、わかってるっての。

でもね、私にだって隠密機動としての矜持とか色々ある訳。

そういうのは二人だってわかってるし、その上で言っているんだろ
うけど、愚痴ぐらい聞いてくれたっていいじゃない。

ああ、今聞いてくれるか。

ぼーんやりと酒の回った頭で思考する。

いつのころからだだったか、こうやって二人に愚痴を聞いてもらうことが多くなった。

事の発端は、確か…ああそうだ。喜助くんと鉄裁くん。

だってさあ、流魂街からこどもを拾ってきた。って、どうかと思う
わなない？

今と同じようにろれつの回っていない自分の声が頭に響く。

その日は急に隊首室に呼ばれて、緊急の任務かと慌てて行ったらと

んだ話を聞かされたのだ。

「 昨日流魂街に任務に行った時に、変わった子供を見つけた。ずいぶん霊圧が高かったからうちで預かることにした。桜達のついでに頼むよ。」

そのときはたつぷり十秒間黙ってようやく「…はい？」と聞き返せたのだ。

すぐに訪れた四楓院邸で見たのは、色素の薄い髪色の小さな子どもと、それよりも少し年長の黒髪の子供。

隊長が言ったように確かに霊圧が高く、流魂街にそのままにしておけば、周囲の魂魄に悪影響を与えかねないのはすぐに分かった。

でも隊長が引き取るころまでは納得するとして、どうして私が面倒を見なくちゃいけないの。

自分で面倒見切れないなら拾うなつての。猫とか犬みたいな言い方で悪いけど。

でもそんなことを隊長に言えるわけもなく、そもそも職務に関してはこの上なく優秀な人ではあるし、こうして面倒を見るに至る。

変わっている、と隊長は言ったが、それはどうやら霊圧についての事ではないのだとはすぐに分かった。

性格とか、そういう部分が変わっているのだ。

特に喜助君は、なんだか危険な感じがする。

知識に関しての貪欲さは、通常の子供のそれではない。

そして洞察力にもまた舌を巻く。

でもまあ子供らしい無邪気な面もあるし、今はさほど気にしないでいいかなあと保護者の観点から思う。

まだまだ小さいのだから、才能は伸ばしてあげるべきだ。

ええと、そうじゃなくて。

「とにかく、ありえないのよ。色々。なんか規格外すぎて。」

「大貴族ってのはそんなものさ。」

色々達観した風に京楽が言う。

さっき自分よりもずつと若いとか私に言ったけど、多分私がいこんな風にするのはあんた達の影響だからね。

おかげで年の割にはよく物事を見てるとか言われて、そのせいで更に厄介事を押し付けられるようになったのだ。

「もう。本当にどうしてこんなに大変なのよ。」

ぼてん、と机に突っ伏する。

「小さな子の面倒をみるってのは大変なものさ。君の場合はそれが少し極端なだけだろ。」

浮竹の言葉に返事をする気力も無くて、私はただ唸り声で返した。

S O 2 黒漆の箱 中篇（後書き）

タイトル日本語訳は「酔っ払いは酒を飲む」

…長い。

実はこれ今までで一番長かった話だったりします（5669字）。
これまでの平均文字数2681字の倍以上です。
いつもの分量だと思って読み始めた方、非常に申し訳ありませんでした。

本当は、この外伝って一章ができるぐらいネタの量があるんですけどもこの話って一護に全く関係がなく、こんな風に外伝にせざるを得なかったわけでした。
でもちゃんと書きたいし、でも三部構成にしたいし。
つてことでこの分量です。

本当は小さな白哉のこととか、夜一と喜助のやり取りとか、そして半ば空気になっている鉄裁のこととか、もっと書きたいことがあるんです。

ということ次の話も長くなるかもしれませんが（汗

それはそうと、11/18 22:00を以てlost gear
のユニークの総数が2万人を突破しました。

読んで下さる皆様への感謝を込めまして、リクエスト企画を発動します。

詳しくは私の活動報告のほうに書いてありますので、そちらまで。

11/21 18:00締め切りなのでご注意を！

終了いたしました。ありがとうございました。

それでは感想などお待ちしております。

S O 2 黒漆の箱 後篇（前書き）

三十五話の数年後の話です。

S 0 2 黒漆の箱 後篇

h a p p y d a y s

何年も何年も。

変わらず進み続けた時は、突然その歩みを止めた、
生まれて初めての同性の親友を　それも二人同時に無くすなんて、
思わなかった。

桐生はその日、言い知れぬ違和感を抱いていた。

四楓院の屋敷に入ってから離れに歩いて行く間に、屋敷の者が数人
集まって声を低めて会話をしているのを何度も目にした。
もちろんそれも違和感の理由の一つ。

だがそれ以上に、胸の内が痒いような、そんな違和感を自分の中に
感じていた。

そして、その違和感を決定づけたのは離れの様相だった。

「夜一ちゃん？喜助くん？鉄裁くん？…誰かいないの？」

普段自分が付く頃には騒がしい離れに、人の気配が全くない。
やっぱり、何かあったんだ、と感じた。

目をつぶって霊圧を探る。

すると、桜が近付いてきているのがわかった。

「桜ちゃん！どうしたの？何で、誰も」

「桐生、ごめん。ちよつと話を聞いて。」

座ろう、と言われて縁側に腰掛ける。

桜の表情に快活さは無く、ただ静かに悲しみのようなものを映して
いた。

「桜ちゃん？」

不安になって問いかけると、桜はわずかにほほ笑んだ。

「ごめんね。驚いたでしょう？うちがこんなに静かなこと、今まで無かったものね。」

そう言つて、桜は足元に視線を落した。

しばらくそうして、意を決したように顔を上げて私を見た。

「……あのね、私と葵がね、王族に嫁入りすることになったの。」

一瞬言われた意味がわからなくて戸惑う。

「嫁入り？」

オウム返しに聞き返すと、桜は静かに頷いた。

「そう、嫁入り。…私も葵も、王家に嫁入りすることになったの。」

何も言えずに桜を見てみると、耐えかねたように桜が目をそらした。

「先日、父上に霊王陛下からの詔が下ったの。うちから娘を一人選んで、嫁入りさせるように。」

「……。」

私は言われた意味がわからなくて、ただ黙っていることしかできなかった。

「夜一はまだ小さいし、それに、王族に嫁に出すのだから本家の長姫が一番いいに決まつてる。葵も、同じだって。」

そういう間も桜は一向に目を合わせようとはせず、時折視線を上げて空を見るだけだった。

「……それで、いいの？」

ようやく出た声は、ひどく掠れていた。

「え？」

桜が不思議そうに私を見る。

「そんな…勝手じゃない。桜の意志なんてまるで」

「桐生。」

なだめるような口ぶりに思わず黙り込む。

「私はね、四楓院桜なの。四楓院を名乗る以上、背負わなくちゃいけない義務がある。…あなたが二番隊第三席を名乗ることで背負う

義務があるようにね。」

その声はひどく穏やかで、とうてい私より年下とは思えなかった。そうだ。

この子は、この子たちは、私よりもはるかに思い義務を生まれながらに背負っているのだ。

わかっていた、はずなのに。

ぎり、と唇を噛む。

こんなことを言わせてしまった。

言わせる必要のない事。

言わせれば、彼女にその立場を確認させてしまっただけの事。

そんなことを、言わせてしまった。

「そんな顔、しないで。」

はつと顔を上げると桜は真っ直ぐに私を見ていた。

「別に、嫁に行くのが嫌なわけじゃないのよ。ただ急すぎて驚いているだけ。…もともと、言われていたことでもあるしね。」

問いかけるように瞬きを繰り返すと、桜は静かな口調で話した。

「私たちが生まれるよりも前に、海燕くんたちの伯母さまが王族に嫁入りしたの。蓮杖家からその前で、九頭柳家からその更に前に。だから、今度はうちか朽木の家からだっていうのはわかっていた。」

まさか二人同時には思わなかったけどね、と桜は苦笑した。

「でも、運が良かったのかも。一人で行くのはやっぱり心細いから。」

「……………」

「相手、どんな方なんだろう。…いい人だったらいいなあ。」

「……………桜ちゃん……………」

「ねえ、桐生。私ね、幸せになれるかな？」

ふいに向けられた問いに、どう答えていいかわからなかった。

「いい家族に恵まれて、いろんな人に愛されて、いろんな人を愛せ

て：「たくさんの人を、護れるかな。」

その目はとても透き通っていて、言葉通りの事を聞かれているのだとわかった。

「なれるよ。桜ちゃんなら、きつと。」

そう言っただけ笑うと、桜はぎゅっとしがみついていた。

その肩が震えていて、必死に涙を堪えているのだとわかった。

それを見ていたら、私も泣きたくなくなった。

初めてできた、同性の親友。

生まれたときから、私は孤立してた。

保育所に預けられていても、周りの子供は私と遊んでくれなかった。

それは、私の両親が席官だから。

もし私に怪我でもさせたら大変、と親が子供に言い聞かせていたのだ。

霊術院に入学してからも、それは変わらなくて。

だから、同じように孤立気味だった浮竹や京楽と親しくなった。

彼らもまた、家柄や同級生との年齢差に苦しんでいたのだ。

浮竹は身体が弱く、また京楽は本人が逃げ回っていたために霊術院への入学が他よりもずっと遅かった。

逆に私はずっと早くて、だから周りとの差にあえいでいた。

3人であるようになって、それはいつしか5人になり、10人になり、たくさんさんの友達ができた。

それでも一番親しかったのはやっぱり浮竹と京楽で、でも彼らは私よりもずっと年上で、しかも男だったから、いつのころからか同性の親友が欲しいと心から思うようになった。

そして、やっとできた大切な大切な親友と、もう二度と会えなくな

る。

王族に嫁入りするというのはそういうことだ。

王土との行き来は禁じられている。

隊長でさえない自分は、生涯行くことの叶わない地だ。

それに、嫁入りが決まった以上、今迄のように会うことはできなくなる。

恐らく、これが最後なのだ。

桜が小さく漏らした嗚咽を聞いて、私も堰が切れたように泣き始めた。

どんなに頑張っても止まらなかった。

嫌だ。二度と会えないなんて、嫌だ。

そう強く思った瞬間に、一つの可能性が閃いた。

「桜ちゃん。」

その可能性にすぎた心は、自然と涙を止めた。

「私、もっと強くなるわ。強くなって、そして隊長になる。…それで、いつか王族特務に入る。」

はっと桜が顔を上げた。

涙で真っ赤になった目に、はっきりと驚きが浮かんでいた。

「噂だけど、聞いたことがあるの。……王族特務になれるのは、隊長だけだつて。だから」

「桐生……」

「必ず、やってみせるわ。難しい事じゃないもの。正解だつてもう会得してるんだから。」

そう言って笑うと、桜は寂しそうな顔をした。

そんな顔をする理由はわかつている。

私がこれ以上の出世を拒み続けてきた理由は、両親よりも上位になるのが嫌だったから。

でも、その理由はもう使えない。

二人とも、もう殉職したのだから。

桜が自分の事のように両親の死を悲しんでくれたのは、よく知っている。

むしろ私はほとんど泣かなかったぐらいで、自分でも薄情者だと笑ったぐらいだった。

とにかく、だから私は今三席の地位に居るし、周りから隊長にならないかという声も上がるようになっていたぐらいだから、隊長になること自体はさほど難しくはないはずだ。

でも、王族特務になる条件はほとんど知らない。

よほど難しい事ではあるだろう。

でも、それだけの価値はある。

私の一生をかけるだけの価値は、ある。

そう思うと心は少しだけ軽くなった。

「ね、だから待ってて。私は私の方法であなた達を追いかけるから。」

そう言うと、桜はまた私にすがりつくようにして泣き始めた。

残された時間は、わずかでしかないだろう。

でも、いつかまた会えるその日まで、この温もりを忘れない。

この、幸せな日々を忘れない。

全てを魂に刻みこむように、私は桜を抱きしめた。

S 0 2 黒漆の箱 後篇（後書き）

タイトル日本語訳は「幸せな日々」

ということとで外伝02完結しました。

01は一護メインでしたが、今回は桐生メインでした。いかがでしたでしょうか。

あまりにも楽しすぎてうつかり夜一メインになりそうでした（笑）
彼女が王族特務に志願した理由、というのを書きたくて、こんな話になったんです。

いろんな人たちが紡いできた絆が、予想もしないところで一護につながって、それが一護の力になる。

そんな風なのもちよっとテーマだったりします。

続く第四章では物語が大きく動きます。

そして第一話の前書き注意事項を2つ消化します。
再びド級のシリアスに戻るので、今回の話はちよいとリハビリ兼ねてました

さて、この間実施したリクエスト企画ですが、さっそく一本仕上がりました。

そこなのですが、別で連載という形にして、そちらにUPしていきたいと思います。

詳しくは活動報告まで。

その連載のタイトルは「Whispers of pendulum
ms」（NO732P）

すでに一話投稿してありますので、よろしければご覧ください。

ちなみに、本編に直接かかわってくるような話はUPしないつもりなので、そちらを読まなくても十分話はわかるかと。

それでは感想などお待ちしています。

「two pendulums perceive the truth」前

第四章が始まります。

時間軸は第一・三章の十四年後、第二章の八年後です。

一護たちは30歳です。(一護は年をとっていませんが)

狂わされた振子の2つは

その賢しさゆえに自ら真実にたどり着く

触れてはならぬ理と

心の隅で知りながら

秘匿された真実を

知れば己も縛られて

解放さえも願わずに

想うは彼の強き意志

しかし振子は全てを想い

ゆえに自らの口を閉ざす

多大な犠牲を払う覚悟と

少年に向けた優しさ

始まりは一つの心ゆえ

全ては一つに帰結する

彼^かの少年は刀を持たず

その背に負うは重責なり

その荷を預くは天意とありて

いにしえの意を恨まんとす

t
r
u
t
h

t
w
o

p
e
n
d
u
l
u
m
s

p
e
r
c
e
i
v
e

t
h
e

「two pendulums perceive the truth」(後)

タイトル日本語訳は「真実を悟った二つの振り子」

そして慣習になったと思われるプロローグの詩です。

今回の二つの振り子はいったい誰なのか、考えながらお楽しみください。

それでは感想などお待ちしております。

a r e u n i o n i n t h e r a i n (前書き)

十一話、三十三話の終わりの十四年後から始まります。

舞台は現世です。

風を切る音が耳にうるさい。

空は、全てに別れを告げたあの日と同じように澄んでいて、痩せた月が低い位置にその姿を見せていた。

太陽はすでに真南に達しようとしていて、強い光に彼らの姿を下から確認することは出来なかった。

街の上空を駆けていく一団の中に、彼は、いた。

「懐かしい？」

すぐそばから、聞きなれた女性の声があった。

「ああ。ずいぶん変わったけど、やっぱりな。」

そう、と彼女が言っていると、彼女とは違う女性　少女の声が次に聞こえた。

「ホント、ずいぶん変わったよね。…大丈夫かな。場所、わかるの？」

背中に居る少女のその言葉に頷く。

「大丈夫だろ。空須川を目印にして動けばわかるはずだ。」

「川の流れは、そう簡単には変わらないものね。」

最初の女性はそう言っ、あれがそう？と前方に見えてきた川を示した。

「そつだ。…駅の外装が変わってねえって事は、多分建て替えてねえな。ってことは…あつちか。」

一度立ち止まり、進行方向を変える。

彼に続いて、後ろについてきていた十数人の一団もまた方向をかえた。

「……十四年ぶり、だね。」

再び駆けだそうとした彼の耳に、その少女　妹の聲が滑り込んだ。

「朽木さん！久しぶり！！」

織姫が大きく手を振ると、ルキアもまた大きく手を振った。

「久しぶりだな！井上！」

そこはとある霊園で、今日は何か儀式でもあるのかと思うほどに大勢の人影があつた。

だが、その姿の多くは常人には捉えられない。

織姫と雨竜、チャド、たつき、啓吾、水色などクラスメートである彼らを除けば、残りのすべては皆死神であつた。

「有沢！動いても大丈夫なのか？もう近いのであろう？」

ルキアが気遣うように言うと、たつきは苦笑した。

ゆつたりとしたワンピースに、底の高くない、安定した靴。

彼女があまり好みそうにない姿だが、それも全てまだ見ぬ愛しき者のため。

「ありがとう、朽木さん。大丈夫だよ。一応予定日は来月だから。

医者も一緒に来ているしね。」

そう言つて織姫たちを見、愛しげに大きな胎を撫でた。

その表情はすっかり母親のもので、ルキアは高校時代の彼女を思い出して内心苦笑した。

人は、変わるものだとわかっているはずなのに。

死神である自分は、外見の変化が人よりも遅い。

それは内面にも影響を与える様で、死神はその年齢に関わらず見た目通りに振る舞う者が多かつた。

「ならいいのだが…浅野も、楽しみだな。」

たつきの手を握る啓吾に言うと、彼は照れたように頭をかいた。

一護がいなくなつてから、十四年の月日が経っていた。

一護の友人たちは皆それぞれに就職や結婚、出産など人生の節目を迎えていた。

例えば、雨竜と織姫は大学を出た数年後に結婚した。

一昨年には娘が生まれ、かぐやと名付けたその子をとて慈しんで育てていた。

そして、結婚したのは彼らだけではない。

啓吾とたつきという、高校時代からは考えつかないような組み合わせの彼らもまた結婚し、来月には子供が生まれる予定だ。

更に、チャドは内科医、雨竜は外科医、織姫は小児科医とそれぞれ医者としての道も順調に歩んでおり、誰もが社会人として立派に独立していた。

そしてこちらでも意外と言えば意外だが、水色は大学時代の後輩、つまり年下の女性と年末にも結婚する予定らしい。

変化があつたのは人間達だけではない。

死神も、それぞれ人生の節目と言える行事を迎えていた。

例えば、ルキアは十三番隊の第五席になった。

藍染との戦いで大きな功績を上げた彼女を無席のままにしておくのはいかがなものか、と浮竹に対して反発の声があがったのだ。

もちろんそんなことにはならないように白哉もまた圧力を強めたのだが、他ならぬルキアがその庇護を拒んだことにより、正当な評価が与えられるようになった。

三・五・九番隊の隊長は未だ空位のままだが、来年あたりには誰かを、と隊長たちの間で動きが広まっている。

その動きの渦中に居るのが恋次と一角という卍解会得者で、しかし一角が頑固に拒むためにその動きも難航していた。

「さあ、行こう。久しぶりだから積もる話もあるだろうけど、全て話していたら日付が変わってしまう。」

まだ昼間なのに？と冗談を飛ばした京楽に、浮竹は苦笑した。

「今日は暑いからな。身重の女性をこんなところに立ちっぱなしではいさせられないさ。」

「なんか、すみません。」

たつきが答えると、浮竹は気にするなと手を振った。

「気遣うのは、当たり前前の事だからね。自分一人の身体じゃないんだ。大事にしなさい。」

そう言われて、たつきはまた愛しげにその胎を撫でた。

一護がいなくなった時、搜索をしなかった死神を憎んだ事さえあった。

でも、十四年もたった今でも彼らは一護を探し続けてくれている。その様子に接するうちに、自然とわだかまりは解けた。

今では互いの名前も知っていて、そしてこの日とともに墓参りに来るようになった。

「今日は、よく晴れてるね。あの日と大違い。」

そう言くと、啓吾は少し驚いた顔をした。

「覚えてるのか？」

「…うん。その日のうちにお母さんから聞いたから。あの日の何日か前から、何日かあとまでずっと雨が降ってたの。川原には近づいちゃだめだ・ってお父さんたちにすごく言われてた。」

「…そうか。」

啓吾はそう言って空を見上げ、ふと黒い影を見つめた。

「雨、降り出すかもな。」

「…え？」

問い返したたつきに、空の二画を示す。

「ほら、雨雲。動きが早いから、そのうちこっちに来るかもしれない。急いだ方がいいかもな。」

「一応、傘はいれてあるけど…」

たつきはそう言って啓吾が肩にかけているかばんを示す。

「身体冷やしたら大変だろ？」

さりげない気遣いが上手くなった夫に、たつきはちょっと照れ臭くなった。

六月十七日。

それは、一護たちを探す者たちが一堂に会す日。それがどうして彼らが失踪した日ではないのか。

事の発端は、ルキアの提案に因る。

黒崎家が一年に一度、それぞれ学校や仕事を休んで必ずある場所に行く日なのだ・と。

それが、母親の命日だと聞いて、母親は虚に喰われたのだと聞いて一護を庇ったのだと聞いて、死神たちにも、そうでない者たちにも思うところは多かつたのだけれども。

黒崎家が、いつか何処かを訪れるとしたら、六月十七日に母親の墓地を訪れる可能性が最も高く。

そして、訪れないのだとしたら、せめても自分たちが墓参りをしたいと思ひ。

いつのころからか、年に一度この日に集まることになった。

参加者は年によるが、今年はクラスメートと、死神からは冬獅郎以外の先遣隊メンバー、浮竹、京楽に、京楽についてきた七緒と、乱菊についてきたイズルと修兵、そして毎年参加している花太郎と岩鷲という面々が参加していた。

やがて、啓吾が言った通りに雨が降り出した。

それでもさほど強くはなく、折角来たのだから参っていこうということになった。

先頭を歩いていたルキアが、目指す墓石の前に先客を見つけ、足を止める。

降りしきる雨も気にせず、たたずむ三人の人影。

三人とも明らかに背が違うが、外套を羽織り、更にそれについているフードを被っているため、それ以上は性別すらわからなかった。

最も背の高い者が、おもむろに膝をつき、墓に向かって頭を垂れる。
祈りのように、謝罪のように、誓いのように。
それが誰だか、天啓のように閃いて。

考えるよりも早く、ルキアはその名を叫んでいた。

「一護！！」

a r e u n i o n i n t h e r a i n (後書き)

タイトル日本語訳は「雨の中の邂逅」

ネタバレが怖くてあとがきが書きづらいです(笑)

一護たちは三十歳になりました。

一護もいろんなことがありましたけど、もちろん仲間にもいろんなことがあったはずなので、様々な変化を書きました。

特に現世組は成人したので結婚とか出産とか、今までの彼らと違う彼らを書けそうな行事を迎えてもらってます。

もちろん、本質は変わっていないでしょうけれどね。

ルキアの兄離れも進んでいた(笑)

それでは感想などお待ちしております。

d i v i d i n g s w o r d (前書き)

三十八話の終わりと同じ時から始まります。

一護は、弾かれたように立ち上がり、立ち尽くした。

一番小さな人影に強く袖をひかれるが、かつての仲間を見つめたままの目は彼の思考を停止させた。

逃げなければ、でも。

葛藤と、そして何かわからぬ強い感情とがないまぜになって、一護は根が生えたようにその場から動けなかった。

そしてそれに異変を感じた死神たちは瞬歩であつという間に三人を包囲する。

すると、その間に立つように幾人もの人影が現れた。

その者たちは一護たちと同じ外套を着、フードを被っているが、一護と違って顔のほとんど覆う布を巻いている。

そして、思わず肌が粟立つほどの警戒心を死神に向けていた、一斉に抜刀し、構えたそのどこにも隙はなく、手練だとすぐに分かった。

死神たちもすぐに抜刀し、一瞬にしてその場の空気は張り詰める。

刹那、浮竹と京楽が互いに目を見交わした。

だが二人はすぐに目をそらし、まるでしめし合わせたかのように恋次の正面に立った男を見据えた。

その男が、低い声で隣にいた者に命じた。

「先に行け。後で追いつく。」

は、と短く返事をする、その男は一護に近づき、強くその手を引いた。

一護ははっとしたようにその男を見て、とっさにその手を振り払った。

「……てめえらが、一護に何かしたのか。」

恋次が、蛇尾丸を握る手に力を込める。

フードをかぶっていてよく見えなかったが、一護は痩せたように見えた。

何かに、巻き込まれていたのか。

正面に立った男を睨みつける。

「答える必要はない。」

その答えを聞いて、恋次は勢いよく斬りかかった。

「ふざけんじゃねえぞっ！一護は俺らの仲間だ！」

「恋次っ！」

走りだした恋次を見て、ルキアが声を上げる。

不用意すぎる。相手がどう出るか、まだわからないのに。

だが恋次はそのまま蛇尾丸を振りかぶり、力の限りに振り下ろした。

ガキン、と重い金属音がした。

「……………一、護？」

恋次が、驚いたように蛇尾丸を受け止めた者を見る。

蛇尾丸を見覚えのない刀で受けていたのは、一護だった。

その表情を伺う事は出来ない。

上段から斬りかかった恋次の一撃を水平に構えた刀で受け止めた一

護は、その刀の下で俯いていた。

ぎょっとした恋次は慌てて刀をひく。

だが、一護は誰とも目を合わせようとはせず、ただ足元に視線を落としていた。

驚いたのは、恋次をはじめとした仲間達だけではなかった。

一護を囲むように立っていた者たちもまた、呆気にとられたように

一護を見ていた。

「……い、一体」

一体、何故

そう問おうとした護衛士の言葉を遮るように、一護は言った。

「悪い。…こいつらには、手を出さないでくれ。」

ゆっくりと下ろした刀を、がしゃん、と取り落とす。

それを拾おうともせず、一護はふり返ってその護衛士を見た。

「お前らに、役目があるのはわかってる。でも、…見たくないんだ。」

「

お前らと、あいつらが戦うのは。

そう小さくつけたした一護に、護衛士は黙って頷いた。

「…わかった。」

任務中にもかかわらず敬語を使わないのは、彼なりの気遣いなのだろう。

仲間たちに今の立場を知られまいとする自分への。

ようやく、一護は静かに息を吐いた。

「……一護？」

ルキアの声が聞こえて、一護は再び凍りついたように動けなくなつた。

仲間たちの声は、一護から冷静な判断力を奪うに足るものだった。

「どつする。」

目の前の護衛士が問いかけてくる。

「……」

答えられなくて、一護は静かに目を伏せた。

「一護……」

恋次の声を聞いて、一護はぐつと奥歯を噛んだ。

「突破するか」

護衛士のその一言に、ゆるく頭をふつた。

確かに護衛士たちの実力なら、仲間たちに怪我をさせずにこの場を突破する事は容易いだろう。

だけど、そうしてはならないと直感的に思った。

多分そうすれば、俺は…壊れる。

それが自己防衛だと気づいて、自嘲のような笑みを内心に浮かべた。今この場から逃げ出せば、自分は一つの存在の間で引き裂かれるだろう。

そして、墓石の前に立つ二人を見る。

一護の肩ほどの背丈の人影が、最も小さな人影を庇うように抱き寄せ、片手で抜刀していた。

一瞬、迷うような目をして、一護はすっと目を伏せた。

もう、自分が何をしていたのかわからなかった。

「一護」

ルキアの声がする。

「どうするんだ」

護衛士の再びの問いかけに答えようとして顔を上げたとき、不意に仲間たちの姿が目に入った。

彼らは訳がわからないなりに、自分の事を案じる表情を見せていた。

十四年間、ただの一度も連絡一つよこさず、それどころかどこに行くかすらも告げずに勝手に消え去った自分のことを、それでも信じて待っていてくれた。

その事実が、不意に胸を突いた。

全てを話さなければ。でも、今はその時ではない。

でも、逃げ出してはならないとも唐突に思った。

自己が引き裂かれるからではなく、信じ続けてくれる仲間の為に。

「少し、話してもいいか。」

その声は、自分でも不思議なほどにしつかりとしていた。

「……だが、」

護衛士が反対する理由はよくわかっている。

外の者へ、我らの情報を流してはならぬ。よいな。

こつちへ来る前に、主上はそう言った。

それは、どういう意図によるものなのかはわからない。

掟に従い、王族に関する情報を秘匿するためか。

あるいは、今の状況を知られまいとする俺へ大義名分を与えるためか。

わからないが、主上がそう言った以上は、従わなくてはならない。

「わかつてる。あの方との約束は、護る。だから。」

必死な一護に、護衛士も折れざるを得なかった。

「……わかった。チビと、小娘は見張っておく。……あいつらも馬鹿じやねえから、どうしたらいいかはわかつてるだろうけどな。」

チビと小娘とは、冬獅郎と桐生のことだろう。

自分たちを取り囲む仲間の中には、彼らの今の立場を知るものが大勢いる。

もし出てこれば、自分の立場を推測されかねない。

そこまで気遣ってくれる護衛士に、ありがとうと礼を言った。

「……だけど、これだけは離すなよ。」

そういつて一護の足元に落ちた刀を拾い、差し出す。

「君に何かあれば、俺たちも無事では済まないんだ。」

そう言った護衛士に一護は頷き、受けとった刀を鞘におさめた。

そうしてその場から消え去った護衛士たちの瞬歩ではないその早技に、死神たちは動揺した。

だが、それは気にも留めずに一護は墓石の前の二人に歩みよる。

僅かにかがんで、背の高い方の顔を見た。

「ごめん。…大丈夫か？」

ええ、と凜は小さくうなずく。

それを見た一護は更に屈み、最も小さい人影と目を合わせた。

「ごめん。驚かせたな…少し、こいつらと話す。怖かったら、離れた方がいい。」

そう言われた夏梨は、首を横に振った。

「大丈夫。」

そう答えると、一護は驚いた表情を見せた。

「いいのか？」

「うん。…いくら凜姉がついてくれてても一兄が心配だしね。」

力強い声に、一護は少し安堵した。

「…わかった。」

そして一護は小さくため息をつき、ふり返った。

やはり、視線を合わせる事は出来なかった。

「十五年ぶりに会って溜息ついてんじゃねーよ、馬鹿。」

顔を上げると、先ほどと変わらぬ場所に恋次が立っていた。

その変わらなさに、考えるよりも早く言葉が口を衝いて出た。

「十五年ぶりじゃねえ。十四年ぶりだ。…ぼけたんじゃねーのか、

お前。」

「んだとお!？」

「やめんか、恋次。」

やはり相変わらず突っかかるうとした恋次を、すぐ脇にいたルキアが制した。

そのまま、ルキアは真つ直ぐに一護を見据えた。

一護の目に、警戒する色が映ったように見えた。

「無事、だったのだな…」

小さく吐きだされた言葉を聞き取れたのは、隣にいた恋次だけだ。

「……何があつた、一護。」

言外に全部話せというその言葉に、一護はぐつと奥歯を噛んだ。

「……………悪い……………」

微妙だがはつきりとしたその言葉に、ルキアは耳を疑った。

「何故だ！何があった？さっきの男はなんだ？……………お前は、この十四年間、何をしていた…？」

一息に吐きだされたその疑問が全てなのだというのは、わかっていた。でも、答える事が出来なかった。

「……………お前らには、関係ねえよ。」

例え、彼らに恨まれても、事実を話すことはできなかった。

「ふざけるな！！」

不意に、怒声が空気を震わせた。

その声の主は、誰もが呆気にとられた。

常日頃から表情と言葉が乏しいと定評のある、チャドだった。

「たくさんの人が！ずっと探してきたんだ！なのに関係ないだど！？ふざけるな！全部話せ！！」

チャドに怒鳴られて、少なからず動揺した。

まさか、チャドに怒鳴られるとは思わなかった。

だけれど。

「ごめん。」

それしか言えない自分に、腹が立った。

拳に力を入れたチャドを、恋次が押さえる。

「…落ちつけ。…殴ったところで、何も始まらねえ。」

チャドは一瞬恋次を見て、静かに力を抜いた。

凧がそつと一護の手を握った。

「悪いとか、関係ないとかしか言わなかったら、何も伝わらないじゃない。…何も、話せないにしても、もう少し落ち着いて話しましょうっ？」

自分より頭一つ小さな凧を見つめる。

「最善を尽くすのが、私たちの務めよ。」
小さく紡がれた言葉に、一護は目を細めた。

「一護。」

たつきの声に、視線を動かす。

たつき達人間は死神の後ろに庇われていた。

そこからゆっくりと歩いてきて、一護の正面に立つ。

「夏梨ちゃん、だよな？」

そう言つてたつきは夏梨を手で指し示す。

外見的には十四歳ほどにまで成長したため、確信が持てなかったのだろう。

ああ、と答えた一護は、次の質問を予測して息をつめた。
ちゃんと答えられるだろうか。

不安になつたのは一護だけではなく、夏梨と凧もまた息をつめた。

「……おじさんと、遊子ちゃんは？」

やはり向けられたその問いに、夏梨が僅かに肩を震わせた。

だが、一護は自分でも意外なほどに動揺しなかった。
それに安堵して、ゆっくりと口を開く。

「……死んだ。何年か、前に。」

全く表情を見せない一護に、たつきは黙り込んだ。

「一体、何故……。」

ルキアが言う。

遊子はもちろん、父親もまだ寿命を迎えるような年齢では無い。
「……。」

だが一護はその問いには答えず、黙つて視線を落した。

「その人は……？」

ルキアが言う。目線の先は凧だ。

ここにきて再び思考が固まった。
言っているのか、これ。
適当にはしよれば言えなくもないけど。
けど。

十四年ぶりの再開でいきなり話している事実かこれ!?

勝手に慌てだした心に動揺する。
いや、とりあえず落ちつけ俺!

くすりと横で凜が笑う。

俺の考えが駄々漏れらしい。

きゅ、と握る手の力が少しだけ強くなった。

どうするの?と問いかける目は完全に笑っている。

それが少しだけ面白くなくて、軽く額を小突いた。

若干の開き直りも含めてルキアを見る。

「俺の嫁さん。……来年結婚するんだよ。今日は、母さんにその報告も兼ねて。」

内心の動揺は全く表情に出さずしれつと言つと、目に見えてルキアと恋次が固まった。

岩鷲と一角はものの見事に口をあけているし、イヅルと修兵はええっ!?!と声を上げた。

七緒でさえぱちぱちと瞬きを繰り返すその光景に内心ガッツポーズする。

さつきから動揺させられまくったんだから、大人げないのはわかっているけどこれぐらい許せ。

「ええと……」

見事にうるたえた乱菊さんが珍しい。

そうなんですか!おめでとうございますっ!と言えたのは花太郎だ

けだ。

もう一度小さく笑って、凜が外套のフードを脱いだ。

「はじめまして……凜、と申します。」

この場において、凜が美人なのと外面のおしとやかなのがこの上なく効いた。

「はっ、はじめましてっ!!」

敬礼でもしそうな勢いの恋次に腹を抱えて笑いたくなくなった。

ちなみに弓親はおもしろくなさそうに凜を見ている。

そっだよな、凜は綺麗だもんな。

内心ひとりごちて、ひょい、ともう一度フードをかぶらせる。

見上げてきた凜に肩をすくめた。

「雨にぬれる。……風邪ひいて、心配かけるわけにもいかねーだろ。」

「そっね……ありがと。」

もう一度恋次を見ると、ものの見事に固まっていた。

「……どーした?」

しばらく何と言おうか口を開けたり閉じたりしたのち、恋次は凜に声が聞こえないところまで一護をひっぱった。

「むちゃくちゃ美人な嫁さんじゃねーかよ馬鹿野郎!」

「お前、……言うに事欠いてそれかよ。」

「うるせー!! なんだってあんな美人なっ!!」

「俺が惚れたのは外見じゃねーし。」

「惚気るんじゃねー!!」

「別に惚気てねえ。」

「惚気てるだろー!!」

「うん。惚気てる。」

あ、吉良だ。

「いやーきれいな人だねー。」

「……京楽さん、……浮竹さんまで。」

ゆったりと歩み寄ってくる二人を見る。

「うん。……今日は、お母さんの命日なんだろう？ 朽木から聞いてね。みんなで、毎年来ていたんだ。」

「……ありがとうございます。」

素直に頭が下がった。

道理で、墓が綺麗なわけだ。

「しっかりした人のようだね。」

凜を見て浮竹さんが言う。

「ええ。……頼りにしてるんです。一方的に迷惑かけてばかりなんですけど。」

「あはは。そんなことないだろうに。」

相変わらずの人のよい笑みにつられて僅かに笑った。

やっと、笑った。

ルキアはそれを見て心からほっとした。

ずっと警戒を崩さなかった一護が、ほんの少しだけ以前のように戻った気がした。

dividing sword (後書き)

タイトル日本語訳は「分かつ刀」

ええと、どこから謝ったらいいものやら。

とりあえず一つ目。

一心と遊子を退場させて、そしてそれをさらっと流して申し訳ありません。

あとでちゃんと書きますので、どうかご理解ください。

一応一護も幸せそうなのでどうかそれで。

凜の方は名前だけちよくちよく出てきていたので、気にしていらっしやっただ方もいたのでは？

これまであとがきでもあえて触れずに来ましたが、それはこのためです。

こうなるにいたった経緯もそのうち書くつもりです。

そして今回のポイントは素で惚気る一護だったり

そしてお詫びをも一つ。

文章量が増えてきていますね(汗

まとめようとは思っていますが、どうにも...

一応一話のノルマを2500文字以上というかその前後でおさめるように、としているにもかかわらず今回に至っては5268文字といっ...

倍ちゃんと自己ツッコミを入れてしまいました。

どうかこれからもこの量にお付き合いくださいませ。

それでは感想などお待ちしております。

please forget me (前書き)

三十九話の終わりの時から始まります。

please forget me

「黒崎。」

雨竜に呼ばれて、一護はゆっくりと視線を動かした。

「さっきのは一体何者なんだ？死神か？」

すぐに目をそらした一護は、呟くように答えた。

「お前らには、関係ねえよ。」

ようやく、雨竜は自分が感じていた違和感の正体に気付いた。さっきから自分の今の状況などについて聞かれた時の一護は、怯えているように見えるのだ。

雨竜もまた、恋次と同じ疑念を抱いていた。

「関係ないだろう。…あいつらが、君たちに何かしたのか？」

「違う！」

即答した一護の声は力強い。

でも、だからこそ疑念は深まった。

「脅されているんじゃないのか？」

「違う。」

「じゃあどうして何も答えないんだ。」

「それは……」

一護はまた視線を落した。

上手く答えられない。

誤解を解かなくてはいけないのに、それができない。

「一体、何があったんだ。」

「……」

また何も言えなくなつて、一護は黙り込むしかなかった。

「一護君。」

「…何、すか？」

浮竹に呼ばれて、のろのろと返事をする。

「場所を移動しても構わないかい？君たちも、雨にぬれたままじゃ辛いだろう。」

浮竹の言葉に他意はなさそうだ。

でも、護衛士は目の届かないところに移動されるのを嫌がるだろう。

「……あまり遠くには……」

「なら、この上のお堂ならいいか？」

ルキアが言うと、一護は少し迷うそぶりを見せてから頷いた。

「中に入らないのかい？」

京楽が声をかける。

一護と夏梨、そして凧は堂の中には入らず、濡れ縁に腰かけていた。

「…あいつらが、嫌がると思うんで。」

「さっきのやつらか。…一体何者なんだ？」

一角の問いに、やはり一護は答えなかった。

「はい。濡れたままにしておくと、風邪ひくわ。」

凧が差し出した手拭いで顔を拭く。

すでにぬれ鼠だが、多少はマシになった。

「……浮竹さん？どうかしたんすか？」

顔を拭いていた一護を、横から覗きこんできた浮竹に問いかける。

「いや……ひよつとして、髪型かえたかい？」

そう言われた一護は一瞬固まり、フードを深くかぶりなおした。

「おー何だよなんだよ。見せろよ。」

強引にフードを取ろうとした岩鷲の手を振り払った瞬間に、いろんな人たち（主に乱菊）のスイッチが入った。

「見せないさいよ。なに？どんななの？」

「往生際が悪いぞ一護！見せぬか！」

「あっ！」

抵抗むなしくフードを取り払われ、一護はバツが悪そうに視線をそらした。

「……………髪形変えたっていうか…伸ばしたんだ。」

たつきが言うと、今度はずいぶん機嫌が悪そうな声を出した。

「伸ばしてんじゃない。切らせねえんだよ、周りのやつらが。」

その先は外套の内側に流れていて見えないが、首の後ろで結えるほどの長さはある。

「ちよっ…どれだけ長さあるの？全部出しなさいよ。」

嬉々として手を伸ばした乱菊をかわして立ち上がる。

「冗談じゃねえし。誰が見せるかつ。」

「膝ぐらいまであるよー。」

「夏梨っ！！！」

さらつとばらした夏梨に恨みの視線を投げかけ、次いで聞こえた反応に辟易した。

「膝あ！？」

「どれだけあるんだよ。」

「おい、一護本当に見せろ」

「嫌だっつつてんだろ！？」

「いーから見せろって」

「断るっ！」

ぎゃーぎゃーとはじまった一護vs仲間のじゃれ合いを、七緒は目を細めてみている。

「どうかしたの？七緒ちゃん」

京楽が問いかけると、いえ、と七緒は首を振った。

「雰囲気が変わったような印象をうけていたので、少し安心したんです。…やっぱり、気のせいだったみたいで。」

付け足した七緒を、京楽はまじまじと見つめた。

「ちよっ…なんですか隊長。」

「いやあ…七緒ちゃんは鋭いなあとと思ってさ。」

そっかそっか、そういうことか、とひとりごちる京楽に、七緒は首を傾げた。

「どういうことですか？」

「七緒ちゃん、彼の雰囲気が変わったような気がしたって言っただろう？…僕も何かが変わった気がしていたんだけどね、七緒ちゃんのおかげでようやくその正体がわかったんだよ。」

わかりません、と言った七緒に京楽は意地の悪い笑みを向けた。

「ここからは自分で考えなさいな。…多分、それが彼が隠そうとしている事だから。」

最後の部分は低くなって、七緒には聞きとることができなかった。

「……京楽。…お前も、そうだと思うか？」

同じく低い声で、浮竹が聞いた。

「信じられないけどね。でも、さっきのはあの人だった。だとしたら、…そういうことなんだろうねえ。」

京楽が答えると、浮竹は小さな溜息をついた。

「俺たちは、やはり彼に護られているのかもしれないな。」

「今に始まった事じゃないさ。」

二人は視線を一護に向けて、その咀嚼し難い事実を何とかして受け入れようとしていた。

「……いい加減やめねーか。俺は絶対見せねーぞ。」

「往生際が悪いなあ一護。いーじゃねーか見せるぐらい。」

「断るって言うてんだろぅが！」

「絶対嫌だ。見せろ。」

「……………」

「もういい加減やめたらどうだ。話が進まないだろう。」
見かねた雨竜が声をかける。

一護にじゃれに行つたのは死神ばかりで、人間たちは堂の中に入つていた。

チツとおもしろくなさそうに恋次が舌打ちして一護から離れる。
対する一護はほつとしたように息を吐いた。

「…黒崎。」

ほつとしたのもつかの間、とばかりに、雨竜が声をかけた。

「聞きたいことがある。答える。」

その態度に、一護は視線を厳しくした。

「全部答えられる訳じゃねえぞ。」

「わかっている。答えられる範囲でいい。」

一護は、何かを悟っている雰囲気を雨竜に感じ溜息をついた。

こういう手合いが一番やり辛い。

内心辟易しながらも、一護は雨竜に向き直つた。

「わかつた。…で、聞きたい事つて何だ？」

「斬月、一体どうしたんだ？」

雨竜はそう言つて凧の横におかれた日本刀を指す。

さつき座る時に一護はそこへ置いたのだ。

「置いてきた。あれは目立つからな。」

けるつとした顔で答えた一護に、ルキアは不審な目を向けた。

「斬魄刀を置いてきただと？ 貴様それでも」

「死神代行なら、とつくに辞めたりもりだぜ。」

そう言つて一護は、再び凧の隣に腰かけた。

「何言つて…」

「あつちじゃ、死神は必要ねえからな。……俺は、あの時から一度も戦つてねえよ。」

そう言つて一護は降りしきる雨にけぶる林を見た。

「あの時？」

「藍染と戦つた、あの時からな。」

「……どうして。」

ルキアが言つ。

その声は震えているように聞こえた。

「言つたる。あつちじゃ死神は必要ない。他にすることもあるしな。」

「

嘘だ！」

ルキアが叫ぶ。

一護はその声に驚いたように振り向いた。

「何だよ、いきなり。」

「虚が出ぬ場所など、この世にあるはずがなかるう！死神が必要ない場所など無い！貴様は、斬魄刀を持つこともなくここへ来た。それは、ここで誰かが虚に襲われても見殺しにするということだ！違うか！」

「……」

「貴様は、死神代行を辞めたと言つたな。それは、虚に誰かが襲われても自分は何もせぬということだ。私の知っている貴様は、そんな男ではない！」

「……ルキア。」

一護はルキアから視線をそらし、再び林を見つめた。

「確かに、あつちにも虚は出る。……でも、あつちにはあつちのやり方がある。俺の手は必要とされてない。死神代行としての俺の手なんてな。だから、俺は違う方法でやってるだけだ。……別に、虚に襲われてるやつを見殺しにしてるつもりはねえよ。」

「……」

ルキアは、一護を見つめた。

一護の言っていることの意味がわからない。

それはやはり、自分の手では護らないと言っているように聞こえた。そんな一護らしくないやり方をする理由が、わからない。

「ところで、質問を続けても構わないか？」

「ああ。何だ。」

雨竜が再び問いかけた。

「今、どこに、誰と居るんだ？そして何をしている？」

「どこにっつてのは答えられねえな。誰とっつてのは、親戚だ。何をしてるっつてのにも、答えねえよ。」

「…そうか。なら次だ。何故、君は年をとっていないんだ？」

雨竜が言った問いは、誰もが聞きたいと思っっていたことだった。

一護は、十四年前よりは確かに年をとってはいるが、それも成人過ぎまで。

あきらかに、三十ではない。

「遺伝だろ。うちの連中みんなそうだし。なあ？」

同意を求められた凧は頷いた。

「みんなそうよね。たいていこのぐらいで成長は止まる。何でかは分からないけど。」

「止まる？完全にか？」

今度は修兵が問いかけた。

「ああ。親父も、こっちに居る間は鬼道で色々細工してたらしい。

本当、あれ見たときには心臓止まったよなあ。」

一護がそう言った横で夏梨も同じく遠い目をした。

「どうせならずつとあのままでいればよかったのに。若い時のヒゲなんか写真だけで十分だよ。」

「……若返ったって事？」

たつきがおそろおそろ問いかける。

「そ！もう本当に心臓が止まるかと思った。」

本当にうんざりした声色の夏梨に、たつきは自分の身に置き換えて考えてから深く同情した。

確かに自分の父親がいきなり二十年も若返ったら普通は心臓が止まる。

「……まあ、それはそれとして。最後の質問だ。」
雨竜はそう言っつてメガネを押し上げた。

「どうして、僕達に何も言わなかったんだ？」

一護は雨竜を見た。

その目は何かを問いかける風でも、驚いている風でもなかった。

強いて言うなら、続きを聞きたいと言うような、そんな目だった。

「浦原さんがね、黒崎君のお家を調べたの。そしたら、黒崎君はずっと迷っつてたんじゃないか・って。」

「……どういう意味だ？」

「ずっと部屋の中を歩き回っつてた・って言っつてた。迷っつてたから、そんな風にしてたんじゃないか・って。」

「……」

「私たちが、相談になることもできなかつたの？」

織姫が言っつと、一護はまた視線をそらした。

「言っつてくれれば、相談に乗ることもできたはずだ。何かの手助けもできた。……そもそも、こんなに心配しなくてすんだ。いろんな人たちが、傷つかなくてすんだはずだ。」

一護は誰にもわからないように溜息をついた。

全くだ、と心中で雨竜に同意する。

自分のせいで、いろんな人が傷ついた。

自分の、せいで。

「我々は、仲間ではなかつたのか？」

ルキアの声が、耳に痛かつた。

ぶっつん。と。

口を開こうとした一護の耳に、何かが破裂するような音が聞こえた

気がした。

「ふざけんなよ。」

その音源が何かわかって、一護の背に冷たい物が流れた。

「一兄が、そんなの全部かって無かったとも思ってたのかよ！
ふざけんな！一番傷ついたのは一兄に決まってるだろが！」

「か、夏梨。」

立ち上がった夏梨を止めようと一護が声をかける。

が、

「一兄は黙ってる！！」

「お…おう。」

一喝されて引き下がらざるを得なくなった。

「一兄が結局一番傷ついたこともわかんねーのかよ。こんな好き
でする奴だとも思ってたのか！一兄の仲間だってんならそれぐら
いわかれよ！！」

「…そ、そういうつもりでいったわけじゃ…」

「じゃあ何だよ！そういう意味だろ！？仲間だったから、相談して
ほしかったって言ったじゃん！そんな勝手な理屈通す前に一兄が
どうしてそんなことしたか考える！」

怒り心頭の夏梨に誰もがたじたとする。

「一兄が、傷つかなかったとも思ってたのかよ。」

一護は今日何度目かわからない溜息をついた。

「一兄も一兄だ！」

「えっ！？」

急に矛先が、しかも自分に代わって一護は思わず声がひっくり返っ
た。

「すごい理不尽なこと言われてんだぞ！何か言い返せよ！」

胸ぐらをつかまんばかりの夏梨に、待った待った、と声をかける。
手はすでに頭の横、ホールドアップだ。

「いや、言いたい事はとりあえず全部お前に言われたし。だからと

りあえずいいかな」と。

「んなもん私に言われる前に全部自分で言いやがれ！」

「お：おう。そうだな。」

怒りさめやらぬ、という感じで夏梨は再び腰かけた。

「夏梨ちゃんは、今何してるの？それも言えない？」

おそろおそろたつきが問いかける。

誰か何か言え、と人間&死神の間でつき合いがあった結果だ。

「：学生。去年入学したの。」

そっけなく夏梨が答える。

「学生か：友達、できた？」

何となく気になったのはその事だ。

向こうで上手くやれているのか、それだけでも知りたいと思った。

「まあまあかな。あんなもんでしょ。」

特に興味もなさそうに答えた夏梨に、一護が苦笑した。

「あんなもんでな、友達大事にしるよ？」

「わかってるよ。そんなことわれなくなつて。」

その会話に何かを感じて、織姫が一護に問いかけた。

「黒崎君も、学校に通ってたの？」

一護はふり返って、首を横へ振った。

「時間、無かつたからな。通ってねえよ。」

「：知り合い、いるのか？」

学校へ通っていないというのなら、友達はこちらでできたのだろうか。

窺うような雨竜の言葉に、一護は少し笑った。

「まあまあだな。仕事関係で：つてどこか。」

そう言われて、仲間は顔を見合わせた。

「……………黒崎。」

雨竜が、改めて一護を呼んだ。

「……こつちへ、戻ってこい。」

一護は眉間にしわを寄せた。

「何でだよ。」

「君、今の自分の状態に気付いているのか？」

雨竜の目には、ただ一護を案じる色だけが見えた。

それが、一護にはわからなかった。

「痩せたことに、気づいているのか？」

そのことか、と少し納得し、口を開こうとした一護を遮って、雨竜は話し続けた。

「どうして、君がそこまでしなくてはならないんだ？夏梨ちゃんの言い方じゃ、君は望んでこんなことをしたわけではないんだろう？どうして、君がそこまでしなくてはならないんだ？」

「…痩せたのは、ここ最近忙しかつたからだろ。別に大したことじゃない。それに、俺がここまでする理由はちゃんとある。言わねえけどな。」

「言え。」

恋次が言うと、一護は首を横へ振った。

「言わねえ。言つたら、お前らには関係ねえよ。」

「…ふざけんなよ。」

「ふざけてねえ。」

「ふざけてるつつつてんだろうが！」

「こつちは真面目に答えてるさ！」

声を荒げた恋次に、一護も負けじと音量を上げる。

だが、決して声を荒げる事はしなかった。

「……ここには、俺は必要ないはずだ。けどな、あっちには俺を必要としてくれる人たちがいる。それが理由だ。」

沈黙に耐えかねたように、一護が言った。

それはあまりにも彼らしい理由で、だけど一つだけ納得できないことがあった。

「必要ない訳、ないでしょ。」

乱菊の声は震えていた。

「あんたが必要ないなんて、そんな訳ないじゃない！一体どれだけの人があんたに感謝して、あんたにまた会いたいつて思ってると思ってるの？…ここにいる私たちがあんたを必要としないんじゃないの？」

一護は、ただ首を横へ振った。

「……俺がいなくなっても、ちゃんとやってきてるじゃないっすか。俺はここに必要ない。そういうことだろ？」

再び口を開こうとした乱菊を、一護は静かに制した。

「そういうもんだろ？誰かがいなくなっても、世界はちゃんと回るんだ。」

それはまるで人の死について言っているようで、だから誰も反論できなかつた。

人とは、そういうものだ。

誰かがいなくなっても、世界は進んでいく。

喪失の悲しみは、いつしか誰もが乗り越える。

そうして世界は変わらない。

「それでも、あっちには俺を必要としてくれる人たちがいる。俺に賭けてくれる人たちがいる。よそ者だった俺を仲間として受け入れて、俺を信頼してくれる人たちがいる。…だから、俺は護らなくちゃいけないんだ。」

一護の声に、回想から現実に戻された。

「……一護。」

ルキアはただ名を呼んだ。

そこに、一護がいると確認するかのよう。

「……一護君、一つ、いいかな？」

沈黙を破って、浮竹が一護に声をかけた。

「何すか？」

「あー……」

声をかけたはいいがそのまま何も言えなくなった浮竹を、一護は不審そうに見た。

「離れてもいいかな？…雨にぬれるけど。」

そういつて浮竹は堂の前の広場のようなところを示した。

「いいすよ。」

「で、何すか？」

仲間たちが聞き耳を立てているのが見える。

この距離なら会話は丸聞こえだろう。

それを指摘された浮竹は、構わないと言って、彼らに背を向けるように立っていた。

「さっきから、考えていたことがある。…君が行方をくりました、理由を。」

浮竹は探るような口ぶりで言った。

それは今から踏もつとしているその爆弾の程度を図るかのようだった。

浮竹は、もう一度だけ迷うようなそぶりを見せてからゆっくりと口を開いた。

「君は…なんじゃないのかい？」

浮竹は肝心な所を声にせず、口の動きだけで伝えた。

一護の目が見開かれたのを見て、凜は口元を押さえる。

浮竹の口は、確かに「王族」と動いたのだ。

「……どう、して」

擦れた声で聞いた一護の耳に、更に信じられない声が入った。

「やっぱり、そうなのか。」

気付けば、浮竹のすぐ脇に京楽が立っていた。

「なんで……」

一護の表情が苦痛に歪む。

「さっき阿散井君が切り掛かろうとしたのは、僕たちの知り合いだ。」

「

「……え？」

知り合い、ということとは、その護衛士が 雷雨が死神だった頃の事だろうか。

「……あの人は、俺たちの事を覚えていないかもしれないな。ほとんど話したことはなかったから。」

そこで漸く思い出した。

前に一度だけ、そんな話を聞いたことがある。

雷雨、竜、桐生は同時期に護廷にいたことがあるのだ、と。

だがそれは、桐生達が入隊してから雷雨が異動になるまでの1年足らずのことで、実際当時話したことはほとんどなかったとも。

だが覚えていた。

覚えていて、あまつさえ今の所属さえ知っていた。

浮竹と京楽が気づいたということは、そういうことだ。

「そういえば、そんな話を聞いたことがあります。……全く、よくそんなのをあの一瞬で思い出せましたね。」

呆れたように呟きながらも、一護の目は全く油断していなかった。

「……一護くん。」

「……浮竹さん。あんたはこっちに関わっちゃ駄目だ。わかりますよね、それくらい。」

そう言った一護の目は、今までに見たどんなものよりも昏い。

「……僕たちを、脅すつもりかい？」

浮竹が言つと、一護は首を横へ振つた。

「警告です。…今はまだ、ね。」

ルキアは反射的に身構えた。

その様子を一護は視線の端に捉えながらも無視した。

「誓ってください。あんたたちは何も気づかなかつた。何も知らないし、何も聞いてない。…あんたたちにも大切なものがあるはずだ。それを護りたいのなら」

「何も言つな、と？」

京楽が言つ。

「はい。」

はつきりと言いきつた一護に、仲間たちは息をのんだ。

それは、隊長二人を脅す発言だ。

まして一護は彼らを信頼していたはずで、今の発言の真意が読み取れなかつた。

でもそれが本気なのは、会話の中心にいる3人の間に張り詰めた緊張から明らかだつた。

「…誓つていただけますよね。」

雨の音が耳に痛い。

一護の心に、再び雨が降りだそうとしていた。

please forget me (後書き)

タイトル日本語訳は「忘れてくれ」

もはや恒例となった謝罪から。

文章量が多くて本気で申し訳ない。

7518文字ということは3倍ですね。ノルマ制度やめようかな、もう。

そして二つの振り子はあの人たちでした。

予想当たりましたかー？

一護の髪型については多くを語りません(笑)

いやな方はもちろん今のままでも大丈夫。

ぶっちゃけ話に全然かわかってこないどうでもいい設定ですから。

どうでもいい設定といえば、一心のはギャグ目的で放り込んだのでそれもどうぞ無視して下さい(笑)

もちろん想像していただいてもかまいません。

きつと若いころもかっこよかったでしょうしね

一護がどうしてこんなに回りくどい言い方をしているのか、というのはもう奴の不器用さの表れです。

これからじっくり書いていきますので、どうかキャラ崩壊などと言わないでください。

そして夏梨ちゃんに深く感謝。

もう私が書く一護は不器用で不器用でしかたないから、代わりに言いたいこと言ってくれてありがとう。
これからも活躍してね！

なんて（笑）

P.S.

whispersにて「RO2ふさわしい象徴」更新いたしました。

P.S.のP.S.

ただ今リクエスト企画実施中です。

詳しくは活動報告まで！！

終了いたしました。ご協力ありがとうございました。

それでは感想などお待ちしております。

M e a n i n g s o f e x i s t e n c e (前書き)

四十話の終わりと同じ時から始まります。

Meanings of existence

雨が降る。

雨。 雨。

雨が降る。

心の中に。

心の中に。

雨が。

「一護。」

身を打つ雨よりも冷たいその声を聞いた時、一護は自分のするべき事をはっきりと自覚した。

「...どうした？ルキア。」

敢えて軽い口調で言う。

悟られてはならない。

凜や夏梨に、心配をかけてはいけない。

無理をしているなんて、言われなくてもわかっている。

心配かけまいとしている事が、ばれてるのだってわかっている。

それでも、これは意地だ。

「…貴様、その言葉の意味をわかっておるのか？」

ルキアの声は冷たかった。

恋次が、思わずまじまじとルキアを見る。

自分の肩よりもまだ小さなその背は、震えていた。

「意味？」

分かってるさ、それぐらい。

隊長を脅すという事は、護廷十三隊を　死神を敵に回すという事だ。

真実とは違っけれど、そう見えるはずだ。

むしろ、それが狙いなのだから、そう見えなくては困る。

「ふざけるな。隊長を脅しておる事を、自覚しているのであるろう？
何故そんなことをする。」

ルキアは声を荒げなかった。

それでも、その声には十分な凄みがあった。

さすが、五席だな。ちゃんと務まってるじゃねえか。

心の中で、そう呟く。

正月に、ルキアが、恋次が、と白哉が話す。

五席になったと聞いたときは驚いた。

ルキアの実力は知っている。

その真面目さも、なにより職務に対する誠実さも、席官にふさわしいものだ知っている。

だから、驚きはしたけれど、心配はしなかった。

それは、正しかった。

心配しなくてもいいんだ。

こいつらはこいつらで、上手くやってるのだから。だから、自分がするべき事は一つだけ。

もう、俺の存在から解き放とう。

お前らがこれ以上俺のせいで苦しむ必要はないんだ。

多少荒療治だけど、赦してくれよ。

わずかに一護の瞳が揺れたのに気づいたのは、そばにいた浮竹と京楽、そして凧と夏梨だけだった。

彼らは皆、一護がしようとしていることに気付いていた。

夏梨が、ぎゅっと凧の袖を握りしめる。

浮竹と京楽は、誰も気付けないほどに小さく一護に頷いた。

「脅してるつもりはないな。脅すつもりなら」

刹那、一護の姿が掻き消える。

次の瞬間に目に入ったのは、ぐらりと傾いだ隊長二人の姿。

そして。

大きく目を見開いたルキアの、その眼前に現れたのは白い光だった。

「……どうするぞ。」

誰のものかと疑いたくなるような、そんな冷たい一護の声が聞こえた。

ドシャッと、どこか遠くでたてられた音が、ルキアの耳に滑り込む。

「京楽隊長！浮竹隊長！」

また遠くで、伊勢副隊長の音がする。

「……いち、いっ？」

遠くで、自分の声がした。

誰かが、小さく息を飲んだ。

こんな光景を目にすることになるなんて誰が思っただろう。

一護が、ルキアに刀を向けていた。

その光景に驚いたのは何も傍観者達だけではない。

刀を向けられたルキアも、その隣に立つ恋次も、その白い光を信じられないものでも見るような目つきで見っていた。

「一護、アンタ自分が何してるかわかってるの!？」
たつきの悲鳴のような声が響く。

啓吾はその肩を抱く手に力を込めた。

対して、一護の声は風のように穏やかだった。

「ああ、わかってるさ。…ルキアを斬ろうとしてる。そうだろ?」

「そうだろうって…」

織姫がそう言ったきり絶句する。

一護が、誰よりも仲間想いだった一護が。

そう思っただけで、誰もが胸が潰れるほど苦しかった。

そして、一護に気をとられていた仲間たちは、だから一瞬反応が遅れた。

ザクッと地面を踏む音がする。

広場に、一人の護衛士が現れていた。

「時間か?」

振り向かずに言った一護に、雷雨は見えるわけもないのに律儀に頷いた。

「ああ。…ところで、これはどうした騒ぎだ?」

一瞬遅れて、七緒とイズルが倒れた浮竹と京楽を背後に庇うように、雷雨の前に立ちはだかる。

「ちょっとした手違いだ。誰かのせいだな。」

お前のせいだぞ、と嫌味を込めていった一護に、雷雨は飄々として返した。

「そうか。誰のせいだか知らないが、大変だな。」

一護はその返事を黙殺すると、すっと刀を引き鞘におさめた。
ふり返ると、いつの間にか凜と夏梨が雷雨の横に立っている。

「帰るか。」

先ほどの凄みが嘘のように、優しく温かい一護の声がその場に響く。その感情の差に、ルキアはうすら寒いものさえ覚えた。

「ふざけんなよ。」

恋次が言う。

その声は、怒りで震えていた。

背を向けた一護の、痩せた肩を掴む。

「てめえ、今何したかわかってんのか。」

怒りに燃えた瞳を、一護は冷たい視線で受け止めた。

浮竹と京楽を気絶させ、そしてルキアに刀を向けた。

浮竹と京楽を狙ったのは、二人が隊長だからだ。

死神として最も高みにいる二人を傷つければ、それは死神に対する宣戦布告になる。

ルキアを狙ったのは、ルキアが象徴だからだ。

自分が死神になったきっかけであるルキア。

仲間になるきっかけであるルキア。

だから、ルキアに刀を向ければ、その絆を断ち切ることを一番わかりやすく示せると思った。

だから、自分がもう仲間じゃないとわかっているはずなのに、どうして恋次はこうやって訊くんだ？

何をしたか、わかっていないとでも思っているのか？
ルキアも、たつきも、恋次も。
どうして俺の行動の意味ばかり問い返すんだ。

「わかっていないとでも、思ってるのか？」

そのまま投げ返された質問に、恋次は動揺した。

否定の言葉を、願っていたのに。

一護は、毒気を抜かれた様な恋次の手を乱暴に振り払い、堂の正面にある階段を下りた。

自分に向けられた視線が、憎しみに変わっていくのを、その背にはつきりと感じながら。

そう、それでいい。

もう二度と会う事はないのだから。

一護は表情を全く動かさなかった。

少しでも気を緩めれば、謝罪し、全てを話してしまえばよかった。

ごめん。

心の中で、白哉達に小さく詫びた。

間に立つ人間には、辛い思いをさせてしまはずだ。
でも、こうするしかないから。

お前らも、俺を恨んでいいから。

不思議なほどに、心は静かだった。

そう、覚悟はとうの昔にしてあった。

すぐ脇を駆け抜けた人影に、一護は目を細めた。

目の前に立ちはだかった恋次を見る。

「どうした？」

言葉こそ柔らかだが、その声の冷たさに、恋次は鯉口を切った手に力を込める。

「行かせねえ。」

震えたその声は、雨音のせいで上手く一護の耳に届かなかった。

「悪い、聞こえなかった。…もう一回言ってくれねえか。」

「行かせねえつつつてんだ！」

今度の声は震えなかった。

恋次は、最初の情けない声が聞こえなくて良かったとさえ思った。

その強い声に、動揺した。

どうして。

どうして、離してくれねえんだよ。

行かせない、と恋次は言った。

こんなにひどい事をしてるってのに。

言葉は足りていないけれど、それでも、自分を信じると言っている
とわかった。

だから、戻ってこい、と。

俺がお前の立場だったら、やっぱり俺はお前と同じ事を言おうと思う。
でも、今の俺の立場は、ここだから。
だから、悪い。

誰もが固唾を呑んでこつちを見ているのがわかった。
その全てに見えるように、わざとゆっくり、芝居がかった素振り
で刀を抜いた。

「退け、恋次。」

「退けねえな！」

恋次はまた手に力を込めた。

俺は、斬れるのか、一護を。

自分に問いかけ、迷いを振り切るように一護を見る。

「どかねえってんなら、力づくで通るだけだ。」

そう言った一護に表情は無く、自分たちを何とも思っていないこと
だけが、はっきりと伝わった。

それと同時に、だからこそ躊躇い無く自分たちを斬るであろうこと
も。

「恋次ッ！」

再び、ルキアの声が響いた。

「だったらこつちも力づくだ。目エ覚ませ！一護ッ！」

恋次は蛇尾丸を一護に向けた。

迷えば、取り戻せない。

「お前は俺たちの仲間だ！んな訳わかんねえやつらのとこになんか
行くんじゃないねえ！」

恋次の真っ直ぐな言葉に、静かだった心に波紋が広がる。

微かに、一護の眉が動いた気がした。

そうだ、思い出せ！

心が歡喜に沸き踊る。

「てめえの居場所はここだっ！帰ってこい！一護！」
だが、一護にそれ以上の変化は見られなかった。

ぱちり、と一度瞬きをする。

心を閉じなければ、壊れてしまいそうだった。

「まるで、俺が洗脳されてるみてえな言い方だな。」
そう言っただけに苦笑を滲ませ、すぐに表情を戻す。

「できることなら斬りたくない。どいてくれ、恋次。」
誰もが、固唾を飲んで会話の行く末を見守った。

「退けねえな。」
恋次が力強く言い切る。

「第一、斬魄刀でもねえただの刀で俺を抜けるとでも思ってるのか、てめえは。」
馬鹿にすんじゃないやねえ、と吐き捨てる。

それを聞いて、一護は小さくため息を吐いた。

「そうか。残念だ、恋次。」

「え、」

誰も、その動きを捉えられなかった。

ようやく目に映ったのは、駆け出した一護と、そしてゆっくりと倒れてゆく恋次。

いつ刀を振るったのかも、いつ刀を鞘に収めたかさえわからなかった。

薄れてゆく意識の中で、恋次は辛うじて一護を視界の端に捉えた。その目は真っ直ぐに前を見つめていて、不思議とルキアを助けに瀕霊廷に乗り込んできたあの頃の面影に重なった。

だがすぐに意識は混濁し、手を伸ばすことも言葉を発することもできなかつた。

「恋次ッ！」

今度こそルキアの悲鳴があがる。

だが恋次はそれに応えず、ぐったりと倒れているだけだ。

一護たちの姿はとうに無く、霊圧すら感じられない。

誰もが、その圧倒的な強さと展開の早さに、瞬きすることすらできなかつた。

ようやく我に返ったルキアが恋次に駆け寄る。

織姫が傍に膝を付き、今にも治療を始めようとしていた。

小さく息を整え、集中する。

側にいる夫の存在が、心を安定させた。

「 双天帰盾」

即座に蒼い花のヘアピンが変化し、橙の光が恋次を包んだ。

が、すぐにその光は消え去った。

「……………え？」

「……………井上？」

織姫が小さな疑問の声をあげると同時に、ルキアがその顔を覗きこんだ。

「怪我、してないよ。多分……………気を失ってるだけ。」

呆然とした織姫の声を裏付けるように、恋次が身じろぎした。

「恋次！」

「……………あ？……………」

微かな呻き声を上げると同時に、恋次が目を開いた。

「阿散井、何があった？」

修兵が問いかけると、僅かに口を動かした。

……は、く……ふく……

すぐさまルキアがそれに反応した。

「まさか！一護は鬼道を使えぬはずだ！」

その声が恋次の頭に響き、思わず顔をしかめる。

白伏のぬけていない体はだるく、身動き一つとれなかった。

「……でも、間違いなさそうだよ。」

イズルが恋次の額に手をかざして残された霊圧を確認し、更にそれを払拭した。

やはりそれは白伏特有のもので、状況から考えて一護がかけたのは間違いない。

「……白伏は散々練習台にされたんだ。誰が間違えるかよ。」

イズルのお陰でようやく動けるようになった恋次が言う。

院生時代から、鬼道の 特にこういう類のものの練習は、互いに練習台になるのが一般的だ。

だから、間違えるはずがない。

それが例え、信じ難い事実を肯定するものだとしても。

「……落ち着いて考えれば、わかることだ。」

雨竜が言う。

「黒崎がここを去ってから、14年も経った。その間にあいつが成長していない訳がない。……それに、僕達が知っているあいつの強さはたった半年で身に付けたものだ。14年もあれば弱点を克服するのは容易いことだろう。」

ルキアが拳を握りしめた。

そうだ。

私が一護に出会ってから、一護が自分たちのもとを去るまでの期間は、たった6ヶ月　斬月を手にした本当の始まりからは3ヶ月強でしかない。

その何倍もの時が、あれから経ったのだ。

共に戦った時間は余りにも濃密で、僅かな期間の間に起こったとは、俄かには信じ難い。

だからこそ一護がいなくなってからからの時間は空虚で、再会したあの時は数時間ぶりに会っただけの気がしたのに。

その空虚だった時間は急に重みを増し、ルキアに現実を突き付けた。

「一体、何なのだ……」

ルキアが呟く。

その声はこれまでにないほど頼りなかった。

「朽木さん……？」

織姫が呼びかけるも、ルキアの目は茫洋として何も見ていなかった。

「私は、あ奴にとつてのなんなのだ……？……仲間では、無かったのか……？」

絞り出すような声に、織姫は胸が締め付けられるような気がした。

「それは……関係ないはずだ。」

「浮竹隊長……！」

浮竹は濡れ縁に座ると、頭をゆるく振った。

「ずーいぶん、鬼道が上手くなったもんだねえ。二人同時にかけるなんて大したもんだ。」

どうやら二人も白伏にかけられていたらしく、だるそうに肩を回した。

「関係ないって、どういう意味ですか？」

水色が言う。

久し振りに聞いたその声は、思いのほかしつかりとしていた。

「彼が俺たちの事をどう思っているかは関係ないだろう。大切なのは、俺たちが彼の事をどう思っているかだ。」

浮竹は、さつき一護がそうしていたように雨にけぶる林を見た。

「はぐらかさないでください！」

水色が言う。

その顔に、かつてのような幼さはない。

「一護がどこにいるか、今何をしているか、教えてください。」
言葉こそ丁寧だけれども、それには怒りがこもっていた。

「すまない。…それは、できない。」

死神でさえ、その言葉を疑った。

「何故ですか!？」

イズルが叫ぶ。

「…忘れる、と一護君は言っただろう。」

浮竹は半ば投げやりに言葉を紡いだ。

そんな彼を、今までに見たことがないと思った。

「脅しに、屈すると言つのですか？」

七緒が京楽を見る。

「……彼は強いよ。僕らじゃあ、勝てない。」

その精神は、もはや鋼だ。

何度も傷つき、叩かれ、その度に強くなる。

自分が何よりも護ろうとした仲間から恨まれても、自分の為すべき事を為す。

彼の本当の強さは、物理的なものではない。

かつて彼の弱点でもあり、力の源でもあった、心だ。

長い時間を生きてきたけれど、他より強いつもりではあるけれど、彼の強さには、敵わないと思った。

「…忘れよう。」

いつもと同じ口調で、いつもと変わらない表情で。

でもその目は、ひどく寂しげで。

「もう、一護君は僕達の仲間じゃない。」

へたに関われば、自分たちのような無力な者は命を落とすだろう。

自分たちはもう、彼の足手まといでしかない。

だから、彼が自分たちに望んでくれた最後の願いを、叶えよう。

「いやです!!」

ルキアは浮竹に詰め寄った。

「嫌だ！私は、絶対に一護を忘れることなどしません!! したくない!!」

それはまるで聞き分けのない子供のようで、ルキアらしくなかった。

どの死神も、同じ気持ちだろう。

一護のことを忘れるだなんて、そんな理不尽なことをどうしていうんだ、と。

彼らは恨むだろう。

真実を離さない俺たちの事を。

そして何より、信じているその気持ちを裏切った、彼の事を。

可愛さ余って憎さ百倍とはよく言ったものだ。

信じる気持ちがあまりにも強いために、一度生じた不審はあつという間に全てを壊す。

……そんなことには、したくない。させない。

「なら、次に…次に一護君に会う時まで、彼の事を忘れよう。」

「……え？」

涙にぬれた目でルキアは浮竹を見た。

「…もし、彼がこの先俺たちの前に現れたら、…その時は、きっと話してくれるはずだ。」

そんなことが、ある訳はないのだけれど。

王家に関する事は固く秘されねばならない。

それと同じで、王家が自分たちに干渉することもないのだ。だから、彼に会う事は、二度とない。あつてはならない。

でももし、次があるとすれば。

その時は、全てを話してくれるはずだ。

「それまででいい。…俺たちは彼に囚われすぎています。今は、自分のやることに集中しよう。…いいな？」

死神たちも、人間たちも、何も言わなかった。

それは事実だから。

十四年。十四年もの長い間、ずっと一護を探し続けた。

一護とともに過ごしたよりも、はるかに長い時間を。

一護に囚われている、それは真実だ。

「いいな？」

浮竹の、念押しするその声はその場に落ちた。

雨の中、駆けていく一団がある。

「　　なア、一護。これでよかったのかよ。」

「……コンか。」

「ごそごそ、と一護が背負った夏梨の背負った袋から、コンが顔を出していた。」

「一護はしばらく考えたのち、視線を落した。」

「いいんだ。これで。」

嘘ついてんじゃ、ねえよ。

「コンは内心大きなため息をつきながら、夏梨の肩越しに一護を見た。十四年だ。」

「十四年もの長い間、一番傍で見てきたのは誰だと思ってやがる。バレバレなんだよ。」

「おめーこそ、よかったのか？」

「あア？」

「一護に聞かれて、コンは眉間に眉を寄せた。」

「そいうトコ、一兄に似てきたよね、と夏梨に言われるのにも慣れた。」

「……えらく大人しかったじゃねーか。ルキアもいたのに。」

「それは、話題を変えてはぐらかそうとしているのだとバレバレで、よくこれで政治家をやっつけられるもんだ、ともう一度内心溜息をついた。」

「足元にいるりりんたちに至っては、内心に留めることなく溜息をついた。」

「はッ。姐さんと俺の絆をなめんなよ？わざわざ言葉交わさなくたって、言いたい事は全部伝わってんだよ。」

「軽くめいた口調で言うと、よく言っせ、と一護は言い返した。」

「……オイ、一護。」

しばしの沈黙ののち、コンは言った。

「何だ？」

「姐さんに会いてえ。」

一瞬の沈黙ののち、言われた意味を理解した一護は、遠慮なく馬鹿にしたような声を上げた。

「はア！？てめー今わざわざ言葉交わさなくてもいいつつたばっかじゃねーか。今さら無理に決まってんだろ！？」

周りにいた護衛士たちが、ぎよつとしたように一護を見る。

「うるせー！会わせるよ！！別にすぐじゃなくていいから！」

「すぐじゃなくていいって……お前な。」

ようやく真意を理解したのか、一護はコンを掴んで目の前へ持ってきた。

「……もう、無理に決まってんだろ。俺は取り返しのつかない事をしたんだ。」

コンは三回目になる溜息を、今度は内心に収めずついた。

「信じるよ。姐さんも、他のやつらも、仲間なんだろ？」

一護の瞳が揺れた。

よかったな、少なくとも背中にいる夏梨には、見えてねーよ。

少し離れて走る凜にもだ。

「おめーが信じなくて、どうすんだよ。」

何重もの意味が込められたその言葉に、一護は返事ができなかった。

「……無駄にすんじゃないぞ。全部抱えて護るつつたのは、テメーだ。」

それは容赦なく聞こえるかもしれないけど、コンにとっては最大級の優しさだった。

コイツは叩いた方が立ち直りが早いんだよ。いつだったか、コンはりりんにそう言った。

「…信じる、一護。んでもってもう一度姐さんたちに会わせる。俺様に感謝してんならそれぐらいしやがれ。」

返事は、思いのほか早く返ってきた。

「はッ。…誰がためーに感謝なんかするかよ。」

真っ直ぐに前を見つめた一護の目は、先ほどの揺らぎをかけらも遺していなかった。

信じる。

信じるんだ。

誓ったじゃねえか。

俺が……護るんだ!!

Meanings of existence (後書き)

タイトル日本語訳は「存在意義」

ここで第四章完結です。

よし、もう文字数ノルマは気にしないことにします(笑)
ちなみに今回は7506文字でした！。

第四章は今までで一番話数が少なかったですね。

その割には書いてる間にたくさん書きたいことが出てきて、誰だこんなプロットたてたやつ、とか思いながら書いていました。

そして書くところ書くところと思いながら今回も忘れられそうだったコン。

最後にいいところかさらって行きました(笑)

実は、lost gearの中ではコンが一番一護のことを知っているんです。

だって、代行時代からずっと見ていたのって、家族とコンだけですからね。

コン達に王土に行ってもらって本当によかった。

第四章が完結したので、またしばらく外伝に入ります。

今回は、一篇だけではなく、3本の予定です。

つまり3本×3部で9話です。

第四章の話数より多いじゃねーか(笑)

つくづく構成が下手なようです。

P.S.

12/01にwhispersにて「R03 静かな企み」更新いた

しました。

それでは感想などお待ちしております。

S O 3 心の在り処 前篇(前書き)

第一・三章の3ヶ月後の話です。

S O 3 心の在り処 前篇

t w o h e a r t s

我が生くる道 守にあらず 護にあれど
私の意志そこにあらず 彼^かの掌の上に在り

望む道険し 進むこと能わず
臨める道険し されど導くものあり

収まらぬ揺らぎ その迷いは永劫か
されど歩みを辞めぬのは この手に抱く玉のため

この身の潰えるその日まで 歩みを止めることはしない
腕に抱き 護ると決めた

三つの果実の護り人として

けほけほ、と軽い咳の音がした。
筆を置き、耳を澄ます。

しばらくするとそれはおさまり、再び軽やかな声かきはじめた。
ほう、と息を吐き、また筆をとる。

もう何度、これを繰り返しただろうか。

持ちこまれた案件に意識を傾けながら、一心はそう思った。

王土に帰還してから、すでに3カ月が経っていた。

留守にしていた間に王土の情勢は大きく変化しており、しばらくはそれを学ぶことにかかりきりになっていた。

さらに、現世で医者だった経験を生かして猛威をふるっていた疫病の対策も行つ事になり、ろくに子供たちに会う事の出来ない日が続いている。

慣れない土地に連れて来られ、荒波のような状況に放り込まれて、せめて側にいてやりたいがそれもできない。

そのことが、苛立ちを募らせていた。

そして、悪い事というのは続くものだ。

確か、王土に来て二週間ほど経った頃だろうか。

「いただきまーす」

その日は久し振りに夕飯と一緒に食べる事が出来て、遊子がその日見聞きした物を嬉しそうに話していた。

「それでね、凜さんが明日は本がいっぱいあるところに連れて行ってくれるって！」

「そりゃ図書館だな。びっくりするぐらいたくさん本があるぞ。

一生かかっても読み切れなくらいだ！」

「本当に!？」

反応したのは夏梨だった。

遊子と比べて活動的だが、実は一護も含めて三人とも本が好きだ。

図書館には王土へ最初の霊王が移住した時からの本が納められているから、きつと気にいる本も見つかるだろう。

少しでも、気を紛らわせる助けになれば。

そう思った。

「お兄ちゃんも一緒に行こうよ！」

遊子が嬉しそうに誘うと、一護は少し表情を曇らせた。

「ごめんな。明日は白羅はくらが西の方を案内してくれるんだ」

「えー」

「ねえ、西の方って行った事無いけど、何があるの？」

残念そうな顔をした遊子を見て、夏梨が話題を変えた。

王宮は、大きく二つに分けられる。

役人たちが働く外朝と、王族の住む内朝。

内朝は更に五か所に分けられ、そのうち最も東に位置する東宮府に一家は住んでいた。

「西はお墓とか、儀式に使う特殊な道具をしまっている。まあ、普段は使わねえな」

答えると、再び遊子は興味深そうに頷いた。

「そうなんだ」

「蔵に至っては埃っぽい事この上ねえな。一護、覚悟しとけよ」

一護は思いつき顔をしかめると、げ、と呻いた。

「白羅、そんなこと全く言っていなかったぜ」

「わざわざ言う事でもねえからなあ」

「他人事だと思って笑ってんじゃねーぞクソ親父！」

「あははは」

言い合いを始めた二人を見て、遊子と夏梨が笑った。

「ごちそうさまでした！ あかね、今日桜さんがお菓子くれたの！
とってくるね！」

遊子が、そう言って席を立った時だった。

棚にある菓子に手を伸ばした遊子の影が、ふらっと揺れた。

「遊子！」

三人がそれぞれに名を呼び、一心が倒れた遊子を抱き上げる。

「熱はねえな…おい、一護！ 誰か呼んで来い！」

「お、おう！」

一護が部屋を飛び出していく。

遊子を寝台に寝かせながら、一心は手早く容体を確認した。

熱は無い。

心拍、脈拍共に正常。

呼吸も正常。

それ以外に何も調べられない医療機器の無さに齒噛みした。単なる貧血か、その類ならいいが。

だが、一心には一つだけ心当たりがあった。

「…………お兄ちゃん…………？」

遊子が目を覚ましたのは、その三日後だった。

「遊子…………大丈夫か？」

「うん…………私、どうしてたの？」

返答に詰まった一護を見て、遊子は眉根を寄せた。

「ねえ、お兄ちゃん」

「…………あのな、親父が、現世にいるところにお前らに言った事、覚えてるか？」

言い聞かせるように、ゆっくりと一護が言う。

「どのこと？」

「お前らの、霊力の事」

「…………私たちが、こっちに適應できないかもしれないって話？」

「ああ」

大事な、話があるんだ。

全てを話し終えた次の日、一心はそう言った。

十分大事な話を済ませたばかりだと言うのに、と思った。

確かに、一番大事な話だった。

一心や一護に比べて、遊子と夏梨は霊力が低い。

夏梨でさえ、死神になるにはまだ足りなかった。

その二人は、王土の……王宮の環境に耐えられないかもしれない、と。

内朝には、霊力の高い王族と、王族特務が居住している。

周囲にはその霊力が漏れないように強力な結界が張られているが、

それはつまりその内側で霊力が渦巻いているということだ。

それだけじゃない。

王族の持つ特殊な道具から発される霊圧も、常人には耐えられないもの。

だから、二人が王土に行くという事は、寿命を縮める事になりかねない、と。

それでも、一心と一護が行かない訳にはいかなかった。

霊王がいなくなれば、世界は崩れる。

だから、遊子と夏梨だけ現世に残れ、と一心は言った。

「ふ……ふざけないでよ！　なんで離れて暮らさなくちゃいけないのさー！」

「絶対にイヤ！」

大声を出した遊子と夏梨に、一心はすまんと謝る。

「一兄も何か言つてよ!」

夏梨が振りかえると、そこには、苦しそうな顔をして立ち尽くす一護がいた。

「一兄……?」

それは明らかに葛藤している表情で、夏梨は大きく目を見開く。

「一兄まで私らだけこつちに残れっていうの!?!」

夏梨の叫びが突き刺さる。

一護は、無意識のうちに拳を強く握りしめた。

もし、一心の言う事が“霊圧に中^あてられる”ことに近いのだとしたら。

あの、息ができなくなるような感覚には覚えがある。

中てられて動けなくなった人を見たこともある。

もしそれが瞬間的なものでなく、生涯にわたり続くのだとしたら。

一護の背に、冷や汗が伝った。

目の前で自分を見上げる妹たちを見る。

耐えられるのか、こいつらは。

連れていけない、と思った。

「お父さんもお兄ちゃんも行っちゃったら、私と夏梨ちゃんはどうしたらいいの?」

遊子が心細げに言う。

まだ小学生でしかない二人。

保護者がいなければ、施設に預けられるのは確実だ。

だが夏梨の霊圧を考えれば、滅多な場所には預けられない。

ましてこれから自分たちがする事を考えれば。

答えの無い問に呆然として、一護は一心を見た。

見なければよかったと、思った。

こんな……絶望の淵に立たされたような親父を、見たくなんて無かった。

つられて振り返ろうとした妹たちを抱きしめる。

「ごめん。でも、俺も親父が正しいと思う」

腕の中で、二人が身を強張らせた。

「離れ離れになるのは、確かによくねえけど、危険すぎるんだ」
遊子が、ぎゅっと一護の服を握りしめる。

二人の体が震えているのを感じて、一護は意を決してもう一度一心を見た。

「親父。本当に、なんとかなんねえのか？」

一心は大きく息を吐くと、首を横へ振った。

「わからん。そもそも、これも推論の話でしかないからな。……だが、リスクが高いのは事実だ」

「……だったら一緒に行く！」

「夏梨……」

「絶対、生きるから。だから離れない。一緒にいる」

一護は、その腕に力を込めた。

こんなにか細い二人が、果たして生き残れるのだろうか。
不安にならずには、いられなかった。

でも、離れて生きていけるかどうかも、不安だった。

現実的な問題では無く、心情的な問題として。

そしてその不安は、自分だけのものでは無いともわかっていた。

「……ダメだった、ってこと？」

遊子が問いかける。

一護はそつとその頭を撫でた。

「まだわからねえ。けど、大丈夫だ。俺や親父が護るから。な？」
遊子の目に涙がたまる。

「もう少し寝てる。そうしたら、もっと良くなるから」

しばらくして寝息をたてはじめた遊子を見て、一護はふり返った。

「これで、いいんだな？」

「ああ。悪かったな、こんな事頼んで」

一心はそう言つと、寝台の脇におかれた椅子に座った。

「夏梨は？」

「……同じだ。どっちも、間違いねえぞ」

昨日、夏梨も同じように倒れたのだ。

恐れていた事態が起こっているのは、何もできない一護にもよくわかってる。

どうにかならないのか、なんて聞けねえ。

そんなの、自分以上に思っているに決まってる。

遊子の意識が戻る兆しがみられた時、一心はすぐにその場を去った。

「悪い。後、頼む」

それだけで、十分伝わった。

要するに、耐えられないのだ。

王土に来てから、一護は一心が不安定になっている事に気付いていた。

恐らく、ここが限界だったのだろう。

むしろ、我が父親ながらよく耐えたものだと思う。

母親の分まで自分たちを大事にしてくれる一心は、子供たちにとっ

てひそかな自慢だった。
だれも素直に言わないけれど、一護でさえ父の日や誕生日は忘れなかった。

そんな風な父親だから、一層堪えていたのだろう。

だから逃げるようにその場を去った一心を止めなかったし、そうしてくれてよかったとさえ思った。

少しぐらい、自分の身を護って欲しい、と。
そう思っていたから。

「これから、どうなるんだろうな……」

一護の小さな呟きは、誰の耳に届く事も無く消えていった。

部屋に戻って、一心は大きく息を吐いた。
限界だった。

どこかで自分が間違いを起こした結果がこれならば、それは一体どこだったのだろうか。

二人を王土へ連れてきた事だろうか。

真咲を守れなかった事だろうか。

人間と結婚した事だろうか。

それとも、王土を出奔したところが、間違いだったのだろうか。

幾度となく繰り返したその問いを、また反芻する。

でもその問いに答えがあるわけがなく、一心は布団を殴った。
ぼすつと柔らかい音がする。

何度も何度も拳を振るって、ついに布団の上に顔を伏せた。

不用意に音を立てれば、誰かが気付く。

こんなときでさえ、東宮であるしがらみからは逃れられないのだ。

遊子を、夏梨を、一護を、護りたい。

自分がここにいなければ、世界は終わる。

でも、自分がここにいれば、子供たちを犠牲にすることになる。

「選べっつてのか……俺に」

その小さな呟きもまた、誰に届く事も無く消えていった。

S O 3 心の在り処 前篇（後書き）

タイトル日本語訳は「二つの心」

いつもより間のあいた更新となつてしまいました。

申し訳ありません。

事情その他（言い訳ともいう）は先日活動報告にUPしましたので、そちらに。

二つどころでなく四つぐらい心が出てきた気もします。

このタイトルは一心の名前からもじっています。

というのですね、実はこの話、本当は一心の一人称の予定でした。

それがどういふ因果かこんな風に（汗

そもそも女子高生がオッサンの一人称書くつてのが無理な話だ（笑）
じゃないですね。

次はちゃんと書けるように精進します。

原作だと一心つてすごくいい父親ですよ。

もちろん私はそんな一心が大好きです。

でも、絶対に限界があると思っんですよ。

そんな感じでこういふ風な話になりました。

一護がずいぶん素直なのは…もう、仕様です。

リハビリ中ということだなにとぞ…

それでは感想などお待ちしております。

S O 3 心の在り処 中篇(前書き)

前篇の二年後、S O 1 大切 前篇の少し後の話です。

S03 心の在り処 中篇

not thanks, but stimulus

二人が倒れてから、二年が経った。

遊子と夏梨の調子は安定しない。

思いつく限りの手立てを講じたが、そのどれもさしたる効果を現さなかった。

覚悟をしなくてはならない時が、迫っていた。

「……どうということだよ、親父」

一護が震えた声で言う。

「遊子と夏梨を王土から出す。もう、それしか方法はねえ」

「そうじゃねえ。その後だ！ 記憶を消すってどういう事だよ！！」
灯した明かりが、その動揺を映したように震えた。

「落ちつけ一護。声がでかい」

暗に隣の部屋で眠っている遊子と夏梨のことを示すと、一護は声を低めていい募った。

「遊子と夏梨がこっちにいたらやべえのはわかる。だから現世か尸魂界に連れていくべきだったのもわかる。だけどどうして記憶まで消さなくちゃなんねえんだよ」

その目は、絶対に譲らないという一護の意志を明確に訴えていた。でも、だからといって譲るわけにはいかない。

「あいつらは、王族の血をひいている。それが万が一週りに知れてみる。利用されるに決まってるだろうが」

「だからって……」

「夏梨の霊圧じゃ、これ以上現世に置いておくわけにもいかねえ。

流魂街か……夜一の伝手で瀟霊挺のどこかへ紛れさせるしかない。そんな場所で生きていくのに、ここでの記憶はいらねえだろうが」

大きく目を見開いた一護を無視して、一心はなおも話し続けた。

「それに、だ。……ここでの記憶だけを消したら、もしお前の知り合いに見つかった時、あいつらが俺たちを探してほしいと言わない訳がねえだろ。だったらいっそ、現世の時の記憶も消した方が……落ちつけ」

飛んできた一護の拳を受け止め、強引に椅子に座らせる。

向かい合うように座って、一心はその目を真っ直ぐに見た。

「あいつらのこれまでの人生と、これからの人生と。とれるのは二つに一つだ。どっちもなんてのは出来ねえ」

耐えかねたように、一護は視線をそらした。

「そんなの……あいつらが納得する訳がねえだろ」

「そうだな」

「騙すのか……?」

ゆっくりと視線を合わせた一護を、一心はやるせない思いで見つめた。

「……ああ」

一護が、ぐつと唇を噛んで俯く。

その仕草に、一心はまた痛みを深くした。

「今の、どういうことだよ……」

突然後ろから声がかかって、一心ははつと振り返る。

「……夏梨……」

いつの間にか扉が開いていて、夏梨がそれに縋るようにして立っていた。

「王土から出すって……現世か尸魂界に連れていくってどういうことだよ！ 記憶を消すって……」

そこで夏梨は激しく咳こみ、扉に縋ったまましゃがみ込む。

慌てて駆け寄った一心と一護を拒絶するように、夏梨は大きく右手

を振った。

「ふざけ……ないでよ！　なんで、そんなこと」

赤く滲んだ目で、二人を睨んだ。

「一緒に行こうって言ったの二人じゃんか！　なのに今さら帰れって言うのかよ！　ふざけんな！」

文句のつけようもない正論に黙りこまざるを得ない。

王土に行く行かないで散々揉めた後、結局二人が折れたのだ。

二人を置いていくのには不安が残ったし、夏梨が主張するように杞憂で終わる可能性もあった。

その可能性を捨てられるほどの余裕が、あ那时的の四人にはなかった。

でも、それには一つだけ条件が付いていた。

「もしこういう事が起こったら、俺が信頼するやつにお前らを預ける。そういう約束だっただろ？」

一心が言うと、夏梨は扉を握る手に力を込める。

「大丈夫だから！　お願いだから、一緒に居させて……！」

「夏梨」

一心は問答無用で夏梨を抱えあげると、さっきまで座っていた椅子に座らせた。

その正面にしゃがんで、一心は真っ直ぐに夏梨の顔を見る。

「このままじゃ、お前らは生きられない。それはもうわかってるだらうっ？」

はつきりといわれて、夏梨の瞳が揺れた。

「俺は、お前らに生きていてほしいんだ。二度と会えなくなっても、どこかで元気にしていてほしい。……頼む、わかってくれ」

必死に泣くまいとしているのがわかって、一心はその頭を撫でる。

ずっとずっと、心配をかけまいと泣かなかった娘を、一心はずっと不安に思っていた。

泣いた方が、いい時もある。

それを知ることができないのではないかと思って倒れてからもそうだ。

心配をかけまいと、必死に耐えている。

弱音を吐いた方が楽になれる事もあるというのに。

「頼む」

一護は、それをただ見ているしかなかった。

選ぶべき問題では、無い。

少し前の一護なら、躊躇い無く家族の命と人生を　つまり、遊子と夏梨と、そして一心とともに現世に帰る事を選んだだろう。

だけど、王土に来てから2年が経って、色んな事を任せられるようになって、王族が存在しなくてはいけない明確な理由が少しずつ分かるようになってきた。

象徴としてではない、王族に　霊王に課せられた、使命が。

だからと言って、遊子と夏梨を見捨てられない。見捨てられるわけがない。

絶対に護ると、決めたのだ。

「夏梨」

一護は、そつとその名を呼んだ。

「お前は、どうしたい？　俺は、お前の意見を尊重する。どっちにしろ、これが最後なんだ」

判断を投げた訳ではない。

ただ、これが兄としてしてやれる最後の事なのだとわかったのだ。ここにいれば、いずれ二人は死ぬ。

離れば、二度と会う事は無い。
思いつく限りの全ての道は、結局兄妹としての関係の終わりへと帰結するのだ。

夏梨はじつと一護を見た。

その顔に絶望も希望も浮かんでいないのを見てとると、小さくため息をつく。

「……考える。遊子と、一緒に」

「わかった。……なら、もう今日は寝よう。疲れたる」

一護にそう促され、夏梨はその場を後にした。

「親父も、もう休んだ方がいいぜ。明日も早えんだろ？」

一護もまた、そう言っただけで部屋を去った。

一心は立ち上がり、どさつと寝台に体を投げる。

一護が言ったのは、もう兄妹ではいられないということだ。

それは同時に、父娘でいられないことも示す。

自分よりも早くそれに気付き、更に受け入れきった息子に、少しだけ複雑な思いがした。

一護に言われたとおり、朝の早い生活が続いている。

そろそろ休もうかと思いきや、隣の部屋にまだ明かりが付いているのに気づいた。

少しだけ戸を開けると、一護は机に向かい何かを読んでいるのが見える。

書名は見えないが、装丁でわかった。

王土の様々な地方の風土について書かれた本だ。
じきに日付が変わる。

朝の早い生活だと言うのに、こんな時間になるまで学んでいるのか。

人の気配に気付いたのか、一護が視線を戸へと向けた。

一心がそこに居るのに気づいて苦笑した。

「休んだ方がいって言ったじゃねえか」

「お互い様だ。……いつもやってるのか？」

無言で首肯した一護を見て、一心は溜息をついた。

「体壊すぞ」

「大丈夫」

「……どういう根拠だよ、全く」

「やらなくちゃいけないーことがある。言ったらろっが。ちゃんと胸張つてられるようにするって」

その瞳には一切のブレがなくて、一心はにやりと口角を上げる。

「言うようになったじゃねーか」

「うるせーよ」

当たり前のはずの言い合いが、ずいぶん久しぶりだった気がした。

「俺はもう寝る。お前も、早く寝るよ。……仕事中に居眠りでもしやがったら、ただじゃおかねーからな」

おう、という返事を後ろに、一心はそつと戸を閉めた。

一護も、王土に完全に適応できたわけではない。

無論、霊圧の面では全く問題はなかったのだが、文化や習慣といった環境に順応できず苦しんでいた。

それが、あの日を境に大きく変わった。

それだけでも、一護にとっての仲間の存在の大きさがわかる。

どうして、恨みごとの一つも言わねえんだろっな……

いつそ責めてくれた方が、どんなに楽か。

ぼんやりそう思って、どこかでそのセリフを聞いたことがあると思っただ。

テレビドラマか何かだろうか。

ふと考えて、思い当たる。

……
いつそメチャクチャに責めてくれりゃ楽なのに……！ どうして

雨の降る中で、その顔は泣いていた。

ずっとずっと、一護は自分が母親を殺したのだ・と背負い続けていた。

その姿が、今の自分に重なるような気がした。

自分のこれからする決断は、娘を生かすか殺すかのものだ。

その判断をして、おそらく何を選ぼうと自分は一生あの頃の一護のように思い続けるだろう。

変わらねえな。父親面して、結局同じじゃねえか。

そうしてまた、自分の姿を重ねられる人物に思い当たる。

主上も、同じ気持ちなのかもな。

主と臣下という関係になって久しい母親の事を想い、一心は嘆息した。

数十年ぶりに再会した母が自分に言ったのは、叱責でも再会の喜びでもなく、ただ帰還し王位を継げという命令だった。

夜一から、自分のいない間に王土で起きた事を聞かされた時、覚悟はしたつもりだった。

死に目に会う事の出来なかったたくさん家族や知人の死を悲しむよりも。

責任を放り出し全てから逃げ出した事を悔むよりも、ただ事実を受け入れ、背負うべき義務をこの身に刻みつける事が、何よりの償いだ。

でも、一つだけ。

一つだけ、どうしても出来ない覚悟があった。

「……子がおるようじゃの。」

戦いが終わってすぐに、単身一度王土へ戻った。

支度を整え、母のもとへと向かう。

数十年ぶりに通す王土風の服なのに、それはやはり落ちつくもので、自分はどこにいても、やはりこの責務から逃れられないのだと思いき知らされた気がした。

そして、数十年ぶりに再会した父母の顔を見る事は出来なかった。本来なら、責務を放り出し逃げたことで、処罰されてしかるべき身だ。

平伏し、その事に対する謝罪を述べた。

そのちに母が言ったのが、その事だった。

「……子がおるようじゃの。」

平伏しているせいで、目の前の母の表情を伺う事は出来ない。

でもそれは母も同じはずなのに、どうして見抜かれたのだろう。

問に答える事は出来なかった。

口を開けば、言ってしまう。

許されるはずのない、嘆願を。

「すまぬ。」

思いもよらない謝罪に、一心は許しを乞う事すら忘れて顔を上げた。

「その子らの人生、貰い受けるぞ。」
母はあくまでも毅然としていて、声の震えを聞きとる事は出来なかった。

でも、一心は聞いた気がした。

その奥に秘められた、悲壮なまでの決意を。

その時、自分がどんな返事を返したのかは、覚えていない。
ただ一つだけ覚えているのは、子供たちへの心からの謝罪を想った事だけだ。

母もまた、責められる事を望んでいたのかもしれない。
でも到底その気にはなれなかった。

母の責任によるものなど、何一つ無い。

母は何も、悪くないのだ。

要するに、三代そろってよく似てるってことか。

少しだけ、心が軽くなった気がした。

責任から逃れるつもりはない。

だけど、少なくともこうなったのは俺のせいじゃない。

それは確かだし、誰もが認めるところのはずだ。

多分それは、一護がああの日を乗り越えていなければ気付かなかったと思う。

心の中でこっそりと一護に感謝して、ふと違和感に気付いた。

言葉を間違えていたのだと思った。

近頃の自分は、ありがとうばかり言っていた気がする。

それは多分、一護に対して最も多い。

するべきは感謝でないのに。

一護は自ら望んで事に向かっているのだ。

それに対して感謝するのはお門違いというものだろう。

今の一護に必要なのは、感謝ではなく背中を押す言葉だ。

ふーっと深く息を吐いて、肩の力を抜いた。

そう。必要なのは、励まし。

色んな人が、互いに励まし合ってすべき事に向かっている。ならば、自分もその輪に。

その結末に、後悔しないとは言いつれない。

でもそれが今自分に取れる最良の手段だ。

最善は尽くした。

それだけは胸を張って言える。

それだけでいいのだ。多分。

一護の部屋の灯りが消えたのを背中に感じて、一心もようつやく寝台へと向かった。

S03 心の在り処 中篇（後書き）

タイトル日本語訳は「感謝ではなく励ましを」

前回に引き続き遅くなつてすみません。

そして何故か遊子がでてこない

その代わりに出張つていらっしやったのが霊王陛下でした。
こんなに書いたのは初めてですよね。

ひよっとしなくても書けない原因はこの話の重さにあるのではない
かとうやくやく気づきました。

年内には新章に入れるように努力します。

それでは今後も宜しくお願いします。

S03 心の在り処 後篇(前書き)

中篇の3年後、S01大切前篇の1年前から始まります。

本当に少しですが血の表現があります。

S O 3 心の在り処 後篇

r e d s h a d o w

一心は長い事、自分の手に持ったその布を見つめていた。白い手ぬぐいに付着しているのは、恨めしいほどに鮮やかな赤色をした液体。

こここのところ、というよりかなり前から原因不明の微熱が続いていた。

息苦しさを感ずる事さえある。だから、薄々覚悟はしていた。

若い頃にたばこを吸っていたのがまずかったのだらうと思う。

一体これをどうしたものかと、一心は途方に暮れていた。

肺癌でした、なんて言えやしねえしな。そもそも確定した訳じやねえ。

厳しい視線で手ぬぐいを睨むが、その赤いしみは消えるどころかどんどん鈍い色へと変化していく。

癌になった時点で、王土での治療は不可能だ。

王土で外科的治療はほとんど発展していないと言っている。創傷の縫合が主で、あって四肢のいずれかの切断。

それも成功率の低いもので、そんな大怪我ならまず鬼道に頼る。

ただ鬼道で肺癌は治せないし、現世なら行われるはずの抗癌剤を用いた治療も、勿論不可能。

そもそも大きな症状出るほどが進行している時点で、治療したとしても焼け石に水のはずだ。

詳しい検査ができないせいで、確定した診断が下せない。そもそも肺癌かどうかすらわからない。まあ、十中八九そうだろうが。

ふう、と息を吐き、その手ぬぐいを懐へとしまい込んだ。上を見上げ、きつく目をつぶる。

まだ、死ぬわけにはいかねえんだよ。

例え肺癌で無い別の病だったとして、喀血が出た時点で手遅れだ。咳症状は今まで無かった。

だから結核では無いはずだと自己判断を下し、決める。

報告は、主上と王夫 両親にのみ。

今の子供たちに、不安な要素を与えたくは無かった。

自己満足だと、傲慢だと後で責められるだろう。

でも今だけは。

親父らしい事、させてくれ。

一心は再び筆をとると、何事もなかったかのように仕事を始めた。少し休んでいたせいで、仕事如山積みになっている。

高齢の母に負担をかけさせまいと、少しずつその仕事を預かるようになっていた。

どうやら数十年の空白は腕を鈍らせるには足りなかったらしく、それにはかなり助けられている。

現世に行く前に培った地盤の存在も大きい。

だが、一護はそれを持たないのだ。

今、自分が倒れたら。

その負担の行く先は、一護だ。

今はまだ、アイツにこの責務を背負うだけの力は無い。

付け焼刃でなんとかなるものではないのだ。

だから、どうにかして生きなくては。

再びせり上がった咳を呑みこみ、一心は筆を走らせ続けた。

「　　どうにか、ならぬのか」

両親を目の前にして、一心の心は揺れる。

そう、本当はこの二人にさえ言いたくなかった。

老齢の両親に負担をかけるような事を、誰が好き好んでやるものか。

「無理でしょうね。……王土でできる治療ではありません」

そう言って少し笑うと、霊王はぐつと唇を噛んだ。

「現世か尸魂界であれば可能と言うか」

「いえ。確かにあちらの技術は素晴らしい。……でも、足りないで

しょう。ここまで進行したものを治すのは、あちらの技術でも不可

能だ」

「お前の思い違いと言う事ではないのか？」

父親の問いに、一心は緩く首を振る。

「これでも、医者をしていた身です。自分がどんな状態かぐらいは

わかります」

「　　そうか、わかった」

霊王はいっそあっさりとした口調でそう言つと、一心に向き直った。

「医者をしていた身なら、わかるはずじゃの。いつまで生きられる」

その真つ直ぐな問いに、一心は内心苦笑する。息子に、自身の余命を計らせるかよ。その度胸と強さに敬服して、一心は慎重に答えた。

「もって、1年。2年は難しいでしょう。早ければ半年ほどかと」

父親は長く息を吐くと、一心を真つ直ぐに見る。

「それは、現世の魂魄で計った時の値かい？」

「ええ。俺の場合は魂魄強度が高いですからもう少し長いはずです」

「その場合の、値は？」

一心は、再び緩く首を振った。

「わかりません。そんな記録は、向こうに在りませんでしたからただ、と前置きする。」

「それでも、この病は進行が早い。寿命の差ほどの長さは生きられないでしょう。……もって、1年と半年。やはり2年は難しいかと。早ければ半年と言つのも、やはり」

目の前の両親に向かって、頭を下げた。

「すみません。役に、立てなくて」

王土に戻ってから、4年。

結局何もできなかった。

その上、老いた両親と未だ死の淵に在る娘たちを置いて、息子に重責を押し付けて、自分は逝くのだ。悔しかった。

どうしようもなく。

悔恨で歯を食いしばった息子を、霊王はやるせない思いで見つめた。こんな後悔をさせたくて、呼びもどした訳ではない。まして、連れ戻すことで早死にさせる羽目になるうとは思わなかった。

一体、自分は何人の家族を看取ればよいのだろう。息子でさえ、これで三人目ではないか。

霊王が大きく息を吸ったのを感じて、一心は身構えた。何を言われるのか、考えることすら恐ろしい。

「ならば、2年じゃ。2年、生きよ」

一瞬、何を言われたかわからなかった。

確か、自分は2年は難しいと告げたはずだが。

いくら老齢とはいえ、身体能力には全く衰えの無い母の事だ。耳が遠くなったとか、そういうわけではない。

絶対に聞こえていたはずなのに、どうして。

「時間を稼げ。これは命令じゃ」

そこまで言われて、一心はようやく顔を上げた。

「一護には、時間が必要じゃろう。……あれはまだまだ未熟すぎる。じゃが、2年もあれば形にはなるだろうて」

呆気にとられた一心に、霊王はなおも続けた。

「あれの根性は私もよく知っておる。もう数年はかかると思っておったが、伸びの速さも伸びしろも、私の知る誰よりも上じゃ。お前よりもな」

「確かに、あの子の成長率は素晴らしい。……もつとかかるだろうと思っていたけど、数年の内に東宮として立つことも十分に可能になるだろう。お前に出来るのは、それまでの時間を稼いでやる事だ」

父にまでそう言われ、一心はただ茫然と両親を見つめた。

「……ですが」

「異議は認めぬぞ。これは命令じゃ。……最期ぐらい、父親らしくして見せぬか」

自分の心のうちまであっさりと見透かされ、一心は肩を落とした。本当に、いつまでたっても親には敵わない。

一心は真っ直ぐに両親を見つめ、ゆっくりと口を開いた。

「確かに、承りました」

癌の進行を食い止める薬は、王土に無い。

でも、症状を抑える薬ならある。

微熱や全身痛といった症状は、日増しに強くなってきていた。

薬でどうにかやり過ごしているが、一護たちにはいつまで隠し通せるだろうか。

両親に全てを告げてから、およそ半年。

早ければ、の刻限が迫っていた。

熱が高いせいか、目眩がひどい。

半ば流し込むように夕飯を終え、部屋に戻ろうとしたその時だった。

「……お父さん、ひよっとして体調悪いんじゃないの？」
遊子に問われ、ぎくりと身を動かす。

「すっごい熱じゃん！ 早く休みなよ！！」

娘二人に促され、苦笑した。

「大丈夫だ。これぐらい」

「ダメダメ！ 早く休んで！」

しぶしぶ、と言った風に立ち上がり、

そこで視界が暗転した。

「親父！」

「お父さん！！」

一護たちはそれぞれに叫び、一心に駆け寄る。

「お前ら、看ててくれ。誰か呼んでくる！」

一護が部屋を飛び出そうと戸に手をかけた瞬間、それは思いがけず外から開かれた。

「王夫……！！ 親……東宮が！」

うっかり言い間違えて訂正すると、王夫は一護の肩越しに部屋を覗き込んだ。

一瞬間をしかめ、一つ頷く。

「今朝から体調が悪いと言っていてね。薬を持ってきたから大丈夫だ」

そう言つて王夫は部屋に入り、一心の傍に跪いた。

寝台へ動かそうとしているのだとわかつて、一護は慌ててそれに手を貸す。

その感覚に、呆然とした。

なんだよ、この軽さ。

いっそ病的と言った方が正しいほどにその体は軽い。

一護の身がこわばったのを感じて、王夫はその顔を見てまたひとつ

頷く。

それに何かを感じて、一護はその動揺を押し隠した。

「一体、何が起きてるんですか」

寝台に一心を寝かせて、一護が問いかける。

遊子と夏梨は王夫に促されて部屋に戻されていた。

「主に、お目にかかるよ。支度をしなさい」

王夫は一心から視線を移さぬままそう答えた。

一護が部屋に戻れたのは、その日の遅くだった。

落ち着くまでここにいなさい、と先ほどまで靈王の宮に居たのだ。

「遊子と夏梨には黙っておきなさい。今のあの子達に、その余裕はないだろう」

王夫の声が耳に響く。

確かに、そうだ。

ゆっくりと、少しずつ、二人の容体は悪くなってきた。

これ以上、負担をかけるようなことはしたくない。

「お兄ちゃん……」

後ろから声をかけられ振り向くと、そこには遊子と夏梨が立っていた。

無理に笑って、答える。

「疲れてるんだらうってさ。明日の仕事を俺が代わる事になったから、色々聞いてきたんだ」

遅くなってごめんな、と言うと遊子と夏梨は顔を見合わせた。

「もう遅いぞ。休もう」

そう言っただけ強引に二人をそれぞれの部屋へと送り出す。

疑問の残る表情をしていたが、二人も抵抗することなく部屋へと戻

った。

ぼんやりと目を開けると、時刻は既に深更だった。

だが、布団に入った記憶がまるで無い。

憶えている最後の記憶を手繰り寄せた瞬間、部屋の戸が開いた。

「……目、覚めたのか」

一護の声を聞いて、背に冷や汗が伝う。

一心が返事をしないのを見て、一護はその枕元におかれた椅子へと腰掛けた。

「自分の体の事もわかんねーのか、このヤブ医者。遊子と夏梨に心配かけてんじゃねーよ」

あんまりないように、思わず苦笑が漏れる。

「うるせーな」

「ヤブ医者にヤブ医者つつって何が悪い」

そこで一護は一つ溜息をつき、再び口を開いた。

「主上から、聞いた」

一護も、一心も、たがいに視線を合わせない。

合わせることはできなかった。

「すまん」

一心が呟くと、一護は目を閉じた。

「何で、言わなかったんだよ」

「……すまん」

「謝んな」

ぐつと奥歯を噛み締め、一護はゆっくりと口を開いた。

言うてはいけない、とわかっている。

主上から真実を明かされた瞬間、脳裏をよぎったのは一つの恐怖だった。
でもそれは、恐らく一心が一番気にかけてくれている事で、だから言っではいけない。
でも、言わずにはいられなかった。

「一人に、すんなよ……」

心細そうな息子の独白を、一心はただ聞いていることしかできなかった。

自分が、逝けば。

遊子と夏梨は、もう永くない。

三人が、逝けば。

一護は、一人になる。

「すまん」

「謝んな……」

幼さの残るその表情を、一心はやるせない思いで見つめた。

「一護。お前の家族は、もう俺達だけじゃねえ」

言い聞かせるような口調に、一護ははっと顔を上げた。

「主上も、王夫も、……うちのやつらは、みんな家族だ。お前は、一人にならねえよ」

ぐつと唇を引き結んだ一護に、一心は僅かに笑った。

「大丈夫だ。俺も、まだ生きる。……当分先にしてやっから、しゃんとしてろ」

一護は、言葉で返せなかった。
ただ一度だけ、ゆっくりと頷いた。

もう少し、もう少しでいい。

一護が、一人で立てるようになるまで。

その後で、この身がどうなるかと構わない。
だから、それまでは。

生きさせてくれ。

一心は、それから3年生きた。

一護が周りを頼りに上手くやれるのを見届けると、安心したように
息を引き取ったという。

いくら魂魄強度が高いとはいえ、自身の計った余命よりもはるかに
長い時間を、彼は生きた。

それをさせたのが何なのか。

彼を知るものならば、考えずともわかる。

その最期の時は、穏やかに訪れた。

S 0 3 心の在り処 後篇（後書き）

タイトル日本語訳は「紅き影」

書けました。やっと

そして再び出張った霊王陛下 & amp・主夫。

ホント、どんどんオリキャラ率が高くなってきてるなー。

そして、今回の話で遊子と夏梨について書く、と思われた方が多かったですかと思われます。

私としては、最初からこの話に持っていくつもりだったのに、何故か遊子 & amp・夏梨メインみたいになってしまっって一人ひたすら焦っております

てなわけでかなり強引なS 0 3 完結です。

続いてS 0 4 を更新予定です。

とはいえまだ一行も書けていないのでがんばります。

それでは今後も宜しくお願いいたします。

S 0 4 大好き 前篇（前書き）

S 0 3 心の在り処の中篇と後篇の間の話です。

S 0 4 大好き 前篇

i n a t r a n c e

生きる永遠 死ぬ永遠

私が欲しい日常は この手の内に一つもない

愛することも生きること 同じことだと思っていたけど
そうじゃないんだとふと気づいた

生に縋る醜さを 隠すことが生きる意味

一人生きることへの恐怖は 一人抱えて隠しぬこう

愛しているから生きられる 言葉を信じて真っ直ぐに
命尽きても共に在る

大好きな人を想うから

霞がかかったような世界に慣れて、もうどのくらいたったのだろう。
王土に来てから、ずっとずっと、夢の中に居るような、そんな不思議な感覚がしていた。

身体がふわふわ浮いているような、そんな感覚。

最初は、そこに慣れていないせいだと思った。

いきなり王様の孫として扱われるようになって、何だかお話の中の人物になったみたいで、綺麗な服を着せられて、そのせいだと思っ
た。

でも、そうじゃなかった。

れいあつ、という言葉をお兄ちゃんに教えてもらった。

普通の人はたいていもっていなくて、死神さんとか、幽霊とかも
っているチカラ。

私はお母さんに似たから、それがお兄ちゃんたちよりもずっと低い
んだって教えてくれた。

周りの人が高すぎるせいで、私の持つ力では自分の体を護れないん
だ・って。

その時お兄ちゃんもお父さんもすごく辛そうな顔をしていて、私は
死んでしまうのかなって思った。

そうしたら、お父さんが尸魂界に行けって言いだした。

ひどい、いやだ・って泣いて、何度も何度も嫌がった。

お父さんやお兄ちゃんと離れたくない。二人の事を忘れたくなんて
ない。

だって家族なんだもん。

ずっと一緒に居るのが当たり前なのに、どうして離れなくちゃいけ
ないの・って何度も言った。

お父さんやお兄ちゃんに役目があって、二人はそれを果たそうとし
てる。

それはすっごくかっこいいし、そんな二人と一緒にいられてすっご
く嬉しいのに、そのせいでどうして一緒に居られなくなるの？

でもそんなことを言ったらきっとお父さんもお兄ちゃんもすっごく
傷付いちゃうから、言えない。

二人だつて、私と夏梨ちゃんがこんな風にならなければいつまでも一緒に居てくれるはず。

だったら、辛い思いをさせているのは私のせいなのかな。もし、そうなら。

私はここにいない方がいいのかな。

お父さんの言う通りに、尸魂界に行った方がいいのかな。

「…………おにいちゃん…………？」

「あー、悪い。起こしちまったか？」

そう言つて頭をかいた一護に、遊子は首をかしげた。

「わかんない」

「そつか。…………水、飲むか？」

「うん」

一護は遊子をそつと起こすと、側に置かれた湯呑に水を注ぐ。

遊子はそれを受けとると、ゆっくりそれを飲んだ。

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん？ どうした？」

「お仕事忙しいの？ 最近夕ご飯一緒に食べてないよ」

一護は一瞬きよんとした後、ごめん、と言った。

「色々立て込んでてな。もう少ししたら、落ち着くから。…………ごめんな」

本当にすまなさそうな一護の表情に、遊子は首を振った。

「ううん。忙しいなら仕方ないもんね。無理しないで頑張つて」

「おう」

微笑んだ遊子の頭を、一護はそつとなでる。

そうすると、遊子はますます嬉しそうに笑った。

遊子の部屋の戸を閉めた後、一護は小さくため息をついた。確かに、ここのところ一緒に夕飯をとっていない。でもそれは、一護が忙しいから、という理由だけではなかった。

一護が帰ってきた時は、たいてい遊子は眠ってしまったているのだ。遊子と夏梨は、一日の大半を眠ってか、半覚醒状態で過ごす。そのために日付感覚が狂っているのも、その一因だろう。

妹たちの命が徐々に削られているのを、一護はただ見ていることしかできない。何もしてやれないどころか、自分の発する霊圧で二人の命を削ってさえいるのだ。

二人がその生命力を消耗しているように、一護もまた精神的に消耗していた。

妹を、自分の力で殺そうとしている。そんな事実を、受け止めきれぬわけがない。

「ねえ、遊子」

枕もとの椅子に腰かけた夏梨が言う。

「なあに？」

「……あたしら、ここにいてもいいのかな」

やっぱり、双子だなあ。

おんなじこと考えてる。

「わかんないよ。そんなこと」

遊子がそう言うと、夏梨は深くうつむいた。

「一兄はさ、頑張ってるじゃん。一生懸命勉強してる。……でも、あたしたち、なんにもしてないよ。」

「うん……」

一心も、一護も、夕飯時にしか会えなくなった。

朝ごはんさえ一緒に取れなくて、寂しいけれど、二人ともすごく忙しそうだから無理を言えない。

本当はもつと休んでほしい。

そして一緒に居てほしい。

でも、いつまでも屈託なく甘えられるほど子供では無い。

「でも、一緒に居たいよ」

遊子が言うと、夏梨は顔を上げた。

「私は、お父さんやお兄ちゃんと一緒に居たい。離れ離れになんてなりたくない」

本当は、尸魂界に行った方がいいってわかってる。

でも、周りからそうやって言われるとつい反対してしまう。

反抗期とか、そういう風なのじゃないと思うけど、自分の生き方なんだって思うと人に口出ししてほしくなかった。

それがたとえ大好きな家族でも。

「そうだよ。……あたしもそう。離れたくないよ、やっぱり」

夏梨はそう言ったりりんを抱き上げた。

「勝手だと思っ？」

「思わないわよ。……思う訳ないでしょ」

りりんが言うと、蔵人も頷いた。

「人の想いとは複雑なものです。どちらが正しいとは言えません」
之芭も無言で同意する。

ただ一人だけ何の反応も示さないのはコンだった。

「ちよつと、あんたも何か言いなさいよ！」

りりんが小声で促すと、コンはふいつとそっぽを向いて寝台から飛び降りた。

「どっちが正しいかなんてしらねえけどな、決めなくちゃいけねー」

のも、時間がねーのも確かなんだ。……さつさと決めねえと、後悔しか残んねえぞ」

まるでひとり言のようにそれだけ言い捨てると、コンは部屋を出て行った。

「何よ、アイツ。それぐらいわかってるわよ」
不機嫌そうなりりん、遊子は苦笑した。

「コンって、お兄ちゃんに似てるよね」

「……ええ！？ そんな事無いわよ。いいたかないけど一護の方がずーっとマシよ！」

「それはそうだけどね」

さらっと言った遊子に、夏梨は吹きだした。

「はつきり言うじゃん」

「だってお兄ちゃんの方がずーっとかっこいいもん。でもね、何となく、似てると思わない？」

「似てない似てない。絶対似てないって！」

猛反発する夏梨に、遊子は小さく笑った。

気のせいじゃ、ないと思うんだけどな。

「おい、一護」

我が物顔で机に上がって来たコンを見て、一護は眉間にしわを寄せた。

「何だよ一体」

「……遊子と夏梨の事だ。オマエ、本当にあれでいいのか？」

「あれってどれだよ」

渋面を作った一護に、コンは腕組みをして向かい合う。

「尸魂界に行かせるかどうかってことだよ。オマエ、あいつらの意見を尊重するって言ったんだろ？ 本当にそれでいいのか？」

視線をそらした一護に、コンはなおも話し続けた。

「自分の意見押し殺して相手に合わせるなんて、オメーらしくねえんだよ。見ててイライラする」

言え、と言われた一護は、首を横に振った。

「俺の意見は関係ねーだろ」

「おおアリだ。てめーの家族だろうが」

どっかと座り込んだコンと、無意識に拳を握った一護と、にらみ合いが長い事続いた。

「わかんねえんだよ。どうしたらいいか」

耐えかねたように、一護が口を開く。

「俺だって、遊子と夏梨に生きていてほしい。……でもさ、あいつらの立場に立った時、多分俺も同じ事思っただよな。最期まで一緒に居るって」

コンは黙って聞いていた。

一護がこの事に関して自分の意見を言うのは、ずいぶん久しぶりだった。

「それで多分、遊子や夏梨が俺や親父の立場だった時、やっぱり同じ事言っただと思う。生きてて欲しいって。……勝手だよな。ただ自分が置いてかれたくねえってだけで、離れるほうを選んだ」

そう言っで一護は視線を落した。

ギョツと引き結んだ唇は、その奥に隠されたもつとたくさんの想いを閉じ籠めているのだろうと思った。

「……だよなあ。わっかんねえよなあ」

思いがけない同意の声に、一護は顔を上げる。

「俺だってさ、黒崎一護をやってたんだぜ？ 俺にとっても、あいつらは妹みたいなものだ」

コンはそう言っただ頭をかいた。

「生きてて欲しいけど、離れたくないエって気持ちもわかる。……それに、離れてほしくねエとも思う」
それはやはり一護の心情その物で、だから一護はコンの言う事に口を挟めない。

「それなのに、どっちかしか選べねエなんて、理不尽だよなあ」

黒崎一護として、一人の人間として生きられた時間は、コンにとって至福の時だった。

改造魂魄でなくても、ただの義魂丸であっても、その人格は認められない。

死神が必要とする時に、ただ道具として呼び出されるだけの存在だ。それが、一護とルキアだけは「コン」を必要としてくれた。

そして僅かの間でも、コンが人として生きる時間を与えてくれた。それがたとえ一護の代わりでも、コンには途方もなく嬉しかった。

一護として生きた時間は、コンにとっては家族を得られる時間でもあった。

例えば、近所を歩く時。

隣人が挨拶してくる。

それに返す。

今日も元気ね、学校頑張つて、と。

そう言われた時、心がじんわりと温まった。

そして、お父さんによるしく、とか。

妹さんにお礼を伝えて置いて、とか。

そういう風に言われた時、黒崎家の温かさを感じるのだ。

言い忘れぬよう、それを一護が戻ってきた時に伝えると、一護はとても嬉しそうな顔をした。

そっか、そんなことがあつたんだな。ちゃんと伝えねえとな。

そう言つて、コンにも礼を言った。

ありがとな、ちゃんと教えてくれて、と。

だから、一心も遊子も夏梨も、コンにとっては家族だった。三人が、自分の事をどう思っているにも構わない。ただ、自分がそう思える存在を得られたことが嬉しいのだ。

「……だから、俺もオメーと同じだ。あいつらの意見を尊重したい」
そう締めくくったコンを、一護は不思議そうに見た。

思えば、こんな風に自分の思いを吐露できるのは、今やコンだけの気がする。

もちろん家族にだって正直に話す。

でも、この話題ばかりは家族に話せなかった。

そう言えば、こいつに出会ったのはチャドや井上が能力を手に入れるよりも前だった。

代行をやっていた時の自分をルキアと変わらぬほどに知っているのは、実はコンだけなのだ。

今、自分の周りに家族以外である頃の事を　一人の人間として、死神代行として生きていたころの自分を知っているのは、コンだけじゃない。

りりんと蔵人、之芭もそうだ。

でも、コンは特別。

自分の核になっている、あの記憶を共有している。

そして、一護は感じ取っていた。

コンが感じている、孤独を。

だから自分と同じように家族の事を愛してくれる。

それが一護にとっては嬉しかったし、コンにとっても良い事なのだ
と思っていた。

似ている、と思った。

あまり認めたくないけれど。

家族に対する想いだけは、ほとんど同等だと認めざるを得なかった。

「なあ、コン」

「あア？」

「お前は、どうして俺たちと来る気になったんだ？」

前々からずっと気になっていた事を、思いきって聞いてみることにした。

コンはルキアを心の底から崇拜……というか敬愛と言つか、なんだかそんな風に思っていて。

だからどうして、自分たちと一緒に来る気になったのか、ずっと不思議だった。

「そりやテメー……何でだろうな」

「ああ！？」

「うっせーな。テメーだけじゃ頼りねえんだよ。危なっかしくてみてらんねえ！」

やけくそになって叫んだコンに、一護は見事に逆上した。

「ふざけんな！ 誰が頼りねえだ！！」

「オメーに決まってんだろうが！ 他に誰がいやがるってんだ！！」
「頼りねーのはむしろお前じゃねえか！ ぬいぐるみのくせして！」

「ぬいぐるみのくせしてってどういう意味だ！ ぐるみ権なめんじやねーぞー！！」

あっという間に言い争いになり、それが終わるころには二人そろっつてもともと何の話題かさえ忘れていた。

「覚えとけよ、ぜってーテメーは後で泣かす」

「はッ。誰が泣くかよ。泣いたらこのパーフェクトボディーがシミになっちまうじゃねえか」

「勝手にシミでもつけてる、アホ」

「アホはてめーだ。じゃ、俺様はこれから凜さんの所に行ってくるからな」

「凜さんにメーワクかけんじゃねーぞ。ぐるみ野郎」

「テメーの方がよっぽどメーワクだろうが。とつと仕事しやがれ」

「邪魔しに来たのはテメーだろうが」

机から飛び降りようとしたコンの首を掴むと、一護はぼいっと庭に向かつて投げた。

「だつ……一護！ テメー池に落ちたらどうしてくれるんだ！ シミどころじゃすまねーだろうが！！」

「うるせーよ、とつとといけ」

手で追いやる仕草をみると、コンの気配はぶつくさ言いながら遠ざかっていった。

ふう、と息を吐き、伸びをする。

久し振りに騒いだおかげで、ずいぶんいい息抜きになった。

「片づけるか」

一護はそう呟くと、目の前の書類へと再び向き直る。

同じころ、コンは一人で庭に立ち尽くしていた。

「ホント、どうして来ちまったんだろーな」

思いがけず一護から向けられた問いは、むしろコンのほうか答えを知りたいものだった。

自分でも未だに不思議で仕方ないのだ。

でも、全てを聞き終えたときの一護の顔が、途方もなく頼りなかったのは事実だ。

それも見こして、あの親父は自分にも話して聞かせたのだろうか。あのときの、あの顔を、コンはその前にも見たことがあった。

一護と二人で、尸魂界に行った時。

あの時、死神も、ルキアでさえも二人の事を覚えていなかった。

コンにとって、死神が自分の事を覚えていなかったのはさほどショックではなかった。

むしろルキアに忘れられた事ばかりがショックで。

でも、一護にとっては死神が自分の忘れているのは途方もない痛手で、ルキアについてはその上をいくほどのものだった。

だから、ルキアが誰だと問うた時、そしてあの姉弟がルキアを連れて逃げ去った後、あんな情けない表情をしたのだと思う。

あの時の一護と、その時の一護が重なった。

あの時、一護は自分に教えられたと言った。

だったら、今度も自分の役目だと思った。

そんな自分勝手な、不確かすぎる理由。

あの時のように、自分が一護に何かをしてやれているかと問われれば、わからないと答えるしかない。

だけど、自分勝手でも構わないから、家族の為に何かをしたいと思うのは、間違いなのだろうか。

吹き抜けていく風に身をゆだねる。

こうして、温度すら感じられない身体。

それでも、家族の温もりだけは、この身にはつきりと感じられる。

その家族の為に何かをしたいと思うのに、何か理由があるのだろうか。

S04 大好き 前篇（後書き）

タイトル日本語訳は「夢現」

タイトルからお分かりいただけますように、本当は遊子一人称の予定でした。

途中で何をトチ狂ったのかコンの一人称へと横滑り。

おまえ、本当にいいところ持ってくよなあ。

そんなわけでS04開幕です。

今度は遊子メイン。……だったらいいな。またコンが出しゃばってきたりして。

そして再びコンの話題に戻ります（笑）

実は今回、コンのせいでこれまでの努力をフイにされました（泣）
王土の人間、一護たちも含めてですが、これまで彼らが外来語を使わないように気を使っていたんです。

だって古代中国（笑）で英語とか使わないでしょ。

ですが今回、あの名（むしろ迷？）ゼリフのために泣く泣くカタカナ使用。

だって一護とコンの会話だったし、「完璧身体」なんておかしいですよね（笑）

てなわけでこんな具合です

ついのごとくシヨックも乱用

それでは感想などお待ちしております。

S 0 4 大好き 中篇（前書き）

S 0 3 後篇のなかで、一護は一心の病気を知っていて、遊子と夏梨はまだ知らないあたりです。（わかりづらいですね、すみません）

S04 大好き 中篇

to want to be

イ…タイ。

…キタ…。

…ハ、…キ…イ。

「遊子……………遊子……………」

ずっと遠くから、声が聞こえる。

まるで、手で大きく水を掻いて浮上するように、私の意識は現実へと戻って行った。

「……………あ……………お兄ちゃん……………」

「遊子！……………よかった！」

夏梨がほっとしたような声を上げる。

「……………どうしたの？」

遊子が問うと、一護は目を細めた。

「ずいぶんうなされてたから、心配してたんだ。大丈夫か？」

「うん。……………全然覚えてないよ」

悪い夢を見た、という感じはしない。

ただ、声を聞いた。

誰の声かはわからない。

ただずっと、遠くから何かを私に伝えようとしていた。

何だったんだろう、と首をかしげると、夏梨も首をかしげた。

「どうしたの？」

「なんでもないよ。大丈夫」

慌てて答えると、夏梨は、そっかと言った。

「夏梨ちゃんは、大丈夫？」

「え……？ う、うん。大丈夫だよ。元気元気」

「そっか……」

遊子には、夏梨が少し慌てたように見えた。

どうしてだろうと思っ、夏梨の顔色がずいぶんよくなっている事に気付く。

「……手」

「遊子？」

「手、貸して」

遊子がそう言うと、夏梨は大人しくその手を差し出した。

その手はひどく温かった。

少し前までは、自分と同じでひどく冷たかったはずだ。

そっと手を動かすと、そのやせ細っていた腕も、ずいぶん元に戻ってきているとわかった。

よくなってきた……

少し話ただけで、手に触れただけでわかるほどに、夏梨の容体はよくなってきた。

だけど、夏梨もほんの少し前まで寝台から離れられなかったはずだ。それが、つき添えるほどにまでずっと良くなってきた。

喜ぶべきことのはずなのに、遊子は自分の胸に痛みと混乱しか感じられなかった。

そつだ。

夏梨ちゃんはお兄ちゃんやお父さんほどじゃないけど、私よりは霊圧が高いって言うてた。

だから、私はだめだったけど夏梨ちゃんは助かったんだ。私だけ、だめだったんだ。

そう思った時、遊子は自分の心の中に鈍い感情を感じた。

どうして。

どうして夏梨ちゃんだけ助かるの。

どうして私にだけ霊力がないの。

どうして……

それが羨望ではなく嫉妬だとわからないほど、もう子供では無かった。

羨ましい。

どうして私だけ死ななくちゃいけないの。

私だって生きたい。

生きたいのに！

そう強く思った瞬間、夢の中の声の正体に気付いた。

あれは、私だ。

夢の中で、私は生きたいと叫んでいた。

何度も何度も、強く。

でも、今さらどうすればいいって言うの。

今さら尸魂界に行ったところで、どうせ私はもう助からない。それぐらいにまで悪くなってるなんて、誰に聞かなくてもわかる。それに、行くとしたら一人で行かなくちゃいけないんだ。だって夏梨ちゃんは助かったんだもん。私だけ、家族から離れて、一人で生きて行かなくちゃいけないんだ。死ぬか、一人で生きるかなんて、選べっこない。

「遊子？　どうかしたか？」

「一護が心配そうにのぞき込むと、遊子は慌てて首を振った。

「うっん、何でも無い。平気」

「なら、いいんだけど……無理すんなよ？」

「うん」

そう言っただけで少し笑うと、一護も安心したように笑った。

「じゃあ俺、これから少し仕事あるから。ごめんな」

「一護はそう言っただけでそっと遊子の頭をなでる

「うっん。頑張ってるね」

「おう……夏梨も、あんまり無理すんなよ」

「わかってる。じゃね」

「おう」

いつも通りのやり取りがあっただけで、一護は席を立った。

またこれから、山積している書類の山と向き合っただろう。

それでも、それすらも遊子にはうらやましく思えた。

生きて、誰かの役に立つことができるなんて、どんなに忙しくても幸せじゃない。

ずるいよ。

私は、好きでこんな風に生まれた訳じゃない。

遊子が苦しそうな表情を浮かべたのを見て、夏梨は慌てた。

「遊子！？ 大丈夫！？」

「……………うん。ごめんね、もう少し寝るよ」

そう言っつて、夏梨を拒絶するように遊子は寝返りを打つ。

夏梨は、それに何かを感じて手を伸ばした。

それでも、もうすこしで遊子の頭に触れるというところで手を止めた。

しばしの沈黙ののち、その手を引く。

「わかった。何かあったら呼んで」

そう言っつて席を立った夏梨に、遊子は何も言わなかった。

何も言えなかった、と言う方が正しいのかもしれない。

何かを言おうとすれば、多分、二度と家族に向き合えなくなるような言葉しか出てこない。

好きで、こんな風に生まれた訳じゃない……………？

そんな、こと。

まるでお母さんに似たくなかったかのような言い方だ。

お母さんに似ていると言われて、今まではすごく嬉しかったはずなのに。

自分の命がそのせいで削られているとわかった途端に、似たくなかった、なんて。

家族の誰もが、お母さんが大好きで、私だって大好きだった。

醜い、と思った。

なんて醜いんだろう。

お兄ちゃん、ずっと頑張って勉強して、いろんな仕事をしている。すごく大変で、辛いこともあるはずなのに、羨ましいなんて簡単に言っつて。

家族の誰もが大好きなお母さんを、好きでいられないなんて。

なんて自分勝手に、醜いんだろう。

そんな自分を、見られたくない。

生まれてからずっとそばにいた家族には、何も言わずともそのうち伝わってしまう。

だから一緒に居たくない。

一緒にいれば、きっとあの三人は私の事を嫌いになってしまう。

そんなの、いやだ。

静かに涙を流した遊子の背に、やわらかいものが触れた。

「一人で泣くんじゃねえよ。……生きたいと思って、何が悪いってんだ。当たり前だろうが」

びくつと身を震わせた遊子に、コンは続けた。

「あいつらには言わねえから、出てけなんて言うんじゃねえぞ」

その言葉に、鋭く痛いものを感じて、遊子は思わず泣きやむ。

「……どうして」

「あ？」

「どうして、わかったの？」

小さく小さく問うと、コンは遊子の背にもたれるように座った。

「俺さ、生まれた時 作られた次の日には、死ぬ日付が決められてたって言ったら、どう思う？」

「え？」

思いがけない告白に、遊子はコンの方へと向き直る。

「どういうこと？」

問いかけた遊子に、コンは語り聞かせた。

改造魂魄としての、自分の宿命を。

「だから、わかるんだよなア。……死ぬ時が迫ってるやつ、気持ちつてのがさ」

遊子は黙って聞いていた。

コンは遊子に背を向けたままだ。

「生きたいって思って何が悪い。そんなの当たり前だろ。何も醜くねえぞ」

無愛想な言い草に、遊子はやっぱり、と思った。

お兄ちゃんに、よく似てるよ。

こうやって、不器用でも気遣ってくれるあたりが、本当にそっくり。

「本当の事言うとな、わかんないんだ。自分がどうしたいのか」

今度は、遊子がゆっくりと話し始めた。

「ここで、みんなと最期まで一緒に居たいのか、尸魂界で、たくさん生きたいのか。……ここでたくさん生きられれば一番いいんだけど、難しいよね」

「……方法、探してみたらどうだ」

コンがぼつりと言う。

「簡単に諦めていいものじゃねえだろ。何かいい方法がないか、探してみるよ」

「……でも」

「言つとくけどな、一護も、あの親父も結構頭硬えぞ。見逃してるのがあるかもしれないねえ」

そんなわけない、と思った。

多分、これは嘘。

お兄ちゃんに似てるって事は、それだけ読めるってこと。

これは、私に希望を持たせようとしているだけの嘘。

でも、嬉しかった。

「ねえ、お兄ちゃんに伝えてくれる？」

急に話題が代わって、コンは振り向いた。

「気を使ってくれてありがとう、でももう大丈夫だよって」

コンは一瞬ぽかんとした後、あーあ、と言った。

「何でわかっちゃうかなあ」

「妹侮っちゃだめだよ。お兄ちゃんに言われたんでしょ？ 様子を
見てきてって」

「せーかいだ。本当によくわかるよなあ。兄妹ってすげえ」

コンがそう言って頭をかくと、遊子はくすりと笑った。

「そういうもんだよ。それと、コンだって兄妹。私たちのお兄ちゃ
んだよ」

え、と目を見開いたコンに、遊子はまた笑う。

「いいお兄ちゃんが二人もいて、私も夏梨ちゃんも幸せ。……夏梨

ちゃん、素直じゃないけど、きっとそう思ってるよ」

固まったままのコンに、遊子は続けた。

「ということ、お兄ちゃんによろしく。ね？」

ようやくコンは頷くと、何も言わずに寝台から飛び降りた。

顔が赤いのは、秘密にしておいてあげる。

遊子はそう思うと、また少し笑った。

ずいぶん、気分がよくなった。

そう、生きたいって思うのは当たり前。

何も醜くなんて無い　　そうか。

遊子は自分の手を見つめて、ぎゅっと握った。

私にできる事、見つけた。

私にしかできなくて、誰かの役に立てる事。

いそいそと起き出すと、遊子は久々に机に向かった。

S04 大好き 中篇（後書き）

タイトル日本語訳は「生きたい」

あああそしてコンが出しゃばる

原作ですっと出てきてないので、勘弁してあげてください（笑）

なんとなく、キャラ崩壊が目立った気がしないでもない今回の話。

遊子が好きな人にはごめんなさいという部分もありました。

でも最後にはちゃんと遊子らしく……なりましたよね？

年内に新章に入れないので（ホントごめんなさい）せめてこの外伝だけでも終わらせませす。

そして年明けの外伝は日夏です。恋愛っ気はありませんが。

本当はキリよく前半50話を終えて新年を迎えたかったですかね

え（遠い目）

ええそうです。

実はこの話、プロットでキツカリ100話なんです。

ようやく前半の終わりが見えてきました。

51話からは新展開です。がんばります。

それでは今後も宜しくお願いいたします。

S 0 4 大好き 後篇（前書き）

S 0 3 心の在り処 後篇よりも後の話です。

S04 大好き 後篇

thanks

もう少し、もう少しで、全部終わるから。
それまで、待って。

お父さんと、お母さんに会いたいけど、もう少しだけ。

じわりじわりと遊子の体を蝕み続けたそれは、二月前を境にして、
急激に速度を上げた。
刻々と、その時が迫ってくる。
もう、逃げ切れない。

「……まだ、目を覚まさないのか」

不意に後ろから声をかけられて、夏梨はふり返った。
夏梨が握るその手に、一護もまたそつと手を添える。
もう丸二日、遊子は目を覚ましていなかった。

「大丈夫だよ。また、ちゃんと目を覚ますよね？」
夏梨が問いかけると、膝の上のコンが跳ねた。

「当たり前だろーが！ 遊子はつえぞ。絶対目を覚ますから、そんな顔すんじゃないよ」

言いたい事を全部持って行かれた一護は、少々の怒りを込めてコンを驚掴みにした。

こここのところ、そういう事続きだ。

「ててて！ 行ってぞ一護！ 俺様のパーフェクトボディーがしわになつたら」

「ウルセーぞ。遊子が寝てんだ。静かにしやがれ」

むう、とコンが静かになると、一護は夏梨の頭を撫でた。

「大丈夫だ。そんなに心配していると、今度はお前が参っちまうぞ」
いつもなら振り払いかねないその仕草を、夏梨は甘んじて受けた。

手が、震えてる。

また、医者に何か言われたのだろうか。

そう思い、夏梨は気づかれなないように手を握りしめる。

「ねえ、一兄」

必死に動揺を押し殺して、夏梨は問いかけた。

「ちょっと、いい？」

そう言つて戸を示すと、一護は黙つて頷く。

「コン、遊子の事頼む」

「おうよ！」

それに一つ頷くと、一護は席を立った。

「どうした？」

一護の部屋で、二人は向かい合つて座っていた。

夏梨は所在なさそうにしばらく袖口をいじっていたが、意を決したように一護を見た。

「遊子ってさ、あとどのぐらい生きられるの？」

一護は一瞬目を見開いた後、静かに口を開いた。

「聞けるのか？」

そう言われて、夏梨は視線を落とす。

一兄が問いかけたのは、多分覚悟があるかということ。
真実を知る、覚悟。

「聞く。教えて」

真つ直ぐに自分の目を見据えて答えた夏梨に、一護は少しの安堵をおぼえた。

らしさが、戻ってきている。

伏している間は、不安だったのもあるのだろうけれど、夏梨はずっとそのらしさを失っていた。

父親の死を経験し、そうして姉の死も目前にして。

そんな状況でも強くあろうとする、夏梨らしさが戻ってきている。

「この三日が、山だと言われた」

「……三日？」

夏梨の、呆然とした声が部屋に響く。

やっぱりこれは酷だったか、と一護が表情をゆがめると同時に、夏梨が口を開いた。

「そんなに、短いの？」

その声は、震えてはいない。

でも動揺しているのは確かで、一護はやりきれなさを抱えながら頷いた。

「医者の見立てだと、そうだろうって」

夏梨はそれに返事をせず、静かに視線を落した。

「……わかった」

長い沈黙の後、夏梨はようやくぼつりと言った。

「ありがとね、一兄。教えてくれて」

その表情が痛々しくて、一護は眉間にしわを寄せる。

「大丈夫か？」

「うん。大丈夫。……遊子のところ、行ってくるね」

そういつて夏梨は席を立つと、一護が何かを言おうとするのを無視して部屋を出た。

「大丈夫なわけじゃない。何であんなこと聞いたのよ」

とん、と肩に重みが加わって、一護は視線を向ける。

「大丈夫か？　なんて聞かれたら、大丈夫って答えるしかないじゃない。バツカじゃないの？」

りりんは一気にまくしたてると、一護の頬をつねった。

「ってーな」

「夏梨の心はもつと痛いの！　これぐらい我慢しなさいよ！」

言い捨てて、りりんは膝へと飛び降りる。

「しかしまあ、他にいいようもありませんからねえ。そうやって一護さんを責めるのは、少し酷な気がしますよ」

今度は蔵人が肩に乗る。

「難しい問題ですからねえ」

蔵人がひとり言のように呟くと、反対側の肩に重みが加わった。

之芭は無言で首肯し、そのままそこへ腰かける。

「なあ、俺もう二十七なんだ」

突拍子もない一護の言葉に、りりん達が首をかしげる。

「こつちに来た時、俺は十六だった。……もう十年経ったんだなあ。全然、そんな気がしねえや」

そう言つて一護は視線を上げた。

りりん達もまた、それに倣う。

そう、もう十年も経ったのだ。

「俺さ、正直言つて、遊子がここまでもつとは思ってなかった」

りりんが、ぎゅっと一護の衣を握る。

一護はそつとりりんを撫でると、そのまま話し続けた。

「だから、むしろよく生きたんじゃないかってさえ思うんだ。後から体調崩した親父の方が、よっぽど早かっただろ」

そう言つて一護は小さくため息をつく。

「でも、短いよな。遊子も夏梨も、まだ二十二だ。……こつちの人は寿命長いけど、現世で考えたって二十二は短すぎる」

一護はゆっくりと視線を落とすと、部屋の外にある庭を見つめた。

「……確かに、短いすな。それでも、人生の半分をここで生きた」
右肩の蔵人を見つめると、今度は膝の上のりりんが話し始める。

「この間ね、あの子、言ってたわ。現世に居た頃と、こっちに来てからと、同じだけの時間なのにこっちの方がたくさん思い出があるんだ・って。……こっちに来てからなんて、眠ってる時間の方が長かったはずなのに……不思議じゃない？」

問いかけられて、一護は首を横へ振った。

「不思議じゃねえよ。……こっちに来てからの方が、色んな事があつたからな。色んな人に会ったし」

「……そうだな」

之芭が静かに同意する。

それに一つ頷くと、一護は穏やかに話し続けた。

「俺が何より不思議なのはさ、遊子がもうすぐ死ぬってのに、俺がこんなに落ち着いてる事だよ。……少し前だったら、考えられねえ」
そう言つて一護は目を細める。

りりんも、蔵人も、之芭も、ただ黙つて一護を見ていた。

「覚悟してたとか、そんなんじゃないやねえ。むしろ覚悟なんて全然できてねえ。……でもな、俺は多分、前のままの俺じゃ無くなってきてるんだ」

静かに目を瞑つて、一護は王土で出会つた様々な人、見聞きし、経験した様々なことに想いを馳せる。

「死は当たり前前に訪れるから、仕方ないなんて達観はできねえ。俺はそこまで出来た人間にはなれてねえ。……でも、受け入れられないうつて目を瞑つて暴れる程、子供でも無くなつたんだと思う。……そうだったらいいうつて思ってるだけかもしれないやねえけどな」
之芭はそつと目を閉じた。

思っているだけでは無い。

事実として、一護はずつと成長していた。

本人に自覚が無いところでも、顕著に表れる程に。

妹の死に動揺せずにいられるほど、静寂を持つ事は出来ないだろう。でも、むしろそれでいいのだ、と思う。

肉親を失っても何食わぬ顔ですぐに日常へ戻れるような人間が、いい為政者であるとは、思えない。

一護の得た成長は、妹の死に動揺しても、必ず、再び立ち上げられる強さだ。

周りを頼りにしたっていい。

そこでぐらい、一人で無理に立たなくてもいい。

口下手な自分は、そうやって上手く言えないだろう。

でも、きつとそれすらも今の一護は自分で気づけるはずだ。

りりん達を肩や膝から下ろすと、一護は立ち上がった。

「遊子のところ、行ってくる」

そう言つて部屋を出た一護を、三人は何も言わずに見送った。

「いよいよ、ですね」

りりんが、はつとしたように蔵人を見た。

蔵人は、その長い耳をしおらせ、渋面を作っている。

りりんは、ぽてんとその場に座り込んだ。

「そつよね……夏梨、大丈夫かな」

「仲のいい姉妹ですからねえ……双子というものの気持ちはわかりませんが、受ける衝撃は一護さんよりも大きいでしょう」

蔵人が言つと、之芭はまた無言で首肯した。

「祈るしか、ありませんな」

今度は、りりんが静かに頷いた。

「ねえ、お兄ちゃん」

目を覚ました遊子が一護に言う。

「あのね……大好きだよ。お兄ちゃんの事も、夏梨ちゃんの事も。みんな、大好き」

一護は何も言えずに、ただ遊子の頭を撫でた。

「だから、泣かないでね。みんなのこと、大好きだから、泣かないで」

夏梨が、ぎゅっと遊子の手を握る。

遊子は一度激しく咳こんだ後、再び話し始めた。

「私が死んでも、泣かないで。……お願い」

一護はそれにゆっくりと頷いた。

わかった、と小さな声で言う。

それでも、その声は震えていなかった。

「ありがとう……大好きだよ」

そうして、遊子は再び寝息をたてはじめた。

夏梨は一護にもたれかかると、静かに息を吐いた。

一護はその肩にそっと手を置いた。

それから、遊子は二度と目を覚まさなかった。

眠ったまま、ただ静かに息を引き取った時、一護と夏梨は泣かなかった。

一護は遊子の頭をそっと撫で、夏梨はその手をぎゅっと握り、そして精一杯の笑顔を見せた。

それがたとえ不安定でも、今にも崩れそうなものでも、今はただ、それだけでいい。

冷たくなりゆくその手に、今はただ、この温もりを。

S04 大好き 後篇（後書き）

タイトル日本語訳は「ありがとう」

なんだか強引に終わらせた感じがしないでもないです。

そしてこれが年内最後の更新になります。

皆さま本年は誠にお世話になりました…などとあいさつをしている場合ではないですね。

この話の中の人々を一刻も早くこの苦行から脱出させるべく、がんばりたいと思います。

そして遊子中心の話になるはずだった今回の外伝。

何故かコンをはじめとする”ぐるみ”達が張り切りまして、このよ
うな結末に。

遊子が何を遺したのかは、いずれということ。

それでは今後も宜しく願っています。

本年は誠にありがとうございました。

S O 5 雨亭 前篇(前書き)

S O 4 大好き 後篇 の一ヶ月後の話です。

S O S 雨亭 前篇

l o s s , s o r r o w , w i t n e s s

二つで一つ 一つで二つ 初めてが永遠になる時に
私たちは別れを知った

大雨の日に傘を投げ捨て 差し延べられたその手を取れば
一つの光が心に燈る

永遠の時を信じることは きっともう出来ないけれど
光を追って歩む道を 外れはしないと心に決めた

為すべきことを為すために 強く刃を握り締める
その覚悟を知っているから

私はあなたの隣に立ちたい

遊子が死んでから、1ヶ月が経つ。

宮は徐々に日常へと戻りつつあった。

それは、一護も例外ではない。

無理をしているのは否めないが、それでも無理が出来るほどには立ち直っていた。

全てが、再び回り始めようとしていた。
たった一つの振り子を除いて。

冬獅郎がその夕に訪れたのは、東宮府の一角。
戸を叩くも返事はない。

だが部屋の主が中にいるのはわかっている。
冬獅郎の知る限り、彼女はこの一ヶ月、必要以上に部屋から出ていない。

「入るぞ。」
もう一度だけ戸を叩き、拒絶の声がないのを確認してから部屋に入る。

部屋に人影はない。
ぐるりと見渡し、ようやく目的の人物を見つけるた冬獅郎はため息をついた。

「……そんなトコにずっといたのか？」
声をかけると、その人影　　いつそ塊と言った方が近いかもしれない　　が動いた。
「何？」

夏梨の目は赤い。
何も一人で泣くことはないだろうに、と思うが、元々泣き顔を見せる性格ではないのを思い出し、内心嘆息した。
それに、と内心で付け足す。
泣きそう、というだけで泣いてはいないようだ。
ここまで律儀に約束を守るのもどうかと思うが、最期の約束というのは往々にして破り辛いものだ。

「市場行くけど、行くか？」
桐生の伝言をそのまま伝えると、夏梨は首を横へ振った。

「行かない」

「……買ってきてほしいものは？」

「無い」

二つ目の提案も一蹴された冬獅郎は頭を書いた。

毎日のように誘っているが、いつもこれだ。

こうして籠りきりなのは体に悪い。

せっかく夏梨は回復できたのだから、こうしてわざと体を壊すようなことをして欲しくなかった。

「あんまり籠ってるよ、余計に気が滅入るぞ」

「知らない」

果てしなく不毛なやりとりに、いい加減嫌気がさしてきていた。

冬獅郎には、上手く理解できないのだ。

死神として生きてきた彼にとって、死というのは日常にありふれているものだ。

部下が殉職したという知らせを、何度受けたかなんてしれない。

他隊のものを含めれば、到底全てを知り得られるものではなかった。まして、魂葬の現場がその体の前ということさえ容易に有りうるのだ。

もちろん、家族を喪ったの悲しいだろう。

冬獅郎だって、遊子が死んだのはやはり悲しかった。

でも、果たして一ヶ月もこうするほどのものなのだろうか。

雛森を、祖母を失えば、やはり自分もこうなるのだろうか。

言い切れはしないが、それは違うだろうと思った。

過去の自分であれば、あるいはそうだったかもしれない。

藍染との戦いで自分が言ったことははっきりと覚えている。

考え無しの、幼いものだったと思う。

今あの時の自分を目の前にしたら、恐らく横つ面を張り倒すだろう。それでも、当時はそれが全てだった。

草冠を喪った時も、そうだった。

本当は、あのまま護挺十三隊に入るつもりなんてさらさらなかった。流魂街に帰るつもりだった。

踏み止まれたのは、氷輪丸があったから。

草冠が自分を殺しても欲したその力を、封じてはいけない気がした。

最早、それは草冠同然だった。

主従というより相棒に近いそれは、抜き放った瞬間に日の光を弾いて燦然と輝いた。

草冠が見ている、と感じた。

だから、恥ずかしい生き方はできないと。

今の夏梨に、その意識はあるだろうか。

見られている。

だから、心配をかけられない、と。

母や父を喪った時は、それができていた。

でも今はどうだ。

水を並々と注がれた杯が、最後の一滴を受けて溢れかえったかのようではないか。

限界だったのだろうか。

一人で抱えこめる重さではない。

ここまで一人で耐えて来たからこそ、頼りかたを覚えずに来てしまったのだ。

だから、こうして一人悲しみに溺れている。

それでも誰かに頼ろうとはしない。
一護も、凜も、誰もが手を差し延べている。
その手を取りさえすれば、何かが変わるだろうに。

「なあ、どう思う？」

「……何がだ？」

「夏梨だよ。……どうしたらいいんだろうな」

そうため息をついた一護に、冬獅郎は首を振った。

「……わかんねえよ、そんなこと」

「だよなあ。悪い、変なこと聞いた」

天井を仰いだ一護に、冬獅郎は前々から思っていたことを提案した。

「外に出したらどうだ？」

「は？」

「働くのは難しいだろうけど、学校とか。……外に出るようになれば、少しずつよくなるんじゃないか？」

俺もそうだったし、と付け足した冬獅郎に、一護は目を細めた。

草冠の死を癒してくれたのは、一人が死んでも何も変わらない”世界”だった。

大切な人の死が、何にも影響しない。

それは確かに辛い。

でも、何も変わらないでいてくれるから、自分も立ち直れるんだ、と後からわかった。

多分、今の夏梨に必要なのはそれだ。

それは一護にとっても同じだった。

母を喪った時、再び通い始めた学校は何も変わっていなかった。

死というものの重さを本当に理解できるほど、周りは大人でなかつ

た。

だから変に気をまわされることもなかった。

そのせいで傷ついたこともあったけれど、救われたことの方が多かったように思う。

「学校か……いいかもな。お前から言ってみてくれねえ?」

冬獅郎が怪訝そうな顔を見ると、一護は付け足した。

「俺が言うより、お前が言った方がいい気がする。頼む」

冬獅郎はしばし躊躇ったのち、口を開いた。

「お前が言ったほうが……」

「頼むよ。お前の発案でもあるんだし」

重ねて言われ、冬獅郎は半ばしぶしぶ頷いた。

どうしたものか、と冬獅郎は物思いに耽っていた。

どういう風に切り出せばいいのか、全くもってわからない。

手に持った筆を玩んでいると、不意に眉間を突かれた。

「いってーな。何だよ、いきなり」

文句を言うと、目の前の桐生はニヤリと笑った。

「隙アリ。注意力が散漫すぎるわ。一体何考えてるの」

「別に……頼まれごとしたから、それ考えてた」

桐生は首を傾げると、ああ、と頷いた。

「夏梨ちゃんのことか」

「よくわかったな」

「女の勘ナメんな。あんたに何か頼むなんて、それぐらいのもんでしょ」

そう言つて桐生は立ち上がるとお茶を注ぐ。

「休憩にしましょ。相談のるくらいならしてあげるわ」

「相談つたつて」

何をどうすればいいんだ、と言つた冬獅郎に、桐生は腕組みをして

向かい合った。

「なら自分で考えな。仕事中にぼんやりしないで」

「……」

桐生の言うことはいたって正論なので、冬獅郎は黙ってその茶を受け取った。

「ところで、何を頼まれたの」

金平糖を一つ口に放り込むと、桐生は問い掛ける。

「学校、行ってみたらどうだって提案してくれって」

学校？ と桐生が問うと、冬獅郎はうなずいた。

「籠ってるより、外に出る方が気が晴れるんじゃないかって一護に言ったらさ、ならそうやって提案してくれねえかって」

「なんであんなのかしら。自分で提案したらいいのに」

そう言っただけで桐生はもう一つ金平糖を放り込む。

「お前が言い出したことだから、だつてさ」

冬獅郎も一つ金平糖をつまんだ。

尸魂界でも王土でも、この味は変わらない。

「学校ねえ。あんたにしちやいい考えじゃない。……確かに、外に出るってというのが一番効くわ。将来のこと考えても、学校行くのはいいことだし」

「将来のこと？」

「夏梨ちゃんはまだ生きてた……なら、これからも王族として生きていくってことよ。元気になったんだから、それなりの責務も負うことになるだろうし」

それについて深く考えたことはなかったが、言われてみればそうだ。「責務、か」

「そうよ、責務。……一護君は時間がなかったから学校に通っていないけど、本当なら普通に学校に通うのよ。王族でも、他の子たちと一緒にね」

尸魂界では考えられないことだから、それを聞いた時は冬獅郎も驚いた。

誰もが通える学校、というのは尸魂界には存在しない。

読み書き程度の個人塾ならあったが、それ以上となると貴族が通う高等学舎か、死神や鬼道衆、隠密機動を養成する真央霊術院しかない。

つまり、貴族と流魂街の住民が共に学ぶ場所などないのだ。

それが、王土では違う。

公立で、現世で言う幼稚園から大学院までが整備されており、そこには誰もが無料で通うことができる。

護衛士の中にも、王土の風習を学ぶために夜間学校に通っているものが大勢いた。

「らしいな。……でも、今のアイツは多分それも嫌だって言うだろう。一口お茶をすすると、冬獅郎は言った。

「案外そうでもないかもよ？」

「は？ ……なんで」

ああも頑なに外に出ることを拒んでいるのだ。

学校に行くとなれば相当な覚悟がいると思うのだが。

「あの子、自分でどうしたらいいのかわかんなくなってるのよ。新しいきっかけがあれば、案外食いつくかもしれない」

「……そういうものなのか？」

「そういうもんよ、案外ね」

そう言って、桐生は心得顔で頷いた。

S O S 雨罨 前篇（後書き）

タイトル日本語訳は「喪失、悲しみ、目撃者」

前々回に引き続きキャラ崩壊が目立った気が……します。ごめんなさい。

次回でちよいとマシになるはずです。

日夏をもっとほのぼのので書きたいのに、私にはどうやらほのぼのを書く才能がないようで。

なんだか新年早々このような仕上がりでよいものか、首をかしげつつですが更新させていただきます。

活動報告に新年の挨拶を兼ねてLost gearの製作秘話(?)を投稿しました。

よろしければそちらもご一読下さいませ。

それでは感想などお待ちしております。

S O 5 雨雫 中篇(前書き)

S O 5 雨雫 前篇の数日後の話です。

S O S 雨零 中篇

s t a n d u p

「……………学校？」

「ああ。通ってみたらどうだ？ 他の人たちはみんな通ってるんだし、外に出た方が」

「いやだ」

結局直球勝負で提案した冬獅郎は、その返答に眉根を寄せた。

「何でだよ」

とりあえず理由だけでも、と訊いてみる。

今勧めれば、逆に天の邪鬼が活性化しかねない。

「……………遊子が、いない」

遊子、と言った時、夏梨の声は僅かに震えた。

それほどまでに、その名前は重みがあるのだ。

「……………どういう意味だ？」

「遊子がいないんだよ……………今までずっと、ずっと一緒だったのに、遊子がいないんだ……………！」

夏梨は硬く目を瞑り首を左右に振る。

「生まれてからずっと一緒だったのに……………あいつのいない世界なんて、初めてなんだよ」

夏梨の言葉に、冬獅郎は一瞬キョトンとした。

初めての、世界。

内心で反芻して、その重みに気付く。

例えば親であれば、小学校という小さな世界に親はいない。

それは兄や姉であっても同じだ。

例えば子であれば、その子が生まれるまでの間は、居ない世界ですと過ごす。

それは弟や妹であっても同じ。

でも、遊子と夏梨は姉妹で在りながら双子だ。

生まれた時も、育った環境も一緒なのだ。

遊子がいない初めての世界。

それはもつと別の形で徐々に経験していくはずだったのに、それがいきなり眼前につきつけられたのだ。

夏梨が外を知るのを拒んだのは、死が悲しいからではなかった。その世界に当惑し、一步引いてしまっているからだ。

「……無理。学校なんて、行けない」

そう言っつてギョツと手を握りしめた夏梨を、冬獅郎はじっと見つめる。

「なら、このまま一生こうしているのか？」

「……ッ……それは」

「いつまでもこうしてられねえことぐらい、わかるだろ」

夏梨は目を合わせようとしなかった。

それも全部わかっていて、それでも一步踏み出せないでいるのだ。

荒療治だと承知の上で、冬獅郎は口火を切った。

「……お前、最近一護に会ったのいつだ」

へ、と夏梨は言っつて首をかしげる。

「昨日の晩だけど、何？」

「その前は」

「……その前の晩。それで？ それが何なのさ」

何処まで言っつべきか、冬獅郎は考えながら慎重に話した。

「あいつの様子、気づいているか？」

唐突なその問いにいささか面食らいつつ、夏梨は考える。

「様子って……例えば、なに」

「変わっただろ、あいつ。……雰囲気とか」

それについては特に否定する要素を持たなかった。

一護は以前よりもずっと速い速度で変わり始めている。

「確かに、変わったね。でもそれはずっと前からでしょ」

言外に遊子の死は関係ない、と告げた夏梨に、冬獅郎は首を横へ振った。

「んなわけねーだろ。考えてみろ、あいつが影響受けなくても思えるのか？」

「それは……」

「気づいてやれ。あいつが、あいつのまま接せる相手なんて、もうほとんどお前だけだろう」

夏梨はじつと冬獅郎の顔を見た。

「……そんなこと、無いでしょ。冬獅郎だっているし、桐生とか、凜さんとか」

冬獅郎はゆっくりと首を横へと振る。

「それは見間違いだな。お前、もう少しあいつの事見てやれ。そうすればわかるはずだ」

「何が？」

問われた冬獅郎は、答える事無く立ち上がると扉へと向かった。

「お前が何をわかっていないのかも、それ以外も、全部だ」

立ち止まり言い捨てると、冬獅郎はそのまま戸を閉める。

取り残された夏梨は、その言葉の意味を計りかねてただ扉を見つめていた。

「……わかってないわけ、ないじゃん」

夏梨は、一人呟く。

何年妹をやっていると思っっているのだ。

ただでさえ隠し事が苦手な兄で、周りの人がみんな気付いているのに私だけ気付いてないなんて、そんなことがあるとでも思っっているのだろうか。

薄い、膜のような。

そんな気配を、夏梨は一護から感じていた。

他人と深くかわる事を許さないその膜は、その存在で一兄を護っている。

必要とあれば他人に対して自分から関わっていく事はするだろう。でも。

自分に対して他人が深くかわってくる事は、最後まで拒む。

そういう、膜を、感じていた。

いつからかは、はっきりと覚えていない。

それに似たようなものであれば、現世に居る時からずっと感じていた。

死神代行として、命を懸けて戦っていた時。

自分達家族に心配をかけまいと、必死になって自分の内で起こっている事を隠していた。

その時にも、こんな膜を感じていた。

はっきりしだしたのはいつのころだったろうか。

思いだすように、夏梨は天井を見つめた。

三年前、か。

記憶を手繰って、一つの答えを導き出す。そう。

あの刻、だ。

薄暗い部屋。

ちよつど日が暮れかかった頃で、灯りを足さなくては満足に見えなくなつてきていた。

それでも、誰も動こうとしない。

ただ息をつめて、時折聞こえる衣擦れと、そして私と遊子のしゃくりあげる声に耳を澄ませていた。

滲んだ視界に映るのは、冷たくなっていくヒトガタに背を向け、部屋を出ていく一兄。

遊子はそのヒトガタに縋りついたままで、私はその手に力無く自分の手を預けていた。

一兄は、振り返らなかった。

あの刻。

東宮になつたあの刻から、一兄は自分自身に構わなくなった。

それと比例するように、あの膜は厚みを増して。

理性として自分を護ろうとしないから、本能が顔をのぞかせているのだと思つた。

自己防衛という、生きる上で一番大切なその本能。

それが、自分を護ろうとしない一兄を、ギリギリの一線で護っているのだ、と。

外に出たくないのは、遊子がないから？

そう、それもある。

でもそれだけじゃない。

それだけの理由で、周りに迷惑をかけ続けられるほどガキじゃない。いくら姉を失つたからって、たしかにそれはすごく悲しいし、いま

でも胸が潰れそうなほどだけど、それは周りに心配をかけていい理由になんてならない。

出たくないんじゃない。出られないんだ。

私が一人で生きられるようになったら、一兄はどうなる？

黒崎一護は、何処へ行ってしまう？

今は私がこうしているから、一兄は黒崎一護としての自分を残していられる。

でも、今や一兄のほとんどは黒崎一護じゃなくて東宮 次期霊王だ。

もし自分が学校へ行くと言ったら、外に出て頑張りたいと言ったら、そのわずかな黒崎一護としての自分さえも失われてしまうんじゃないか。

そういう、恐怖に似た予測を夏梨は感じていた、

あいつが、あいつのまま接せる相手なんて、もうほとんどお前だけだろう

冬獅郎はそう言った。

そう、その通り。

冬獅郎にさえ、その膜は有効だ。

そんなの当たり前なんだけど、それでも悔しいと思った。

毎日毎日、一兄は東宮として役目を果たすために役所へと行く。

冬獅郎は護衛士としてそれにつき従う。

そこに、仲間としての感情が入る余地は無い。

例えば仕事をしていない時でも、何かあればその安らぎは簡単に崩れさる。

“私”としての時間は“公”としての時間の隙間にだけ存在する。

そんな生活が、いつまでも続けられるとは思えない。

だからすこしでも“私”の時間を得られるように、私が頑張るしかない。

ふーっと、夏梨は息を吐いた。

それでも、外に出たい。

そう思う自分に腹が立つ。

決めたのに。一兄の代わりに一兄を護ると決めたのに。

それでも、外に出たいと思ってしまう。

後ろに庇うものがあるから、一兄は迷いなく前へと進める。

でも、庇われているのにも限界はある。

隣に、立ちたい、と思った。

同じ場所に立ちたい、共に戦いたい、と。

今も色んなものへと立ち向かっているたくさんの人たちと、対等の立場でいたい。

悔しいぐらいにかっこいいのだ。

その後ろ姿は、たくさんの決意を背負っていて。

だから、後ろからではなく、隣から、その姿を、世界を見たいと思つて。

でもそうなってしまうえば、冬獅郎の二の舞だ。

冬獅郎と一兄との間に仲間としての感情が入る余地が無くなってしまったように、私と一兄の間に兄妹としての感情が入る余地は無く

なってしまうだろう。

隣に立ち、共に進むこと。

後ろで待ち、その場所を護る事。

「どっちが正しいのかなんて、分かんないよ。」

小さく呟いた夏梨に、応えるものは無い。

応えを期待していた訳ではないのだけれど、無ければ無いでやはり少し悲しかった。

立ちあがれ

不意に声気がして、はっと夏梨は左右を見渡す。

でもそれは耳から入って来た音では無い。

まるで、直接頭に響くような。

立ちあがれ、夏梨

また、今度はもっととはっきりと聞こえて、夏梨は目をつぶった。

立ちあがれ。前へ、進め……

叱咤する声色では無いのに、それは不思議と背筋を伸ばさせた。

心の深いところに、すっと入って来るようなその声に、夏梨は耳を傾ける

立ちあがれ。お前には、力がある

立ちあがれ。力を、つける。

立ちあがれ。力を、揮え。

次第に強くなるその声を振り払うように、夏梨は強く首を振った。

なんだよ、これ

今迄に経験した事の無いそれに、気味が悪くなる。

立ちあがれ。

立ちあがれ。

夏梨は勢いよく立ちあがると、その声を振り払うように走りだした。

S O S 雨琴 中篇（後書き）

タイトル日本語訳は「立ち上げれ」

少々すみません。

言い訳は活動報告にてさんざんしておりますのでそちらをどうぞ。

更新ペースを上げたいのですが、現在の宿題& a m p ・テストの状況をみる限り難しそうです（汗

今回の一番最後の部分。

実は書くつもりがなかったんですよー。

だってまだ名前も何も決めていないんです。

候補は上げているんですけども。

457

そして、真ん中ほどにあつた夏梨の回想シーン。

直接的な表現を避けた結果ひっじょうにわかりにくい仕上がりになった気がします。

いやあ、久し振りに書くと……いかなあ

普段の倍ほどの時間もかかってしまいましたし。

なんとか執筆速度だけでも戻したいものです。

それでは感想などお待ちしております。

S O S 雨亭 後篇(前書き)

中篇の直後から始まります。

quince's decision

「それは……」

何とも言えない表情を浮かべて、桐生は視線をそらした。

夏梨が話したそれは、まぎれもなく自分たちの誰もが経験した事。漸くその時が来たのだ、とまるで親のように嬉しくなった。

「何つーか、突然だなあ」

半ば呆れを含んだ口調で一護も呟く。

私室で調べ物をしていたため、その手に辞書ほどの厚さの本を持っていた。

「そうでもないだろ。そもそもこれは本人の意思には全く関係無く始まるものだ」

冬獅郎は一瞬夏梨を見たあと、決してそちらを見ようとはしない。判断を仰ぐように一護を見ていた。

「……で、なんなのさ、この声」

頭痛くなってきたんだけど、と付け足した夏梨に、一護は苦笑する。「静かにしろって言うてみたらどうだ？ 案外言うこと聞くかもな」

「答えになつて無い。なんなの、これ」

耳を押さえて座り込んだ夏梨の肩に、桐生はそっと手をのせた。

「 斬魄刀の、声よ。あなたの斬魄刀の、ね」

夏梨は、一瞬キョトンと桐生を見つめた。
それ以上の説明が無い事を察して、冬獅郎に、一護にと順番に視線を移して行く。

「斬魄刀の本体は、持ち主の精神世界に存在する。……内側から声が聞こえると言うのなら、まず間違いないだろう」

結局冬獅郎が補足をする、夏梨は眉間にしわを寄せた、

「斬魄刀っていうとそれとかそれとかそれ？」

言いつつ順番に桐生と冬獅郎、一護の斬魄刀を指差す。

桐生は腰に、冬獅郎は背にそれを差し、一護は壁に立てかけていた、

「それって言わないで。ちゃんと名前があるんだから。私のは、

輪彩丸。炎熱系の斬魄刀よ」

「俺のは氷輪丸。冰雪系だ……見た事、あったよな」

冬獅郎に言われて、夏梨は思い出す。

軽く頷いたところで、今度は一護の声が出た。

「俺のは斬月。……確か、直接攻撃系って部類に入るらしいぜ。よくわかんねえけどな」

「えーっと、つまり……私にも斬魄刀があつて、それが内側から私に話しかけてる。そーいう事？」

「そーなるわね」

桐生がサクッと答えると、夏梨は反応に困ったように目を細める。

「とりあえず、この声どうにかする方法教えて。ほんと、だんだん気持ち悪くなってきた」

額に手を当てた夏梨に、だから、と一護は言った。

「静かにしろって言うてみる。お前の物なんだ。……反発しても、結局お前に一番いいようにしてくれる」

言われた通りにすると、次第にその声は遠ざかっていく。

それにひとまず嘆息すると、夏梨は漸く顔を上げた。

その瞬間目に入ったのは、目を見交わした先達三人の姿。

「何？」

問いかけたその声に険が滲んだのは仕方ない。

まるで隠し事でもされているかのような雰囲気を感じたのだから。

「修行をはじめなくちゃいけねえな」

眉間のしわを緩めずに、一護は言う。

「斬魄刀を自分の思いのままに使いこなせるように、な。……まあ、

お前は俺より霊圧操作も上手いから、大丈夫か」

そう言った割に、やはり眉間のしわは深いままで。

何かあるのかと夏梨が問おうとした瞬間、再び一護は口を開いた。

「……夏梨。斬魄刀を手に入れる意味がわかるか？」

「……意味？」

そのまま問い返すと、今度は桐生が頷いた。

「斬魄刀を手にするという事は、そのまま死神としての力を手に入れるということよ。その意味が、わかる？」

わからない、と三人を見ると、一護は口を開いた。

「力を持った人なら、それを正しく遣う責任があるんだと俺は思う。死神としての力を手にした人なら、それを遣う責任がな」

「死神になれってこと？」

夏梨が問うと、一護は首を横へ振る。

「そうじゃない。……もう、子供でいるなって事だ。遊子が死んで悲しいのもわかる。けどな、いつまでもこうしてられないことぐらいわかってるだろ？」

夏梨が目を逸らすと、一護は口調を改めた。

「王族の血を引き、王宮で暮らしている以上、王族として生きるのが責務だ。役割を果たせ、夏梨」

夏梨は少しだけ口を開き、躊躇うように目を伏せる。
一護は急かすことなくその答えを待った。

「……私にできる事、あるんだよね？」

しばらくして、漸く夏梨が言ったのはそれだった。

「私にも何かできるんだよね？」

その表情の真剣さに、一護もまたはぐらかすことなく答える。

「お前次第、だな。お前がどこまで頑張れるかによる」

「頑張る」

一瞬の躊躇いも無く、夏梨はそう答えた。

先ほどまでの決意を翻すような言を発したのには、訳がある。

夏梨が今いるのは、一護の“私”室だ。

“私”としての生活を営むべき、くつろぐべき部屋に関わらず、一護が手に持っているのは仕事の調べ物に使う厚い本だ。

そして机の上には書類が山積している。

今一護が必要としているのは“私”としての自分を護ってくれる者ではなく、少しでも手助けをしてくれる者だと悟ったのだ。

かつて父が使っていた東宮府の主が使う部屋は、そういえばいつも仕事の書類がある。

父の代も、そして今の兄の代も。

もっともっと早くに気付くべきだったその事実を、夏梨は漸く理解した。

「なら、やるべき事は山ほどあるな。……勉強も必要だし、何より斬魄刀を遣えるようにならなくちゃな」

「その前にやるべき事が一つだけあるけどね」

一護がやる事を整理していると、突然桐生が口を挟んだ。
無言で三人が促すと、桐生は真っ直ぐに夏梨を見る。

「夏梨ちゃん、あなたは何がしたいの？」

その問いに一護は眉を上げ、冬獅郎もまた眉間にしわを寄せた。

「どういう意味？」

夏梨が問い返すと、桐生は再び言う。

「そのままよ。あなたは何がしたいの？」

王族にも様々な役目

がある。一護君のように、宮で政治をするのもその一つ。でもあなたには選択肢があるわ。もし、外での役目を果たしたいのなら」

「おい、それは」

冬獅郎が何かを言おうとすると、桐生は目線でそれを制した。

「もし外での役目を果たしたいのなら、それ相応の訓練も必要になる。自分で自分の身を守るようにね」

「そうでしょうか？」と桐生が一護に問いかけると、一護は静かに頷いた。

「そうだな。……夏梨は、どうしたい？ お前の人生だ。お前が好きに決めたらいい」

「そう言った一護の目は、少しの不安と、そして羨望を映していた。それに気付いた夏梨ははっとする。」

一護には最初から与えられなかった選択肢。

外で役目を果たすという　その指すことは一つしかない　霊
王と東宮を除けば王族で最も誇りある仕事と言われる、それを選ぶ
権利が夏梨にはあるのだ。

「巡察使に、なるかどうかってこと？」

そう言つと、一護は静かに頷いた。

王族で、州ごとにおかれる離宮に住む者を除けば唯一外で役目を果たす、巡察使というそれ。

宮を出る事が出来ない、しかし政治をしなくてはならない霊王に代わって民間を巡り、その内で起こった事、民から上げられた要望を霊王に伝え、そして霊王からの宣下を民へ伝える仕事。

霊王への直接奏上権を持つ王族だからこそできるそれは、王族であれば誰もが目指すものであり、しかしその求められる条件の厳しさ故に叶わぬ事も多いものだ。

一護と夏梨の父である一心も、そして凜や今の霊王もかつて携わっていたというそれに、夏梨も僅かならず憧れを覚えてはいた。

だが、それは大きな危険を伴うものでもある。

必要とあれば災害地へ赴く事もある上、多くの場合それは単独での任務だ。

少しでも多くの声を拾うために、巡察使は単独でその任をこなす。護衛が付く事も少ない。

つまり、何があっても独力で対処しなくてはならないのだ。

冬獅郎が先ほど桐生の言を制しようとした訳はそこにある。危険すぎるのだ。

それでも、夏梨は自分の内から湧き起こるその声を抑えることができなかつた。

なぜなら、それはまぎれもなく何よりも力になれる仕事だから。だから、夏梨は真っ直ぐに一護の目を見た。

「目指したい。やらせて」

一護は一瞬目を細めて、小さくため息をついた。

「決まりだな。 剣や鬼道の修業は冬獅郎か桐生に見てもらえ。勉強は凜さんに頼めばいい。俺も手伝う。……やってみる」

それは、普段の一護からは考えられない言葉だった。

妹が危険な道へと踏み出そうとする、それを止めるどころか後押しするのだ。

むしろ冬獅郎の方が納得のいかなさそうな顔をしているぐらいで、でも桐生はその想いを正確に読み取った。

自分には無かった選択肢を与えられ、それを自ら望んで選んだ。羨ましいと思う事こそあれ、どうして阻む事が出来よう。

夏梨が何か目標を見つけるのを誰よりも望んでいたのは、一護なのだから。

そして、その想いを読み取ったのは桐生だけでは無かった。

「ありがとう、一兄」

そう言って夏梨は力強く笑う。

それを見た冬獅郎は、漸く小さな溜息をついた。

S05 雨零 後篇(後書き)

タイトル日本語訳は「夏梨の決意」

いや、直訳するとマルメロの決意になるんですけどもね。

マルメロは西洋カリンで、では普通のカリンはというと英語でChinese quince。
だったらもうこれでいいやってな感じです。

そして増えゆくオリジナル設定。

巡察使の説明は作中で済んだものとして(これから結構出てくるし)輪彩丸の説明……というか名前の由来ですね。

輪彩とは、ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが太陽の異称です。

氷輪と対になるイメージでこんな風になりました。

能力はおいおい作中で(とはいえバトル描写は苦手ですからどうなるかは知れません)

夏梨の斬魄刀の能力も大枠は決まっています。その名前も。

(多分)そのうちでてきますので、楽しみにしていただけたら嬉しいです。

そしていよいよ次話から新章へ突入です！

この日をどれだけ待ちわびたことか……なんて書き手がいうことじやありませんね。

それでは感想などお待ちしております。

第五章が始まります。

時間軸は、第一・三章の三十二年後、第二章の二十六年後、第四章の十八年後です。

要するに現世組は四十八歳です。

苦手な方は即でリターンしてください。

「Six pendulums who have the key」

彼方より来し六つの振子は

その手に鍵を携える

意を預けし者の願いを

その身にしかと刻みいて

時の大河は流れを止めず

日々の変化を映したり

然れど支流は沼地となりて

凝りし想いを溜め来る

しかし振子は全てを賭けて

錠の錠をこじ開ける

開く扉の秘めたる真は

両の刃を内に持つ

血で洗いし心に響くは

かつての想いと言葉なり

構えた武器は刀に非ず

堅き絆をその手に挑む

敵わぬと知りなお挑むるを

目にした君は嗤うか否か

key
s
i
x
p
e
n
d
u
l
u
m
s
w
h
o
h
a
v
e
t
h
e

「s i x p e n d u l u m s w h o h a v e t h e k e y」(後書き)

タイトル日本語訳は「手掛かりを携えた六つの振り子」

プロローグの詩です。

今回の六つの振り子が誰なのか、推測しながら読んでみてください。

それでは感想などお待ちしております。

t h e b o y l o o k s l i k e o u r f r i e n d (前書き)

舞台は現世です。

t h e b o y l o o k s l i k e o u r f r i e n d

「えっと……黒崎、黒崎………」

年のころは、九歳ほどだろうか。

小柄な少年が墓地のなかを一人歩いている。

その髪は橙、目は茶色。

誰かの姿を強く思い起こさせる容貌をした彼は、しかし常人には見えない。

彼は、魂魄だった。

「ここだ」

一つ一つ墓標を確認しながら、ようやくその少年は目的の墓を探し当てた。

現世とは違う、彼の故郷のやり方で墓に参り、跪く。

「はじめまして。おばあさま」

少年は、そうして話にしかなかった事のない祖母との対面を果たした。

「にしても、ちっとも暖かくなんねえなあ」

「暖冬の予想だったのに、たくさん雪も降ったしな。今年の冬は大変だった」

赤髪の、黒衣の上に白い羽織を纏った青年が言うと、そのすぐ後ろを歩く眼鏡をかけた瘦躯の男が返した。

「ム……」

それに同意したのは、もう三十年の付き合いになる親友。

眼鏡の男が横を見れば、自分よりも少し背の低い妻もまた、男に笑いかけていた。

「休む暇、全然なかったものね。交通事故ばっかりで」

「三人とも働き過ぎだよ。もう若くないって事、わかってる？」

振り返れば、出会ったころとは随分と面ざしを変えた、これまた三十年来の付き合いの男が僅かに見上げていた。

「まだまだこれからさ。体力には自信があるからな」

そう返された男は苦笑する。

これだから、と言われて、その三人の医師は互いの顔を見合わせた。「悪い悪い。遅くなったな」

呼びかけられて再び前を見、駆けてきた夫婦に首を振る。

「そうでもないさ。俺たちも着いたばかりだからな」

「ほら、だからまだ間に合うって」

「ふざけないでよ。あんたそうやっていつまでもモタモタしてるじゃない！」

いつもの如く一方的な夫婦げんかが始まりそうな気配を察して、口数の少ない男は無言で仲裁に入った。

その時、だった。

「揃っておるな。……なんだ、私が最後ではないか」

些か不服そうに言い添えられたその言葉に、その親友は笑いかけた。

「久し振りだね。朽木さん」

八人は揃ってある場所へと向かっていた。

それは、自分たちには直接の關係を持たない場所。

でも、彼らは毎年どこるか、時間の許す限りその場を訪れている。

織姫は手に持った花束を抱えなおすと、少し歩みを速めた。

キビキビとしたその所作は、医者という多忙すぎる仕事に就いたからこそのもので、ルキアはそれを頼もしそうに見つめる。

今の彼らの姿を見たら、あ奴はどう思うだろうか。

そんな事を想つてふつと苦笑をにじませた。

糸のもつれあいのような一瞬の邂逅から、すでに十八年の時が立っていた。

今度こそ、二度と会う事は無いのだろう。

ルキアはそう回想する。

あの刻、一護は私に刀を向けた。

何の躊躇いもなく、僅かでも動けば視力を奪うであろう位置に、その刀を突き付けた。

その目は、何も映していなかった。

迷いさえも。

それがひどく悔しくて。

何も話してくれない、仲間として見てくれない事がひどく悔しかった。

時は移ろう。

人の想いに関わらず、それはただ流れ続ける大河のように。

そして時は変えゆく。

いついつまでも変わらないと思っていたのに、人というのは容易く変わりゆく。

それは容姿であり、想いであり、力であり。

だから、もしまた会う事があったとしても、もう同じにはいられない。

だが、それでも。

そうであっても、同じにいられないとしても、会いたいと願わずにはいられなかった。

だから、八人はこうして墓を訪れる。
あの再会の場所。
ここでなら、また会えるかもしれないと。

その、数分後。

八人は、揃って足を止めていた。
少し離れた、目指す墓石の前で跪いている少年。
それは、あまりにも彼に似すぎていて。
だからこそ声をかけられなかった。

心当たりなら多にある。

あの時、彼は結婚すると言っていた。
だから心当たりならある。

彼の年齢を考えればいささか幼い気もするが、年をとらないと言っていたのだから関係ない。

「ねえ、君」

意を決したようにたつきが声をかける。

少年ははっとふり返ると、八人をじっと見た。

「……死神……！」

ルキアと恋次に目を止めると、その少年は八人から逃げるように走り始めた。

「え……ちょっと！ ねえってば！ 何もしないから……！」
一瞬あつけにとられたものの、八人はそれぞれ少年を追って走り始める。

瞬歩を使われたら厄介だと思ったが、その心配も杞憂に終わった。

びたん、と。

少年は、それは見事にこけたのである。

すぐに立ちあがって逃げようとするも、追いつくには十分の時間だつたために、たつきはやすやすとその少年の外套を掴んだ。

「待つて。何もしないから。……君、一護つて知らない？ ひよつとして君のお父さんじゃない？」

一護と聞いて、びくつとその少年は身をすくませる。

「ごめんね。びっくりしたよね。でも、お願い。教えて」

織姫がやさしく言うも、その少年は視線を落したまま答えようとなない。

それは幼い容姿にふさわしい行動では無くて、覗き込んで視線を合わせれば、その瞳には強い決意が映っていた。

「……知りません。離してください」

硬い声でそう答えると、少年はたつきの手を振りほどこうとする。

「知らねえ訳ねえだろうが！ なら何であの墓の前に居た！」

「お……おい、恋次！ 止めぬか。怯えておるではないか！」

大声を出した恋次に少年が身をすくませたのを見てとると、ルキアは慌ててそれを止めた。

「手を貸せ。擦り剥いておるだろう。治してやる」

ルキアはそうして少年の手をとるが、少年はそれすらも振り払った。

あまりにも頑ななその動作に、八人は何もできない。

すると、チャドがおもむろにその少年の肩を掴んだ。

しゃがむより、身を縮めるといっほうが近い動作で少年と目線を合わせる、ゆっくりと口を開く。

「お前は、よく似ているんだ。俺たちの仲間。……教えてほしい。黒崎一護と言う男を知らないか？ ……ずっと、待っているんだ」

口数の少ない彼にしては、よく話した方だと誰もが思った。

それに対して、少年はすつと目を逸らす。

「ごめんなさい。……答えられません」

チャドは、そうかと言って手を離れた。

答えられない。

それは、何よりの肯定の言葉だ。

「悪かったな。驚かせて」

頭を撫でると、少年は驚いたようにチャドを見る。

何かを言おうと口を開きかけ、諦めたように唇を引き結んだ少年に、織姫は寂しそうに目を細めた。

一護の子供なのは間違いない。

子供がいる……恐らく、幸せにしているのだろうと推測できるだけ、よいのかもしれない。

でも欲が出てしまう。

何より、子供までこうも頑なに関わられるのを拒むというのは、今の一護の状況がひっ迫していると暗示するように思われた。

「君のお父さんとお母さん、優しい人？」

ポツリと、呟くようにたつきが問いかける。

同じ事を想っているのだと悟って、織姫はたつきに視線を映した。

少年は唐突なその問いに驚いたのだろう。

パチパチと瞬きを繰り返したが、にっこりと笑った。

「はい！ とつても優しくて、大好きです」

そう、とたつきは呟くと、そっと手を離れた。

「ごめんね。引きとめちゃって」

それが合図のように、逃げ道をふさいでいた雨竜がそっと道を開ける。

「失礼します」

少年が、ぺこっと一礼して走って行った、その時。

林から飛び出した黒い影が、少年に向かってそのあぎとを開いた。

the boy looks like our friend (後書き)

タイトル日本語訳は「その少年は我が友に似て」

それぞれに変化はあつたんですけど、ええ。

隅から隅まで読まなければ気づかないほど小さく表現しましたが、恋次が隊長になりました

番号は五です。副隊長は雛森です。

ぶっちゃけ本筋に全く影響しません。

そのまま副隊長でも全然よかつたんですけど、two pendulumで隊長がどうのと書いてしまったのでまあいいかなって。原作でも隊長になってたりするのでしょうか。

それでは感想などお待ちしております。

t h e t i m e h a s f i n a l l y c a m e (前書き)

52話の直後から始まります。

t h e t i m e h a s f i n a l l y c a m e

少年は、迫り来る影には気づいていない。

「逃げろ！」

誰かが叫ぶのと、恋次とルキアが抜刀するのが同時。

その声に振り返った少年が影に気づき身をすくませると、恋次は舌打ちした。

既に走ってはいる。

だが影の方が速い。

巨大虚か……！

ちら、と後ろを確認すると、雨竜が霊弓を構えているのが見えた。速さならあちらの方が上。

ならば、間に合うか。

だが光が虚を貫くよりも早く、少年の前に立ち塞がった者がいた。

ガイン、と牙と刃が拮抗する音が場に響く。

僅かに押し負け、後ろに滑りながら刀を構えたのは黒髪の女だった。

「何やってる！ 走れ！」

女に怒鳴られた少年は、つんのめるように恋次とルキアに向かって走って来る。

ルキアは彼を抱きとめると、後ろへ飛びずさった。

「無事か！？」

両肩を掴んで問いかけると、少年はその勢いのままに膝をつく。よほど驚いたのだろうか。

その肩は震え、呆然と虚を見つめていた。とりあえず怪我が無いのを確認すると、ルキアは少年をたつきに預けて振り向く。恋次は抜刀したまま虚に対峙していた。

黒髪の女はぐつと膝に力を入れると虚を押し返し、自身は後ろに跳躍した。

だが虚も体勢を立て直し、女に向かって飛びかかる。しかし女は慌てた風も無く、冷静に刀を振りかぶった。

「 月牙」

はっと、ルキアが息を飲む。

それは、まぎれもなくあの者の技。

それを、一体何故。

何故遣うものがある……？

「天衝！」

だが言霊は発され、見間違えようのない白い斬撃が虚を両断した。

爆風が起こり、土ぼこりが舞う。

一瞬目をつぶったルキアは、目の前に気配を感じてうっすらとその目を開いた。

目の前に立つのは先程のその女。

黒髪を風に靡かせ、抜き放った刃を鞘に戻す姿は精悍の一つに尽きる。
細身の少年にも見えるが、ほどよく形づいたふくらみがその性を表していた。

女はルキアを視界に入れると少し口の端を上げる。

またしても少年を思い起こさせるその表情に、ルキアははっとした。

「……お前、まさか夏梨か!？」

返事の代わりに女　　夏梨は悪戯っぽく片眉を上げる。

だがそれも一瞬。

厳しい表情になると、夏梨は少年の胸倉を掴んで強引に立たせ、その横っ面をひっぱたいた。

痛そうなお音に身をすくませたのはむしろ八人で、ひっぱたかれた本人はぐつと唇を引き結んでいる。

「虚に対処できない奴が勝手な行動をとるんじゃない! あんたに何かあったら、私達は一兄と凜姉に何て言えばいいのよ!」

耳がキンとするような大声に、啓吾は耳を塞いだ。

少年はしょんぼりとうなだれて、小さくごめんなさいと言う。

それを聞いた夏梨は、漸く小さな溜め息をついた。

「怪我、無い?」

少年はまた小さく頷く。

それを見たたつきは、僅かに微笑んだ。

「夏梨ちゃん。この子ってやっぱり……」

夏梨はちよつと笑って制すると、少年と目線を合わせる。

「あいつのいる所まで、一人でいけるね？」

夏梨がそう言うと少年は頷いた。

去り際に一礼するのも忘れない彼に、水色は感心したような溜め息をつく。

よくしつけられた子だ。

一同が少年を見送っていると、小さな溜め息について夏梨が振り向いた。

ふわりと、春めいた柔らかい風が吹き抜け、夏梨は笑った。

「久しぶりだね。……遅くなって、ごめんなさい」

その言葉の意味をはかりかねて、ルキアは首を傾げる。

「遅くなった、とは？」

問いかけると、夏梨はまた僅かに口角を上げた。

「言葉そのままの意味だよ」

ゆるゆると、八人の表情に変化が訪れる。

「夏梨ちゃん……」

「時が、来たの。全てを……」

夏梨はそこで言葉を切り、選ぶように続けた。

「全てを……始める時が」

「始める……？ 一体何を」

兩童が問うと、夏梨は目を細める。

「それは、また後で。じゃあね」

言うだけ言って立ち去ろうとした夏梨に、ルキアは慌てた。

「お、おい！ 後では……」

そう言われた夏梨は笑う。

「またすぐに会えるから。今はちょっと用事あるの」

すぐに会える。

八人がその言葉を理解するよりも早く、夏梨は瞬歩でその場を去った。

残された八人は互いの顔を見合わせ、確かめるように頷く。

それは、誰もが待ち侘びた瞬間だった。

pipipi pipipi pipipi……

唐突に電子音が鳴り、恋次が舌打ちする。

「もしもし、俺だ。……ああ、一緒だけど。………ああ？

一体何で」

怪訝そうな声を上げた恋次は、表情も厳しくした。

「詳しい事は着いてからつて、あのなあ……あ、おい！」

どうやら強引に通信を切られたらしく、恋次は液晶を睨みつける。

「一体どうしたのだ？」

「いや、雛森からだっただけど……」

歯切れ悪い答えに、ルキアは腕を組んだ。

「はつきり答えぬか。雛森副隊長がどうしたというのだ」

恋次は軽く溜め息をつくと、残る六人を指差した。

「こいつら六人、今すぐ瀕霊挺に連れて来いつて。総隊長から」

一瞬の沈黙の後、ルキアは首を傾げる。

「六人、と言ったのか？ 三人ではなく」

「ああ、六人つて」

不思議がるルキアだが、解せないのはその六人も同じだ。

雨竜、織姫、チャドの三人ならわかる。

あれから彼らは年に一度ほど尸魂界を訪れているし、訪れる事に異議を唱える者もない。

だが、恋次は六人と言った。

それはつまり、たつきと啓吾、そして水色もということだ。

三人も僅かながら死神と交流を持つとはいえ、尸魂界を訪れた事は一度もない。

その必要は無いし、時が来るまで関わるべきではないからだ。

そうだというのに、これは一体どういう事だろう。

「夏梨ちゃんが言っていたのと、関係あるのかな」

織姫が言うと、「雨竜も頷く。

「そうとしか考えられないさ」

「だが、こつも急では浦原も霊子変換機を用意しておるまい。一体どうすれば」

ルキアは思案顔になるも、その心配はすぐに打ち消された

「……あー、ルキア。それがとつくに準備してあるからとにかく急げ、境界固定も済んでるって」

恋次が言うと、ルキアはますます怪訝そうな顔をする。

「あれは準備に一週間程かかるのではなかったか？」

利用している三人に問いかけると、彼らもまた頷く。

「つまり、一週間以上前からこうなるのがわかっていた、という」
とか。……全く、厄介そうな状況だな」

雨竜はそれだけ言うと振り向き、たつき達に問いかけた。

「急だけど、行けるかい？」

いまいち話に付いてきていない三人だが、しつかりと頷く。

「一護に関係あるんでしょう？ だったら行く」

「ずっと待ったんだもんな」

「行かない理由がないよ」

その言葉を聞いて、決まりだな、と恋次が言った。

わからないことだらけだが、行けば答えが得られるのは確かだ。

八人は墓地に花を供えると、足早にその場を後にした。

「いらつしゃい、皆サン。そろそろ来る頃だと思ってました」

いつもの通り、浦原は食えない笑みで一同を出迎えた。

「一体いつ、このような命を受けておつたのだ。聞いておらぬぞ」

ルキアが言うと、浦原は苦笑する。

「いやあ、極秘だって念押しされましてねえ。アタシだってあちらさんを敵に回したくはありませんし」

そういうことで一つ、と言われたルキアは、未だ不服そうながらも押し黙った。

「さて、行きましようか。アタシとテツサイは後から普通の穿界門で追いかけます。皆サンは夜一サンと先に行っていて下さい」

その言葉を聞き、雨竜たちは驚いて浦原を見る。

「浦原さんも来るのか……………」

チャドが問うと、浦原は真面目に頷いた。

「そうっすよ。結界はといてやるからアタシ達にも来るようになって

……………聞いてないんすか？」

「ああ。恋次、そうなのか？」

「いや、俺はこいつら連れて戻ってしか言われてねえぞ」

再び一同が怪訝な顔になった所へ、戸口から黒猫が入って来た。

「揃ったようじゃの」

その姿を認めると、織姫は夜一に問いかる。

「夜一さんは何の用事が聞いていませんか？」

「そういえば、夜一サンが預かってきたんすよね、この用事。何にも聞いてないんすか？」

夜一は無言で浦原を一瞥すると、一足先に座敷奥の勉強部屋入口へと向かった。

「知らぬ。急ぐぞ」

言うなり飛び降りた夜一を見送ると、浦原は小さく呟く。

「……………そっすか」

どこか疑問を残したようなその口ぶりには気づかず、八人もわらわらと勉強部屋へ向かった。

「……………店長」

低い声でテツサイが問いかけると、浦原は帽子を目深に被り直した。

「……………隠し事してるのに、アタシ等が気づいてないとも思ってるんすかねえ」

低く言つと、テッサイは無言で頷いた。

t h e t i m e h a s f i n a l l y c a m e (後書き)

タイトル日本語訳は「時は来た」

さあ、時は来ましたよ!!

……と本当に長かったですよう(泣)

とはいえ100話編成のこの話、まだまだ一筋縄にはいきません！
もうしばらくお楽しみいただけると思いますので、ぜひ最後まで読んでくださいね。

やっぱりするどい浦原さんなら、夜一さんが何らかの形で関わっているってぐらいは気づいていると思うんですよ。
そんなわけでこんなラストに。

夏梨が月牙天衝を遣える、というのは一護と一心が遣えるなら、という風に決めただけです。
何よりインパクトのある言葉ですしね。

それでは感想などお待ちしております。

silver hair, red eyes (前書き)

53話の少し後から始まります。

「隊長！」

穿界門から出た一同を待ち受けていたのは、五番隊副隊長・雛森桃だった。

「どうなってるんだ？ いきなりこいつら連れて来いって。それも総隊長が。」

「それが、私も皆さんを隊首会議場までお連れするようにとしかごめんね、わかんないんだ。」

小さく雛森が付け足すと、恋次は頭を搔く。

「議場、な。一体どうなってやがる」

浦原が繋いだのは正式な穿界門の為、着いたのは一番隊隊舎内。

歩いたとしても、議場まで5分とかからないだろう。

少し視線を上げ、意識して霊圧を探る。

「他の隊長も集まって来てるな。……じゃあねえな。行くか」

恋次が先頭をきって歩きだすと、雨竜達三人とルキアは顔を見合わせ付いていく。

たつき達は初めての尸魂界で落ち着かないのだろう。

きよろきよろとしながら6人について歩きだした。

案内されて入ったのは、一番隊隊舎内に併設された隊首会議場。

席官すらも滅多に入る事の無いその場に、ルキアは自然と背筋を伸ばす。

「俺たちは、どこに立てばいい？」

チャドが恋次に問うと、側に歩み寄って来た浮竹がそれに答えた。

「夜一は九頭柳殿の隣に。茶渡君たちは……夜一の隣に浦原達が立てるように間をとって立ってってくれるかい？ 朽木は清音と仙太郎の後ろにな」

はい、と返事をしてルキアが離れる。
恋次もまた雛森を伴って定位置につくと、腕組みをした。

「織姫……私たちも来てよかったんだよね？」

居並ぶ死神に圧倒されたのか、たつきが自信なさげに問いかける。
だが織姫たちもそれは同じだ。

藍染の一件の後、その時は一護も一緒に何度か隊首会に連れて来られた。

それ以来なのだから、実に三十年ぶりなのだ。

一護に関係があるかもしれないからとはいえ、理由が不明確なために不安もある。

「大丈夫だよ。きつと、黒崎君に関係があることなんだと思う」

織姫はそう答えると、見知らぬ男性の隣に立った夜一から少し距離を開けて立つ。

雨竜と茶渡は一瞬視線をかわすと、少しばかり霊圧を上げた。

「霊圧、きついだらう？ 少しはマシになったかい？」

先ほどから顔色の悪かったたつき達に問うと、啓吾が頷く。

「あー、うん。マシになった。ありがとな」

揃いつつある隊長格の霊圧は、例え抑えていてもただの人間である三人には相当な負荷がかかる。

それを察して、チャドと雨竜は自らの霊圧で他の霊圧を相殺したのだ。

織姫もそれに倣うように霊圧を上げると、反対側に立つルキアが微笑む。

その隣には、この場に似つかわしくない面々が集まりつつあった。

「全員、揃ったようじゃの」

彼らが議場に入り、他の隊長格が揃ったところで元柳斎が杖で床を

突く。

普段とは余りにも違う面々に、碎蜂は渋面を作っていた。何せ、人間6人を除いたとしても副隊長や席官、そして彼女にとっては招かれざる客というべき者までいるのだ。

通常、隊首会は各隊の隊長が奇数と偶数に分かれて並ぶ。

だが今日はその後ろに副隊長と、そして名指しで呼び出された席官。具体的に述べるならば、花太郎にルキア、そして一角、弓親というあの戦いに大きく関わった者。

更に異常なことには、偶数列の下座に夜一、浦原、そしてテッサイ、空鶴、岩鷲と兩竜達六人。

奇数列の下座には仮面の軍勢までが並び立つ。

夜一はともかく、残りの顔ぶれを考えれば碎蜂の機嫌がいい訳がない。

「山じい、一体何でこんなに人を集めたんだい……？ 四十六室まで動いてるようだけど」

処刑命令や追放命令を受けている者は、もちろん戸魂界に入ることができない。

それを、四十六室は自らの決定を覆してまで彼らを招き入れた。

平時では有り得ないその事が、京楽の内に疑念と共にある確信を生み出していた。

「客が来ておる。その者らの要請に従ったまでじゃ」

元柳斎はそう返すと、杖で再び床を打つ。

「こちらは整ったぞ。……入れ」

その声と共に、一度閉じられた大扉が音をたてて開いた。

そこに立っていたのは、あの邂逅の時、一護との間に立ちふさがっ

た人影と同じ外套を着た二人組。

息を飲む者、無意識に鞘を握る者がいる中で、その二人組は平然と部屋に歩み入った。

その二人を見た京楽は、編み笠を下げ口角を上げる。浮竹もまた僅かにほほ笑んだ。

二人は部屋に入って数歩のところまで立ち止まり、被っていたフードを脱ぐ。

露わになったのは、金髪に紅の目、そして銀髪に翡翠の目。

その容姿に、乱菊とひよ里は息を飲んだ。

二人は無言で顔を覆った布を外し、一瞬目を見交わす。

桐生は一同を見渡すと、一步前へと進み出た。

「王族特務・東宮護衛隊所属、曳船桐生及び日番谷冬獅郎。畏れ多くも皇太子殿下より命を受け参りました」

朗々と、自信に充ち溢れたその言葉に、思わず隊長格までもが居住まいを正す。

思わず冬獅郎に声をかけようとしていた乱菊も、表情を正して二人を見つめた。

「皇太子殿下からの命、か……して、殿下はご健勝に在られるか」元柳斎が声をかけると、二人は目を見合わせた。

近況ならば、先ほど種々の要請をした時に伝えてある。

もう一度、それもこの場で聞くと言うことは、ちよつとした悪戯心か。

その意を察した冬獅郎が頷く。

「はい。……寛大で、お優しい方です。責務に対して誠実で、民か

らの信頼も厚い」

悪ノリしてつけ足すと、総隊長は僅かに目を開けた。

「それに……わざわざ言わなくても、総隊長はご存じのはずでは？
文のやり取りをしていると、聞き及んでおります」

桐生もまた少しふざけた調子で言う。

「ぺんふれんど、というやつじゃのう。じゃが、書面からでは伝わらぬ事もある」

ぺんふれんど、という言葉に京楽が噴き出した。

「へえ。皇太子殿下と文通だなんて、やるじゃない、山じい」

「達筆過ぎて、最初のころは読みづらい通り越して読めない時までおっしゃってましたけどね」

桐生がオチを作ると、浮竹も笑う。

「なるほどなあ。確かにそうかもしれない」

一気に和やかになった場に、わずかに恋次が身じろぐ。

それを見た冬獅郎は、恋次に声をかけた。

「どうした、阿散井」

いきなり声をかけられた恋次はきよとんとし、すぐに唇を引き結ぶ。

一斉に視線を受けてもたじろがぬのは、さすが隊長と言っべきか。

恋次は、しばらく逡巡した後、迷うように口を開いた。

「以前、今のお二人と同じ格好の者に出くわしたことがあります。

……その時は」

「黒崎一護もその場にいた、違うか？」

続く言葉をとられた恋次は、呆気にとられたように冬獅郎を見る。

冬獅郎は、真っ直ぐに恋次を見返した。

「そうだろう？」

重ねて問われ、恋次は頷く。

「あの」

「はいそこまで」

意を決して問いかけようとした恋次を、桐生は途中で制した。

「先にこちらの用を済ませてもらおうわ。私たちは命あってここに居る。……それに、時間もあまりないからね」

恋次は眉をひそめ、再び口を開く。

「だけど……」

「止めぬか、阿散井」

鋭い声で元柳斎が制され、恋次は黙り込む。

「皇太子殿下のご用事の方が先じゃ……続けよ」

桐生は軽く目礼すると、再び口を開く。

「皆様方に、皇太子殿下よりお言葉を預かってまいりました」

s i l v e r h a i r , r e d e y e s (後書き)

タイトル日本語訳は「銀の髪、紅の瞳」

少し意地悪な冬獅郎達が目立ちました

そして何と言っても登場キャラが一気に増加。

正直扱いきれる自信がありません。

キーワードにオールキャラって書きましたからね。

本当にこの話はオールキャラですから、覚悟して読んでください。

それでは感想などお待ちしております。

a n o p e n i n g , a l l t r u t h (前書き)

五十四話の直後からはじまります。

「気になりますか？」

「…………え？」

唐突に声をかけられた一護は、いつになく間の抜けた返事を返した。

「先程から、空ばかり見ておいでですよ」

暗に集中していない事を指摘され、一護は苦笑する。

場所は外宮。

様々な官吏が日夜政務を執る、言わば国の頭脳とも言つべき場だ。私情を持ち込むべきでないのは確かだった。

「悪い。…………そうだな。気にならないって言えば嘘になるけど…………少し違う気がする」

不思議そうな顔をした官吏に、一護は続けた。

「上手く言えねえけど…………ほっとしてるって言ったら、変か？」

官吏は意をはかりかねたのか、じっと一護を見つめる。

「ずっと引つ掛かってたからなあ。…………支えが下りたって言っほうが近いか」

そう言つてまた窓を見た一護に、官吏は呟いた。

彼は長い間、こうして外を見る一護を見続けて来た。

「これで、やっと終わるんですね」

一護は驚いて視線を戻す。

官吏は、一護に倣うように窓を見ていた。

「違つ」

静かに否定され、官吏は振り返る。

「終わるんじゃない。始めるんだ。もう一度な」

まるで、彼の地が見えているように目を細めた一護を見て、官吏はそつと頷いた。

「…………え？」

声を上げたのは、一人では無い。

その異常さを理解できるものは皆、それぞれに疑問の声を上げた。

「何故、皇太子殿下が我らに？」

厳しい表情で狛村が問う。

尸魂界に干渉してこない王族、それも霊王に準ずる位である皇太子が、何故。

そんな表情を浮かべているのを見た冬獅郎は、一步前へ進み出て桐生の隣へと並んだ。

「お言葉というほど、形式ばった物ではないわ。むしろ、伝言と言った方が近いかもしれない。…………あなた達に伝えてほしい。自分はここへ来ることは出来ないから、と」

言い終えた桐生は、そつと冬獅郎の肩に手を添える。

それに後押しされるように、冬獅郎は未だ怪訝そうな顔をする一同へ、ゆっくりと口を開いた。

この瞬間を、どれだけの人が待ち続けたか。

「皇太子殿下の御名を、一護と」

静かに、だがはっきりと発されたその声は、その場にいた誰の頭にも疑問符をつきつけた。

いくら人間で尸魂界の事情に疎いとはいえ、話の流れからたつき達も顔を見合わせる。

矜持の高い死神が、素直に啓吾を使う相手。

さっきの言い方では、それが一護だと言っているように聞こえた。

突然ゲラゲラと笑いだしたのはマユリと剣八だった。

「面白えじゃねえか。一護が皇太子殿下だと？ 皇太子つてのはあれだろ？ 次の霊王じゃねえか。あいつが次の霊王になるってのか？」

「実に面白いネ。何故王族が現世で暮らしていたのか……いや、それよりも研究資料として」

啞然とする一同の中で、その二人の姿は異常だ。

いつも異常な為、いつそ平常と言っても正しいかもしれないが。

「いやいやいやいや隊長！ 同じ名前なだけですって！！ 絶対人違い！ 一護が王族とか有り得ねえっすから！ ねえ、日番谷隊長！」

慌ててそれ止めるのは一角、だが冬獅郎はそれを見て僅かに笑うだけだ。

「おい、いつまで俺は隊長なんだ？」

「そこじゃないっすよ！ 揚げ足取らないで下さい！ 何でもいいから早いとこ本当の事を」

「本当も何も、さつきから嘘なんて言っただけだよ。現皇太子殿下の御名は一護。……あなた達がかつて仲間として戦った少年に違いないわ」

今度こそ、沈黙がその場に落ちた。

冬獅郎が視線を動かせば、夜一や蓮杖といった事情を知る者の肩が僅かに震えているのが目に入る。

大方、必死で笑いをこらえているのに違いない。

なかなか見られる光景ではないのだから、それは当たり前とも言えた。

隊長格がそれぞれ最大限の驚き顔をしている場になど、そうそう出会えたものではない。

そしてついに耐えかねたのか、桐生が嘔き出した。

「……おい」

冬獅郎が小さく咎めるが、桐生の笑いは止まらない。

「無理無理。だってこんなの全然見たことないんだもの。あんたの時も結構面白い顔してたけどさ、こっちの方が数に利がある分ずつと上だわ」

そう言っただけで口元を抑えたままの桐生に、冬獅郎は溜め息をつく。

「数の問題じゃねえだろ」

そう言っただけで瞬間、次は蓮杖が吹き出した。

「何がおかしい！」

漸く我に返った碎蜂が反応する。

「いや、申し訳ない。……ただ、この様子を彼が見たら一体どう思うだろうかと考えたら、つい」

「……彼？」

粕村が疑問の声をあげると、蓮杖は意味深な笑みを浮かべた。

「彼、とはどういう意味ですか。蓮杖副鬼道長」

ルキアもまた問いかける。

「話の流れから推測できるんじゃない？ 信じられる信じられないは抜きにしてさ」

「……何故」

そう呟いたのが誰なのかも、何故そう呟いたのかもわからない。

だが、それを聞いた白哉は覚悟を決めたように口を開いた。

「志波を含めた旧五大貴族当主は、毎年正月に霊王陛下に謁見する為王土を訪れる。……我等は皆、毎年あの者に会っている」

一瞬、奇妙な沈黙がその場に満ちる。

「ふざけたことを言うなよ朽木」

碎蜂が低い声でそれを打ち破った。

「黒崎一護が王族だと？ ふざけるのも」

「ならば儂もふざけておるといふことになるのう」

夜一が碎蜂を制して口を挟む。

「白哉坊が言っただじやろう。五大貴族の当主は毎年王土を訪れると。儂とてその一。例外ではないぞ」

「しかし！」

碎蜂は顔色を変えるが、それでもなお言い募った。

「私どもの言のみで信じるに足らぬと言うのであれば、総隊長にも確かめてみてはどうですか。……文のやり取りをしておられるとことでしたから」

ゆっくりとした口調で、九頭柳が言い添える。

当主としてだけではなく、大鬼道長としても長く君臨する彼の言葉には、得も言われぬ重みがあった。

「元柳斎殿……」

粕村が掠れた声で言う。

否定されたところで、今更納得することはできない。
だが信じることも難しい。

そんな思いが如実に表れていた。

元柳斎は、それを全て理解しながらも敢えて事実を暗示する回りくどい言い方をする。

それは彼の生来のものだからというより、目の前に立つ者達に自ら考え、理解して欲しいからだ。

「あの戦いに、関わらせるべきではなかったのかもしれない」

その言葉に、誰もが立ち尽くす。

何か、あるはずのない音すら聞こえそうな程に、その場は静まり返っていた。

「お墓で再開した時、俺は彼に、君は王族なんじゃないかと聞いた

……彼はそれを認めたよ。聞いていたなら、覚えているだろう?」
浮竹が沈黙を破るも、それは静寂に圧殺される。

事実の一つ。

だがそれが受け入れられるかはわからない。

人は、自らに都合のよい事実だけを真実と誤認して生きるのだから。

a n o p e n n i n g , a l l t r u t h (後書き)

タイトル日本語訳は「一つの始まりと全ての真実」

つーいーに！

ついにその時が来ましたよ皆さま方！！

書き手としてもこの瞬間を待ちかねておりましたが、が。

思いがけずすっきりしない終わりとなってしまいました。

そして一つ補足。

九頭柳と蓮杖。実は鬼道衆でした。

この設定は後々活かされるはず、です。忘れなければ。

それでは感想などお待ちしております。

h e i s y o u r f r i e n d , b u t m y l o r d (前書き)

五十五話の直後から始まります。

h e i s y o u r f r i e n d , b u t m y l o r d

「……あ、あの」

唐突に声が響いて、視線が部屋の一角に集中した。

啓吾は、その視線に圧倒されつつも再び話し始める。

「すみません。俺こっちの事情に詳しくなくて……だから、解るよ
うに説明してもらえたら有り難いなー、なんて」

すみませんやっぱいいですと付け足すあたり、余程この空気が堪
えたようだ。

だが桐生は拒まなかった。

「構いませんよ。どのみち最初から話すつもりでしたから」
そういつて桐生は小さく息を吐く。

覚悟はしていたけど、ね。

頭の固い死神連中が、素直に事実を受け入れられるわけがない。
理解させるには、ずいぶんな労力を必要とするだろう。

それでも、自分はそれを覚悟してここへ来た。

主の願いを叶えるため。

主の想いを届けるため。

だから、何をしてでもやり遂げなくてはならないのだ。

「もう一度、今度は最初から、どうしてこうなったかを全て話

します。……その上で、あなた方がどう判断するのも自由です。でも、これは全て真実。霊王陛下に仕える王族特務隊隊士としての矜持に懸けて、私の斬魄刀・輪彩丸に懸けて、それだけは保証します」

およそ自分の持つ全てを懸けても構わない。
その言葉は、死神の胸をひどく打った。

「俺もだ。俺の持つ全てを懸けてもいい。俺たちが今から話す事は、全て真実だ」

冬獅郎もまた言い添える。
斬魄刀、死神の魂から生まれ、死神の一部と言ってもいいそれを懸けるといふのは、他ならぬ自分の命に懸けてという事。
それは、死神だからこそわかる“絶対”だった。

それから、二人は全てを話した。
たつき達の為に、まずは霊王という存在の事。
それは象徴でありながら絶対、そして皇太子とは次に霊王になることを約束された位であるという事。
そして、一護の父・一心の生い立ち。
あの戦いの後にあつた事、その全てを。

「と、こんなところね」
桐生が締めくくると、死神達は二人から目を逸らした。
否定する理屈がどこにもない　むしろ、だからこそ納得できる事ばかりで。
でも、だからといって受け入れられるものではない。

衣擦れの音一つしなない沈黙を破ったのは、今迄一言も発しなかった浦原だった。

「……一つ、教えてください」

桐生が目線で促すと、浦原は珍しく迷うように口を開く。

「崩玉は、王族特務が回収したと聞きました。……それは、一体誰の指示ですか？」

桐生は迷った。

真実は、恐らく浦原の予想をも越えるところにある。

その全てを話せば、一護の仲間を傷つけることになりはしないか。

それは、彼女が命をうけたその時からずっと抱き続けてきた懸念だった。

「一護の指示だ。……霊王陛下の許しを得て、あれを王土で破壊するために」

冬獅郎が口を割ったのに、桐生は動揺する。

「……あんだ、それ」

「俺は、全部知った時に後悔した」

桐生が言おうとした事も、全てわかっているのだろう。

だから冬獅郎は、桐生の目を真っ直ぐに見返した。

「でも知らなかったら、こいつらはずっと疑問に思い続けるだけだ。何かのほずみで真実を知ることだってある。そうなれば一番傷つくのはこいつらで、こいつらが傷つけば結局あいつが傷つく。……それは、させたくない」

一息にいいきった冬獅郎に、桐生は首を横に振る。

「わかったわよ。なら、あんだの好きにきなさい。私もそれが正しいと思う」

冬獅郎は一つ頷き、浦原を見た。

視線が外れるその一瞬まで、その瞳は少しもぶれなかった。

「破壊、と言いましたか？」

浦原が、信じられないといった口ぶりで言う。

「ああ、そうだ。あいつはあれを破壊するために、瀨霊挺からあれを回収させた。つっても、半分以上は霊王陛下の意志でもある。あれは危険すぎると、そうおっしゃっていただけだ」

「……無理だ。あれは破壊できるようなものでは」

「できるから、回収したんだ」

浦原は以前より背の伸びた少年を見つめた。

その瞳に、嘘は無い。

でも崩玉は破壊すらできない代物であるというのもまた事実。

相反した事実には彼は結末を見出せず、困惑していた。

「……王族に、古くから伝わる術式がある。今ではほとんど誰も知らないし、最後に使われたのがいつかすらも記録に残っていない。そういう術式だ」

にわかにマユリの目が輝く。

研究者としては、興味をそえられる代物なのだろう。

「それは尸魂界でも可能だ。できるできないかだけの問題ではな

……実際、その術式はこっちにも記録として残されている。だがそれを使う事はできない。四十六室が禁術指定を出している」
淡々と言う冬獅郎を、浦原は信じられない想いで見つめた。

その術式には心当たりがある。

だが、それは自分でさえも禁忌として触れようとしなかったもの。まさか、彼はそれを

「百本の斬魄刀を使って対象の能力を無力化し、破壊・滅却をする

“百刃封架”……お前なら、知っているんじゃないのか？”

死神が、息を飲む。

その術式を知らなかった者にさえ、その意味はわかった。

それは、禁忌だ。

己の斬魄刀を犠牲にする術式など、あつてよいはずがない。まして百というその数。

彼の人柄を考えれば、その結論に辿り着くのは容易すぎた。

「王土では、百刃封架は禁術指定になっていない。……あいつは、斬月を始めとした百本の斬魄刀を使い、あれを封じた」

その言葉はあまりにも重すぎて、いつそ空虚にさえ感じられた。

「斬魄刀を、犠牲にした、と？」

浦原が掠れた声で言う。

彼らしくないが、それに誰も気づかないのは誰もが彼と同じ気持ちだから。

そして何より、彼は崩玉の開発者なのだ。

人一倍の衝撃を受けて当たり前と言える。

「……だが、残りの九十九本は一体どうやって」

浮竹が必死に声の震えを抑えて言う。

「何本かは、斬魄刀を必要としない立場にある王族から貰い受けた。

……それで」

「残りの九十本程は、儂らが工面した」

「……夜一様？」

碎蜂もまた、常に無く動揺していた。
斬魄刀を工面するなど、そんな離れ技を一体どうやって。

「四大貴族は、馬鹿みたいに規模が大きからね。……引退した死神もいるし、僕や九頭柳殿のように、斬魄刀を必要としない立場の者もいる。……まあ、色々事情があつて僕らは提供しなかつたんだけど、九十本ぐらい集めるのは何も難しい事じゃないよ」
蓮杖が言うと、夜一は頷いた。

「持っていたところで使わぬのであればよこせと言つてやったわ。全く、当主と言う立場は便利じゃのう」

言いつつ頭を掻いた夜一を見て、浦原は再び口を開いた。

「夜一サン……あなた、自分の斬魄刀どうしました？」

その声の硬さに、碎蜂ははっとした。

いつも白打と鬼道を軸にした戦い方をする夜一は、斬魄刀を使わない。

だから今迄気づかなかつたが、碎蜂はあの再会以降、一度も彼女の斬魄刀を見ていなかった。

「くれてやったわ。いらぬからの」

「……あなたは」

「勘違いするでないぞ、喜助」
強い口調で、隣に立つ浦原に言う。

「お主を拾つたのは僕の父親じゃ。……拾つたその時から、お主の犯した罪は四楓院の罪でもある」

けじめじゃ、と言いきつた夜一に、浦原は詰め寄つた。

「ふざけないでくださいよ！ あれはアタシがやったことだ！ —

番償うべきはアタシじゃないですか！」

悲鳴のような声に、夜一は喜助に平手を見舞った。

「勘違いするなど言うておるじゃろうが！ 儂は儂のけじめとしてやった！ 一護も同じじゃ。儂らの覚悟を見紛うでないわ」

ひっぱたかれてなお、浦原は言い募ろうとする。
だがそれを制して蓮杖が口を挟んだ。

「今更なんですよ。何もかも。……彼にとっても四楓院殿にとっても、もう三十年も前に決着が着いたことなんだ。今更どうにもならない。そんな風に蒸し返すほうが、余程迷惑だと思えますけど？」

それは、誰にとっても痛い言葉だった。

自分達は知らなかったとはいえ、それは今更どうにもならない。

あると知って触れられない傷。

その方が、死神達には堪えた。

「もし皆さんが何か彼らに思う事があるのなら、その痛みをずっと抱えて行く方が余程償いになると思いますが」

ぐっと、浦原が唇を噛む。

蓮杖の言う通りだ。

そして、事実を咀嚼した胸の内に残ったのは、苦すぎる後悔の念ばかりだった。

彼がたくさんの代償と引き替えにその手に得たものは、わずかな権利と、強大な権力、数えきれないほどの義務と、計り知れないほどの重責。……そのどれも、彼が望むはずのなかったものばかり。

彼は結局のところ、望むものをほとんど何も手に入れられなかったと言つてもいい。

仲間と引き離され、家族を失い、故郷と別れ、己の半身を犠牲にし……残つたのは、護れたという充足感ただひとつ。

それが、あまりにも悔しかった。

もつと、彼にはたくさんの幸せを得て欲しかった。

自分たちを救つてくれたのだから、その分の幸せを、彼に返したかった。

どうして何も言つてくれなかったのだ、と恨み続けたこの三十年、

彼は自分たちを未だに護りつづけていた。

自分たちは、未だに彼に護られ続けていた。

そして、これからも彼が死ぬまで。

せめて恨み事でも言つてくれればいいものを、彼はそんなことは言うまい。

これは自分の意思だと、あくまで貫くだろう。

あのとときと、同じように。

彼は何も変わらない。

その姿も、志も全て。

自分たちはどうなのだろう。

弱すぎる。

彼の助けに二度となれないことを、悔しがることしかできない。

共に闘うことの出来ない悔しさを、己のうちに噛み締めることしかできない。

それでも、彼の苦しみには遠く及ばないのだろう。

それがまた、悔しかった。

黙りきつた一同を、冬獅郎は何も言えずに見つめた。

自分も、事実を知った時に少なからずショックを受けた。そして後悔した。

でも、自分には一筋の可能性が残されていた。

王族特務隊隊士として、彼を護る。

自分にはその道を選ぶ権利が与えられ、そしてそれを選んだ。共に、戦い続ける道を。

だが、彼らはもう二度とともに戦うことができないのだ。未来永劫、護られ続けることしか。

霊王は、即位した瞬間からすべての民の命を背負う。

それは、死んでからもなおのこと。

文字通り、未来永劫民のためにありつづける。

その険しき道を選んだ彼を、何も知らずに詰ったことへの後悔。

いつまでも仲間だと思っていた彼が、もう手の届かない所へ行ってしまうた、自分たちを護るために。

その悔しさは、自分が計っていいものではない。

だから冬獅郎は、静かに目を閉じた。

主の代わりに、待つために。

h e i s y o u r f r i e n d , b u t m y l o r d (後書き)

タイトル日本語訳は「あなたの仲間は私の主」

一人称・二人称は適宜変更で。

何でこんなに重くなったのか最早不明の回。

崩玉の話は、実はもう少し先の予定でした。

なぜ早まったかと言いますと、伏線の回収漏れを恐れた為ですね。

だって桐生が持ってたとか書きちゃったし、あらすじにも「消えた崩玉」って書きちゃったし。

ただどすごく忘れそうなのは多分気のせいじゃない。

てな訳で早まりました。

……死神にこれ以上一護への負い目増やしてどうするよ。

それでは感想などお待ちしております。

s u n a n d m o o n (前書き)

五十六話の直後から始まります。

沈黙が続いて、どれほどになるだろうか。

やちるはぎゅっと剣八の袖を握る。

他の死神より幼くはあるが、おおよその意味は彼女にも理解できていた。

白は、目の前に立つ拳西が手を握りこむのを見た気がした。

彼女は、まるでそれが無かったかのように上を見上げる。

からかう気等、全く起こらなかった。

「黒崎は、今どうしていますか？」

冬獅郎は、そう言った石田を見る。

自分が憶えているよりもずっと老いた彼だが、その目の鋭さは変わらない。

いや、むしろ増したような気さえした。

「元気にしているわ。毎日大変だけど、大変なりに上手くやってる」
桐生は答えて、そつと微笑む。

その言葉を聞いた途端に、場が僅かに緩んだからだ。

「最初に言っただろう。皇太子殿下は寛大でお優しい方だ、責務に
対して誠実で、民からの信頼も厚いと」

あれも嘘じゃねえぞ、と冬獅郎が言つと、石田は首を横に振る。

「想像がつかないな。……そういうガラじゃないだろう。あいつは」

「そうでもないだろ。やることが死神代行から変わっただけだ。護
るものの規模が大きくなっただけで、あいつは何も変わってねえ」

「大きくなりすぎちゃうか？ 一個の街から比べたら、世界なんて

想像もつかへん」

平子はそう言うと、眉間にしわを寄せた。

「ああ……でも、あの戦いン時から世界はあいつの肩にかかってたんか。やったら、変わらんなあ」

首を横に振りつつ、平子は続ける。

「なんや、嵐みたいなやつやなあ。ただのガキや思ってたんに」

京楽はそれを聞いて苦笑した。

「嵐に巻き込まれやすいと思っただけだなあ。……逆だったってことか。彼自身が嵐。なるほどなあ」

「ちよつと、人の主つかまえて迷惑振りまいてるような言い方しないでくれる？」

桐生がおどけて肩をすくめる。

「少なくとも、こつちに来てからは厄介事起こしてないわよ」

「前科や前科。俺等はそれしか知らへんねん」

桐生は軽く平子をねめつけると、同じ列に立っている恋次に視線を移した。

「阿散井恋次さん、よね？　どうかした？」

桐生がそう言ったのは、恋次だけが一瞬もその体から力を抜かないからだった。

その拳には、今にも掌が切れるのではないかと言っほどに力がこめられている。

「……朽木隊長」

低く名前を呼ばれ、白哉はゆっくりと恋次を見る。

「何で、教えてくれなかつたんすか。……俺や他のやつはいいとして、あの様子じゃルキアにさえ言ってなかつたんだろ？　どうしてだ。あんたルキアが一番苦しんでるのを知ってるはずだろうが！」

「恋次」

決して大きな声では無いのに、その言葉は不思議とよく通った。場が静かだからというより、それが白哉から発せられたからなのだろう。

彼の周りから、静けさが広がっていくようだった。

「王族に関する事は、固く秘されねばならない。……それが、掟だ」

冬獅郎が大きく目を見開く。

恋次が、白哉に向かって大きく一步踏み出した。

「掟だ！？ あんた一体それで何回ルキアを苦しませるつもりだよ

！ ふざけんな！」

恋次、とルキアが止める声は、もはや届かない。

脇に居た狛村が制止しようとするれば、恋次はそれを振り払った。

「掟を護るのが、我らに課せられた使命だ」

その一言が、ついに恋次に一線を踏み越えさせた。

駆け出し、拳を振り上げた恋次を誰も止められない。

同じ気持ちの者もいる。

何より、今は白哉に非があると思われた。

「殴るなよ、阿散井」

拳が白哉に触れる寸前、冬獅郎が恋次の右手首を掴む。

「……離してください。俺はこいつを殴らなきゃ気が済まねえ」

「てめえの気なんか知った事か」

背が伸びたとはいえ、未だ恋次の方が高い。

冬獅郎は見上げるように睨みつけた。

「てめえが今こいつを殴れば、傷つくのは一護だ。俺はそれを認めるわけにはいかねえ。あいつを護るのが、俺の役目だ」

恋次は、力を緩めない。

「てめえ、さつき俺等が話した事聞いてなかったのか？ 話さなかったんじゃないか。話せなかったんだ。あいつが話さないでくれと頼んだって言ったろうが」

僅かに力が緩んだのを見計らって、冬獅郎は突き飛ばすように恋次と白哉を引き離す。

恋次は大きくバランスを崩したが、立て直して冬獅郎を睨んだ。

「よく考える。あの混乱した状況で、情報が漏れない確証はねえ。

尸魂界まであいつを王族として扱って、あいつが耐えられるとでも思うのか？」

恋次が大きく目を見開く。

「こいつらは、何とかしてあいつを護ろうとしたただけだ。てめえが殴る理由がどこにある」

言い終えた冬獅郎は、振り返って白哉を睨んだ。

「てめえも」

「白哉君も白哉君よ」

まさに言おうとしていた事をとられ、冬獅郎は恨みの視線を桐生へ投げかける。

「どうして避けようとしなかったの？」

詰問口調で問いかけられ、白哉は桐生から目を逸らす。
小さい頃からの習慣だろうか。

どうしてもこれだけは苦手だった。

「……それだけのことは、した」

まるで言い訳のように、白哉は言う。

白哉とてそれをわかっているのだろう。

絶対に桐生と目を合わせようとしなかった。

「あなたが殴られて、気が済むのはあなただけ。阿散井さんだって真実を知ればどのみち後悔する。一護君だって傷つくわ。……楽な方へ逃げるのはやめなさい。ここにいる人達に黙っていることを決めた時、覚悟を決めたんじゃないの？」

白哉は静かに目を閉じた。

それは、桐生の意に同意とするという彼なりの意志表示。それがわかっているから、桐生は小さく息を吐いた。

「言えなかった理由、もう一つあるのよ。掟と、一護君の願いと、霊王陛下の命と、そしてもう一つ」

桐生は、耐えかねたように床を見る。

空鶴は忌々しげに舌打ちした。

「一護君は、王族の……死神の力を持つ父親と、人間の母親の間に生まれた子供。尸魂界の掟では、存在そのものを否定されるわ」
ルキアがぐつと唇を噛んだ。
生まれが、何だと言うのだ。

一護は一護で、確かに存在しているのに、何故。

「掟としての理屈は、確かに通っている。……死神と人間が結ばれることが公認されて御覧なさい。世界は秩序を失うわ」

場の空気が硬質化したのを察したのだろう、桐生が言う。

そう、これは、一護がその立場に立つとさえ知らなければ、誰も疑問に思ふ事など無かった掟なのだ。

「王土にそんな掟は存在しない。……でもね、霊王は例え形式だけ

とあつても尸魂界を統べる者。四十六室や死神が、そんな靈王に納得がいくとは考えられないわ。ふざけているけど、ね」

「……それは、死神だけか？」

チャドが重い口を開く。

桐生が視線で促すと、チャドは拳を握りこんだ。

「王土、というのか？ ……あつちで、そのせいで苦労したということ、ないのか？」

啓吾が、はつとしてチャドを見る。

十分に考えられる事だ。

だとしたら、まさか

「ないわ。言ったでしょう？ 王土にそんな掟は存在しないって。

苦労しなかったとは言わないわ。でもそれは別の理由。一護君が人間の血をひいている事になんて、何の関係もない事」

「別の……？」

ルキアが呟く。

「もつとすずす気づいているんじゃないの？ 文化も何も違つとこで、今迄と全く違う生活を送らなくちゃいけない。それが、どんなに大変なことか。それも、知り合いなんて無いに等しいって場所だよ」

浮竹が静かに目を閉じた。

墓場で再会し、真実を知った時からそれはずっと引つかかっていた。あの時、彼は以前より痩せたように見えた。

それは、苦労から来るものではなかったのだろうか。ずっと、それが引つかかっていた。

「でもまあ、本人はそれほど気にした様子は無かつたけどね。どこ

にいても何かしらの苦勞はあるんだし、それがちよつと突然極端な形で来ただけだつて。全く、前向きにも程があるわ」

桐生は上を見上げ、少し笑う。

浮竹は、呆氣にとられたように桐生を見た。

対して、京樂はにやりと口角を上げる。

それでこそと言わんばかりの表情に、冬獅郎もまた満足そうな笑みを口元ににじませた。

「馬鹿みたいにまつすぐで、馬鹿みたいに律儀なところは何も変わつてねえよ。……あいつが頑張れる理由、面白えんだ」

冬獅郎は大きく息を吸い込む。

眞実よりも何よりも、これがずっと伝えたかった。

「仲間を裏切るような真似までしてここへ来たんだ。何があつてもやり遂げなきや、あいつらに会わせる顔が無い　ただの馬鹿だと思わねえか？」

織姫が両の手で顔を覆う。

バカなんて、言わない。けど。

裏切つてなんか無いのに。

会わせる顔が無いなんて、本気で思つてるの？

「……たわけ」

ルキアが言つたその一言が、全てだった。

「会わせる顔が無いだと……？　こちらのセリフではないか」

たわけ、ともう一度呟いたルキアを見て、桐生が苦笑する。

「ちよつとちよつと、何度も言わせないでよね。人の主つかまえていて馬鹿だのたわけだの、やめてつて。……つていうか冬獅郎、あんたもあんたよ。よくもまあそう言えるわ」

「うるせー。確かにあいつは主で、尊敬しちやいるさ。でも馬鹿な

もんは馬鹿だ。つーか一番あいつを馬鹿呼ばわりしてるのは桐生だろが」

不服そうに言い返した冬獅郎に、桐生はむっとしたように反論する。

「そんなこと無いわよ。私がいつ一護君を馬鹿呼ばわり……あれ？」

「ほらみる、心当たりあるじゃねえか」

半ば勝ち誇ったように、冬獅郎が言う。

京楽は二人を見て思わず嘖き出しそうになった。

この二人、意外と一番相性がいいかもしれない。

「うるさい馬鹿ゲツ。あんたこのあいだ」

「……ゲツ？」

乱菊が、不思議そうに呟く。

今、桐生は冬獅郎の事をゲツと呼んだ。

「ゲツってなんだい？」

浮竹が冬獅郎を見ると、冬獅郎は肩をすくめる。

「任務ん時に使う名前だ。普段は、あんまり使わねえけどな」

月って書く、そう冬獅郎が付け足すと、京楽は納得したように頷いた。

「じゃあ、桐生はヨウか。違うかい？」

え？ とひよ里が首をかしげるのと同時に、桐生はうなだれるように頷いた。

「本当、よくわかるわよね。そうよ。私はヨウ……太陽の、陽」

そう言われて、浮竹も納得したように頷く。

「そういうことか」

「どつという意味ですか？」

乱菊が京楽に問う。

だがそれを制するように、冬獅郎は口を挟んだ。

「どつでもいいだろ」

「よくないですよ。ね、教えてくださって」
ねだるような乱菊に、桐生は肩をすくめて笑った。
「教えてあげればいいじゃない。ちよっと考えればわかる事なんだから」

冬獅郎は一瞬桐生に視線を向けると、諦めたように溜息をつく。

「斬魄刀の、名前だ。……氷輪は、月だからな」

「あたしの斬魄刀は輪彩丸。輪彩は太陽ね」

乱菊が、納得したように相槌を打つ。

「この名前、うちの隊長がつけるんだけどね、考えるの面倒だからって斬魄刀からつけるのよ」

「いいじゃないか。意味合い的にも」

京楽が言うと、桐生はにやりと口角をつりあげた。

そう、この名前こそが、私たちの誇り。

桐生が胸の内で呟いた言葉に、冬獅郎だけが気付いていた。

s u n a n d m o o n (後書き)

タイトル日本語訳は「太陽と月」

こついう、対になるものって好きです。

冬獅郎と桐生つて、斬魄刀も容姿も正反対なんです。

セツトというか、話の中でそういう風に扱いたかったので。

最後の部分の伏線は、本編が終わった後に回収するものではないから。

それでは感想などお待ちしております。

do you want to meet him? (前書き)

五十七話の直後から始まります。

do you want to meet him?

「……でも、本当によかったですね」

イズルが、改めて呟く。

「みんな、心配していたから。事情が事情だ……このままになっても、おかしくなかったのに」

そういうと、桐生が笑んだ。

「全て、一護君自身の手柄よ。彼がこの三十年ずっと頑張ってきた事を鑑みて、霊王陛下が考え直してくださった……本当に、このままになってもおかしくないことだったのに」

しみじみと言うと、織姫が小さく呟いた。

「……会いたいな」

そう言えるのは、彼女が死神で無いからだ。

王族に会うという、例えそれが一護であったとしても不可能だとわからない彼女だから、そう言うことができた。

「でも、無理なんですよね」

それでも、彼女とて何となく理解しているのだろう。

桐生の目を真っ直ぐに見つめるその表情は、ひどく穏やかだった。

「彼が、ここへ来ることはできないわ。……当たり前だけど、彼はもう王族なんだもの。だから、私たちに託したの」

微かに震えた織姫の手を、雨竜はそっと握る。

それは、永遠の別離を告げる言葉。

悲しいものであって欲しくは無いけれど、心は正直だった。

「だけど、お墓に来た時は」

「あの時は、霊王陛下がまだご健勝であられたからだ。だから、特例として一日だけ外に出ることが許された」

数人の死神が、その言葉に反応した。

それらを代表するように、狛村が問う。

「あの時、は……？」

冬獅郎は一度だけ瞬きをした。

これもまた、伝えなくてはならない真実だ。

「一護君が王土へ来た時、すでにご高齢でいらしたの。一度御体調を崩されて、それからは一護君が政務のほとんどを肩代わりしている状況ね」

「あいつが王宮を離れば、政府の半分は機能しなくなる。……あいつが背負ってるのは、そういうものだ」

ぴくりと、狛村は耳を動かす。

鉄左衛門はそれを見て、唇を噛んだ。

それならば、彼があちらを離れることが可能なはずがない。

「……じゃあ、やっぱり」

無理なんだ。

水色はそう続けようとした。

彼とて、通らぬ道理を通そうとする程若くない。

だがその時、冬獅郎が再び口を開いた。

「会えないなんて、誰が言った？」

一斉に、視線が冬獅郎へと集中する。

部屋のなかほどに立つ彼は、動じたそぶりも無く口角を上げた。

「あいつが王土を離れる事は出来ないと言ったんだ。……会えねえなんて言ってるねえぞ」

ぱっと人間達の顔が輝く。

だが死神たちは一様に表情を崩さなかった。

「どついう意味だ」

碎蜂が言う。

一瞬彼女の脳裏をよぎった可能性は、あるはずの無い、ありえてはならない事。

だがそれ以外の意味があるとも思えない。

「あいつがここへ来る事は出来ない。でもな」

そのありえてはならない事に、死神は息を飲んだ。

「お前らが会いに行く事は、できる」

無理だ。

誰かがそう言った。

それはそうだろう。

王族は尸魂界に干渉しない。

だがそれと同じように、いやそれ以上に、死神は王族に関わる事を許されない。

まして、王土に行くなどと。

冬獅郎は部屋の中央から、桐生の隣へと移動した。並び立つと、桐生は表情を改める。

「護廷十三隊総隊長、山本元柳斎重国殿。先ほどお伝えした王族特務隊隊長よりの要請、受理頂けますでしょうか」

元柳斎は右手を杖から離し、懐へと差し入れた。とりだされた書状を一瞥し、元柳斎は頷く。

「こちらにとつても有難い話。早急に人員を調整すると、約束しよう」

冬獅郎は、隣に立つ桐生の体が歡喜に打ち震えるのを感じていた。彼女が、自分が、ずっと望んでいた言葉だった。

「山じい、要請って何だい？」

さすがに処理範囲を越えたのか、京楽が声に驚きを滲ませる。

「護廷十三隊と王族特務隊。双方閉鎖的な組織ゆえ、それなりの欠点も多い。人員の交流でもどうか、と」

檜佐木の口があんぐりと開いた。

そんなのありか。

「口実よ……ただの名目の話」

だから何でもアリ。

そう言いきった桐生に、浮竹は苦笑する。

「ずいぶん思い切った案じゃないか。一体誰が考えたんだい？」

浮竹は、桐生だろうと思って問いかけた。

だから次の瞬間に、思わず嘔き出しそうになる。

「……俺」

何となく、不機嫌とも取れそうな声音で呟いたのは、桐生の隣にた
たずむ少年。

「……てつきり桐生の案だと」

「俺じゃ悪いか」

「悪くないさ。意外だったただけだ」

慌てていい添えた浮竹に、桐生は肩を震わせた。

「ただ、これには一つ問題がある」

不機嫌そうな声音そのままに、冬獅郎が続ける。

「これはあくまで、護廷十三隊と王族特務隊の交流だ。……それ以外は、含まれていない」

ルキアが目を見開き、織姫たちを見る。

雨竜はぐつと唇を噛んだ。

「死神以外を、連れていく事は出来ない」

躊躇いも無く、冬獅郎は言いきった。

事実が事実。

歪めるべきではない。

チャドが拳を強く握るのを見て、桐生は溜息をつく。

全く、一護君の事を侮りすぎよ。

「あのね、一護君がそんな中途半端な手立てで済ませると思う？」
え、と織姫が桐生を見る。

「そんな中途半端な状態で、私達をこっちによこす訳ないでしょ。」

大丈夫。ちゃんと対策は立てたわ」

そう言っていると、桐生は口角を上げた。

「そろそろ、来る頃だよな」

冬獅郎が言つと、桐生は頷いた。

「ええ、そろそろね」

何がだ、と拳西が問おうとした時、不意に扉が開かれた。

「あー、いたいた。はい。とれたよ」

扉から入って来た黒髪の女は、手に持っていた書類を冬獅郎に渡す。

「三枚でいいんでしょ？」

「ああ。……にしても、本当にやるとはな」

「出来なかつたら怒るくせに」

「怒るのは俺じゃねーだろうが」

ルキアが、どうしたらいいのかわからずおろおろする。

さつきも会った。

その時は知らなかつたから気にする訳も無かつたのだけど、聞いてしまった以上はそのように接するべきなのか……？

ルキアが救いを求めるように見ると、白哉は首を横へと振った。

それは、果たしてどういう意味か。

一方、他の死神達はそれが誰だかわからない。

もつとずつと幼い頃の写真を数度見ただけなのだから仕方ないが、彼らの眼前に立つのは紛れもなく。

とん、と夜一が列から一步踏み出す。

すたすたと歩くと、未だ言い合いを続ける夏梨の肩に手をのせた。

「久しぶりじゃのう。夏梨姫」

カリンと、そしてヒメという音を聞いて、死神たちは硬直した。搜索に関わった者なら、誰だって一護の家族の名前を知っている。カリンというのは一護の妹で、一護は王族で、だからつまり。

矜持とかそれに近いものは、一瞬で吹き飛んだ。

誰かが崩れるように膝をついたのを皮切りに、次々と死神たちは夏梨へ叩頭する。

立つのが人間と仮面の軍勢、五大貴族当主と数人の死神になったところで、夏梨は漸く異変に気づく。

「……………え!？」

それを見て固まったのは夏梨だけで、隣に立つ冬獅郎と桐生はさもありなんと頷いた。

「ちよ……………え? え?」

きよろきよろと周りを見渡すが、冬獅郎は知らぬ存ぜぬといったように通し、桐生と夜一に至っては完全に上戸に入っている。

側に立つ三人が当てにならないと悟った夏梨は、目があった白哉を標的にした。

目は口ほどに物を言いとはよく言ったものだ。

声にならぬ訴えに、白哉は小さく溜め息をつく。

「頭を下げる必要は無い、と。……………そうであるっ?」

「はい。あ、あの……………そんな必要ないですから」

だが死神は微動だにしない。

一角に強制されているやちるだけが、何とか逃げようともぞもぞ動いていた。

ぼん、と夜一が夏梨の肩を叩く。

その嬉しそうな表情を見て、冬獅郎は顔が引き攣った。

おいこら待て。何やるつもりだ。

「主ら、そうして夏梨に頭を下げるということは……一護に対してもそうするということか？ あ奴の方が位としては上であるわけじゃぞ」

ぴし、と音を立てて空気が固まり、割れる。

それを見た夏梨は素直な感想を述べた。

「ねーねー、今でこの人達の一兄に対する評価が見えた気がする。ぎよつとしたような気配がその場に満ち、冬獅郎は溜息をついた。

「あんまりからかうな。気の毒だ」

「正直な感想言っただけ」

「予想つくだろうが、これぐらい」

「予想つたつて、一兄も冬獅郎もあんまりこのこと話してくれないじゃん」

「関係ねーだろ」

むつとした様子の夏梨を、桐生が制した。

「その前に、やることがあるでしょ？」

夏梨は一つ頷くと、一同に向き直る。

「本当に、どうか頭を上げてください。私は、兄一人としての頼みを受けてここへ来ました。扱われるべきは黒崎一護の妹として。王族としてではありません」

「そう言つておるぞ。もうよいじゃろう」

恐る恐る、といった風に一人が顔を上げ、次いで次々と立ち上がる。

「夏梨ちゃんも夏梨ちゃんね。急に入ってきたら、びっくりするに決まってるじゃない」

「あーうん。あんまり考えてなかった。王土にいる時と同じようにしちゃってぞ」

おかげで寿命の縮むような思いをした死神たちは、一様に硬い表

情のままだ。

「それにしても、本当によくとれたわよね。これ」

桐生が冬獅郎の持つ書類を示し、振り返った。

「どうやったの？」

そこに立っていたのは、冬獅郎たちと同じ外套に身を包んだ男だった。

いつからそこに居たのか、それに気付かなかった碎蜂は焦る。

その男からは気配を微塵も感じなかった。

男 竜は、黙って首を横へ振る。

その動作を見て、冬獅郎は夏梨を見た。

「お前……何やらかした？」

「やらかしたって前提？ べつに何もしてないよ。ちゃんと一兄に言われた通りに四十六室へ行ってきただけ」

四十六室へ行ってきただけ。

あまりにもぞんざいなその言い方に、浮竹は何とも言えない表情になった。

やっぱり王族だ。

四十六室へ行ってきた“だけ”なんて、自分なら到底言えない。

一方、竜は夏梨の言葉を聞いた途端にもう一度首を横へ振った。

「……行って、何した」

「……最初は穩便にやろうと思ったんだけどねー」

旗色が悪いのを察したのだろう、夏梨は言い訳がましく口を開く。

「思った、て、どういう意味だ」

「……………」

「竜」

竜は深く深く息を吐くと、夏梨がやらかした信じられない所業を暴露した。

「……………脅した」

「脅したア?!」

信じられない、と言う風に桐生が言う。

四十六室を相手取って、この娘はいったい何を脅してきたのだ。

「だってさあ、さつさと書類寄せせばいいのにグダグダ理屈こねるから面倒になつたんだもん……………だから」

「だから、何だ。何言つた」

「……………」

冬獅郎の機嫌が見る間に悪くなるのを悟つたのだろう。

どうにかして逃れようと、夏梨は黙り込む。

「夏梨」

心なしか気温が下がってきた気がして、夏梨は白旗を上げた。

「……………」『そうですか、靈王陛下と皇太子殿下の御命に従えませんか』って言つた

う、と冬獅郎が顔をしかめる。

「夏梨ちゃん、それは無いわ。あれだけ一護君に言われてたじゃない。後腐れするような事はやらかさなよって」

「そうだけどさあ、あんだけ理屈こねられたら腹も立つっていうか」冬獅郎はどうやら何か言う気さえ失つたらしい。

眉間に深いしわを刻んで瞑目していた。

四十六室の冥福を祈って。

「あの一、それでその書類って何なんですか？」

織姫が問うと、夏梨が答える。

「護廷十三隊の入隊許可証。四十六室管理だから偽造もできないからさ、いっそ正攻法で分捕って来た」

護廷十三隊は、この時王族には絶対に逆らえない事を改めて悟った。四十六室を脅して、機密扱いに等しい書類を分捕って来るような真似ができる一族に、誰が逆らうものか。

「とりあえず適当に書いて終わったら破棄すればいいだけだし」
これで大丈夫だよ、と夏梨が言うも、雨竜は厳しい表情のままだった。

「三枚、と言ったよね？」

三。心の中で復唱して、織姫ははっとする。

それに気付いたのか、夏梨は表情を曇らせた。

「たつきちゃん、啓吾さん、水色さん……ごめんなさい。三人は、連れて行くことができません」

チャドが大きく目を見開く。

「何故……」

その一言に込められた疑問と、そして納得がいかないという強い意志に、夏梨は目を細めた。

「命に、関わるんです」

その思いがけない告白に、一同はきょとんとした。

「命に、関わる……？」

ルキアが言う。

夏梨はそれに頷くと桐生を見た。

「遊子の事、話した？」

桐生が頷くのと同時に、ルキアは思い出す。

遊子ちゃんは、あちらの環境に適応できなかったの。

霊圧が低すぎたのよ。そのせいで……

そこで言葉を詰まらせた桐生の表情も思い出し、ルキアは震える声で問うた。

「霊庄に、耐えられないと……?」

静かに頷いた桐生に、たつきは目線を下げる。

「なら、仕方ないか」

そう言った声は、思いのほか穏やかだった。

「一護には、会いたいけどさ……やっぱ命は惜しいよ。残念だけど、仕方ない」

たつきの言葉に、夏梨はきつく目を閉じた。

耳に、あのやり取りが甦る。

たつた数日なら、体に影響が出る事はないわ。だったら……

だめかもしれない。そんな可能性があるなら、俺はあいつらに
来てもらう訳にはいかねえ

誰もがそう言ったのに、一護は決してそれに頷かなかった。

会いたくてたまらないはずなのに、それでも少しの可能性を決して
考慮から外さなかった。

それは、当たり前なのだけど。

でも、そのことで後悔を残す事になるのではないか。

確実に、少しの後悔を残すのと、少ない可能性だが、大きな傷を残
すかもしれないのと、兄は前者を選ぶと言って譲らなかった。

「一護が元気にしてるなら、俺はそれでいいよ」

「そうだね。それだけで十分だ」

続いて言った啓吾と水色を、夏梨は見る事ができなかった。

一番会いたかったのは、他ならぬ兄のはずなのに

「ところで、行くという方向で話が進んでいますが、本人達はそれ
でよろしいのですか?」

静まりかえった場に、九頭柳の声が響く。

「誰が行くのかはまだわかりません。それを決めるのは総隊長殿だ。……だが、誰が行ってもその覚悟ができますかな？ 彼は確かにあなた方を友人として迎えるでしょう。だがそれは、皇太子としての彼を見ない保証にはならない。何があっても受け止めきれないのであれば、それでよいでしょう。だが下手をすれば彼を徒に傷つけることになる。彼を傷つける真似 今の彼を拒絶しないという覚悟が、出来ますか？」

静かだが、有無を言わせぬ強さのある声に、思わず背筋が伸びる。だが、雨竜は躊躇い無く言い切った。

「はい」

それを聞いた九頭柳は、満足そうにほほ笑む。

「派遣の人員は 浮竹、京楽。お主らに一任する。よいな」
元柳斎が言う。

何があってもよいようにするだろうその人選に、桐生は笑んだ。

「ただし、主らのどちらかを含めて二人以上の隊長が同行することを条件とする。よいな」

あくまで人員の交流、そして何かあった時に対処できるようにだろう。

納得のいく采配に、誰も異を唱えない。

「第一および第二会議室を開放します。どうか好きにお使い下され」
その一言は夏梨に向けられたものだ。

元柳斎が目礼すると、夏梨もまた返した。

「ありがとうございます。……さあて！ やることやって、さっさと一兄のところに行こう！」

その声の明るさに、思わず桐生の表情がほころぶ。

重責からだろう、夏梨はここへ来るまでの間、一度も笑わなかったのだ。

「人員の選考、ねえ。浮竹、どうする」

元柳斎が退出した後、京楽が声を掛ける。

「ほとんど決まったも同然じゃないのか？ ……桐生、一体何人ぐらいを見積もっているんだ？」

「特には決まって無いわ。あなた達に任せる」

いくつかの会話が交わされ、少しずつ人員が決められていく。

「朽木と、阿散井隊長、それから石田君たち三人は決定でいいだろう。あとは」

「浮竹、隊長」

後ろから聞こえた硬い声に、浮竹はふり返った。

「どうした、朽木」

「私……私は、行くことができません」

小さい、だがはっきりと告げたその声に、浮竹だけならず誰もが反応した。

「朽木さん！？」

織姫が名前を呼ぶも、ルキアは足元に視線を落したままで決して上げようとしない。

「……私は、あ奴を否定した。私の知る貴様は、そんな……斬魄刀を持たず、虚に誰かが襲われても見捨てるような男ではないと」
行けません、とルキアは繰り返す。

「会わせる顔が無い……私は、ひどい事を言ってしまった。今さら、会う資格など」

「それならば、ちょうどよいではないか」

まるで何でも無い事のように、夜一が言う。

「ちようどよい……？」

ルキアが困惑して夜一を見つめる。

夜一はどう言おうと迷ったのか、がしがしと頭を掻いた。

「そうじゃ……あ奴もな、後悔しておる。結果的に、お主に刀を向けてしまった。傷つけてしまった、と」

ルキアがその紫紺の目を大きくする。

それは、思いがけない言葉だった。

おあいこじゃ、と夜一は言う。

「それに、お主だけここへ残ればあ奴は心配すると思つがのう」

「……だそうだ、朽木」

二人に促され、ルキアは迷うように織姫を見る。

ゆっくりと頷いた彼女を見て、ルキアは浮竹へ頷いた。

「……行かせて、ください」

「決まりだな」

「同行するのは阿散井隊長と、それから俺か京楽のどちらかでもいいだろうか」

他の隊長が頷くのを見て、浮竹は隣に立つ平子を見る。

「君たちは、どうする。誰か行くか？」

平子はしばらく逡巡した後、ひよ里を一瞥した。

「一護んことはともかく、ひよ里、連れてったってくれへんか？」

暗に桐生の存在を示すと、浮竹は頷く。

「行くかい？」

問われたひよ里は、一瞬不安そうに桐生を見た。

だが桐生は目を閉じていて、表情を伺う事は出来ない。

すると、リサが声をかけた。

「ほんなら、真子も一緒に行ってきたらええ。アタシは別にいいし」

僕も、俺もと同意する声が相次ぎ、平子は片眉を上げる。

「ほんなら、そういう風でええか？」

浮竹に確認すると、彼は頷く。

「これで八人……十一番隊はどうする？」

十一番隊、と一括りにしたのは、どうあっても隊長は行かないだろうと踏んでの事だ。

「俺はいい……つまんねー場所みてえだしな」

予想通りの答えに京楽は苦笑し、やちるの後ろの二人に視線を向けた。

「君たちは、どうする？」

「更木隊長……行ってきても、いいっすか？」

一角が意を決したように問う。

「好きにしる」

あっさりと投げ返された言葉に、一角は剣八の背に向かって礼をした。

「なら、僕も」

弓親が同行を名乗り出ると、京楽が人数を数える。

「これで十人。乱菊ちゃんと雛森ちゃんも行ってきたらいい。行くだろう？」

「ええ」

「お願いします」

「十二人……こんなもんだろうか。あまり大勢で押し掛けるわけにもいかないだろうし」

浮竹が言うつと、冬獅郎が首を振った。

「こつちのことなら問題無い。むしろ、数日間隊長格が欠けることになる。そつちの心配をした方がいい」

「なら、大丈夫だな」

「私たちも同行することになっています。まあ、別の用事ですが」
九頭柳が言うつと、当主たちはそれぞれ頷く。

空鶴もしぶしぶといったように頷くと、後ろに立つ岩鷲に向き直つ

た。

「岩鷲、お前も行くぞ」

「……わかった。……なあ、だったら花もいいだろ？」

「えー!？」

急に言われて花太郎は驚く。

だが、卯の花をはじめとする隊長や雨竜達は、もちろんだと言った。

「え……でも、僕……」

しどろもどろとする花太郎を制して、岩鷲が言う。

「お前が一番頑張ったじゃねーか。だから、行こうぜ」

「……いいんですか？ 僕が行っても」

「当たり前だ。一緒に行こう、花太郎」

ルキアが言うと、花太郎はぱっと顔を輝かせる。

本当は、行きたくて仕方なかったのだ。

「当主から五名、隊長二名、副隊長二名、席官四名、その他六名、計十九名……多いだろうか？」

「いえ、全く。……これで決定ですか？」

夏梨が順に顔を見ていく。

誰も異存がないのを確認すると、冬獅郎を振り返った。

「覚えた？」

「ああ」

「じゃ、報告よろしく」

冬獅郎は一つ頷くと、瞬歩で姿を消す。

「なら、その……会議室だっけ。行く人はそっちへ行ってください。それから、たつきちゃんたちも」

夏梨が言うと、ルキアは優しく微笑んだ。

do you want to meet him? (後書き)

タイトル日本語訳は「逢いたいかな?」

ようやくこんな展開になってほつとしています。

とはいえ油断は禁物。

十九人+王土メンバーという大人数を……書ききれぬのか、果たして。

最初は三十人ぐらいだったんですよ。
でも友達に全力で止められてこの人数に。
がんばって削りました(遠い目)

それでは感想などお待ちしております。

a moment to relax (前書き)

五十八話の直後からはじまります

a moment to relax

がやがやと会議室へいどうし、それぞれ腰を落ち着ける。集まった面々を見渡して、冬獅郎は呆れたように言った。

「何で王土に行く以外のやつらも集まってるんだ？」

そこに居たのは、隊首会にいたのとほぼ同じ面々。

意外と言えば意外だが、狛村や碎蜂まで紛れ込んでいた。

「興味があるのだが……駄目か？」

「構いませんよー。冬獅郎、さつさとやること済ませちゃお」

そう言つて夏梨は冬獅郎の袖を引いた。

「あつち出る時に決めてきたのと同じ配分でいいでしょ？」

「ああ」

「じゃ、夜一さん。こいつのことお願いします」

夏梨が示したのは、先ほど墓地に居た少年。

「……ひよつとして」

その容姿に、誰もが彼の正体に気付く。

「そ。私の甥っ子……挨拶は？」

促されて、少年は立ち上がる。

「一貴いちきです。はじめまして」

一貴が礼をすると、たつきが顔をほころばせた。

「それにしても、本当によく似てるねー。あいつがちっちゃい頃にそっくりじゃん」

「だよね。あんまりそっくりでさ、びっくりするんだ。私も」

二人は顔を見合わせてくすくすと笑つ。

一護の小さい頃を知る数少ない人間として、このそっくりさはツボらしい。

「あ、あの……さつきは、ありがとございました」

一貴はいつの間にか、ルキアと恋次の側に行っていた。律儀にお礼を言う一貴に、ルキアもまた顔をほころばせる。

「私たちは、何もしておらぬ……本当に、怪我は無いのかな？ 掌は？」

「あ、大丈夫です。もう治してもらいました」

ほら、と示された手のひらは既にすっかり綺麗になっている。

護衛士の誰かが治療したのだろう。

それに安堵して、ルキアはそっと溜息をついた。

「一貴、こつちおいで。……夜一さん、こいつのことお願いしますね。一貴、あんまり迷惑かけちゃだめだよ」

言われた二人は、夏梨に頷く。

夏梨は部屋の隅に立つ雷雨に視線を走らせ、彼の了解もまた確認した。

「では、参ろうか。……瞬歩はまだ使えぬのじゃな？」

「はい………すみません」

「よいよい。では、行くぞ」

夜一が一貴の手をとると、碎蜂が首をかしげる。

だが夜一はそれに気付かなかったのか、一貴と連れ立って部屋の外へと出ていった。

「彼らは、どこへ？」

狛村が問うと、桐生が答える。

「現世よ。……あの子、尸魂界も現世も初めてだから、案内してやってほしいって一護君に頼まれてるのよ」

ああ、と頷きかけて狛村は固まる。

「護衛は！？」

狛村が気付いた限りでは、ついて行ったのは護衛士一人だけ。いくらなんでも手薄すぎる。

だがぎよつとしたままの狛村と、そして碎蜂を尻目に桐生は優雅に

返事を返した。

「必要無いわ。……雷雨が付いて行った。夜一ちゃんもいるのだから、それで十分」

言うだけ言っただけ持って持ってきた荷物をあさり始めた桐生に、狛村は声をかけようかとしどろもどろする。

「大丈夫ですよ　皇太子殿下は、……まあ想像つかないかもしれないですけど、危険な賭けはしません。彼が大丈夫だと判断したんですから、大丈夫です」

見かねた蓮杖が横から口を挟むと、碎蜂が眉間にしわを寄せた。

「だが……」

「護衛士は一人で隊長二人を相手取って戦う事が最低限求められる職業だ……雷雨は中でも剛の者として名高い。彼が付いていれば、滅多な事はありません」

たたみかけるように言われ、二人は黙り込む。

「大丈夫。何も起りはしませんよ。彼らには、霊王陛下のご加護がありますから」

蓮杖もまた言うだけ言ってその場を離れ、残された二人はその場に立ち尽くしていた。

「それじゃ、私も別用で外します……白哉さん、九頭柳さん、ご同行願えますか？」

二人が頷くと、夏梨もまた部屋を出ていく。

その側には竜が付き従っていた。

「……彼らは？」

「大霊書回廊だ。……こつちも、始めるか」
冬獅郎は返事をし、桐生に声をかける。

「そうね。それじゃ、軽くですけど王土の風習などについてご説明いたします。質問などがあつたら遠慮なくどうぞ」

二人と、そして蓮杖はかわるがわる王土について話した。

その文化や、王族の事、一護達以外の王族にあつた時に取るべき礼節

あまりにも多岐にわたるそれらに、一同は一時間程度で音を上げる。結局、桐生の提案で休憩をとることになった。

「へえ、そんなことがあるんだ」

休憩の時に話したのは、特に話す必要もない、言うならば他愛もない出来事。

それらの中で、ふと桐生が思い出したようにある話題を口にした。

「そういえば、一護君と凜ちゃんの婚礼の儀は盛り上がったわよねえ。……本人達以外が」

ぼそつと付け足された一言が気になったのか、それとも結婚式と言ふその行事が気になったのか、織姫が食い付いた。

「どんな風だったんですか？」

「聞きたい？」

「はい！」

女性陣がいつせいに喰いついたのを見て、冬獅郎は溜息をついた。ずいぶん長い休憩になりそうだった。

国事といえば、このところ凶事続きだったから、久しぶりの慶事に国全体が盛り上がったのよ。

これで、国情も上向いてくるって誰もが思い、そして誰もが喜びを分かち合った。

街でも、寄ると触るとその話。

やれ、これで王家も安泰だだの、披露目の儀には何を着て行くだの、下町で祝いの祭りをやるだの、本当に大盛り上がり。

でも、それは王族の中でも同じだね。

一護くんは服はどうする、凜ちゃんの簪は、ああそつだ私たちはこれを着ようか、いやそれじゃだめだこちらがいいって大騒ぎ。

一護くんも凜ちゃんも、賑やかなことが好きでないのにそのままそつとしておいたのもそのせい。

これで、楽しみが増えるのならつてそつとしていた。

でもまあ毎日毎日やれあの布で仕立てよう、冠はこつち。いやその冠なら服はこの布の方がいいだろう。凜の簪はどうする、一護くんがその布で服を仕立てるならこつちがいいんじゃないか。それなら服はこの布が。いやそれは色が濃いでしょ。こつちのほうがよく似合うはずよ。それなら一護くんもこつちのほうがつていうのにはさすがに疲れていたけどね。

くすくす、と織姫とたつきが笑う。

その様子が目に浮かぶようだった。

それでね、婚姻の儀も本当にすごかった。

あの二人の正装姿の絵になることつたら！あ、信じてないでしょう。本当にすごかったのよ。一護くんも、凜ちゃんも、ああ、本当にすごいなあって。あれだけの衣装を引き立て役にして、あれだけの儀式に埋もれてしまわないで、それほどに二人は存在感があった。二人が主役だからつて事だけでは、説明がつかないくらいにね。

披露目の儀で民の前に出たとき、その時の民の歓喜のしようつたらもうすごかったわよ。

ああ、ご立派でいらつしやる。これで国も安寧を取り戻そう、とささやく声があちらこちらから聞こえた。

私も東宮付きの護衛士としておそば近くにいたのだけれど、溜息が出そうなほどだったもの。

うつとりとした表情で付け加えた桐生に、恋次は疑わしげな視線を送った。

それに気付いたのか、桐生は隣の冬獅郎に同意を求める。

「ねえ冬獅郎？あんたもいってやんなさいよ。」

死神たちは、冬獅郎は否定はせずとも肯定はしないと思った。だから次の瞬間、一斉に茶を吹く事になる。

「言っただってわかんねえよ。見てみなきゃ。」

冬獅郎が言くと、誰もが、ぴた、と固まった。

「げ、冬獅郎くんまでそういう風に言うの！？」

「だって一護っすよ！？あいつがそんな立派なわけねー」

「ほら馬子にも衣装とか言うじゃないですか！きつと見間違い」

お前らたいがい失礼なことというよなー、と冬獅郎は思う。

結構ひどいこと言ってる。

というか不敬罪とかでしょっ引かれてもおおかしくないことを言うてる。

でも、仕方ないと思う。

あれは見なくちゃ分からない。

「お前らだって、みてりゃそう思うさ。」

もう一度言ってもなお疑わしそうな目で見られた。

「冬獅郎の見る目は間違ってたってことよね。」

「どういうことですか？」

「あいつが、いずれ靈王になるって聞いたとき、なんなく、あいつならいい王になるだろうな、って思ったんだよ。だから俺は護衛士になった。あいつの治める国を、傍で見てみたいって思った。」

誰もが、黙っている。

「傍で見てて確信した。あいつは絶対いい王になる。」

いまいち理解できなさそうな複雑な表情の面々を見る。

「言っただけの事じゃねえだろうけどな。わかる必要もねえだろ、別に。」

言っただけ、途方もない面白さを味わった。中間に立つってのも悪

くない。

「日番谷君なんか意地悪。」

ぶーっとむくれた雛森に溜息をする。

冬獅郎はそれを見て、内心少しばかり勝ち誇ったような気分になった。

a moment to relax (後書き)

タイトル日本語訳は「つかの間の休息」

てな訳でちょっとした一護の災難を告白(笑)

一護一人称で同じ内容のも用意してあったんですけどねー、とりあえず今日はこちらで。

それでは感想などお待ちしております。

b e f o r e t h e m e e t i n g a g a i n (前書き)

五十九話の少し後からはじまります

b e f o r e t h e m e e t i n g a g a i n

「こつちは終わったよ。そつちは？」

戻つて来た夏梨が、桐生に問う。

「こつちもほぼ済んだわ。……つていうか、大丈夫なの？ 隊長格

が昼間つから職務放り出して一所に集まっても」

くう、と伸びをして、桐生は粕村たちを振り返る。

「大丈夫ではないが……彼の事を聞いておきたかったのだ。息災な
ようで安心した。礼を言う」

そう言つて粕村は頭を下げる。

「私たちは何もしてないじゃない。お礼を言われる筋合いなんて無
いわ」

「そんなことはない。……失礼する」

粕村が鉄左衛門を伴つて部屋を去る。

碎蜂と大前田もまた、いつの間にかいなくなっていた。

桐生は粕村たちを見送ると、湯呑を手に話している織姫たちを振り
返る。

「出立は、明日の朝になります。石田さんたちは、一度現世へ戻ら
れますか？」

「ええ、そうさせてください。家の事もありますから」

「ならば、私を送ろう」

そう言つてルキアが立ち上がる。

「私たちも、帰ろうか」

たつきが窓の外を見ると、すでに日が落ちかかっていた。
早くしないと、子供たちが帰ってきてしまう。

「あ、じゃあ私も付いて行っていい？」

夏梨が立ち上がりざまに外套を整える。

それを見た冬獅郎は、溜息をつきつつそれに倣った。

「別について来なくていいよ。やる事あるんでしょ？」

「そう言う訳に行くかよ。王土とは事情が違うんだ。自重しろ」

「わかりました」。じゃ、お願い」

ぱんつと夏梨が手を合わせると、冬獅郎はもう一度溜息をついた。

「現世つてさあ、大きな建物多いよねえ」

しみじみと、夏梨が空を見上げる。

元々それほど田舎と言う訳ではなかったが、三十年前に離れた時から考えられないほどに大きなビルが立ち並ぶようになっていた。

「王土はそんなことないの？」

隣を歩きたつきが答える。

既に雨竜と織姫、チャドは別れた後で、ルキアは先に尸魂界へ戻っていた。

「塔なんかを除けば、ほとんどが二階建て。横には広いけど、高さはないなあ……なんか、浦島太郎にでもなった気分」

そついうと、啓吾が大きく笑った。

「そつか、三十年ぶりなんだもんな。一護も、きつとそう感じるんだろうな」

「そつだと思うよ。高い建物も無いし、夜通し明かりが付いている所は役所と学校と病院ぐらい……空が綺麗ってぐらいしか、こつちと比べていいところは無いのかも」

高い建物が無い分、王土の空は広い。

電気が無いから、灯りはもっぱら松明や行燈だ。

文明、という点では、大きく現世や尸魂界から立ち遅れているのかもしれない。

「あ、でもね！ 学校も病院も全部無料なんだ。ご近所同士仲がいいし、食べ物もおいしいよ」

自慢できるところを一生懸命考えたのだろう。

水色は、一護の住むその世界を思い描こうとしていた。

「学校も病院も無料って言うのは、親からしたら有難いな。うちの娘なんかさ、たつきに似て空手やってるからケガばかりなんだ。大学も、空手が強いところであって決めただ。……本当、心配が絶えないよ」

「けいごが溜息をつく。」

「きつと、肝が冷えるような思いをたくさんしてきたのだろう。」

「たつきちゃんに似たんなら、空手もすっごく強いでしょ」

「インハイ1位！ 親子でとっただ」

「誇らしげに胸を張るたつきと、誇らしいのと心配なのが混じった表情の啓吾と、夏梨は二人を交互に見て笑った。」

「水色さんは？ お子さんいるの？」

「娘が一人。最近、余計な虫がつくことが多くてさ」

「……虫？」

「夏梨が首をかしげると、たつきがそつとささやいた。」

「男だよ。おとこ」

「あー、と夏梨が生ぬるい視線を水色へ送る。」

「娘が可愛くて仕方ない父親の典型だ。」

「啓吾さんは？ 娘さんに虫くっついたりしないの？」

「……変な虫がくっつくこうもんなら自分ではたき落してくるような娘だからなあ」

「それを聞いた水色がくっくつくと笑う。」

「あつたこともないのにその様子がありありと浮かんで、夏梨も笑った。」

「啓吾つてば、それでも心配するんだよね」

「半ば呆れたように水色が付け足すと、啓吾は不満そうに唇を尖らせた。」

「仕方ねえだろう。親なんだから」

「親なんだから、その一言に夏梨は目を細めた。」

「思えば、兄も義姉もそれが口癖になって久しい。」

織姫たちの霊圧が十分に遠ざかったのを確認して、夏梨は切り出した。

「あのね」

一方、桐生は帰って来た一貴と夜一を出迎え、腰をかがめる。

「どうだった？」

「すごかった！ 大きな建物がいっぱいあって、すごくたくさんの人がいた！」

王土では無いその光景。

それこそが、一護が一貴を送りだした理由だった。

「そう。それはよかった……夜一ちゃん、ありがとうね」

礼を言うと、夜一はわざとらしく肩をすくめてみせた。

「さあて、夜一サンも戻ってきた事ですし、そろそろ僕達も帰りますか。ねえ、テッサイ」

未だ部屋に居座っていた浦原が立ち上がる。

すたすたとそのまま入口まで歩いて行く後ろ姿に、桐生は目を細める。

「本当は、行きたいんじゃないの？」

ずっと言おうとしていた言葉を、やっと口にする。

浦原は立ち止まったが、振り返らなかつた。

「……なんで、そんなこと言っんです？」

「馬鹿ね。誰が君の面倒を見てきたと思ってるのよ。確かに君は昔から訳わかんない子だったけどさ、それでも君がどうしたいかぐらいはわかるわ」

やれやれ、といった様子で腕を組むと、漸く浦原はふり返った。

「行く訳にはいきませんよ。どの面下げて会えばいいのか、わからない」

「ほーう、お主にも体面を気にする可愛げが残っておったのか」

「……夜一サン」

「隊首会が終わってから冬獅郎があつちに報告入れたんだけどね、人数間違えて二十人って報告しちゃったんだって」

「だから頭数合わせてくれない？」

桐生はそう言う。

「……日番谷サンがそんな簡単な失敗するとも思えないんですけどね」

「なら、私たちの意図も伝わってるわよね？」

「……」

「喜助君」

名を呼ばれ、浦原は溜息をついた。

振り返ったその顔は、どこか泣きそうに見える。

「……ひどいっスよ。皆サン」

桐生はただ微笑んだ。

「行きましよう。行って、桜ちゃんと葵ちゃんに怒られなさい。あの二人も、ずいぶん心配したのよ」

わかりました、乾いた声でそう告げた浦原の頭を、夜一が軽くはたく。

「儂もずいぶん叱られたからのう。覚悟しておけ」

「……ハイ」

それだけはやっぱり勘弁してほしい。

そんな浦原の表情を見て、鉄斎は目を閉じた。

「テツサイ。怒られてくるんで、しばらく店を開けます」

「わかりました。桜殿と葵殿によろしくお伝えください」

「ルキア！ここにいたのか」

「恋次か……」

二人がいるのは、流魂街にほど近い瀟霊挺の外れ。

ルキアは屋根に腰かけ、尸魂界を眺めていた。

「……明日だな」

「ああ。全く、いつもあ奴には驚かされる」

「尸魂界に乗り込んでくるわ、本当に藍染倒しちまうわ、拳句突然失踪して漸く行方が知れたと思ったら王族か。なんか、見せものも見てる気分だ」

「ああ、そうだな……なあ、恋次」

「あ？」

「殴るのか？一護の事を」

う、と恋次が顔をしかめる。

立场上、してはならないとわかっているのだけれど。

だけれど納得がいくかどうかは別問題だ。

「殴るつつつたら、止めるか？」

「止めはせぬ。止めたところで、どうせ聞かぬのであるっ？」

「……………」

「それにな、恋次」

ルキアは屋根の上で立ち上がる。

橙の夕日が目にまぶしかった。

「あ奴は、殴ったところで貴様をどうこうせぬよ。周りが肝を冷やすだけだ」

ルキアはそう言ってほほ笑む。

「周りを巻き込むのでないならば、好きにすればいい」

屋根から飛び降りて隊舎へと戻っていくルキアを見送り、恋次も立ち上がる。

黒衣の上にまとった羽織が、橙に染まっていた。

「……似合わねえとか、いかにも言いそうだな」
風にはためいた羽織を一瞥し、瞬歩で一気に駆けていく。
バタバタと羽織が悲鳴を上げて、恋次は足を止めなかった。

「それじゃ、お母さん達しばらく家空けるけど、よろしくね」
大学生になった娘に、織姫が言う。

雨竜と織姫の間の子供は、何故か二人とも雨竜に似ていた。

「はい。……って、何で？」

生返事をし、慌てて訊き返したかぐやに雨竜は説明した。

「しばらく尸魂界に行ってくる。何かあったら、浅野のところに行きなさい」

「あー、はいはい。大丈夫だって。もう私成人してんだよ？ 雨蓮のこともちゃーんと見とくから。気をつけてね」

「ねーちゃん、俺だって大学生なんだぜ？ いつまでも子供扱いすんなよ」

「もーちよつとガキっぽさが抜けたら、考えてあげる」
似ているのは容姿ばかり。

その口癖も性格も、二人は親のどちらにも似なかった。

唯一、こればかりは親と同じと言えるのはその霊力。

二人が雨竜の指導のもと滅却師としての能力を手に入れたのは、小学生のころだったか。

ただ、当時の雨竜は忙しく、十分に修行を見てやることができなかつた。

そこで二人が教えを乞うたのが、意外すぎる人物だった。

「お祖父ちゃんにも伝えておくから、いい？ ちゃんと戸締りしてガス栓閉じて、日が暮れる前にカーテン閉めるのよ？」

「わーかってるって。もうお母さんったら心配しすぎ」

「虚のことだ。あまり深追いするなよ。何かあったらお祖父さん

を頼るんだ。いいな？」

「はいはい。大丈夫。お祖父ちゃんならピンチになるまえに駆けつけてくれるから」

あまりにも的を射た発言に、雨竜と織姫は顔を見合わせる。

二人の修業を見たのは、竜弦だった。

「アンタが、俺を滅却師にしたがらなかった理由は、わかった……でもかぐやと雨蓮には霊力がある。虚から身を護る力を、つけてやってほしい」

「私からも、お願いします。……私達だけでは、この子たちを護りきれません」

そう言つて頭を下げる二人を、竜弦は何度も追い返した。

霊力があるのなら、封じればいい。

そうすれば虚を気にして暮らす必要もない。

何度も同じことが繰り返された。

それでも、子を持つ親の気持ちはいつの時代も変わらない。

枝葉は違えど、その根元に位置する愛情は変わらないのだ。

「私の修業は、厳しいぞ。よく覚悟を決めさせておけ」

雨竜と竜弦という、強力すぎる師を得た二人の成長は目覚ましかった。

元々、特殊な能力を持つ織姫の血を引く事も大きいのだろう。

瞬く間に才能を開花させた二人は、かつての両親と同じように学校を抜け出すようになっていた。

「お父さんとお母さん、何かいいことあった？」

尸魂界と聞いて、何かあったのかと感じていたのかもしれない。

だがそれにしては二人の雰囲気は柔らかすぎる。

かぐやは手早く髪をくくりながら問いかけた。

「……ちよつと、ね。じゃあ、行ってきます。今日もあつちに泊まるから」

そろそろ、あちらから穿界門が開けられる頃だろう。

雨竜達三人には、十三番隊の隊舎の一角が割り当てられることになってた。

「いつてらっしゃい。気をつけてね」

娘の声を背に受けて、二人は家を飛び出した。

もうすぐ、その時が来る。

誰もが待ち焦がれた、その瞬間はすぐ傍に。

手を伸ばして、掴み取るう。

互いの糸を、縊り合わせるために

b e f o r e t h e m e e t i n g a g a i n (後書き)

タイトル日本語訳は「再会の前に」

ここで *s i x p e n d u l u m s* が終了です。

また少し外伝を挟んで、次の章に入ります。

チャドが出てこなかったのは、どうしても私がチャドの奥さんを想像できないかったから

一人だと会話のさせようがないし。

かといっていい組み合わせも思いつかなかったんですよね。

七十超えて未だ（孫のために）現役滅却師な竜弦に拍手（笑）

それでは感想などお待ちしております。

S 0 6 光 焰 前 篇 (前 書 き)

六十話の少し後から始まります。

S 0 6 光 焰 前 篇

o n t h e r o o f

光を追って歩み続けた この目に映る道の上で
信じ頼る意味を知った

孤独も痛みも全て抱えて 一人で在ると覚悟すること
それは何も強さじゃない

少しでも前へ進むため 少しでも多く護るため
例えミチを外れても 信じる道を進んでゆく

正しいことが正義じゃない 悪いことが悪じゃない
果て無い問いを求めてゆく

この生きる意味を信じるから

夏梨は、屋根の上でぼんやりと空を見上げていた。

夜でも煌煌と明かりが灯されている瀨霊挺は、王土の夜よりもわず
かに明るい。

夏梨は隊舎が置かれている地区を下に、星空を見ていた。

王土への出立を翌朝に控え、彼女達は四楓院邸に逗留していた。

王族が二人いる以上四大貴族のどこかがいいという事。

そして桐生が四楓院邸を知り尽くしている事、

夜一なら余計な気を使わずに済むという事、

それらもろもろと、そして何故か白哉が自邸への宿泊を勧めなかつたので

騒がしいうえ人の出入りが多い、と彼らしくない理由だ

つたが 四楓院邸への逗留が決まったのだ。

かつて、夜一やその姉達が桐生とともに過ごしたという離れをあてがわれ、夏梨と一貴、桐生、冬獅郎、竜、雷雨の六人は休息をとっていた。

きちんと手入れの行き届いた離れは人気が無く、夜一が気遣って家の者を出来るだけ排除したのだろうと察せられた。

そして夏梨は屋根の上に居る。

既に夜半を過ぎた頃で、早くに上った月は既にその姿を隠そうとしていた。

「何でこんなところに居るんだ」

不意に不機嫌そうな声が下から聞こえ、夏梨は庭を見下ろす。

そこには、やはり不機嫌そうな表情で夏梨を見上げる冬獅郎がいた。

冬獅郎は軽く跳躍して屋根へと上り、夏梨の隣へ腰かける。

「何してんだ？」

眼下に見下ろした瀟霊挺は、かつて自分がいた時と何も変わらなかつた。

その事に安堵して、隣の夏梨を見る。

そして、ある違和感を感じた。

「……別に。空、見てるだけ」

だが、夏梨の横顔を見る限り、冬獅郎はそう思えなかった。

何か思い悩むような、そんな表情に僅かに不安を覚える。

「……何か、あつたか？」

冬獅郎は、あの時以来夏梨に何か聞くときは直球で来るようになった。

もともと、他人に気を回すのが上手くないのかもしれない。だが、それは冬獅郎が夏梨を信頼している証に他ならない。気の置けない仲だと、そう認識しているという事だからだ。

「何でそう思うの？」

「何となく、だ。物事深く考えねえ奴がそんな顔してたら、誰だつて気にする」

「人を馬鹿みたいにいうな」

「実際馬鹿だろうが。テメエの馬鹿に何回心臓が止まったと思つてやがる」

すぐに思いつくだけで両手では足りねえんだが。

一つずつ数えようとした冬獅郎の手を抑えて、夏梨は言い返す。

「そんなに止まってたら死んでるよ。あんたこそ馬鹿じゃないの」
「ぼんぼんとした歯切れのよい掛け合いは、きつと隊長をしていたころの冬獅郎しか知らない者が見たら驚きだろう。」

浮竹や京楽あたりは微笑ましく思うかもしれない。

夏梨の性格は、冬獅郎に壁を作らせなかった。

だからこそ、こうして軽口めいた言い合いがある。

そして、それは他の者たちにも反映されつつあった。

「誰が馬鹿だ。……で、何かあつたんだろ？」

「無かった訳じゃ、無い……ちよつと気づいただけ」

そう言つて膝を抱え込んだ夏梨に、冬獅郎は眉間のしわを更に深くした。

こうするときは、いつも決まつて物事は深刻なのだ。

「何に」

冬獅郎は短く問いかける。

言葉が少ない時ほど、彼は真剣なのだと言葉はわかっていた。

彼が王族特務に来てから、そして遊子が死んでから、二人はよく一緒に居るようになった。

王族特務に来た最初の何年かは、冬獅郎の職務が忙しくて日に一度顔を見ればいい方だったと思う。

でも遊子が死んで、そして自分が学校へ通うようになって、それから一日のほとんどを一緒に過ごすようになった。

他の護衛士がそうするように、冬獅郎もまた学校へ通ったのである。それも他とは違って夜間学校ではなく、夏梨と同じ全日制の学校へ。夏梨の護衛というのは、もちろんあるだろう。

夏梨と外見上だけは同じ年頃の冬獅郎は、特務の隊長にとっては都合のいい人材だったはずだ。

だが何より大きかったのは、冬獅郎がそれを自ら望んだことだ。

力が欲しいんです。物理的でなくて、一護を助けられる力が。

冬獅郎はそう言った。

他の文官と同じ知識が欲しい、と。

護衛をするようになって痛感したのだろう。

一護を護るのに最も必要な力は、斬拳走鬼の力では無い。

必要なのは、知力と言う力。

共に政治をする訳では無くとも、政治の知識を持つことでより良く

一護を護れるようになる。

敏い冬獅郎がそれに気付くのに、長い時間は必要なかった。

結果、夏梨は現世で言う高校に当たる高等学舎を卒業した後、巡察使になる為進学しなかったのだが、冬獅郎は隊長の許しを得てもう一つ上の、現世で言えば大学や大学院に当たる国学院学舎へと進学した。

それまでのおよそ十年、冬獅郎と夏梨は共に学んだ。同じ学校で、同じ学級で何年も共に学んだのだ。

それこそ試験勉強も一緒にしたし、これは内緒だが宿題を写し合ったりもした。

とはいえ、主に夏梨がせがんで冬獅郎のを借りるのだが。

冬獅郎は、お前の方が忙しくないのにとぶつぶつ言いながらも、結局最後には折れて貸す事が多かった。

とにかく、他の同級生よりも格段に親しい二人は、互いの少ない動作でその意志を察することができるようになっていた。

普通に言うならば、幼馴染とか、親友と言う言葉が似合うのかもされない。

そして、だからこそ夏梨にはわかった。

何にというその短い間に、真剣に答えなくてはいけない事を。

はぐらかしても、きつと、いや確実にばれる。

ゆっくりと深く息を吸う。

多分、これは間違っていない気づきだと思う。

ただ、だからこそ、言いたくないなと思った。

だってそれは、自分の愚かさを、考えの至らなさを認める事だから。

今さら張る見栄なんて、冬獅郎に対しては欠片も残っていないと思っていたのに。

心の中でこっそり呆れながら、夏梨は口を開いた。

夏梨が言ったその言葉に、冬獅郎は大きく目を見開く。

少なくとも、それは冬獅郎には理解できない事だった。

一体、なぜそう思ったのか。

それは理由を聞かない限り、冬獅郎にとって認めがたいものでもあった。

「気づいたんだ。一兄が、何をずっと怖がっていたのか」

S 0 6 光 焰 前 篇 (後 書 き)

タイトル日本語訳は「屋根の上」

今回の外伝の主人公は夏梨です。

というかほとんど夏梨と冬獅郎しかでてきません。多分。

夏梨と冬獅郎が同じクラスだったら楽しいなあと思うのは私だけじゃないと信じてみる

それでは感想などお待ちしております。

S O 6 光 焰 中 篇 (前 書 き)

六十一話の直後から始まります。

S 0 6 光 焰 中 篇

right understanding

「……怖がる？」

冬獅郎が問いかける。

夏梨は頷くと、再び口を開いた。

「なあ、冬獅郎。瀧霊挺って広いな」

「……は？」

その怪訝さはもろに声に現れた。

一護が何かを怖がっている事と、瀧霊挺が広い事と、何の関係があるのだろうか。

「でもさ、尸魂界には流魂街もある。そこには、もっとたくさんの人たちがいる。……私は今迄尸魂界にきた事は無かったから、話に聞いた分しか知らなかった。……こんなに広いとは、思わなかった」

かつて。

兄達が、ルキアを助けるために乗り込んだという瀧霊挺。

それは、たった数人が乗り込むにはあまりにも広い場所だった。

こんな場所を舞台に、彼らは戦ったのだと思うと空恐ろしい気がした。

てっきり、もっと小さな場所だと思っていたのに。

そして、流魂街はもっとずっと広いのだという。

現世と均衡を保てるほど魂魄の量があるのだから、それも当たり前前と言えば当たり前前。

だが、よく考えれば自分は現世のこともよく知らないままに王土へ

来た。

自分の知る世界は、兄や冬獅郎の知るそれよりもはるかに狭いのだ。

「現世にもさ、たくさんの方がいる。あんまり大きな街に行った事はほとんど無いし、他の場所にだってそんなに行つた事無い。私が現世で知ってるのは、ほとんど空座町と、その周りの小さな範囲だけ。本当に、狭いよ」

話がなんとなく見えてきたような気がして、冬獅郎は黙っていた。

「世界は、王土と現世と尸魂界だけじゃない。虚圏と、あと地獄もある。一兄は、一瞬だけど両方に行つた事あるって言った。二度と行きたくないけどなって、言つてたけど」

冬獅郎は、その両方を知っていた。

確かに、二度と行きたくないというのは間違いないだろう。

特に地獄は相性が悪すぎた。

「私はその二つにも行つた事は無いし、多分行く事は無いんだと思う。……だから、わからなかつたんだ。一兄が、何をそんなに怖がっているのか」

そう言つて夏梨はぎゅっと唇を噛んだ。

もっと早く気付いても良かったはずだ。

悔恨が胸に突き刺さる。

「一兄は、王土に来てからずっと怖がつてた。……ううん。“おそれていた”つて言つた方がいいのかも」

冬獅郎もまたそれに気付いていた。

そして、その原因にも。

もし夏梨と考えている事が同じなら、夏梨がどうして今その話を、今それに気付いたのかもわかる。

だから冬獅郎は黙っていた。

ただ黙つて、先を促していた。

「 靈王になるのを、おそれていたんだよ。きつと」

「 だろうな」

そう返した冬獅郎を、夏梨は驚いた風でも無く見た。

「 やっぱり、冬獅郎は気づいてたんだ」

「 ……俺は現世も尸魂界も知っているからな」

不機嫌そうにも聞こえる愛想の無い声に、夏梨は小さくため息をついた。

「 私さ、一兄ならきつといい靈王になれるって思ってた。靈王がどんなものかはよくわからなかったけどさ、一兄が死神代行としてやったこととか、それに普段の一兄見てたらきつと大丈夫だって信じってた」

夏梨が話す事が全て過去形である事に、冬獅郎は何も言わない。

そう、全ては過去の事。

思っていた事も、信じていた事も。

「 自分も死ぬかもしれないなかったのに、冬獅郎たちと一緒に戦って空座町を護ったんだよ？ どんなどころかもよくわからない瀟靈挺にバカみたいに突っ込んで、ルキアちゃんを助けたりもした。それだけの覚悟も力があるんなら、絶対大丈夫だってバカみたいに信じてた」

それだけ言っつて、夏梨はまた溜息をついた。

自分のバカさ加減に呆れ果てる。

何も見ないで、ただ感情だけでそう思っていた自分に。

「 凜姉もさ、一兄はいろんな所を見てきたから、きつといい靈王になれるって言った。だから、一兄がどうしてそんなにおそれるのか

不安がるのか、わからなかった」

おそれ……それは恐れであり、惧れであり、懼れであり、そして畏れだ。

それは一護の、真っ直ぐすぎる思い故に強さを増していた。

「巡察使になって、いろんなところを視た。こうやって尸魂界に来て、いろんな人達に会った。……多分、一兄は霊王がどんなものなのか、最初っからちゃんと理解していたんだよ」

見上げた空は、広い。

眼下に広がる瀟霊挺も、その先にある流魂街も。

夏梨の知るところも知らないところも、世界は全て霊王の掌上にある。

「霊王は、全ての魂魄の頂点に立つ者。その存在で世界に秩序をもたらし、魂魄を安寧へと導く……それってさ、結局全部の命を背負ってるってことだよ。確かに、霊王が直接統治するのは王土だけだけど、魂魄を導き、安寧へと導く点では、結局全部の魂魄を背負わなくちゃいけないってことだよ」

実際、この世の魂魄の全ては、霊王の庇護の下で成り立っていると書いてもいい。

尸魂界に伝わる霊王に関する文献は、真実のほんの一部しか記していない。

「一兄はいろんな人たちに会ったから、その人たちの命を背負うのがどんなことかわかってたんだ。霊王として、魂魄の頂点に立つってというのがどういう事なのか。自分がどんな人たちの上に立って護っていかなくちゃいけないのか、わかっていたんだよ」

夏梨はまたぎゅっと膝を抱え込む、

それを見た冬獅郎は、夏梨の肩に手をのせた。

「……もう、いい。……わかった」

夏梨はそれを拒絶するように首を振った。

「私、何も知らなかった。一兄がどんな覚悟で王土に来たか、どうして靈王になるのをあんなに怖がるのか、わかるうとも思わなかった……ただ、一兄が自信を持ち切れしていないだけだっと思って思いこんでた」

「夏梨」

「もっと早く気付くべきだったのに！ お父さんも遊子もいなくなっちゃって、現世での一兄知ってるの、私と冬獅郎だけだったのに……冬獅郎は気づいてたのに、私だけ、気付いていなかった！」

「落ちつけ！」

肩を掴まれて、はっとして冬獅郎を見る。

ふいに鼻の奥がつんとして、夏梨は慌てて首を横へ振った。

「私、本当にダメだ。力になりたくて巡察使になつたのに、結局何もわかって無かった」

それは、何も兄に対してだけでは無い。

例えば桐生や凜や　そして冬獅郎も、自分が気付いていない何かを抱え込んでるんじゃないか。

自分が気付くべき何かを、気づかないまま放置しているのではないだろうか。

そんな恐ろしさが、不意に心の中に芽生えた。

冬獅郎は、何も言えずに夏梨を見ていた。

自分も一護も、何かしらの恐怖を抱えて生きている。

それは誰でも同じで、夏梨ももちろん同じはずで。

俺は、こいつが何を恐れているのかを知っているのか……？

近頃会っていないことを理由に、放置してはいないだろうか。

気づかないところで、こいつが気付いてほしいと願っている事は無いのだろうか。

同じ恐れを、冬獅郎もまた感じていた。

S06 光焰 中篇（後書き）

タイトル日本語訳は「正しい理解」

一 護が怖がっていたのは、靈王になることそのものでした。

冬獅郎はかつて隊長だったから、数え切れないほどの命を背負うその重責を知っている。

逆に夏梨は、地方を巡っている巡察使だから、そして靈王になる可能性がほとんどない立場にいるから、それに気づきにくかった。

冬獅郎が恐れているのは、仲間を喪うことでしょう。

一 護はもちろんそうだし、特務の仲間も、もっといえば瀨靈廷の人たちだってそう。

もちろん、夏梨もです。

一度気づいて、そして考え始めてしまったら止まらない。

（見た目ばかりは）思春期後半の彼らのすれ違いです（ なんだか違つ）

それでは感想などお待ちしております。

S O 6 光 焰 後 篇 (前 書 き)

六十二話の直後から始まります。

S 0 6 光 焰 後 篇

quince's decision : second act

「…………冬獅郎はさ、恐ろしい事、無いの?」

長い沈黙の末、夏梨が呟くように言う。

「知っておきたい。気づかなくて、後悔するのはもういやだ…………嫌なら、別にいいけど」

冬獅郎は答えなかった。

嫌だという訳では無く、言う事にためらいを覚えたからだ。

「……………喪う事」

長い沈黙の末、冬獅郎はやつと答えた。

「喪う事が、怖い」

「……………私も、同じ」

迷うように夏梨が付け足したのを聞いて、冬獅郎は再び口を開いた。もう、隠すこともないのかもしれない。

「……………昔、一番護りたかった奴を殺しかけた事がある。その前には、一番の親友を殺した事がある」

「……………え?」

夏梨が顔を見てくるのがわかったが、冬獅郎はそれには応えなかった。

これ話をするのは、初めてのはずだ。

「その時、俺は何もできなかった。……………両方、最悪の結末にならなかったのは一護のおかげだ。あいつがいなかったら、俺も俺が殺しかけた奴も死んでいたし、殺した奴ももっとひどい形で終わっていただはずだ」

雛森と、草冠。

本当に、一護がいなかったらどうなっていたのだろう。

「そっか。……そっか」

夏梨はまた呟くように言った。

時刻はすでに深更だから、すでに休んでいる一貴を氣遣ったのかも
しれない。

「……お前は、何が怖い？」

今度は冬獅郎が問いかけた。

「喪つこと。さっき言ったじゃん」

夏梨の返事は早かった。

「手に入れたものを失うのは怖い。……怖い、けどさ、仕方ないっ
て割り切ることも必要なんだって最近解るようになった。……遅い
のかもしれないけど」

冬獅郎が夏梨の横顔を見ると、その表情は既に巡察使としてのもの
だった。

「外に出て、色んなものを見て、色んなことが解るようになった。

……ありがとね」

その思いがけない告白に、冬獅郎は目を見開く。

「冬獅郎が外に出てみるって言うてくれたから、私はこうやって前
へ進んでこれた。ありがとう」

夏梨は冬獅郎を見ない。

少し気恥ずかしいのかもしれない。

どういたしましてと言うつのも変な気がして、冬獅郎は黙っていた。

「だからって言うつと変だけど……お願い、もっと強くなって」

「……あ？」

またしても突拍子もないその言葉に、冬獅郎は首を傾げる。

「強くなって。私はそれを追いかけるから」

夏梨は、今度こそ冬獅郎を真っ直ぐ見た。

その真っ直ぐさに、冬獅郎の方が動揺する。

「何で俺なんだ？」

至極最もな疑問。

その問いに、夏梨は真っ直ぐに答えた。

「だって一兄とか凜姉とか、桐生とか追いつけそうにないもん。そんなの目標にしても仕方ないし」

あんまりすばつと断言するので、冬獅郎はうつかり納得しかけた。だがその直前で、随分失礼なことを言われたのに気づく。

「まで。お前今俺のこと馬鹿にしなかつたか？」

「してないしてない。褒めたよ？ 目標にしたたって言った」

「その後だ！ 何であの三人は追いつけそうになくて俺なら大丈夫なんだよ」

「努力しだいで何とかかなりそうな気がするもん。あんたなら」

冬獅郎はこめかみを引き攣らせた。

「馬鹿にしてるじゃねえか」

「違う。認めてるの……同じこと考えてる、仲間だつて」

「……仲間？」

冬獅郎はまた怪訝そうな声をあげた。

夏梨と会話していると、冬獅郎は大抵こうなる。

夏梨は、話の要点をすつ飛ばす悪い癖があった。

「冬獅郎、あんた何で学校へ行ったの？ 隊長に命令されたのは私と同じ高等学舎まででしょ？ 院に行ったのはあなたの意思じゃん」

夏梨の言わんとしていることがわかってきて、冬獅郎は答える。

「力が欲しいから……お前と同じだ」

二人とも、一護の力になりたくて力をつけた。

そういう点では、二人は誰よりも似ているかもしれない。

「冬獅郎は知ることので力を付けた。私は戦う力を付けた……同じ理

由なのに、不思議だよな」

「理由は同じでも、やるうとしてしていることが違う。……俺は、内側であいつの力になりたい。お前は」

「外から。外で、一兄の助けになりたい」

二人の視線は一瞬交差して、再びそれる。

「……なら、考えてること、同じだよな。理由が同じならさ」

夏梨が力なく呟いた。

「ああ。当ててやるうか？」

冬獅郎が言つと、夏梨は首を横へ振る。

「もっと力が欲しい」

重なったその声に、夏梨ははっとして隣を見る。

そこには視線をそらしたままの冬獅郎がいた。

「言わなくていいって言った」

怨みがましげな声に、冬獅郎は首を竦める。

「言われては、ないな」

「……冬獅郎」

不機嫌そうな声に、冬獅郎は首を横へ振る。

「悪かった……でも、あつてたじゃねえか」

夏梨は、ふいっと冬獅郎は反対側に視線を向けた。

「で、さっきのは？」

つつけんどんな声に、冬獅郎はまた首を傾げた。

「何がだ？」

「さっきの。……もっと強くなつてって話」

冬獅郎は夏梨から目を逸らして上を見た。

「……あのな、俺の役目がなんだか忘れたのか？」

夏梨は黙っている。

言わずもがなのことを言われたせいで、冬獅郎の機嫌が少し悪いのにきづいているのかもしれない。

「強くなるさ。当り前だろうが……んで、てめーには絶対ぬかれねえ」

「……商法は私の方が成績良かったもん」

「過去形だろうが。今は負けねえ」

しばしにらみ合いが続いて、耐えかねたように夏梨が噴出した。

「ありがとう。おかげですつきりした」

「別に」

つつけんどんな冬獅郎の返事に、夏梨は肩をすくめる。

屋根から飛び降りて、冬獅郎を見上げた。

「もう休もう。明日は早いんだ。……早く、一兄のところに戻るっつ」

S 0 6 光 焰 後 篇 (後 書 き)

タイトル日本語訳は「夏梨の決意：第二幕」

てなことので外伝一本終了。

まだもうすこし続きます。

それでは感想などお待ちしております。

S O 7 繋がる縁 前篇（前書き）

― 護達が王土に來た最初の正月の話です。

S 0 7 繋がる縁 前篇

the prediction proved right

かつて生死を共に戦い 世界を護りし少年の
苦しきを見るが 我が償い

採るべき道を誤る勿れ その言の葉の示す真に
この意志を重ね 手を伸ばす

この手に握るか細き糸を 絶やさぬために手繰り寄せ
首に絡みし鋼の鎖を 断ち切るために抗いもがく

いつともしれぬ儂き未来を 遠く見据えて失わぬ
一つの想いを心に秘めて

彼の少年の盾とならん

コツコツと、足元で音が鳴る。

革張りのこの王土風の硬い靴が、夜一は苦手だった。

隠密機動として生きたために、音が鳴るから嫌いなのか。

あるいは猫として 足音をたてぬ生き物として生きるからか。
とにかく、この靴も、そしてこの硬質な音も夜一は苦手だった。

足音をたてぬよう、静かに歩くなどという所作を今さら姉から習い
覚えるつもりなど無い。

だから夜一は、いっそわざともいえるほど足音を立てて歩いてい

た。

「知らせているつもりですか？ 自分の到着を」
すぐ後ろを歩く蓮杖が声をかける。

「彼に、心の準備をさせるために」
返答はしない。

それは確かに半分ほど当たってもいた。
先導する桐生が一瞬振り返り、その顔に微笑を浮かべる。
それがなんだか気まずくて、夜一は黙ったまま視線を逸らした。

およそ一ヶ月ぶりの再会が、そこに迫っていた。

「一護君、案内してきたわ。 入ってもいいかしら」
桐生が戸を叩き、声をかける。

はい、と返ってきた言葉と、そして部屋の内から聞こえる微かな衣擦れの音。 どうか扉へ近付いているらしい。 を聞いて、夜一は小さくため息をついた。
声ばかりは、未だ元気のようだ。

だが次いで内側から開けられた扉の、そのどこか躊躇うような、遠慮するような感じ、そして覗いた顔を見て、夜一は握った拳にさらに力を込める。
不安そうに揺れた一護の瞳を真っ直ぐに見て、夜一はにかつとも通りの笑みを浮かべた。

「明けましておめでとう、一護」
一護は一瞬あつげにとられたように夜一を見た後、くにやりと笑った。

「明けましておめでとうございます……」

「こちらが、九頭柳殿。鬼道衆で大鬼道長をしておられる。それでこっちが蓮杖殿じゃ。副鬼道長じゃの。これから世話になることもあろう」

夜一が順番に指し示し、二人は一護に対して会釈をした。

一護もまた会釈を返す。

危うく場に変な沈黙がおりそうになった瞬間、九頭柳が口を開いた。

「大変だろう。大丈夫かい？」

その瞬間の判断に、白哉は心底ほっとした。

白哉が見て不安になるほど、一護は今にも壊れそうだった。

「何とか、大丈夫です。……多分」

言って、一護は抜け殻のような笑みを浮かべた。

心配をかけまいと、必死になっているのだろう。

恐らく、これは父親たちに対しても。

それを察してか、九頭柳は目の端に悲しみのようなものを滲ませながら、優しく声をかけた。

「何かあったら、言いなさい。私たちはこちらの理に縛られない、

自由な者だからね」

一護は、ぱちぱちと瞬きをした後また少し笑った。

「ありがとうございます」

それからしばらく、夜一達は一護と話をした。

話をした、というよりは聞きだしたという方が近いかもしれない。

この一ヶ月にあった事、そしてこれからの事を。

一護はぼつぼつとそれに応え、夜一達は相槌を打ちながらそれに助言することもあった。

少なくとも、今はまだ夜一達の方がここがどういところかを知っていた。

「なあ、白哉」

再び会話が途切れた時、おもむろに一護が名を呼んだ。

「何だ」

決して愛想のいいとは言えないそれに、一護は内心ほっとする。この一ヶ月、求めていたのはこういう“いつも通り”だったのだと改めて気づいた。

「……………無事にしてるか？」

その、余りにも漠然とした問を計りかねたのだろう。

白哉は眉間にしわを寄せる。

だが一護はそれ以上は言わず、黙って視線を逸らした。

「ああ。無事にしておる。……………心配せずともよい」

代わりに答えたのは、夜一だった。

誰が、とは一護は言わなかった。

だから、夜一も誰がとは言わなかった。

それが、全てだった。

尸魂界は、復旧にはまだ遠い。

傷がいえるまでにはまだまだかかる物もいる。

現世の者としてそうだ。

戦いの影響を受け、家族を失ったものも、霊力を得た者もいる。完全に元の通りになる日は来ない。

そして、なにより一護を知る者たち。

彼らの傷が最も深かった。

それは、一護も察しているのだろう。

だから誰がと聞けなかった。

聞けば、自分がたくさんの人を傷つけたことが現実になる。

せめてもの自己防衛に、夜一は安堵した。

まだ守れるほどの自我が残されていることに。

ここが、こちらの風聞が伝わらぬほど隔絶された土地でよかったと思う。

ここでなら、一護はまだしばらく生きる事が出来る。

そう思った。

「……そつか。よかった」

呟く様な一護の声に、夜一は眉根を寄せた。

かける言葉が、見つからない。

それは五人とも同じで、特に空鶴は一度も口を開かなかった。

蓮杖と九頭柳は初めて一護に会うのだし、白哉に気の利いた言葉を求めても無駄。

夜一は内心頭を抱えていた。

こつというのは自分が確か一番苦手だと思っていたのだが。

横目で蓮杖を見ると、彼は小さく頷いた。

九頭柳に対してはまだ遠慮したところのある一護だが、見た目の年齢が近いせいもあるのだろう、蓮杖にはうちとけてきていた。

「君、確か鬼道が苦手なんだったよね？」

蓮杖が言うと、一護は複雑そうな表情で頷いた。

大方、鬼道に関しての才能はからっきしだとあちらこちらで言われた事を気にしているのだろう。

「だったら教えるよ。使えるに越したことは無いんだしさ」

「……でも」

「一護」

夜一が口を挟む。

きよとんとしたまま一護が夜一を見ると、夜一はまた笑った。

「教えてもらえ。……身を守る力が、必要になるからの」

その言葉の真の意味を察して、一護は苦笑する。

確かに、斬月を失う刻はもうすぐそこへと迫ってきていた。

もう二度と揮う事のないであろうその愛刀を横目に見て、一護は静かに頷く。

「じゃあ、頼む。……相当できの悪い生徒になると思っけど」

言い訳がましくつけたされたその言葉に、白哉はふっと笑みをにじませた。

不安が、無い訳ではない。

だが、まだもう少しだけは大丈夫だと思えた。

だから、大丈夫で無くなる前に、自分は護るための力を付けようと誓った。

それが、せめてもの償い。

五人は、それぞれにそれぞれの想いを深くする。

力の及ぶ限りの全てを、護るために。

S O 7 繋がる縁 前篇（後書き）

タイトル日本語訳は「的中した予想」

ということですが今回は当主五人が主人公。強いて言うならば夜一が主人公です。

間に立ち続けた彼らは何を見たのかを書くつもりです。あくまで、つもりです（笑）

それでは感想などお待ちしております。

P . S .

現在リクエスト企画実施中です。詳しくは活動報告まで。

P . S . の P . S .

Whispers更新いたしました。

そちらもお楽しみいただけると嬉しいです。

S 0 7 繋がる縁 中篇（前書き）

六十四話の数日後から始まります。

S 0 7 繋がる縁 中篇

black tail

夜一は、一人四楓院邸のある場所に籠っていた。

膝を抱えて、じっと庭の一点を見つめている。

何度目かと思うほど溜息をついて、その眼光をさらに鋭くした。

正月の数日を王土で過ごし、尸魂界へ戻って来たのが先ほど。

だがどうしても浦原商店に戻る気にはなれなかった。

もともと、すぐに戻ると約束したわけでもないうえ、約束したところで破るのが常の自分の事。

しばらくはここに居るかと思腹をくくっていた。

帰り際の、一護の声が耳に蘇る。

また、来年。元気で。

調子ばかり明るいその声に、夜一もまた、おうと答えた。

また、来年。

それまでの一年、果たして一護が無事であるかどうか。

夜一が四楓院邸にしばらく留まる決意をしたのは、一護の為でもあった。

少しでも、自分が四楓院家当主としてまともな仕事をすれば、ある程度は一護の為になるのではないだろうか。

王土へ行き、感じたことがそれだった。

あちらの状況は、思っていたよりもはるかに悪い。

そしてそれを払拭できるのが、自分たち当主であるという事もまた、ひしと感じた。

霊王陛下を弑そうとした大罪人を生んだ土地。

謀反に気付かぬとは何事か。

あれが、百年もその責務を放り出した四楓院の当主か……

絶えまなく囁かれる声にいちいち何かを思うほど、当主たちは繊細では無い。

むしろ、それを苦痛に感じているのは一護だった。

かつて、仲間として共に戦った尸魂界の者たちへの、いわれのない中傷。

それはそのまま一護への中傷となり、その心を苛んでいた。

兄が気にすることではない。

白哉が一護にそう言ったのは、確か隊首会を悪く言われた時だったか。

藍染たちの翻意を見逃した責任は、確かに我らにある。

そう言われた一護は反論しようとした。

だが白哉は言わせなかった。

我らには、瀨霊挺の守護という責務が与えられている。翻意を見逃し、瀨霊挺を破滅の危機にさらしたのは、我らの責任だ。

淡々と言う白哉に、一護は眉根を寄せた。

あんな苦しそうな顔をするような子じゃ、ないんだろう？

後で、九頭柳にそう言われた。

いつそ、怒ってしまえば楽なんだろうけど。

蓮杖が言う。

そう、夜一が何よりも気にしていたのは、その事だった。

仲間を悪く言われたにもかかわらず、一護はただじっと耐えるばかりで一度も怒りをぶつけないのだ。

それは、王土という土地の、その特徴にもあった。

閉鎖的な土地柄であるがために、今ここで自分が怒りを炸裂させたら、それはそのまま瀟靈挺の意につながる。

周りの下官は皆一護が瀟靈挺寄りの気質である事を承知していたし、だからこそ一護の評判はそのまま瀟靈挺の評判に繋がるのだと、一護はよくわかっていた。

だから、何もできないのだ。

今自分ができるのは、少しでも王土における瀟靈挺の 護廷十三隊の名誉を回復する事。

未だその廃絶が囁かれるほどに、王土での瀟靈挺の地位は危うくあった。

一時に自分の出生を知らされ、王族としての責務を背負わされ、拳句尸魂界の名誉を、命運までもをその手に握らされたのだ。

それでも一護は逃げようとしなない。

意味、ないだろ？

痺れを切らした自分は、二人きりになった時に一護を問い詰めた。

せつかくみんな助かったんだ。俺がここで投げ出したら、それ全部無駄になっちまうじゃねえか。

そう言った時、その瞬間だけ、一護の瞳は元の光を取り戻した。

護りたいんだ。……皆を。

どこまでもその名前の通りにある少年に、夜一は呆れさえ覚えた。

馬鹿かと怒鳴りつけようとして、結局こぼれ出たのは何とも気の抜けた、自分らしからぬ覇気の無い言葉だった。

馬鹿じゃの、お主。

いっすよ、どうせ俺は馬鹿だ。

気にいらぬのか、少し唇を尖らせた一護を見て、夜一は決意を固めた。

責務を、出生の重みを背負ってやる事はできない。だからせめて。

せめて、尸魂界の命運ばかりは共に背負おうと。

自分が当主としてまじめにその責務を果たせば、四楓院の名誉を回復することができるかもしれない。そうすれば、尸魂界の立場もまた。どこか、四十六室の実行部隊に身を置いていれば楽だったのにと今さらながら思う。

白哉坊は隊長、九頭柳は大鬼道長で、蓮杖は副鬼道長だ。空鶴にそれは難しいだろう。

だが自分はかつてその地位にあった。

それが、今さらひどく惜しく感じられた。

だが、そんなことを考えても仕方がない。

失った物をいくら思っても、返ってはこないのだから。

日が暮れた庭を見ていた夜一は、何の前触れもなく猫型へ変化した。塀伝いに屋敷を飛び出し、双極の丘を挟んだ反対側へと向かう。

そこには、蓮杖の屋敷があった。

「どうしたんですか？ 夜一さん」

正月休みに溜まった仕事を片づけなくてはと、いそいそと出勤の準備をしていたところだった。

大鬼道長も副鬼道長も同時に空けていたせいで、毎年正月は仕事如山積しているのが常。

しかもその間各班班長には連日の出勤を命じているのだから、少しでも早く片付けなくてはならない。

そうして手早く身支度をした蓮杖が部屋の戸を開けた瞬間、肩に黒い塊が飛び乗った。

「今、いいか」

「……正月初出勤ってとこですね。まさに。一緒に行きますか？」

「……………ああ」
仕方なく、蓮杖は夜一を肩に乗せたまま歩き出す。
屋敷の者は驚いたように目を見開いていたが、蓮杖が頓着しないのを見て何も言わなかった。

「……っていつか、僕夜一さんって普通に呼んでますけど、いいんですか？ 四楓院殿ってお呼びします？」
当主として先輩に当たる夜一。

蓮杖は夜一とこれまでに面識がなかったため、なんと呼んでいいのかわからなかった。

だが、他の当主たちは夜一だの、四楓院夜一だの、夜一くんだの好き勝手な呼び方をしているせいで、蓮杖はほとほと困り果てていたのだ。

試しに夜一さんと呼んでみたところ何も言われなかったためそのまま通したが、やはり迷惑ではなかっただろうか。

「構わぬ」

短く返された返答に、蓮杖はあくびで返した。

「若いもんが、これしきの旅で疲れたか」

「鬼道衆は体力勝負の仕事ではないんです。あんな強行軍、誰だって疲れますよ。……賭けてもいいですよ。うちの上司、絶対今日明日は仕事に来ませんから。筋肉痛で」

「……九頭柳殿は若くないじゃろう」

「仕事柄の問題です。死神さんにはうちの上司より年食ってる人、いっぱいいるでしょう。」

「……お主、それを絶対に四番隊の近くで言うなよ」

「わかってますよ！。世渡り上手が僕のウリなんです」

しばし無言で歩き続けた蓮杖は、おもむろに夜一に問いかけた。

「で、僕に何の用なんです？ わざわざくるなんて」

「後でよい……そこを右に曲がれ」

「はいはい……これで、いいんですよね？」

角をまがった瞬間に、蓮杖は自分たちの周囲に結界を張った。

「隠密機動、ですか？」

「そうじゃのう……四十六室は、儂らが話しておるのを好まぬからな」

へえ、と大した興味もなさそうに蓮杖は返事をする。

今頃、対象にまかれた隠密機動たちは必死になって自分たちを探している頃だろう。

「好まないって言っても、僕等謀反を起こしたりする気なんてさらさらないのになあ」

「起こせるだけの力があるという事じゃ。本題に入るぞ」

「どうぞ」

「一護を見て、どう思った」

蓮杖は小首をかしげて、すぐ隣にある夜一の目から距離をとった。

「それ、問が漠然としすぎてませんか？」

「思った事、何でもよい」

近くに焦点を合わせるのに疲れたのか、蓮杖は前を向いた。

「優しすぎる。世渡り上手とはお世辞にも言えないなるところですかね」

夜一はがくつとうなだれた。

「お主の判断基準はそこか？」

「大事ですよ。世渡りが下手な奴と付き合えば、自分だってそれに巻き込まれる。僕、友人は選ぶ主義なんで」

ああでも、と言い添えた蓮杖を、夜一は間近で見つめた。

「たまにはあんなタイプも悪くない……そう思いはしましたね」

「……ほお」

「これからの彼次第だ。僕だって死にたくは無い。彼に尸魂界の命

運がかかっているって言うんなら、自分の主義主張関係なく彼に手を貸します。でも彼なら、本当に彼の味方になりたいと思う時が来るかもしれない……あくまで、可能性ですけど」

「十分じゃ」

夜一は言うだけ言って、その肩から飛び降りる。

見上げた青年は、恐らく年齢以上の闇をその心の内に秘めているのだろう。

どこか幼馴染に似た瞳を見て、夜一は尻尾を振った。

「わざわざ、済まなかったの」

ぴよいと通りの反対の扉に飛び乗り、疾走していく猫を見送る。

蓮杖は小さくため息をつく、元の道へと戻って歩き出した。

「あなたの部下が言っておった通りじゃのう」

優雅に尻尾を振って枕元に座った夜一に、九頭柳は苦笑した。

「蓮杖くんか。何を言っていたんだい？」

「今日明日は筋肉痛で仕事に来ない、と」

「……若くないんだよ、私は」

あいたたた、と言いながら肩を起こした蓮杖の膝に、夜一はぴよいと飛び乗った。

九頭柳はしばらく無言でその背を撫でていたが、夜一が何も言っていないのを悟って口を開いた。

「聞かないのかい？ 彼の事を、どう思ったかって」

「聞いたところで、答をくださる方では無い」

夜一が敬語を使う数少ない相手が、この九頭柳だった。

当主として、先輩であることもあるのだろう。

だが、夜一が敬語を使いたいと思う何かを、この初老の男はもっていた。

「そうでもないさ。……そうだなあ。優しい子だと思ったよ」

「蓮杖も同じことを言うておった」

「彼はその後にこう言ったんじゃないかい？ “世渡り上手とはお世辞にも言えない” って」

「……」

ずっとその尾で九頭柳の手を撫でる。

九頭柳はその動作に苦笑すると、話し続けた。

「蓮杖くんは、わかり辛いけれど根はいい子だよ。……多分、本質は一護くんによく似ている」

夜一はまた無言で尾を振った。

「私は、彼ならいい王になれると思う。理由は無いけれど」

「あなたらしくもない。勘で動くような人ではないでしょう」

夜一は苦笑する気配を感じて上を見上げた。

しわの刻まれた、優しい顔を見て思わずあくびをしそうになる。

陽だまりのような優しさが、そこには会った。

「ただの勘とは違うな。経験に基づいた勘だよ。……さあ、もう行きなさい。私は休むよ。蓮杖くんの予想を覆して、明日は仕事にいきたいからね」

夜一は無言で飛び降りると、とととと歩いて行った。

部屋を出る前にぺこりと礼をし、器用にふすまを閉めて言った黒猫を見送ると、九頭柳はまたうめきながら横になった。

「お、夜一じゃないか！ 明けましておめでとう！」

近道をしようとして立ち入った十三番隊で、夜一は下から声をかけられた。

「あけましておめでとう、じゃ。浮竹」

「寄っていかないか？ 甘酒あるぞ」

「もらおう」

器用に肩に降り立った黒猫の背を撫でると、浮竹は首をかしげた。

「何かあったかい？ 難しい顔をしているな」

「気のせいじゃ。とつと酒をよこせ」

相変わらずの横暴に、浮竹はその横顔に映った影を気のせいだと思つた。

「あいたたた！ 爪を立てるなよ」

「五月蠅いわ。とつと酒をよこせ！」

「酒、酒、酒、酒。君、どうせ正月にかこつけて飲みまくつたんじゃないのか？」

夜一がまた前足に力を込めると、浮竹からまた悲鳴があがった。

「わかつたよ！ 甘酒あげるから力を抜いてくれ！！ 痛い！」

「とつとよこさぬお主が悪い」

即座に止めた夜一を、浮竹は涙目でにらむ。

「……それで、正月はどうしたんだい？ 浦原のところにもいなかったよ」

雨乾堂の縁側で、夜一は杯に注がれた甘酒をなめている。

「猫の集会じゃ」

素面で返した夜一に、浮竹は吹きだす。

「何だい、それは」

「どうでもよかるう」

絶えず動く夜一の尾を見つめて、浮竹はふいに苦笑した。

「何じゃ？」

「いやあ、猫の姿も様になっているものだと思つてな」

そつと背を撫でられ、夜一は目を逸らす。

「年季が入つておる。なめるな」

「別に侮つてはいないさ」

それからもしばし沈黙が続いた。

池の鯉が跳ねたのを見て、夜一は立ち上がる。

「美味かつた。もう行く」

「……そうか。じゃあな。浦原によろしく」

返事の代わりに尻尾を一つ振ると、夜一は雨乾堂を後にした。

朽木邸に行くか、志波邸に行くか。

しばし逡巡した夜一は、結局屋敷へと戻った、

人の姿に戻り、穿界門を開ける。

勢いよく飛びこみ、抜けた先に広がる冬らしい色の無い青空に目を細めた。

目指す古びた商店に夜一はいくつもの霊圧を感じて、立ち止まる。だがぐつと顎を引くと、再び駆けだした。

世界を、見よう。

一護の代わりに、一護が見るはずだった全てを。

立ち止まっている暇はない。

出来る事を、みつけていかなくてもはいけないのだから。

S 07 繋がる縁 中篇（後書き）

タイトル日本語訳は「黒い尻尾」

文章量が安定しないのは何ででしょう。

えーと、これ以上長くしてもどうかと思ったので白哉と空鶴は割愛しました。

彼らが考えそうなことぐらいは、多分読み手の方のほうがよくわかっていらっしやると思うので。

それでは感想などお待ちしております。

S O 7 繋がる縁 後篇(前書き)

六十五話の数年後、two pendulumsの半年前の正月です。

S O 7 繋がる縁 後篇

a r a y o f l i g h t

あれから、春が来て、夏がきた。

幾度も巡った季節を、記憶だけで正確に数えるのが難しくなったあの年、一護に久方ぶりの“幸い”が訪れた。

「結婚、ねえ」

ひゆう、と蓮杖が口笛を吹くと、一護は照れとそれからきた拗ねが混ざったような表情をした。

「からかうな」

「からかってないさ。よかつたじゃん。おめでとつ」

白哉までもが僅かに微笑を浮かべているのを見て、一護は照れたように頭を掻いた。

その表情の、今までにない緩んだ物に夜一はわき腹を小突く。

「この幸せ者が」

「酒だ酒！ 呑むぞ！」

向かいに座った空鶴の目がやかに輝いたのを見て、一護は焦った。

「呑むのは関係ないっすよね、空鶴さん」

空鶴と夜一は呑み出したら止まらないというのは、これまでの経験でよく見知っている。

毎年正月だ、めでたいぞさあ酒だという二人には、一護はほとほと悩まされていた。

「ああ？ なんか文句でもあんのか？」

「ないっすけど……」

「無いんなら呑むぞ！」

呆気なく白旗を上げた一護に、蓮杖はクスクスと笑う。

「まあた負けた」

「うつせえ」

不服そうな一護だが、やはりその表情もどこか幸せそうだった。それを見ていた九頭柳の表情も、自然とほころぶ。

一度目、そして二度目に会った時、一護は今にも壊れてしまいそうなほど苦しそうだった。

だが、三度目は違った。

白哉が思わず目を見張るほどに、その表情は快活さを取り戻していた。

恐らく、現世に居た頃の一護にあつたならばこんな表情を見ることができたのだらう。

そんな、明るい表情だった。

皇太子になり、その重責もあつたのだらう。

それからはやはり、ただ明るい表情というのは見ることができなかつた。

それでも、今また。

少し方向性が違う気もしたけれど、若い者が明るい表情をしているというのは、やはり彼にとつて嬉しい事であつた。

周りも幸せにするような、そんな表情は、久しく彼の周りでも見れていないことだったので。

少し視線を動かせば、白哉が微笑んでいるのが見える。

愛する者と結ばれるという、その喜びは、五人の中で彼が一番承知している事であつた。

空鶴、夜一、そして蓮杖は未だ未婚。

かく言う自分は貴族らしい許嫁との結婚であつたため、彼の気持ちには少しばかり遠い。

最も、自分の場合はそれが不幸であつたかと問われれば、それは違

うと答えられるのであるが。

そして、と一護に視線を戻す。

この結婚には、恐らく冷静にならなければ気付かない確かな意味もあつた。

「婚姻の儀は、来年になるのかい？」

問いかけると、一護は曖昧に頷いた。

「まだはつきりとは決まっていななんですけど、多分そうなります。

……今は、官の方で調整を」

私事を公事として扱われることに、まだ少し抵抗があるのかもしいない。

だが次期霊王である者の婚儀であれば、国事として扱われるのは当然であつた。

「なら、祝いの品は急がなくてもいいな。時をかけて選びたいものだから」

穏やかに笑う九頭柳に、一護は少し笑つた。

「わざわざ、ありがとうございます」

「選ぶのも、なかなか楽しいものなんだ。祝い事は、やはり多いほうが嬉しいね」

何を贈るうか、そんな風にぼんやりと思ひ描く。

それだけで幸せな気分になれるのは、やはり彼の人柄だろうか。

「祝いと言えば、おぬしに渡そうと思つておつた物がある」

酒だ酒だと未だ騒いでいた夜一が、ふと思ひ出したように言つた。

懐を探り、とりだしたのは一通の、しかし決して薄くは無封筒。

受け取れ、と言われた一護はそれを素直に受け取る。

ずっしりとした重さに眉根を寄せた。

「……これは？」

中身に気付いた四人は、揃って一護を見つめた。夜一が画策していたこれには、四人も特に白哉が、協力していた。

「開けてみる」

一護は、眉間にしわを寄せながらもその封筒を開ける。封すらされていないそれは、ずいぶんくたびれていた。

現世らしい、機械で作られた真つ直ぐで均一なそれを懐かしいと思いつつ、一護は右手で持ったそれを傾け、左手に中身を落とした。

落として、硬直した。

右手から、空になった封筒が音を立てて落ちる。

その手に落ちたのは、片時も忘れた事のない仲間たちの姿を写した、写真、だった。

一番上にあるそれは、結婚式の写真。

中心で幸せそうに笑う眼鏡の青年と橙の髪をした女性には見覚えがあった。

そして彼らを中心に笑う人たちの姿も。

結婚したとは、聞いていた。

できれば自分も共に祝いたいと思った。

でもそれは叶わないことで。

でも諦められるかと聞かれれば、それは難しくて。

ぐちゃぐちゃになった一護の思考は、彼の体を硬直から解き放たなかった。

長くその写真を見つめたまま動かない一護の手から、白哉がそつと写真を取り上げる。

それを目線で追った一護を無視して、白哉はそつとその二桁は優に

超えるであろう写真を順に机の上に広げていった。

例えば、それはルキアが部下に指示を飛ばしている姿であった。

例えば、それは恋次が白い羽織を纏った瞬間だった。

例えば、それは啓吾とたつきが喧嘩している様子だった。

例えば、それはチャドが治療をしているところだった。

例えば、例えば、例えば……

いくら眺めても尽きぬそれらを見て、一護はその目を手で覆った。

一時に目にするには、明らかに多すぎる量。

でも到底見る事を止められるものでは無くて。

瞬きを忘れたせいだろうか、その目から一筋熱いものが零れた。

九頭柳はそつと目を閉じたし、蓮杖は庭へと視線を移した。

空鶴は天井を見上げ、白哉は自らの手に視線を落とす。

ただ夜一だけが、その一雫をじっと見つめていた。

「おぬしが、こちらに縁^{よすが}を得るまではとっておった」

言い訳のように付け足されたそれに、一護は苦笑する。

それは、それはつまり。

今迄ずっと、これを持って王土へきていたということか。

封筒がくたびれて、今にも破れそうになるほど、長い時間。

増え続ける中身をただじつと蓄え続けたそれは、役目を終えた事に安堵したように静かに床に身を伏せていた。

きつと、自分が現世を恋しく思う事をどこかで恐れていたのだろうか。当たり前だ。

少なくとも、今迄自分はやはりどこかで帰りたいと願っていたのだから。

結婚するというのは、もうここに身を置くと誰に対しても宣言する

という事。

きつと、この五人はずつとこのときを待ってくれていたのだろう。

「どつじゃ？」

その表情はひどく誇らしげで、嬉しそうなのに、目には一抹の不安が映っていた。

それを払拭できればいい。

一護はそう思って、少し赤い目尻で精一杯笑った。

「ありがとう。……すっげえ、嬉しい」

白哉が、そつとルキアの写った写真を見つめる。

背筋を伸ばし、誇らしげに班を率いる彼女の姿を、ずつと見せたかった。

そして逆の事も願った。

この、今の一護の姿を見せてやりたいと。

色んな事があつた。

でもそれら全てを乗り越え、今ようやく一人の人間としての幸せを掴んだ一護の姿を、見せてやりたい、見てほしいと。

叶わないこと。

以前の自分であれば願う事さえしなかったはずだ。だが自分を変えられた。

他ならぬ、一護によって。

だからこの願いが、いつか届けばいいと思った。

思考の海から浮き上がった白哉が聞いたのは、夜一と一護の会話だった。

「これは、いつの?」

「卒業式じゃの。泣いたのは井上と浅野だけじゃったわ」

「はは。たつきに叩かれてら……こっちは?」

「石田と井上の娘が生まれた時じゃの」

「ああ! かぐやちゃんっていうんだっけ?」

「そうじゃ。こっちは一歳の誕生日じゃの」

一枚一枚、これは何だと訊ねていく一護の霊圧は、表情以上にひどく穏やかだった。

感情とは、こつも霊圧に影響するものかと、霊圧とは、こつも暖かであるのかと、白哉は驚く。

「こっちは?」

「これを撮ったのは僕ではない……白哉坊。これはお主のじゃろう?」

一護が驚いたように見てくるので、白哉は無然とした表情になる。

「私では、駄目か」

「いや……驚いただけ。えっと、これはいつのなんだ?」

慌てた一護に少しだけ気分を良くして、ルキアの写った写真を見る。

「五席に昇進したときだな……祝いで、宴を張ったのだ」

「へえ。道理で皆酔いつぶれてるはずだ」

一護は、どちらかと言えばこの酔いつぶれた面々を撮影する白哉を想像して笑えた。

だがそれは黙っておく。

うっかり口に出せば、桜が散るかもしれない。

「みんな、元気そうだな」

一通り聞き、一護がぼつりとつぶやく。

細められた目は、深い安堵の色をしていた。

「……よかった……」

安心したのだろう。

脱力したように肩を落とした一護は、皇太子では無く一人の青年に戻っていた。

その様子を見た夜一は、内心ほっと息をついた。

ようやく、一護に何かをしてやれた気がした。

「今度、……次の、母さんの命日に、一日だけ現世に行ってきたらどうだって陛下が言ってお下さってるんだ」
ぼつりと、咳くように一護が言う。

白哉が驚きに目を見開くよりも早く、一護は言葉を次いだ。

「みんなに会う事は、出来ないけどさ……凧の事もあるし、できれば甘えようかと思ってる」

五人はさっと目を見交わした。

毎年、あの日には誰もがあの墓を訪れるのだと、告げるべきか。

だが夜一が首を振ったのを見て、蓮杖は口を閉じる。

一護は下を向いたまま、話し続けた。

「……会えはしないけど、でも写真だけでも見れて良かった。あいつらは怒るだろうけどさ」

一方的に、自分だけが彼らの消息を知っていたら、きっと彼らはずるいというだろう。

心配しているのは、彼らも同じ……いや、彼らの方が上だということに。

「……そうか」

夜一は、その日の習慣についての事実を伏せた。

聞かれた訳ではないのだから、嘘をついている訳ではない。

一瞬でも、互いの姿を見ることが叶えば。
ささやかな願いは、五人とも同じだった。

後に、彼らはその判断を死ぬほど後悔するほどになる。

あの日、泣きながら帰って来たルキアを見て。

次の日、あまりの衝撃に仕事を休んだ織姫を見て。

そして何より、次の正月の、少し影の落ちた一護の顔を見て。

微かな、恐らくそうと思わなければ気づかないほどの微かな影。

だが心当たりがあるゆえに、五人は気づいた。

すまぬと詫びた夜一に、一護は優しく笑った。

俺があんたたちの立場だったら、やっぱり俺もそう思うと思っ
から。

その時の言葉には、何も裏など無かった。

ただ本当に、心からそう思っていたのだろう。

だから、この日をどれだけ待ちわびたことか。

夜一は、漸う白み始めた空を見て、ぐぐつと伸びをした。

子供でもあるまいに、一睡もできなかった自分に苦笑する。

だが、それは自分だけではないと不思議に確信していた。

残る四人の当主たちも、そして再会を待つ仲間たちも、時を傍で待
ち続けてきた護衛士と家族も。

髪を高い位置で括り、夜一は門を開ける。

そこに集まりつつある面々を見て、夜一は内心そつと笑んだ。

刻は、
近い。

S07 繋がる縁 後篇（後書き）

タイトル日本語訳は「一筋の光」

漸くS07完結です。

そして次話からいよいよ次章突入です。

その前に一つ補足を。

といっても大したことではありません。

この外伝のサブタイトルの読みのことです。

「つながるえん」 そう読んでいらっしやる方が多いのではないのでしょうか。

ちなみに今回の話では“縁”を“よすが”と読ませましたが、タイトルでは“えにし”とぜひ読んでください。

ややこしくてすみません。

「つながるえにし」……えんとはちょっと違う意味合いを持つ気がしませんか？

そしてもう一つ。

こちらは補足ではありませんが、明日はちょっと更新をお休みさせていただきます。

特に理由もないのですが、強いて言えば息切れしそう、です。

さすがにここまで連続更新は頭と体とそして睡眠時間に負担が……

（笑）

とか言ってまた平然と連続更新を始めるので、その時は宜しくお願いたします。

それでは感想などお待ちしております。

第六章の開幕です。

時間軸は、第五章の直後です。

「pendulum go to the last truth」

狂わされた振子の全ては

その足で真実へと歩み入る

その先にある邂逅を

幸いのものと疑わず

見目と共に甦る

過去に封じし戦の記憶

かつての同士を呼ぶ声に

肚の膿傷じゅうけいは痛みを発す

されど振子は歩みを止めず

目指す都に解こたえを求む

記憶を信じ絆を持ってど

時の刃に容易く裂かれ

知らぬが故の苦しきを

受け止める事は易からず

真^ま白^{しろ}の世界に矛盾を見つけ

戦いの意味を問いゆく者ら

真偽の末を知り得る事は

彼^かの方を除き在らぬと知らず

r u t h
p e n d u l u m s
g o t o t h e l a s t
t

タイトル日本語訳は「振り達は最後の真実へ」

ついに第六章が始まりました。

話数もいよいよ七十番台になるうとしています。

あと少し、がんばりますので、どうぞ最後までお楽しみください。

toward the friend (前書き)

六十話、六十六話の直後です。

toward the friend

雨竜達が集合場所になっている四楓院邸に到着すると、そこには徐々に王土へ行く面々が集まっていた。

すぐ近くの門が開いたので、織姫が視線をそちらへと向ける。

「あ、夜一さん！ おはようございます！」

「揃ってきたようじゃの……桐生達はまだか」

夜一はぐるつと辺りを見渡し、集まっている面々を確認した。

織姫もそれに倣い、確かに夏梨たちがいないのに気づく。

死神たちもそれには気づいていたようで、きよろきよろとあたりを見渡していた。

「おはようございます！」

後ろから少年の声が聞こえ、織姫はふり返った。

「一貴君。おはよう」

駆けてきた一貴は、やはり昨日と同じ外套を着ていた。

後ろを歩いてきた夏梨たちを認め、織姫は微笑む。

「おはよう、夏梨ちゃん」

「おはよー」

はつらつとした夏梨だが、その横に居る冬獅郎と桐生は揃ってあくびをした。

「何だ、二人そろって寝不足か？」

少し離れたところに立っていた浮竹が、歩きながら二人に声をかける。

「護衛士全員がいつぺんに寝る訳にはいかないでしょう。……二交代だったから、あんまり良く寝てないのよ」

いいつつ桐生は目をこする。

よくよく見れば、雷雨と竜もまた眠たそうだった。

「お疲れ様。でも、明日明後日は非番でしょ？ もうちょっとだから頑張つて」

夏梨が声をかけると、桐生はまたあくびをしながら頷いた。

「そうね。ま、非番なんてあつてないようなものだけど、まあいいわ……全員揃つてるの？」

「俺らが最後みたいやな」

瞬歩で場に降り立った平子が、ざっと数を数える。

「ぴつたり二十や」

「そう。……はい、じゃあちよつと話聞いてください！ ざっと今日の行程説明します！」

まるで遠足の様な言い草に、夏梨は軽くふきだした。

気分がどことなく浮つているせいだろうか、昨日から些細なことで笑ってしまう。

「今から王土へと向かいます。早ければ午前内に王宮に着くことができますので、そのつもりで」

午前中と聞いて、ルキアの顔が輝いた。

もう数刻の内に、一護に会う事が出来る。

これまでの長い時に比べれば短い時間なのに、ひどく待ち遠しく感じられた。

「出発の前に、確認をしますね……死神の皆さんは、斬魄刀を置いてきましたか？」

「一つ目、と桐生が指を折る。

浮竹は、何もない左腰に手を当てた。

王宮に立ちいるのだから、原則として斬魄刀を持っていくことはできません。斬魄刀は総隊長に預けてください。

昨日の説明で、桐生はそう言った。

確かに、王宮に立ちいるのに武器を持つていくのは失礼にあたるだ

ろう。

何より、威嚇行為ととられてもおかしくない。

同じ理由で、織姫のヘアピンと雨竜の滅却師としての武器も総隊長に預けるよう言い渡されていた。

それぞれの肯定の返事を得ると、桐生は人差し指を折った。

「それじゃ、二つ目。これから配る物を左手首に装着してください。霊力を封じる呪具であると同時に、あなたがたの身分証明にもなります。決して外さないように」

死神の能力は、斬魄刀だけでは無い。

鬼道や、そして高い身体能力を使えなくするために、霊力もまた封じるよう求められていた。

桐生が取りだしたのは、細かい装飾の施された金属性の細い腕輪。

言われた通りにはめると、それは鈍く光って装着した者に合った大きさへと変化した。

自分の霊力が封じられたのを感じ取って、チャドは久し振りの感覚を味わい、目を閉じる。

霊圧を感知することもできなくなったため、世界がひどく静かに感じられた。

「これは、またこちらに戻って来るまで決して外れません。つまりそれまで霊力も封じたままです。ということまで三つ目」

桐生は中指を折ると、この上ないほどの笑みで信じられない事を言い放った。

「皆さんは現在ただの無力な魂魄と同じ。つまり、虚に対抗する術がないという事です。あちらに行くまでの間、虚がでることもありませんが、もし出くわしちゃった時は決してその場を動かないで下さい。一歩たりとも、です」

ばちばち、と浮竹は瞬きをした。

虚が出る、というところまでは難無く理解できた。

だが最後のところが問題だ。

「出くわしたときはその場を動かなくなって……動かなかつたら喰われるじゃないか」

浮かんだ疑問をそのまま口にする、桐生は苦笑する。

「勿論、虚自体には私たちが対処します。要するに下手に動かれたら邪魔なだけって事。いい？」

そういうことか、と雨竜は心中で納得した。

桐生というこの女性は、ついつい言葉を省く傾向にあるようだった。

「注意事項はこの三つです。じゃあそろそろ……あら、総隊長」

桐生は、集まった面々の後ろにある門に人影を認め、声をかけた。

悠然とそこから歩み入って来たのは、他ならぬ元柳斎。

死神たちがそれぞれに礼を取る中で、雀部を従えた元柳斎は護衛士と、そして夏梨と一貴の前に立つ。

「どうか、東宮によろしくお伝え下され」

そう言つて夏梨に差し出したのは、一通の書簡。

夏梨はそれを受けとると、懐へと収めた。

「確かにお預かりいたしました」

それを見た元柳斎は、雷雨へと視線を移す。

「頼むぞ」

元柳斎が、雷雨たちにこう言うのは何度目の事だろうか。

だが、その一言で全て伝わった。

雷雨が黙然と頷き、桐生達もまたそれに倣う。

夏梨はざつとあたりを見渡すと、己の斬魄刀へと手をかけた。

それを見た元柳斎は、すつと目を細める。

これを見るのは、一体いつ以来だろうか。

「一貴、ちよつと離れてな」

夏梨は集団から少し離れ、周囲に十分な広さを得る。呼吸をゆっくりと整えると、その斬魄刀を抜き放った。

ルキアは、何も言えずにそれを見ている。

声をかけてはいけないのだと、本能に近いような部分でそれを感じていた。

しんと静まり返った朝の空気が、鋭さを増して夏梨の下へ集まっている気がした。

「 解錠」

清冽な空気を裂くように、夏梨の声が響く。

真っ直ぐに突きだされた斬魄刀を中心に、まるで空間を裂くように現れた門を見て、ルキアははっと息を飲んだ。

何と、壮麗なものなのだろう。

穿界門とは何もかもが違う。

これが王土へと繋がるものなのだと知らなくても、見ればそうと察することができらるだろう。

それほどに、その門は壮麗だった。

「……なんや、えらい呆気なく開いたなあ」

漸く口をきけるようになったのか、平子がいつそ呆れたように呟く。そう、夏梨はただ斬魄刀を突きだし、「解錠」と言っただけ。

死神が尸魂界への穿界門を開くのと同じに、彼女は王土への門を開

いて見せた。

「死神の帰る場所が尸魂界であるのと同じで、王族が帰るのは王土……家に帰るのに大層な鍵が必要だなんて、そんな馬鹿な話があるわけないでしょ？」

振り返った夏梨は笑う。

なるほど、言われてみれば確かにそうだ。

「じゃあかて、一護はそんなん出来へんかったんちゃうか？」

至極まっとうな疑問を平子が述べる。

確かに、斬月はこの門はおろか穿界門さえも開けなかったはずだ。

「やりかたを知らなかっただけよ。ちよっとコツがいるの。これ得意げな夏梨に、冬獅郎は小さくため息をついた。

「そんなことはどうでもいいだろ。さっさと行こうぜ」

冬獅郎は門の前まで歩くと、夏梨を振り返った。

「ほら」

言外に早くしろと言われて、夏梨は眉根を上げた。

「わかったよ。じゃ、行こう。ちゃんと付いてきてね」

触れると、門は轟音を立てて開いた。

夏梨が一番に、次に冬獅郎、一貴、桐生が続き、後を追うようにルキアたちが門へ飛び込んでゆく。

最後に残った雷雨と竜も、元柳斎に一礼をして門へ飛び込んだ。

閉まると同時に跡形もなく消え去った門を見て、元柳斎は杖を持つ手に力を込めた。

「気をつけるよ……あの地は、“こわい”ぞ」

それを聞いた雀部が、何事かと元柳斎を見る。

だが彼はそれに答えることなく、ゆっくりとその場を歩み去った。

雀部は王土へと繋がる門があった場所を見ると、そこへ一礼する。だがそれも一瞬。

彼はすぐに頭を上げ、元柳斎の後を追った。

「断界とは違うんだな」

恋次が左右を確認する。

その通路ともいうべき場の壁は、断界のようにどろりとした拘流に覆われておらず、思いのほかじっかりとした面を晒していた。

「今は私と一貴がいるからね」

それに答えたのは夏梨。

彼女は左手で鞘を握りしめたまま、先頭を歩いていた。

「王族が同行していなければ、侵入者とみなされて拘流が出てくる。俺らが普段通るときは、こんなにしっかりとした道じゃない」
半ば愚痴っぽく冬獅郎が付け足す。

聞けば、年に一度か二度は尸魂界へと来ていたらしい。

「ええ！？ だったら何で声かけてくれなかったんですかあ！？」

「あのなあ、任務中なんだぞ。今回だって特例措置なんだ。普通、知り合いが生きている間は、尸魂界に直接関わることはできねえ」
冬獅郎がきつぱりと付け足すと、乱菊は不平そうな顔をした。

「いいじゃないですかー。ちょっとぐらい」

冬獅郎のこめかみがひきつったのを横目に見て、桐生は溜息をつく。

「冬獅郎、短気は損気って言うでしょ。……それに、松本さん。あなたもあなたです。くれぐれも軽はずみな言動は慎んでくださいね。私たちは零番隊とも呼ばれますが、護廷十三隊とは全く異なる組織。そちらの常識はこちらでは通じません」

淡々とした桐生の声に、ひよ里は身を強張らせた。

何が原因かはわからないが、怒っている。

それは浮竹も感じていたようで、桐生に質問を發した。

「どういう意味だい？」

「どうもごうも、そのままだ。……護廷十三隊の役目は、瀟靈挺の守護と虚の討伐、整の魂葬。だが王族特務は違おれたちう。靈王をはじめとする王族の守護……これだけが俺らに課せられた役目だ」
桐生に問いかけたのに、答えたのは冬獅郎だった。
だが、冬獅郎が言ったことのなかに、一つだけ納得のいかないことがある。

「ですが、大虚の討伐は王族特務の管轄だと教本に」

「過去にたかだか大虚の討伐に王族特務が出張った事例はねえ。確かに、四十六室は必要に応じて派遣を要請する事は出来るが、それが使われた事例は今迄に一つもねえぞ」

ルキアが大きく目を見開く。

確かに、今迄大虚が出てても上位席官で対処するばかりだった。

王族特務の管轄と聞きながら、それを目にした事は一度もない。

「多分、私たちはあなた達が想像しているのとはずっと違った組織なの。例えば、そうね……隊に規則が一つしかないと言ったら、驚くんじゃない？」

「一つ!? たった？」

恋次が驚く。

隊ごとに決められた規則は、大まかな部分が同じとはいえその数は百を超える。

もちろん取るに足らないものもその中に含むが、重要なものだけでも五十は易く越えるだろう。

「そう、一つ……って言っても、それが一番大事だというだけで、それに反しない限りということを決められている細かいものはあるんだけどね」

法律と条例のような関係だろうか。

雨竜が卑近な例を探していると、おもむろに一角が口を開いた。

「で、その一つってのは？」

問われた桐生と冬獅郎は、一瞬だけ視線を交差させる。誰も気づかなかったが、最後尾を歩く雷雨と竜もまた同じだった。

「王を護れ」

あまりにも簡潔なそれに、一角は一瞬キョトンとした。十一番隊ですら、ずいぶん簡略なものとはいえ規則があるというのに。

しかもその規則は、どれも今聞いたものより長い。

静かに言いきった冬獅郎は、補足をするために再び口を開く。

「それが全てだからな。うちの隊長の信条っていうか、俺たちに対する教えみたいなのに、『自らに王の刃、盾として以外の意味を求めな。そしてその意味を決して疑うな』ってのがある……俺達は王を　ひいては東宮をはじめとする他の王族を護るために存在する。それ以外に意味はねえよ」

厳しい口調に、織姫はどこか冷たいものを覚えた。

「それは、……黒崎君も、そういうの？」

迷いながらの言葉に、桐生は首を横へ振る。

「言われたことがあるかって意味なら、違っつて言うわ。でも私たちが考えるのはそっだし、それは一護君も同じなはず。そっでなければ困るわ」

織姫には、どうしてもそれが想像できなかった。

誰よりも仲間を大切にする一護が、人をまるで道具のように扱うその言葉を受け入れるというのが。

「私が昨日言ったのは、そういう意味ですよ」

不意に声をかけられ、織姫は歩きながら振り向く。

九頭柳はあらぬ方をみながら、疑問を持つ者たちへと語りかけた。

「彼は皇太子……いふなれば、最も靈王に近い位置だ。その意は誰よりも正しくなくてはならないし、王族特務を使って、王土をはじめとする様々な場所を統治する。私の見る限り、彼はそれを全て上手くやっている。……あなた方の仲間としてそれが正しいのかは、言いかねますがね」

織姫は何かを言おうとしたが、黙って口を閉じた。

王土の事は何一つよく知らないけれど、九頭柳の言いたい事はよくわかる。

三十年の時が経ったのだ。

それだけ、彼も変わっているのだろう。

自分にできることが何かを考えるよりも、どこまで踏み込んでよいかを考えるのが大事なんだろう、と織姫は痛切に感じた。

toward the friend (後書き)

タイトル日本語訳は「仲間のもとへ」

どうして自分は話を重い方へ転がすんだろう・と最近疑問で仕方がありません。

いよいよ次話では王土へ到着です。

彼らがそこで何を見るか、それは六十七話の詩から少しばかり想像することができるかと。

それでは感想などお待ちしております。

t h e w a l l o f y e a r s (前書き)

六十八話の直後から始まります。

t h e w a l l o f y e a r s

「さあ、出口よ！」

桐生が、遠くに見える光を示して言う。

拘流に追われることもなく、ただ歩いてきた一同だったが、その声を聞いた途端に誰からという事無く走りだした。

徐々に大きくなる光、それは薄暗い通路を内側まで広く照らし、その光の温かさは他でも無く一護を思い起こさせる。

夏梨が、冬獅郎が、桐生が、入った順番に、その光へと飛び込んでゆく。

だがその光の先で目にしたものは、雨竜達の誰も予想していなかったことだった。

「ここが、王土……」

呆然と呟くルキア。

だがそれは感動よりもむしろ疑問の色を強く呈していた。

光の先に広がっていたのは、見渡す限りの白い砂漠だった。

余りにも虚圏、それも太陽があるために虚夜宮の内側に酷似したその光景に、それを見たことがある者は誰もが眉間にしわを寄せる。

二度と行くことのない、そうであってほしい彼の地に似ているのだから、それは当たり前だ。

道を間違えたのではないか、何か手違いがあったのではないか、そんな疑問が脳裏をよぎる。

だがそれは、続く夏梨の言葉によって否定された。

「ようこそ、王土へ」

夏梨は、そう言って少し笑う。

自分を見つめる視線の厳しい理由はわかっているのだろう。

夏梨は、そのまま話し続けた。

「虚圏に似ているんでしよう？」

凶星を突く発言に、雨竜は小さくため息をついた。

「ああ。これは一体どういうことなんだ？　ここが、本当に王族の住まう土地なのか？　だとしたら、余りにも　」

「残念。誰が何を言っても、何処に似ていようとここは王土。……ま、正確に言うならその外縁かな。もつと行くと、ちゃんとした土地があるんだ」

そう言われても、そこは見渡す限りの砂漠。

いくら目を凝らしても街らしきものを認める事は出来ない。

「王族を護るための工夫の一つよ。外からの通路は、誰が開けようと必ず外縁の砂漠へとつながる。直接街や、まして都につながる事は無いわ」

「……なるほど」

言われてみれば、確かに有り得ることかもしれない。

だがそうすると、腑に落ちないことがあった。

「だけど、午前中には到着できるって……」

花太郎が不安そうにあたりを見渡す。

地平線の果てまで砂漠だというのに、午前中に見えもしない都に着くことなんてできるはずがない。

「大丈夫。言ったでしょ、王族を護る工夫の一つなんだって」

夏梨は言いながら、斬魄刀の鞘を握りしめた。

「砂漠自体はそんなに広くない……まあ、人の足で踏破しようと思えば一週間はかかるだろうけど、それだけ。街の周りには結界が張つてあるの。外から感知できないようにする結界がね」

浦原が興味深そうにあたりを見渡す。

確かに、街の存在は何処にも感じない。

よく考えれば、それは確かに妙なことではあった。

確かに彼らは今、霊圧を封じられていて、他の霊圧を感知することもできない。

だが、彼とて昔は隠密機動に在籍していた身。気配というものにもまた、敏感であった。

自分の腕が鈍ったとは考えにくい。

ならば、街の存在自体を感知できなくする結界の存在を信じる方が、余程容易かった。

「その結界が有効でないのは、王族と護衛士だけ。つまり皆さんには見えていないけれど、私たちにはちゃんと街が見えているから安心して。結界の内側にさえ入っちゃえばちゃんとわかるようになるから」

はあ、と何とも気の抜けた返事をしたのは浮竹だった。

先ほどから驚く事ばかりで、いよいよ理解が追いつかなくなってきたのかもしれない。

「夏梨ちゃん、そろそろお願い」

頃合いを見計らって、桐生が夏梨に声をかける。

夏梨はそれに頷くと、一同から少し距離を取って砂地に手をついた。

「いた」

小さく呟いた声は、誰の耳にも届かない。

だがほどなくして聞こえ始めた轟音に、誰もが夏梨のさらに向こうの砂漠へと視線を向けた。

「……あれは」

チャドが大きく目を見開いたのは、かつてそれを見たことがあったから。

反射的に身構えた死神たちとは対照的に、護衛士は驚く事もなくそ

れを見つめている。

「あれは、……虚……なんか？」

ひよ里が自信なさげに呟いたのは、その大きさと姿ゆえだった。

数十メートルに及ぶであろうその体躯、そして鯨といも虫を足して二で割ったような姿をした虚が、轟音を立てて夏梨へと向かって来ていた。

だが夏梨は一向にその場から動かず、砂漠に手をついたまま。危ない、と誰かが叫ぼうとした瞬間、その虚は動きを止めた。

夏梨からわずか数歩の距離。

高さこそあれど、虚にしては少しの身じろぎで夏梨にその牙をむくことができる程の距離に、死神たちは大きく息をつく。

夏梨は立ち上がると、その虚へと歩み寄った。

すうっと、まるで犬が飼い主にそうするように頭に夏梨へと差し出す。

夏梨もまた飼い主がそうであるようにその体にそっと触れた。

「わざわざありがとう、デندن」

ぐうう、とまるで地鳴りのような甘え声でデندنと呼ばれた虚はそれに応える。

驚きのあまり口が聞けなくなったままの一同に、冬獅郎はどこか自嘲気味に言った。

「虚圏では、虚が虚を従える……虚に出来て、全ての魂魄の頂点に立つ王族に出来ないことがあるわけがない。そういうことだ」

とんとんとデندنの鼻面を軽く叩いた夏梨を見ながら、桐生は肩をすくめた。

「ま、何回見てもドキッとはするんだけど」

その声に夏梨は振り返り、苦笑した。

「一兄だつてやるじゃん。凜姉も、白羅姉も、みんな」

「みんながやっているのと慣れるのは関係ありません。……で、載せてくれるって?」

「一兄の友達なら仕方ないってさ」

桐生に做うように肩を竦めてみせた夏梨に、雷雨が豪放に笑う。

余りにも大きなその声に驚いたのか、雛森がびくりと肩を震わせた。

「そりゃあいいじゃねえか。有り難く載せて貰おうぜ」

「……乗るって、これにか!??」

一角が、とんでもないという風にデンデンを示す。

死神である彼らにとって、虚に乗るといふのは抵抗があるのかもしれない。

事実、以前バワバワに乗ったことがあるルキアと恋次を除く死神は、皆揃って嫌そうな顔をしていた。

「乗らなきゃいつまで経つても着けないよ。言ったじゃん。人の足で踏破するには一週間はかかるって」

そう言われてはぐうの音もでない。

どこか悔しそうな死神達に、一貴は不思議そうな顔をしていた。

結局乗るしかないと諦めて、護衛士の力を借りてその丘のような背へと登る。

視線は先ほどよりも高くなったが、やはり街を見つけることはできなかった。

程なくして走り出したデンデンは、風を切るようにすると砂漠の上を征く。

「ねえ、さつき黒崎君の友達なら仕方ないって言ったって言ったけど、言葉わかるの?」

ふと気づいたのか、織姫が夏梨に問いかける。

「何となく、ならね。さつき、一兄の名前言ったらこいつちよっと喜んだから。載せてって言ったらすごく嫌そうな感じだったのに」

それが不服なのか、夏梨は唇を尖らせる。

「まだ馴れない？」

「こいつが私の命令に従うのは、それが一兄の命令だからだよ。未だに私の言うことなんてちっとも聞かないもん」

長く伸びた髪を弄んで、夏梨は視線をデンデンの頭の方へと向けた。

「どういうこと？」

「こいつは、一兄の虚なの。一兄はお父さんから譲り受けたんだけどね。私はこいつになめられてるからさ、私の命令だけだったらこいつはただの虚と変わらない。本当に言うことを聞くのは一兄の言葉だけだよ」

そつと背に手を置くと、人とは明らかに違う霊圧の流れが伝わってきた。

その感覚に慣れることは、これからも出来そうにない。

多分、デンデンが自分に従うことがないのと同じくらいに。

「一護の虚って、どういう意味だ？」

次は、恋次が質問した。

確かに、夏梨は一兄の虚だと言った。

それは、虚を所有しているという意味か。

「所有とか、主従とか、そういうものじゃないんだけどね。……私にも上手く言えないんだけど、うちでは移動手段としてよく使われてることなの。一人一人に、それぞれ虚がある。私はまだいないから、こつやつて一兄から借りてるけどね。一兄は普段使わないからさ」

微妙に答になっていないそれに、浦原だけが納得できたようだった。死神達は、理解することを諦めたいらしい。

虚を退治する彼らにとっては、理解できない部分もあるだろう。

デンデンは、相変わらずひたすら砂漠を疾走していた。

冬獅郎はその頭の近くに乗り、じっと目を瞑っている。傍らに置かれていた氷輪丸を握る手に僅かに力がこもったのを、桐生は見逃さなかった。

「来た？」

「ああ」

短い問いに、短い返事。

二人はそれだけで互いの意思を確認すると、ある一点へと視線を向けた。

僅かに地平線が乱れているのを見て、乱菊は目を細める。目を凝らした先に映ったのは、虚の大群だった。

霊圧がわからないから、その強さを測ることはできない。

だがその姿かたちは、獣というよりもむしろ

「まさか、最上級大虚ですか……！？」

その声が僅かに震えを帯びたのは、あの戦いを思い出したからだ。

あれほどの虚となれば、いくら隊長格といえどそうそう対峙する事は無い。

それが、大拳して押し寄せてきている。

背に冷や汗が伝うが、目は虚を見つめたまま。

傍らに立つ冬獅郎が片足を引いたのを見て、乱菊はようやくその表情を見た。

「そつだ。……あれだけの数は、面倒だ」

そつという割には、あまり数に頓着していないように見える。

だが乱菊がそれを指摘するよりも早く、冬獅郎は身にまとった外套を脱ぎ捨てた。

「邪魔だ……持ってる」

布を押し付けられ、その意味を理解出来るよりも早く冬獅郎はデンの背から飛び降りる。

桐生も外套を脱ぎ棄て、後を追うように目の前から消えた。

「…………無理だ」

誰かが小さく呟く。

そう、相手は最上級大虚。

いくら隊長格といえど、相手の実力はその更の上。

その大群を迎え撃つなど、いくらなんでも

思わず立ち上がろうとした浮竹の肩に、ぐっと力が加わる。

その源を追えば、雷雨が強く浮竹を抑えていた。

「何をしているんですか…………早く、彼らの加勢に！」

見れば竜もその場を動いていない。

冬獅郎と桐生はすでに斬魄刀を抜き放ち、もう目前に迫った群れを迎え撃とうとしている。

「最上級大虚なんでしょう！？ たった二人で相手をするなんて無理、雛森が続けようとした瞬間、ふいに音がやんだ。」

最初は、デンデンが動きを止めたのかと思った。だが違う。

デンデンが動く音は、未だ鳴り続けている。では何の音が。

その正体に気付くより早く、弓親の呆けた顔が目に入った。

「…………え？」

消えたのは、群れが立っていた音だった。

では何故消えたのかと問われれば、それは目の前の光景を指すより他ない。

目の前の、たった二つの影を前に崩れゆく群れを指すしか。

二人の動きは、戦いというより舞をみているかのようだった。

一歳の無駄がないその動きは、互いの動きも含めて完璧に組み込まれた一つの流れのよう。

背後の敵を避ける事はしない。

なぜならそれはもう一人が掃うから。

横からの攻撃を防ぐ事はしない。

なぜならそれはもう一人が弾くから。

互いに絶対の信頼がないと不可能なその動きは、戦いを経験したところのある彼らの目を強く惹いた。

それが最上級大虚であることさえ忘れそうなほど、その群れは容易く裂かれてゆく。

冬獅郎が氷輪丸を一閃させれば、桐生の放つ鬼道が仮面を砕く。

桐生が白打で相手を吹き飛ばせば、そこに待ち構えるのは冬獅郎の操る鬼道。

「加勢なんて必要ねえよ。元々、俺等は二人一組で戦うよう訓練されてんだ。下手に加勢する方が、余程動きを乱す」

雷雨の音が、どこか遠くで響く。

何か出来の悪い見せものでも見せられているような気分がして、乱菊はずるりと体の力を抜いた。

やがてその群れは完全に沈黙した。

とん、と二人が軽く背に降り立つと、デンデンはその速度を上げる。戦いの間は、僅かだが速度を落としていたようだった。

「上着、ありがとな」

乱菊の持つ布を冬獅郎が引っ張ると、それは容易く腕から抜け出た。呆然と自分を見上げたままの乱菊を見て、冬獅郎は眉間にしわを寄せた。

「どつした」

再び外套を纏おうとしていたその手をとめて、乱菊の目の前にしやがみ込む。

何を言おうとしたのか、乱菊は口を開けたり閉じたりを繰り返したままで、埒が明かないと判断した冬獅郎はもう一度問いかけようとした。

「……驚いたよ。これほど腕は上がるものなんだな」

一番最初に硬直を解いたのは、やはりというべきか浮竹だった。

「王族特務を侮ってもらっちゃ困るわね。……そうよ、これが私たちの実力」

何でも無い事のように桐生が言うと、浮竹が苦笑した。

「本気を出してはいないじゃないか。……正解どころか、始解もしていない」

その言葉に、漸く乱菊が我に返る。

「……反則ですよ」

漸く発されたのは、たったそれだけだった。

「どういう意味だ？」

「そのままです。……すつごく強くなってるし、背も伸びたし、髪も伸びて何かカツコ良くなってるし」

ぶう、と乱菊は頬をふくらます。

本調子に戻って来たらしい乱菊を見て、冬獅郎はその場に腰かけた。

「それが反則と言われる意味がわからねえな」

「いーですよ、別にわからなくなつて。ねえ雛森？」

「そうですね、乱菊さん。別にわかつてもらわなくなつていいですよね」

驚いていたと思ったら、次の瞬間には何やら機嫌が悪い。

その緩急にもいい加減慣れてきていた冬獅郎は、二人を無視することに決め込んだ。

だがその一方で、未だに驚いたままの者もいた。

「日番谷隊長……」

「だから、俺はいつまで隊長なんだ」

辟易したように、一角に対して返事をする。

だが一角にはその文句にも応えることなく、ただ黙然と手を握りしめた。

見れば周りも似たようなもので、冬獅郎は僅かな苛立ちを感じる。

言いたいことがあるなら、はっきり言え

そう言おうとした瞬間、冬獅郎は後ろからかけられた声に振り向いた。

「冬獅郎君の着てる服、死覇装じゃないんだね」

井上がそつとその袖をつまむ。

確かに、よくみればそれは死覇装では無い。

だが死神にしてみれば今はそんなことはどうでもよく、ただその強さへの驚きばかりが先に立っていた。

「そういえば、昨日は一度も上着脱がなかったもんね……この服だと、目立つから？」

「そつだ……同じ黒でも、形が違うからな」

冬獅郎は改めて自分の着る服を見聞する。

大まかな形はたしかに死覇装と一致する。

だが、死神と並び立てば、やはりそれは奇異に映った。

「王土の文化に合わせた結果だろうな。龍は、王族を示す印でもあるし」

雷雨が、冬獅郎の首元に銀糸で施された小さな龍の刺繍を示す。

「何より違うのは、制服がこれ一つじゃないってことだ」

続けた雷雨に、織姫は首をかしげた。

「どういう意味ですか？」

「死神はな、どんな場でも死覇装でいいんだよ。それが任務であれ、

祝い事であれ、葬式であれ、死覇装さえ着ていれば服装でとやかく言われる事は無い。だけどな、俺たちは任務と、普段の側護衛と正式な場での礼装と喪服と、全てそれにふさわしいものが定められている……こつちに来て驚いたのは、それだった」

懐かしそうに言い添えた雷雨に、織姫は微笑んだ。

「そうなんですか。でも、全部違つとなると大変なんじゃないですか？」

「大変だけど、それも仕事の内だ。霊王という権威ある方に仕える以上、俺らもまたそれなりの礼節を求められる。それだけの事だからな」

何でも無い事のように雷雨は言う。

だが、文化の違う場所で暮らすというのは大変だったはずだ。

そしてそれは他ならぬ一護にも当てはまるのだろうと、隣で聞いていたチャドは感じる。

「髪も、そのためですか？」

雨竜が問いかけると、桐生が頷く。

「そうよ。こつちの人達は男女の別なく、大抵肩ほどの長さはある。郷に入つては郷に従えつて言うでしょ？」

桐生の言う通り、確かに雷雨も竜も、そして冬獅郎もまた後ろで髪を結っていた。

とはいえ、それはいつか一護について夏梨が言った程の長さでは無い。

それを雨竜が指摘すると、夏梨が苦笑した。

「一兄は特別……内宮で暮らすからね」

色々あるんだ、と笑った夏梨に、チャドは目を細めた。

「ずいぶん鬱陶しがつただろう？」

「大正解。さすがチャドさん」

その光景が目には浮かぶ。

徐々に先ほどの戦いから覚めて来た死神たちは、嫌がる一護が容易に想像できてそれぞれ苦笑していたものを漏らした。

t h e w a l l o f y e a r s (後書き)

タイトル日本語訳は「歳月の壁」

王族特務が弱い訳がない、そしてそれを従える王族にも何ら特殊なものがあるはず。

そんな風に生まれた設定です。

それでは感想などお待ちしております。

unforgettable people (前書き)

六十九話の直後からはじまります。

「それにしても、どうしてあんなにたくさんの上級大虚がいるんですか？ 虚圏全土でも、数えるほどしかいないはずなのに」

雛森の問いかけに、冬獅郎は頭を掻いた。

「王族を護るための工夫の一つだ。……侵入者の撃退用だな。だから、さっきのやつらもほとんど殺してねえ」

その一言に、ぎょつとしたのは一人では無い。

「え？ じゃ追っかけてくるんじゃない……」

「そうだろうね。ま、デンデンがずいぶん急いでるみたいだから大丈夫だよ。図体の割にこいつ速いから」

夏梨は再びデンデンの背を叩く。

後ろを振り返っても、まだ虚が追って来る気配は無い。

街に入るまでには間に合うだろう。

「……なら、いいんだけど……本当に大丈夫なんだよね？」

不安そうな織姫に、桐生はニヤリと笑った。

「大丈夫大丈夫。追いつかれてもまたのせばいいだけだから」

本当に何でも無さそうに言うが、実際彼らにとって造作もない事なのだろう。

恋次や一角は複雑そうな面持ちで特務の面々を見る。

認めたくはないが、確実に自分よりも、そして自分が目標とする者よりも強いのだと感じた。

「伊達に隊長連中集めてるわけじゃないって事だろう？ むしろ、

この強さが当たり前なんだから驚くよ」

飄々とした蓮杖の声に、乱菊は首をかしげた。

「どういう意味です？」

「……隊長ってさ、他の隊士よりも爆発的に戦闘力が上昇することってないだろう？ ほら、隊長になるまではどんどん強くなって

も、隊長になつた途端にそのスピード落ちるじゃん。その理由、わかる？」

「……さあ。そこまでが能力の限界だから、とかですか？」
言われてみれば確かに不思議だ。

隊長は強い。

だが、隊長がそれ以上目に見えて腕を上げるといふ事は、確かにあまり聞かない気がする。

「同じ程度の強さのやつと切磋琢磨することもできない、まして目標となるべき人物も少ないし、なにより自身の鍛錬にあてる時間も限られる。そうだろ？」

雷雨が言つと、蓮杖は頷いた。

「むしろ僕が確認したい事です。でも実際そうなんでしょう？」

「そうね。こつちにこれば自分より強いのがごろごろいるし、だから目標になる人がいる。……隊長としての色んな仕事もないから、好きなだけ訓練してられるし」

羨ましい、と恋次は冬獅郎を見た。

隊長になつてこのかた、書類業務に追われなかつた日は無いと言つていい。

副隊長のころよりも更に複雑なその仕事に、辟易してないと言えば嘘になる。

「それに、まあ隊長が怖いから」

おどけたように付け足した桐生に、ひよ里は首をかしげた。

「怖い？」

「恐いわ。出来れば道場で会いたくないし、業務中にも会いたくないし、……機嫌が悪い時は言わずもがなだけど」

わざとらしく身を震わせた桐生に、冬獅郎は同意した。

「確かに、出来れば会いたくねえな」

思いつきり眉間にしわを寄せた冬獅郎を見て、雛森も険しい表情を

する。

「そんなに恐いの？」

「恐いな。恐いし、化けもんみてえに強い」

「うちの隊長よりもですか？」

弓親が言つと、何故か雷雨が肯定した。

「間違いなくな」

「間違いなくつて……うちの隊長しらないのに？」

「じゃあ聞くが、そいつ総隊長より強いか？」

「……………はい？」

さすがに更木隊の一人と言え、どちらが強いかなど誤魔化しきれるほどじゃないのはよくわかつている。

結果疑問で返した弓親を見ると、雷雨は腕を組んで遠くへ視線を移した。

「うちの隊長は、総隊長よりも強い……俺達四人が全力でかかって、素手のあの人にさえ五秒ともたないだろうな」

「……………」

一気にその場に沈黙が落ちる。

それはそうだろう。

彼らにとって総隊長は最強であり、そしてまたかつて隊長であった特務の四人もまた最強に等しい。

だというのに、それだけのハンデがあつて敵わない？

何か悪い冗談のような気がして、乱菊はそつと冬獅郎の袖を引いた。

「ね、いくらなんでも冗談が過ぎますよね。あの人そつという人なんですか？」

遠くを見つめたままの雷雨をそつと指差した乱菊に、冬獅郎は首を横へ振る。

「冗談でも何でもねえよ。隊長は強い……護廷の連中がまとめてかかったとしても、あの人に手傷を負わせられるようなことは絶対にねえ」

「……………」

それにもやはり納得できず、死神たちは先ほどから沈黙を保っている当主達へと視線を向けた。

「……間違いないですよ。ついでに言うと特務の隊長さん、鬼道の腕はこの人よりも上です」

指を差された九頭柳は、それを注意することなく頷く。

「敵うわけがないさ。むしろ教えを乞いたいぐらいだ。乞うたところで教えてくれる人でもけれど」

「でしょうねえ。隊士の私達にも、手ほどきしてくれる事はまず無いんですから」

「隊長なのに？」

浮竹が眉間にしわを寄せる。

部下を鍛えるのは隊長の役目の一つだと、彼は考えている。

「俺等を鍛えるのは、たいていは五席だ。それでも上等だろ、俺たちは隊でも底辺に居るんだからな」

納得ずくのように冬獅郎が言う。

その言葉と冬獅郎達の実力が繋がらず、平子は一瞬眉根を寄せた。だが確かに、隊で彼らが底辺に居るとするのはそうなのかもしれない。

「うち、滅多に新しく採用しないからつい忘れちゃうけどさ、私たちが隊で一番若いだよ。実力主義である事はそっちと変わらないけど、何十年も間があればそれを埋めるのは難しい……必然的に、年功序列みたいになっちゃうのよね」

苦笑気味に言った桐生に、ひよ里は不満そうな顔をした。

「そんな……隊長やって強いのに」

「ありがとう。でも、確かに私と冬獅郎が隊で一番弱いのは事実なの……それから隊長って呼ぶのはやめなさい。私も私の隊長に顔向けできないわ」

優しくひよ里を抱きよせ、だが冷静に最後の部分を指摘した。

ひよ里はその久し振りのぬくもりに体を預け、安心したように目を

閉じる。

もういつ以来なのか、それがわからないほどに久し振りの匂いとぬくもりだった。

「総隊長と言えば……総隊長が唯一恐れをなすのも、特務の隊長だけじゃろうのう」

思い出したように付け足された言葉に、花太郎はぎよっとしてその言葉の主を振り返る。

「総隊長が恐れをなすってどういう意味ですか!？」

視線の先の夜一は、ぐぐつと伸びをしながらそれを答えた。

「どうもこうも、それほどに特務の隊長が強いという事じゃ。のう、桐生?」

「確かにそれは事実だけど、唯一ってのは間違いね。もう一人いるじゃない」

「もう一人!？」

花太郎はぞつと身を震わせた。

あの総隊長が恐れをなす人物がこの世に二人もいるなんて、考えたくもない。

「うちの隊長の妹よ。そうよね、雷雨」

「聞いた事はねえがその方が納得はいくな。確かにあの人も恐ろしい方だから」

死神たちはどうしようかと互いの顔を見る。

今さらだが引き返したくなってきた。

そんな所に居るなんて、何だか一護が人質にでも取られているような気分だ。

「っていつか、総隊長そんな方たちとも面識あるんですね……」

雛森が言うと、桐生は苦笑めいたものを漏らした。

それに首をかしげると、桐生は口を開く。

「っていつか……うちの隊長とその妹が総隊長の師匠みたいなもん

なのよ。ま、話にしか聞いた事無いから、よくわからないけどさ」

「先生の師匠!？」

浮竹がますます考え込む。

自分の覚えている限り容姿の全く変わっていない師は、生まれた時からそうなんじゃないかとすっかり錯覚してしまっただ。

だが生まれた時からあの老体の訳がなく、そもそもそんなの絶対にお断りで。

「何言ってるの、そりゃ総隊長にだって先生がいるに決まってるでしょ。あんなのが最初っからあのままだったら嫌じゃない」

考えたことそのままの事を言われ、浮竹は渋い顔で頷いた。

「それはそうだが……君だって想像つかないだろう？ 元柳斎先生の若い頃」

「若い頃ってだけなら確かに無理ね。でもうちの隊長たちが師匠っていうのは簡単に想像がつくわ」

「……………」

想像したくない、と浮竹は思った。

これだけは京楽にも黙っているかもしれない。

「あら、もうすぐね……随分近くなったわ」

なおも頭を抱え込んだままの浮竹に苦笑し、ふと視線を移した桐生は感心したように言った。

「さすがね。あとで一護君にお礼言っておかなくちゃ」

とんとんと背を叩くと、デンデンは低く唸った。

「あとのぐらいいんだ？」

「街までは半時間かからないわね。都まではまだかかるけど、これならちゃんと午前中につけるわ」

岩鷲の質問に答え、桐生は立ち上がる。

既に集まっていた当主と護衛士たちの輪に入ると、何やら少し話をしているようだった。

「ねえ、夏梨ちゃん」

「うん？」

「一貴君、いつもあんな感じなの？」

織姫がそつと示す方を見ると、一貴はぽつんとひとり座っていた。何度か話しかけはしたのだが、彼はいつも礼儀正しくそれに答えた後、また離れていってしまったのだ。

「ごめん、気にしないで……あいつにもいろいろあるんだよ」

苦笑した夏梨に、チャドが眉間にしわを寄せる。

「彼の年は、……俺達が考えているよりも上なのか？」

唐突なその問いに、夏梨は首をかしげる。

「小学生ぐらいだと思っていたが、受け答えをきく限り、そつは思えない」

付けたされた言葉に、漸く夏梨は頷いた。

「そついえば、あいつの年教えてなかったね。十六だよ、あいつ」

「十六!？」

驚いた声を上げたのは雨竜と織姫。

一方の死神たちは、そうなのかと頷いただけだった。

確かに、見た目と年齢が一致しない尸魂界で暮らしていれば、小学生ほどの体格で十六歳というのは何も驚くことではないのかもしれない。

それよりも、とルキアが話しかけると、夏梨はそちらへ体を向けた。

「彼にもいろいろある、と言ったが、それは？」

「ん……まあ、引け目その他色々？ しばらくうちに居れば、嫌でも気付くと思うよ」

何となくぼかした答えだったが、ルキアはそれ以上聞かなかった。

はつらつとした夏梨がそう言うという事は、まあそう言う事なのだろう。

いざとなれば父親である一護に問い詰めようと心に決めて、ルキアはその話題をたたんだ。

「ずずず、とデンデンが動きを止める。」

その動作を感じた一行は、それぞれ顔を見合わせた。

「ついたの？」

確信を持った織姫の問いかけに、夏梨は頷く。

「さあ、下りよう。もうあとちょっとだよ」

夏梨は一貴に声をかけると、一足先にデンデンからおりる。

後を追って降り立った彼らを振り返ると、夏梨はある一点を指差した。

「そこに、結界のなかにつながる穴がある。そこを通って中に行くから、ついてきて」

案内の通りに歩いて行くと、ふいに夏梨の姿が消えた。

その場所に一步踏み込むと、確かに膜を突きぬけた様な、そんな気配を肌を感じる。

思わず目を閉じ、次に開いた瞬間目に映ったのは、何かの部屋だった。

聞けば、そこは結界を普通の民が通り抜けないようにするため、王族特務が管轄する関所のような場所なのだという。

普段はほとんど使われないため、警備の為の護衛士が二人ほど駐留しているだけらしい。

振り返ればそこには扉のようなものがあり、そこから次々と仲間達が出てくる。

最後に雷雨が出てきたのを確認すると、桐生は数を数えた。

「全員居るわね。よし、次行くわよ」

示された別の扉をくぐると、そこには二人の護衛士がいた。

「お、着いたのか」

「お疲れー」

気軽な声は、冬獅郎達に向けられたものだろう。

その部屋にはいくつかの机とすが雑然と置かれているだけで、どうやら休憩所のような場所らしかった。

「どう？ 本宮から連絡入ってる？」

夏梨が問うと、護衛士の一人が首を横へと振った。

「いや、入って無いな。通行止めの道もないから、予定通り本道を通っているはずだ」

随分気軽な接し方に、死神たちはやはり戸惑う。

冬獅郎や桐生が夏梨に敬語を使えば、それにもやはり戸惑うが、王族だとわかっている彼女と護衛士が普通に会話をしているのは、何となく奇異に映った。

だが一護に対してもそうなのだろうと思うと、すこしだけ安心する。誰もかれもが自分に敬語を使えば、一護はそれに戸惑うどころか不快感さえ覚えるだろうから。

「ここからは、馬だね。手配してくるからここにいて」

ぱっと部屋を飛び出した夏梨を追うように、冬獅郎が駆けていく。

そこはやはり護衛士。

周りに気を配っているのは十分に察せられた。

そうして、その建物の先に広がる街から都へは馬車をつかい、二時間ほどそれに揺られた後。

外に見える景色がずいぶん変わって来た頃、馬車が止まった。

「この関所の先が都。ここから先は歩きになるから、降りて」

夏梨の指示にしたがってルキアが馬車から降りると、他の馬車に分乗していた仲間達もまた同じように馬車から出てきていた。

皆それぞれ、夏梨達と同じ外套を身につけ、フードで頭を覆っている。

冬獅郎達の服装が尸魂界で目立つように、こちらでは死覇装や洋服は目立つのだと渡されたのだった。

関所の荘厳さは、言葉に言い表せない。

石造りのその建物には、大きく「春明門」の文字が掲げられている。その左右は高い壁が立ち、遠く果てまでそれは続いている。

一つの街とは思えないほどのその規模に、恋次はごくりと息を飲んだ。

外敵を阻むその壁から目を逸らし、立ちはだかる門を険しい瞳で見つめる。

この先に一護がいる、それがわかっていてなお進むのを躊躇うような何かがそこにあった。

夏梨の先導で関所に入り、そこでまたあの膜に似たものを突き抜ける感覚がする。

だが都を護る結界を突き抜けたのだとわかるより早く、ルキアの体に強い衝撃が走った。

言葉もなくずおれたルキアに、恋次が駆け寄る。

だが織姫もまた同じく膝をつき、二人を支えようとした恋次と雨竜の手も、意思と関係なく震えた。

それは他の者も同じ。

関所の役人が不信そうな顔をして、誰もそれを気にしない。

夏梨はそれを見て苦笑し、呆れたように息をついた。

「靈力を封じれば、靈圧を感じられなくなるものだと思っていたけど」

そう。

彼らが感じていたのは、長い間捜し求めていた、一護の靈圧だった。

この感覚を、見紛うはずがない。
この感覚を、忘れるはずがない。
まして、霊力を封じられたところで、感じなくなるはずもまたない。

余りにも懐かしいその感覚に、ルキアはそつとその顔を覆った。
壁に手をついた浦原の肩を、夜一が軽く叩く。

呆然としたままの岩鷲を、この時ばかりは空鶴は責めなかった。

関所を抜け、そこに広がる景色にルキアは感嘆の声をあげる。

「ここが、都なのだな……」

広がるのは、まさしく尸魂界の王が住むに相応しい土地だった。
街に人は溢れ、市は活気に満ちている。

そこに貧困の気配はない。
流魂街のように身分で土地が分けられることもないのだと、ここへ
来る途中で教えられた。

そして言われた通り、この地で死覇装は目立つのだとはっきりわかった。

民達が着ているのは、どれも鮮やかな色彩のものばかり。

黒を着ている者もいるにはいるが、黒服の一団が歩いていれば確かに目立つだろう。

洋服もまた同じ。

洋服の文化が流入している尸魂界以上に、ここでその格好は奇異に映るはずだ。

整然と区画分けされた街は、どこか昔ならった古都を思い起こさせる。

鳥のように空からみたならば、恐らく碁盤の目のような町並みを目にすることになるだろう。

夏梨はその様相を見ると、ほっとしたように息をついた。

「今度こそ。……ようこそ、王土へ。ここが、私達の住む場所です。」

どこか自慢げなその口調は、きつと気のせいではないだろう。だがそれにも頷ける。

これほどの土地を自慢せずにいられる者がいるはずもない。実際、特務の面々もまた誇らしげな表情をしていた。

街を、王宮へと向かって歩く。

遠くに見える塔、あれの下に王宮はあるのだと冬獅郎は言った。

まだ針ほどにしか見えないそれは、実は塔と言っほどの高さはないらしい。

周りの建物が小さいため、そのように見えるのだそうだ。

そして、その大きさが僅かに変わってきた時、一団に、正確に言うならば冬獅郎に、後ろから声がかけられた。

「冬獅郎！ 何だ、任務は終わったのか？」

刹那、桐生と雷雨、竜は素早く互いの目を見交わす。

冬獅郎は深くため息をついたあと、ゆっくりと振り返った。

だが、異変があつたのは四人だけではない。

誰もが、その声に聞き覚えがあるような気がした。

まさか、と思う。

王土に知り合いなんていない。

辛うじて一護や冬獅郎がいるだけで、他には。

だが、その声には確かに聞き覚えがあつた。

平子が、半ば無意識に眉間に皺を寄せる。

耳に心地好いものにも関わらず、その声は心をざわつかせた。

本能に限りなく近くなったその感覚が、警鐘を鳴らす。

声は、聞き覚えのあるものよりも幾分若い気がした。

その声の主は平子が気づくのと、冬獅郎が口を開くのが同時。

ため息混じりに発されたその声に、雛森は息を飲んだ。

「まだ仕事中だ。学校外でむやみに話し掛けるなって言うてあるだろっが。……惣右介」

unforgettable people (後書き)

タイトル日本語訳は「忘れ得ぬ人々」

えーと……あー……オールキャラって言ってありましたよね？

それで許諾は得たものとなりました。はい。

軽く補足。

春明門って言うのは、唐の時代の長安に実際にあった門の名前です。
世界史の資料集に感謝感謝。あ、謝謝。

まあ、読み手の方が、こんなのもいいさっさと最後の部分の
補足を寄越せと言いたいのは、よくわかってしまっただけだね。
何分、ネタバレが怖いので勘弁して下さいませ。

あ、でも今回のサブタイにヒントがあったりします。

それでは感想などお待ちしております。

m e e t a g a i n (前書き)

七十話の直後から始まります。

meet again

誰もが、そこに立つ青年にくぎ付けになった。

その姿は、憶えているよりもずっと若い。

冬獅郎や夏梨と同じほどだろうか。

落ち着いた色の眼鏡と、そして柔らかく波打つ髪は、その青年の穏やかさをよく表しているようだった。

「はは。いや、てっきり仕事は終わったものだと思っていて……すまない」

青年はおどけたように笑い、ついで夏梨に視線を向けた。

「夏梨姫も、お久しぶりです」

「姫なんて他人行儀なのはいいよ。そんなの、公式な時だけで十分。いつも通り夏梨でいいって」
いつも通り。

その言葉に、夏梨と冬獅郎が後ろに庇うように立った一同は、大きく目を見開いた。

「でも、仕事中だつて、冬獅郎が」

「拳げ足とるんじゃないやねえよ。別にこいつの仕事は仕事中でも姫扱いしなくていいってだけの事だ。それぐらいわかってるだろ」

恨めしそうな視線を夏梨から向けられ、冬獅郎は言い訳気味に惣右介に言う。

その気楽な言い方に、平子は思わず声を上げようとした。

平子だけでは無い。

誰もが、刀を取ろうと手を腰にやる。

だがそこに刀は無く、舌打ちとともに恋次は一步踏み出そうとした。だが、それは出来なかった。

脇腹に、何か尖ったものがあてがわれる。

はっとして振り返れば、雷雨が無表情のまま短刀を恋次の腰に押し当てていた。

「動くなよ。少しでも妙な真似しやがったら、俺はテメエらを斬る全員だ」

一方、声を上げようとした平子と、そして飛びかかろうとしたひよ里も同じ目にあっていた。

「……隊長」

「動かないで。動いたら容赦しないわ。声を上げるのもダメ」

さりげなく首に添えられた手は、ひやりとしていてまるで刃のようだった。

その冷たさに、ひよ里はごくりと息を飲む。

誰もがそれぞれに動きを封じられ、ただ目の前の信じられない光景を見ているしかなかった。

「全く、試験が終わったらみんなで遊びに行こうって言ってたじゃないか。それなのにまた任務だって矢のように飛び出してくんだ……人づきあい、もう少し考えたらどうだ？」

「うるせーな。任務は任務だ。学校に通えてるのも東宮のご厚意があつてこそなんだからな」

「まーた。どうせ面倒になっただけだろう？」

一見すれば、少しばかりの毒を含んでいるようにも見える。

だが、惣右介の顔にも、そして冬獅郎の顔にも気安い笑みばかりが浮かんでいた。

「……………どうして」

雛森が小さく呟くのを聞いて、乱菊はそつと手を重ねる。

この光景は、あまりにも残酷すぎる。

ようやく、乗り越えてきたというのに。

「わかったよ。明日の同期会はちゃんと行くって言うてあるだろ？こつちだつて暇じゃねえんだ。二足のわらじ履くのつて結構キツいんだぜ？」

「それは聞かなかつた事にするよ。明日急用で来れなかつた言い訳にされかねないからな。明日は皆が集まるんだ。ギンも要も、冴留や拓だつて来るんだからな。千亜だつて楽しみにしてる。絶対に来いよ」

乱菊は、雛森の手に重ねた自分の手が、じつとりとした嫌な汗をかくなのがわかつた。

その眼鏡の男は、今間違ひなくギンと言つた。

「わかつてる。恨まれるのはごめんだからな。……夏梨、お前はどつするんだ？」

「行くよ。久し振りの同期会だもん。千亜にも会いたいし。他のみんなももう来てるの？」

夏梨が問うと、惣右介は頷いて通りの少し離れたところを見た。

「おーい！ ギン、千亜！ 冬獅郎と夏梨だ！ こつち来いよ！」
それを聞いて、冬獅郎と夏梨はうつと顔をしかめる。
地雷を踏んだのは、考えずともわかつた。

そしてすぐにやって来たその二人の人影を見て、乱菊は萎えそうになる足を叱咤するので精一杯になつた。

もう雛森を気遣つている余裕なんてない。

「なんや、もう任務終わったんか。ずいぶん早かつたなあ」

「早いほうがいいだろう。これでみんな揃つたんだ」
ギンと、そしてもう一人にも見覚えがある。

あの戦いで冬獅郎と戦つた、金髪に碧眼の十刃の女だ。

名はたしか、ティア・ハリベル。

冬獅郎はちらりと後ろを見やると、すぐに視線を三人へと戻した。

「悪いけど、まだ任務終わってねえんだ。また明日な」

そう言われたギンは不満そうな顔をするが、横に居た千亜に制される。

「だったら仕方ないな。また明日」

「おう」

冬獅郎は言うなり背を向け、後ろに立つ特務の三人に合図をした。

「こつちだ。何も言うな、何もするな。ついてこい」

冷たい命令口調で雷雨が言う。

一同は、夏梨と冬獅郎に追い立てられるように裏路地へと入った。

「どういうことや！ 説明せい！」

ようやく拘束を解かれた平子が、冬獅郎へと掴みかかる。

胸ぐらを掴まれた冬獅郎だが、何も言わずにただ平子の視線を受け止めた。

その、無表情を通り越した無感動な冷たい瞳に、優勢のはずの平子がたじろぐ。

その隙を見逃さず、夏梨が割って入った。

「離しな。あんたたちには関係の無い事だ」

勢いよく払われた手を庇うように、平子は左手を右手に添える。

その瞳には未だ冷めぬ憎悪の炎があった。

「…………シロちゃん……………どういうこと…………？」

頼りない声を辿れば、そこにはぺたりと座りこんだ雛森がいた。

隣に立っている乱菊も辛うじてといった程度で、顔にはすでに血の気が無く、今にも倒れそうだった。

それを一瞥した夏梨は、まるで吐き捨てるかのように馬鹿馬鹿しいと言った。

それを聞いた恋次が、鋭い視線で夏梨を睨む。

「あんたたちがどれだけ苦しい思いをしたのかわからない。でももう三十年経ったんだ……なのに、たったあれだけで」

「夏梨」

そこでようやく、冬獅郎が口を開いた。

「もう、じゃねえよ。まだ三十年なんだ。悪い、わかってやってくれ。こいつらには無理だ」

その言葉に、ひよ里は冬獅郎に掴みかかる。

「どういう意味や！ 何で藍染がここにおんねん！ そんなんでお前はあないに楽しそうにあいつらと話してんのや！」

「やめなさい、ひよ里」

そつと、だがしつかりとした口調で言われ、ひよ里は振り返る。

すぐ後ろに立つ桐生は、隊長をやっていた時と変わらない強い瞳でひよ里を見つめていた。

「私たちの一存で説明する事は出来ないし、何よりここは場所が悪い。誰の目があるかわからないわ……宮に着いたら、説明する。それまで待ちなさい」

その目に嘘は無い。

それはわかる。

でも、ひよ里とて引けなかった。

引けば、尸魂界で待つ仲間に顔向けできない。

「あの戦いはもう終わった。あんたの方が、それはよほどわかってるだろう」

雷雨の言葉に、織姫はぐつと唇を噛む。

確かに戦いは終わった。

でもそれを理解していても、あのときのことは今でも夢に見る。

それは、自分だけじゃない。

夫もそうだし、乱菊だってそう。

色んな人が、未だにあの戦いの記憶に囚われているのだ。

「とにかく、今話す事は何も無いよ。それでもまだここにいる？」
冷たく言い放たれた夏梨の言葉に、雨竜は首を横へ振った。

「分かった。先へ進もう……その代わり、必ず全て話すと約束してくれ」

「わかつてる。誰も説明しながらなかったら、私から話すよ」
その言葉の意味を問うより早く、夏梨は冬獅郎を振り返った。

「冬獅郎、あんた今から」

「別行動で先に宮へ戻れ……違うか？」

話しながら、冬獅郎は手早く顔に布を巻いた。
見る間に翡翠の瞳しか見えなくなる。

「あたり。私は大通りから一人で戻る。あいつらが声かけてくるとしたら、私か冬獅郎だからね。一貴、あんたも冬獅郎と一緒に先に宮へ行つて」

一貴は、意味がわからないのだろう。

不安そうな顔をしながらも、その言葉に頷く。

それを見てとると、冬獅郎は一貴の前に跪いた。

「出立前に、東宮がお話になった戦いの事、覚えておいでですか？」

口調を改めたのは、理解を促すためだろう。

一貴にも公の部分はある。

その部分に限れば、一貴は他の同じ年頃の子供の誰よりも賢い。

「覚えているよ。でも、それと今の事と何の関係があるの？」

「あの戦いの首謀者の名を、思い出せますか？」

一貴は一瞬だけ逡巡するそぶりを見せた後、その表情を変えた。
それだけで全てを察する敏さに、冬獅郎は内心唇を噛む。

王宮は、幼さを許さない場所だ。

「おわかりいただけましたか？」

目を伏せ、ただ頷いた一貴の手を、冬獅郎はそっと取る。

「すぐに東宮にお知らせしなければなりません。一緒に宮へお戻りいただけますか？」

また頷いた一貴に、冬獅郎は項垂れるように首を垂れる。

一同は、それを言葉もなく見つめていた。

「じゃ、冬獅郎。そつちは頼むね……私ももう行く」

だつと大通りへ駆け戻る夏梨を見送ると、冬獅郎と一貴も姿を消した。

瞬歩で王宮へ向かったのだろう。

「何故夏梨を一人で行かせるのですか！ 危険すぎます！」

ようやく口をきけるようになったルキアが抗議する。

雷雨はそれを冷淡に見つめると、同じく冷たい口調で言い放った。

「問題無い。もともとあの方は一人で任務をこなされる。ご自分の身を護ることぐらい、造作もない」

冬獅郎を含めた四人が特務として自分たちに接しているのを察して、浮竹は身を強張らせた。

一護に会うだけのつもりでここへ来たのに、それだけのことがひどく難しく感じられる。

不穏な空気がその場に満ちる。

それを振り切るように、竜はずかずかと歩き出した。

気配を消す事になれた、彼らしくない動きだった。

それについて行くと、雷雨が目線で促す。

しんがりを務める桐生は、一行の視線が前から下へ落ちたのを見て、音にさえならぬ溜息をついた。

辿り着いた王宮は、その端を正確に認めることができないほどに広大だった。

王宮の南半分は政庁として使われており、北半分を使って王族が暮らしているのだ、と砂漠の途中で教えられた。

北半分に直接入る為だろう。

南の人通りの多い場所を避け、ひらけた土地のなかを王宮の背後にそびえる山へ向かって歩く。

街の外れを示す城壁にほど近い所に、目指す門はあった。

「ここが、後宮に直接つながる唯一の門よ」

後ろから桐生が言った言葉は、誰の耳にも届かない。

ただ黙々と門へ向かって歩き、その前に立ってようやくその異様性に気付いた。

固く閉じられた門の前には、冬獅郎達と同じ服　それよりも少し形式ばっているが　を着た二人の護衛士が、身の丈よりも長い槍を構えて立っている。

一同が近付くと、先頭に立っていた雷雨が止まるように指示をした。

「東宮護衛隊所属、淵、竜、陽。殿下より賜りし命を終え、ただ今帰還したものに。解錠を願う」

無表情に一行を見つめていた二人の護衛士は、一つ頷き石突きで強く地面を打った。

ぎぎ、と重い音を立てて開いた門を一瞥すると、雷雨は振り返って頷いた。

先を行く彼に従い、その門の内へと歩み入る。

その先に広がる光景に感動とも畏怖ともとれる感情を抱き、織姫は立ちすくんだ。

広がるのは、薨の波。

だがそれ以上に印象的なのは、その建物の重みだった。

門のすぐ内側にあるのは隊舎だと教えられていた。

隊舎でさえ、今迄自分がみたどんな建物よりも古い。その古さは、いわゆるボロさを伴ったものではない。歳月を経た物だけが持つ複雑な重みには、抗いようのない何かを感じられる。

だが何よりその歩みを止めさせたのは、その内側の“流れ”だった。からくり時計のように、そこには一切の揺るぎを許さない流れがあった。

そこに、人の住む気配は無い。全てが、厳しく定められた動作。

その中から流れに逆らう動きを感じて、織姫はそちらに目を向ける。冬獅郎が、足早に歩みよって来ていた。

「会議室を借りた。まずはそっちだ」

「東宮は？」

雷雨の問いに、誰もが冬獅郎を見つめる。

それは期待のような、それでいて拒絶のような複雑な思いをのせた視線だった。

「まだ政庁にいらっしやる。まだ戸部尚書との謁見を控えていると」

「なら二時間は堅いな。……わかった。行こう」

雷雨の歩くまま、その後をついて行く。

冬獅郎は再び姿を消し、桐生に聞けば政庁に向かったのだという。

だが案内された会議室に入った途端、桐生もまた姿を消した。

同時に当主達もまた姿を消す。

北宮と呼ばれる場所へ行ったのだと、これは雷雨が言った。

特務は雷雨と竜だけになり、その場に重い沈黙が落ちる。

今疑問を口にしたところで、答が返ってこないのはわかっている。

これ以上空気を重くせぬよう、誰もが口を閉じているだけで精いっぱいだった。

これほどに、霊圧を近くに感じるのに ……
チヤドが悔しそつに唇を噛む。

先ほど、雷雨は二時間は堅いと言った。

まだ役目を終えていないのだろう。

それは仕方ないのだと、頭ではわかっている。

だが、感情論でいえばそつはいかなかった。

今すぐにでも問い詰めたい。

あれは何だと、どうということだと。

せつかく、ようやく再会できるのに、自分の口からは疑問しか出てこないのではないかと、自分が恐ろしくなる。

言いたくない事なのか、言いたい事なのか。

もう何もかも、わからなくなっていた。

「竜、外せ」

雷雨が低い声で言うと、竜は問うような視線を向けた。

だが雷雨は何も答えない。

長い付き合いだ、それだけでわかったのだろう。

竜は何も言う事なく、その部屋を去った。

ついに特務は雷雨だけとなり、耐えかねたように岩鷲が身じろぎをする。

雷雨はしばらく迷っていたようだったが、ようやく口を開いた。

「冬獅郎と桐生がいねえから、先に言っておく……こつちでな、あんたらに嫌な言葉がかけられることもあると思つ」

唐突な発言に、浮竹が眉をひそめる。

「どつということですか？」

「あの戦いの事だ……藍染の狙いが何だったか、まさか忘れたわけじゃねえだろう?」

一拍置いて、ルキアははっとした。

「靈王陛下の」

「言つな」

鋭く制され、ルキアは口を閉じる。

「滅多な事だ。そんなもん、王宮^{じゅう}で絶対に言うんじゃねえ。死ぬぞ」
花太郎が、ごくりと息を飲む。

最後の一言には、今迄に経験したことが無い程の凄味があった。

「それを、こともあろうに尸魂界は見逃した……信用は、地に落ちたと言つていい」

反論ができずに、死神たちは目を伏せる。

考えてみれば当たり前だ。

ここは靈王の直轄地。

あれほどの事件を防げなかった自分たちが責められるのは、当然の事だ。

「これから、あの後にこつちであったことを全部説明する。当主や桐生達は話さねえだろうからな。もちろん、一護もだ」

ようやく一護に対する敬語がとれて、一角はどこかほっとした気がした。

さつきから、誰か違う人物の事を話しているような気がしてならなかったのだ。

「口はさむんじゃねえぞ。反論も一切聞かねえ。……それで、できることならこのことはこの場以外で口にするな、一護も、そんなことは望まねえ」

それだけ前置きして、雷雨は静かに話し始めた。

「単刀直入に言うぞ。確かにあの戦いはお前らが勝った。でもな、

てめえらは本当はその後すぐに殺されていてもおかしくなかった」
え、と織姫が小さく言う。

だが雷雨はそれに一切関心を示さなかった。

「当たり前だ。あんな事件に気付かなかったどころか、一護と一心がいなかったら全滅だったんだからな。瀟霊挺だけで力タをつければよかった物を、それすらもできなかった……俺たちに、瀟霊挺の殲滅命令が下される直前まで行ったんだ」

過去の事実を、雷雨は淡々と話す。

それを思い出しているのか、雷雨は目を閉じていた。

「それを止めたのは、一護と一心だ。本当に、命懸けてな……ま、あいつらを殺す訳にはいかねえから、勝つに決まった賭けなんだが、それでも霊王陛下相手に啖呵切るなんて真似は、普通しねえ」
花太郎は呆然と雷雨を見つめる。

こんなところでも、自分は彼に救われていたのか。

そんな思いが、ただ上滑りするように心に去来した。

「それに、仮面の軍勢と言ったか」

突然呼ばれて、平子とひよ里が反応する。

「お前らもだ。お前らも、危なかった……死神でありながら虚の力を得るとは、ってな」

それだけ言って、雷雨はふっと笑みをにじませる。

「ただこれはもう笑い話にしかならねえんだが……あいつらが虚の力を持つせいで死ななければならぬのなら、それは自分も同じだつて一護が言ってたな……まあ、あの時の周りの顔は見ものだった」
限りなく真っ直ぐに通った理屈だ。

確かに、それを持ちだされてはぐうの音も出まい。

その光景を思い浮かべて、浦原は僅かに口角を上げた。

感情と行動が一致するあの少年にしては、頭を使った方がもしれない。

「まあ他にも色々あったんだが、そういうのは全部一心が潰して回った。だけど、信頼を回復することばかりはな」

再び厳しい表情になった雷雨を見て、雨竜はその眼光を鋭くする。

「一番風当たりがきつかったのは、桐生と竜だな……あいつら、藍染と同時期に護廷にいたる。何故気付かなかった、てな」

弓親は大きく目を見開いた。

そんな理不尽なことが、ここでまかり通っていたのか。

「何故気付かなかったって、それ言われたら一護でも庇いきれねえだろ。だからな、一護は別の方法を使った……尸魂界で見聞きしたことを、いろんな人に話して回ったんだ」

再び、雷雨は目を閉じた。

その口元に、再び笑みが滲む。

「こつちに来てからしばらくは、一護のやつ、必要以上に口をきかなかつたんだ。いろいろ混乱してたのもあるんだろうけどな、でもそつちの事を話してる時だけは、あいつすっげえ楽しそうだった。それが、まわりにも伝わったんだろうな」

それだけ、たつたそれだけ。

でもそれが、どれほど周りを動かしたか。

「だから、冬獅郎がこつち来るまでには、ずいぶん状況はよくなつてた。実際、今じゃあの三人に関しては周りも何もいわねえ。でも、それはあの三人に関しての事だ」

ゆつくりと、雷雨が目を開く。

「あんたらに関しては、それは保証できねえ……一護はな、お前らをこつちに呼ぶのを最後まで拒んだんだ。傷つけるかもしれないからって」

乱菊は、言葉もなく視線を膝に落とす。

「それでも、結局あいつは折れた。お前らが傷つかなくてすむように、最善も尽くした。もしお前らがそう言う事を聞くことがあっても、それだけは憶えておいてやってほしい」

そう言った雷雨の目は、ひどく穏やかだった。

ああ、この人は。
ルキアは思う。

きつと、一護の事を本当に大切にしてくれているのだ。
だから、一護を護るために最善を尽くしている。
職責だのなんだの、そういう事だけでできる目ではない。

これまでの言動から、どこか冷たい印象を受けていた。
雷雨に対してだけではない。

竜にも、桐生にも、そして冬獅郎にも。

何か近寄りがたい、壁を感じていた。
でもそれは一護を護るため。

想いは、自分たちと何も変わらない。

そう気づいたルキアは、ゆっくりと頷いた。

「わかっていきます。……そのようなことで、あ奴への信頼が薄れる
事はありません」

その穏やかな瞳を見て、雷雨は目を細めた。

「すまん。こんなことを聞かせちゃって」

「いえ」

返事が短いのは、話題を続けたくないからではない。

ただ、一護がこちらでした苦労を垣間見て、それをひどく悔しいと
思ったからだ。

ずっと、一護は自分たちを護っていてくれたのだと。

それは嬉しいことなのに、悲しいほどに悔しく感じられた。

部屋に落ちた沈黙は、ずっと柔らかいものになった。

頃合いを見計らって戻って来た竜が、ぱちぱちと瞬きをする。

だが彼は納得したように息を吐くと、そつと部屋の隅へ移動した。

その部屋に入つて、どれほどの時間が経つただろう。

時計という技術は、どうやらこの地には無いらしい。

恋次が何度目かに伸びをした時、扉が突然開いた。

扉から顔をのぞかせた護衛士が、雷雨と竜を手招きする。

二人はその護衛士から何か指示を受けたようで、彼に向つて頷き、振り返つた。

「もう戻つてくるつてよ。宮へ、行こう」

ルキアはごくりと唾を飲み込んだ。

その表情は、ひどく緊張している。

どんな顔をして会えばいいのか、それが全くわからなかった。

案内され、隊舎と宮を隔てる門をくぐる。

その先には、隊舎以上に重みのある建物个点在していた。

広い土地に張り巡らされた複雑な回廊を、雷雨は迷い無く選びとつて歩いていく。

途中すれ違つた下官から好奇の視線を向けられはしたが、それでも中傷を受けるような事は無かつた。

「ここで待つてろ。すぐに来る」

示された部屋に入れば、そこは先ほどの会議室とさして変わらない広さがあつた。

だが内装は決定的に違つた。

座ることも躊躇われるような、見るだけで高価なものだとわかる生地で設えられた長椅子。

漆塗りの机の上には、薄い硝子の器に盛られた菓子と、香り高い茶が入れられた湯呑。

入ったはいいがどうしていいかわからず、扉の所で立ち往生している一同に、雷雨は苦笑気味に声をかけた。

「居づらいかもしれないけど、適当に座つとけ。そんなところにいられちゃあ一護も入ってこれねえぞ」

譲り合いの末、それぞれ何とか居場所を見つける。

先ほどとは違った気まずい空気の中で、それでもようやく一護に会えるという実感が湧いてきた。

さわ、と空気が揺れた気がした。

それが人の気配だとわかるまで、しばしの時を要する。

閉じられた扉に不安そうに眼をやり、ルキアはその気配を辿った。

霊圧を上手くたどれないのがもどかしい。

それでも、その気配がまっすぐこの場に近づいてきているのを感じて、ルキアは深く息を吸った。

呼吸が、止まりそうだった。

かたり、と。

扉に手がかけられた音がする。

それから一拍。

その扉が開いて、誰もが逆光の中に立つ人影を見つめた。

その人影は一瞬立ち止まり、何かを言おうとしたようだった。

でもそれが出来ずにいる間に、後ろから入って来た冬獅郎が戸を閉める。

光が遮られ、ようやく直視できた。

泣きそうにも、へたりと笑ったようにも見える表情で、一護が、いた。

「
」

meet again (後書き)

タイトル日本語訳は「再会」

ようやく、ようやく書けました。

なんだか後書きに書きたいことが多すぎて、逆に文章になりません。

藍染のことについて、何か進展があるんじゃないかと考えていらっ
しやった方も多いと思います。

それについては非常に申し訳ありません。

ここで第六章完結、次はまた外伝です。

ということとで補足を一つ。

冴留、拓、千亜という名前が出てきましたが、十刃の面々と繋がりましたでしょうか？

ちよつとひねって漢字表記になりました。

冴留 ザエル ザエルアポロ

拓 タク スターク

千亜 チア ハリベル 《ティア・ハリベルより》

他にもいろいろ考えてます。亜郎仁郎とか（笑）

それでは感想などお待ちしております。

S08 信じる心 前篇(前書き)

― 護のことが全員に知らされる半年ぐらい前の話です。

S 0 8 信じる心 前篇

a t d u s k

地に墜つ陽 迷い揺れる風
総てはその想い故

躊躇う心を知りて 理は猶己を刻み
その背に贅を与う

散りゆく雪片に臨み 想いの欠片を託し
驟雨の先に見ゆる 誓いの言葉を信ず

かつての想いを胸に 少年は前へ進む
その目に迷いはなし

その絆の強きがために

門のあたりに夫の霊圧を感じて、凜は書物を読む手を休めた。
少し根を詰めすぎたかもしれない。
あたりが暗くなってきたのに気づかなかつたせいも、本から目を話した途端に目が眩んだ。

収まるのを待つて立ち上がるのと、背後の扉が開くのが同時。
部屋に入ってきた一護の顔を見て、凜は表情を曇らせた。

「ただいま」

「おかえりなさい」

どこか浮かない表情の一護に、凧は首をかしげる。

一護は力無く笑うと、長椅子へ腰かけた。

何かあったのか、とは聞かない。

聞いても答えないのはわかっている。

「お茶、いれようか」

少し笑って言うと、一護も僅かに目を細めた。

一護がそんな表情をするのに、凧は心当たりがあった。

一護の心を揺らすようなことは、一つしか思い浮かばない。

ただ、何故浮かない表情なのかは、わからなかった。

てつきり、喜ぶものだとばかり思っていたのに。

お茶を飲んで一息ついて、お互いに今日会った事を話す。

最近、それは大抵末の子供の一志の話題で、凧が一護に話す事が多かった。

一護は政務を持ちこまない。

凧も未だ官吏の一人として勤めてはいるが、子供たちの前ではそんな話をしたくないと考えているからだ。

そしてそれは、凧と同じであった。

一志の話もひと段落し、心地の良い沈黙が落ちた時、ぼつりと一護が言った。

「さつきさ、陛下と二大官と、それから冬獅郎と桐生に言われたんだけど」

ああやっぱり。

凜はそう思った。

一護が思い悩んでいるのは、自分の考えていた物と相違なかった。

「あっちの……戸魂界とか現世のやつらに、もう全部話したらどうだつて」

「そう」

凜が驚かないことに一護は驚いたようだったが、すぐに理解したようだった。

「聞いていたのか」

「うん。桐生にね、どう思う？ って」

「そっか……」

一護は、それからしばらく黙っていた。

その間も、けっして表情から影は消えない。

それが不安になって、凜はその沈黙を破ろうとした。

「話す事に関しては、賛成なんだ。あいつらにもずっと心配かけてきたし、このままにしておくわけにもいかねえだろ？ だから、話していいって陛下に言われたのは、嬉しかった」

一護が話し始めたので、凜は開きかけた口を閉じる。

だが、一護はそこで再び言葉を切った。

「それで、……俺があいつらに直接話に行く事は出来ねえだろ。俺がここから離れることも出来ねえけど、直接話しに行つたところで混乱させるだけだし。だから、それは冬獅郎達に頼むことになる。

……それも、仕方ねえし、その方がいいって言うのもわかるんだ」

一つ一つ、自分の想いを確かめるように一護は言葉を紡いでゆく。

「でも、全部話した後であいつらにこっちに来てもらうつてのはな

……」

「どうして？ だつて、ずっと……」

そう言つと、一護は頷く。

「うん……確かにさ、ずっとまた逢いたいって思ってた。けど、わ

からねえんだ」

「何が？」

「迷ってるって言った方がいいのかもな……どっちかって言えば、会いたくないのかもしれないねえ」

「え……？」

今度は、凜が驚く番だった。

どうして、と疑問が頭の中を駆け巡る。

だが一護もそれを察してか、凜が何かを言う前に再び口を開いた。

「ただ会うだけなら、会いたい。あいつらに何があったのかも聞きたいし、俺からだって話したい。でも、それだけじゃ済まねえだろ……もつとずつと突っ込んだ、嫌な話もしなくちゃなんねえことになる」

そう言つて一護は溜息をついた。

「それに、こつちに居る間に、あいつらが何を聞くことになるかわからない。俺がずつとあいつらといればいいけど、それは無理だろ。一日の内でも何時間かは、絶対に政庁に行つてなくちゃいけねえ。……

あの戦いでは、あいつらだつてたくさん傷ついたんだ。それを蒸し返すような真似はしたくねえ」

ぎゅつと拳を握つた一護に、凜は眉根を寄せた。

一護もまた、あの戦いの記憶に囚われ続けていた。

「藍染のことだつてある。……宮に勤めている奴らもいるしな。それであいつらに嫌な思いさせることになるんなら、俺の事だけ伝えて、それだけにした方がいいんじゃないかねえかって思うんだ」

それは違つと、凜は言いたかった。

直接会つて話さなければ、わからないこともある。

でも、一護の言っていることも的を射ていた。

大切な仲間だ。

徒に傷つけるような真似はしたくないのだろう。

「だったら、そうするの？」
もう心は決まってるかのように、一護の言葉ははっきりしていた。話す内容こそ確定的ではないけれど、態度がそれを示していた。

だが、一護は首を横へ振った。

「でもな、逢いてえんだ。頭じゃわかってるのに」

「わかってない」

凧は強く一護を否定した。

そう、わかってなんかいない。

「わかってなんかいないわ。……あなたが本当に頭でわかっているんなら、それを選ぶはずよ。あなたは、もうそれができるんだもの。理屈と感情を切り離して判断することが」

凧が言ったのは、一護が三十年かけて身につけてきた能力の事だった。

政治は、感情では通らない。

それが一護にとって何より難しい事だとしても、一護はそれをしなくてはならなかった。

だから、一護は自分の感情を閉じる事を覚えた。

黒崎としての自分と、東宮としての自分。

それは、一護の内側で対立しながらも、共生していた。

そうしなければ、生きていけないからだ。

「納得してなんかいないはずよ。逢いたいんなら、逢えばいいじゃない。そうまでしてあなたが望むのなら、それでいいはずよ。……あつちに居た頃のあなたそのまま、いいの。あの人たちの事を思う時ぐらい、昔のままでいいのよ」

諭すような凧の口調に、一護は首を横へ振った。

「それが、一番ひっかかってるんだ」

「え……?」

「俺はもう、あいつらの仲間だったころの俺じゃないんだから」
辛そうにその言葉を口にした一護を、凜は信じられないような面持
で見つめた。

「次にあつたら、俺はもうあいつら同士がそうであるような仲間では
いられない……もう、全部遅すぎたんだ」

「……一護」

「人間にはな、三十年は長すぎたんだ」

寂しそうに笑った一護に、凜は何も言えなかった。

S08 信じる心 前篇(後書き)

タイトル日本語訳は「夕暮れ」

忘れないうちに補足をいくつか。

この話の前の章「pendulums go to the last truth」、季節は3月です。

書こう書こうと思って忘れていました。

この話は、その前の年の9月ぐらいを想定しています。

と、もうひとつ。

前の話で、雷雨が門番に言った堅苦しいセリフがありましたよね。

あの時、彼は「淵、竜、陽」と言いました。

陽は桐生、竜はそのまま竜なので、淵は雷雨のことです。

竜も実は本名じゃありません。

彼はこの名前が気に入ったので、普段でもそれを通して行っています。

それから一志のこと。

一護の次男です(笑)

兄弟の中では3番目の末っ子。

真ん中に娘もいます。

名前はまだ内緒です。

……と、こんなところでしょうか。

そして本編ですが……暗い。ああ暗い。

最後の部分にはちゃんと理由もあります。

なんか一護が鬱なのは仕様です。そのうち回復させるのでご容赦く

ださいます。

それでは感想などお待ちしております。

S08 信じる心 中篇(前書き)

七十二話の直後の話です。

S08 信じる心 中篇

I've changed, they musta done

「この間、急に思い出したんだけどな」

眉を潜めたままの凜に、一護は語り続ける。

一護の胸には、彼にしかわからない思いがあった。

話したところで、全てを伝えることはできないだろう。

上手く言葉にできる自信もなかったし、それ以上に凜には理解できないことだからだ。

「こつちに来てから、もうすぐ32年が経つ　つまり、俺はもう50近えんだって」

気づいたのは、自分の誕生日だった。

こちらには、誕生日を祝う習慣はない。

外見上では年齢をとらない上、何百年という寿命をもつのだから、

それには特に疑問を覚えなかった。

だから当日になるまですっかり忘れていたし、去年は思い出しもしなかった。

ただ、その時に年齢について何気なく考え、愕然とした。

「そんな年の人間なんて、俺は学校の教員しかしらねえ……もう自分がそんな年だなんて、思いもしなかった」

歳月が経ったせいか、それとも自分の顔覚えの悪さからか、彼らの顔は霞んでしか思い出せない。

ただ、一人だけ思い出せる人物がいた。

小学校の高学年ごろに赴任してきた、担任でもなんでもないその男は、自分を髪の色のことと差別しなかった。だからだろうか。

特別交流があったわけでもないのに、よく思い出せる。眼鏡をかけ、少しくせのある髪。

あごのしゃくれたその男は、一言で言えば恐い先生だった。普段は、優しい。

だが人として間違ったことをすれば、烈火の如く怒った。

自分自身、何度叱られたかしれない。

でもそれは、小学生だった自分達から見ても筋が通っていて、黙って怒られたものだった。

あの頃のあの男と、もう年が変わらないのだと気づいて、一護は考えこまざるを得なくなった。

外見が変わらないというのは、恐ろしいことだ。

自分が年をとるということを忘れさせる。

一護に唯一歳月を知らせるものは、子供達だった。

だがそれも、現世の子供と比べたら格段に遅い。

だから、忘れていた。

年をとらないというのが、決して当たり前ではないということ。

チャドや石田、井上と言った現世での友人達は、あの男と同じほどに年を重ねているのだということ。

「お墓で、あいつらにあった時……俺は、あいつらが誰か一瞬わからなかった。俺の中のあいつらは高校生のままで、大人になったあいつらのことなんて、考えてもなかったから」

凜が目を見開く。

凜は、お年寄りをしらない。

墓場での邂逅の時は遺伝だとかまかしたが、実際はそうではない。

王土に住む全ての者は、護衛士を含めて老いることがないのだ。だから、護衛士には若い隊長が選ばれる。年をとらぬこの地で、不必要に目立つことがないように。

「あれから20年経って、やっぱりあいつらはまた随分変わってるんだと思う。死神もそうだ。20年経てば、多少は変わるだろ」そう言っつて、一護は小さくため息をついた。話すのが嫌なわけではない。ただ、次に自分が言おうとしていることを、上手く伝えられる自信がなかった。

「だから俺は、次に会ったら思い知らなくちゃいけねえんだ……俺が、とつくに人のくくりから外れちまったんだって」凧は、自分の手が震えるのを止められなかった。生き方を変えられた一護が、そんなふうに使っていたなんて、思いもしなかった。

そんな凧を見て取り、一護は苦笑する。

「別にさ、それ自体が嫌なんじゃねえよ。そもそも、寿命ぐらいしか変わんねえだろ……むしろ、その違いの理由を思い知るのが恐えんだ」

一護は静かに目を閉じた。

ここからは、言葉を慎重に選ばなくてはいけない。

「霊王は全ての魂の頂点に立つ。それゆえ老いのくびきから逃れ、その家族である王族も、仕える民もまたそれに連なる……王族だつてこと、もつただの黒崎一護じゃねえんだつてこと、わからなくちゃいけねえ」

一護は短く息をつぐ。

瞼の裏に、仲間の姿が蘇った。

「為政者として生きる覚悟はとつくにできてる。足りてるかどうか

はわかんねえし、怖くねえって言ったたら嘘だけだな……でも、それは黒崎一護じゃねえんだ。あいつらが逢いに來るのは黒崎一護なのに、俺は、黒崎一護としてあいつらに逢うことができるのか、わからねえ。俺はもう、あいつらの知ってる黒崎一護じゃねえ……あいつらか外見を変えたように、俺は心を変えたから」

一護は、いつも以上に眉間のしわを深くした。

薄暗い部屋の中、二人は明かりをつけようとしなかった。
一瞬であっても、集中を途切れさせたくないのだ。

「あいつらの知ってる俺は、何があっても真っ直ぐ突っ込んでく奴だ。考えなしの行動もする、高校生であり死神代行の俺だ。……今の俺とは逆だろ。そんな俺に会って、なんになるんだ？」

凜は答えられなかった。

口について出ようとする想いは、どれ外的外れでしかないように思えた。

唇を引き結び、静かに目を伏せた凜を見て、一護はその手にそっと自分の手を重ねる。

「ごめん。困らせること言ったよな」

凜が首を横へ振ると、一護は目を細めた。

「……今の立場は、俺にとって誇りだ。代行として、色々な人達を護るために戦えたことと同じぐらいな。それはあいつらにも胸張って言える……それは本当だから」

凜が不安になったことを、一護は否定した。
一護にとって、それは何の偽りでもない。

「もう、俺にはこれ以外の生き方は考えられない。確かに苦しい仕事だけど、投げ出してえって思ったことは一度もねえし、それはあいつらにもはつきり言える……ただ、もし今の俺をあいつらに拒絶されたら、そればかりは結構きつい」

一護の手の下で、凧の手が僅かに震えた。

「……結局な、俺が怖がってるだけなんだ。やっぱり覚悟が足りねえのかな」

そう言ったきり、一護は口を閉ざした。

覚悟が足りないなんて、そんな訳があるはずない。

もし一護に覚悟が足りないというのなら、世界中の誰もに足りていないはず。

それほどまでに一護の覚悟が強いことを、凧は誰よりもよく知っている。

足りない覚悟のまま、勤まる役目ではないのだ。

役目というだけで、日々膨大な書類を相手に格闘できる？

役目というだけで、その書類の先の一人を見据えて誰をも失わぬようにその任を果たせる？

一護が気づいていないだけで、一護はこの世の誰よりも真っ直ぐにある政治家だ。

その一護に覚悟が足りないなんて、そんな馬鹿な話があるわけがない。

凧は心を決めた。

ならば、最後の一押しをするのは自分だ。

だって、仲間の誰も今の一護を否定しないと確信できるのだから。

S08 信じる心 中篇(後書き)

タイトル日本語訳は「俺は変わった、あいつらもきつと」

暗い……

そして文章にまとまりがないのはケータイで全部作っただからだと言
い切ります

一護と凧の会話って何だかどんどん難しいものになっていくけど、
あんたら本当に夫婦か？

……お前が聞くなとか言わないで下さい。
私の中で一番予測のつかない二人なんです……

それでは感想などお待ちしております。

S08 信じる心 後編(前書き)

七十二話の直後の話です

S08 信じる心 後編

reliable people

「チャドさん」

凜が突然親友の名を呼んだのを聞き、一護は首を傾げる。

「石田さん、井上さん、ルキアさん、恋次さん」

次々と、凜は仲間の名を挙げてゆく。

その意図が掴めずに、一護はただじつと凜を見ていた。

「……あの時、たった一回しか会ったことがないのに……全然、知らない気がしないの」

たくさんのお名前を挙げた後、凜はぽつりと言った。

「あなたから、たくさん聞いたからよ。話している時のあなたは、とても楽しそうだった。仲間のことが誇らしくて、信頼できる仲間のことを話せるのがうれしくて……嫉妬しちゃっわ」

おどけたように凜は付け足す。

その横顔は、ひどく穏やかだった。

冷たくなった湯呑みを包み込んで、凜は手の震えをごまかした。

一つも間違っわけにはいかない。

何か一つでも間違ったら、一護は仲間に出会うことはしないだろう。

「私、今ならあの人達のことをあなたと同じぐらい話せる自信があるわ。だから、わかるの」

凜は、そう言っってちよつと笑った。

母親になって久しいにもかかわらず、少女のような笑みだった。

「誰も、今のあなたのことを否定しない。絶対よ」

一護は、戸惑った表情で凜を見つめていた。

「どうして……」

声が震える。

「どうして、そんなことわかるんだよ……俺はもう」

「あなたは、何も変わってない」

一護の言葉にかぶせるように、凜は言い切った。

「あなたは、何も変わってない……現世にいたころのあなたは、護るために戦っていた。家族を護るために、仲間を護るために、空座町を護るために」

凜の目はあまりにも真っ直ぐで、一護は耐えかねたように視線を逸らす。

そっだ。

あの時の俺は、護るために戦っていた。

だから、今の俺とは違うんだ。

俺はもう、戦ってなんてない。

戦う術を、放棄したのだから。

「でも、それは今だって変わらないわ。あなたの“護る”意志は変わってない。ただ、手段がちょっと変わっただけよ。……護る方法は一つじゃない。あなたの今のあり方を否定する人なんて、あなたの仲間にはいないわ」

一護ははっとして凜を見た。

言葉が、心に沁みこんでくる。

こんなに優しい言葉を聞いたのは、いったいつ以来のことだろう。

今のあなたを否定するのは、あなただけ。

自省というのであれば、それは為政者として正しいこと。

でも違う。

あなたがしているのは、自分を責めることだ。

反省することと、責めることは違う。

もしあなたがその違いに気づけないのなら、私はあなたがそれに気づくまで何度だって言うわ。

この声が枯れても構わない。

あなたが耳を閉ざしても、私は何度だって言い続ける。

あなたが、あなた自身を護ってくれるまで。

「お願い。自分を否定するようなことを言わないで。今のあなたが背負っているものは、とても重いものよ。それを背負いきっているあなたを、誰も責めることなんてしない。あなたを責めるのは、あなたしかいないわ。……あなたが道を誤ったならば、それは私が正す。それは妻たる私の役目だもの。だから信じて。あなただけは、あなたを否定しないで」

一護は、じつと凜の紡ぐ言葉に耳を傾けていた。

無意識のうちに、膝の上で拳を握っていた。

手が白くなるほどに力が込められているのに、二人ともそれには気がつかない。

そうだ。

俺はいつからか、全部を背負いこもうとしていた。

全て背負いこんで、一人で立とうとしていた。

内心で大きなため息をつく。

バカか、俺は。

かつて冬獅郎を叱ったというのに、かつて家族を苦しめたというのに、俺は何もわかってなかった。

一人で背負いこむことと、責任を持つことは違う。

俺は、王土に住むすべての人の命に対して責任がある。

東宮として、今は王の代わりに政務をとる者として、それはあたりまえだ。

だが、それを背負い込むことは、ただの傲慢だ。人の命を、それも数え切れないほどの命を背負い込むなんて、そんなことが一人の人間に許されるわけがない。

そんな当たり前のことにずっと気づかなかった自分に、一護は嫌気がさした。

凜に言われるまで、考えもしなかった。

もし自分を責めていいことがあるとしたら、このことだと思っ。

この傲慢さに浸っていたことこそ、責めるべき、戒めるべきことだ。

「俺、は」

ずっと黙っていたせいで、声がかすれた。

すう、と深く息を吸って、再び口を開く。

「俺は、護りたい。護れるものは全部護る。護れなくても、護るべきものならやっぱりそれも全部護る……それが、俺の名前だから」

何か大切なもの一つを護りぬけるように……

この名こそが、一護にとって一番の誇りだ。

そして、気づいたのだ。

一というのは、最も小さい数字であると同時に、最も高い数字でもある。

一つというのは、その最小の数を示すだけではない。

“全て”というのをもまた、“一つ”なのだ。

「それで、あいつらもみんな、それをわかってくれた。俺が刀を振るう理由は、護る意志だけでいいって……そうだよな。あいつらはわかってくれるよな。今の俺がやっていることを」

そう言っつて、一護は目を閉じた。

為政者として、俺はあの頃の自分だったら絶対にしないようなこと
もしてきた。

でも、それは何よりも“護る”意志からきている。
それだけは、胸を張って言える。

それならば、きつとあいつらは何も言わないだろう。
それを俺のしてきたこととして、認めてくれるはずだ。

「……信じるよ。俺は。あいつらのことをな」

そう言っつた一護は、部屋に入ってきた時よりもずっとすっきりとし
た表情をしていた。

それを見た凜は、ほっとしたように息をつく。
やっつと、全てがもう一度はじまる。
そう信じられた。

冬獅郎から、街であったことの報告は受けた。
覚悟はしていた。

もしそれがなかったとしても、全てを話す覚悟を。

反発もするだろう。

受け入れることはできないかもしれない。

でも、全部話さなければいけない。

それが、俺からあいつらに対する精いっぱいの誠意だから。

政庁から、一度自室へと戻る。

服を普段のものへと着替え、襟を正した。

冬獅郎は、ずっとそばに控えたまま、何も言わない。

冬獅郎だって同じだ。

同じ覚悟を、決めたのだ。

厳しい表情に対してちよつと笑うと、冬獅郎は一瞬キョトンとしたようだった。

それでも、すぐにニヤリと笑う。

まるで共犯者のようなその笑みに、一護もまた口角を上げた。

「行こうぜ。あんまり待たせたら、怒られるしな」

そう言った一護に、冬獅郎はうなずいた。

S08 信じる心 後編（後書き）

タイトル日本語訳は「信じられる人々」

一護が再会するためにした覚悟って、相当なものだったと思うんですよね。

ずっと離れていたことに戻ることって、すごく勇気がいると思います。

特に、一護は自分だけが離れていたわけで、その間に自分の知らないところでいろんなことがあったはず。

そんな状況へ自分から向かっていくことは、相当な勇気がいる。

だったらそこを書きたいなあってなところから、この話がでてきました。

明日は一日お休みさせていただきます。

あさってから次章です。

それでは感想などお待ちしております。

[p e r s o n a l s w i t n e s s a s s e r t i o n] (前 書)

第七章が始まります。

[p e n d u l u m s s w i n g a g a i n]

狂わされた振子の全ては

その真実を心に刻む

永遠の訣別をも

辞さぬ覚悟を裡うちに秘めて

理りを離れた理ことわりに

情の入る余地はなく

たといを持たぬ冷たき瞳に

かつての絆は鋼くわとならず

されど振子は言葉を以って

互いの立場を知らむとす

三十みその年を離れて歩み

道を違えて進めども

刀に乗せた想いを受けて

変わらぬ意思を肌に感ず

想いの丈を知らされ願うは

友との絆と平穩のみ

戦いの内に傷つく者に

差し伸べる手は温みを持つか

p e n d u l u m s
s w i n g
a g a i n

「pendulum swing again」(後書き)

タイトル日本語訳は「振りたちは再び振れる」

いよいよ第七章に入りました。

エピソードは書く予定ですが、それと外伝を除けば実質これが終章です。

あと少し、お付き合いくださいませ

do you want to know the truth? (前書き)

前章の直後から始まります。

do you want to know the truth?

「よう」

その言葉は、あまりにも彼らしかった。

見慣れぬ服に身を包んでいるからか、髪が伸びたからか。

以前とは違う印象に、少し戸惑った。

でも。

何も、何一つ変わらない。

織姫はこぼれ落ちた雫を払い、そして隣に座るルキアの肩が少し震えているのに気がついた。

「……朽木さん？」

気遣わしげに声をかけた瞬間、ルキアは立ち上がった。

つかつかと一護に歩み寄り、思いつきり右手を振り上げる。

「い!？」

「えっ!？」

誰かがやるだろうと予測はしていた。

だが、それはおそらく恋次に向けての予測で、予想外の出来事に誰もが凍りつく。

冬獅郎は一瞬驚いたようだったが、それでも手出しはしなかった。

ただ一人、一護だけが少しも表情を動かさず、

というよりどこか苦笑じみた表情で、それでも、避けはしなかった。

パン、と。

それは痛そうなお音が響く。

「何が“よう”だ、たわけ！ 今すぐそこに直らぬか！」
肩で息をするルキアは、赤い目で一護を睨んだ。

泣きながら怒鳴ったルキアを、一護は呆れたように見つめる。

「お前……泣くか怒るか笑うか、どれかにしろよ」

一護の言うとおり、ルキアは笑ってさえた。

「う、うるさいわ……たわけ」

覇気のないたわけを聞き、一護はルキアの頭に手を載せる。

あの頃より自分の身長が伸びたせいか、覚えているよりも少しだけ低い位置に頭があった。

「悪かった。心配かけたよな……ごめん」

これ以上泣くまいとしゃくりあげるルキアに手ぬぐいを差し出すと、一護はその後ろの面々に向き直った。

「みんなも、ごめん。来てくれてありがとう」

そんな一護を見て、誰もがほっとしたように息をつく。

安堵や喜び、そして少しの怒りと不満とがないまぜになった、穏やかな空気が場に満ちる。

恋次は立ち上がると、右腕を一護の肩にまわした。

「よう一護！ えらく元気そうじゃねえか！」

「近えよ……つか、別に病気にたわけじゃねえっつもの」

「はっ。そりゃそうだ」

その乱暴なしぐさや言葉遣いに、一護はほっとした。

こんな、昔はどこにでも転がっていた当たり前が、ここには全くない。

きつとこの様子を見たら、下官の中には目を回すものだっているだろう。

そんな風だから、この変わらなさが余計に身にしみた。

仲間の中に腰を落ち着け、ぐるっと一同を見渡す。表情が緩むのを止められない。でもそれは、仲間たちも同じだった。

「……………チャド」

隣のチャドに声をかけると、チャドもまたじっと一護を見返した。

「ム……………」

「悪い、心配かけた」

「ム……………問題ない」

相変わらずの親友に、一護はほっとする。

まあ、何かがあったところで饒舌になるはずもないかと今更だが気づく。

「みんな元気そうだな。よかった」

そう言っただけで笑った一護に、乱菊は目を丸くする。

「なあに言ってるのよ！ あたしらがあなたのこと心配してたのよ。あべこべじゃない」

「そうですよ！ ねえ、石田さん」

「ああそうだ。全く、人の気も知らないで」

「でも元気にしていたんだもん。それでいいじゃない」

「っていつてもなあ……………なあ、花」

「心配したんですよ！ 一護さん、またどこかで無茶してるんじゃないかって」

「ま、お前が無茶するのはいつものことやけどな」

「むしろどこかでまたバカやっとなるんちゃうか、って言うってたんやで」

「隊長は心配してなかったけどな。どうせ面白いことやってるだろ

うからとつと混ぜろって」

「言つてたね、そんなこと」

「こんなところにいるとは思わなかったっすよ」

「だが、無事でよかった」

口ぐちに向けられた言葉に、一護はまったくしゃりと笑った。

言いたいことは、いっばいあつたはずだ。

謝ること、これまでにあつたこと、そつちはどうしていたのか。

でもそれは、最初の謝罪以外は言葉にならなかつた。

胸がいっぱいになって、それがつかえてしまつて。

どうしていいかわからず目を伏せた一護の肩に、また手が乗つた。

「元気そうで何よりだよ……今まで、大変だつたね」

優しく笑つた浮竹を見て、一護ははつとした。

「浮竹さん……すいません。あの時、俺」

「君が気にする必要はないだろう。むしろ、謝るのは俺達の方だ。

……余計な手間をとらせたね」

墓場で、白伏を遣つた時のことを言っているのだとわかつて、浮竹は首を横へ振つた。

あの時は、あれが最善だつた。

むしろ、そのせいで一護に辛い思いをさせてしまったことの方が、浮竹には堪えていた。

最善の策をとつてなお、自分を責めることぐらいはわかつていた。

「恋次も悪かつたな……ルキアも、あんなこととしてごめん」

「気にすんなつて」

「そつだ……傷つけたのは、お互い様であろつ」

言わんとしていることを察して、一護は目を細める。

「なら、いいんだ……ずっと謝りたかつたんだ」

そう言つて、どこかほつとしたように一護は笑つ。
その表情は、誰も見たことのないものだった。
だから、それを見た雨竜は内心苦笑する。

外見で年をとつてないとはいえ、同じだけの時を生きてきたことに
変わりはない。

考え方も、感性も、そしてそれに伴う表情も、変わつていて当然な
のだ。

まして、彼は自分よりもはるかにいろんなことを見てきたはずで。

「しっかし……驚いたぜ、全く」

呆れを含んだような言い草に、一護は一角へと視線を向けた。

「ただのガキだと思つてたのになあ……今じゃ皇太子殿下かよ」

からかうような口調の一角を見て、一護不機嫌そうに視線をそらす。

「からかうな」

「別にからかつてはいないさ。ねえ、一角」

「たりめーだ。笑っただけだ」

「それをからかつてるつて言っんじゃねーか」

その軽口に、織姫はまた涙をこぼす。

本当に、何も変わらない。

変わつてしまつていたらどうしよう・と、ずっと不安だったのだ。

「あんまり泣くなよな」

織姫を見て、一護は困つたように笑つ。

「努力はしてるの……ごめん、もうちょっと放つといて」

懸命に泣きやもうと努力する織姫を見て、雨竜はその肩を抱き寄せ
た。

「心配していたからな、ずっと」

うん、といった声は、うまく音にならなかった。

雨竜にすがって泣きだした織姫の背を、乱菊がそつとなでる。

「ほうら、織姫。泣き止みなさいよ。あんた泣いてばかりじゃない」

「放つといてくださいよう」

言いながら、相変わらず泣き続ける織姫。

その様子を見て、一護は小さくため息をついた。

こんなに心配をかけてしまったのだと、改めて思い知った。

「にしても、ずいぶんサマになってますねえ、それ」

話題を変えようと浦原が示したのが、服装だと気づき、一護は首を横へ振った。

「どこがだよ。……相変わらず、着られてる感覚しかしねえ」

「全然。似合ってますよ。ねえ？」

「ム……」

チャドにまで同意され、一護は首をかしげながら袖をつまみ上げた。

確かに、最初に比べたら着なれた感覚はある。

今では洋服や死覇装よりも肌に合うだろう。

ただ、誰もが死覇装と洋服の中では目立つ気がして、一護は渋い顔をした。

そこで同じ系統の服を着ている人物に思い当たり、振り返る。

「冬獅郎、お前も座つたらいい。場所はあるんだ」

ずっと扉の傍にたつたままだった冬獅郎は、首を横へ振った。

「いや、いい」

大方、今部屋に自分しか護衛士がいないことを気にしているのだろう。

座れば初動が遅くなる。

確かにそれは事実だが、一護も引かなかった。

「お前だけ立ってたら、おかしいだろ。座れ」
ちよつと空いていた雛森の隣を示すと、冬獅郎は小さくため息をついて座った。

「神経質すぎるんだよ、おまえは」

「主が無神経すぎるんだから、ちよつどいい」

すぐに切り返されて、一護は眉根を寄せる。

「悪かったな」

「お互い様だ」

短い言い合いを聞いて、乱菊はくすりと笑った。

二人の視線が向けられて、乱菊は笑いながら口を開く。

「なんか、想像つかないなって思ってたのに、ずいぶんしっくりきてるんだから……笑っちゃうわ。ねえ？」

誰とは言わず同意を求めると、誰もが同意した。

それにへそを曲げたのは、もちろん二人ともだ。

「悪かったな、想像つかなくて」

「しっくりきて、悪かったな」

言い方までもそっくりで、乱菊はまた笑う。

立場も何も全部が変わってしまったのに、なんだか二人が現世と尸魂界にいたころと変わらないのだから不思議だ。

「一護が“冬獅郎”って呼ぶたびに、“日番谷隊長だ”っていい返してたの、すつごい懐かしい。本当、30年も経っちゃってたのね」

「……そう言えば、そんなこともあったなあ」

一護が懐かしげに目を細める。

ずいぶん昔のことなのに、鮮明に思い出せるのだから不思議だ。

「思い出話はもうええやろ。それよりや、一護。さっき」

「藍染に会ったんだろ？」

もう我慢ならないといった様子で口を出した平子に、あっさりと言いは返した。

その速さに、平子は眼光を鋭くする。

「冬獅郎から聞いている」

「そうや……藍染だけやない。市丸も、他の破面もおった。あれはなんや、一護」

直球で聞かれた一護は、答えあぐねて視線をそらした。見れば、他の仲間たちも同様に一護を見ている。

小さくため息をついて、一護は口を開いた。

「わかってる。全部話すさ。……だけど、その前に一つ聞いておく」「なんや」

鋭く睨むひよ里を見て、一護もまた厳しい表情に改める。

できるだけ、黒崎一護として接する努力はする。

だが、ひよつとしたらもう来てしまったのかもしれない。

王族として、仲間たちに接しなくてはならない時が。

「聞いて、後悔しないか？ それがどんなものか全部知って、後悔

しないっていうんなら、俺は全部話す。……知りたいか？」

話題以上に、一護の真剣さがその場の空気を硬くした。

息ができなくなるような錯覚に陥り、ルキアは短く息を吸う。

「知りたいです。……教えてください。真実を」

意外にも、答えたのは雛森だった。

だが一護が最も意を確かめたかったのは、確かに彼女だった。

彼女と、そして乱菊と、もう二人。

平子とひよ里の表情が変わらないのを見て取ると、一護は頷いた。

「わかった、話すよ。全部」

do you want to know the truth? (後書き)

タイトル日本語訳は「知りたいか？」

殴れなかった恋次にひとまず憐みを（笑）

雛森と乱菊が王土に来たわけって、冬獅郎がいるからだと思っていませんでした？

本人たちはそのつもりでも、書き手は藍染とギンがいるから、と連れてきました。

平子やひよ里も、藍染に人生を狂わされた者の筆頭として。

彼らが、告げられた真実に何を思うのか。

そして一護はどうするのか。

そんな風に進めていきます。

それでは感想などお待ちしております。

a c c e p t a n c e o r f a r e w e l l (前書き)

七十六話の直後から始まります。

acceptance or farewell

「わかった。じゃ、話す……冬獅郎、外に誰もいないよな？」

「人扱いは言われた通りにしたが」

「念のためだ。見てきてくれ」

「わかった」

冬獅郎が立ち上がるのを横目で確認し、一護もまた立ち上がる。棚から何かを取り出し、机の上にそれを並べた。

「……本？」

並べられた5冊の本を見て、織姫は首をかしげる。

その隣に並べられたのは、いくつかのガラス玉だった。

いくつか赤いものが混ざっているが、残りはすべて青色である。

「道具があつたほうがわかりやすいからな」

そう返した一護は、冬獅郎が頷いたのを確認して再び口を開いた。

「今から話すのは、世界の成り立ちから関わってくることだ。話としては、かなり長くなる。いいな？」

一同が頷いたのを見て、一護は本に手を伸ばした。

「これが、現世とするだろ？ こっちが尸魂界、虚圏、地獄、それでこれが王土」

順番に示された本を見て、浦原は納得した。

「つまり、この本をそれぞれの世界として見たてる、と？」

「そういうこと。で、これがそこにある魂魄」

その本の上に、数個ずつガラス玉を並べていく。

五つの世界と、魂魄。

机の上に小さなこの世界が出来上がった。

「で、まず現世で死んだ魂魄は、魂葬されれば尸魂界に行く。虚に

なつたら虚圏。これは知ってるだろ？」

話しながら、一護は現世の本の上からガラス玉を二つ持ち、片方を尸魂界へ、もう片方を虚圏へとおいた。

「で、生前に大きな罪を犯した魂魄の場合は、地獄へ行く」

さらにもう一つを、今度は地獄と指定した本の上へと移動させる。

「更に、尸魂界で死んだ魂は現世で生まれ変わって、地獄に送られた魂は最終的に消滅する」

一護は、尸魂界の上にあるガラス玉の一つを現世へ置いた。

「誰でも知ってる、魂魄の輪廻っすね」

「そういうこと……じゃ、ここで質問だ。地獄に送られた魂は消滅するのに、どうして魂魄の総量は減らないんだ？」

「言われてみれば……そうっすね」

確かに、それは指摘されれば不思議なことだった。

減り続けるままでは、魂魄はいつしかなくなってしまうはず。

考えた末に、雨竜が口を開いた。

「つまり、どこかで魂魄が新しく生まれているということか？」

「そうだ。まあ、それが王土なんだけど。地獄で消滅した魂は、こ

こへ生まれ変わる。全く何も無い状態からは何も生まれえないから、消滅した魂自体をもとにしている」

「それとさっきのことと、何か関係があるのか？」

苛々したように恋次が言うと、一護はまあ待てと返す。

赤いガラス玉を示すと、一護は再び口を開いた。

「この赤いのは、霊力の高い魂魄な。……妙だと思わねえか？ 尸魂界や虚圏には、霊力の高い魂魄がたくさんある。なのにどうして現世はそうじゃないんだ？」

ルキアは、そのガラス玉を見つめた。

考えて配置したのだろう。

現世以外の四つの本には赤いガラス玉が複数置かれているが、現世には一つしか置かれていない。

「それは、現世が器子で構成されているからであろう。残りの四つは霊子の世界だ。霊力が高いのは当然ではないか」

「じゃあ何で、器子で構成される現世に、霊力の高い魂魄があるんだ？」

「……………」

考えたこともなかった事実には、一同は首をひねる。

一番最初に口を開いたのは、やはり浦原だった。

「つまり……………現世に魂魄が再生する過程に、何か私達の知らない力が加わっている、と？」

一護は、それを聞いてうなずく。

「さすが。……………つつても、半分正解ってとこだけだな」

「どういうことだ、一護」

「全部の魂魄が、尸魂界に送られるわけじゃねえんだ。この、霊力の高い魂魄は、現世だろうが虚圏だろうが尸魂界だろうが、そこで死んだ時点で王土へ送られる」

死神たちは、眉をひそめた。

それは、明らかに魂魄の輪廻から外れている。

「霊力の高い魂魄は、野放しにしておけば他の魂魄を傷つける。それは、わかるだろう？」

「霊圧で中ててしまうものね」

一護は乱菊にうなずき、全ての赤いガラス玉を手を取った。

「ああ。だから、霊力の高い魂魄は、王土へ集められる」

手に持った全てを王土へ置き、一護はその本とガラス玉を俯瞰した。赤が、一か所に集められたせいで、王土はひどく目立っている。

「で、集められる過程で、魂魄からは霊力が全て奪われるようになってるんだ」

「どうやって？」

「それは言えねえ。けど、ここに生まれ変わった時点で、魂魄は霊

力を持たない。それで、その魂魄が死んだあとに輪廻の輪に戻すんだ。こうしたら他の魂魄を傷つけねえだろ？」

「話の筋としては通っているが……ずいぶん突拍子もない話だな」
雨竜が眼鏡を押し上げると、それがキラリと光を反射した。

「そうでもねえさ。何より、ずっとこういう仕組みだったんだからな」

「……一護」

低い声で名を呼ばれ、一護は平子を見る。

「つまり、藍染や他の破面は靈力が高かったから、ここへ生まれ変わったつちゆうことやな？」

「そうだ……地獄に堕ちたやつも、中にはいたみてえだけだな。そういう奴らも、地獄で消滅した後ここへ転生してる」

「それはええ。やけどな、俺が知りたいのは別のことや。何で、そいつとお前の妹が藍染と仲良うしゃべってんねん」

平子は忌々しげに冬獅郎を示す。

藍染に苦しみられた人間として、納得できない部分があるのだろう。

「それは……」

「俺が話す」

突然口を開いた冬獅郎に、一護は眉根を寄せた。

「だけど」

「今のあいつらのことを一番知ってるのは、俺だ」

「歩も引かないその態度を見て、一護は小さくため息をついた。

「わかった。なら、お前に任せる」

冬獅郎は頷くと、一同に向き直る。

「ここへ生まれ変わったやつらは、生前の記憶を持たねえ。ここで里親に拾われて、育てられる。そこまでは、いいか」

小さく、だがしっかりと頷いた雛森を見て、冬獅郎は話し続けた。

「王族は、他の民と同じに学校で学ぶ……夏梨も例外じゃねえ。俺

もその護衛として、一緒に学校へ行つたんだ。……で、転入した組にいたのが、あいつらだった」

「あいつら？」

「惣右介と、千亜と、……他だと拓と莉々音。他にもいるが、あの戦いに関わつたのはそいつらだけだ」

「……それは、偶然なんか？」

平子は視線を一護へと向けた。

その射るような視線を、一護は静かに受け止める。

「そんな偶然があるんか？ わざとと」

「どの学校へ通うかは、くじで決まる。常にどこに通うか決まっていたら、不都合があるからな。そのくじは俺が引いた……不正はない」

きつぱりと言い切つた一護に、平子は口を閉じる。

隣のひよ里は不満そうだったが、それでも冬獅郎が話し出すとそちらを向いた。

「夏梨は高等学舎で進学をやめたが、俺はその後の国院学舎まで進学した。惣右介と千亜も同じだ。それまでずっと組が一緒だったから……もう、二十年の付き合いになる」

「っ……！」

音にならぬ、咎める声に、冬獅郎は僅かに視線を揺らした。

「ふざけんなよ」

予想通りの反応に、一護は思わずため息をつきそうになる。

ひよ里を見やれば、すでに立ち上がった。

「何であんなんと友達ごっこやっとなねん！ あたしらはなあ！

あいつに何もかも狂わされてんぞ！ それを、何でや！」

「落ち着け、ひよ里」

冬獅郎に掴みかかろうとしたひよ里を、一護は割って入ることで止めた。

「お前もや！ なんでそんなんほっとくんや！」

「いーから、最後まで話を聞け」

強引に座らせ、一護は冬獅郎を振り返った。

「もう、俺が話すぞ」

「……ああ」

一護はまた小さくため息をつく。

予想通りの反応。

仕方ないとはいえ、再会して早々にという思いもあった。

「あいつらに、記憶はない……霊力も何も、あの頃あいつらが持っていたものは、名前と容姿しか残ってねえんだ。別人と言ってもいい。確かに同じ魂だけどな、あれはお前らが恨みを持っているやつらとは違うんだ」

「違わへん!」

「ひよ里……」

「死んで、生まれ変わったからって何もかも許されるんか!? ふざけんな! 何であいつらがあんなに平和に暮らしたんのを、黙って見とらないかんねん!」

ひよ里のいい分ももつともだ。

死んだからと言って、それが罪を償うことにはならない。

ただ、それは逆のことも言える。

「じゃあな、記憶も何もない、全く身に覚えのないことを、どうして生まれ変わった今も背負わなくちゃいけねえんだ?」

酷だとわかっていて、あえて一護は言った。

そうでない、と、伝わらないからだ。

「確かに、あいつらがやったことは許されることじゃねえ。俺や冬獅郎だって許したわけじゃねえさ。でもな、それを今のあいつらに押しつけることは、違う」

「……」

黙って立ち上がり、部屋の戸へとひよ里は歩いていく。

「どこへ行くつもりだ?」

「あいつらるところや。会って問い詰める」

一護が投げかけた、その言葉の冷たさには、ひよ里は気づかない。
一護はまたため息をつく、ひよ里の肩をつかんだ。

「それは、させねえ」

「ふざけんな。会って殴らんと、こっちの気が済まへん！」

「だつたらなあおさらだ」

「……どういう意味や」

僅かに肩の手に力がこもったのを感じ、ひよ里はまともに一護の顔を見た。

見て、凍りつく。

誰だと疑いたくなるほどに、その瞳は冷たかった。

「あいつらに、手出しはさせねえって言ってたんだ」

「一護……？ あいつらを、庇うんか？」

まだ座ったままだった平子も、立ち上がる。

冬獅郎が立ち上がるうとするのを制して、一護は平子へ向き直った。

「そつだ。あいつらは、もう俺の護るものだからな」

一護は、堂々と宣言した。

藍染たちを傷つけることは許さない、と。

彼らを護るのは、自分だと。

あの戦いを経験した者にとって、それは信じがたい言葉だった。

「何言つてんのか、わかっとするんか？」

平子の言葉に、険がこもる。

だが一護も引かなかった。

「ああ。あいつらはもう、王土の民だ。俺たちが護らないで、誰が護るんだ？」

その言葉が、一線だった。

平子が飛びかかるのと、冬獅郎が立ち上がるのが同時。

だが、一護の方が早かった。

軽く平子をかわし、その腕をねじり上げる。

「っ」

一瞬走った激痛に、平子は冷や汗をかく。だが、一護はすぐに手を離した。

「次は、手加減しねえ。まだ言うか？」

一護を見る平子の瞳には、紛れもない怒りがあった。仕方ない、と一護は思う。

しかし、だからといって退けはしない。

「なんでや……」

平子は、小さく言った。

その言葉に、ひよ里は息をのむ。

これほどまでに悲しみに満ちた怒りを、見たことがなかった。

「なんで、あいつらの肩もつねん！ お前の立場がどうか知ったもんか！ お前は、お前自身はどう思ってるねん！」

「……俺自身？」

面食らったように、一護は問い返す。

「そうや。王族としてのお前に聞いとるんとちゃう。死神代行の黒崎一護に聞いとるんや……！」

正直、その問いは予想外だった。

そして、その問いを反芻した一護は愕然とする。

「……わからねえ」

「わからんやと？」

「……考えたこと、ねえんだ」

その一言で、平子はその手を振り上げた。あわてて浮竹がその手をつかむ。

「待て平子！ 落ち着け」

「落ち着いとれるか！ わからんやと？ お前は、あいつのやったことを忘れたんか！？」

「そっじゃねえんだ」

その苦しげな声に、平子は力を緩めた。

今の一護に、先ほどまでの王族然とした硬い雰囲気はない。かつてともにいたころの、少年らしい読みやすさが目立っていた、その雰囲気だった。

本当にわからないのだと知り、ルキアは眉根を寄せる。

「忘れたわけじゃねえ……ねえ、けど……じゃあ、考えてどうにかなるのかよ」

「あ？」

「考えて、どうにかなる問題じゃ、ねえだろ。……俺が何をどう思おうと、あいつらがここへ生まれ変わることには変わりはない。だったら、考えない方が楽じゃねえか」

そうだ。

あの頃の自分は、そうして思考を放棄した。

たくさんの方がありすぎて、とうてい抱えられそうになかったからだ。

「それじゃ、いけねえのかよ」

「いけねえだと？ お前それでも」

「いーちーごつ！ 今いいか？」

あまりにも場にそぐわない、気軽な声でした。

振り返れば、扉を開けてひらひらと手を振っている青年が一人。

「蓮杖殿……？」

ルキアが声を上げると同時に、一護もまた口を開く。

「祥瑛……何だ、来てたのか」

蓮杖が反応したのは、後者だった。

「へえ？ それが遠路はるばるやってきた親友に対する挨拶？」

「誰が親友だ。今すぐ自称に切り替える」

「お断りだね。僕の親友なんだ、光栄だろ？」

「何がどう光栄なのかぜひと聞きてえもんだな」

唐突な場面転換についていけず、一同は交互に二人の顔を見る。それを見かねたのか、冬獅郎が割って入った。

「……用件は」
低く問うた冬獅郎に、蓮杖は頷く。

「そうそう。忘れるところだったよ。……陛下との謁見、いつになる」

「……お前、それわざわざ今聞きに来ることか？」
呆れたような一護に、蓮杖はにやりと口角を上げた。

「重要だろ？ 他の四人だって待ってるんだしさ」

「それなら今……」

「東宮」

次に扉から顔をのぞかせた雷雨に、一護はまたため息をつきそうになった。

「人払いは、済ませたはずなんだけどな」

「急ぎなもので。陛下からの御文です」

恭しく両手で差し出された紙を手に取ると、一護はざっとそれを一瞥した。

「謁見は……三十分後だ。今すぐ支度してこい」

「了解。じゃあね」

再びひらひらと手を振り去っていく蓮杖に、一護はため息をついた。

「……なんなんだあいつは」

だが、それには誰も答えようがない。

平子など、中途半端な体制で固まったままだ。

毒気を抜かれたようなその表情に、一護は首を横へ振る。

「悪いな。邪魔が入って」

「……」

無然としたままのひよ里を一瞬見やると、一護は手に持ったままの紙を示した。

「悪い。あいつらと、陛下のところに行かなくちゃいけねえ……できただけ早く戻ってくるつもりだけど」

心底申し訳なさそうな一護に、もはや何も言つ気が起きなくなる。「わかった。また、後でええ」
ため息交じりに言った平子に頷くと、一護もまた足早に部屋を出て行った。

冬獅郎もそれを追い、残された一同の間に気まずい沈黙が落ちる。それを破ったのは、またしても外からの人物だった。

「どう？ 全部、聞いた？」

桐生の問う声に、ひよ里は泣きそうになる。
もう、何が何だかわからなかった。

a c c e p t a n c e o r f a r e w e l l (後書き)

タイトル日本語訳は「受容か、決別か」

完全に説明パートとなり果てたこの話。

拙い説明になって申し訳ありません。

どうぞビー玉などで実演してみてください(そういう問題じゃない)

それでは感想などお待ちしております。

allipendulum's wing again (前書き)

七十七話の直後から始まります。

桐生は室内を一瞥し、その空気の重さに内心ため息をついた。

たった一度の説明だけで、それも中途半端に終わってしまったものだけで、受け入れられるものではない。

そもそも、受け入れる必要さえ本当はなかったのだ。

それでも、一護は何らかの形で決着をつけることを求めるだろう。ならば、その手助けをしなくてはいけない。

まだ年若い主に任せ切るには、いささか荷が勝ちすぎているから。

「……受け入れられないわよね」

とん、と桐生はひよ里の肩をたたく。

ひよ里は、唇を引き結んで深く頷いた。

「でも、それは私達も同じなのよ。……一護君もね」

桐生の声に、ずっとうつぶむいていた織姫ははっと顔を上げた。

「そりゃそうでしょう。自分だって命かけてあれを戦い抜いたんだもの。……倒したはずの相手が、どこかでのうのうと暮らしているなんて……そんなの、簡単に受け入れられるものじゃないわ」

「でも……」

口を開こうとしたひよ里を制して、桐生はなおも話し続けた。

「一護君はね、東宮としての自分と黒崎一護としての自分を、きっちりわけているの。それで、今の彼のほとんどは東宮としての自分だわ。その自分が、これは理だから・と納得していたから、きつと黒崎一護としての自分も納得しているって勘違いしてたのよ」

雨竜は一度堅く目を閉じ、再びゆっくりと開いた。

やはり、先ほど目の前に立っていたのは黒崎一護ではなかった。

うすうす感じてはいたが、目の前に立っていたのは、まぎれもなく皇太子だった。

なんて残酷な問いを、向けてしまったのだろうか。

先ほど平子が問いかけたのは、黒崎一護に対しての問いだった。だがあの時の一護は、皇太子だった。

混乱して当然だ。

だが自分たちは、それに気づかず強引に答えを求めたのだ。

後で会ったら、何よりもまずそれを先に謝らなくてはいけない。

そう思って、雨竜は視線を扉へと移す。

固く閉じられたその扉が、次に開けられるのはいつになるだろうか。

「もちろんね、そういう勘違いをしていたことに気づかなくて、その上ずっとほったらかしていたのは一護君に問題があるわ。……あなた達を責めるつもりはない。ないけど、一つだけ思い出してほしいの」

そこまで言って、桐生は短く息を継いだ。

いちいち間を空けないと、自分もおかしくなってしまうそうだった。

さっき、扉の向こうで聞いていた会話。

それは一護にとって途方もなく残酷な問いだった。

そして今自分が言おうとしているのは、目の前に立つ彼の仲間にとって残酷なこと。

そんなことを一護が望まないとわかっているけど、それでも言わなくてはいけないとわかっていても、言いたくはないことだ。

でも、自分は一護の臣だ。

だからどんな手を使っても、彼の望む結果を出さなくてはいけない。

覚悟を決めた桐生は、ゆっくりと口を開く。

「思い出して。一護君は、あの戦いから三日と経たないうちに自分の出生について、そしてこの理について知らされた。その一ヶ月後には、ここへきていた。……あなた達よりもずっと早い段階で、あ

の子はこれを知らなくちゃいけないかったの」
ルキアが息をのむ。

すっかり失念していた。

それは、一護にとつてどれだけ残酷なことだったのだろう。
自らの刃で、戦いに終止符を打った。

それを自分たちは称えたし、それによつて取り戻した平和の中でずつと生きてきた。

だが一護はそうではないのだ。

取り戻した平和をかみしめる余韻もないままに、一護はここへ来た。それまでの一か月、何も知らぬ自分たちに戦いについてあれこれと聞かれ、それを褒められ。

知らなかったこととはいえ、それが一護にとつてどれだけ酷なことであつたか。

「…………冬獅郎だつてそう。戦いが終わったからつて、それはあなた達と同じ。藍染に対する憎しみが消えることなんてないわ。それでも、冬獅郎はここへ来た以上はちゃんとここで生きてきた。あいつが、今の彼らのことをどう思つてるかなんて知らないわ。でも、無闇に責める様な真似はしないで。たとえ、あいつが彼らをいい友達だと言つたとしてもよ。……………歩んできた道が違うだけで、結局全員同じところからはじまつて、同じ傷を受けているんだもの。あなた達と、何も変わらないわ」

誰も言葉を発しない。

それは桐生の言葉が心に痛いからでもあつたし、一護と冬獅郎に対して申し訳ないからでもあつたし、何よりまだ、全て受け入れられていないからでもあつた。

「…………さつき、彼らに会つたときに夏梨サンが言つていたのは、そういう意味だつたんすね」

浦原が言つと、桐生は黙つて彼を見つめた。

だがその視線が交わることはない。

浦原は、机の上で組まれた己の手をじっと見つめていた。

「あの戦いから、もう三十年も経った……日番谷サンは六年で、一護サンなんかもつと短い時間でそれを受け入れた。それに比べれば、確かにアタシ達は恵まれている。夏梨サンが怒るのも当たり前だ」

「そうだな……俺達は、二人に比べればずっと恵まれていた。あの戦いの夢を見ずに眠れる夜があるほどに、時間を与えられていた。それも全部、一護君のおかげなのに、傷つけた」

その最後の言葉を聞いて、花太郎はぎゅっと手を握り締めた。

ずっと心配していたのに、自分たちのせいで傷つけてしまったなんて、そんなの仲間として失格だ。

深い悔恨の念が、花太郎を襲う。

だが、口から出た言葉は、二度と戻ってこない。

過ぎ去った時も、また。

「……わかってるわ。そんなもん」

平子がぶっきらぼうに言う。

彼とて、一護を傷つけるためにわざわざ来たわけではない。

それをどうして。

言ったことに後悔はない。

だが、一護のあんな動揺した表情は見たくなかった。

たとえそれが仮面であったとしても、元気な姿を見たくてここへ来たのに。

「……納得いかへん」

それでも、ひよ里は首を横へふった。

聞き分けのない子供のようなその仕草に、桐生は瞳を閉じる。

昔から、一度言いだしたことを引っ込めるような、そんな可愛い性分ではないのだ。

「何言われても、藍染を恨まんなんてことはできへん。それで一護がどんなに苦しい思いをしてきたとしても、あたしらだって苦しい思いしてきたんや。それをこんなんで納得できへん」

「恨むな、なんて言わないわ。あなたは恨んでいいのよ。それだけのことをされたのだから」

桐生の声は、どこまでも穏やかだった。

悲しいほどに、その言葉は心に沁みる。

いつそ突き放してくれた方が楽なんじゃないか、とひよ里は思った。

「……それにしても、あなた達はすごいわね」

「どういう意味です？」

突然の称賛に、弓親は眉をひそめた。

それは皮肉か何かか。

だが、桐生はあくまで純粹な賛辞のつもりだった。

「すごいわよ……言ったでしょ。一護君は、東宮としての自分と黒崎一護としての自分をきっちりわけられるんだって。東宮として……王族として、為政者として生きるには、簡単に動揺するようなことは許されない。だってそうでしょ？ 政治家なんてお互いの足元すくうような仕事だわ。いちいち動揺してて、生き残れるような場所じゃない」

何を言いたいのか、それがわからなくて、恋次は困惑する。

「だから、一護君は簡単に動揺しない強い精神力を手に入れた。そんな一護君を、あなた達は言葉一つで簡単に揺さぶれる……私には、とうていできない」

桐生はそう言って目を伏せた。

「ついつい忘れちゃうのよ。彼が、もとはただの人だったってこと忘れちゃって、何を言おうが何をしようが大丈夫だって思っちゃう……それで、傷つけることだって何度もしてきたのに」

ルキアは黙って桐生を見ていた。

その感覚には、覚えがある。

元はただの高校生だった一護を、自分はあの戦いに引きずり込んだ。それでも、一護がいつもちゃんと生き残るせいで、何を期待しても大丈夫だどついつい思ってしまった。それが、どれだけ一護に酷なことか、時折気づいて、愕然としたことは何度もある。

再び、重い沈黙がその部屋に満ちる。

それを破ったのは、意外にもチャドだった。

「一護が戻ってくるのは、いつになる」

「……わからないわ。謁見って言っても、今日のところは到着の挨拶だけになると思うから……それでも、終わったら先に他の用事を済ませてくるかもしれない。そうしたらもつと時間がかかるはず」

「それなら、それまで一人で考えてもいいか」

桐生はチャドをじつと見ると、頷いた。

「わかったわ。あなた達には、隊舎の二画を解放することになっているの。そこなら一人になれる。ついてきて」

一角は重い腰を上げた。

もともと、深く物事を考えるのは得意ではない。

それでも考えることをやめない、あまりにも自分らしくないそれに、嫌気がさしていた。

一方、一言も口を開かなかった桃を案じて、恋次はそつと視線を向ける。

だが、その瞳は思ったよりもしつかりしていた。

むしろ誰よりもしつかりしているんじゃないかというそれに、恋次は戸惑う。

何もなければいいが、と心の隅で案じ、そしてもう一人の友人を思った。

市丸が生きてる、なんて知ったら、あいつはどう思うだろうか。
無邪気に喜ぶような真似は、すまい。

確かに、吉良は最後までギンを信じているような節があったし、結局それは正しかったのだけれど。

でも、この状況で素直な感情を述べるほど、考えなしではないのだ。そもそも、彼の中でも市丸は死んだということを決着はついているわけ。

それが、少し違う形であるとはいえ覆されたとしたら、喜ぶことはしないのかもしれないと思った。

そして、もっとギンに近かった乱菊と言えば、こちらもまた何も言わない。

動揺しているのもあった。

幼いころからずっと一緒にいたから、どの頃の容姿でもよく知っている。

まるで時が戻ったかのようなそれに、記憶も何もないとはいえ、動揺してしまったのは事実だった。

それに、ギンを殺した藍染を、許すことなどできない。

雛森を傷つけた者として、かつて自分の上司だった冬獅郎も、それは同じだったはずだ。

それが、時を経たことで変わってしまったのかと感じた。

乱菊の心に広がっているのは、恨みよりも何よりも、ひとりぼっちになってしまった心細さのような気がした。

同じ思いを抱いてくれる人は、もう乱菊のそばにはいない。

誰もが、それぞれの形で進んでいるのだ。

もちろん自分だっけと足踏みしていたわけではない。

それでも、他よりはずっと遅い歩みだった。たくさんの人に置いていかれて、もう見える範囲には誰もいなくなってしまった。

その言いようのない寂しさに、乱菊は唇をかんだ。

「苛立つてるねえ」

隣から聞こえた能天気な声に、一護はこめかみがひきつった感覚がした。

蓮杖といると、いつもこういうことばかりだ。

「悪いか」

「いや？ 別に悪くなんかないけどさ。……なんていうか、珍しいなって思ってた」

「何がだよ」

「そうやって動揺するところじゃ……最近、お主は人であることをやめたのかと思う時があるぞ」

夜一に指摘され、一護は眉間にしわを寄せる。

「どつという意味っすか？」

「もう少し、自分のために時間を使ってもいいってことだよ。君は少し働きすぎるくらいがある」

九頭柳の冷静な指摘に、一護は黙りこむ。

それが事実だという自覚はあった。

そして、反論はできないが、せめて言い訳はしようとして口を開いた瞬間だった。

霊王の住まう宮への門が開いたのは。

表情を引き締め、皇太子としての自分へと切り替えた一護を見て、白哉は内心ため息をつく。

今まで何度も言ったが、こればかりはちっとも理解しないのだと、

いかげん諦めてもいた。

all pendulums swing again (後書き)

タイトル日本語訳は「振り子は再び動き出す」

前の話ですつぱかした補足をいくつか。

祥瑛というのは蓮杖の名前です。

それから、こちらは活動報告でしたのですが、私は藍染をはじめとする破面は全て死んだという設定で書いています。

ただ、ギンが藍染を裏切ったという設定は変わりませんし、藍染がやられざまに言ったセリフもそのまま。

ついでに言えば一護も霊力を失っていません（わかってるっての）

そしてここでお知らせというかお詫びを一つ。

私は学生なので、もちろんテスト期間というものがございます。

……ということいろいろ察して下さいませ。

ここまで連続でなんとかやってきたのも、テスト期間までにある程度のところまで行きたかったからでして。

私の思いつく限り、ここが一番キリのいいところなので（嘘つけとか言わないで下さいね。本当にここから先は終わりまでノンストップなんです）

3/9まで更新を停止させていただきました。

そこからはまたどんどん連続で行きますので、宜しくお願いいたします。

それでは感想などお待ちしております。

f a k e v i s o r s (前書き)

七十八話の少し後から始まります。

「あ、終わった？」

霊王との謁見を終えて出てきた六人を待ちうけていたのは、夏梨だった。

首の右側を掻くような仕草に、一護は目を細める。

「夏梨か……お帰り」

別の道を通って戻って来た夏梨には、慌ただしかつこともあつてまだ会っていなかった。

そうして、一護は夏梨の改まった服装に目を留める。

「今から帰還の挨拶行ってくるの。そっちが終わるの待ってたんだ」

「そうか。悪かったな、待たせて」

脇を通り抜けていく五人を見送り、一護は夏梨に向き直った。

「で、何の用だ？」

さも当たり前のようなその言葉。

今迄の会話から考えれば不自然に感じられるそれに、夏梨も当然のように答えた。

「うん。これ、預かってきたから」

そう言っただけ差し出したのは、四通の封書。

差し出し人の名前を認め、一護は目を見開いた。

和紙　檀紙と呼ばれる、紙のなかでも高級な部類に入るそれに書かれた一通は、すでに見なれた手蹟によるものだった。

それよりも一護の目を引いたのは、残りの三通。

懐かしい手触りに目を細めて、少しだけ微笑んだ。

それを見た夏梨は、内心でそつと息を吐いた。

兄と、その仲間との間にあつた事を想像するのは難くない。

何より、僅かにこわばつた兄の雰囲気、その予想を裏付けていた。

それが、この封書を受けとった瞬間、確かに弱まった。

大丈夫だと思う。多分。

三十年の時をもつともしなかった、固く強い絆なら。

「じゃ、あたしは陛下の所に行くから」

ひらひらと手を振り、門のなかへと姿を消した妹を、一護は黙って見送った。

閉じた門と、手のなかの封書を交互に見やり、深く息を吸う。

大丈夫だと、考えた。

あてがわれたのは、隊舎の寮だった。

三室を二人で使うように、とそれぞれ振り分けられ、二人きりになった雨竜と織姫はようやく溜息をついた。

わずかに持ってきた最低限の荷物は、すでに寝室に置いた。

この三つの部屋は幾分変わった作りになっていて、横に三つ並んだ部屋の内、端の二つはそれぞれ一人用の寝室、間の一つは机や長椅子が備え付けられた部屋になっている。

さらに言うならば、寝室は間の部屋としか繋がっていない。

聞けば、その三つを一つの単位として二人組に与えられるのだという。

間の部屋は執務室に、そして残りの二つをそれぞれの私室として使うのが通例らしい。

織姫は、火鉢に据えられた鉄瓶から湯を注ぎ、急須を温めた。棚から取り出した茶葉はすぐによい香りを立て、その心を落ち着ける。

ゆっくりと二対の湯呑に注ぐと、雨竜は無言のままそれを手に取った。

「……………恨みは、あるのかい？」

ぼつりと言われたそれに、織姫は首をかしげる。

それが藍染らに対するものを聞かれたのだと気づいて、織姫は首を横へと振った。

「恨みなんて、ないわ……………私が囚われたのなんて、ほんの一時のことだもの。直接戦った訳でもない。何か傷つけられた訳でもない。恨む理由なんて、無いもわ」

雨竜は穏やかな瞳で織姫を見つめる。

もとより、妻は人を恨む事の出来ない女だ。

否定の言葉が返って来る事を知っていて、それでもなお問うたのは、次の言葉を願っていたからだ。

「あなたは？……………あなたは、恨むの？」

織姫も、全てわかった上でその望まれた言葉を返した。

「……………恨まないさ。お前が恨まないというのなら、なおのこと」

自分よりもはるかにその権利を持つ人達がいる。

二人は、それをよくわかっていて。

だが例え、その人達がいなくても。

もし、自分達だけが藍染の姦計に貶められたのだとしても、二人が藍染を目の敵とし、終生の恨みの先とすることはなかっただろう。

過去に何があるうと、二人は今幸せであった。

伴侶を得、子供たちを得、まだ小さな頃の悲しい別れを乗り越えて。あれは、たった一夜のはかない夢だと、そう思われることもあるほ

どに、人生を歩んできた。

それだけの幸せを得て、恨みを持つことなどできようはずもない。

「みんな、無事だったんだから……」

しかし一方では、そういう訳にもいかない者達もいる。

間の部屋にしどけなく寝そべった乱菊に、桃は熱いお茶をそっと差し出した。

その行為に応える声はない。

乱菊がどことも言えぬ中空を見つめているのを見て、桃は静かに目を閉じた。

かつての自分も同じ目をしていたのだろうか、と。そう、思う。

少なくとも、今の桃は冷静だった。

死んだはずの人が生きていた。

その驚きも。

自分が心から慕った上司に再び巡り合うことができた。

その喜びも。

ひどく裏切られ、傷つけられた。

その怒りも。

全て奥底に沈んだように、心に乱れは無かった。

何故、とそう問われたところで、彼女は答えないだろう。ただ一人、最も初めに伝えたい、その人を除いて。

この心の風が、少しでも乱菊を癒せばいい。

そう思つて、桃は何も言わなかった。

理解のためになによりも必要なのが、心静かに考える時間だというのを、彼女が一番良く知っているから。

「……みんなは？」

霊王の住まう正宮府から戻つて来た一護は、彼らの姿が無いのに眉を潜めた。

「隊舎へ案内したわ。今は、それぞれの部屋に」

そうか、と返事をして、一護は隣室へと消えた。

今からまた会いに行くにしろ、そうでないにしろ、霊王に会う為に着替えた正装のままでは不都合であるから着替えてしまふのだろう。

その立場ゆえ、あらゆる場面においてその服御までも細かく定められている

それが、今の一護だ。

その表情から陰りがとれることは、無い。

頭の中に某かの案件が燻らぬことも、また、ない。

それであっても、一護は一護だ。

そして、彼ら彼女もまた、それは受け入れていた。自分達が推していたほど、受け入れ難い問題では無かったのかも知れない。

或いは、もう一つと比べて、あまりにも瑣末に感じられたのか。どちらにせよ、今はそのもう一つこそが一大事であることに変わりはない。

やがて戻ってきた一護は、やはり桐生が予測していた通りに正装を解いていた。

先程と同じ、家族と過ごす際の寛いだ服。

それでも、その手に握られていたのは一枚の書類だった。

「それは？」

「陛下から許可は頂いた。案内してくれ」

その言には答えず、一護は自らの要求を発する。

桐生は一つ頷くと、部屋の扉を開けた。

飛び込んできた一筋の光を疎むように右手を払い、扉から一步下がる。

丁寧な礼をとった桐生に、一護は何も言わなかった。

割り当てられた部屋に入ったのはいいが、それはそれで落ちつかない。

なんととはなしに最初の会議室へと足を運んだ恋次が目にしたのは、どうやら同じ考えだったらしい仲間たちの姿だった。

「……貴様もか、恋次」

ルキアに言われ、無言で頷く。

そこには、平子とひよ里、そして乱菊を除く全員が集まっていた。

「何だ、みんな集まっていたのか」
不意に後ろから声がかかり、振り向いたそこには一護が立っていた。
「部屋に案内したって聞いてたからな」
そう言った一護は、目を合わせない。
誰もが、誰とも目を合わせようとしなかった。

沈黙が、落ちる。

だが一護は、それを全く気にしていないかのように手近な椅子に腰かけた。

周りの空気など、気にしては務まらない職業だ。

一護にとって、これは何の問題にもならないことだった。

「……さつきは、悪かったな」

唐突に口を開いたのは、石田だった。

「え？」

怪訝そうに、一護が石田を見る。

何の事だと問おうとした時、今度は織姫が口を開いた。

「……さつきの黒崎君は、王族として私たちに全て話してくれた。

なのに、私たちは黒崎君の答えを求めた。混乱させてしまつて、ごめんなさい」

啞然としたままの一護に、雨竜はクイと眼鏡を上げた。

「何だ、その顔は」

「いや……それは、俺が謝ることだろ」

「え……？」

織姫が首をかしげると、一護は机の上に置いた書類を手を取った。

その左端に触れ、再び口を開く。

「俺は、普段通り過ぎた……こっちのやつらは、俺がそれを使い分けている事を知っているから、それに甘えてる。だけど、お前らは皆昨日知ったようなばかりだ。俺はそれを考えてなかった。……」

混乱させた事を謝るべきなのは、俺だ。「ごめん」

一拍置いて笑いだしたのは、織姫だった。

「変なの……結局、同じじゃない」

くすくすと笑うその仕草が伝染し、終いには誰もが笑いだした。

馬鹿みたい、とか、アホらしい、とか。

そんな事を呟きながら。

「……もともと、大した恨みなんてねえんだよ」

ぽつりと、恋次が言う。

「確かに、あいつらには散々な目にあわされた。……でももう全部終わった事だ。今さら何したって変わる訳もねえ。恨むだけ、無駄だ」

その言葉に、一護はそつと目を細める。

これこそが、求めていた言葉だった。

勝ち取った平和のなかで、何にもとらわれずに幸せに暮らしてほしい。

それだけが、一護の望みだったのだから。

「理だというのなら、それはもうどうにもならぬ。それに、何より傷つけられたのは、貴様であろう……貴様がそれでよいというのなら、私もそれでよい」

ルキアの穏やかな瞳を見て、一護は少し笑う。

冬獅郎達に言っていたのは、自分の出生と、今の立場。

そして、あの戦いで起こった事、全てだ。

生まれてからあの時まで十六年の人生全てが、藍染の掌上にあった事、それも全て話すように頼んだ。

不幸をひけらかすつもりではない。
ただ、あの戦いであったことは、彼ら全員に知る権利がある。
それを踏みにじって、黙ったまま王土へ来た事も、ずっと気になっ
ていたのだ。

「何より傷つけられた……か。そんなつもりはねえんだけどな。…
…もっと傷ついた奴も、いっぱいいるだろ」

仮面の軍勢とか、と一護が言うと、浮竹は頷いた。

「彼らも、そうだね……一護君、平子達の事も、赦してやってくれ
ないか」

「赦す？」

「さっきのことだ。君を、不用意に傷つけてしまっただろう」
そう言われて、一護は笑う。

「赦すも何も、はじめから怒っちゃいないっすよ。あんなの、当た
り前の反応だ」

その表情に嘘は無い。

そうか、と浮竹は呟き、ほっとしたように息を吐いた。

ようやく、全てのわだかまりが消えた様な気がした。

「それはそうと、何なんですか？ その紙」

「ん？ ああ……」

花太郎に問われた一護は、右襟を直すように触れ、その書類に手を
伸ばした。

「あいつらのことを、どう思ってるかって訊かれたろ？ その、答」
花太郎が首をかしげると、一護はそれを浮竹に渡す。

渡されたままに受け取った浮竹は、ざっと一瞥して首をかしげた。

「これは？」

「来年度、新規で採用する官吏の名簿です。……一応、正式な発表

は明日なんすけど、陛下が見せても構わないって」

一応内密にして下さいね、そう付け足した一護に、浮竹は再び首を傾げた。

「それと、その答と、何か関係があるのかい？」

問われた一護は、無言のまま読むように促す。

その書類に書かれているのは、数人の名前。

右から順に目を通して行った浮竹は、ある一点で視線を止めた、

「これが、君の答かい？」

「ええ……立場も何もなしの答とは言えねえっすけど、でも、それが俺の答です」

確かに、書類の左端には、霊王の署名とともに一護の物もまた記されていた。

「……そうか。君は、乗り越えたんだね」

一護は一瞬目を見開いたが、すぐに口角を上げる。

「もともと、ずっと悩んでられるような複雑な作りじゃないんすよ」
そうして、困惑した表情の他の面々を見回した。

「惣右介、という少年を、来年度から官吏として採用する」

言われた意味が一瞬分からず、だが少しして分かった時、恋次は大きく目を見開いた。

「お前……」

「俺はこの少年に会った事は無い。冬獅郎や夏梨と同じ学舎らしいが、詳しい話を聞いたこともない……俺が知っているのは、国院学舎……現世でいう大学だな。それを優秀な成績で卒業し、登用試験においても十分な成績を収めた事。それだけだ。優秀なものが自ら官吏として志願してきたのなら、それを採らない理由は無」

淡々とした口調だが、それには有無を言わせぬ決意がこめられている。

ルキアは何かを言おうとしたが、やめたようだった。

「それが、お前の答えなのか？」
ただ一人、チャドだけが一護へ問いかける。
「ああ。死んで、生まれ変わる前の事は関係ない。俺は心からそう思う。だから、こうした」
チャドは、そうか、とだけ言った。

「優秀な、民を想うよい官吏になってほしいと思う。……大丈夫だろ。仲間がいれば、道を踏み外す事はねえ。彼には、いい友達が多
いみてえだから」

それが誰なのかは、聞かずともわかった。

街で聞いた会話　　そういうことなのだろう。

それに、と一護は付け足した。

「道を踏み外させないのが、俺の役目だ」
しっかりとした口調で言い切った一護に、ルキアが大きく目を見開く。

一護の目指す姿が、見えた様な気がした。

そうか、と思う。

あいつは何も変わっていないという、その言葉の真の意味が漸く分った。

一護の強さは、理解し、赦す事だ。

一度の間違いを責めるよりも、次の間違いをさせないように見守る。上に立つ者として、これ以上ふさわしい強さがあるだろうか。

そのしなやかな強さを目にし、ルキアはそつと目を閉じた。
そうだとしたら、一護は誰よりも霊王の座にふさわしい。

かつての幼さも、未熟さもない。

そこにいるのは、立派に成長を遂げた、一人の人間だった。自分らしくあることと、立場に相応しくあることと。

一護にとって、それは対極的なものはずだったのに。

ルキアは、誇らしいと感じた。

一護をではない。

一護と共に戦い、仲間としてあれた自分を、他の仲間を。心から、誇らしいと感じた。

一護は、おもむろに机に手を置く。

机に触れた爪が、微かな音をたてた。

そのまま立ち上がると、一護は扉へと向かう。

「平子たちのところ、行ってくる」

そう言った一護を、誰も止めない。

今話された全てのことを伝えに行くのだとわかっているけど、それが一護からの最大限の誠意だと知っているから。

あの二人がそれを聞いてどう思うか、それはわからない。

それでも、例え納得のいかない部分があったとしても、彼らはその思いを隠すような気がした。

隠して、上辺だけであつても受け入れるだろう。

仲間として、この再会の場で決定的な亀裂を産むことを避けるという理由もある。

だが、それ以上に。

彼らも、そして一護も「仮面の軍勢」なのだから……

扉を叩く音に顔を上げると、未だに一言も発しない赤ジャージの仲間が姿が目に入った。

「誰や？」

平子が問うと、一瞬の間を開けて言葉が返される。

それは、今最も恐れていた人物の声だった。

「俺だ。入っても、いいか」

それまで身じろぎ一つしなかったひよ里は、はっとして扉を見つめる。

平子もまた目元に険をにじませた。

早すぎる、と感じた。

何をどうするべきなのか、まだ全くわかっていないというのに。

返事が無いのをいぶかしんだのだろう、再び声が聞こえる。

「平子？ 話したい事があるんだ。入れてくれ」

一度唇をきつく噛み、必要に迫られたかのように口を開いた平子が目にしたのは、立ち上がったひよ里の姿だった。

ひたすら無言のまま扉まで歩き、無言のまま扉を開ける。

「入れ」

そこで漸く言葉を発したひよ里に、一護は無言で頷いた。

「……で、何や？ 話したい事って」

そう言ったのは、ひよ里だった。

平子は何も言わない。

平子は、一護を見た瞬間、自分の思いがある程度固まってきたのを感じていた。

だから、一護と会話をすべきなのは、自分では無くひよ里だと感じたのだ。

ひよ里がまだ何も受け入れられていないというのは、はっきりと感じられた。

それを感じているのは、長く一緒にいる仲間としての勘ではなく、本能に近い部分なのかもしれない。

死神として在りながら、虚としての側面も持つ彼らは、その本能というものを強く内に感じて生きている。

今のひよ里は、常のはっきりとした光のような雰囲気では無く、血のような、どこか生臭ささえ感じる獣に近い雰囲気醸し出していた。

そして、それは一護も感じているはずだった。

同じく虚としての側面を持つ、一護も。

「これを、見てくれ」

そう言つて、一護は先ほどの書類を差し出す。

ひよ里がその名前に気付くには、短い時間すら要しなかった。

「来年、官吏として登用する者の名簿だ。右から、登用試験の成績の順に並んでる」

その四番目を鋭く見据えたまま、ひよ里は顔を上げない。

書類を手に取りさえしないその様子は、ひよ里の意志を表していた。

少し離れた、書類の文字を読めない位置に立っている平子にも、話の流れからおおよそのことが掴めたのだろう。

彼は書類では無く、真っ直ぐに一護を見据えていた。

「さっき聞いてきただろ？ 俺自身が、あいつらのことをどう思っているかって」

これが答えだ、そう告げた一護を、ひよ里は未だに見なかった。

「立場も何もない、俺個人としての答えとは言い切れねえけど、でも俺は、これが俺の意志で印したものだって断言できる」

一護はそうして、末尾の署名を指した。

複雑な朱印の右上に書かれているのは、その位を示す長々しい文字と、そして二文字の名前。

それを見据えて、ひよ里は唇をかみしめた。

「……畏かもしれへん」

ぽつりと言ったひよ里は、すぐにその後をつぐ。

「あいつのやりそうなことやる。組織ン中に入り込んで、周りみんな信用させて、……そんで」

堰を切ったように話していたのに、ひよ里は唐突に言葉を切った。

「……そんで、裏切るんや」

平子は何も言わなかった。

一護を見据えていた瞳さえも閉じて、ただ全霊を以って耳を傾けていた。

「そつかもしれねえ」

思いがけない肯定に、ひよ里ははっと顔を上げた。

「あいつらには、記憶も霊力も、何も残ってねえ。……でも、魂そのものは、そう簡単には変わらねえ。ひよつとしたら、あいつはまた何かを企んでるのかもしれねえ」

一護は淡々と言葉を紡いだ。

「でも、俺は信じてみようと思う」

その一言を、平子は愚かだと思った。

あれほどのことを目にして、それでもなお、そう言うのか。

「死ぬで」

ひよ里が言った言葉は、ひどく簡素だった。でも、それが全てだ。

藍染が、また同じことを企んでいるのだとしたら、今度こそ狙われるのは一護の首だ。

「そうだな」

一護も、それを全て了解している。

伊達に長い間、ここに居る訳ではないのだ。

「でも、今のあいつには仲間がいるから」

仲間、とひよ里は呟いた。

それは、かつての藍染にはあまりにも遠い言葉だった。自分以外を信じようとしないうの男には、仲間を求め、信じ合う自分たちは弱者以外の何者でもなかったはずだ。

「あの戦いで、俺は初めてあいつの刀に触れられた」

ひよ里は何も言わない。

これは一護の独白で、自分たちはそれを聞くに過ぎないのだと感じた。

「刀を合わせれば、相手の心が少しだけわかる。……少なくとも、

俺はそう思う。それで、あいつの刀には……孤独しかなかった」

ひよ里の瞳が、僅かに見開かれた。

あの男に孤独を知る感受性があるとは、思えない。

それでも、一護が言うのなら、それは真実のような気がした。

「もしあいつの力が、生まれてからずっと飛びぬけていたのなら……

…あいつは、同じ目線に立ってくれる存在を知らなかったんじゃないか」

そう言った一護の瞳は、一抹の悲しみを映しているように見えた。仲間をもつ歓びを知っている彼だからこそ、それは寂しい事に感じられたのだろう。

「周りのやつらは皆、そういう存在を知っている。周りがみんな持っていて、自分にだけはそれが無い……そうだったとしたら、あいつもきつと羨ましいと思った筈なんだ。自分も、そんな存在が欲しいって」

一護はそう言って、言葉を切った。

ゆっくりとした語り口調は、言い聞かせるためではないのだろう。おそらく、自分の中から慎重に言葉を選びとっているのだ。

「でも、あの時のあいつには、そんな存在がどこにもいなかった。あいつは、最後の最後まで、仲間という存在を知らないまま死んでいった。……でも、今は違う」

ゆっくりと、一護は自分の手を握りこむ。

膝近くで重ねられたその手は、まさしく武人のそれだった。この、何重もの堀と何百もの人に護られるだけの者に、決してありえないそれは、一護がかつて共に戦った仲間の一人である事を明確に主張していた。

「今のあいつには、仲間がいる……飛びぬけた力を持っているわけでもない、ただの子供だ」

「力を隠しとるのかもしれへん」

なおも言い募るひよ里だが、それでもその言葉に先ほどまでの勢いは無い。

引くに引けない状況になっている事は、そういう状況に追い込んだ一護が一番よくわかっている。

彼女が大変な天の邪鬼で、自分が上手く引いてやらなくてはいけないことも。

だから、一護は手を差し伸べた。

行き場を無くした彼女が、素直に手を預けてくれる事を祈って。

「そうかもしれないな。……でも、あいつがもしまた何かしたとしても、また俺が止めてみせる」

そう断言することが許されるのは、あの戦いの幕を引いた一護だけだ。

「今のあいつを信じるのは、俺の意志だ。だから、何かあった時は俺が責任を取る。……また、護ってみせる」

ふっ、と笑う気配を感じて、一護は視線を上げた。

その瞬間、平子と視線が交わる。

「ずいぶん自信やな」

「……だな」

どこか苦笑に似た表情を見せた後、一護はひよ里を見た。

「あいつを赦す必要は、どこにもねえよ。……ただ、俺は、俺を信じてほしいだけだ」

何があっても、また自分が止めてみせる。

その言葉を信じてほしい、と。

僅かな沈黙を経て、ひよ里はしぶしぶといった様子で口を開いた。そうまで言われて、信じない訳にはいかない。

仲間として。

「あいつら斬る用事が出来たら、絶対に呼べ。ええな？」

その瞬間に噴き出した平子に、ひよ里は立ち上がりざまに蹴りを見舞った。

どこまでも天の邪鬼な彼女にとって、これが精一杯の謝罪を込めた意志表示なのだろう。

そして蹴りが一種の照れ隠しだというのも、平子と一護にはよくわかっていた。

「わかった」

あくまでも冗談口の、でもどこか真剣味を含んだ口調で、一護は承諾した。

それで、十分だった。

部屋の外で、ずっと気配を殺していた桐生は、漸く小さな溜息をついた。

主の、どこか不遜な物言いが、耳に心地よい。

護ってみせる。

その言葉を反芻している彼女の耳には、部屋の中でのくだらない争いも、それを見て笑う一護の声も、何も入ってこなかった。

仮面の力を借りない、素顔のまま今の自分を見せた一護と、仮面の名を冠した二人は、偽りなく向き合った。

自分の想いを隠すのは、実は容易い。

自身の為に、或いは相手の為に、人は時として仮面を被る。

そうして仮面に慣れた者は、いつしかそれを外す事を恐れるようになる。

偽りなく自分を晒すことの難しさを感じるのは、そういう時だ。

偽りの自分しか知らない相手が、真実の自分を疎むのではないかと。対象が親しければ親しいほど、その恐れは大きい。

三人は、その難しさを感じても、仮面を外してみせた。

仮面の軍勢　それは、何も虚の力を操るが故の名ではない。

死神としてあつた自分を偽り、死神の敵として、そして虚と死神のどちらにも属せぬ苛立ちと悲しみを隠すために、彼らは自らの表情を隠した。

百年もの長い間、ずっと。

一護もまた、ずっと己を偽ってきた。

元来、彼は為政者向きの気質では無い。

それを偽り、彼はずっとこの地で生きてきた。

仲間と離れた孤独と、それでもなお進み続けなければならない苦しみを隠して。

その三人が、仮面を外してみせた。

それだけでも、この旅には十分な価値がある。

桐生の隣に立ち、ずっと気配を殺していた浮竹もまた、安堵のため息をついた。

あの戦いの後、彼ら仮面の軍勢の後ろ盾となつたのは、浮竹だった。

戦いを経て、死神の前に姿を晒した彼らの処遇。

それは、瀟霊挺にとっても頭の痛いところだった。

少なくとも、彼らは被害者であつて殺されるべきではない。

それは隊首会そろつての見解であつたし、例え四十六室から彼らの処刑命令が下されても、それには従わないつもりだった。

だが、瀟霊挺の情勢を鑑みてか、数年間その問題は放置され、不思議

議なことに　今ならそれが一護の手による物だとはつきりわかるが　四十六室は彼らの処刑命令を正式に撤回した。それでも、まだ彼らに関してやるべきことは残っていた。

彼らが望もうが望ままいが、死神として瀟霊挺に戻る事は難しい。

それは誰もが理解していた。

ならば、と浮竹は提案した。

重霊地の守護を任せてはどうか、と。

重霊地は、その特性上様々な事件が起こる。

例えば巨大虚が出没しやすいだとか、大虚さえも、と。

だが、表立って上位の死神を派遣する事は難しい。

ならば、彼らの立場を保証する代わりに、重霊地の守護を任せてはどうか

その提案に否を唱える者はいなかった。

彼らの実力は知るところであるし、何よりこれなら、彼らが敵となる事もない。

瀟霊挺にとって、彼らの戦闘力は脅威だった。

仮面の軍勢側との交渉を経て、最終的に、十三番隊の外部機関としての位置づけとなった。

席次を与えられる訳でもなく、隊長命令に従う義務もない。

一切の束縛を受けぬその立場を、彼らは気にいったようだった。

だが、その立場に収まって久しいにもかかわらず、彼らは仮面の軍勢の名を捨てようとはしなかった。

名前だけでは無い。

彼らは、死神と必要以上に関わろうとしなかった。

酒でも飲もうと呼べば、来る。
様子を見に行けば、拒まない。

それでも、それ以上はしなかった。

彼らなりのけじめか、あるいは決意かもしれない。

例えそれが恨みであっても、浮竹は仕方ないと思っていた。

そして理解していた。

ただ一人、同じ力を持つ一護だけが、真に彼らの仲間たりえるのだと。

その点においても、一護の失踪は浮竹にとって大きな痛手だった。

百年の溝を、少年に押し付けるように見えるだろう。

それでも、一護だけが唯一の希望だった。

三十年の時を経て、再びその希望は目の前に現れた。

これを僥倖と呼ばずして、なんと呼べというのだろうか。

ようやく現れたその希望は、見事その仮面を外させた。

ここから先は、自分の役目だ。

その決意を知ってか知らずか、小さく息を吐いた浮竹の肩に、桐生はそつと手をのせた。

軽い重みに、浮竹は横目で桐生を見る。

小さく頷いた桐生に、浮竹も全てを了解したのだろう。

年を重ねた者特有の、柔らかく穏やかな笑みに、桐生もまた同じ微笑みを返した。

f a k e v i s o r s (後書き)

タイトル日本語訳は「偽りの仮面」

お待たせいたしました。

テスト期間という荒波を越えまして、この真梨、無事帰ってまいりましたッ！

……長かったです、はい。

皆さまにお待ちいただいたお礼といたしまして、今回の話は大增量でございます。

正味1万字超えというのは初めてです。自分がびっくり。

二部に分けられるこの話、後半が主題だったり。

とりあえず、平子& amp ;ひよ里との話になりました。

続く話も、仲間との交流を細かく書いていく所存です。

それでは感想などお待ちしております。

u n c h a n g i n g h e a r t s (前書き)

79話の直後から始まります。

平子たちと話を終えて部屋を出た一護は、そこに二人分の霊圧の残滓を感じて苦笑した。

平子とひよ里に縁深い彼らのことだ。

きっと心配してついでにきていたのだろうと思う。

他の仲間も、まだ会議室に居るだろうか。

そうだったらいい、そう考えて、一護は元来た道を歩いて行った。

「…………お前らだけか？」

そうして目にしたのは、ルキアと恋次、そして雨竜、織姫、チャドだった。

「他のみんなは、また部屋に戻った…………曳船さんが、着替えがどうのと言っていたから、それかもしれない」

そう言われた一護は、少しばかりこの場にいない仲間を憐れんだ。

もしそうだとしたら、今頃、従姉たちに着せ替え人形にされているはずだ。

服を選ぶのが殊更好きな彼女たちにとって、彼らは格好の餌だから。

「…………そうか」

その口調が、残念さでは無い何かを含んでいるのを感じたのだろう。ルキアが首をかしげたが、それ以上は何も言わなかった。

言いようのない、沈黙が落ちる。

それは決して居心地の悪いものではなく、むしろ穏やかな陽だまり

のようなものだった。

無機質な会議室が、昼を僅かに過ぎたころ特有の陽光に満たされる。

ああ、そうだ。

長らく忘れていた、この感覚。

日曜日の午後、何の用事もなく、ただゆっくりと過ごす時にしかない、この温かみを帯びた眠気を誘うような空気。

それに近いのだと、一護は感じた。

曜日の概念を持たないこの地に置いて、それは無縁の感慨だった。

気づまりではないが、こうした無言の時間が何故か惜しまれる。

言葉をいくら重ねたところで、喪った時間を取り戻せないのだとは分かってている。

それでも、会話をしたかった。

互いに離れて過ごした、この長い月日を伝え合いたい……

そう思つて口を開こうとしたルキアだが、それは思いがけない音に遮られた。

ぐううう

低く鳴ったその音源として、一同は真つ先に恋次を見た。

ルキアに至つては、それはもう恨みのこもった視線を向けている。だが、恋次は慌てて否定した。

「いや、俺じゃねえよ！」

「たわけ！ 貴様以外に誰がこのタイミングで腹の音を鳴らすとい

うのだ！」

「だから俺じゃ」

「……ごめん朽木さん。今の、私……」

今にも消え入りそうな声で、真つ赤になった織姫が言う。

そう言えば、朝から何も食べていない。

さっきまではそれどころではなかった為、全く気にしていなかったが、すでに昼食よりも夕食の方が明らかに近い時刻だった。

「……確かに、お腹が空いたな」

やはりというべきか、助け舟を出したのは雨竜だった。

「ム……」

言葉少なにチャドも同意し、そこへ一護が声をかける。

「なら、何か用意させる。行こうぜ」

扉を示した一護に、織姫は深くうつむくように頷いた。

久し振りに会ったところへこの醜態というのは、やはり耐えがたい部分もあるのだろう。

再び戻った東宮府で、先ほどとは違う部屋に案内された。

私室のようなところだと告げた一護は、机の上に散らばった書類をざっと片付ける。

「お呼びでございましたようか、殿下」

すぐに現れた下官に目をやると、一護は一つ頷いた。

「簡単なものでいい、調理処に、何か用意するよう伝えてくれ」

「かしこまりました」

折り目正しく礼をして静かに立ち去った下官を見やり、雨竜とチャドは顔を見合わせた。

なるほど、大した皇太子っぷりだ。

途中顔をのぞかせた桐生に、他の仲間たちにも昼食をと指示を出し

て、一護は慣れた手つきで茶を入れた。

現世と尸魂界は、些少の違いがあるとはいえ、深く言及するほど文化は変わらない。

だがどうやら王土^{ユキ}は違うようだ、と雨竜は判断した。

茶の淹れ方一つをとってもそうだ。

先ほど織姫は、普段家でやるのと同様に急須に茶葉を淹れ、そこから湯呑に注いだ。

だが一護は、もっと多くの道具をやりくりしてお茶を淹れている。

湯の温度や蒸らす時間もよく測っているようで、そのやり方を見なれていない五人は、面白い物のように見つめていた。

「入ったぞ」

隅の小さな卓の上で作業をしていた一護は、湯呑の乗った盆を五人のついている机の上に置いた。

どこかからかうような恋次の視線に気づき、一護は一拍置いて納得したように手を叩く。

「そういえば、そっちじゃこんな淹れ方しなかったよな」

「ずいぶん面倒なやり方じゃねえか。茶なんてざっと淹れちまえばそれでいいつてのに」

「こつちじゃ当たり前前のやり方なんだよ。慣れたらそんなに面倒でもない」

一護が、上流の　　いふなれば風雅なやり方にこだわるとは考え難い。

だから、当たり前前だというのは本当なのだろう。

淹れてくれた織姫には申し訳ないが、確かに一護の淹れた茶の方が美味かった。

ほどなくして運ばれてきた昼食に、またしても五人は戸惑う。

現世で言うならば、点心に近いものかもしれない。

餃子や春巻きといったものがあるためそう判断したが、見たことのないものもある。全く見なれていない訳ではないが、慣れているわけでもなく。とはいえそれよりも困ったのは、給仕なのだろうか、隅に控えている下官だった。

その雰囲気を察したのだろう、一護が軽く頷くと、下官はまた礼をして部屋を出ていく。

「楽にしてたらいい。あいつらだって、何かを言ってくる訳ではないし」

蒸しパンのような物を食べながら、一護が苦笑する。

「そう言われてもだな……」

渋い顔で雨竜は餃子を食べた。

てつきり肉の餡だと思っていたら、それは魚介。

餃子と一口にまとめても、包み方でさえ両手で数えきれないほどあるのだと初めて知った。

包まれた餡も、肉や魚介に留まらない。

下官がいなくなった瞬間に、恋次は嬉々として箸を伸ばした。

「まあ、落ちつかねえって気持ちはよくわかるけどな。俺もそうだったし」

「だろうな」

自身にも覚えのあることに、ルキアが相槌をうつ。

朽木家に引き取られてすぐは、常に誰かの視線がある生活に戸惑ったものだ。

「でも、他にやることが増えてくると、自分の事に手が回らない。あいつらはそれが仕事なんだから、任せられる分は任せた方がいい」
本当に多忙なのだろう、とチャドは思う。

自分の身の回りの事さえ、他人に任せなくてはならないのだから。少し遠くなった親友の姿に、チャドは目を細めた。

それから、とりとめもない話をした。
何を話せばいいのかと迷ったのは最初のみ。

一度紡がれ始めた言の葉は、留まるところを知らなかった。

互いの家族の事、仕事の事。

それぞれ、特に一護は立場が立場なだけに、話せない事も多いだろう。

それでも、どこに居ても、どんな立場であつても家族への想いは変わらないのだと、特に雨竜と織姫は感じた。

それは一護も同じのようで、子供の話をはじめた三人を、ルキア達は微笑ましく見まもる。

親となった彼らの表情は、雨竜や織姫のものでも見なれる事はできそうになかった。

「そういえば……」

「どうした？」

ふっと戸口を見やった一護に、ルキアは首をかしげる。

「いや、あいつらどこいったんだらうって」

「あいつら？」

誰の事だらう、と織姫が首を傾げた瞬間、その音は聞こえた。

パタパタと軽い足音が、複数。

どこかで聞いたことのあるような音は、次第に近づいてくる。

開け放たれた扉から黄色の塊が飛び込んできたのは、その時だった。

「姐さ~~~~~んッ!!」

反射というのは不思議なものだ。

三十年という長い年月を置いたにも関わらず、たった半年の間についた癖にも関わらず、ルキアは迷うことなくその黄色い塊をはたき落し、踏みつけた。

「オブツ……ああ。三十年越しの再会にもかかわらず一切躊躇わない、この、ふ・み・つ・け……間違い無く姐さんのものだ。シ・ア・ワ・セ……って、姐さんひどくねえっすか!? 三十年ぶりっすよ!?!」

冷やかな視線をものともせず、コンはルキアの足の下で叫ぶ。

「つーか一護! 姐さん達着いたんなら教えるよ!! おかげですっかり遅くなっちゃったじゃねーか!!」

「ここで待ってるって言ったのになかったのはテーマらだろうが、どこ行つてたんだ?」

一応教えるつもりはあったらしい一護に、織姫はくすりと笑う。

驚くほど変わらないそのやりとりに、雨竜もまた苦笑した。

「あんたの末っ子の面倒みてたのよ。全く、親ならもうちょっと大人しくするように言い聞かせなさい」

コンの後からぽてぽてと歩いてきたぬいぐるみたちに、チャドは目を見開く。

りりん、蔵人、之芭。

コンとともに行方不明になっていた彼らも、ここにいたのだ。

「いやはや、織姫さん。勝手にいなくなっって申し訳ございませんでした」

「……………」
それぞれかつての持ち主の手元に戻った二人は、素直に詫びを述べた。

二人にとつても、勝手にいなくなった事は気がかりだったのだ。

「心配したんだよ。でも、元気そうでよかった」

「ム……………」

織姫とチャドも、二人を手元に迎える。

時を経て、布も傷んだのだろう。

継ぎがあてられたり、部位によっては全く違う布になっている。

色こそ変わらないが、それはかつてのぬいぐるみとは別物だった。

雨竜はその様子を眺め、当時の自分には霊力が無かったのだと思いきり起す。

ずっと生きてきてなお、あれ程苦しい時は無かったと断言できるあの頃。

それは少しの懐かしさと、そして苦みを含む感慨となって、鮮やかによみがえった。

一方で、一護は自分の肩に乗ったりりんから、延々と末っ子についての愚痴を聞かされていた。

「一志ったら、大変だったのよ?!」

「あいつは、お義母さんに預けたじゃねえか」

「あんたと凜と一貴と彩と私達にしか懐いてないの知ってるでしょ?! 全然泣きやまないから助けてくれて言われたのよ!」

「あ…………… やっぱりな」

「やっぱりじゃないわよ! 寝かしつけるのにどんだけ苦労したと思ってるのよ!」

「うん。悪いな、いつも」

「……………」

こういつた愚痴も聞き慣れているのか、一護のあしらい方も堂に入ったものだった。

言い返せなくなったりりんは、力無く一護の肩でうなだれている。すると今度は、ルキアの足の下から抜け出したコンが騒ぎ始めた。

「つーか、凜さんはいつ帰って来るんだよ？ 本当は昨日の夕方には帰って来る予定だろ!？」

「出先で色々あったんだ。明日の朝には帰って来る」

五月蠅そうに頭を掻いた一護は、そう言っただけのため息をついた。

「この話は今朝もしたじゃねえか。何度も言わせんな」

「凜殿は、おらぬのか？」

会話の流れから、ルキアが声をかける。

それを聞いた一護は、呆れた様な眼でルキアを一瞥した。

「南州へ視察へ行ったんだけどな、その近くで土砂崩れがあったんだ」

「巻き込まれたのか!？」

ぎょつとした恋次だったが、一護は首を横へ振った。

「違う……土砂崩れがあったのは、視察に行った街と隣町とを結ぶ街道。あいつはそこに残って復興の指示を出してる」

呆れた様な眼はそのまま、ついには口調にさえ呆れの色が滲んだ。

「……で、どうして君はそんな風に呆れているんだ？」

疑問に思った雨竜が問えば、一護は溜息をついた。

同じ雰囲気の溜息をついたことがある気がして、雨竜は首をかしげる。

これは、確か ……

「こつちは私でなんとかするから、あなたは余計な手出ししないでね？ 帰るのは遅くなるから、子供はお母さんに預けてください、なんて手紙が届いたら、そりゃ溜息も吐きたくなくなるわよねえ」

くすくすと笑うりりんの声を聞いて、恋次はあんぐりと口を開けた。なんつー手紙だ、それは。

啞然としたままの恋次を見て、一護は苦笑した。

「元々、凜は夏梨と同じで巡察使だ。災害地の最前線で指揮を執った経験だってある。あいつは特に優秀だったから、他の巡察使よりもそういう経験は多い。……血が騒いだんだろ」

「待つ側としては、たまったもんじゃないな」

訳知り顔で頷いた雨竜に、一護は首をかしげる。

「何だ、経験あるのか？」

そう問われた瞬間、織姫は口に含んだお茶を吹きだしそうになった。

数年前に、他地域で地震があつたとき、空座総合病院からも医師を派遣することになったのだ。

夫婦で向かった先で、自分の身を案じた雨竜に、前半と同じようなことを言った気がする。

いや、言った。一言一句違わず。

おずおすと夫の表情を伺えば、からかい混じりの視線を向けられた。言い方が悪かったのはよくわかつている。

余計な心配をかけたことも。

今でこそ、こうして笑ってくれるようになったが、直後はずいぶんと恨み事を言われたものだ。

そんな二人を見つめ、一護は綺麗に無視された質問を無かったことにした。

何処の夫婦でも似た様な事があるのだろう。

そう考えることで納得した。

一方で、恋次は何とも言えない目で一護を見ている。

その視線に気づき、一護は首をかしげた。

「どうした、恋次」

「……昔のてめえなら、真っ先にそこに行って指揮するんじゃないかなってな」

感慨深げな恋次の言い草に、一護は眉をひそめた。

「どつという意味だ？」

「なんにも考えねえで突っ込んでくのがてめえだろうが。ずいぶん落ちついてるのを見れば変な気になる」

そう言われて、一護はまた苦笑した。

「行きたいさ。でも、俺には俺ですることがある。前線での指示は凜の方がよほど慣れてるから、俺はこっちで応援すればそれでいい」

一護は、そう言われる所以となったかつての自分を思い出し、青かったなあと懐古する。

それでも、多分。

きっとこの立場から解放されれば、やはり自分は同じ事をするのだろう。

霊王や皇太子が王宮を離れば、民や官の動揺を招く。

それが、一護にとっては少なくとも重石として働いていた。

「成長したものだな」

ルキアに言われ、一護は肩をすくめる。

「三十年経ったんだ。全く成長してないわけねえだろ」

「それもそうだな」

あえて立場の話を持ち出さなかったのは、やはり彼らに対等の仲間として扱ってほしいからだ。

その想いを知ってか知らずか、ルキアは穏やかな視線で一護を見つめる。

一護がそれに気付く事はなかったが、ルキアはその想いに気付いていた。

立場ゆえに、求められる行動。

それは時として品位という名を冠することも、ルキアは承知していた。

チャドは、その肩に之を乗せてじつと一同を見ていた。

寡黙な彼は、自分で問いかけて情報を得ない分観察眼が鋭い。

一護が思ったことも、ルキアが思ったことも。

彼らが互いに抱いた思いも全て、彼の瞳には映っていた。

その瞳が、ふいに細められる。

一護の瞳に、僅かに影がさした。

チャドが声をかけるよりも早く、一護は口を開く。

「石田」

「何だ」

「お前の親父さん、元気か？」

何の脈絡もない発言に、石田は眉をひそめる。

自分の父親と一護は、何の接点もなかったはずだ。なぜそんなことを聞くのだろう。

そう思ったが、雨竜は問われたままに返した。

「化け物じみて元気だが、それがどうした」

問いかけてから、雨竜ははっとする。

そっだ、彼は父親を……

そして、その父親は、自分の父親の友人だったはずだ。

その返答に、一護は視線を落とす。

「元気ならそれでいいんだ。……ああ、でも」

一度言葉を切って、一護は笑った。

後悔を裏に隠した、偽りの表情で。

「親孝行、ちゃんとしとけよ。したいときに親はないって、本当だから」

我知らずきつく握りしめた雨竜の拳を、織姫の掌がそっと包み込んだ。

一護がここへ来てから起こったこと、その話の中の一片が、医者である三人にはずっと気になっていた。

訊くなら今しかない……

だが、どうしても踏み切れないでいた。

今さら、どうにもならない事だ。

それを、ただ医者であるからと聞きだして、傷つけることになるのではないだろうか。

その想いが、触れた掌から伝わりあう。

「一つ、聞いてもいいか」

そうして、問いかけたのはチャドだった。

「お前の、父親は……どうしても助けられなかったのか？」

ルキアと恋次が止める間もなく、無情とも思える問いかけが空気を震わせる。

だが、問いかけられた一護は穏やかに首を横に振り、否定の意を伝

えた。

「親父は、現世であっても手遅れだって言ったけど……多分、違うんじゃないかな。そっちなら、親父は死なずに済んだはずだ」

一護は乾いた笑みを浮かべ、そのまま話し続ける。

「バカだよな……死んでどうするってんだよ」

その口調に、織姫は静かに目を伏せた。

一護の予測は、恐らく正しい。

例え、一心の判断が正しいものだったとしても、判断材料となった情報は、その時すでに古いものだったはずだ。

医療の世界は、日進月歩。

その時だったら助からないような症例が、一年後にはそうではない。

そして、それは一心もよく承知していたはずだ。

すぐに現世に戻れば、自分は死なずに済むという事実を。

ぬいぐるみたちが僅かに身じろぎするのを、恋次は視界の端にとらえた。

そうだ、こいつらは。

ずっと一護の傍で、全てを見てきたのだ。

「医療の世界に、QOLという言葉があるの」

織姫は、そっと雨竜の手を離して、自らの手を握りこんだ。

「Quality of Life・生活の質、人生の質って訳せる言葉で、最近は医療関係者でなくても知っている人が多いわ」
織姫の言わんとしている事を悟って、雨竜とチャドは互いの目を見

交わす。

一護は、織姫をじっと見つめていた。

「要は、どれだけ自分らしく生きるかってこと。QOLを大事にしたいからって、最近では無理な延命を希望しない人もいるの」
織姫は、そう言って困ったように笑う。

一心と、そして遊子。

二人の事は、QOLを常に念頭に置く三人にとって、この上なく難しい問いだった。

普段向き合う事例を、究極まで突き詰めた様な形。
すなわち、短い時を自らの意志で生きるか、あるいはその逆か。

第三者である自分たちにとってそうならば、それは一護にとってどれほどの問いだったのかと考えずにはいられない。

それでね、と織姫は続ける。

「黒崎君のお父さんが、ここでどんな風に生きて、どんな風に亡くなったのかはわからない。でもね、きつと黒崎君がそんな顔をすることは望んでないよ」

一護はきよとんととして、そして同じく困ったように笑った。

「わかってる……それに、親父は満足するまで生きたらしいからルキアが首をかしげたのが目に入ったのだろう」

一護はそれに目をやると、僅かに口角を上げた。

「一回だけ、褒められたことがあるんだ」

「褒められた……？」

一護は目を閉じて、その情景を思い起こした。

容易によみがえるそれは、すでに遠いものにもかかわらずひどく鮮やかだ。

自分の、“為政者”としての原点とも言うべき、あの事件。全てが終わった時、その頃はもう起き上がることさえままならなくなっていた父親は、一護に対して笑った。

「親父が死ぬ、一ヶ月ぐらい前にな。よくやったって。……それまで褒められた事は無かったから、多分、俺を認めてくれたってことだと思う」

遠くを見つめるような視線の一護は、当時の細かい状況を話すつもりがないようだった。

言葉を惜しんでいるのではないのだろうが、その理由がつかめない。複雑すぎる状況なのか、あるいは自分たちに話せない事なのか。それでも、どちらでもいいと思った。

次の言葉は、その省かれた言葉を補って余りあるものだったので。

「役目を果たせる、れっきとした王族として」

それが、一護にとってどれほど意味のあることだったのか。どんな表情も映していない一護の顔から、それを伺う事は出来ないけれど。

そうであっても、察することは容易だった。

「そうか」

言葉少なな親友に、一護は穏やかに笑う。

「そうだったらいって、勝手に思ってるだけかもしれないけどな」話して、気恥ずかしくなったのかもしれない。

一護は言を翻すような発言をして、すっかり冷えた茶を口にした。

「そんなことないよ。きつと、そういう意味」

「そうだ。そうでなければ、そんなことは言うまい」

織姫とルキアの声に、雨竜と恋次も静かに同意する。
そうであればいいと、心から思った。

いつの間にか移動していたりりんが、膝の上でルキアに頷く。
それは、その場にいたりりんだからこそその確実な肯定だった。

「ありがとな。医者がそう言っんなら、安心できる」
そう言い添えた一護に、織姫はまた頷いた。

unchanging hearts (後書き)

タイトル日本語訳は「変わらない心」

ということ、一護に最も縁深い彼らとの話になりました。

おそらく、皆さまが一番期待されているのはこの話かと。

……ご期待に添えている自信は全く持ってないのですが。

点心の資料探しに時間を遣いすぎたのは、少々悔いの残るところであります。

一護の娘は彩さいという名前です。

一貴、一志同様可愛がってくださいませ。

そして前話とする予定でしたお知らせを一つ。

現在、瑠亜様という二次作家さんとコラボ企画をさせていただいております。

詳しくは活動報告に記載してありますので、そちらをご覧くださいませ。

それでは感想などお待ちしております。

s p a r k l y s w o r d s (前書き)

80話の直後から始まります。

遅めの昼食を終えてしばらくが経ち、話も一段落したところ、桐生が訪ねてきた。

「どうした？」

「着替え、女性陣はみんな終わったみたいよ。男性陣もそれなりにそれなり？」と首を傾げた恋次をよそに、一護は苦笑した。

「脱走者か」

「え？」

意味がわからなそうな一同に、一護は言う。

「一角とか、こういう服嫌がりそうだろ。動きづらいしな」

恋次は一護の服装を見つめて、素直に納得した。

街を歩いている時も思ったが、王土の服は和服よりもゆったり作られているようだった。

三月とはいえ、まだ寒い。

ゆったり作られたその服を数枚重ねるといっなのは、普段死覇装の自分たちにとって動きづらいことこの上ないはずだ。

「俺は死覇装でいって抵抗してねえ……一人だけすごく乗り気の人もいたけど」

「……弓親さんだろうな、多分」
「だな」

恋次と一護は顔を見合わせて笑った。

彼には、確かに楽しい時間だろう。

「で、脱走者は今どこに？」

椅子から立ち上がりつつ一護が問えば、桐生はわざとらしく小首を傾げた。

「道場に立てこもったみたいね。どう？ 見に行ってみる？」

「行くか」

椅子にひっかけてあつた上着を手に取り、どこかいたずらっぽい表情で言つた一護に、ルキアも頷きつつ立ちあがった。

道場に行けば、それとわかる声が響いていた。

特務隊の隊舎に併設された道場は、護廷十三隊の物よりも広い。

板張りの、剣道や白打の修行に使う修行場だけでなく、他にもさまざまな形式の稽古場が用意されている。

それは、王族特務ならではの理由からだった。

「やつてるなー、一角」

「一護か」

隊士の一人を相手に木刀で模擬戦をしているのは、滝のように汗を流した一角だった。

一時休戦、とばかりに相手をしていた隊士が木刀を床に置き、一護に礼をする。

「こちらでお目にかかるのは、久しぶりですね」

「一か月ぶりぐらいだろう。……年度末の仕事が立て込んでいたからな。ちょうどいい。俺も交せてくれ」

「ええ、もちろん」

じゃあ着替えてくる、と一護はその場を後にし、稽古場脇の更衣室へと入って行った。

「俺も交せてもらえますか？」

嬉々として言い出した恋次に、その隊士は苦笑する。

「もちろん。木刀なら、あつちの壁に掛けてあるのを自由に使つてかまわないから。相手はそこらへんにいる奴に適当に声をかけたら

いい」

そう言うと、その隊士は再び一角との模擬戦を始めた。

ルキアも、やはり死神としての血が騒ぐのだろう。

壁から木刀を手に取ると、きよろきよろと相手を探し始める。

そこへ、一護が戻ってきた。

先ほどとは違う、白い上衣に黒い袴という道場着に着替えた一護に、恋次は少し視線をやる。

一護もそれに気づいたのか、軽く準備運動をしながら恋次の方を見た。

傍にいた護衛士に声をかけた恋次を見て、一護はこっそりと笑みを漏らす。

後で勝負だ。

視線に込められたその意を正確に読み取った一護は、一か月間に鈍った体を叩き直すべく気合を入れる。

その様子を見た雨竜達三人は、相変わらずの二人に互いの目を見かわした。

肩をすくめた雨竜に、織姫はそっと寄り添う。

「根っこは全然変わらないわね」
「全くだ」

それでも、またこうした光景がみられることに、三人もまた少なからず気分が高揚していた。

ルキアは、結局うまく相手を見つけられず、観戦に回ることにした。織姫の隣に立ち、一護を探す。

桐生を相手取り戦う一護を見て、ルキアは息をのんだ。

腕は、確実に上がっていた。

あのころでさえ、並び立つものはほとんどいなかったというのに、この地にあつて一護は更なる進化を遂げていた。

そして何よりルキアの目に付いたのは、その太刀筋だった。

一護は、きちんとした師についていない。

かろうじて夜一や浦原といった面々に鍛えられはしたが、その強さはほとんど経験に因る。

ゆえに、一護の刀は自己流。

あれほどまでに強くなれたのは、いつそ奇跡といつても差し支えないほどだった。

剣に定められた基本があるのは、それが良い形だからだ。

長い時を経て洗練された動きには、勝利へとつながる確かな実績がある。

もちろん、始解となれば話は別で、全く違った修行が必要になる。

だが、それでも基本というのは重要だ。

そして、今の一護の刀は、その基本に正しく則ったものだった。

一度ついた癖というのは、直すのが難しい。

だが、一護の太刀筋は当時の荒削りな自己流の面影を残していなかった。

どれだけ苦勞をしたのだろう。

桐生と相対する一護の実力は、その基本に則った形でなお確かなものだった。

からんからんと音を立て、一護の木刀が転がる。

一瞬の隙を突かれた一護は、あえなく桐生に敗北したのだった。

「ありがとうございます」

ぴしつと礼をし、床に落ちた木刀を拾い上げた一護を見て、ルキアは気づく。

「師は、曳舟殿か？」

壁際に歩いてきた一護に声をかけると、一護は驚いた顔をした。

「何でわかるんだ？」

「貴様の太刀筋を見ればわかる。……それに、貴様の振る舞いは門弟のものだ」

そう言われて、一護は頭を掻く。

「なるほどな」

確かに、一護が剣の師としたのは桐生だった。

何年もかけてきっちり鍛えられたおかげか、斬月がなくなるともまともにも戦えるようになった。

その点において、一護は桐生に頭が上がらない。

他にも白打は雷雨、そして鬼道は九頭柳と蓮杖に、一護は様々な人物に師事していた。

鬼道が問題なく使えるようになるという、あの頃から考えたら想像もつかないような所業は、一重にあの二人の努力の結果と言える。

もちろん、正月以外に師となってくれた、竜も。

何気なく視線を動かし、恋次が試合を終えたのに気づく。

道場の中央、空いた場所を示された一護は、ニヤリと口角を上げた。変わらない雰囲気、いつそガキっぽささえ覚えたが、ルキアは何も言わない。

苦笑しつつ、黙って一護を見送った。

「おや、なかなかいい時に来れたみたいだな」

「隊長……」

隣に立った浮竹に、ルキアはほほ笑む。

「今から、ちょうど始めるところです」

そうか、と返事をした浮竹は、道場の中央を見つめる。周囲の騒音は、徐々に小さくなっていった。

相對した一護と恋次は、互いの目を見る。

二人とも、口の端が上がるのをこらえきれなかった。

「一か月ぶりだかしらねーが、手加減しねえぞ」

「そっちこそ、ずいぶん羽織が邪魔そうだけどな」

憎まれ口も挨拶の内。

二人が木刀を正面に構えた瞬間、道場は完全に無音になった。

刃をもたぬ刀は、拮抗した。

起きるはずのない火花を見た気がして、ルキアは目を見開く。

かたや、護廷十三隊の一翼を担う隊長。

かたや、修行の時間に事欠くとはいえ、最強の師に恵まれた英雄。

この対戦は、刀を知らぬ織姫にさえ、息を詰めるほどのものだった。

二人が最後に刀を交えたのは、もう遠い日。

ルキアを助けに尸魂界へと乗り込んだ一護と、一護を殺してルキアの力を取り戻そうとする恋次と。

当時は互いに始解までしか会得しておらず、経験の浅い一護には決して有利な戦いではなかった。

浦原の教えと、数少ない経験。

そして、斬るという覚悟。

互いの持つ全てをぶつけ合い、決したあの戦いと、これは何一つとして一致しないはずだ。

それならば。

この震えは、何だ。

武者震いか、或いは違うものか。

恋次は、強く木刀を握り締める。

下に構えたまま迫ってきた一護は、勢いよく木刀を振り上げた。

僅かに押されるが、渾身の力を込めてなぎ払えば、一護は大きく体勢を崩す。

隙だ、と思った。

木刀を振り下ろした恋次の視線と、一護の視線が交錯する。

その眼を見た恋次は、自分が畏にかかったことを思い知った。

一護は、未だ体勢を立て直さない。

違う。

立て直す必要がないのだ。

それこそが、一護の狙いなのだから。

戦いの最中ゆえか、床に倒れていく一護の動きはひどく緩慢に見えた。

木刀から左手を離し、体を左へと捻る。

床についた左の手足で体を支え、一護は右足で恋次の右足をひっつけた。

今度こそ疑いなく体勢を崩した恋次の視界から、一護が消え、天井が映る。

木刀を薙ぎ払われた感覚がしたのは、その次の瞬間だった。

尻もちをついた格好の恋次は、そのまま体を床へと投げ出した。

「そんなところに転がってたら、踏まれるぞ」

徐々に戻ってくる喧騒。

息をつめて試合をに注目していた隊士たちも、それぞれまた己の修行へと戻っていく。

見下ろしてくる一護をにらみ、恋次は差し出された手をとった。

「勝てると思っただけだなあ」

「そう簡単には負けねえよ。本職相手でもな」

ぐっと体を引き起こし、恋次は木刀を拾う。

振り返れば、ルキアや浮竹がほほえましく自分たちを見つめているのが目に入った。

「お疲れ様、二人とも。……それにしても、またずいぶん腕を上げたもんだなあ」

浮竹からの賛辞に、一護は首を横へ振る。

「ここにいる連中はみんな強いっすから。来れば大抵誰かが相手してくれるから、修行相手には事欠かないだけっすよ」

そう言われた浮竹は、一護と同じように首を横へ振った。

「そんなことないさ。もう俺でも敵わないだろうな」

まさか、と笑った一護の肩に、桐生が手を載せる。

「間違いなく、一護君の方が強いわよ。私の愛弟子だもの」

「大した自信だな」

呆れたように言う一護に、桐生は口角を上げた。

「まあね。弟子の子供で、兄貴で、旦那でもあり、孫弟子でもある愛弟子だもの。どこに出しても恥ずかしくない程度には鍛えたつもりよ」

一心と夏梨と凜と、浦原と夜一。

彼らは皆、かつて桐生に師事していた。

必要に迫られてとはいえ、子供の面倒を見るのが得意となった桐生は、王土に来てからもいいように使われることが多かったのだ。

ちなみに、桐生本人の了承は得ていないが、一貴たちのことも頼むことはすでに決定事項である。

「それなら、なおさらだな」

そう言つて苦笑した浮竹は、自身の服装にため息を漏らす。

「それにしても、ずいぶん動きづらいものだね」

「嫌なら死覇装のままでもいいつすよ。無理することない……でも、いいなあ。すげえ似合つてる」

一護は、浮竹が違和感なく着ていることを心底うらやましいと思つた。

着慣れるまでは本当に大変だったのだ。

濃紺の袴と深緑の上衣と上着という落ち着いた色合いで、全体的に品良くまとめられている。

何より浮竹の持つ風格が、それら全体をよく調和させていた。

「服を選んでくれた子が、うまく合わせてくれたんだろう。……君の従姉だそうだね」

「口煩くつて大変だったんじゃないつすか？ 服のことになるとあいつ」

「なんか言つた？」

唐突に後ろから声を掛けられて、一護は黙って口を閉じた。

ゆっくりと振り返り、視線を下げて紫がかった髪的女性と眼を合わせる。

「……別に、何も。で、何で秋泉までここにいるんだよ」

「逃げたやつ捜しに来たの。ここにいてるんでしょう？」

鼻息荒く腕を組んだ秋泉に、織姫は思わず噴き出した。

「一角さんのことだよな？」

「多分な」

小声で話す彼らを背後に、一護は道場の二画を指差した。

「お探しの人物なら、あつちにいるぜ」

「今度こそとつつかまえるわよ！」

腕まくりをして走り去った彼女を見送り、一護はルキア達を振り返った。

「悪いな、騒がしい奴で」

「いや……」

否定した雨竜だが、その視線は未だに秋泉を追っていた。

「どうかしたか？」

その視線の先を見て、一護が問う。

「……今の人、誰かに似ていないか？」

雨竜の問いかけに、一護はしばらく考えるそぶりを見せた。

「外見で……なら、夜一さんじゃねえか？」

一護に言われて、気づく。

確かに、紫がかかった髪と、琥珀の瞳は夜一そのものだ。

身長も、たしかに似通っている。

「ま、姪っ子だから似てるのも当たり前っちゃん当たり前だし」

言い添えた一護に頷きかけて、瞠目した。

「姪っ子！？ 夜一さんの？」

なんとなく意外な気がして、織姫は秋泉を目線で追う。

稽古をしている中をすいすいとかき分けていく様は、確かに夜一を彷彿とさせた。

「でも、どうして夜一さんの姪っ子がここにいるの？」

「何だ、説明しなかったのか？」

首を傾げる仲間を見て、一護は桐生を振り返る。

一方の桐生は、あごに手を当てて考えるそぶりを見せた。
「そういえば……言わなかったかもしれないわね」
そんな桐生に苦笑を洩らし、一護は仲間を振り返った。

「俺の親父の兄貴の嫁さん、……だから義理の伯母か。その人、夜一さんの姉ちゃんなんだよ」

「え!？」

初耳だったのだろう、ルキアまでもが驚愕の表情を見せる。
だが、一拍置いてルキアだけは立ち直った。

「そういえば……聞いたことがある。確か、兄様の姉上も同じ時に王族に嫁入りしたと」

「……白哉さん、お姉さんいるんだ」

まずそこから驚いた織姫は、一護に向き直った。

「ってことは、その人もここにいるの?」

「今は、いない。明日到着する予定だから、その時会いばいい……ルキア、大丈夫か?」

顔色が僅かに悪くなったルキアに、一護が問いかける。

「葵様もいらつしやるのか……?」

その様子にしばらく考え、一護は結論を出した。

「そっか、お前初対面なんだな」

こくこくと頷いたルキアに、一護は笑って見せる。

「大丈夫、心配しなくても優しい人だぜ? お前に会えるの、すっげえ楽しみにしてたしな」

「しかし……私は、その……流魂街の出であるし……」

「そんなことを気にする人じゃない。むしろ、白哉に家族が増えたのを喜んでたぐらいだからな。緋真さんのことも」

それを聞いたルキアは、驚いた表情を見せた。

「葵さん、一度でいいから会ってみたかったって。……なんつーか、白哉に点が辛い人なんだよな。だから、余計な苦勞させたんじゃないかとか、そう言う風にむしろ心配してたぐらいで。緋真さんのこ

とも、お前のことも」

「気立てのいい、やさしい子だったものな」

口をはさんだ浮竹に、一護は頷く。

「面倒見のいい人っすよね。夏梨や遊子も、結構お世話になったんです」

そう言っただけで、一護はルキアに向き直った。

「だから、別に心配しなくていい。……白哉みたいに、堅苦しいところのない人だしな」

付け足された言葉に、雨竜が笑った。

「なら、安心だな。朽木さん、そんなに心配しなくてもいいんじゃないか？」

そう言われたルキアは、少し不安そうながらも笑い返す。

会ってみたい人だとは、思っていたから。

だから、これはいい機会なのかもしれない。

そう、自分に言い聞かせて。

その様子を見ていたチャドは、道場に入ってきた小さな人影に気づく。

一護に知らせようとするよりも早く、その人影は口を開いた。

「父上、今、よろしいですか？」

聞きなれた声に一護が振り返ると、すでに外出着から着替えた一護が立っていた。

ただ、不思議だったのは、それが普段着でもなく学校の制服であることだ。

「いいが……その格好、お前、今から学校に戻るのか？」

「はい。今から出れば、明日の終業式には間に合うので、それだけでも。休んでいた間の分の板書も、部屋の友達に写させてもらわなくてはならないので」

尸魂界から帰ったばかりで疲れているはずだ。

休んでも構わないだろうに、と言おうとして、一護はぐつと唇を噛む。

一貴の判断が、正しい。

例え疲れていても、これ以上私用で休むのは避けるべきだった。

自分達の立場を考えれば、特に。

「そうか。わかった」

小さく頷いた息子に視線を合わせるようひざまずき、一護はその目を見る。

明日を待つよりも早く、聞いておきたいことがあった。

「現世や尸魂界は、どうだった」

問い掛けに驚いたのか、一貴はしばし目を見開く。

一拍置いて発された言葉は、その見た目にそぐわぬものだった。

「不思議なことばかりで、とてもいい経験になりました。……この度は、ご配慮ありがとうございました」

その大人びた返答に、恋次は目を見開く。

一護に対して礼をとった一貴は、その間に親子という関係性を全く感じさせなかった。

だが、一護は首を横へ振る。

一度瞬きをしただけで、一貴の振る舞いに違和感を覚えた様子は見せなかった。

「わかった。また、帰ってきたら詳しく聞かせてくれ。今日は無理をしないで早く休むようにしろよ」

既に中等学舎の一貴は、寮に入っている。

上手くやっているようだが、我慢しがちな性格であるために、親としてはそこが心配だった。

「はい。いつてきます」

そう言って再び礼をとると、一貴は道場を去っていく。

それを見送って振り向いた一護は、何とも言えない視線で見つめる

仲間に一歩引いた。

「……何だよ」

「いや……お前、ひよっとして親子仲悪いのか？」

恋次にいきなり言われ、一護は眉をひそめる。

だが、それを止めようとしたルキアや織姫を見て、どつやらそう見えたのは恋次だけではないらしいと判断した。

仲が悪いわけでは、ないと思う。

心中で反論するも、口に出して言えるほど確証はない。
避けられていることも、自覚していた。

ただ、なぜ避けられているかという、その理由だけはさっぱりわからない。

何よりそれは自分に限ったことではなく、母親の凜に対してもだった。

「……仲が悪いって訳じゃ、ねえと思う」

微妙な否定に、雨竜は眼鏡の奥で眼光を鋭くした。

「どつという意味だ？」

「避けられては、いる」

言葉少なな一護に、ルキアは首を傾げた。

とつても優しく、大好きです。

確かに、一貴はそう言ったはずなのに。

そう思ったのはルキアだけではなく、雨竜も織姫もチャドも恋次も、その場にいた五人の頭に、あの言葉が鮮やかによみがえる。

だが、一方で。

夏梨は、一貴にも色々あると、そう言った。

それがこのことを指していたのだと、ルキアは気づく。

言いようのない複雑な溝を感じて、仲間達はそっと目を見交わした。

そんなことは露程も知らず、一護は心中で軽くため息をつく。

日常の会話は成立するし、そもそも一貴から話しかけてくることもある。

普通の親子だと思う。上辺だけは。

ただ、この違和感ともいえる感覚は、一貴の話し方に起因するのではないだろうかと一護は思っていた。

物心ついた頃から、一貴は両親に対して敬語を使っていたのだ。

舌っ足らずの、幼い口調で。

六人はそれぞれに引っかかりを覚えるも、それを裡にしまいこむ。

再会したばかりからか、触れるには重い気がしてしまって。

何より、これは親子間の問題。

口を出す気は起きなかったし、出してほしくないと思った。

sparkly words (後書き)

タイトル日本語訳は「煌めく刃」

再会したら絶対書こうと思っていた話その1・

一護vs恋次 でした(笑)

王土へ来る途中で見せた一貴の違和感、こちらまぼちまぼち書いていくつもりです。

それでは感想などお待ちしております。

h o n e s t p r i d e (前書き)

81話の直後から始まります。

道場を後にした一護たちは、それぞれ部屋へ戻った。

というのも、一角を捕まえた秋泉が、ルキア達も着替えをと譲らなかつたのだ。

若干顔をひきつらせている恋次にあきらめるよう宣告すると、一護は北宮府へと向かった。

王宮は、大きく二つの区域に分けられる。

一つは、日々多くの管理が働く政庁 通称、外朝。

そしてもう一つは、王族の住まう宮 通称、内朝。

そして、内朝は更に五つに区域分けされる。

その一つが、一護達家族の住む東宮府。

次期霊王、つまり東宮や皇太子と呼ばれる存在とその家族が暮らす場所で、その名の通り王宮の東端に位置している。

次が西宮府。

東宮府の反対端、つまり王宮の西の端にあるこの区域は、内朝で唯一人の住んでいない場所だ。

歴代王族の墓、そして廟と呼ばれる現世で言う仏壇のようなものを収めた建物が林立し、蔵には儀式に使う呪具などが収められている。東宮府と西宮府の間に位置するのが、霊王の住まう正宮府。

王宮全体の中央近くにあるここは、たとえ王族であってもみだりに立ち入ることのない場所だ。

そして残り二つの内、一つが特務隊の隊舎。

道場や訓練場が併設され、隊士たちの寮もある。

そしてもう一つが、霊王でも東宮でも、その近しい家族でもない王族の住まう北宮府だ。

巡察使となつた夏梨は、現在北宮府で暮らしている。
そして一護が向かつたのは、凜の母のいる空翠宮くすいぎやうと呼ばれる建物だ
つた。

「あら、思ったより早いお迎えね」

出迎えた義母の姿に、一護は礼をとる。

「コン達に文句を言われたので。すいません、さんざん泣いたみた
いっすね」

「子供は泣くのが仕事だもの、仕方ないわ。めつたに見ないばあば
の顔なんて忘れちゃっても仕方ないし」

わざとらしく肩をすくめた義母　　怜蘭れいらんに、一護は苦笑した。

しかし、ちらりと奥の部屋を見やり、まだ一志が眠っているのを確
認すると、一護は真顔に戻る。

「西州は、どうですか？」

「可もなく不可もなくってところですね。……東宮の判断が良かつ
たでしょう。被害は最小限にすみましたから」

その一言に安堵したのか、一護は勧められた茶を口にした。

「それなら、よかつた……西州で小麦が取れなければ、値上がりか
ひどい」

「それでも、去年は東州で米が豊作でした。どのみち深刻な被害に
はならなかつたでしょう」

「被害が出なければ、その方がいい。来年は不作とも限らないし」
そう言つた一護に、怜蘭は柔らかくほほ笑む。

「本当に、東宮は一心によく似たものね」

一護は一瞬目を見開くと、眉をひそめた。

「褒めてるんですか？ それとも」

「両方ね。考えすぎるのも玉に瑕よ」

さらりと言われ、苦笑する。

「職業病でしょう。俺はもともとそんなじゃない」

敬語を使った為政者同士としての会話から、再び家族としての会話へと戻る。

王宮では、よく見られる光景だった。

「そんなこと言うなら、凜もよ。あの子だって本質はあなたによく似ている」

「場当たりに物事をどうにかするところ、とかですか？」

「よくわかってるわね。さすが旦那」

からかうような口調に、一護は困ったような表情をする。

怜蘭は、息子となって久しい甥のその表情に相好を崩した。

年の離れた弟が、連れ帰ってきた三人の子供。

自分も親になっていたから、その三人がどれほど愛情を注がれて育てられたのか、痛いほどによくわかった。

義妹に会ってみたかった、と思う。

今は、同じ孫を持つ祖母同士になった、義妹に。

そうして、多分、会ったら会ったで自分は謝ってしまうのだろう。

彼女が大切にした三人の子供。

彼らの人生を、ねじ曲げてしまったのだから。

「……何、笑ってるんすか？」

微笑の中に、かすかな悲しみが混じったのを感じて、一護は声をかける。

怜蘭は、首を横へと振った。

「内緒よ……ところで、凜ったらいつまであっちにいるつもりなの？」

はぐらかされたことぐらいはわかっているが、一護は素直に問いに答える。

「明日の朝には、帰ってくるって。三月みつきの会には間に合わせるから

大丈夫、と」

おそらく手紙の文面そのままの言葉に、怜蘭は言葉を失った。

「……全く、あの娘は。そういう問題じゃないっていうのに」

「いいんじゃないんすか？ 久し振りのことだし、内に籠ってたら気が滅入るのも仕方ない」

朗らかに言った一護に、怜蘭はため息をついた。

「あなたがそうやって甘やかすから、あの子ったら家にじっとして
いないのよ？」

「家にじっとしているような女に、惚れた覚えはないっすから」
そう言いきる一護の表情に、嘘はない。

怜蘭は一瞬息をつめると、やれやれと言いたげなため息を漏らす。

「あの子は、幸せね。こんなにいい旦那さまで」

「だったらいいんすけどね……お」

ぐずり始めた末息子の声を聞き、一護が立ち上がる。

奥の部屋からぼてぼてと歩いてきた小さな子供を、一護はそつと抱
きあげた。

「おはよう、一志。もう帰ろうな」

寝ぼけているのか、一志はしばらくぐずっていたが、やがて怜蘭に
向かって小さく手を振った。

「また、明日ね。一志」

「……それが、貴様の末の子供か？」

東宮府に戻った後、ほどなくして訪ねてきた客人を、一護は一志を
抱えたまま迎え入れる。

ルキアと岩鷲と花太郎。

それぞれ秋泉により着替えさせられた後で、動きづらそうながらも
うまく着ていた。

「そ、一志っていうんだ。……ほら、一志。挨拶できるだろ？」

下ろされた一志は三人を見上げ、すぐに一護の後ろに隠れてしまう。
「あー、こら。挨拶できるだろ？ 一志」
どうやら一護の服の裾をつかんでいるらしく、一護は上半身をひねって一志に触れる。

だが一志はどうしても聞かず、一護は小さくため息をついて三人に向き直った。

「悪いな。人見知りかひどいんだ、こいつ」

一護は強引に一志を抱き上げ、三人に椅子をすすめる。

一志は一護にしがみついたまま、離れようとはしなかった。

ルキアはともかく、岩鷲と花太郎とまともに話すのは初めてだ。

三人は一瞬顔を見合わせ、最初に岩鷲が口を開く。

「……全く、何でお前と親戚なんだろうな」

「こつちのセリフだ、馬鹿」

岩鷲と霊王はいとこ同士。

一護とも、わずかながら血のつながりがあるのは事実だ。

「驚いたんですよ。それでも、元気そうで安心しました」

「うん……ありがとうな、花太郎。じいさんから聞いている。お前が、一番頑張ってくれたって」

花太郎は眼を見開くと、照れたように頭を掻いた。

「そんなことないですよ。ルキアさんたちの方がよっぽど……って、え？ 総隊長ですか？」

キョトンとした花太郎を見て、一護は首を傾げる。

「こつちも聞いてねえのかな。俺、じいさんと文通みたいなのしてるんだよ。そんなかに書いてあった」

そう言えば、桐生達が最初にそんなことを言っていた気がする。だが、ルキアはそれは冗談だと思っていた。

なぜなら。

「しかし……いったいどんなことを？」

千年を越えて総隊長の位にありつづける老将と、未だ若き王族。共通の話題があるようには思えない。

「どんなことって言われてもなあ……すっげえくだらねえことばっかだぜ？ 剣八がまた暴れたとか、狛村さんが飼ってる犬が増えたとか。たまに、ルキアが昇進したとか、恋次が隊長になったとか、そういうことも書いてあったけど。俺も結構くだらねえことばっかり書いてるし」

ルキアは、無言で目を瞬かせた。

一護がくだらないことを書くのはともかく、総隊長の、それも前半の部分はいつたい何だ。

「茶会で出す和菓子で結構鼻屑にしてた店が潰れたつてもあったな」

遠い目をして内容を想起している一護に、ルキアと花太郎は何とも言えない視線を送る。

もう少しまともな話題もあるだろうに、とは口に出さなかった。

「そつれにしても、すげえところだよなあ」

改めて感慨の声を漏らした岩鷲に、花太郎が同意する。

「本当ですよ。もう僕さつきからびっこりすることばかりでぶるぶる、と肩を震わせた花太郎に、一護は首を横へ振った。

「別に何かある訳じゃないんだ。楽にしてたらいいよ」

「そう言われても……」

「びっこりするのは、まあ仕方ねえけどな」

俺もそうだった、と言った一護に、花太郎はほっとしたようなため息を漏らす。

その時、部屋の外から声がかかった。

「皇太子殿下、海燕です。入室許可を頂けますか」

沈黙は一瞬。

眼に見えて固まったのは、他でもない一護だった。

隣室へ行くよう指示をしようとした一護の袖を、ルキアが強く引く。驚きながらもしっかりと頷いた岩鷲を見て、一護はため息を漏らした。

「……入れ」

一護が立ちあがって迎えた人影、その姿を見て、ルキアは息を飲む。そこにいたのは、海燕その人だった。

「失礼します」

丁寧な礼をとって入室した海燕は、一護の姿を認めて再び会釈した。

「明日、出立いたしますので挨拶に参りました。自宮に押し掛けて申し訳ございません」

「構わない。だが、出立は明後日の予定だっただろうか？」

勧められた椅子を固辞し、海燕は頷く。

「その予定でしたが、明後日以降は街道が混雑するかと思い、早めることにいたしました」

「そうか……わかった。北州は寒さが厳しいと聞く。体調を崩さないよう、注意しろ」

「はい。……それでは」

「あー、ちよつと待て」

辞去を述べようとした海燕を制し、一護は部屋の隅に置かれた机の上から小箱を手に取る。

箱の中から何か小さなものを取り出すと、一護はそれを海燕に放り投げた。

「餞別だ」

短く告げた一護と、手の中にあるものを順に見比べ、海燕は驚いて

いる様子を見せる。

だがすぐに表情を改めると、一護に対して深く礼をとった。

「ありがたく。……それでは、失礼いたします」

「ああ。気をつけるよ」

海燕を見送って部屋を出た一護は、そこで再び顔をしかめた。

ルキアは不審そうに眉を寄せたが、一護が頷いた相手を見て納得する。

「一護君、今は……」

驚きの表情を隠せない浮竹を、一護は黙って部屋へと入れた。

「言っただろ。霊力の高い魂魄は、死んでからこっちへ送られるって。……そういうことだ」

無言の一同に、一護が静かに告げる。

心のどこかで、期待していたのかもしれない。

驚きよりも嬉しさが先に立って、ルキアはわずかにほほ笑んだ。

「ああ。わかっておる……海燕殿は、貴様の下で働いておるのか？」

その問いかけに、浮竹ははっと顔を上げた。

四人の顔をゆっくりとみて、一護は頷く。

「ああ。優秀な官吏だよ。周りからの信頼も厚い」

「そうか……」

ほっとしたようなため息をついた浮竹に、一護はまた頷いた。

「何度も、あいつには助けられた。浮竹さんも、そうだったのか？」

「ああ。あいつには、何度も救われたよ……なあ、朽木」

「はい」

穏やかな表情のルキアに、一護はほっとして息をつく。

最初は、どうなることかと思った。

だが、一人だけ。
何の反応も見せないものがいた。

「大丈夫か？ 岩鷲」

ずっと口を開かない岩鷲を案じて、一護が声をかける。

「……………ああ」

ぐっと唇を噛みしめた岩鷲に、誰もが押し黙った。

「……………岩鷲さん」

「俺……………兄貴のこと、もうちゃんと覚えてねえんだよ」

岩鷲が海燕を喪ったのは、ひどく幼いころだった。

何より、海燕との最後の記憶があまりにも鮮烈過ぎて、他の記憶は遠くかすんでいた。

優秀だったこと、優しい兄だったこと、それだけが、記号のように記憶されていた。

そんな兄が、突然目の前に現れた。

「ちゃんと覚えてなかったのに……………今、すっげえたくさん……………」
大きく肩を震わせた岩鷲に、一護は目を細める。

本当は、会わせるつもりはなかった。

死者の世界に住むとはいえ、ここはいうなればその先の冥界。
関わらせるべきでないのは、明白だった。

それでも、と思う。

ここには、たくさんの魂魄が息づいている。

自分に直接かわりがなくとも、仲間と関係のあるものに出会った数は知れない。

そのたびに、一護は小さく願ってきた。

彼らが元気に生きている姿を、見せてやりたいと。

図らずも願いが叶ったことに、一護は小さな喜びを漏らす。褒められたことではないとわかっていても、それでも想う心は別だ。

「今の様子を、教えてはくれないか？」

浮竹の願いに、一護は頷く。

海燕は、もしルキア達にかわりがあると知らなくても、一護にとつて縁深い官吏だった。

「 災対寺という部署が、あるんです。まだできたばかりで、うまく機能してるかっていうとそうでもないんですけど。あいつは、この次官。来月からは、北州に転任になるんですけどね」
いくつか上げられた専門用語に首を傾げたのは、花太郎だった。

それを見た一護が、あごに手を当てる。

「えーと、だな。……災害が起きたときに救援の手配をしたりとか、災害を起きないように対策をする部署なんだ。で、あいつはこの次官だったんだけど、来月から北州に転任になる。それも、あつちに災対寺の小型版みてえなのを作る指揮をとるためなんだけどな」
「もともと、災対寺を立ち上げる時から尽力してくれたのがあいつなんです。……あいつがいなかったらこの計画は上手くいってなかっただろうし、そうしたら助からなかった人が大勢いる。官吏として、この上なく高い誇りを持っているやつです。だから、信用できる」

そう言って笑った一護に、浮竹も安心したように笑う。

誇りを喪わず、変わらず誰かを護ること

それは、あまりにもかつての彼のままだった。

h o n e s t p r i d e (後書き)

タイトル日本語訳は「まっすぐな誇り」

オールキャラっていいましたからね？ って何回目だろってね言っ
の。

はい、海燕さんでした。

一護の腹心としてがんばってます。

もちろんこのあたりの話も後々補足しますね。

それでは感想などお待ちしております。

World Guardians (前書き)

82話の直後から始まります。

一護が思いがけない訪問を受けたのは、仲間たちと再開した夕刻だった。

桐生が案内してきた人影に、一護は瞠目する。

「……乱菊さん？ それに、あんた……」

戸口に立ったのは、乱菊と桃の二人。

「……冬獅郎なら、今いないぜ？」

現世にいたころ、乱菊はともかく雛森との交流はなかったといつてもいい。

再会した、と言っても、彼女と特別話すことがあるようには思えなかった。

「いえ。あなたに用があるんです、黒崎さん」

はつきりとそう告げた雛森に、一護は驚いたまま席を勧めた。

そうして交わされた会話は、どうということもないただの世間話ばかり。

三人の間に共通項があるとすれば、ただ恋次と冬獅郎のことだけで雛森の、暴露話と言ってもいい恋次の所業に一護は笑ったが、それが本題だとは思えなかった。

「それで……用っていうのは？」

問われた雛森は、数度瞬きをした後、おもむろに一護に頭を下げた。

「お礼を、伝えたかったです」

「礼……？」

僅かに眉をひそめた一護に、雛森は顔を上げて頷く。その瞳に、迷いはなかった。次の発言と、ひどく不釣り合いなほどに。

「ありがとうございます。……藍染惣右介を殺して下さって」

それになにも返すことができず、一護はただ瞬きを繰り返す。

その視線にくすぐったそうにほほ笑んだ後、雛森は真顔に戻った。

「別に、皮肉でも気が狂ったわけでもなんでもないですよ。あなたに、ずっと伝えたかったんです」

思い当たるすべての可能性を封じられ、一護は大きく目を見開く。

雛森は、ただ一護のみをまっすぐに見据えていた。

「あなた、藍染の部下だったんだろ？……すつげえあいつのこと慕ってて、だからすげえ傷ついたって聞いた。なのに」
なのに何で。

一護がそう問おうとすると、雛森は笑って頷いた。

「はい。確かに私は、あの人の部下でした。……でも、今は違います。私の隊長は阿散井君です」

その答えに納得がいかないのだろう。

一護は眉間に皺を寄せたままだ。

雛森もそれがわかってているのか、そのまま話し続けた。

「確かに私は、彼が隊長をしていた時、彼の下で副隊長をしていました。あのまま、あの時のままだったらどんなによかったかと思うこともあります。……だからですって答えたら、変ですか？」

あきらかに通じていない順接。

その言葉に、一護は更に眉間にしわを寄せた。

「だから？ いったい何で……」

「あの頃、私はとても幸せでした。藍染隊長の下で副隊長ができて、本当に幸せだと。……それが彼の意図したものであっても、私にとってあの頃幸せだったというのに変わりはありません。」

雛森は迷い無く言葉を紡ぎ続ける。

一護は目を閉じ、彼女の言葉に耳を傾け続ける。

雛森の言いたいことは、一護にとっても身に覚えのあることだ。

たとえ踊らされていたとしても、あの時間が否定されるわけではない。

雛森の言いたいことは、何の誤解も伴わずに一護へと届いた。

「多分、私は今でも彼のことを慕っています。偽りであったとわかっていても、その偽りは私にとって本当でしたから。……だから、彼があれ以上の罪を犯す前に止めて頂けて、嬉しいんです。副隊長だったから、わかるんです。あの人が、自分が過っていたと気づくことはないって」

だから、と雛森は繰り返す。

「ありがとうございます。あの人を殺して、私達を救ってくれて。そして今のあの人たちを護ってくれて。お陰で、私は前へ進めます」
一護は目を開けた。

視界に映ったのは、何の影もなく笑う雛森と、微笑む乱菊だ。

「……ずっと、気になってはいたんだ。あんたのことが。あの戦いで一番傷ついたので、あんたと乱菊さんだろ」

それを聞き、乱菊はすっと目を伏せる。

目を閉じれば、暗い臉にあの笑みが映るのだろうと思った。

「だから迷ったんだ。冬獅郎を、こっちへ呼ぶことを。……俺があんた達から冬獅郎を奪って、それであんた達を傷つけるんじゃないかって」

雛森とは対称的に、一護は迷いながら、慎重に選びながら言葉を紡ぐ。

「でも俺には冬獅郎の力が必要だった。だから呼んだ。……あんた達は、俺を恨んでいい」

それを聞いて、雛森は笑った。

「恨むわけ、ないですよ。むしろ嬉しいぐらいです」

嬉しいと言われて、一護は首を傾げ、雛森に問いかけた。

「嬉しい？」

「だって、日番谷君が傍にいてくれたら、私はきつといつまでも甘えちゃいますから。乱菊さんだって、そうでしょう？」

乱菊は答える代わりそっと目を閉じる。

そこには、やはりあの笑みがあった。

「日番谷君がいなくなって、やっと、自分でしつかりしなくちゃいけないんだって気づけたんです。その時までは、誰かの手を借りても立っていればそれでいいんだって思っていたから。……でも、違うんですね。五番隊の副隊長をする以上、どこかで自立していなければいけない。それが、隊を預かる者の最低限の義務。……私は、それをわかっていなかった。気づけたのは、日番谷君がこっちに行ってしまうって自分で立たなくちゃいけなくなったからなんです。だからあなたを恨むことなんてありません。むしろ感謝しているくらいです」

一護はあつけにとられたように雛森を見ていたが、ようやく、ぼつりと言った。

「……あんた、強いな」

まるで冬獅郎の気持ちに代弁するかのように、一護が言う。

「全然。そんなことないですよ。本当に強い人なら、もっと早くに立ち上がったはずですよ」

「そんなことないさ。……時間がいくらかかったかなんて関係ねえだろ。どんなに時間をかけても立ち直れないやつだっていっぱいいるんだ。立ち上がったあんたは強いよ」
なあ、と同意を求められ、乱菊は頷く。

「そうよ雛森。あんた、自分が思ってるよりずっと強いわ。時間がかかったって言うけど、その間だって一人で五番隊を支え続けたじゃない。すごいわよ、十分」

そう言われ、照れたように笑う雛森に、乱菊は内心そつと息をついた。

がやがやと足音が近づいてきたのは、その直後。
ひょいっと扉からのぞいた顔に、一護は笑う。

「いいぜ、入れよ」

一角と弓親、そしてルキアと恋次。

元からいた乱菊と雛森を加えれば、それはかつてともに戦い抜いた仲間たちに相違ない。

それぞれ成長したその姿に、一護は眼を細めた。

ルキアは五席に。

恋次は隊長に。

そうした変化でなくとも、一目見ただけでわかるほど変化は大きい。

おもむろに口を開いたのは、乱菊だった。

「なんか、変な感じね……またあんたに会うことがあるとしても、こんな風になるとは思わなかった」

「全くだね。まさかこんな風になるなんて」

自分の好みどおりに選んだ服を着た弓親が、皮肉気に言う。

「俺は……もう二度と会うことがないと思ってたよ。俺はここから出られないし、出るつもりもない」

首を横に振った一護を、一角が斜に見る。

どうにも拭いきれない違和感が、未だ彼の中で渦巻いていた。

「てめえらしくもねえな。そんな鎖にでもつながれた見てえな言い草。鎖ぐらい斬っちまえばいいだろうが」

一角さん、と咎める声を気にせず、なお彼は続ける。

少なくとも、一角の知る一護は、こんな人物ではなかった。

「大体、今のてめえからは鋭さを感じねえ。代行やってた時のお前は、こんなんじゃないはずだ」

言い切った一角は、どうだと言わんばかりに一護を見る。

周りは一護と一角を交互に見ておるおるばかりで、ただ一護だけが表情一つ変えず、ぱちりと一度瞬きをする。

何も、何一つ、気にするようなことではない。

「別に、あの時のままでいるつもりもねえからな。三十年も経ったんだ。お前らが変わったように、俺も変わる。……それでも、俺は俺だと、俺は思う」

見事なまでに言い返された一角は、一瞬あっけにとられた後ゲラゲラと笑いだした。

「なるほどな。違いねえ。……どうなってようが一護は一護だもん
なア」

そのままケラケラ笑い続ける一角に、一護も表情を崩す。

その二人を見て、周りもほっとしたように息をついた。

「あーもう、はらはらさせないで下さいよ、一角さん」

「悪い悪い」

「それにしても、一護もまたずいぶんうまく返すようになったわね」

「そうか？ ……まあ、しゃべるのと考えるのが仕事みてえなものだしな」

「想像つかないな、全く」

「うるせーなあ」

弓親に笑われ、一護は不服そうに明後日の方向へ視線をそらす。ルキアと雛森がくすくすと笑うのを見て、乱菊も笑った。

お礼、言い損ねたわ……

ギンを分け隔てなく扱ってくれること。

乱菊にとつて、それは途方もなく嬉しいことだ。

雛森に続いて、自分も思っていたのに。

それでも、まだしばらくあるのだから、その間に言えばいい。

悲しいほどに限られた時間であっても、それでも十分だと思わなくてはならない。

互いの立場の差は、それほどに重い。

ふう、と息を吐いた乱菊を、雛森が一瞬案じるような目で見る。

乱菊がほほ笑むと、雛森もまた少し笑った。

「そーいや、王族って普段何してるんだ？」

「何って……いろいろあるぜ？ こつちの政治もだけど、四十六室とごちゃごちゃやることもあるし」

一護がそう答えると、ルキアが意外そうに一護を見る。

「王族は、こちらに干渉してこないものだと思っていたが」

「表向きはな。実際そんなに干渉してるわけじゃねえし……そうだな、わかりやすいところで行くなら、隊首羽織とか副官章、浅打、代行証。このあたりは全部うちで作ってるんだぜ？」

彼らにとっては身近すぎるものに、一瞬戸惑う。

ただ戸惑ったのは現死神の面々だけでなく、桐生もだ。

「……そうなの？」

桐生に問われた一護は、意外そうに頷いた。

「何だ、知らなかったのか？」

「聞いたことないわ、そんなの」

「……機密でもなんでもねえのにな」

不思議そうに首を傾げる一護だが、死神たちは未だ固まったままだ。

隊首羽織や副官章には、象徴以外の意味はない。

だから作れるというのは、わかる。

だが浅打と代行証は違う。

それぞれに特殊な能力があり、だから王族が管轄するというのもわかるが、作ると言われれば戸惑わざるを得ない。

「……ってというか、浅打って作れるもんなのか？」

「作らなかつたらどうやって支給するんだよ。湧いて出るわけでもねえだろ」

「いや、そりゃそうだけど……」

返事に窮した恋次に、ルキアが助け船を出す。

「だが、浅打は斬魄刀。魂葬や虚の昇華といった能力を、人の手で作ることが可能なのか？」

ルキアの言葉に一様に頷いた死神たちに、一護は眉根を寄せた。

「そこまですると機密になるんだよな。西宮でやることだから」

一護がそう言うと、桐生は納得したように頷く。

「道理で、私達が知らないわけね」

「どういふことですか？」

「西宮は、完全禁踏区域だからな。護衛士も下官も入れねえ。だから知らないのも当たり前って言えば当たり前だ」

「……結局内緒ってことですか？」

雛森に問われ、一護は頷いた。

「そうなるな。隊首羽織や副官章は爺さんから要請受けて作るんだけど。別にそつちは何にも特殊なことねえよ。羽織は霊力織りこんで丈夫にするけどな。簡単に破れたら困るだろ？」

「……失くすつわものもいるけどね」

桐生が呟いたのは、ひよっとしなくても白哉・京楽・剣八のことだろう。

一角が一瞬気まずそうに身じろぎしたが、一護はそれに気づかなかったようだった。

「意外と、身近な所にあるのだな。王族というのは」

「まあな。そっちの情報は、割とすぐに手に入るし」

「なんかもつとピリピリしたところだと思ってたけどな」

「人が住んでるところなのに、そうピリピリしてられねえよ。もともと、うちの人間は仕事以外じゃ結構抜けてるところが多いんだ」

「抜けてる、ねえ」

さすがにそれはないだろう、と乱菊が苦笑する。

だが意外にも、桐生は頷いた。

「自分達のこととなると、特にね」

「なんか言ったか？」

「いえ何も」

わざとらしい言い合いが続いた後、桐生がくすりと笑う。

つられて誰もが笑ったところへ、戸口によく見知った霊圧が現れた。

「お。お帰り、冬獅郎」

扉の淵をつかんで肩で息をしている冬獅郎に、死神たちは首を傾げる。

「どうしたんスか？」

「っていうか、お帰りってどこ行ってたんです？」

「ずいぶん急いだんですね」

口ぐちに向けられた質問には答えず、冬獅郎は口を開けたり閉じたり、まるで何から話せばわからないかのような動作をする。

それを見た一護は柔らかく笑い、立ちあがった。

「国学院学舎卒業試験及び国官登用試験三位及第、おめでとう」

「三位っ!？」

一番早く反応したのは桐生で、続いて状況の飲み込めていない死神たちが騒ぎ出す。

「試験？」

「……三位？」

「……及第？」

見事にそろった角度で首を傾げた死神たちに、一護は口を開いた。

「こいつ、夏梨と違ってもう1個上の学校まで進学したって話、覚えてるか？」

「あー……そんなこと言ってたな」

「その卒業試験と、官吏としての登用試験に三位で及第したんだよ。だからおめでとうって」

今は結果発表に行ってたんだ、と付け足され、乱菊はあごに手を当てる。

「……………それってすごくない？ ひよっとして」

「ひよっとしなくてもすごいわ。落ちることはないだろうと思ってたけど、まさか三位とはね」

驚いたままの桐生だが、それ以上に驚いているのは。

「とーしろー、お前びっくりしすぎてねえか？」

いかにも気の抜けた呼びかけに、冬獅郎は真顔に戻る。

「……及第したとしても最下位だと思っていた」

「まさか。お前ががんばったじゃねえか」

「がんばったところで受かれる試験じゃねえだろ」

「お前成績悪い方じゃなかったし」

「教え方がいいんだろ」

「そりゃどうも。でもなんでも通ったらそれでいいんだよ。おめでとう」

「……ああ」

冬獅郎がそう言ってほっとしたように息をつくとき、乱菊がぱっと立ちあがった。

「おめでとーございますー!!」

「わっ!? 馬鹿、つぶすんじゃねえ!!」

かつてよく見たその光景に、仲間たちは目を細める。

最も、今回とその時では冬獅郎がうまく逃げ切っているという違いはあるが。

ぎゃあぎゃああと騒ぐ二人を見て、桐生は一護に笑いかけた。

「それにしても、三位及第だなんてね。驚いたわ」

「冬獅郎は頭いいからな、そうでもねえだろ」

交わされる会話に気づき、一角が一護に問いかける。

「そんなに難しい試験なのか？」

一護は思案するような表情を見せた後、壁際に並べられた天井まである四つの本棚を指した。

「あれ全部が範囲だな」

死神たちが押し黙ったせいで、乱菊と冬獅郎の掛け合いがより響く。しばらくそれが続いたのち、恋次が悲鳴に近い奇声をあげた。

「マジかよ!? あれ全部とか化け物じゃねえかよなんだよその試験!!」

自らの学生時代を思い出したのだろうか、頭を抱えたのは恋次だけではない。

雛森とルキアという霊術院組もまた同じだ。

だが一角と弓親にも、その異常性は十分伝わるもので。

固まったままの四人に、一護は苦笑した。

「だから言つたる、冬獅郎は頭いいつて」

「そりゃ天才児だけど……」

「ちよつとまで誰が“児”だ！ いい加減ガキ扱いやめろ！」

「そーいうところに耳聡いから言われるんスよ」

「だろうな」

あまりにもそのやりとりが和やか過ぎて、ついあの頃のままだと錯覚してしまふ。

ルキアはひとしきり笑った後、穏やかに目を細めた。

World guardians (後書き)

タイトル日本語訳は「世界の守護者」

思いがけず長期休暇になって申し訳ありません。

はたしてこの話、予定通りに終われるものかどうか……

いや、最後まで書きますけども。

今回は死神との話でした。

なんだかいろいろ書き忘れてる気がしなくてもないけどこれ以上休みたくないし……うん、もしあれなら次の話で補足します。

地震でちよっぴりお休みをいただきましたが、大事なことに気づきました。

「被災者の中にも、きっとLost gearを読んでくださっている方がいるのでは？」

だとしたら、私にできるのは募金&正確な状況を知ること¬ 買占めbut消費にプラス でこれを書いて少しでも楽しみを届けることではないかと。

そう思い立ってこうして復活しました。

未だネットが復旧していない地域もあるかと思えます。

どうか一刻も早く事態が打開し、少しでも早く普段の生活に戻れますように……！

そうしてここへ戻ってきた方が、よかった、ちゃんと進んでるって思っていただけなら嬉しすぎて泣けます。号泣します。

皆さまどうかご無事で。そして力抜いて楽しみ見つけてください。

それでは感想などお待ちしております。

s t r o n g b o n d (前書き)

83話の少しあとから始まります。

冬獅郎が合格したことについて、王族やら護衛士やらがわらわらと訪れる。

どうやら三位及第というのは本当にすごいらしく、死神たちもただ驚いた。

「……すごい人だったな」

ぼそりとルキアが言う。

最初の内は訪れる人物を見て驚いたりもしていたのだが、それが何人も続けば話は別だ。

ただ最後まで面白かったのは、一護の見慣れぬ姿だった。

こちらにきてから何度か目にした、王族としての対応。

そればかりは見あきることがなく、半ば放置状態だった他の面々も同じのようだった。

「悪かったな、ほつたらかしにしちまって」

「いいわよ、別に。なんだかおもしろかったし」

そう言っつて肩をすくめた乱菊に、一護は首を傾げる。

「面白かった、て……何がだ？」

「何でもいいわよ、ねえ？ 朽木」

「はい。松本副隊長」

思わせぶりな二人の態度に、一護はしばらく不思議そうにしていたが、やがて諦めたようだった。

すっかり日の暮れたあたりは、夕暮れ特有の赤みがあった暗さだ。紅に染められた庭と、そして遠く広がる薨の波に、雛森は思わず見

とれる。

澗霊邸とは違う夕焼けの美しさは、彼女らにとってひどく珍しいものだ。

その様子を見ていた恋次は、凝った肩を回した。

その時に衣が煩わしくなり、小さくため息をつく。

「ま、確かにお前らには鬱陶しい服装だよな」

一護のその言い方が気に入らなかったのか、恋次は不機嫌そうに言い返した。

「お前だってそうじゃねえのかよ。大体、現世の洋服のほうが死覇装よりよっぽど身軽じゃねえか」

「いいかげん慣れたさ。そりゃ、最初のころは鬱陶しかったけどな」

「僕は鬱陶しくないけどね。美しい衣を鬱陶しいと思う理由はないよ」

「まあ、弓親はそうだろうな」

自分の服を嬉しそうに見る弓親の横には、恋次と同じか、ひよっとしたらそれ以上に鬱陶しいと思っっているかもしれない一角が座っている。

不服そうながらも大人しく着てくれている仲間たちに感謝しつつ、

一護はそっと笑みを漏らした。

集まって夕飯を食べ、それぞれにまた語らう。

一護がずっと望んできた願いが一つずつ叶っていくそれに、桐生は嬉しそうに目を細めた。

朝も早かったことだから、とそれぞれ部屋へ戻っていき、ついに二人きりになったところで一護はチャドを振り返った。

「ようやく、落ち着いて話ができるな」

相変わらず寡黙なチャドと話すには、人数が多いのは少しばかり不都合が多かった。

チャドにとってもそれは同じで、だから最後まで残っていたのだ。

「そうだな……」

そうはいつても、何から話せばいいのか分からない。

そもそも、言葉は必要ないのかもしれない。

絆の強さに年月は関係ないのだと、二人はよく知っている。

「チャドは今どうしてるんだ？」

屈託なく問いかけた一護に、チャドは頷く。

「空座総合病院で、循環器系の内科医をしている」

「そっか……医者かあ。大変だろ？」

「それは、一護の方だろう」

「……まあ、大変じゃねえとは言えねえけどな」

そう言つて、一護は緩く首を横へ振る。

「でも、投げ出したいとか、そういう風に思ったことはねえよ。そういうのも全部覚悟してこっちへ来たから」

若々しい笑顔に、チャドも口の端を上げる。

同じ年齢だとわかっていても、どうにも違和感は拭いきれなかった。

「この仕事は、誇りか？」

短く問われた一護は、ゆっくりと頷いた。

「そうだな。……チャドも、そうなんだろう？」

「ああ」

ずっと異なる道を歩いて、全く違う生き方をしてきた。

それでも、己の職責を誇りに思うのと同じように、互いのことを誇りに思う。

本質で、二人はよく似ていた。

隣の部屋からぐずる声が聞こえ、一護が立ち上がる。

「悪い、ちよつと待っててくれ」

どうやら未っ子がぐずっているようだあたりをつけるが、なかなか泣き止まないようだった。

やがて、諦めたように一護が一志を抱いて現れると、チャドは黙って椅子を引いた。

「……お前に、よく似ているな。一貴も」

「髪の色はな。……一志の目は、凜と同じで真っ黒なんだ」

「……そうみたいだな」

一瞬チャドの方を向いた一志は、その濃い顔に驚いたのかすぐに反対を向いてしまう。

びびられたことはかなり悲しいが、それも仕方ないと割り切るしかない。

「三人とも、全然違う性格だな」

夕飯と一緒に食べた彩は、おてんばが服を着たようなはねっかえりで、一貴とは正反対の印象だった。

「ああ。一貴は大人しいけど、彩は全然だったろ？ ちつともじつとしてねえし」

そう言いながら一志をあやす様は、子煩悩な父親のものだ。

一護らしいと思い、笑みをもらす。

一護はそれに気づき、照れ臭そうに笑った。

「チャドと初めて会った時は、こんな風になるなんて思ってなかった」

「ケンカに巻き込まれてたんだっただな。確か、ずいぶん一護がおされていた」

一護は当時のことを思い出したのか、不服そうな表情を見せる。

「石使われなけりゃ一発で勝ってたさ」

「……そうか」

負けず嫌いなのも相変わらずか、とチャドは笑う。
それがわかったのか、一護は苦笑した。

思えば、こんな風に過ごすのは初めてかもしれない。
二人がたがいに居る時は、たいてい喧嘩ばかりで。

最後の半年に至っては戦いばかりだった。
親友よりも戦友の方が似合う間柄だったが、それでよかったと思う。
言葉がなくなるとも分かり合える強さは、誰にも負けない。

「夜一さんがしょっちゅう職場に来るから、おかしいとは思って
いたんだ」

おもむろに口を開いたチャドに、一護は首を傾げる。
同じように首を傾げた一志を見て、チャドはほほ笑んだ。

「あれは、ただ誰かに会いに来る様子じゃなかった。お前に、俺達
のことを話そうとして会いに来ていたんだろう」

「……なるほどな」

そう言っで一護は一志の頭をなで、抱き直した。

「俺にとっては、それがすべてだから。夜一さんと白哉が話してく
れなければ、現世のことはわからない。尸魂界のことだって、書類
になるようなことじゃなきゃ分からない」

実際、一護が王土を出たのはあの墓参りだけだ。

王宮の中から出ることさえ稀で、そんな生活で外の様子を知ること
はほぼ不可能に近い。

そうした気遣いが、本当に支えだった。

「夜一さんと白哉と空鶴さんと、それに祥瑛と九頭柳さんと爺さん
には感謝してる。あの六人がいなければ、俺は多分やってこれな
かったから」

「……そうか」

安堵した、というのが正しいだろう。

遠く離れた地でも、一護はちゃんとやっている。

支えてくれる人もいて、支えたい人もいて、大切な家族があつて、責務に誇りを持っていて。

そうであつてほしい、きつとそうだと信じていた全てが、やはり信じていた通りだったことに安堵した。

「……元氣そうで、よかった」

ともすれば皮肉にさえ取れそうな言葉だが、一護はそう思わなかった。

「ありがとな」

strong bond (後書き)

タイトル日本語訳は「強い絆」

完全に更新ペースが乱れてしまつて申し訳ありません。
書けたら更新、書けたら更新……という風にいきます。

書きたかったことその2・一護&チャドでした(笑)

……あー、書きづらかつた……

年取つたチャドと親になつた一護の組み合わせってこつもやりづら
いもんですかねえ(遠い目)

それでは感想などお待ちしております。

i r o n w i l l s (前書き)

84話の終わりの翌日から始まります。

「あ、おはよう。朽木さん」

「おはよう井上。他の者は、まだか？」

「うーん、あの人は起きたみたいだけど……あ、茶渡君！ おはよう」

「おはよう」

隊舎の廊下で会話を交わした三人は、ぐるりとあたりを見渡した。

それほど早い時間ではないのだろうが、遅い時間でもない。

起きたら声をかけると桐生達から言われているが、無理に起こすのも気が引けた。

「……なんだ、早いな」

「うわああっ！ ……お、おはよう。冬獅郎君」

不意に後ろから声がかかり、織姫は飛び上がる。

振り返れば、冬獅郎が立っていた。

「他の奴らは？」

「まだみたいだな。阿散井は、まだ寝ていた」

恋次と同室のチャドが言うと、冬獅郎は頷く。

「なら、お前らだけでも朝飯にするか？」

「あー、ちよつと待って。多分そろそろ……あ、出てきた」

「これだけしか起きていないのかい？」

部屋から出てきた雨竜に、織姫は頷いた。

「朝ごはんにしようって、冬獅郎君が」

「隊舎の食堂だが、いいよな？」

「もちろんです」

ルキアが頷いたのを見て、冬獅郎は食堂へ案内した。

「黒崎君は、もう起きたのかな？」

朝食を食べているのはルキア達だけで、食堂には人気がない。

護衛士がいれば、それはそれで気づまりなので都合がよかった。

「起きたも何も、とつくに政庁へ行ったぞ」

「えっ！？ 早くない？」

織姫が驚くと、冬獅郎は首を横へ振った。

「いつもこんな時間だ。真冬だと、日の出よりも早い」

「早すぎないか？」

まるで年寄りじゃないか、と雨竜が心中でつぶやくと、冬獅郎はまた首を横へ振る。

「しきたりつてやつだ。大官を集めた会議が、毎朝早くに行われるしな」

「……大変なんだねえ」

しみじみと言った織姫に、ルキアは眼を細めた。

そういう彼女こそ、毎朝早くから働いているというのに。

死神も、医者も、そして東宮も、誇りとともに厳しさを兼ねる仕事。それでも、彼らに言わせるならば、仕事とは概してそういうものだと答えるだろう。

半ば気概で成り立っているような仕事に就く彼らだからこそ、そういう風に言えるのかもしれない。

「それなら、今日はいつ会えるのですか？」

「……どうだろう。午前中は難しいかもな。……どうする、街に行ってみるか？」

冬獅郎の提案に、織姫は考え込む。

街に行ってみたいという意識はあるけれど、また会ったときに過剰に反応してしまうかもしれない。

それは一護に迷惑をかけることになるのだろう、となんとなく察せられた。

「うーん……彩ちゃんとかは、今日は学校なの？」

「終業式のはずだが、それがどうかしたか？」

「明日、また話そうねって約束しちゃったから」

ませたとところのある彩は、盛んに現世のことを聞きたがった。

「どうやら一貴が現世に行つたのは内緒だったらしく、ずるいずるいと昨日は一護にあたつてばかりいた。」

「そうか。昼前には帰ってくるはずだ。一護よりも早いかな」

「わかった。楽しみだなあ。元気で可愛い子だもん」

上機嫌の織姫を見て、雨龍も笑う。

「子供好きがこつじて小児科医になつた彼女にとって、あの子供たちは最高の癒しのようだ。」

起きてきた他の面々も朝食を終え、それぞれ思う場所へ散っていく。一護が帰ってくるまではほかにすることもないから、道場などで時間をつぶすのだろう。

冬獅郎は、今日は特に仕事がないらしく、午後から学校へ行くがそれだけだと言っていた。

「一日経つてみてさあ、改めて変わったところだと思わない？」

織姫が呟くと、ルキアが頷いた。

王宮と言っただけあってどこも丁寧に手入れされているが、尸魂界や現世とは何もかもが違う。

庭の造りも違うし、建物だって石造りだ。

電気もガスもない、水道だって通っていない。

現世や尸魂界と比べればはるかに不便なはずなのに、それでもここは“進んでいる”感じがした。

「確かに。変わっているというより、不思議といったほうが近い気もするが」

「文化の違いってわけじゃないんだろうが……」

雨龍は考えてみるが、どこをどう言っているのか分からない。

「何もかもが違う、というところじゃないか？ 言葉ぐらいしか通じないだろう？」

ずいぶん大雑把な答えだが、仲間には皆それが正解だと思った。

そうして昼過ぎになると、一護が戻ってきた。

一護が伴っている女性を見て、ルキアは顔をほころばせる。

「皆さま、遠路はるばるようお越しくございました。昨日はお迎えできずすみません」

そう言つて礼をとつた凜に、ルキアは首を横へ振る。

「気になさらないでください。こちらこそ、お久しぶりです」

丁寧に礼をしたルキアにはほほ笑んだ凜は、まさしく東宮妃としての気品を備えていた。

ただ、その表情を見て、織姫は首を傾げる。

「あの……気のせいだったらすみません。凜さん、今体調悪かったりとかしません？」

「顔色が悪いのはいつものことなんです。これぐらい、大丈夫ですよ」

「馬鹿言つな、お前いつもよりはるかに悪いぞ」

横から口出したのは、心配だと顔に書いてある一護だ。

「どうせ、ほとんど寝ないで対策に回ってたんだろう？ とりあえず一回寝ろ」

「忙しかったのは本当だけど、これぐらい平気よ。巡察使やってたころは」

「引退して何年たつと思ってるんだよ。体力だつてそれなりに落ちてる。お前元々食が細いのに」

「それは関係ないでしょう！？ 大丈夫ったら大丈夫よ！」

「あのなあ！」

思いがけず始まった口げんかに、ルキア達五人は顔を見合わせる。喧嘩というほどのものではないのだけれど、口をはさめば悪化するのには目に見えている。さて、どうしたものか。

そうして、ちょうど廊下の端に姿を現した冬獅郎を見つけて、五人は無言で窮状を訴えたのだった。

冬獅郎に懇々と叱られた後、一護は不機嫌そうに席に着いた。「凧は結局少し休むことになり、そちらもまた不機嫌そうに顔をしていたが、もし凧が押し切るつもりだったら医者として三人が止めるだろう。」

織姫がくすくすと笑っているのを見て、一護は不機嫌そうにそのままそちらを見やった。

「何笑ってるんだよ」

「ごめんね。ただ、あんまり仲がよさそうだから笑っちゃったの」
だって、お互いのこと気遣って、それで喧嘩するなんて。

あんまりかわいらしいその様子に、笑わずにはいられなかった。

「凧さんが戻ってきたということは、土砂崩れの方はもう落ち着いたのかい？」

「ああ。後は官吏に任せておけば大丈夫だ。一応、そういう部署もあるしな」

「昨日言っていたことか？」
ルキアに問われた一護は、一瞬考えるように視線をそらしてから頷いた。

「そっか、お前には話したよな。……ああ、あの部署だ。専門だから、うまくやるだろ」

そう言つて茶を飲んだ一護に、ルキアはほほ笑む。

何の話だと問われた一護は、雨竜に対して頷いた。

「災対寺つていう、災害の対策と災害後の救援・復興を一手に引き受けてる部署があるんだ。この案件はもうあいつらの手に渡ってるから、問題ない」

そうなのか、と頷いた雨竜を横に見て、ルキアが口を開く。

「災対寺というのは、貴様が作った部署なのだろう？」

えっ？ と織姫が驚いたようだったが、一護は苦笑して頷いた。

「一応、な。組織として機能するようになったのは最近だし、評価もまだまだけど」

「組織を作る、というだけで十分すごいと思うが」

雨竜にしてみれば、全く縁のないことだ。

病院内で新たに委員会を作ることにはあるが、その程度。

組織を作る、というのがどれほどのことなのか、難しいということしかわからない。

「まあ……大変だったけどな。でも、これしか俺には思いつかなかつたから」

仲間たちが怪訝そうな表情をしたのを見て、一護は話し続けた。

「……大きな、災害があつたんだ」

実際に、その場へ行つたわけではない。

その時すでに一心は動ける状態でなく、そのために、次期東宮である一護もまた王宮から出られなかった。

だから、知っているのは書面に綴られた悲痛な訴えと、その場へ行った護衛士と巡察使から聞いた話を組み立てたものでしかない。

それでも十分すぎるほどに、激しい災害だった。

「もともと、ここは災害が少ないんだ。干ばつや大雪なんかはあるけど……地震が起きたことは記録にない。ここは、そういう土地だ」
そう言われ、雨竜は目を見開く。

「地震が起きない？ この世界全体でか？」

「そつだ……地形が変化することもない。ずっと昔、ここができたころから、ここの風景は変わってねえんだつてよ」

「……………」

有り得ない、と思った。

世界のどこを見渡しても、ずっと同じ姿を保っている世界など。

「そつちの常識が通じる土地じゃねえよ。……ともかく、なんていうか……災害慣れ、してねえんだよな。地震のことなんて、こつちの奴らは全く知らねえし、干ばつとかだつてそうひどくなることはない。ちゃんと、多少苦しくても食べていける程度の環境は常に整つてるんだ」

一護はそう言つて湯呑みに視線を落とす。

茶に映つた自分の姿が、波紋とともに揺れるのを見て、一護はあの災害を思い起こした。

「俺がこつちにくる原因になつた伝染病と、さつき話した災害

洪水。その二つが、多分歴史上で一番大きな災害だ」

洪水、と織姫が繰り返す。

電気もガスも水道もない世界で、洪水が起きれば。

医者である彼女には、その結末が容易に浮かんだ。

「洪水自体の被害もひどかつただけだな、何よりひどかつたのは衛生環境の悪さだ。実際、洪水が原因の犠牲者と、環境の悪さから来た感染症の犠牲者の数はほぼ同じだ。……俺や親父がもう少し早く気付いてたら、多分もつと犠牲者が少なくて済んだはずなんだ。

ここで大きな災害が起きるはずないつて思い込んでたせいで、対応

が遅れた」

そこまで聞けば、最後まで聞かずともわかる。要するに、一護は。

同じ悲劇を繰り返さなくてすむよう、その組織を作ったのだ。

自分の持つ全てを賭けて。

「変わらないな」

雨竜が呟き、一護が顔を上げる。

「何がだ？」

「何もかもだ……それで、その組織を作ったんだろう？ 同じことを繰り返さなくてすむように」

「俺に出来るのは、それしかねえよ。俺が持つてる力で誰かを護りたいんなら、こうするしかねえ」

その言葉は、寂しさと誇りに満ちていた。

組織を作るといっつのは、言うほど簡単なことではないはずだ。反発もあっただろう。

行き詰ったこともあっただろう。

それでも、変わらず進み続けるには、何よりもつよい心が必要だったはずだ。

「鉄の志ユツメ、か」

え？ と一護が問うと、ルキアは笑った。

「覚えているか？ “我等、今こそ決戦の地へ。信じる、我等の刃は砕けぬ。信じる、我等の心は折れぬ”……」

「たとえば歩みは離れても、鉄の志は共に在る、か」

後を続けた雨竜に、恋次は意地悪そうに笑った。

「何だ、覚えてるもんだな」

「君と違つて物覚えはいい方だからな」

「何だと?!」

「誓え、我等地が裂けようとも、再び生きて、この場所へ」

最後まで言ったルキアに、チャドが頷く。

「懐かしいな」

一護も頷いたのを見て、織姫は首を傾げた。

「なあに、それ」

「……井上は、知らぬはずだ。虚圏へと乗り込んで、それぞれ違う道に行くことになった時に、誓つたのだからな」

織姫は驚いたように目を見張つたが、すぐに表情を緩めた。

「そつか……鉄の志……」

誓いの意味と、その状況と、そしてルキアが言わんとしたことがわかり、織姫は湯呑みを握りこむ。

そつだ。

組織を作るために何よりも必要なのは、理想を求め、何があつても挫けない“鉄の志”

たとえ離れても、誓いは有効。

共にあるはずの“心”も。

唐突に持ち出された古い会話にも関わらず、一護は何も驚かなかつた。

それは、その誓いが常に胸にあつたという証拠に他ならない。

信じる心の強さを、身をもって教えられた瞬間だった。

iron wills (後書き)

タイトル日本語訳は「鉄の志」テツノシ

この一連のセリフは、多分原作の中で五指に入るぐらい好きです。空で言えるぐらいに大好きです（笑）

ということでもタイトルにも転用。直訳だと、鉄の意志になりますかね。

それでは感想などお待ちしております。

k i n d f e e l i n g s (前書き)

85話の直後から始まります。

kind feelings

一護が仕事を終えたことに気づいた仲間たちが、続々と集まってきた。

あっという間に結局全員が集まり、再び話に興じる。

仕事のこと、最近の流行のこと、誰それがやった馬鹿なこと。さすがに二日目ともなれば下官にもだいぶ慣れ、気にせずくだらない話に興じることができた。

「そんなことあったのかよ……」

一護がゲラゲラと笑っているのは、檜佐木と吉良がよっぱらった時のことだ。

恋次が身振り手振りを交えて話すもので、その情景がありありと浮かぶ。

笑いすぎて出てきた涙をぬぐって、一護は左手に右手を重ねた。

誰もかれもが笑いつぱなしで、だから、異変に気付かなかった。

げらげらと笑う一護の後ろに、ふいに黒い影が現れる。

それに気づいた雨竜が目を凝らした瞬間、その影は何かを振り上げた。

「黒崎ッ！」

石田が叫ぶのと、一護が懐に手をやるのが同時。

だがそれよりも早く、その影は庭に向かってはじき出された。

一瞬のことで、何が何だか分からない。

庭には、桐生に組伏せられた黒衣の男があり、一護の後ろには、氷

輪丸を構えた冬獅郎がいる。

たった二文字の単語を導きだすのに、ずいぶんな労力と時間を要した。

刺客……

一護は動じたそぶりもなく、ただ無表情に取り押さえられた刺客を見ている。

大儀そうに立ち上がると、廊下へと歩み出た。

「……おとしたか」

「ええ。舌でも噛み切られたら厄介ですので」

桐生が端的に答えると、一護は頷く。

「わかった。刑部に……」

そこまで言った瞬間、一護の眼はぎよつと見開かれた。

その視線の先にある姿を見て、乱菊が息をのむ。

庭の隅にたたずむ黒衣の男。

その男が片手で抱え、喉もとに白刃を突き付けているのは。

「……彩」

一護が、ギリと唇を噛む。

どうやら意識が無いらしく、手足がだらりと垂れている。

あと少しでも力がこめられれば、その刃は簡単に皮膚を突き破るだろう。

動いてはいけない、と理性が警鐘を鳴らした。

少しであっても、刺激してはいけない。

ルキアは横目で一護を盗み見る。

一護は真っ直ぐにその刺客を見据えながらも、やはり動けないでいた。

「東宮」

刃を突き付けている刺客が、静かに口を開く。

「貴様の持つ全権の放棄を。なされぬのであれば、娘の命はないものと思え」

それが脅しでないのは、滲み出る殺気から明らかだった。

ふいに、一護が一步踏み出す。

一步、また一步と。

数歩の距離まで迫った時、刺客は刃を僅かに動かした。

それ以上はならぬという、暗黙の意思表示だ。

「一つ、問う」

一護が静かに口を開けば、刺客は黙って促す。

有無を言わせぬ強さが、一護には合った。

「お前の雇い主は、俺の何が気に入らない？」

「貴様は、靈王陛下の権を蔑ろにしすぎている。東宮として認められた範囲ではない」

「陛下は、私を信任して御自ら権を預けてくださった。他にとやかく言われる筋合いはない」

一護の声は、あまりにも静かだった。

それが強い違和感を伴って、仲間たちの胸に迫る。

「王に取り入ることが、許されるとでも思うか。一心様が長子であり、凜様を伴侶としたことで、自らもそれに並び立てたとも？」

「二人のことは関係ない。私は陛下の信を得られるよう、努力したまで」

それを聞いた刺客は、鼻でせせら笑った。

「努力？ 現世生まれの貴様が努力したところで、斯様な信を得られるとでも？」

織姫が小さく息をのんだ。

「そもそも、貴様は現世と尸魂界を重んじすぎる。あのよう到大罪人を輩した土地。重んじるところか廃絶してしかるべ」

き。

その最後の音は正常に紡がれなかった。

チャドが目にしたのは、左腕に彩を抱え、刺客の後ろに立つ一護。腕の中に彩が無いのに気づいた刺客は、振り向きざまに刃を振り払った。

一護の手に、刃はない。

右手が空いてはいるが、そもそも丸腰だ。

防げない ……

恋次が大きく口を開いた瞬間、キン、と刃が触れあったとき特有の金属音がした。

「中へ！」

冬獅郎が刀を押し返し、背後に庇った一護に言う。

部屋の中へ戻った一護に、誰もが大きく息をついた。

戸口に立ちただかった桐生と、その後ろに立つ一護は、油断なく刺客を見据えている。

だが、鍛錬に鍛錬を重ねた冬獅郎と刺客との間には、埋めようのない差があった。

ほどなく刺客は倒れ、冬獅郎が氷輪丸をおさめる。

桐生は振り返ると、一護の腕の中にある彩に視線を移した。

「お預かりします」

両手を差し出した桐生に、一護は頷いて彩を預ける。

「頼む」

その一言の中に込められた様々な念を受け取って、桐生は頷いた。

桐生が出ていくと一護は戸を閉め、深くため息をつく。

「……………大丈夫か？」

案じる様に問われ、一護は頷いた。

「ああ。悪かったな、驚かせて」

こんなときにまで周りに気を遣う一護に、仲間形容しがたい苛立ちを覚えた。

「こんなときまで、俺たちに気を遣わなくてもいい」

浮竹が言っていると、一護は首を横へ振る。

「いいんすよ。俺らにとっては、よくあることだ」

「よくある……………？」

「全く平和なら、護衛士はいらねえだろ？」

そう言われてしまえば、黙りこまざるを得ない。

そつだ、死神の中でも最強の者たちを集めているのに、理由がないわけがない。

もっと早く気づいてもよかったのではないか。

そんな風に思ってしまう。

「ま、最近は減ってたから、驚いたって言えば驚いたけど……………手段がな」

そう言っつて小さくため息をついた一護に、一角が問いかけた。

「手段がどうしたんだよ」

「……………人質を取るような真似は、少なくとも今までなかった。それだけ切羽詰まってるのか、他の理由があるのか……………」

考え込むそぶりを見せた一護に、チャドは眉根を寄せた。

「人質を取らないなら、他に何をするんだ？」

「大抵は、直接俺を狙いに来る」

織姫が目を見開いたのを見て、一護は大したことじゃないと言った。
「そっちの方が都合がいい。あんなのにやられる気はしねえし、護衛士もいるからな」

「でも……」

「こんな風に心理戦に持ち込まれるよりは、よっぽどラクだ」

それは、親である雨竜と織姫には痛いほどわかった。

子供を狙われるのは、親として耐えがたい。

いつそ自分を狙ってきた方が、よほど楽だというのも。

でも、それでも。

「それに、内朝に踏み込まれることは滅多にねえんだ。大抵は政庁に居る時……そっちの方が警備が手薄だしな。狙いやすいってのもあるんだろう」

淡々と話す一護の背後で、扉が叩かれた。

「誰だ」

僅かに警戒の色を帯びた問いかけに、相手も素直に応じる。

「雷雨です。開けます」

言うなり扉は開かれ、雷雨と竜が入ってくる。

「お怪我は？」

「桐生に預けた。医官が診ているはずだ。外傷はないようだったから、眠らされただけだろう」

「……殿下のことをお聞きしたのです」

一護は一瞬驚いたようだったが、すぐに苦笑した。

「無傷だよ。冬獅郎がうまくやってくれた」

「それなら、よいのですが……」

雷雨がかすかに苛立っているのを見て取り、一護は付け足す。

「彩の担当は、誰だった？」

「飛光の班です」

「……わかった。彩から話が聞けるまで、処分は保留だと伝える。必要以上にことを荒立てるなとも」

「畏まりました」

音もなく去った雷雨を見て、竜は部屋の外へ出て戸を閉めた。気配は移動していないから、せめてもの配慮なのだろう。

「一護さん！ 手！」

突然花太郎が声を上げて、誰もが驚いたように一護の手を見る。

左手から僅かに血が流れているのを見て、一護本人も驚いたように瞬きをした。

「……切れてたのか」

「そうじゃなくて！ いいから止血して消毒しないと！！ 刀傷は」

「あーわかつたわかつた。ちゃんとやるから」

一護は黙ってその傷を検分する。

ちよと袖のすぐ内側を斬られたらしく、これなら包帯をしておいても気づかれないだろう。

傷自体はそれほど深くない。

今になって血が流れてきたのは、少し動いたせいで開いたからだろう。

部屋の隅から救急箱とおぼしきものを出してきた一護は、慣れた手つきで包帯を巻いた。

「……誰かに見てもらった方がいいんじゃないの？」

乱菊が訊くと、一護は首を横へ振った。

「そうしたら、冬獅郎達の責任になる」

「え……？」

驚いた様子の、主に現世の三人に、一護は説明する。

「職務怠慢つてな。護衛対象が怪我したら、処分されるのは当たり前だ。だから、いい。大した怪我でもねえし」

そう言っってひらひらと手を振って見せた一護に、岩鷲は苛立つ。

だが何を言ったところで、何にもならないのはわかっていた。

「彩ちゃんのところに行つてあげたら？」

そう言つた織姫の表情は親のものだ。

一護だつて心配で仕方がないはずだし、彩だつて不安なはず。

せめて、傍にいてあげてほしい……

だが、一護は首を横へ振つた。

「俺が行けば、目立つ。今のままなら上手く揉み消せるけど、下手に知られたら余計に事を荒立てちまう……そうなれば、処分する対象も、程度も大きくなるだけだ」

甘い。

一角は内心歯噛みした。

甘いだけならいい。

それに付け足して、生ぬるいのだ。

失敗した奴が処分されるのは当たり前、それをなぜ庇う必要がある？

865

「護衛士が手を抜いたとは思えねえ……何か予想できないことが起こつたつて考える方が妥当だ。なら、簡単に処分するべきじゃない。少なくともあいつらは、十分にやつてる」

優しさは、過ぎれば毒だ。

他に対しても、自らに対しても。

それを一護が自覚しているかどうか。

ルキアが声を上げようとした瞬間、再び戸が、今度は許しを請うこともなく開かれた。

「一護！ 彩は！？」

飛び込んできた凜は、ひどく憔悴しているように見えた。

一護は安心させるように笑むと、頷く。

「大丈夫。桐生に預けた……怪我もないようだったから、じきに戻

つてくるだろ」

それを聞くなり身を翻した凜の手を、一護が掴む。

「落ちつけ。……俺達が行けば、目立つ。わかるだろ？」

言い聞かせるような口調に、凜ははっとしたようだった。

その目には強い葛藤が浮かんでいたが、それでも、凜は頷いた。

「そうね。……わかった」

たったそれだけで引きさがった凜に、恋次はいっそ冷たささえ感じ
る。

少なくとも、恋次の周りにいる親ならそう簡単に引きさがったりし
ない。

再び戸が叩かれた。

「どうした」

「皇太子殿下、妃殿下。礼部尚書が謁見を願っております。いか
がなされますか」

「すぐ、行く」

一瞬のためらいもなく反応した一護に、ルキアは啞然とした。

「……一護」

「ん？」

止めようとした。

さっきの一瞬で、一護はひどく消耗しているように見えた。

なのに、振り返ったその顔を見たら、何も言えなくなってしまった。

「……どうした？ ルキア」

「……何でもない。気をつけるよ」

首を横へ振ったルキアを見て、一護は首を傾げる。

だがルキアがそれ以上何も言わないとわかると、扉へ手をかけた。

「ああ、そうだ」

一護は立ち止り、振り返る。

仲間たちが何だと首を傾げる中で、一護は再び口を開いた。

「ここから出ない方がいい。まだ何人か潜んでる」

「え……？」

「外から結界張つとくけど、油断するなよ」

それ以上の返事を待たずに、一護も凜も部屋を出ていく。

扉に鍵がかけられる音を聞いて、漸く仲間たちは我に返った。

「馬鹿か、あいつ」

謁見ならば、政庁だろう。

襲撃を受けるのは、大抵政庁に居る時だと今言っただばかりなのに。

ましてこの近くにも数人いると知っていて、それでも職責を全うするためには外へ出たのだ。

そんなのは、強さでもなんでもない。

「……………それにしても、よく子供を放つとけるな」

恋次が低く呟くと、一気に視線が集中した。

「一貴が一護になついてねえのは、こうやっていつも仕事を優先してるからじゃねえのか？　こんなときぐらい、一緒にいてやれっの」

それは、家族という存在にあこがれ続けた恋次だからこそ言える言葉だ。

一角やルキアも、なるほどと頷く。

だが、二人だけ反論するものがあった。

「そんなことない」

「そつだ……あまり、親を侮らない方がいい」

声を上げた石田夫妻に、恋次は眉をひそめる。

「どういう意味だよ」

「そのままだ。そばに居てやりたいと思わないわけがない。こんな

ことがあって、傍で自分の手で護ってやりたいと思わないわけがないだろう」

雨竜が苛立った口調でいえば、恋次は更に眉をひそめた。

「だったらそうしてやればいいじゃねえか。ああやって周りに気い遣って、結局大事なもん忘れてんだろうが！」

「違うー！」

勢いよく言い返した雨竜に、恋次は黙りこむ。

「言っていただろう。まだ何人かいると。……大抵は直接自分を狙いに来ると！」

「黒崎君は、彩ちゃんから狙いを逸らそうとしたの。自分が警備の手薄な政庁に出れば、間違いなく自分を狙いに来る。そうしたら、子供たちは狙われずに済む」

後をついで言った織姫に、ルキアは息をのんだ。

完全に、盲点だった。

「凜さんだつて、同じなんだよ。桐生さんが傍に居れば、絶対に彩ちゃんも安全だから、行きたくても我慢したの。傍にいてあげたいって思わないわけないでしょう？」

それは、二人が親だからこそ確信できることだった。

共働きの二人は、常に子供のそばにいてやることができなかった。

授業参観や、運動会という行事でさえ、満足に言っただけとは言えない。難しい。

それでも、子供たちは何も言わなかった。

子供だつて、わかっているのだ。

「一貴君が黒崎君に対して上手く接せれないのは、懐いてないからじゃないよ。本当は黒崎君のことが大好きなんだよ。……上手く接

せれないのは、意味がわかっているから」

「意味……?」

「黒崎君や凜さんが、一生懸命自分たちを護ろうとしてくれているのが、わかっているからだよ。それが親にとってどんなに大変なことかも、完全にじゃないけどわかっている。だから、二人に心配かけちゃいけないんだって頑張ろうとしているの」

一貴に会ってから、まだたった3日しか経っていない。

それでも、確信できる。

一護も凜も精いっぱい愛情を注いでいるし、一貴も彩も一志も、それをわかっている。

ただ、環境が悪いだけなのだ。

「さすが、織姫ちゃんだね」

不意に扉の向こうから声が聞こえて、織姫は振り返った。

「夏梨ちゃん……?」

かちやりと鍵が開けられ、夏梨が入ってくる。

「一兄に頼まれたんだ。見てきてくれて」

どこまでも気遣いを忘れない一護に、花太郎は悔しくなる。

少しぐらい、自分のことだけを考えていてほしい。

「織姫ちゃんの言うとおりだよ……でも、ちょっと外れてるかな」

「え?」

椅子に腰かけた夏梨は、小さくため息をついた。

「一貴はね、一兄が怖いんだ」

「怖い?」

怖がっていると言われれば、確かにそう見えなくもない接し方だが、それでもいつたいなぜ。

「まあ、畏れてる……尊敬してるって言う方がいいのかな。あんなことがあった後じゃ信用できないかもしれないけど、一兄って結構辣腕家なんだよ。周りからの評価も高い……だから、一歩引いちゃ

「つてるつていうのかな」

そう言った夏梨は、天井を見上げた。

「一貴は一兄の長男だ。いつかは後を継がなくちゃいけない。それが、重荷なんだよ」

それは、なんとなくわかるような気がした。

生まれた時から重責を背負わされていれば、ああなってしまうのも無理はないのかもしれない。

「政庁の中には、一兄に反発するの人もいる。ただ、王宮の外に出れば話は別。民はみんな、一兄の味方だよ。災害から救ってくださいっただ、悪吏を罷免して下さった、て」

「護らしい、と思った。」

誰かを護ろうとして、必死になって頑張ってきたはずだ。

だからこそその評価。

ただそれが、一貴に対しては重荷だった。

「あたしも経験あるんだよね。……学校行くようになってさ、そうすると外に出るでしょ？ で、“あの先の東宮様の御娘で、今の東宮様の妹君” って肩書が付いて回る。誰も私のことを単体でなんか見てくれない」

その重荷は、ルキアにはよくわかった。

“朽木家当主であり、六番隊長である白哉様の妹君”

当時はそれがひどく苦痛で、そうとしてしか見てももらえないことに反発も感じた。

それが、一貴にとっては生まれたところからの話なのだ。

「もう少しして、あいつ自身が評価されるようになったら、何か変わってくると思う。それまでの辛坊なんだ」

なんて、ややこしいんだろう。

こんな立場にさえ生まれなければ、彼らは途方もなく幸福な家庭を築けたはずだ。

それなのに、一体どうして。

「……この話、一兄達には内緒にしてね。そのうち、自分で気づけるまで、そっとしておいてほしいの」

「……わかった」

それまでは、大変な道のりだろう。

それでも、あの家族なら問題ないはずだ。

自分たちができるのは、それを信じることだけ。
歯がゆいけれど、それしかない。

しばらくして一護が戻ってくると、凧以外の人影も見えた。

「……兄様」

到着して以来姿を見ていなかった兄の姿に、ルキアは声を上げる。
当主達は北宮に泊まるのが慣例だそうで、なかなか会えなかったのだ。

「……で、残りの連中は片付いたの？」

蓮杖が問えば、一護が頷いた。

「そのはずだ。少なくとも、この周りには気配を感じねえ。……もう大丈夫だろ」

「彩は？」

「まだ眠ってるが、心配ないってよ」

仲間たちがほっと息をついたのを見て、一護は柔らかく笑った。

「悪かったな、心配かけて」

「そうやって、俺たちに気を遣わなくていい。一番疲れたのは君だろ」

「……まあ、ある程度は覚悟してるから」

浮竹にそう言った一護は、ぐぐつと伸びをした。

「それで？ どうして僕たちまで集めたんだい？」

「あー……それな」

蓮杖に問われた一護は、言いづらそうに視線をそらす。

何か不味いことでもあったのか、と身構えた瞬間、何度目か分からないが扉が叩かれた。

「どうでした？」

誰、とも、何の用かとも聞かず、一護はただそれだけを問うた。

「……最善は尽くした、とだけ言おうかな」

「わかりました。わざわざすみません」

一護は遠ざかっていく気配にしばし意識を傾けていたが、やがて仲間の方を振り向いた。

正確には、当主達五人の方に。

「正月に話してた最悪の事態が起こった」

無表情に一護が言い捨てると、五人は固まった。

「えー」

一番最初に硬直を解いた蓮杖が、面倒だから嫌だといった色合いの声を発する。

「あのなあ、俺だって努力したさ。でもあの方が本気で言い出したら止められるわけねえだろ？」

「王夫であつても止められなかったようだしね」

扉の方を向いたままだった九頭柳が、疲れたような口調で言った。

ただ、何の説明もされていない仲間たちが何よりも気になったのは、残る三人の当主の視線だった。

憐れむような視線を三人そろって向けてこられれば、気にならないわけがない。

「えーと……俺達に関する事なのかな？」

「むしろお主らにしか関係してないことじゃの」
夜一がそう言ったのを聞いて、夏梨がため息をついた。
どうやら、彼女も何かを悟ったらしい。

「……おい、一護」

「悪い、とりあえずさきに謝っとく」

「謝る前に説明しろ!!」

どうにも嫌な予感が脳内を駆け巡り、仲間たちは顔を見合わせた。

「陛下がな、お前らに会いたって」

k i n d f e e l i n g s (後書き)

タイトル日本語訳は「優しい想い」

久しぶりに満足のいく出来でした！。

こういう、想いのすれ違いとか書くのは大好きです。

それでは感想などお待ちしております。

noble reason (前書き)

86話の直後から始まります。

noble reason

「陛下がな、お前らに会いたいわって」

きっかり8秒間の沈黙の後、おずおずといった調子で浦原が口を開いた。

「えーっと……陛下って霊王陛下のことっすか？」

「他に誰がいるんだよ」

「……………」

そこまできてようやく、死神たちは悲鳴を上げた。

「ええっ！？ ちよっ……本気!？」

「無理無理無理無理!！」

「常識で物を考えてくださいよ!！」

一斉にあげられた拒否の声に、一護は頭を抱えた。

「拒否できるならとっくにしてるっての……………」

小さな抗議の声は、仲間たちの耳には届いていない。

もう一度大きなため息をつくとき、一護は意を決したように顔を上げた。

「今更無理なもんは無理だ。陛下が会いたいわっておっしゃった以上最善を尽くすのが俺らの役目だし、誰も止められねえ。一応王夫にお願いして思い直してもらおうよう説得したけどダメだった。だからもう諦める」

「諦めろって……あんたねえ」

乱菊が呆れたように言うが、一護はまた首を横へ振った。

「そもそもあの人駄々こね始めた時点でどうにもならねえんだよ」

「駄々つて……」

いくらなんでもその言い草はどうか、とルキアが言えば、一護はまた首を横へ振った。

「こつちの意見聞かねえで会いたいの一点張りで、どこが駄々じゃねえっていうんだ？」

「……………」

それは確かに駄々かもしれない、と少しばかり納得した。だが、それとこれとは話は別だ。

「……………」しかし、陛下は体調を崩されているのだろうか？」

「はい。だから、会うつて言っても全員つて訳じゃない。当主と俺を除いて4人ぐらいか」

浮竹に言うつと、仲間たちは僅かに色めきたった。

つまり、その4人に選ばねなければいいだけの話だ。

「……………」っていうか、どうして黒崎君は謝ったの？」

ずっと口をはさめずにいた織姫が、ようやく問いかける。

霊王に会うことについて、どうして一護が謝る必要があったのだろうか。

問われた一護は、言いづらそうに頭を掻いた。

「なんつーか……………怖え人なんだよな。多分、初対面なら寿命が縮む……………」

謝る理由としては成り立つが、会うだけで寿命が縮むとはどういうことだ。

「これぞ霊王つて方だもんねえ。風格とか品格とか。僕、陛下と一対一でお話するぐらいなら総隊長と一対一で殺し合いする方がよっぽどマシかな」

蓮杖が言うつと、死神たちの顔が引きつった。

総隊長と殺し合いなんて、そんなの絶対にごめんだ。

それなのに、それよりも上つてどうという意味だ。

「そんなにすごい方なのか？」

浮竹が桐生に問えば、桐生は首を横へ振った。

「私にきかないで。御即位なされてから一度もお話したことないのよ。護衛士風情が簡単にお会いできる方じゃないわ」

「……………」

じゃあそれより下位の俺達はどうなるんだと聞きたくなるのをぐつと堪えて、浮竹は桐生から視線を逸らした。

「冬獅郎は着任した時に一度お話したことがあるはずだけど、それつきりかしらね」

「だろうね。っていうか、私達でもほとんど会わない方じゃん。家にいつもいるのの中でも、毎日顔あわせてるのなんて一兄と凜姉と王夫ぐらいじゃない？」

桐生と夏梨が口々に言えば、一護も小さく頷いた。

「っていうか、どいつもこいつもできるだけ避けようとしてるだろ」「当たり前。それに、正宮に人の出入りが多いのはあんまりいいことじゃないじゃん」

「……………まあ、そうなんだけどな」

一護は複雑そうな顔をしたが、夏梨はそれに気づかなかったようだった。

「ところで、一護。当主を除いて4人と言ったが、儂らも行かねばならんのか？」

「……………じゃあ聞きますけど、俺とこいつらの中から選んだ4人で、

陛下とまともな会話が成立すると思っのかよ？」

一護に言われた夜一は、思わず黙りこむ。

確かに、それは無理だろう。

「つつても、5人全員行く必要はねえ。あんまり大人数で押し掛けても、迷惑だろうしな。俺としては、夜一さんと白哉に頼みたいんだけど」

死神を連れていくのだから、その采配は妥当だ。

だが、指名された二人としてはたまったもんじゃない。

断るという意志を前面に押し出した表情で、二人は一護を見据えた。

「……そんな顔してもだめなもんはだめ。俺がもたねえ」

「我らももたぬ」

「そうじゃそうじゃ」

「こんな時だけ意気投合しないでください。……で、後なんだけど

……浮竹さん。頼んでもいいっすか？」

浮竹がゆっくりと頷くのを見て、一護はほっと息をついた。

今来ている死神の中では、一番こついうことに長けているだろう。

「……問題は、あとなんだよな」

消去法じゃ誰も残らない。

少なくとも、一角と弓親、花太郎は却下。

ルキアは保留して、恋次もできることなら却下。

浦原は何をしでかすかわからないから却下。

雨竜・織姫・チャドは保留。

乱菊と雛森は……うまく話題を振れる自信がないから却下。

平子とひよ里も却下。

「岩鷲、お前、どうだ？」

「俺か!？」

驚いたのは本人だけではない。

むしろ周りの方が、やめた方がいいのではないかという視線を向けてくる。

だが、一護には明確な理由があった。

「陛下は、お前の従姉にあたるからな……興味もあるようだったし」

「あー……」

思わず納得しかけたが、だからといってここで承諾したら寿命が縮

む。

「いや、でも……」

「岩鷲」

反論しかけた岩鷲を遮って、空鶴が口を開いた。

「行って来い」

「ええ!？」

「いーから行って来い! いいな!？」

「……はい」

了承した岩鷲に内心詫びつつ、一護は残りの二人を選びにかかった。

保留の面々の中から、二人。

「……ルキア」

「私か?! しかし、私は……」

「白哉も行くし……陛下もお前に興味があるようだったし……」
なあ、と話題を振られた白哉は頷く。

その様子を見て、ルキアは一護を睨みつけた。

「何故陛下が私のことを御存じなのだ。貴様、何を話した!」

一護が何かを言ったのだとしたら、なんだかろくでもないことにな
つていそうな気がする。

「いや……変なことは話してねえ。多分」

「多分とはなんだ!？」

「気が強いとか、そういうあたりは言ったな」

声もなくうなだれたルキアに、恋次は憐みの視線を送る。

会ったこともない、それも靈王にそんなことを勝手に言われたので
は、たまったもんじゃない。

「……あとは……白哉、誰がいいと思う?」

「位で考えるのであれば、恋次がいいだろう」

「だよな……」

一護は仕方なさそうに恋次を見るが、同じく嫌そうな視線を返され

た。

「石田がよいじゃろう」

「夜一さん!？」

「そつなく受け答えができるかどうかで考えるのであれば、妥当ではないか？」

そこが、一護が迷っているところだった。

自分や他の王族に会うのであればまだしも、霊王と会うのであれば話はまるで違う。

何一つ失敗を許されないそれを、一番上手くやり遂げる者を選ばなくてはならない。

幸い、ルキアも岩鷲も五大貴族の一員。

何かあっても、強く咎められることはないはずだ。

浮竹ならば、そもそも心配する必要がない。

しかし恋次は隊長だが、まだ就任して日が浅い。

対する雨竜は当時から大人びたところがあつたが、滅却師だ。

魂魄を司る霊王にとって、魂魄を消滅させる滅却師は対極とも言える相手。

霊王が短慮を起こす訳がないが、周りが何をしないと限らない。

「……じゃんけん」

一護が呟くと、蓮杖が吹き出した。

「本気か!？」

「……石田と恋次。どつちに転んでも似たようなもんだろ。だつたら手っ取り早い方がいい」

考え過ぎてどうでもよくなつたかのような言い方だが、実際どちらが行っても大して変わらないのだ。

チャドか織姫でも、同じ。

ならば少しでも早く決め、他のことに時間をまわした方がいい。

「石田、恋次。じゃんけんしろ。勝った方な」

負けた方、と決めれば、それはいくらなんでも靈王に失礼だろう。

だが石田と恋次は、これほど勝負に負けたいと思ったことはないほどだ。

「じゃ、浮竹さんと岩鷲とルキアと石田。後は夜一さんと白哉でいいよな？」

うっかり勝ってしまったせいでうなだれている雨竜を横目に、一護は確認した。

そこからは、ひどく忙しくなった。

謁見は明日の午後と決まり、選ばれた4人は九頭柳と蓮杖に預けられる。

ひとしきりの礼儀作法を一夜漬けで叩きこむらしく、珍しく九頭柳が息巻いていた。

一護は様々な手続きがあるらしく、そちらに掛かり切りになっている。

途中現れた白哉がルキアを伴ってどこかへ消え、空鶴もまた岩鷲を伴ってどこかへ消えた。

夜一と言えばそこらをふらついていたが、下官から知らせを受けると浦原と共に姿を消す。

残りの放ったらかしにされた面々は特に何もすることがないので、再び道場などに散り散りになっていった。

「あ、織姫さん！ 日番谷君見ませんでした？」

部屋に戻った彩の様子を見に行った帰り、織姫は雛森に声をかけられた。

「見なかったけど……今日はお休みって言ってたよね」

「部屋にもいないんです。黒崎さんのあたりを探してみたんですけど、いなくて……」

そこで、織姫は今朝の会話を思い出した。

「あ、今日は午後から学校って言ってた気がする」

「そうなんですか？」

「うん。えーっと、学校で集まりがあるのかなんとか。同期会もあるから遅くなるって」

そこまで言って、織姫はしまったと思った。

学校ということは、藍染もいるはずだ。

不用意に触れてしまったんじゃないかと思ったが、もう遅い。

だが、織姫にしては意外にも、雛森は気にした反応を見せなかった。

何かあったのかもしれない。

ただ、雛森の表情を見る限り、それは良いことだったのだろう。

そう一人納得して、織姫は礼を言って駆けていく雛森を見送った。

「朝議って、朝早くからやる会議のこと……？」

「うん、それ。良かったら見に来ない？ 陛下に謁見する準備段階としてさ」

もう眠ろうとしていたルキア達のもとへやって来たのは、丁度同期会から帰ってきたらしい夏梨だった。

「だけど……私たちが見に行ってもいいものなの？」

「傍聴席があるからね。そこでなら問題ないよ」

内容や制度から考えて、国会に近いものなのだろう。

「どんなことをするの？」

織姫に問われた夏梨は、手にもっていた書類を差し出した。

「これ、明日の議事。明日だと……北部の治水事業について大分割かれるかな。年度末の決算報告は今日であらかた終わつたし。ま、要するに雰囲気慣れた方がいいんじゃないってだけ。陛下はご欠席なさるから、そんなに堅いものにはならないはずだし」
「どう？」と問われ、ルキア達は顔を見合わせた。

行かない理由がない。

一護が仕事をするとところを見られるのなら、尚更。

「なら、頼んでもよいだろうか」

「勿論！ 朝早いけど、頑張って起きてね」

夏梨はにっこりと笑うと、席を立った。

「桐生には伝えておくから」

ぱつと部屋を飛び出していったその姿に、彼女の快活さを垣間見ることがができる。

一護が何もしてかさない分、それは余計に身に染みだ。

翌朝。

ルキアと織姫、チャド、雨竜、そして浮竹とが議場の隅にある傍聴席に滑りこんだのは、議席が半分ほど埋まつたところだった。

そこに夏梨達の姿は無く、傍聴席の反対端にある玉座の周囲は、まだほとんど空席だった。

漸く全ての大官が席についたところで、議場が静まり返る。

ルキア達が居住まいを正すと同時に、玉座に程近い扉が大きく開かれた。

一人目に入ってきたのは、一角を追い回していた秋泉だった。ついで、見知らぬ人　　順番から考えれば王族だろう　　が数人入ってくる。

そこで一旦列は途切れ、次に二人が入り、また途切れて夏梨を先頭に数人が入ってきた。

そうしたことが繰り返され、漸く空席は玉座とその一段下に据えられた席のみになる。

水を打ったように静まり返っていた議場が、居住まいを正すきぬ擦れの音で満たされたのは、その瞬間だった。

かつん、と靴の音が議場に響く。

居並んだ者が皆一護に対して礼をとるのを、仲間達は言葉もなく見ている。

一護は何も言わない。

ただ足音のみを響かせて、ただ真っ直ぐに前を見据えて。

高潔な静けさを纏った一護は、ただ己の席へと足を進めた。

かつんかつんと、一護の足音だけが議場に響く。

その足音が止んで、一護が席についたとき、居並んだ者達は漸く顔を上げた。

「陛下は、御体調が優れぬゆえ朝議を欠席なさるとのこと。尚書令、本日の議事を」

「畏まりました」

そうして始まった朝議は、ただ粛々と進んでいった。

最初上がったのは、やはり夏梨が言っていた通りに北部の治水に

ついで。

担当の部署の長官らしき人物が事業の概要を説明し、2・3の官吏がそれに質問した後、次の官吏が立ち上がった。

その官吏の所属が財務省のような部署なのか、事業に関連した予算についての説明がなされる。

それについてもまた質問が入り、また次の官吏が立った。

一護は黙ってそれらを聞いており、特に口を挟むことはしない。

時折手に持った書類に視線を落とす他は、発言する者を見据えていた。

「それでは、この議題はここまでということでしょうか」
最初に尚書令と呼ばれた女性が、質問が落ち着いたのを見計らって声をかける。

だが、一護が僅かに視線を送り小さく頷くと、その女性も頷き返した。

「 工部尚書」

一護が静かに名を呼べば、一番初めに発言した官吏が一護へと視線を向けた。

「工期が短すぎる気がするが、それは何か理由があつてのことか」

「工事は、農閑期の晩秋から初春に行われるのが通例。ですが、北州の事業であれば真冬の工事は難しいでしょう。役夫を多く募って短期に行うのが良策かと思ひ、このような形にいたしました」

すぐに答えた官吏に、一護は頷いた。

その表情は満足げで、それを見た官吏もほっと息をつく。

「わかった。尚書令、次の議題を……」

続く議題でも、一護は余り発言をしなかった。

意見を求められた時も半分ほどは仄めかすような答えを返し、余りはっきりとは自分の意見を出さない。

一護らしからぬと言えばそれだけだが、それがここで生きるということなのかもしれない。

夜が明けて間もないころから始まったにも関わらず、朝議が終わったのは日がずいぶん昇ってからだった。

9時頃だろうか、とあたりをつけ、出勤してくる多くの官吏を見る。

「そっか……」

小さく呟いた声を振り返ると、織姫は納得した様子でその官吏達を見据えていた。

「井上？」

「あ、うん。あのね、どうしてあんな時間から会議をするのか、ずっと考えてたの。……こうやって、出勤してきた人達がすぐに仕事にかかれるようにするためなんだね」

その発想に、チャドは目を見開く。

「偉い人だから、こんなに頑張って仕事をしなくちゃいけないだね。だから色んな人が安心して暮らせる。……黒崎君達は、本当にすごいや」

毎日毎日、こんなふうに働いて、そうして必死になってたくさんのもを護ろうとしている人が、ここにはたくさんいる。

浄霊挺とは全く違った形でも、何も思いは変わらない。

無用な戦いを避けようとする一護にとって、実はこの職は向いているのかもしれない。

そうして、朝議が終わってから数時間が経ち、その日の分の仕事を終えた一護が戻ってきた。

「……聞いてねえぞ」

不機嫌そうに発された一言目に、ルキアは首を傾げる。

「朝議だ。まさかいるとは思わなかった」

驚いた、と愚痴る一護に、浮竹が苦笑する。

「立派に務めていたじゃないか」

「そういう問題じゃねえっすよ。全く……」

不服そうに視線を逸らした一護に、ルキアは微笑んだ。

「そういうほどでもあるまい。別に笑いに行っただけではないのだ」

「それはわかってるけど……」

「けど？ なんだい？」

雨竜が問うが、一護はそれ以上言わなかった。

何となく気恥ずかしかつた、なんて、言うほうが気恥ずかしい。

謁見までまだ時間はある。

あるが、既に4人はガチガチに緊張していた。

毎日顔を合わせている自分でさえ緊張せずにはいられないのだから、こればかりは無理もない。

手持ち無沙汰な時間は緊張を増強させるばかりで、ルキアは先ほどから同じことを繰り返してばかりだ。

「あと1時間ぐらいか……そろそろ支度したほうがいいぞ」

そうして何とか痛い時間をやり過ごし、窓から空を見た一護が言う。
太陽が影を見て時間を計ったのだろう。

「そんなに時間かかるのか？」

「ある程度一人で着られるぐらい慣れればそうでもねえ。でもそうじゃなかったらかなりかかるな」

行った行った、と4人を追い立てると、一護は深くため息をついた。
「……ずいぶん疲れてるな」

「神経つかう仕事だからな。特に今日はややこしかったし」

机の上に置かれた茶菓子を一つつまみ、一護はチャドを見た。

「俺が最初に質問したやつ、覚えてるか？」

「工期についての質問か？」

「そう、それ。それに答えたやつのこと、チャドはどう思う？」

唐突な質問に面食らったが、一護は真剣な表情をしている。

それを不審に思いつつ、チャドは一護に真面目に返した。

「真面目そうだと思うたが」

「……そっか」

一護はそれだけしか言わず、周りが視線を向けても答えようとはしない。

こちらになんの関わりのない自分達に話すくらいだから、機密になるようなことではないはずなのに。

「……何か、あんのか」

痺れをきらした一角が問えば、一護は首を曖昧に振った。

「優秀なんだよな、あいつ」

「ならいいんじゃないのか？」

当然のような反応に、一護は首を横へ振った。

「優秀すぎる。……ひどい失敗をしないまま、あの地位にまで来ちゃった。このまま何もなけりゃいいけど、そうとは限らねえ。そうなった時に、あのままだと耐え切れずに潰れるだけだ。優秀な官吏だからこそ、そんなことで潰したくねえ」

一護の目に浮かんでいるのは、葛藤だ。

「でもな、だからって俺が何かしてやれるわけじゃねえんだ。失敗しても手助けしてやれるとは限らねえ。むしろあいつを切り捨てる方が有り得る」

切り捨てる。

その行為は全く一護に似つかわしくない。

そんなことを絶対にしないから、仲間達は彼を信じられるのに。

「北州の治水事業は、あいつが計画したものだ。関係省庁に掛け合つて、全部内諾を得たうえで俺に提出した。そこまでやれる奴は滅多にねえ。ただ、あの手の計画は今までにもあった。それこそ何百年も前からあったのに、今までどれ一つとして成功してねえ……それを考えれば、今回のももつと時間をかけていいはずなんだ」

黙りこんだ仲間達に苦笑すると、一護は再び口を開く。
その動作は昔と寸分違わぬもので、それが今の一護も何も変わっていないということを強く教えた。

切り捨てる、と一護は言った。

さも当たり前のように、なんの不思議もなく。

ただそれを一番拒んでいるのも、やはり一護だ。

「ただ功を焦つて急ぐのなら、俺が止める。でもあいつは北州の出身で、だからもう一刻の猶予もないって知ってるんだ。これ以上工事が遅くなれば、犠牲者がでる。もうそういう段階まで来ちまってる」

北州は山がちで、それゆえに耕地に恵まれていなかった。

林業と牧畜を生業とするものが多く、また、雪で外に出られない冬の産業として発展した細工物はそれなりに高値で取引されるが、それでも貧しいのが現状だ。

そして、雪解けの時期にやってくる雪崩。

加えて夏場は山にぶつかった雲が大雨を降らせるので、洪水にも悩まされる土地柄だ。

毎年のように家を流される者もあり、それが貧しさに拍車をかけていた。

そこへ来たのが疫病だ。

北州は、もう後がないところまで追い詰められていた。

山がちな土地だからこそ、工事も難航する。

土地ゆえに大工事が必要なのに、土地ゆえにそれが難しいのだ。

「そつちみてえに機械でもあれば別なんだろうけど、こつちはそういう技術は一切発達してねえ。全部人力に頼るしかねえんだ」

「機械がない……？」

チャドが首を傾げたのには訳がある。

機械以上に有用なものを、一護達家族は王土に持ち込んだはずだ。

「だが、本の中には土木関係のものもあつただろう。基本的な技術を応用することはできないのか？」

「……あれな。あれは使えねえよ」

「何故だ？」

一護はしばらく逡巡する様子を見せたが、やがて意を決したように話しはじめた。

「こつちでは英語が通じねえのは、気づいてるか？」

「あ、ああ」

それには、誰もが薄々気づいていた。

英語だけでなく、日本語以外の全ての言語が、ここでは通じないということ。

「それが関係あんのか？」

「言葉つてのは、意思や対象を誰かに伝える以外にも役割があるつって、わかるか？」

死神達はきよんとしたが、チャドと織姫はそれに頷いた。

「感性とか、思想は言語に影響されるよね」

「そう。言葉が違えば考え方も違う。だから、あの本に頼ることはできねえんだ。現世の思想をこつちへ持ち込めば、俺達の立場が危うくなる」

その意味がわからず、死神達は怪訝そうな顔をする。

だが、チャドと織姫は一護が言わんとしたことを察して顔色を変え

た。

「思想を統制する必要があるってこと？」

震えを抑えて問い掛けた織姫に、一護は無表情で頷く。

「思想つてのがどれだけ危険か、学校でも習うだろ」

「……………」

それは、既に統制された思想しか持たない死神達には、到底わかりえないものだ。

だが、人間として現世に育った者ならわかる。

思想は、時として人を変え、社会を変え、そして国を変えるということ。

だが、もし一護が言おうとしていることが予想通りならば、それは現世において一番の罪になりうることだ。

二人の自分を見る目が変わってくるのを感じて、一護は視線を落とす。

だが、事實は二人が考えているよりもはるかに悪いはずだ。

「……………あの、さっきから言っていることの意味がわからないんですけど」

花太郎がおずおずと質問すれば、一護は頷いた。

その表情がひどく不安定なのを見て取り、壁際に立った竜が身じろぎする。

一護はそれを察したのか目線で制し、花太郎に向き直った。

「昔、現世で戦争が起きたことは知ってるだろ？」

「ええ。でも、それが一体」

「まあ、最後まで聞けって。その戦争の原因は色々ある。利害の不一致からくるものもあるけどな、宗教の違いからくるものもあるんだ」

人は、自分と違うものをとかく排そうとする。
その極端な例が、宗教戦争だろう。
信じる力は強い。
強いがために、それは時として人を傷つける方へむかうのだ。

「現世の考えは民主主義。こことは真逆だ。……もし、現世の言葉が伝わり、現世の思想が流入すれば、俺達はどうなる？」
不都合なんだよ、と一護は低く呟いた。

その声の暗さに、花太郎はごくりと唾を飲む。
「そんなものがこつちで広がれば、俺達は為政者としての立場を追われるだろう。だから、知識と直結する技術をこつちへ持ち込む訳にはいかねえんだ」

冷たく言い捨てた一護を、誰もが言葉もなく見つめる。

「だけど、このままでは犠牲者がでると言っていたよね。その人達はどうするのさ。見殺しにでもするつもりかい？」

弓親が静かに問えば、一護もまた静かな視線を弓親へ向けた。

「そうするしか、ないな」

浦原は目を見開いた。

その理由は他者とは違うが、一護に驚いたことに変わりはない。

「今まで現世の知識を使ったのは、疫病を収束させるためと、災対寺に関連してっただけだ。その時だって、直接本に触れたのは俺達家族とコン達、それに冬獅郎だけ。他の誰かに見せる時は、内容を言い換えて模写したものを使った」

「つまり、それほどまでの労力を割いてもそうする必要があると
いうことっスよね？」

浦原が言つと、一護は頷いた。

「それで、その2つはそうでもしない限り王土が壊滅するような危機だったからやむを得ず使った。北州の治水も大事だが、それはそ

んな危機にはならねえ」

ふんふんと頷いた浦原は、少し一護を試そうと思いたつ。それは、誰にとっても限りなく残酷なやり方だった。

「ですがね、黒崎サン。思想っていうのは生まれるものつよよ。いくらあなたが現世からの知識の流入を抑えても、ここで思想が生まれるのはどうしようもないはずだ」

仲間達は怪訝そうな顔をしたが、一護だけはその意を察して眼光を鋭くした。

心のどこかで、人としてのカケラが砕け散る。

「ここは、ずっと昔からその姿を変えていないんでしょう？ そんなことが、何の意図も無く可能なんですか？」

ひよ里が目を見開いたのは、浦原の言わんとしていることがわかったからだ。

尸魂界にも、似た役割を持つ場所があった。

普通の死神なら誰も知らない、危険因子を封じ込めておくための檻。

もし、それがここにもあるとしたら、一護がそれを知らない訳がない……

「浦原さん、アンタならもう気づいてるんじゃないのか？ 巡察使が本当に民意を反映するための制度だと思ってるわけ、ねえだろ」

さも当たり前かのように認めた一護に、仲間達は息を飲む。

「監視つスか」

次いで発せられた浦原の声も、ひどく耳障りだった。

一護が浦原を見る目は冷たい。

それが人を殺したことがある目だと、浦原は気づいていた。監視だけでは意味がない。

規制し、抑制し、そして抹消しなくてはならないのだ。

「……監視だけじゃ、ないんすね。あなたのその目は、人殺しのものだ」

織姫が、口もとを押さえて息を飲む。

一護がそんなことをするはずがないと信じたいのに、一護の表情がそれを認めていた。

「……あんたも、同じ目をしてる」

「アタシは隠すつもりなんてありませんよ。元々、隠密機動に在籍していた身ですし」

飄々と言つてのけた浦原に、一護は口元だけ苦笑した。

「別に、俺だつて隠すつもりはねえさ。それもみんな含めて、俺の役目だ」

「人を殺して、自分の立場を護ることがか？」

鋭く言つたチャドに、一護は頷く。

「俺が生きる場所は、ここにしかない。俺にはもう、他の生き方はできねえよ」

その瞳は、紡がれた言葉とは裏腹に真つ直ぐだ。

それが、目の前にいるこの自らを人殺しとする青年が一護であるのだと、強く印象づける。

自分の為に誰かを殺す、それが一護であるわけがないのに。

そこまで考えて、チャドはあることに気づいた。

一護は、自分の為に誰かを殺すような真似はしない。

そう、自分の為には。

だが、誰かの為に、誰かを護る為には、それをする。

かつてのあの戦いにおいて、藍染を討つことで戦いに幕を引いたよ

うに。

ならば、今の一護もそうなのだろうか。

今の一護も、誰かの為にそうするのだろうか。

そうであってくれ、と願う心が指し示したのは、一護が言った言葉だった。

言葉は思想を伝えるもの、そして、思想は時に武器となり、為政者の立場を脅かす。

もう一つ蘇ったのは、尸魂界で聞いた霊王に関することだ。

霊王は、象徴でありながら絶対。その存在で魂魄を安寧に導き、世に平和をもたらず。

もし、霊王がいなくなれば。

世界は、どうなる？

「いやあ、さすが黒崎サンっスね。大した覚悟だ」

打って変わった口調に一護が眉根を寄せれば、浦原は口元に笑みを浮かべる。

「より大きなものを護るために、小さなものは切り捨てなくてはならない。ちよつと極端っスけど、黒崎サンは霊王制を護ることでアタシ達みんなを護ろうとしてくれている……違いますか？」

浦原がそう言えば、一護は目を逸らした。

それで確信を得たのか、浦原はまた少し口角をあげた。

「いい具合に甘さが抜けたみたいっスね。本当、大した覚悟だ」
その声には、心からの尊敬が滲んでいた。

実際、一護がそうする意図はそこにある。

霊王制が無くなれば、尸魂界は秩序を失うだろう。魂の調整者たる死神が混乱をきたせば、現世の魂魄が乱れ、虚が跋扈する世の中になるのは火を見るよりも明らかだ。

ただ、だからといって誰かを切り捨て、殺した事実が消えない。消えないし、消すつもりもなかった。

それも全て背負う。それが一護の、ひいては霊王に連なる全ての王族の“覚悟”なのだから。

「一護」

静かに名を呼ばれ、一護はゆっくりとチャドへ視線を振る。交わった視線は、やがて緩やかに逸れていった。

「もう一度、全て聞かせてくれ。お前が何を何のためにしたのか、それについてどう思っているのか、それを全て」
その言葉に頷こうとした一護の耳に、無情な声が滑りこんだ。

「皇太子殿下。霊王陛下との謁見のお時間が迫っております。どうか、ご支度を」

聞き慣れた下官の声に目を閉じると、一護は迷うことなく答えた。
「わかった。すぐ、行く」

立ち上がった一護を、絡み付くような視線が追う。

今全てを聞かせてほしいと暗に訴えられているのはわかったが、一護にはどうすることもできない。

長く王土で暮らした一護にとって、靈王の存在は既に絶対だった。

入れ替わるように部屋に入ってきた正装をさせられた面々は、その時点でかなりうんざりした様子だった。

白哉と夜一はまだ着慣れているようではあったが、浮竹たちに至っては完全に着られている状態だ。

ただそれも身代りになってくれたのだと思えば簡単に笑うこともできず、かといって何を言っているのかもわからず、部屋に沈黙が落ちる。

謁見する面々はと言えば、ガチガチに緊張している様子だった。

その様子を見た蓮杖は、無理もないと内心ため息をつく。

大抵のことはそつなくやれる自信はあるけども、自分も最初の謁見の時は緊張したものだっただ。

かちやり、と扉が開き、誰もがそちらを向く。

立っていたのが一護だと視認するよりも早く、その姿に息をのんだ。

今朝方見たのとは、また違った正装姿。

ルキア達よりもはるかに格式ばったものを着ているというのに、着られている様子はみじんもなく、その姿を引きたてるものとして従えていた。

どこか不機嫌そうなその表情までもが、形容しがたい品格を秘めている。

あつげにとられた様子の一共に、一護は一瞬不審そうな表情をした。だがすぐに改め、ルキア達に向き直る。

「行くぞ」

まるで戦場に行くかのような声色で、一護はそう告げた。

一護の先導で、東宮府を西へと進んでいく。

その先にあるのが、霊王の住まう正宮府だと説明を受けていた。

東宮府と正宮府の間は、塀と固く閉ざされた門扉で隔てられている。その門に近づくとつれ、周囲の空気が異なっていくのを、雨竜は肌で感じていた。

人気がないのだ。

王宮のどこにでもいるはずの下官が、このあたりには全くいない。整えられた庭も、どこか冷たい印象を受けるほど一部の隙もなく管理されていた。

この先に人の住む場所があるのかと、疑いたくなるほどに。

門の前に立つ護衛士は、一護の姿を認めると礼をとった。

「解錠を」

短く一護がつけると、護衛士はすぐに扉を開く。

その一連の動作までもが、まるでからくり仕掛けの人形のように滑らかで、隙がない。

おそらく、それは厳しく定められたもので、それを外れることは許されないのだろう。

自らの意思を排し、掟やしきたりという糸に操られた人形。

それはおそらく、一護さえも例外ではないのだろうと、雨竜は覚悟した。

夜一が先ほどこっそり話したことの意味を察して。

あれはおそらく、王土へ来る前、隊首会で九頭柳が話したことと同じ意味を持っている。

つまり、東宮としての一護を見ることがあっても、一護自身を見失うなど。

そして、門の中へ一歩踏み込んだ瞬間、それが間違いでないことを確信した。

正宮の中にいる下官。

それらは全て、布で顔を覆っていた。

言うならば、鬼道衆の装いに近いのかもしれない。

ただ目だけを出し、口を開かず。

一護の姿を認めた下官は、次々と礼をとった。

その動きさえも、どこか儀式めいた高潔さを伴っている。

こんなに管理された区域に住まうという霊王は、一体どのような存在なのだろう。

そう思わずには、いられなかった。

ここに雀部がいれば、元柳斎の発言の意を理解しただろう。

“こわい”と言った、その意味を。

掟に縛られた瀨霊廷においてなお、この地の厳しさは身に痛いものだ。

人は駒であり、意をもつ必要はないと言わんばかりの厳しさ。

それが霊王を王たらしめているものであり、この地のこわさだ。

どこよりも浄であれ、どこよりも高であれ。

そんな、ある種の祈りさえも感じられる。

そのこわさは、数えるのが不可能なほどの時を重ね、一層の厳しさを増していた。

先導する下官に続いて、一護を先頭に歩いていく。

その間にちらりと横を盗み見れば、塀の向こうに東宮府の建物を見ることができた。

こんなにも近いというのに……

声も気配も届かない。

全く隔絶された空間に放り出されたような、そんないいようのない心細さを感じた。

目の前を歩いていた浮竹が足をとめたのに気づかず、雨竜はぶつかりそうになる。

あわてて足を止めれば、下官がある扉の前で跪いているのが見えた。

「申し上げます。皇太子殿下、おつきになられました」

布越しであってもはつきりと通る声に、やはりこの人も人間なのだと安堵する。

それでも、後ろから見た一護の背は、ひどく遠く感じられた。

「入室を許可するとの仰せにございます」

その声を聞いて、一護が僅かに肩の力を抜くのが見えた。

凜の声だというのは、問わずともわかった。

おおかた、一護だけには荷が重いと考えて先回りしていたのだろう。

一護は下官に下がるように告げると、戸に対して真正面から向き合った。「一護です。入ります」

その声の静かさが今朝のものと同じだとわかり、雨竜は齒を食いし

ばる。

戦いの、はじまりだ。

一護は扉をあけると、すぐに最も高い位の相手に対する礼をとった。「よい。……私的な客人として呼んだままでじゃ。そのように堅苦しくする必要はなからう」

凜では無い女性の声に、ルキアははつとする。

消去法でいけば、これが霊王の声のはずだ。

だが、ルキアだけでなく浮竹達もひどく戸惑った。

王土に息づくものが年をとらないとはいえ、その声はあまりにも若い。

ひよっとしたら一護よりも若い 幼いかもしれない声に、その声の主が少女であることをうかがわせる。

そんな人が、一護の祖母であり、そして世界の頂点に立つ者なのか。疑念に近い戸惑いが脳内を駆け巡り、4人は茫然と立ち尽くす。

だが一護が静かに促したのを見て、浮竹は部屋へと踏み込んだ。

部屋へ入ったところで立ち止り、礼をとること。

陛下がよいとおっしゃるまで、顔を上げてはいけない。

九頭柳と蓮杖の声が耳によみがえる。

言われたとおりに礼をとろうとすれば、横から一護が制した。

「構わないとの仰せだから」

その表情が、緊張しながらも苦笑しているのを見て取ると、浮竹は

中腰のまま固まる。

「どうぞ、かけてくださいな」

凜が示した椅子と一護とを交互に見やっていると、一護も椅子に座るように言った。

そうしてようやく真っ直ぐに立ち、目に入ったのは。

やはり、声の通りに幼い少女だった。

老いから来る衰えのために政務を執れないと聞いていたが、凜に支えられて立つその姿を見なければ、ただのおてんばな少女にしか見えない。

一護の祖母であるということは、子供を産んだ経験もあるはずだ。それにもかかわらず、その少女は少女としての可憐さを失っており、母親らしい雰囲気は一切見せない。

為政者にそぐわないそのあどけない表情に、浮竹は立ちつくした。

「浮竹さん、いいから座ってください。後ろがつかえてる」

一護に重ねて言われ、浮竹は漸く我に返った。

「あ、ああ」

しかし、靈王が立っているというのに先に座るのはいかなものか、と理性が警鐘を鳴らすので、浮竹は椅子の前で立ち止まる。

それを見た凜は、支えていたその手をそっと揺らした。

「これ以上お立ちになったままでは、体に障りましょう。どうか、おかけください」

「平気じゃ、これぐらい」

「陛下が立つたままでは、皆さまも座りづらいのです」

凜が言うと、靈王は小さくため息をついた。

だがそれ以上は何も言わず、黙って腰をかける。

それを見た浮竹は、ようやく椅子にかけた。

一護が4人の紹介を終えると、霊王は満足したように頷いた。

「昔、一護達が世話になったと。礼を申す」

突然、軽くとはいえ頭を下げた霊王に驚いたのは、4人だけではない。

一護と凜、そして夜一と白哉も驚いた。

「……陛下？」

恐る恐るといった風に声をかけた一護に、霊王は冷たい視線を送る。

「なんじゃ？」

「いえ、何も」

即座に口を閉じた一護に、霊王は僅かに鼻を鳴らした。

それがあまりにも見た目相応のふるまいで、あっけにとられたルキアはまじまじと彼女を見つめる。

それに気づいた霊王がルキアに視線を移せば、ルキアは慌てたように俯いた。

「朽木殿の妹御か？」

白哉が黙然と首肯すると、霊王はそうかと呟いた。

「……斯様に堅い朽木殿がずいぶん可愛がっておると聞いたもので、不思議なこともあるものだと思っておったのじゃが……こつも可愛らしければ、無理からぬことじゃのう」

「えっ！？ ……え、と……あの」

「葵には会ったのか？」

「は、はい」

数時間前に白哉に連れられ会いに行った姉は、実の妹のように可愛がってくれた。

白哉もそれを喜んでくれ、ルキアにとっては本当にうれしい時ではあった。

「葵は、話にしか聞いたことのないお主をよう気にしておった。先ほども言っただが、朽木殿の堅さゆえ、家で気まずい思いをしておる

のではないか、と。……気立てのええ娘ゆえ、難しいかもしれぬが姉として接してやってくれの」

「も、もちろんです」

ただ、二人して兄様に点が辛いのはどうしてだろう、と考え込まざるを得ない。

こんなにも立派で素敵な兄様なのに。

思ったよりも優しい霊王に、雨竜は内心でほっと息をつく。これならば、乗り切れるかもしれない。

「そちらが、志波殿の？」

「ええ」

夜一が頷いた途端、岩鷲はあわてて居住まいを正した。

何かしくじったら、後で殺されかねない。

「はっはじめまして！ ししし志波岩じっ……」

勢いよく挨拶をしたはいいが、よりもよって自分の名前で噛んだ岩鷲に、一護は思わず笑いそうになった。

すぐに目線で霊王に制され、何事もなかったかのように姿勢を正す。どうやら舌をひどく噛んだらしい岩鷲は、既に後のことを考えて涙目だ。

それを見ていた霊王は、くすりと笑いを漏らした。

先ほどから除くらしからぬ姿に、一護たちは戸惑ったように霊王を見る。

特に一護は、先ほど笑うのを制されたばかりのために複雑そうな表情だ。

「……済まぬの。お主の、兄上を思い出したもんでのう……」

それが意外だったのか、浮竹とルキアと岩鷲は目を見開いた。

「あれも面白い者じゃった。今のお主と同じように、ずいぶん勢いよく舌を噛んでの。懐かしいものじゃ」

そう言つて目を細めた霊王に、一護はそつと目を細める。
霊王がどうして彼らに会いたいと言いだしたのか、その意図がようやくつかめた。

「お主が、浮竹殿か？」

「はい。十三番隊を預かつております、浮竹十四郎と申します」

やはりと言つべきか、何の失態もさらすことのない浮竹に、一護は内心ほつと息をつく。

ルキアと岩鷲は、見ていて胃が痛くなるようだった。

「……そうか。隊長殿か……」

何か思うところでもあるのか、そう小さく呟いた霊王に、浮竹は眉根を寄せる。

小さな王の眼に何かわからぬ光がともっているのを見て、そのしわは一層深くなつた。

「隊務は、忙しいか」

「以前と比べれば、それほどでもありません。治安も良くなってきましたので」

「そうか、そうか」

ようやく交わされたそれらしい会話に、場の空気が少し緩まった。次かと身構えた雨竜は、その空気に少しほつとする。

「……宗弦殿の孫とか。違つたかの」

「えっ!?!」

この場所で聞くはずのない名前に、雨竜は驚く。
なぜ、祖父の名前を知っているのだろう。

「一心のことを言えぬゆえ黙っておつたがの、私も昔、現世へ行つたことがあるのじゃ」

霊王の隣に座る一護の表情を見れば、一護もそれが初耳であること

は明らかだ。

「弓を遣う死神を珍しいと思ったのじゃがの……滅却師がまだ生きておるとは思わなかったゆえ、驚いた」

二百年前に滅亡した一族の末裔　そんな希少な存在に巡り合えるとは、思ってもみなかった。

「嬉しかった……人としてありながら、虚と戦う道を選んだ誇り高き者たちの末裔に出会えるとは思わなんだ」

それを聞いた雨竜は、大きく目を見開く。

魂魄をつかさどる　いふなれば、死神に限りなく近く、死神よりも遙かに高位の存在が、自分たちのことを“誇り高い”と称するのは、予想していなかった。

それは一護も同じのようで、ただ驚いた表情で霊王を見つめている。「宗弦殿は、名乗らなんだ私を厚く遇してくれた。斬魄刀を携えておった私を、死神とわからぬはずがなかるうに」

その様子がありありと浮かんで、雨竜は目を細めた。祖父は、死神に対しても優しかった。

たとえ邪険に扱われ、蔑まれても、それは変わらない。そうだというのに、こんな女性に対して冷たく接するわけがなかった。

「……一心は、お主の父親と知り合いじゃと言うておったが、聞いておるかの？」

「はい、父から。……あまり話してはくれませんでした」

空き家となったクロサキ医院の処分を引き受けたのは、竜弦だった。面倒だの、世話を焼かせるだの、ぶつくさと文句を言いながらも手続きをする竜弦を見て、当時の雨竜はあっけにとられた。

まさか父親同士が知り合いだとは思わず、その上二人も自分たちと同じように死神と滅却師として接し合った日々があるとは予想だにしなかった。

「三代揃って縁があるとはの……」

小さく呟いた霊王を、8人は意外そうな瞳で見つめる。
細く瘦せた肩は、あまりにも頼りなく、王に相応しいものではない。
特にこれが初対面の4人は、一護達が言った霊王の印象を全く感じ
とれないために戸惑いを隠せなかった。

「話が聞きたくて呼んだというに、私ばかり話しておるの。ほれ、
一護。何か言わぬか」

「えっ……」

完全に無茶振りの発言に、一護が固まる。

「そんな……突然言われても困るんですけれど」

いつもより丁寧な敬語に、やはり一護もこの人の臣なのだと思いい
たる。

「何か話せと言っておるのじゃ。さっさとせんか」

「……………」

困ったように押し黙った一護は、祖母に無理難題を押し付けられた
孫の表情そのもの。

こんなに難しいところでも、小さな形でこうした関係は成立するの
だ、と浮竹はほほえましく思った。

「……………凜」

「私、南州名物の甘藷の甘露煮がおいしかったなーって考えてたん
だけど、それでもいいの？」

「……………やっぱいい」

思わぬ返しに、ついにルキアが噴き出す。

「笑うなよな」

眉間にしわを寄せた一護を見て、ルキアはますます笑った。

「済まぬ……しかし」

緊張の裏返しか、なかなか笑いは止まらない。

ついに誰もが笑いだし、その中で一護は小さくため息をついた。

「それでは、御前失礼いたします」
一護が礼をとり、静かに戸を閉める。
黙ってそれを見ていた6人は、扉を閉めた瞬間に一護が安堵したのを感じとった。

確かに、思っていたよりも穏やかな時間ではあったが、自分でも驚くほど疲弊しているのを浮竹は感じる。

兩竜達もそれは同じで、特にルキアは白哉の手に縋っていた。

6人を促し、歩き出した一護は、一度だけ閉ざした扉を振り返った。
本来ならばあり得ぬはずの邂逅。

それは、必ずしも肯定に満ちたものではなかったはずだ。
それでも、これでよかったと思う。

自分でも意外だったが、ああして祖母の隣に座るのはこれが初めてだった。

そうして、隣に座って、ようやくわかった。

王であることの、悲しいまでの孤独が。

祖母がどうしてこんなわがままを通したのか、それは今ならはっきりわかる。

祖母は、さびしかったのだ。

為政者として、王として、片手では人を護り、もう片方の手では人を切り捨てる。

その矛盾を抱えて、人との交わりを禁じられた場所で、こうしてただ生きてきた。

自ら現世へ出奔したという快活な祖母にとって、それが苦痛でないはずがない。

いつかは、自分もここに住まわなければならない。

下官達は皆顔を布で覆い、その表情を知ることができない。

子供や孫にさえ、こうして礼をとられ。

友が訪ってくることもない、この宮に。

多分、そうなったとき、自分は鍵をするのだ。

心の奥底に、仲間との記憶を封じて。

決して生きよいと言えないこの宮で、たくさんのものを護るために。

その時は決して遠くはないのだろう。

一護は扉に対して静かに目礼すると、先に歩きだした仲間たちを追って歩を進めた。

noble reason (後書き)

タイトル日本語訳は「気高き理由」

長い。ものつそ長い。

というよりも、本当になんで2話にわけなかったんだ……？
って自分に聞くよりほかにありませんね。

霊王は孤独です。

それは多分、藍染が抱いていたのと同種……いえ、かつて孤独で無かった記憶を持つゆえに、それよりも上のものでしょう。
いつか一護がそれを背負った時、抱く感情がなんなのか。
まだ書き終えていない私には、それはわかりません。

ただ、一つだけ言えるのは、例えば孤独に苛まれても、一護がその立場を放棄することはないということ。

当たり前かと思われるかもしれませんが、
でも、きつとそれが一番難しい。

王の孤独を分かち合えるのは、ただ一人、伴侶だけです。

互いを想い合うめおとであればこそ、その孤独さえも分かち合える
……多分。

うちのバカップル両親を見る限り、どうも愛は最強らしいです。

それでは感想などお待ちしております。

s e c o n d p l e a s e (前書き)

87話の数時間後から始まります。

その日の夕食が、彼らが共にできる最後の時だった。

明日の昼、彼らは尸魂界へと発つ。

朝議とその後に続く政務を考えれば、ゆっくり話ができるのはこれが最後にならざるをえない。

尽きない話に花を咲かせ、ようやくきりがついたのは、夜半になってからだった。

ふいに話が途切れたのは、一護が僅かに椅子を引いたのを誰も見逃さなかったからだった。

少しでも一護の姿を目に焼き付けておこうと、誰もが躍起になっていた。

一気に静かになった場に、一護はきよんとする。

「……場所、変えねえか？ 昼間の話、まだ終わってねえだろ」
すぐに持ち直した一護は、仲間たちにそう告げる。

昼間の 一護の、為政者としての姿の話。

それが聞けるまで誰も眠るつもりがないのは、一護もよく察しているのだろう。

一護とて、話さないままにするつもりは毛頭なかった。

「構わないが、どこに行くつもりだい？」

腰を浮かせた浮竹に、一護は扉を示す。

「いい場所があるんです。最近顔を見せていなかったから、丁度いい」

まるでいたずらっ子のような表情をした一護に、ルキアは首を傾げた。

だが、一護はそれ以上話すことなく扉をあける。

「こつちだ。行こうぜ」

返事を待たずに歩きだした一護に、雨竜は小さくため息をついて立ち上がった。

どうやら、こうやって人の話を聞かずに行動してしまうところは、何も変わらないらしかった。

松明に照らされた回廊を、一護は迷いなく歩いていく。

そこが白哉に案内され訪れた北宮に通じている道なのに気づき、ルキアは眉をひそめた。

一護が自由に使えるのは、自らが管理する東宮府の建物のみ。

この先が考える通り北宮であれば、一体一護はどこへ行くつもりなのだろうか。

顔を見せると言っていたのだから、誰かほかの王族へ会いに行くのだろうか。

それが果たして昼間の話　ルキアはその場に居なかったが、後から恋次に聞かされた　と、どう関係してくるのだろうか。

そう思考するルキアには気づかず、一護は歩を進めていく。

やがて北宮の最も奥に位置する門の前へたどり着くと、一護は無言でその門を押し開けた。

誰かの住む建物があるのだろうか、そう考えた仲間たちは、門の先に広がる景色に虚を突かれた。

そこにあったのは、ただただ広いとしか言いようのない、庭園だった。

滝があり、川が流れ、池へと流れ込む。

綺麗に刈り込まれた木々が立ち並んでいると思えば、その奥には鬱蒼とした林があった。

まるで果てのない平野のように草のみが生い茂る場所も、色とりどりの花が咲き、実がたわわになった花苑も、小高い丘も……まるで世界の縮図のように、互いに競い合っていた。

門の内側から促され、ようやく仲間たちはその庭園へと足を踏み入れる。

門を通った瞬間に感じたのは、薄い膜を通り抜けたような、覚えのある感触だった。

「結界が張ってあるんだ」

疑問に気づいたのか、一護がおもむろに付け足す。

一護はそのまま門の外へ体を向けると、目の動きで後ろを示す。

随従してきた桐生と冬獅郎はその仕草に気づくと、黙って門を外側から閉めた。

「　　いいのかい？」

浮竹がそう尋ねたのは、昨日の刺客のことがあるからだろう。

その前も後も、常に一護のそばには誰かしら護衛士が附いていたのに、こんな人気のない庭園で護衛士を外すのは不用心な気がした。

「何のための結界だと思ってるんすか。誰の目もないところで息をつくために、ここはあるんすよ」

そう言っつて、一護は門の横にある呼び鈴を鳴らした。

「こここの管理は、昔護衛士だったやつが一人でしてるんだ。ここに
いるのは、そいつだけ。だから誰かに襲われるようなことはねえ」
ならば、今呼んだのはその護衛士なのか。

庭の奥、林の中で灯りが揺らめいたのを見て、花太郎は目を凝らす。確かにそれは、人が持ったとき特有の揺れ方をしながら近づいてきていた。

「悪いな、遅くなって」

「いえ」

短く返答をしたその男は、ようやく春になりかけたところにも関わらず、ひどく日焼けしていた。

節くれだった手の爪には、土が挟まっている。

本当に一日中庭に尽くしているのだと実感させる風貌だった。

「どこか、お望みの場所はございますか」

「んー……もうそろそろ、桜の時期か？」

「桜は、まだ早咲きのものさえ蕾が僅かに綻んだのみ。見ごろであれば、遅咲きの梅でありましょう」

「なら、そこでいい。案内してくれ」

畏まりました、と言った男は、そのまま先を示して歩いて行く。

男が出てきたのは門から見て右奥の林だったが、案内していく先は左奥。

手燭がなければ歩けないほど右奥は真つ暗だったのに対し、左奥への道はきちんと灯りが灯されているのを見て、一護は眉をひそめた。

「お前、希望を聞いた割には最初っからこっちに案内するつもりだっただろう」

「殿下は特に風流を知らぬゆえ、適当に案内しろとしかおっしゃらないではありませんか」

見事に切り返された一護は、僅かに憮然とした表情を見せる。

それがあまりにも子供っぽくて、隣を歩いていたルキアは思わず噴き出した。

「何で笑われなくちゃいけないんだよ」

ぼそりと呟いたために、またたく間にその笑いは伝染する。

その笑いがようやく静まったころ、目的の場所へたどり着いた。

「すごい……」

さすがに管理する者が勧めるだけあって、梅は見事に咲き誇っていた。

一つの種類だけではない。

一重咲き、八重咲き、小ぶりな花、大振りな花、色も白、淡桃、濃桃、紅と種々に咲いている。

だが、驚いたのは仲間たちだけではなかった。

「こんな場所もあるんだな」

「殿下を案内するのは、これが初めてかもしれないね」

そう交わされる会話に、織姫は首を傾げた。

「よく来るわけじゃないからな、まだまだ、全部見たわけじゃないんだ」

弁解するように一護がそう言えば、織姫はまたクスリと笑った。

梅園を見渡す位置にしつらえられた東屋に腰を落ち着けると、予め用意させてあったらしい酒が出てきた。

それを見たひよ里が、怪訝そうに一護を見る。

「そっぴゃあ、何でお前酒飲まへんのや？ 昨日も一昨日も飲んでへんやんけ」

ひよ里が言つと、隣にいた平子も頷く。

一護は、酒を注ぐとすればぬらりくらりとそれを避けていた。

「弱えのか？」

からかうように恋次が言えば、一護は首を横へ振る。

「特別弱い訳じゃねえ。まあ、強い方でもねえんだろっけど」

「はつきりしねえな」

「はつきりするまで飲んだことがねえんだよ」

「へえ」

恋次の目が意地悪く光ったのを見て、一護はあきれたような表情をする。

「いっとくけど、痛飲するつもりはこれっぽっちもねえからな」

「まあ、そう言うなって」

強引に酒杯を持たせようとした恋次から逃げ、一護は離れた場所に座りなおした。

「強いかわいかわからないぐらいしか飲んだことないなんて、もっ
たいたいわよ。ほら、飲みなさいって」

「そうですねー、せっかく美味しいお酒なんですから！」

口々に勧められても、結局一護は酒杯を手取るうとしなかった。
途中からはいくらか意地になっただけ、それを見た浮竹とルキア
は苦笑する。

王土へ来た死神勢も、そして雨竜達も酒に強い性質だ。

うっかり酔い潰されることを避けようとしているのかもしれないなかつた。

なんやかやと理由をつけて飲ませようとする一護を、チャドはしば
らく観察していた。

だがどうにもそれが終わらないようだと思われ、重い腰を上げて仲裁
に入る。

「もう、いいだろう。……一護」

言葉少なに話の続きを促されたのだとわかると、一護は頷いた。

「ああ、話すよ。……だから、一角。いいかげん諦めろ」

話すと言ったはいいが、果たしてどこから話せば一番よく伝わるの
か、全く見当がつかなかった。

こんなことは久し振りだ、と思う。

東宮として立つてからでさえ、もう二十年以上経った。

政治に深く携わるようになってからは、さらに経つ。

物事を順序立てて話し、相手を誘導するやり方は、もう息をするの
と同じぐらい簡単になっていた。

まるでこちらに来て何年もたたないうちのような戸惑いに、内心で苦笑する。

そして、その戸惑いがこっちに来てからのみのものだという事に気づき、はっとした。

現世に居たころの自分は、こんなことを考えることさえしなかったのだと、今更ながらに思いだした。

それがひどく懐かしくもあり、なんだか面映ゆい気さえする。

これでいいんだ、と素直に思えた。

そう、これでいい。

また、初心に戻って一からやり直そう。

たまには回り道をするのも、悪くはない。

「若し、霊王制が乱れれば……戸魂界は秩序を失う。それは、わかるだろ？」

「忠義の先を、失うからか？」

ルキアが問えば、一護は首を横へ振った。

「それもある。でも、それだけじゃない。霊王制がなくなれば、貴族制もなくなる。貴族の位を定めるのは、霊王の役目だからな」

意外そうに恋次が目を見開き、ルキアははっとする。

象徴ではない霊王よりも、それは戸魂界にとって痛いことだ。

「戸魂界の最高司法機関は中央四十六室だ。だけど、貴族の影響力はそれとは別。商業関係の組合の上役には大抵貴族がついてるし、死神だって上位の半数は貴族が占めてるだろ。それが乱れれば、戸魂界は機能を失う」

戸魂界が機能を失えばどうなるか、それは、誰の目にも明らかだ。

「……四十六室だって、戸魂界の統治権を霊王から預けられている

にすぎない。霊王制がなくなれば、四十六室だつて壊滅する。そう
なれば、その下の実行部隊は秩序を失うな。例え誰かがうまく抑え
たとしても、貴族制がなくなって経済が混乱すれば、その状態で長
くはもたない……護廷十三隊は、分裂する」

それは、その組織制度の中に居る死神たちだからこそよくわかった。
藍染の反乱の中で四十六室が全滅した時、死神　特に下位の者達
は、恐慌状態に陥った。

あの状況で経済が混乱し、更には貴族が護廷十三隊から脱すれば。
想像することさえ、おぞましかった。

「分裂だけじゃすまねえだろうな。護廷十三隊は、隊ごとに気風も
性質も全く違う。それが掟から放たれてみる。抗争だなんだで、あ
つという間に瀨霊廷は壊滅する」

いつそあつさりと言ったのは、死神たちもそれを自覚していると確
信できるからだ。

特に十一番隊と四番隊が仲良くしていられるなんて、誰が信じられ
ようか。

「護廷十三隊が壊滅すれば、整の魂葬も虚の昇華も正常に行われな
くなる。魂魄の量が不均質になれば……世界は、崩れる」

この時、仲間たちは一護が背負ったものの重さを改めて思い知った。
自分が生き、子孫を残し、そして制度を護りぬく。

たったそれだけとしか言えないそれが、世界の命運そのものなのだ。
本来誰もが保障されているはずの、生き、結婚し、子供を育て、そ
して家族を護る権利。

その権利は不動のものであるはずなのに、一護達王族に対してだけ
は、そうではない。

全てが命懸け、いや、命以上に世界が懸っているのだ。

「そんなこと、させるわけにはいかねえさ」

そうぼつりと言った一護は、誰の目も見ていなかった。だから、気づかない。

誰もが、酒を飲む手を休めたことを。

こんな話を聞きながら飲む酒ほど、不味いものはないはずだった。

「だからって、殺していい訳じゃねえ。……甘いって言われても、殺さずに済むならそれでいいって、今でも思ってる」

それを聞いた花太郎は、内心でほっと息をついた。

その、誰であつても護ろうとする優しい心根は、何一つ変わつてはいない。

ただ、その心根ゆえに護らなくてはならないという責に駆られ、こうせざるをえないだけなのだ。

そう思つた為に、一護の次の発言には驚いた。

それは、思つたこととは、一護が望むこととは逆のことだった。

「実際、殺さずにすむ方法はいくらでもある。尸魂界みたいに幽閉するのも、一つの手だろ。……それでも、俺は殺す方を選んだ」

「え……」

未だ誰の方も見ない一護の表情をうかがうことは難しい。

ただ、少し視線をずらせば、庭の管理を任されている男が僅かに笑っているのが見えた。

何故笑うのか、それを問うよりも早く、一護が再び口を開いた。

「思想は、一人ひとり違う。そんなもん当たり前だけどな、重要なのは、思想家と呼ばれる人間にとって、他人に強制されて思想を変えられるのは、死ぬよりも屈辱だつてことだ」

一護は、自ら処刑の命令を出した最初の思想家を思い出していた。

殺せ、と、思想を変えるよう説得する一護に対して、男はそう言い放った。

我にとつて、自らの思想を曲げることは何よりの恥辱である。だから、殺せ、と。

一護は、その言葉に誇りを感じとつた。

誇りを失うぐらいなら、死んだ方がよほどましだと　そう聞こえた。

「思想は、一種の誇りなんだと思う。それを失うぐらいなら、死んだ方がいい……俺には、そう聞こえた。だから殺した。俺は、そんな誇りを持って生きているあいつらを、尊敬したから」
それから、殺すという行為は、一護がそうした相手に払える最大の敬意の表れになった。

誰もが黙つたままだった。

一角には、その思想家の意が手に取るようにわかった。

誇りを奪われるぐらいなら、いつそ死んだ方がいい。

自ら望んで死に向かえるのであれば、それはその者達にとって最高の餞だと、一護の行為を正しいものだと思つた。

「誇り、か」

雨竜は、その言葉の意味をよく知っていた。

滅却師の誇りにかけて　何度、そう言つたことだろう。

雨竜は、今手にしている何もかもが誇りだった。

死神の仲間であることも、医者であることも、妻子に恵まれたことも、滅却師であることも　何もかも、全て。

そして、誇りは、時として己を滅ぼす　それをよく知っているのも、雨竜だった。

「黒崎」

静かに名を呼べば、一護はゆっくりと振り返った。老いを知らぬその顔を見て、雨竜は僅かに目を細める。

「後悔は、してないんだな？」

「ああ。するわけにも、いかねえしな」

そう答えた一護の表情には、一切の迷いがなかった。

何度も何度も迷い、苦しみ、そうして得た静寂だけがあった。

「そうか。なら、いい」

本当は、何も良くないのかもしれない。

それでも、ただそれでも、今ここで争いを起こして、そのまま別れたくはなかった。

長い沈黙が落ちた。

思考を整理するかのように、時折誰かが酒を飲む。

恋次が酒杯を差し出せば、今度こそ一護はためらわずに手に取った。久し振りの酒は、苦く口に広がった。

「一護」

沈黙を切り裂く声は、必要以上に大きかった。

驚いたために、誰もがチャドを見る。

「お前は、死神代行を辞めたと言った。今のお前は王族だ。次の霊王になる皇太子だ。それでも」

堰を切ったように話し続けたチャドは、そこで一度口を閉じた。ためらうように瞼を閉じ、ゆっくりと開いて一護を見据える。

「それでも……お前は、俺達の仲間でいてくれるか？」

虚を突かれたような表情で、一護はチャドを見つめた。

それは、チャドがずっと一護に聞きたかったことだった。

一護は何もかも変わった。

あの頃一護が持っていたものを、一護はほとんど失くし、捨てた。

そして、自らの名前に恥じない誇りを得て、それであっても、自分たちを仲間としてくれるか。

一護はすぐに口を開いた。

だが、迷うように視線を泳がせた後、ゆっくりと口を閉じる。

しばらく逡巡したのち、一護は再び口を開いた。

「俺は変わった。あの頃の俺は、ほとんど残ってないと思う」

誰もが言葉もなく見つめる中で、一護はゆっくりと言葉を紡いでいく。

「それでも、お前らが俺を仲間にしてくれるなら、俺はお前らの仲間でいたい」

一護は、順繰りに顔を見つめた。

かつてと変わらない顔、ずいぶん変わった顔。

二つに分かれる中で、自分は中途半端だと思った。

自分は、少しだけ年をとった。

そうして、そこからは変わっていない。

自分は、何一つ完全ではないのだと思う。

人間として育ち、死神の力を得て、虚としての己を持ち、地獄の力を身に受け、そうして、王族として生きている。

何一つ、完全ではない。

そんな自分であっても、彼らは受け入れてくれるのだろうか。

不安はないが、確信もなかった。

不安がないのは、どちらであっても受け入れる覚悟をしたからだ。

「 当たり前だ、一護」

はつきりとルキアが答えると、“仲間”達はしつかりと頷いた。

「 誓ってもいい。君が俺達を仲間とする限り、俺達は君の仲間だ」
浮竹の言葉に、一護は目を見開く。

政治の世界において、誓いは契約と同義だ。

利害関係が一致した者同士、あるいは相反する者同士を縛るためのも、これは違う。

こんなにも優しい誓いを、ここで聞くことができるとは思わなかった。

「 誓うのは、俺の方だ……約束する。俺は何があっても、お前らが俺を仲間としてくれる限り、お前らの仲間だ」

s e c o n d p l e d g e (後書き)

タイトル日本語訳は「二度目の誓い」

一度目の誓いは“魂にだ!”のアレです。

それでは感想などお待ちしております。

r e p e a t i n g f a t e s (前書き)

88話の直後から始まります。

和やかになった空気を、堅い足音が切り裂く。

一護が振り向けば、夜一と、その後ろに浦原が立っていた。

再会してから、浦原とはまだまともに会話をしていなかった。
何故なら、浦原が注意深くそれを避けていたからだ。

「黒」

「浦原さん」

遮られた浦原は、黙って一護を見る。

対して、一護は浦原を見なかった。

「あなた、俺に言ったよな。俺の剣には恐怖しか映ってねえ。戦いに必要なのは、恐怖じゃなくて覚悟だつて」

痛いぐらいに空気が張り詰めていくのを、織姫は肌で感じていた。

止めなくてはいけないと、本能が警鐘を鳴らす。

だが、何故か声を発することができなかった。

まるで、それを禁じると誰かに命じられたかのように。

風のない、穏やかな夜だったにもかかわらず、僅かに篝火が揺れる。

隅の篝火が一つ消えると同時に、一護は言った。

「あなたは、今の俺の剣に何を見る？」

普段の浦原なら、丸腰じゃないかととぼけたかもしれない。

だが、そんな余裕はなかった。

浦原は、すつと目を閉じる。

感覚を研ぎ澄まし、意識を集中した。

一護が座る真向いの地面には、あの愛刀が突き立てられていた。

その刃に映るのは、まるでこれまで一護が見たものを早回しにしたような膨大な量の映像。

「何と聞かれて、答えられるものじゃないっすね。仲間のこと、家族のこと、政治のこと……数え切れないほどたくさんものが映っている。違いますか？」

「それだけか？」

「……アタシのことは、全く映っていないんすね」

一護はふつと笑うと、梅から篝火に視線を移した。弱い風が、そつと炎を揺らす。

「浦原さん。俺はあんたを恨まないよ。あんたが俺に恨んで欲しいと思っっているなら、なおさらだ」

乱菊が大きく目を見開き、雛森は浦原に視線を移した。

その場で、一護と浦原、そして夜一の3人だけが全く動かなかった。

「……全部、お見通しっすか」

一護は、浦原がここへ来た理由をわかっていた。

そして、その目的が的外れだということも。

「俺はあんたを恨まない。崩玉を封印したのは、俺の意志だ。誰に強制されたわけでも、何か別の感情に駆られたわけでもねえ」
はつきりと言い切った一護の瞳には、迷いが無い。

それに戸惑った浦原は、二の句が繋げなくなった。

だが次の瞬間、ただ真っ直ぐに前を見つめていた一護の瞳が、僅かに揺らいだ。

「ああ、でも……俺の意地だったって言い方も、できるんだろっな」
「意地？」

チャドが訊けば、一護は頷く。

「ああ。俺は、生まれてからここへ来るまで、いろんな奴の手の上

で転がされてたんだ。決着ぐらい、自分でつけたかった」

「……そんなことのためにか？」

そんなことのために、自らの一部を犠牲にしたのか？

死神だけではない、その場に居た誰も脳裏にその思いがよぎる。

「俺にとつては、“そんなこと”じゃねえんだよ」

一護は苦笑すると、酒杯に残っていた酒を一口飲んだ。

やはり、苦さは変わらなかった。

「斬月はそれをわかってくれた。最初は嫌がったし、最後まで嫌だったんだろうけど……それでも、わかってくれた。どうせ封印されるんなら、役に立った方がいいって」

「どうせ封印される？ 一体何故」

雨竜が問えば、一護は僅かに視線を落とす。

その表情が悲しさと決意に満ちているように見えて、仲間たちはひどく戸惑った。

「……霊王と東宮は、斬魄刀を持たねえ。東宮になると同時に、封印するんだ」

「何故、そんなことを？」

浦原の問いかけに、一護は首を横へ振った。

「知らねえ。最初の霊王がそうしたってのに倣ってるらしいけど、はつきりしたところはわからねえ。ただ、な」

一護は、そこで言葉を切った。

長い時をここで過ごして、最初の霊王がどうしてそうしたのか、自分なりの答えは見つかっていた。

「たくさん力をもってまともになれるほど、人つてのは強くてきてねえよ」

霊王の持つ権力は強大だ。

それに準ずる皇太子もまた同じ。

もしまっとうな人であれば、それほどの権を預けられて戸惑わずにはいられない。

過ぎたる力は、己のみならず他をも滅ぼす。

現世や尸魂界の数々の史書にそう綴られているように、権は人を溺れさせ、溺れたものは更なる権を求める。

そうならない前に、自分が自分自身の力として持ちえる最も大きな象徴を、己から引きはがす。

少なくとも、一護はそう思っていた。

達観したかのようなその言い方に、仲間たちは戸惑う。

仮にそうであるとしても、それは一護らしからぬ言い方だった。

その思いを知ってか知らずか、一護は話し続ける。

「多分、高祖　最初の霊王はそう思っただと思うし、他の霊王もそれに気づいたんだと思う。親父もそれがわかってたから、炎月も使っていいって言ってくれた」

誰も、何も言えなかった。

それは恐らく、一護と同じ場所に立たなければわからない感慨なのだろう。

世界の命運を、その手に握らされる立場でなければ。

それにな、と言って、一護は笑った。

「いざという時に力技が使えねえってなれば、ちょっと慎重になると思わねえか？」

「っ……………」

一護が慎重にならなければならぬほど、それを忘れてはならないと刻みつけるほどに、それは重いのだ。

その重さに、誰もが押し黙る。

「……………そうっスね」

だからこそ、その同意が浦原にできる最大の謝罪だった。

一護は謝罪を求めていない。

そう言えば、語弊があるだろう。

一護は、謝罪さえ許さないのだ。

恨まないのではなく、恨むことさえしない。

その刃のどこにも、浦原の存在を映さない。

それが、一護に許された最大限の抵抗だった。

「殴り飛ばしてやっても構わぬのじゃぞ」

ずっと見守ってきた夜一だから、一護の想いはよくわかる。

そう言ったところで一護が何もしないことも、わかっている。

ただ、ふと訊いてみたくなっただのだ。

こうして仲間に全てを打ち明けて、いくらかの重荷を下ろした一護が、今何を思うのかを。

「殴ったところで、何も変わらねえ。殴って満足できるほど、ガキでもねえしな」

そう言った一護は、不意にいたずらっぽい表情で浦原を見た。

「それに、もういろんな人に叱られた後なんだろう？」

その示すことに思い当たり、浦原は頬に触れる。

まだピリピリと痛むそれに苦笑し、一護に向き直った。

「それもお見通しっすか。まあ、叱られるだけじゃ済みませんでしたけど」

桜・葵・桐生という三恐にみっちり叱られ、拳を張り倒された浦原は、久々に寿命の縮む思いがした。

それを思い出したのか、夜一がけらけらと笑う。

「姉上があんなに怒ったのは久しぶりじゃのう」

「……その前に怒ったのは32年前っすけどね」

あんたも同じ理由で怒られてたじゃないか、暗にそう告げた一護に、浦原が意地悪げな視線を夜一へ向ける。

「夜一サンも叱られたんスね」

「煩いわ！ 一護！ おぬしも余計なことを言うてない！！」

素知らぬ顔で視線をそらした一護を、夜一は恨みがましそうに見る。その様子を見ていた浮竹は、そつと目をそらした。

この世界において、きっと当主達との交流は一護にとって大きな支えだったはずだ。

当主達も、それがわかっていいたから必死になって一護を支えてきた。

自分や他の仲間が、一護の味方になることはできても、支えになることは絶対にできない。

だからこそその立場がうらやましくもあり、間に立つ辛さを越えて支え続けたことへ素直に感嘆した。

「なあ、浦原さん。一つだけ、答えてくれ」

「なんでしよう」

不意に問いかけた一護に、浦原は頷く。

一護はそれを見ると、低く抑揚のない声で問いかけた。

「藍染がやるうとしてたことと、俺が藍染を倒したこと、何か関係あんのかな」

「っ」

誰かがするどく息を飲む。

だが誰よりもそれを気にしてきたのは、一護だった。

気づいたのはいつ頃だったか。

出発までの一ヶ月の間だったというのは覚えていても、それ以上は何も思い出せなかった。

天に立つと　　靈王を弑し、自らが至高の位に即くと　　言った藍染。

自分はそれを防ぎ、そして今、その位に即くことを約束された立場にある。

それに気づいた時、吐き気にも似た嫌悪を感じた。

まるで自分が藍染と位を奪い合い、結果勝ち取ったかのようなそれ。勝ち取ったのは平和でしか無かったはずだ。

にも関わらず、目の前にあるのは王土へ向かうしかない現実。

それからだ。

藍染が、夢の中で唾うようになったのは。

「なあ、どう思う?」

一護は、どこか泣きそうな表情だった。

きつと、ずっとそれに悩まされてきたのだろう。

もしかしたら、これが自分が償える最後の機会かもしれない。

浦原は、強くそう思った。

「関係があるかどうか……それは、わかりません。藍染サンのことだ。ひよつとしたらアナタ方の血筋のことを全部知った上のことだったのかもしれない」

一護の顔が、曇る。

浦原はそれを見て、注意深く次の言葉を選んだ。

「そうだとしても、関係ない　　アナタなら、そう思えるはずです。藍染サンがしたことアナタの今の立場、関係があったとしても、気にするようなことではないでしょう」

そう言っただけで笑おうとし、失敗した。

いつの間にか、作り笑いしか浮かべられないようになっていた。

それでも、一護はそれに応えて笑う。

言いたいことは、十分伝わった。

「そうだよな。……ありがとう、浦原さん」

「いえ」

話が終わったことを察して、ぬいぐるみ達がひよいと姿を現わす。どうやら夜一とともに入り込んだらしい彼らは、庭に来るのなら声をかけると一護に不平を漏らした。

思い思いの場所に座った彼らを見て、夜一は目を細める。

「話が終わったのであれば、桐生達を呼んでやってはくれぬか？」

夜一がそう言うと、一護は首を横へ振った。

「たまには、いいだろ。あいつらは口出しばかりするから、たまには離れたい。あいつがいれば、他に心配することもねえしな」

そう言つて一護は庭師の男を見る。

男は少し離れた場所で、存在を消すかのように瞳を閉じていた。

「話が終わったからって、どういう意味？」

「冬獅郎達についてこねえように言ったのは、さっきの……思想の話を、あいつらに聞かせたくなかったからなんだ。だから場所をここへ移した。ここだけは、護衛士がついてなくてもいいってことになつてるから」

な、と一護が声をかければ、男は目を開き頷いた。

「そのための、“にわ”ですから」

そう答えた男に、弓親は眉をひそめる。

彼は、どうしても言いたいことがあった。

「さつきから思っていたけれど、ここ、なんか趣味が悪いよね」

「そうですか？」

さほど気分を害した風もなく、男は弓親に問い返す。

その瞳が不自然な光を宿していることに気づき、一角は酒を飲む手

を止めた。

「なんていうの？ ああ、世界を全部小さくしたみたいなさ。そんなの傲慢じゃない？ 自然は自然のままの方が美しいと、僕は思うよ。こんな作り物よりずっとね」

川も、池も、林も、結局全て作りものだ。

どんなによく作られていても、それは本物に遥かに劣る
弓親は、それが言いたかった。

「それでも、俺たちはここから出られないから」

答えたのは、男では無く一護だった。

「俺たちは、巡察使みたいな役目についてねえ限り自由に外に出ることはできねえ。だから、たとえ作り物でも合った方が嬉しい」

一護が自由に外に出られないというのは、うすうす察してはいた。
身分が身分だから、とわかってるつもりではいた。

それでも、改めて一護の口から言われれば、それは衝撃となって降りかかる。

一方で、ずっと一護のそばにいたぬいぐるみ達は、この庭が一護にとって数少ない気分転換になっていることを知っていた。

桜が咲いた、花菖蒲が見ごろだ、蛍が光り始めた、紅葉が綺麗だ、椿がほころんだ。

庭師の男が知らせを寄越すたび、一護は家族とここを訪れている。

たとえここが作り物の世界でも、一護にとってはこれしかないのだ。

「忙しいから、外に出てどっかいきてえなっと思っことは、あんまりねえんだ。遠くに行けるような暇もねえし。近くにこういうところがあれば、わりと簡単に来られるだろ？」

「そう言っていただければ、ありがたいです」

男が誇らしげにほほ笑むのを見て、一護は目を細めた。

「あんたには、みんなが感謝してる。あんたがここにいてくれるおかげで、息抜きもできるしな」

「護衛士はあなた方を護るために存在する。例え職を辞したとしても、誇りまで捨てたつもりはありません。あなたが礼をおっしゃるようなことは、何もないでしょう」

「そうか」

一護はそういうと、また酒を口に含んだ。
そろそろ、一杯目が空になりそうだった。

「……外に出たいと、思わねえのか？」

ぶっきらぼうな口調で、恋次が問いかけた。

「外に？」

「ああ。弓親さんが言った通り、ここは作りものだろ。お前がこんなところを腹の底から好むわけがねえ」

「……出たくとも、出られねえ」

「お前がどう思ってた聞いてんだ！ 可能不可能の話をしてるんじゃないねえ！」

酔ったせいか、それとも一護に対して苛ついているのか、恋次が声を荒げる。

恋次は一護の胸ぐらをつかむと、鋭く一護を睨みつけた。

「一角さんの言った通りだ。鎖ぐらい断ち切れよ！」

「……断ち切る勇氣は、ねえよ」

一護は、静かに言った。

同じく静かな動きで、恋次の手を引き剥がす。

「断ち切る勇氣もないし、その気もない。断ち切ったとしても、俺は自由になれない。……周りに無理言っつて外に出たとしても、やっぱり俺はそれを楽しめないと思う」

そう言っつて、一護は笑った。

「さっきも言っつたろ。どこにいようが、変わるうが、俺は俺だ。何

度も言わせんじゃねえよ」

「……………」

「外に出る必要があるなら、外に出る。でも、まだその時じゃねえ」
「時じゃない、やと?」

平子が問えば、一護は頷いた。

「俺が変わるように、ここだっていつまでも同じとは限らねえさ。
もし変わったなら、俺もここから出る時が来るかもしれねえ。それ
だけだ。深い意味はねえよ」

一護はそう言っつて酒を口に含んだ。

漸く、一杯目が空になった。

「この際だから、全部話しとく」

そう言っつた一護に、ひよ里は眉をひそめた。

「なんや、まだ隠し事あんのか?」

「隠し事ってことのほどでもねえよ。そうだな……………凜のことか」
「凜さん?」

「お前ら、聞いてきただろ。馴れ初めはなんだつて」
うんざりした口調で言えば、乱菊が顔を輝かせた。
とりわけしつこく聞いてきたのが、乱菊と恋次だった。

もつとも、恋次は酔った末の言い掛かりのようなものだったが。
しかし、一護は一護で決して口をわらなかつたにもかかわらず、何
故今更言い出したのだろうか。

これが最後の機会だからか、酒に酔ったのか、根負けしたのか、あ
るいはその全部か。

それでも、聞きたいと思った。

「面白い話じゃねえぞ」

「いいからいいから」

少し渋る様子を見せたが、一護はやがてぼつりと言った。

「お互いの利害関係が一致したから、だな」

「……え？」

思いもよらない一言に、仲間達は驚いた。

それを見た一護は苦笑し、まあでも、と付け足す。

「俺は凜のことが好きだし、凜だってそうだと思うぜ？」

「……あんたって、意外と恥ずかしげもなくそういうこと言うのね」

「だってあたし達相手に素で惚気るもの」

あらぬ方を向いたりりんが、揶揄するように言う。

恋次が酒を噴き出すのに構わず、コンもやれやれと言った様子で頷いた。

「最初は大変だったくせになア。見てるこつちが」

「池に沈められたくなけりや今すぐ黙れ」

ひつつかまれたコンが悲鳴を上げると、一護は後ろ向きに放る。

柱にぶつかったコンが沈黙するのを確かめると、一護は再び話し始めた。

「でも、傍からだつたら俺達は政略的な意味から結婚したように見えるはずだし、俺達だってそういう意味があつたから互いを選んだ。それも確かなんだ」

「……あまり、そうは見えないけどな」

「それはお前の先入観だろ。俺がそんなことするわけない、政略結婚で幸せになれるわけがない。どっちかは、知らねえけど」

両方だ、と内心で雨竜は言った。

百歩譲って政略結婚でも幸せになれるとしよう。

歴史的にもままあることだ。

それほど、不思議はないのかもしれない。

だが、一護がそういうことをすると思えないのは事実だ。

「……俺達は運がよかったんだ。たまたま好き合った相手が、政治的にみても最もいい相手だった。もし違ったら、どっちかを選ばなくちゃなんなかったからな」

「……」

それは、運がよかったで済む問題なのだろうか。

織姫の手が微かに震える。

自分達が恋愛結婚だったからこそ、それは一層身に痛かった。

「……それでよかったのか？」

チャドが案じるように問えば、一護は笑った。

「結果がよかったんだから、いいんじゃないの？」

あっけらかんとした言いように、仲間達はぼかんとした。

「お前から見て、別に俺不幸に見えねえだろ？」

「……まあ」

「だったらいいよ。俺は自分が幸せだと思っしな」

「お前見とると、調子が狂うわ」

平子がそう言うと、誰もが内心で同意した。

本当にその通りだ。

多分、一護が言うほど状況は易しくなく、自分達が思うよりも遙かに悪いのだろう。

それでも幸せだと、一護は言った。

それは哀れむなと釘を刺すかのようで、つまり自分達が案じていたことも全て一護にはお見通しなのだろう。

一護は、自分は幸せだと言った。

家族のことも、立場のことも、自分に関わる全てを引っくるめた上でそう言ったのなら、それでいいのだと思う。

「何もかも、一人で背負い込むなよ」

まるでその場の全員の気持ち代弁するように、チャドがそう

言った。

「ああ。わかってる」

「本当に？」

織姫が問えば、一護はまた頷いた。

「本当に」

repeating fates (後書き)

タイトル日本語訳は「巡りゆく因果」

酒に酔って絡むな、恋次。

i t · s e t e r n i t y , b u t a n i n s t a n t (前書き)

89話の翌日から始まります。

i t · s e t e r n i t y , b u t a n i n s t a n t

「よかつたら、明日の朝議見に来ないか？ 陛下もご出席なさるんだ」

一護にそう言われた仲間たちは、揃って朝議を見に来ていた。

最初は、何も変わらないじゃないかと思っていた。

だが、席が埋まっていくにつれて、雨竜は気づく。

居並ぶ大官たちの様子が、前日とは明らかに違った。

まるで何かに縛られたかのように、身じろぎ一つしない。

言いようのない雰囲気はその場に満ち、岩鷲はごくりと息をのんだ。

やはり、最初に入ってきたのは秋泉だった。

前日と同じように、王族たちが入場してくる。

そうして空席がたった2つになった時、ルキアは無意識のうちに姿勢をただした。

大官たちが居住まいを直し、次に入場してくる人物を待つ。

初めてそれを見る仲間たちも、一度それを見た者達も、ただ黙ってその扉を見つめた。

かつん、と音が鳴る。

誰もが一斉に一護に対して礼をとったのを見て、花太郎は目を見開いた。

何よりも、一護の持つ雰囲気、自分の知るものとは明らかに違っていた。

前日と違い、一護は席に着かなかった。

椅子の前で立ち止まり、そうして入ってきた扉に対して礼をとる。議場が完全に無音になった次の瞬間、それは鋭い足音で破られた。

足音とは、気配とは、それだけでもこれほどに気高さを発するのか。白哉達当主も、ただ無言で礼をとる。その先にいたのは、あの昨日の少女ではなかった。全ての魂魄の頂点に立つという霊王　まさしく、彼女はその位につくものであった。

「面を上げよ。朝議を始める」

声色が違うわけでもないのに、浮竹はその声に唾を呑んだ。蓮杖が言った意味が、ようやくわかった。

「……………疲れた……………」

朝議が終わり、思わずつぶやいた織姫に、蓮杖が苦笑する。

「だから言ったでしょう。陛下は恐ろしい方だって。……………まあ、それでも先代や先々代より迫力はあるけど」

「ここ数代で最も霊王らしいかただよ、あの方は」
九頭柳が言えば、浮竹は苦笑した。

「そうでしょうね……………昨日とは、全く印象が違つので驚きました」
「昨日は特例じゃ。むしろ、驚いたのは僕らの方じゃて。……………のう、白哉坊」

「ああ」

「つーか、あれ本当に一護かよ」

半ば呆れたように呟いたのは恋次だ。

「本当、目を疑うね」

「ああ。全くだ」

弓親と一角が同意すると、隣で呆けていた花太郎までもが頷いた。

「……一護さん、全然変わらないやって思ってたけど……やっぱり違うんですね」

「ああでもないしと官吏になめられる。今でこそ普通にできるけどな、最初のころはまあひどかった」

「そんな風に言わないで上げてくださいよ、空鶴さん。一護は一護なりに頑張ったんですから。一護なりに」

「頑張りが足らぬような言い方じゃのう」

微妙にとげがあった蓮杖の言い方に、夜一が笑う。

ああして、一護が責を全うしている姿を見せることができた。

それが、当主達にとっては限りなく喜ばしいものだった。

そしてこれが、最後だった。

「さて、帰る用意でも始めましょうか」

当たり前のように言った九頭柳に、仲間たちははっとする。

もう、別れの刻が来ていた。

昨日の時点で、見送りに出られるかどうかはわからないと言っていた。

普段は政務についている時間のため、官吏が殺到すれば出られないだろうと。

すまなそうに言っていた一護に、残念だとは思ったが、それでもわがままは言わなかった。

こうしてまた会えて、今の一護を知ることができて、それ以上のわがままを望めるわけがない。

それでも、時間ぎりぎりまで待つてほしいと彩に請われ、仲間たちは門のところまで待つていた。

そわそわ落ちつかない風の彩に、織姫は苦笑する。

「もう、父様遅い！」

しまいにはじだんだを踏み始めた彩に声をかけようとしたその時、奥から一護と凜が走ってきた。

「父様！ 遅い！！ もう少して時間だったでしょ！ 間に合わなかったらどうするのっ！！」

ぎゃあぎゃあど怒鳴る彩にたじたじとしていたが、凜が彩を黙らせると一護は仲間たちに向き直った。

春らしい、柔らかな風が吹きわたった。

「じゃあな」

「元気で」

「無理するなよ」

簡単な言葉だけが交わされていく。

一護はそれに一つずつ返し、別れを述べて言った。

本当に、これが最後だ。

時が正しく進めば、もう二度と、会うことはない。

それが正しい形なのだから、会いたいと願うことはしない。

もし次会うことがあったとしたら、それはもう互いの立場に縛られ

たものにはかならないはずだ。
仲間として会うことができるのは、これが最後だった。

「そろそろ」

竜に促され、仲間たちはそつと一護から離れていく。
門の内に残された一護は、ただ黙って仲間たちを見ていた。
もう会えない、そんな言葉が、心に浅く刺さる。

もう、会えない。

それでも、一護は何も言えなかった。
一人取り残されることは、怖くない。
そんな孤独は、もう何度も経験してきた。
仲間と離れることも、怖くない。
だから、不思議に悲しさは感じなかった。

ルキアが何か言おうとした時、一護の元へと一人の下官が駆けて来た。

「どうした」

ルキアの前で、一護が静かに下官に問いかける。

「尚書令が、直ちに奏上申し上げたきことありと
それは、あまりにも無情な言葉だった。」

あと少し、少しだけの時間しか残されていないというのに。
だが全て事情を知っている尚書令が、何の理由もなくこうするとは思えなかった。

恐らくは彼女の慮外のことが起こったのだ。

迷うように仲間たちを見た一護に、ルキアは優しくほほ笑む。

「行け、一護」

余りにも懐かしい言葉に、一護は目を見開いた。

「役目があるんだろう?」

「ほら、行けって」

「早く早く」

口々に言った仲間に、一護は視線を落とした。

迷っている時間はない。

「じゃあな。気をつけろよ!」

一度大きく手を振り、一護は駆けて行った。

振り返した手を握り、ルキアは、ゆっくりとそれを胸の前に持つてくる。

このぐらい忙しい方が、似合いの別れかもしれない。

既に一護の姿は見えない。

もう、行かなくては。

未練を断ち切るように、ルキアは王宮から目をそらした。

そして、瞠目する。

来る時は気がつかなかった風景が、そこに広がっていた。

賑やかな都、その先に広がる田野、そして世界の境目である砂漠。

遠くに流れる大河までも、そこからは一望できた。

「王宮は高台にあるから、こうして見渡すことができるんだ」

ルキアが驚いたのに気づいたのか、夏梨が言う。

「確かに、一兄は近くでこの風景を見ることはできないけどね、それでも、全く見れないわけじゃない」

ほら、と示された方を見れば、王宮の中で最も高い塔が目に入った。

「あそこ、一兄が王宮で一番好きな場所なんだ。ここよりも高いから、もっと広い景色が見られる」

そうだろう、とルキアは思った。

その塔は、見えるわけがないとわかっていても、尸魂界や現世までも視野に入れられるほどに高い。

でも、一護がその視野の広さを楽しむために求めているだろうと、いうのは、簡単にわかった。

きっと一護は、ふと思いついてはあの塔へ登り、自らが背負うものを確かめるのだろう。

そうしてまた、政務へと戻る。

一護らしいと思った。

何もかも、全て。

「さあ、行きましょう。あんまり遅くなるわけにもいかないわ」
そう言った桐生に頷くと、仲間たちは歩き始めた。

もう、振り返らなかった。

it's eternity, but an instant (後書き)

タイトル日本語訳は「其は永遠、されど一瞬」

これで本編は完結です。

外伝を二つ書いて、そして終章。

そこで終わりです。

本当に、ようやく終わるといいますか……

あと少しだけ、お楽しみください。

S O 9 萌ゆる草々 前篇(前書き)

冬獅郎と夏梨が学生時代の話です。

S 0 9 萌ゆる草々 前篇

h e s a y s n i c e t o m e e t y o u , b u t

名に負う罪を知ることもなく

まさらの心を晒す敵に

戸惑いの意を隠すは性か

声と姿に思いは歪み

力を持たぬと知りながら

疑う心は固く凝る

戦いに生きたかつての敵を

友とするは易からず

護るために生きる己に

今の友の思うは何か

過ぎし過去と割り切れず

今は定めと決めてかかり

未来に望むは一つ

全て知り得た白き絆

「はじめまして。惣右介って言うんだ。君の名前は？」

それが、始まりだった。

夏梨の護衛で、一緒に学校へ通うことになった。

それは、わかる。

だが、この現状は何だ。

冬獅郎は夏梨の方へ視線をやり、小さく嘆息した。

「へえ。千亜のお父さんは職人さんなんだ」

「陶工をしているんだ。私もたまに手伝わせてもらっただけど、邪魔だつて放りだされることばかりで」

「千亜のお父さん、怖いもんねえ」

「莉々音のお父さんは何をしているの？」

「ウチは農家だよ。米作ってるの！」

何度目かと思うほどため息をついた後、思いがけずかけられた声に再度げんなりした。

「はじめまして。惣右介つて言うんだ。君の名前は？」

「……………日番谷冬獅郎」

「へえ。かっこいい名前だな！」

「……………どうも」

「なあ、放課後に皆で遊ばないか？」

「悪いけど、忙しいから」

学校でと言うのでさえ耐えられそうもないのに、何を好き好んで放課後まで一緒にいなくてはならないのか。

再びため息をかみ殺すと、目の前に積まれた教材に視線を落とした。こちらだけでさえ、かなり厄介だというのに。

学校に通うと決まっってから、夏梨と基礎的な勉強を始めた。編入するのは13歳から通う初等学舎と決まった為、その前の幼児舎と幼学舎で他の子供が習うことは自力で勉強しなくてはならなかった。

特に夏梨は筆での読み書きという、学校以前の問題から学ばなくてはならず、かく言う自分は自分で王土の風習という、夏梨曰く常識の問題を学ぶ必要があった。

結果的に何とか間に合いはしたが、学校に通うということ自体が共に久方ぶりのことであり、前途多難と言わざるを得ない。

特に自分は護衛士と兼業になるため、相当厳しい生活になるであろうことは容易に考えついた。

再び、ため息をつく。

少なくとも、夏梨が高等学舎を卒業するまでの12年間こうした生活を送ることになる。

それまでこの面々と過ごさなければならぬと思うと、暗澹とした気分になった。

だが、学校生活は至って平凡だった。

当たり前と言えば当たり前だ。

藍染も破面も、既に霊力がない。

それ以前に記憶もないのだから、何かを企んでいるわけがない。だが、視覚とは偉大だ。

その見た目に、仕草に戸惑うために、未だに彼らになじめないでいた。

「とーしろー、お前さっきの授業最後まで聞いてたかー？」

またか、と言いきりになるのをぐっところえて、黙って帳面を差し出した。

「おーおー、さすがだな！ 後で返すよ」

ほぼ毎日板書を写させてくれとせがむ拓には、いいかげん辟易していた。

直接戦っていないためか、拓と莉々音にはさほど抵抗は感じなくなつて久しい。

ただの鬱陶しい同級生だと思えば、それで済む。

ただ、授業をまじめに受けず、大抵は寝てばかりの拓を見ると、実際に戦った京楽の言っていた通りだ、と思う。

実際、莉々音がやかましいところも、千亜の沈着なところも、自分が知っている通りか、聞いた通りだった。

だから、どうしても疑いを晴らすことができなかった。

もし、魂魄が再生されても、その人格が変わらないのだとしたら。

藍染は、果たしてどうなのだろう。

自分たちに見せている柔和な表情の下に、やはりかつてと同じくして冷酷な己を秘めているのではないか。

もしそうだとしたら 藍染は今、何を企んでいるのだろうか。

霊王を弑するという計画を立てた人格が 自らが最も上に立つというその意志が変わらないのだとしたら、一度記憶を消されたとしても、やはり同じことを狙うのではないだろうか。

もしそうだとしたら、駒として使われるのは夏梨か自分だ。

自分に近く、そして霊王と東宮にも近い。

もしその計画があるとしたら、これほど使い易い駒はないだろう。

若し、藍染がかつてと同じことを企んでいるのだとしたら、あのころとは危険度が格段に違う。

王鍵を作る必要も、瀟靈廷を相手取る必要もない。

霊王を殺そうと思えば、王宮に忍び込めばそれで済む。

猜疑の心は、留まるところを知らなかった。

そして更にまずかったのは、初等学舎が寮制だということだった。親元から離れることで自立心を養うたの何だの、もっともらしい御託が並べられてはいるが、何よりもまずかったのは、同じ部屋がよりによって惣右介であることだ。

「おはよう、冬獅郎」

「なあ、宿題わかったか？」

「今日の3限目って何だったっけ？」

「おやすみ、冬獅郎」

同じく同室のしずくと宗二郎がそう言うのはまだしも、惣右介に言われるのは堪えがたかった。部屋でさえ、息をつけないとはどういうことか。

学生だって、護衛士だって、神経を使う仕事。

休む時ぐらいはゆっくり休みたい。

それをどういふ訳でこんな風に過ごさなくてはならないのか。

週末ごとに王宮にとって返し、わずかだがしつかりと睡眠をとる。そんな生活が始まった。

「なあ、冬獅郎。……どうして俺達のことをそんなに避けるんだ？
入学して数カ月が経った頃から、しびれを切らしたようにそう問い
かけられることが増えた。」

簡単に察せられるほど、わかりやすくしていたつもりはない。
だが、何に誘っても断られれば、そう思うのは当たり前だろう。

「お前には関係ない」

「人とかかわるのが好きじゃない」

「放つといってくれ」

何度そう返しても、しばらくすれば再び問いかけてくる。

それが果して何を意味するのか。

苦行にも似た、日々が続いた。

「ねえ、冬獅郎」

王宮へ帰る途中、馬車の中で夏梨が問いかけて来た。

「あたしが口出していることじゃないってのはわかってるんだけど
さ……もう少し、あいつらに馴染んだら？」

「……………」

その方がいいとわかっているために、反論できない。

これから何年も共に過ごす以上は、ちゃんとした関係を築くべきな
のだろう。

それでも、過去の記憶がそれを許さない。

「受け入れられないにしてもさ、切り替えぐらいはした方がいいよ。
あんた、すっごい疲れた顔してる」

夏梨の表情が純粹な心配から来るものとわかって、思わず表情が
渋くなる。

「……………努力は、する」

小さく呟けば、夏梨が満足そうに笑った。

S09 萌ゆる草々 前篇（後書き）

タイトル日本語訳は「はじめましてと言っけれど」

リクエストが多かった話です。

とは言えいつものごとく日夏っ気は全くなし

完全にクラスメートの話になりますね。

そして千亜、拓、莉々音、惣右介以外にもまさかのしずくと草冠（笑）

それに追加してほむらもいます。

それでは感想などお待ちしております。

S09 萌ゆる草々 中篇(前書き)

91話の数ヶ月後から始まります。
戦闘描写あり。

S 0 9 萌ゆる草々 中篇

a n i n s t a n t ' s j u d g e

夏梨と通う学校は、都のある中央州の中でも外れにあるほうだった。人口が少ないため、校区が異常に広い。

学校のある街の中心には職人街があり、その学校の父兄も大抵は職人。

莉々音のように農家をしている家族は、校区の外れにある集落に僅かにいる程度だ。

もちろん、護衛士や王族は、他にいない。

それ以外は至って現世と変わらない。

春、夏、冬と長期休業があり、運動会や学芸会といった行事もある。その中でも生徒が最も楽しみにしているのは、遠足だった。

961

「……何で山登りなんだよ」

配られたしおりを見て、思わず小声でつつこむ。

“御池岳に登ろう”と表紙に大きく書かれた冊子には、当日の日程が記されていた。

「中腹まで登って牧場行って飯食って帰る……相変わらず何のひねりもねえ」

ざっくりと内容を確かめ呟くと、隣から夏梨が小声で声をかけてきた。

「何のひねりもないのが遠足でしょ。あんた遠足に何期待してるの」

「何の期待もしてねえよ。いっそ無い方がいい」

「あんたねえ……」

「ほらそこ、しゃべらないで話聞きなさい」
教壇に立った教師に注意され、大人しく口をつぐんだ。

いつそ無い方がいい。

そう言ったのには、この行き先が厄介な土地だからという理由もあった。

御池岳とは、街から南に少し離れたところにある山だった。

簡単に言い表せば、これさえなければと言われるほどに、交通の邪魔になってしかたのない山である。

南州との州境にあるために、南州とを行き来するためにはその脇の峠を通るか迂回するしかないのだ。

しかし観光地としてそれなりに栄えているため、生徒の中には行ったことがあるという者もいた。

問題は、その山が州境にあるということである。

人が住む地と、そしてその先にある砂漠。

二つを隔てているのは、巨大な結界だ。

外からの認識を受け付けられないその結界は、同時に虚の侵入も防いでいた。

しかし、結界は人が作ったもの。

決して完全ではない。

その最たる部分が、ほころびだった。

数年おきにどこかしらへ現われるというその穴から、虚が侵入することがあるのだ。

そして、この間隊長から知らされたのは、この近くにその穴がある

らしいという情報。
地名で上げるならば、御池岳のどこかだろう、と。

未だはつきりとした情報が上がっていないため、その地区の封鎖はできない。

交易の要所である御池岳の峠を封じることが、それだけ難しいことだった。

同じ理由で、混乱を避けるためにもその情報は民には知らされていない。

護衛士が山を巡回しているため、そもそも虚の被害が出ることはないだろうという考えからだ。

その辺りに関してならば、容易に納得がいった。

交易商がこの街を避けるようになれば、職人たちの欲する材料も手に入らなければ、品物を売ることさえできない。

そうなれば、生活の糧を失う者もいるだろう。

それを考えれば、この措置には納得がいく。

だが、この地に夏梨が行くとなれば話は別だ。

王土にいる虚は、ほとんどが最上級大虚。ヴァストローデ

破面化していないとはいえ、その戦闘力は侮れない。

応援を要請したとしても、安心はできない。

桐生は遠足先の変更を学校側に求めるよう提案したが、不自然すぎると却下された。

もう、自分たちが何とかするしかない。

どうしようもないと、腹をくくった。

御池岳は、観光名所と言われるだけあって風光明媚な土地だった。

何度か下見に訪れた際、その豊かな自然に驚いたのは自分だけでは

ない。

桐生も、こんな事態でさえなければのんびり観光を楽しんだらう。最も、それは今ばかりは無理であったが。

油断なく周囲を警戒しながら、学生らしく振舞え。

隊長から下された命は、自分にとって最も難しいことだった。

「冬獅郎！ 聞いてるのかよー！！」

「あ？」

不機嫌そうに問い返せば、いささか低い位置から莉々音の怒声が飛んできた。

「だ・か・ら！ お前おやつ何もってきたって聞いてんのー！！」
何とも遠足らしい質問に、思わず嘆息する。

こいつらに虚の話をしてやったらどうなるだろうかと、一瞬ではあるが本気で考えた。

「夏梨のと一緒だ。あいつに訊け」

選ぶのが面倒だったため、夏梨に適当に選んでくれと頼んでおいたのだ。

簡潔に返し、再びあたりへと意識を集中した。

今のところ異状はない。

周囲に潜んでいる仲間たちの動きも、計画から外れている様子はなかった。

視線を夏梨へとずらせば、説明をしておいたにも関わらず友達と話し込んでいる。

それも、千亜と、だ。

今日だけでさえ軽く二桁に達したため息をかみ殺し、無言で歩を進めた。

異変に気付いたのは、昼食を終えて下山を始めてからしばらくしたころだ。

「……夏梨」

低く呼びかければ、夏梨が視線だけを自分へ向けた。

「妙だ。他の奴らの気配がねえ。用心しろ。……だが、気づかれるな」

さっきまであったはずの仲間たちの気配が、徐々に減ってきていた。すぐ近くを桐生が歩いているのはわかるが、それ以外の気配がない。最後の指示に従って夏梨が小さくうなずいたのを確認すると、腰にさした氷輪丸へと意識を向けた。

できれば、この何も知らない子供の前で振るいたくない。心のどこかでそう願った自分に苦笑し、周囲へ意識を戻した。

山道脇の大木が、大きく裂けたのが、始まりだった。

「伏せろ！」

そう叫ぶなり、氷輪丸を滑らせる。

大木の下敷きになりかかっていた引率教師を抱えて後方に飛び、ある程度生徒が固まっているのを確認して結界を張った。

「一体、何が……」

茫然としたままの教師と生徒を見て、内心で舌打ちする。

仲間の気配は未だない。

どうやら引き離されたいということとは、容易に推測できた。

「虚の襲撃だ。俺らがどうにかするまで、ここを一步も動くな。…

…夏梨」

傍にいた千亜を庇って伏せていた夏梨に声をかければ、鞘に手をかけつつ立ち上がった。

「お前は、自分の身を護ることだけを考える。いいな」

「何、言つて」

「お前の実力で何かを護るのは無理だ。そもそも相手の技量を考えれば自分の身すらも怪しい。それをよく自覚しておけ」

自分よりも手練の護衛士でさえ引き離された。

そもそも、自分でさえ庇いながら戦える相手ではないのかもしれないなかつた。

「いいな」

返事のない夏梨を睨めば、睨み返された。

「嫌だ」

「状況と自分の立場を考えろ」

「でも！」

「言うことを聞きなさい、夏梨」

いつの間にか結界の中に入り込んできていた桐生が、夏梨の後ろに立つ。

「……でも」

「あなたと東宮は違うのです」

改まった口調で言われた夏梨は、はっきりと傷ついた表情をした。

無意識のうちに、かつての一護と同じように戦いたいと考えていたのだろう。

それでも、実力も経験も、圧倒的に追いついていない。

「わかつた」

しびしびではあったが夏梨が頷くのを見ると、桐生は抜刀した。

近くにいた莉々音が、怯えたように身を竦ませる。

普段であれば、もう少し余裕のある状況であれば、氣遣ってやれたかもしれない。

だが、これは明らかに窮状だった。

「あんだ、3体でいいから相手できる？」

「ああ」

虚の気配は8体。

多い方をおつて出てくれたことに感謝し、敵とする3体を見る。

そのうち1体が水を遣う能力だということに気づき、おつてのNO・3を思い出した。

小さく息を整え、刀を構えなおした。

「行くぜ」

氷輪丸が呼応するように震えたのを手に感じ、結界の外へと飛び出した。

3体とはいえ、最上級大虚。

まとめていける相手ではない。

ならば、どうするか。

久々の戦いの中で、思考が研ぎ澄まされていくのを感じる。

結界は、霊圧遮断型ではない。

始解は避けるべきか。

「縛道の六十一！ 六杖光牢！！ 縛道の六十三！ 鎖条鎖縛
！！」

2体捉えるつもりだったが、1体しかかからなかった。

「チッ」

大きく舌打ちした瞬間、背後から斬撃に襲われる。

間一髪でかわせば、捉え損ねた1体が虚閃を放った。

氷輪丸で弾き、そのまま斬りかかる。

右腕に浅くしか入らなかったが、手傷を負わせただけでも上出来か。

「冬獅郎ッ！」

「わかってる！ 口出すな！」
振り返りざまに氷輪丸を振りぬけば、見事に仮面がかち割れた。

あと2体。

気を緩めたつもりはなかった。

実際、最初の鬼道がすでに限界であることにも気づいていたし、だからこそ手傷を負わせた相手との決着を早々につけなければならぬことも分かっていた。

ただ一つ慮外のことがあったとすれば、虚が8体ではなかったことだろうか。

もう1体を昇華した瞬間、鬼道がはじけ飛んだ。

桐生の方もあと2体。

だが、結界が不安定であることに気づく。

次の鬼道や虚閃の衝撃には耐えられないだろう。

「チッ」

もう一度舌打ちし、最後の一体へと対峙した瞬間、茂みから黒い影が飛び出した。

横目で影を追い、その先にあるものに瞠目する。

振り上げられた爪に耐えられるほど、その結界は強くない

「逃げろっ！！」

叫び、身をひねって方向を転じる。

だが訓練を受けていない教師も生徒も、足がすくんで動けないようだった。

夏梨が抜刀するのが目に入る。

馬鹿か、テメエはっ！

だがその思考を言葉にする時間さえ惜しかった。

爪が降りおろした先、そこにいるのは……

左腕で惣右介を抱え、跳躍する。

その腕が裂かれる感覚がしたが、意地でも少年は離さなかった。

「冬獅郎っ！」

抱えられた惣右介が、悲鳴にも似た声を上げる。

悪いな、怖い思いさせて。

頼む、怪我をしたのは俺だけでいい

そんな優しい声で、俺の名を呼ぶな……

三つの声が頭の中で交錯する。

惣右介を下ろし、右腕だけで氷輪丸を構えた。

もう左腕は使い物にはならないだろう。

失血で意識を失うのが先か、それとも2体の虚を片すのが先か。

いずれにせよ、迷っている暇はなかった。

「霜天に坐せ」

S 0 9 萌ゆる草々 中篇(後書き)

タイトル日本語訳は「瞬間の判断」

何だかんだでやっぱり優しい冬獅郎。

尸魂界を離れることで、何か変わったのかもしれない。

それでは感想などお待ちしております。

S09 萌ゆる草々 後篇(前書き)

92話の直後から始まります。
戦闘描写あり。

S 0 9 萌ゆる草々 後篇

f i r s t s t e p

氷輪丸からあふれ出した氷は、見る間に竜を象った。

左腕の出血が徐々に収まるのを確認して、そっと左手を添える。

一歩踏み出した後は、早かった。

意志に従って縦横無尽に動く竜を操り、まずは1体を撃破する。そのままの勢いで2体目を呑みこむと、竜はそのまま凍りついた。シャン、と高い音を立てて砕け散った氷像に、ほっと息をつく。

「お怪我は？」

氷輪丸を収めて近づき、夏梨に問い掛ける。

一気に気が抜けたのか、夏梨はその場にへたりこんでいた。

「……大丈夫。被害状況は？」

護衛士としての口調で話し掛けた為に、夏梨も王族として返した。それらしい表情を見て、ほっとする。

夏梨も徐々に王族としての自覚が芽生えつつあった。

ゆっくりと首を巡らせれば、引き離されていた他の仲間が戻ってきているのが目に入った。

「今、他の護衛士が確認中です。」

「そう。わかった。……冬獅郎は、大丈夫？」

夏梨が、血まみれの左腕を見て問い掛けてくる。

「大した怪我では。」

実際、出血の割に大した怪我ではない。

何食わぬ顔で返すと、夏梨は少し迷った表情を見せたが、すぐに真顔に戻った。

傷を見せろと言おうとしたのかもしれない。だがもし言われたとしても、断るつもりだった。それが、自分と相手の立場の違いなのだから。

「なら、いい。……怪我人の手当て、手伝うよ。」
生徒達の中にも怪我人がいる。

睨り泣くそれらを視界にいれた夏梨は、立ち上がりざまにそう言った
「ですが」

「私も、鬼道使えるからね。……今は人手が必要なはずでしょ？使える力は、使う。」

そついう夏梨に、黙って頭を下げた。
いらん迫力身につけやがって。
そんな不満が頭をよぎった。

「……冬獅郎……」
惣右介たちのところに戻ると、みんなでまとまって地面にへたり込んでいた。

本物の虚を見たのは初めてなのだから、仕方ない。ましてや、普段何気なく接している自分が、何かを“斬る”のを初めて見たのだ。

「……怪我、ないか？」
コクリと頷く惣右介たちを見て、ほっとした。

「……冬獅郎……う、腕……」
怯えている宗次郎に、どうしていいか戸惑う。
出血こそ止まっているが、斬られた瞬間を間近で見たのだ。

怯えるのも無理は無いとわかっていても、この程度の怪我に慣れきっているから戸惑ってしまう。

まして、彼らこそ、かつてはこの程度の怪我と思ったはずだと思うと、尚更。

「このぐらい、大丈夫だ。…どうってことない。」
「でも……」

言い淀んだ惣右介に、苦笑した。

「お前のせいじゃないよ。俺が油断しただけだ。」
黙り込んだ惣右介たちに、ふと思い出す。

藍染に、一度はこの左腕を斬り落とされた。

井上の治療が無かったら、今、こうしていることもできなかっただろう。

その左腕で、今は惣右介を守った。
それがなんだか不思議に思えた。

「冬獅郎、いたいの？」

左腕を眺めていると、ほむらが言う。

「あ、いや。そうじゃない。……それより、本当に怪我無いのか？」

…さつき、しずくこけてたろ？ 拓も。」

そう言つと、驚いた顔をされた。

「なんで…わかったの？」

「え？ ……だって、周りに注意してなきゃ、後ろからの攻撃にも気づけないだろ？それと同じだから。…で、怪我、無いのか？」

…足、ひねった。」

「見せる。」

「でも、冬獅郎のがひどい怪我だし……先に見てもらった方が……」

「バカか。」

一刀両断したすると、ひどく驚かれた。

「このぐらいの怪我は日常茶飯事なんだよ。どうってことない。第一、移動に支障が出なきゃいいんだ。足ひねったほうが移動できねーからよっぽど重傷」

「バカはあんたでしょ。」

後ろからの声とともに、頭に手刀が炸裂する。

「……なんだよ。」

思わず口調が戻ったが、夏梨は気にせず言ってきた。

「あのねー、あんたにしてみればその程度の怪我かもしれないけど、周り血の匂いがすごい。わかる？ 血いみ慣れてるのが当たり前なのと同じにしない。っていうかいくらあんたが油断したって言うて、まあ確かにその通りだけど、素人目に見ればあれは惣右介のせいに見えるの。そこも理解しろ。」

仁王立ちしている夏梨を見上げる。

「わかつたらとつと桐生に怪我見てもらうか、ここから離れるかする。いい？」

「……はい。」

ずばずば言われたために反抗もできず、素直にうなずいて逃げた。

その日は報告に終われ、寮に戻れなかった。

入り込んだ虚の数が予想より多かったことから、綻びの修復が急がれたのだ。

更に、大規模な捜索隊が組まれ、他に残っている虚がないか捜し回ることになり、結局休むことさえできなかった。

翌日、包帯をして登校すると、惣右介が駆け寄ってくる。

「冬獅郎！ 寮に戻って来ないから、何かあったんじゃないかと思っただ。……大丈夫か？ 腕、やっぱり……」

矢継ぎ早に言われ、些か面食らう。

良くも悪くも怪我に鈍い護衛士の中にいて、怪我の心配をされるのは久しぶりだった。

一護や夏梨が心配してくることはあったが、そもそも怪我をするよ

うなへマ自体が稀だ。
だから、本当に面食らった。

惣右介が、頭を下げた時には。

「ごめん！」

「……どうしたんだ？」

疑問をそのまま口にすれば、惣右介は更に頭を低くした。

「だって、冬獅郎が逃げろって言うてくれたのに、上手く逃げられなかったから……だから、俺のせいで冬獅郎が……」
「思いがけない言いように、目を見開く。
そつえば、昨日も同じくことを言われたのだった。」

「言つたら、お前のせいじゃないって」
努めて平静を装う。

今ここで言葉を間違ふことだけはできないのだと、強く思った。

「護衛士はこつという仕事なんだ。このぐらいの怪我は大したことじゃねえし、そもそも怪我なんて自業自得だ」
だから。

そつ言つて、浅く息を吸う。

「お前が謝ることじゃねえよ。初めてあんな虚に会つたら、動けなくなるのは当たり前だ」

「冬獅郎……」

少し視線を動かせば、じつと見つめてくる夏梨と視線が重なった。

「だからもう謝るな。……いいな？ 惣右介」

その瞬間、惣右介の肩がびくりと揺れた。

どうしたと問うより早く、惣右介が勢いよく顔を上げる。

「名前……」

「名前？」

「冬獅郎、俺の名前初めて呼んでくれた！」

「……そうだったか？」

実際、全く覚えはなかった。

無意識のうちにそれさえ拒んでいたとしたら……それは、全く大人気ない。

「悪い。全く覚えてない」

がくりとうなだれた惣右介の表情は、これまでのどんなものよりも明るい。

それを見た夏梨は、ほっと息をつく。

この調子なら、何とかなるかもしれない。

ずっと案じていたのは、何も夏梨だけではなかった。

桐生も、そして一護も、ずっと心配していた。

明日、王宮へ戻ったら、真っ先に報告しよう。

そう心に決めた夏梨は、他の生徒と談笑する冬獅郎を見て微笑んだ。

S09 萌ゆる草々 後篇(後書き)

タイトル日本語訳は「はじめの一步」

冬獅郎が色々乗り越える、きっかけの話でした。

ここからも色々あったでしょうけど、一番のきっかけがこれかな。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 0 茜雲 前篇（前書き）

夏梨が巡察使になってからの話です。

S 1 0 茜雲 前篇

World spread

誓いの果てに見えるものを
明と信じて進むのは
未来の糸を縫うかのよう

戸惑う心は悲しみを知らず
導の笛が胸に転ぶ
寄る辺とするのは記憶の声

広い世界に一人でいて
知らないことを知って歩いて
ただ前へ進む言葉を受けて
そうして私はどこへ行くのか

この手に握る刃の先を
私以外に向けないこと
それは誓いと戒めのため

ここにある意味を忘れないため

訪れた東州の街は、驚くほど賑やかだった。
雑踏に紛れてしまえば、巡察使を示す印章が染め抜かれた外套に向

けられる視線も気にならなくなる。
人混みを縫って駆け出すと、喧騒が心地好く耳にこだました。

巡察使になって、もう5年が経つ。

とはいえ、研修期間を終えた先月、ようやく正式な巡察使になれたばかりだけれど。

正式に巡察使に任命されて、担当地域として割り振られたのは、東州の州都を中心とした区域だった。

「ここは、凜や一心……それに、私が巡察使を務めたところじゃ。祖母の声が、耳によみがえる。」

「ここは治安も良い。最初の土地としては、よい場所じゃろうて。」

前任者から引き継ぎを受けて、この町へ来るのは初めて。
本当に治安のよい、明るい土地だ。

「お帰り。どうだった？」

「ただいま。……うん。頑張れそう」

出迎えてくれた桜さんにそう言えば、彼女は優しくほほ笑んだ。

「そう。さ、着替えてらっしゃい。もうすぐ夕飯よ」

「はい」

王土は、5つの州からなる。

そのうちの一つが、靈王の住む王都のある中央州。

そして残りの四つが、北州・東州・南州・西州。

桜さんは東州に置かれた離宮の離宮長と、そして東州の州長を兼任している。

東州の担当になった私は、この離宮を拠点に生活することになった。

その日から、あちこちを巡った。

任された地域は、他の巡察使より狭いとはいえ十分広い。

日帰りでいけないところも、もちろんある。

馬を遣ったり、ときには虚に乗ったりして、あちらこちらを巡るうちに、世界の広さを実感するようになった。

山に広がる棚田、平原をうねるように流れる大河、打ち物が名産の町では朝から晩まで高い音が鳴り響いている。

地域が変われば文化が変わる。

南方の街では賑やかに行われる葬儀が、北方の町ではしめやかに営まれている。

それらすべてが物珍しく、そして不思議だった。

現世にいたならば、こんな発見をすることはなかったのだろう。

現世にいたら、私は何をしていたんだろうか。

「巡察使様でいらつしやいますか？」

呼びとめられ、振り返れば、小さな子供を抱いた女性が立っていた。

「はい。何か御用ですか？」

「あの……子供の、扶養制度のことなんですけれど、今よろしいでしょうか」

「はい。詳しく聞かせてください」

しばらく話をし、書類にまとめる。

昨年から変わった税制がわかりづらいと言われたのには、少し傷ついた。

見習いをしていたときに、少しだけかわった制度だった。

「わかりました。確かに、陛下に奏上いたします」

「お願いいたします」

ぺこりと頭を下げた女性と、そして腕の中の子供に手を振って、その場を去る。

懐に入れた書類は、少し重かった。

巡察使の仕事は、多岐にわたる。

一番多いのが、こうしてあちらこちらを回っているんな声を集めること。

次に多いのが、中央の声を伝えること。

災害地へ派遣された官吏を指揮することもあるし、工事が不正なく行われているか確かめることも仕事の一つ。

一つ一つがたくさんの人たちの生活に深く関わるから、責任は大きい。

それでも、楽しかった。

役目を持つことが、こんなに楽しいことだとは思わなかった。

「ただいまっ。一兄！」

「おー、お帰り」

三カ月一度、“三月の会”という会議がある。

巡察使や、離宮で暮らしている王族がみんな王宮に集まり、そして自分の見聞きしたことを報告する会議だ。

「はい、これ。今回分の資料」

「わかった。見とく……どうだ？ 慣れたか？」

案じるように見てくる一兄には、もう苦笑するしかない。

いつまでたっても心配ばっかりしてるんだから。

「だーいじょうぶだって。ちゃんとやってるから。それより、一兄こそ大丈夫なの？ また礼部ともめたんでしょ？」

「誰から聞いたんだ、全く」

顔をしかめた一兄に手を振って、私はその部屋を後にした。

仕事の話は、今はもういいだろう。

でも、こうするたびにやっぱり思うんだ。

もし私達が現世にいたままなら、私達は今頃何をしていたんだろう。つて。

この間、年を数えて驚いた。

もう、40歳を越えていた。

現世にいたら、結婚でもしていたんだろうか。

大学には行ったのか、どんなところに就職したのか。

今の私からは、あまりにも遠くて。

「……夏梨？」

「あー、ごめんごめん。何の話だっけ」

街で千亜と待ち合わせて、話している途中だった。

久しぶりの休みが、ちょうど学校の休みと重なっていたんだった。

「……何か、気になることでもあったのか？」

案じるような視線に、首を横に振る。

こんなこと、相談しても困らせるだけだ。

「大したことじゃないよ。大丈夫」

「嘘ついてるかどうかわからない、すぐにわかるんだけど」
珍しくおどけた言い方に、少し驚いた。

四角四面の性格で、学校でも優等生な千亜は、実際話していても少し堅苦しいきらいがある。

それなのに、こんなことを言うなんて。

「私でよかったら、聞かせてほしい。仕事のことじゃないんだろう？」

引き方もうまい。

こんな話術、一体だれから教わるんだろう。

話してみれば、何か変わるかもしれない。

ふと、そう思った。

「……現世にあのままいたら、今頃私何してたんだろうなって」
「っ……」

さすがに、予想外だったよね。

「それだけなの。だから、話変え」

「夏梨は夏梨だ」

思いがけず強く言われ、次の言葉を呑みこんだ。

「千亜？」

「現世にいても、夏梨は夏梨だ。きっと、何か誇りを持って仕事をしているはず。夏梨だけじゃない。他の家族……東宮様だって、きっと」

「千亜……」

「現世のことはよく知らないが……広い所なんだろう？ そんなに広いところで、たくさんの方がいるんなら、夏梨が誇りを持てる仕事があつとあるはず。違つたらどうか」

真摯な言葉に、思わずぐつときた。

まじめな表情が似合う人は、本当に得だと思う。

「　　そうだね。うん……ありがとう、千亜」

S 1 0 茜雲 前篇（後書き）

タイトル日本語訳は「広がる世界」

王宮の外に出た夏梨が、いろんなことを見ていく中で、どんなことを思うのか。

そんなことを書きます。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 0 茜雲 中篇(前書き)

9 4 話の数カ月後から始まります。

S 1 0 茜雲 中篇

s m a l l m e

「しまった……………」

見渡す限り、人家がない。

「道に迷った……………」

返事をする人がないのはわかっていても、思わず呟いてしまう。

初めて来る方だつてのに、地図の確認をよくしなかったのがしつかり裏目に出たみたいだ。

山の位置と地図を見比べ、霊庄で王都の方向を探り、おおよその位置を把握する。

「遠いなあ……………」

目的地には近付いているが、どうやら日暮れまでにたどり着くのは難しそうだ。

何度確認しても、あたりに人家はない。

手早く荷物の中身を確認すれば、携帯食と水と火口、薄い毛布と天幕が見つかった。

天幕を張るのに使える木も、あたりに生えている。

「……………野宿するしか、ないよねえ」

小さく呟けば、乗っていた馬が嘶いた。

巡察使は、本当に何でもする。

だから野営なんてのはお手の物。

研修期間中に何度か使った野営用の道具を、何とか組み立てる。一人で使うのは、そういうえばこれが初めてだ。

旅籠に泊まるのを嫌って、わざわざ野宿を選ぶ巡察使も多い。それも楽しそうでいいなーって言ったら、桐生と冬獅郎と凜姉と一兄にすごい剣幕で叱られたんだっけ。

そんなに心配するくらいなら、巡察使になる前に反対しろっての。

一人用の天幕は、寝るときに使えばいいだろう。それまでは、夕飯の支度だ。

手早く鬼道で火をおこし、火口に、そして集めた細枝に火を移す。思いのほか強く上がった炎に、馬が驚いて逃げようとした。慌てて太い木につなぎ直し、火が落ちつくのを待つ。

安定して燃えて来たことを確かめると、馬を川へ連れて行った。

水を飲ませている間、川の中に魚がいることに気づいた。

携帯食だけでは、いささか味気ない。

塩は確か持っていたはずだ。

さつとあたりを見渡すが、やっぱり人影はない。

「あんだ、黙っててよ」

馬に一声かけると、裸足になって水の中へ入った。

もうすぐ夏が来る。

冷たい水が心地いい。

上手く魚を一匹捕まえる頃には、だいぶ日が暮れかかっていた。

我ながら、手づかみでよく獲れたものだ。

感心しながら、手早く夕飯の用意をする。

時間が立ちすぎたせいか、薪が既に尽きかかっていたのには焦った。慌てて薪をくべ、火が強くなるのを待つ。漸く湯が沸き、魚に火が通ったころには、すでに日が落ちていた。

「うまい」

自分で獲ったからか、おなかが減っていたからか、簡単に塩味をつけただけなのにその魚はおいしかった。

確か、現世ではニジマスと呼ばれていたはずの魚。

いつの間にか魚もさばけるようになっていた遊子が、この時期によく食卓に出していた。

ふとそんなことを思い出し、思わず苦笑した。

今でも、そんなことが身体に染みついている。

流し込むように携帯食を食べきって、沸かした湯で茶を入れた。

川遊びで冷え切った手足が温まってきたのを感じて、薪をくべるのをやめる。

昨日までの書類を検分し、今日の分につけたところで、火が尽きた。

仕事をあきらめ、天幕に入ろうとする。

「え」

思わず声を上げるほどに、その景色に驚いた。

「うっそお」

頭上に広がっていたのは、ありきたりな言い方だけど、満天の星空だった。

周りに人家が無いせいで、街なら見えないような暗い星さえ見える。全く暗くない夜空が、遠く果てまで広がっている。

ずっとずっと先、山の稜線にかき消されるまで、光の帯はひたすら伸びていった。

一瞬よぎった光線は、流れ星だろうか。

願い事すればよかったな。

そんなことを思って、願い事って何だろうって思った。

わからない。

仕事がつまくいきますように、とか、みんなが元気に長生きしますように、とか、そんなことしか思いつかない。

ありきたりだなあ……。

寝るのをやめて、ぼんやり空を眺めていて。

そうして、異変に気付いた。

「あー、おー……」

“あ”だったか、“お”だったか、そんな星座があったはずだ。

「おー、おー……オリオン！」

突然叫んだせいで馬が驚いているが、構うもんか。

オリオン座っていう星座があったはずだ。

あれ？ でもあれは冬の星座か？

ぐるぐる考え込んで、空のどこを探しても、見慣れた星の並びはどこにもない。

もともと詳しい方じゃなかったけれど、それでも、ここが現世とは違う星の並びなんだって気づいた。

そうか。

ここは、現世じゃないんだ。

ずっと、心のどこかで比べていた。

現世だったら、どうだったんだろうか。

今頃、私は何をしていたんだろう。

今更どうにもならないって、わかっていたはずなのに。

眠れそうになかった。

眠るのは、どうにも惜しい気がした。

毛布を天幕から引つ張り出し、横になって空を見上げる。

耳に入ってくるのは、馬が地面を掻く音と、川のせせらぎと、どこか遠くで獣が蠢く音。

そんな何もないところにおいて、ひどく自分が小さいと思った。

「状況、できすぎてるっての」

こんな何にもないところに放り出されて、何も思わずにはいられない。

そんなに感受性は鈍くない。

ずっと前、小学校の低学年だったところに、家族でキャンプに行った。

あの時は、4人で星を見た。

星座なんて誰も詳しく知らなかったけど、それでも単純にきれいだ

と思った。

今は、そう思えなかった。

一人で見ているからか、あの頃よりも色んなことを知ったからか、単純にきれいだと思えなかった。

雑念がどうのって言える程度じゃない。
ぐるぐるぐるぐる、いろんな思いが渦巻いて。

いつそどうでもよくなった。

そう、多分。

今は何でもどうでもいいんだと思う。
投げやりな思考だと言われれば、それまでだけど。
ぐちゃぐちゃ考えるのは、性に合わない。

もういいや。

そう思った瞬間、ふいに眠気が襲ってきた。
なんとか天幕に入り込み、護身用に斬魄刀を握り締めた瞬間、記憶が途切れた。

S 1 0 茜雲 中篇（後書き）

タイトル日本語訳は「小さな自分」

仕事中に川遊びするとか、意外と野宿を楽しんでいるとか、いかにも彼女がやりそうなことじゃないかな、と……はい、ごめんなさい。

そんな中でもふと色んなことを思ったり、なんだかんだで役目から離れてものを考えられないあたりは一護に似ているのかもしれない。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 0 茜雲 後篇(前書き)

95話の翌朝から始まります。

S 1 0 茜雲 後篇

I l i v e i n h e r e

「いつてえ」

地面に寝転がっていたせいで、体のあちこちが痛い。伸びをしてもいたい、歩いても痛い。

……馬に乗ったらきつともっと痛い。

うんざりしたように馬を睨めば、軽くいなされた。

「……覚えとけよ」

わかるはずもないのに馬に言い捨て、川へと連れて行く。

水を飲ませている間に顔を洗い、水筒から水を飲んだ。

携帯食で簡単に朝食を済ませ、天幕を片づける。

汚れた毛布をはたき、土ぼこりがある程度落としてからたたむ。

火が消えていることを確認し、馬へまたがった。

やっぱり身体は痛いけど、早く行かなきゃ今日中に州都へ戻れない。

そうなれば、いくらなんでも心配されるだろう。

桜さんに心配されるだけならともかく、一兄達に知られたらことだ。

勢いよく馬を駆り、目的の町にたどり着く。

何とか仕事を終えて日が暮れる寸前に州都へ滑り込むと、疲れた馬が不満そうに息を吐いた。

「……あなた、そのため息のつもり？」

そう言つと、馬はまるでそっぽを向くように首を振る。

「まあいいけど」

きつと口がきけたら、この馬は愚痴ばかり言うだろう。

妙な自信があるのは、こき使ったことを自覚しているからだけ。

そんなことを考えながら厩へ連れて行き、飼い葉と水をやれば、嬉しそうにいなないた。

「現金な奴」

そう呟き、部屋へ戻る。

綺麗に整えられた部屋が、昨夜の風景を思い出すと不思議に映った。

夕飯前に風呂に入り、さっぱりして着替える。

温かい夕食を桜さんと食べ、昨日のちよつとした冒険談を話した。

もちろん、口止めはしっかりして。

最初は驚かれたけど、途中から、特に魚を捕まえるあたりでずいぶん笑われた。

後から思い出してみれば、自分でもこっけいな話だと思う。

巡察使が、野営はともかく川で魚を獲るなんて話、聞いたことがない。

そう言うと、桜さんは首を横へ振った。

「あら、でも言わないだけでみんなしているかもしれないわよ?」

「どうかな」

自分はともかく、他の巡察使達がそんなことをするとは思えない。

「だって、うちの息子とか、いかにもやりそうな感じしない? 夜

一にそっくりだもの」

「桜さん。そう言われると反応に困る」

確かに桜さんの言うとおり、桜さんの息子の春月しゅんげつは夜一さんにそっくりだ。

奔放なところとか、特に。

「だってそうじゃない？ 二人とも、全く後先考えないんだもの。こっちがひやひやしてばっかりだわ」

うんざりしたように言う桜さんに苦笑する。

春月はともかく、夜一さんに言いたい放題言える人はそんなにいないんじゃないかなあ。

「ま、そんなこと言ったら一兄もだよ。現世にいた頃なんかね、しよっちゅう喧嘩して怪我して帰ってくるんだ」

「ええ？」

「代行やってた時なんてさ、もつと大怪我して帰ってきたことがあるし。何にも知らないで心配する方の気持ちにもなれっての」

愚痴っぽく呟けば、桜さんは笑った。

「でも、男の子なんてそんなもんじゃない？ 春月だって、しよっちゅう怪我して帰ってくるのよ。今でも」
きよとんとして、顔を上げる。

その反応に驚いたのか、桜さんは続けて話した。

「あら、聞いてないの？ あの子、北の担当になってから怪我ばかりなのよ」

「……聞いてない」

誰だ黙ってたやつ。

不満が顔に出たのか、桜さんはそのまま話してくれた。

「北が、割と治安が悪いのは知っているでしょう？」

無言で頷く。

山がちの北は、貧困のせいと比較的治安が悪い。

そうは言っても、安全に旅ができる程度ではあるけど。

訓練を積んだ巡察使が怪我をするようなことはないはずだ。

「治安の悪さで怪我をしたって訳じゃないのよ。ただ、放棄された耕地や牧場が多いでしょ？ 放棄されたり、管理の荒い牧場から豚

とか牛とか山羊が逃げ出して、同じような耕地に入り込む。それを狙って」

「山から熊が下りてくる？」

「大正解。熊だけじゃなくて、猪とか狼もね。知らずに野営して、ひどい目にあつたらしいわ」

「うえー」

そういえば、昨日も遠くに獣の気配がした。

背を無防備にしないように、木にもたれて眠るのが鉄則なのに、昨日は横になって眠ったっけ。

今更思い出し、ぞつとした。

朝まで一度も起きないほど、深い眠りだったのに。

「ということ、野営するときは十分気をつけなさいね。猪なんか荒らすせいで、山道だと崩れやすいところもあるみたいだから」
すっかりくぎを刺されて、こんな話を聞いた後では、頷くしかない。そのままいくつか注意と言つ名の説教を食らい、何とか部屋へ逃げ帰った。

次の日、久し振りに州都を見て回った。

州の中心に位置する分、巡察使がわざわざ見回ることはあまりない。今回も3カ月ぶり、そして、前々から気になっていたあるものが目に付いた。

「すみません。あの、この笛って何ですか？」

小さな商店の店先にかげられた、現世で言うホイッスルに近い形状の笛。

どこにでもありそうなものだけど、何が目に付くってそれが橙色をしているってこと。

街のほとんどの人が首からかけているだけに、それは余計に目につ

く。

「あー、これね。お前さん、知らないのかい？ こりゃあ命の笛だよ」

「命の笛？」
なんじゃそりゃ。

新手的まじないか何かだろうか。

怪訝そうな表情をすれば、同じ表情で返された。

「本当に知らないのかい？ 東宮様のご指示で売っているものなんだが……お前さん、旅の人なのか？」

旅の人。うん、それはあながち間違っていないよ。でもね。

一兄。あんたいつたいなんの指示を出したんだ。

店番の女性はしばらくぶつぶつと呟いていたが、やがて説明を始めた。

「命の笛つてのはね、このあたりは、大きな河が多いだろう？ それで、たまあに氾濫することがあるのさ。それでどこかに取り残されたときに、この笛で助けを呼ぶんだよ」

「……だから、命の笛？」

「そうさ。前の大きな洪水で、いっぱい死んだろう。もうそんなことにしちやいかんつて、東宮様が笛を持たせるように桜様に指示を下されたんだ。これがあつたら、どこに人がいるかは、わかりやすくなるだろう？」

「そう、ですね」
言葉が出なかった。

こんな仕組みは、確か現世にあつたはず。

一兄はそれを真似したんだろう。

私は、なにも思いつかなかった。

あの洪水の後、一兄が必死になって対策をしているのは知ってる。

頼まれて、手伝ったこともある。
それでも、こんなことは思いつかなかった。

「とはいえ、名前も色も、あたしが勝手につけたんだけどねえ。
東宮様は、橙の髪をしていらっしやるそうだからさ。せつかくだから、あやかっっておこうってね」

店番の言葉は、ぼんやりとしか入ってこない。
ただ、一兄がどんなに慕われているか。
そればかりがよくわかった。

どうやってその場を離れたのかは、よく覚えていない。
ふらふらと街を歩いて、街外れまで来て、そこでようやく我に返った。

「命の笛、か」
いいこと聞いた、と思う。

一兄は、こんな風にこの地に根付いている。
ここで生きていくために、たくさんの人たちと生きていくために、
必死になっている。
私は、どうなんだろう。

私が巡察使としているのは、ここで生きていくためなんだろうか。

違う。

私が巡察使になったのは、ただ一兄達の力になりたかったからだ。
誰か、今日の前にいる人を護りたかったからじゃない。

私は、ここで生きていくためだなんて、これっぽっちも思ったことがなかった。

ああ、だめだ。

巡察使に一番大事な気持ち、全く無かった。

ここで、王土の民として、王族として生きていくこと。そのために、巡察使であること。これっぽっちも、考えたことが無かった。

王族の血を引き、王宮で暮らしている以上、王族として生きるのが責務だ。役割を果たせ、夏梨。一兄はそう言ったのに、私はすっかり忘れていた。

店で買った笛が、胸元で揺れる。

これは、誓いの証だ。

「ここで、生きるよ。ここが、私の生きる場所だから」

誰が聞いていたわけでもない、小さな小さな、でも確かな誓い。それが、私が巡察使である意味。

S 1 0 茜雲 後篇（後書き）

タイトル日本語訳は「ここが私の生きる場所」

外伝の主人公つて、かなり夏梨率が高い気がします。

S 0 1 一護 S 0 2 桐生 S 0 3 一心 S 0 4 遊子 S 0 5 夏梨
S 0 6 夏梨 S 0 7 夜一 S 0 8 一護 S 0 9 冬獅郎 S 1 0 夏梨
あ、やっぱり夏梨が一番多い（笑）

ちらほらでてくる洪水の話。

そのうち、しっかり書きますね。

次話からいよいよ終章です。

それでは感想などお待ちしております。

gear (前書き)

終章の始まりです。

g e a r

剣をその手に 仲間をその背に

強い絆を枷として

世界を救いし少年の

生き行くさだめは 何処いづこにあるか

時を刻む鋭き刃は かの手に握らる刀と違たがい

刃を知らぬ若芽の萌ゆる 尊き彼の地を衛する如し

その手に握らる刀の先は 護らる者の為に向きつ

誓いの意味を問うことに 虚無と拒絶を見ゆるが先か

誓いの意味の遠く先に 新たな希望を見ゆるが先か

全ては今知ることには非ず

全ての終わりに知るが正し

喪われた齒車が 振り子を離れて何を思い

何を見るかは誰も知らねど

欠けた振り子の行き着く先は 赤子においても知らざるはなし

欠けた振り子の刻むものは 狂った時の他に非ず

狂った時が正しきになるは 理の先に見ゆる真か

g e a r (後書き)

タイトル日本語訳は「歯車」

さあ、終章の幕開けです。

a
m
a
n
s
t
a
n
d
s

o
n
t
o
p
(前書き)

再会から3年後の話です。

「 靈王陛下」

無言で振り返れば、閉ざされた扉の向こうに下官の気配を感じた。数刻前までこの呼びかけに応えていた女性の声は、既に亡い。

このことは、既に国中に知らされたはずだった。

だとしたら、この声と呼ぶのは。

返事をすれば、引き返せない。

躊躇うように視線を泳がせれば、家族の姿が目に入った。

祖母の最期に一目会おうと、国中から集まってきたたくさん家族。今はもう、すすり泣く声さえ聞こえなかった。

その家族は、みんな俺を見ている。

どの瞳にも、案じる色はない。

こんなにいるんだ、誰か一人ぐらい心配してくれたっていいじゃないか。

真っ赤な目で、笑いかけるなよ。

虚勢さえ張れない、弱い自分が悲鳴を上げる。

思わず逸らした視線の先で、凜と目が合った。負けた、と思った。

惚れた弱みか、この視線にはめっぼう弱い。

たじろいだ俺を見た凜が、静かに頷いた。

大丈夫、と。

音にならない、声が聞こえた。

「陛下？」

返事がないのをいぶかしんだのだろう。

もう一度、下官の聲がした。

刻が、来たのだ。

深く深く、息を吸う。

「入室を許す。申し述べよ」

しなくてはならないことが、数えきれないほどある。

それから、ひっきりなしに官吏の訪いを受けた。

先王の葬儀のこと、即位式のこと、即位にあたって正宮へ住まいを移すこと。

ほとんどは形式的なものばかりで、改めて指示が必要なものはあまりなかった。

ただ、それらの中で唯一気になったのが、尸魂界へ勅使を出すことだった。

知らせを受けたあいつらは、一体何を思うんだろう。
そんな他人事のような疑問が、ふと脳裏をよぎった。

「統治者が変わるので、正式な勅使を出さねばなりません」
丁寧な口調で述べた尚書令は、そうしていくつかの案を提示した。
護衛士の席官、もしくは俺自身の近親者を勅使として立てること。
他にもあったが、ここだけはわがままを通じたかった。

「それでは、夏梨巡察使を勅使に」

儀礼的なもので、四十六室や五大貴族の当主、そして総隊長にしか
直接会うことはないはずだ。

それでも、夏梨と、その護衛として桐生や冬獅郎達に頼みたかった。
「では、そのように手配いたします」

尚書令は余り関心を示さず、次の話題へと変えた。
あるいは、気を使ってくれたのかもしれない。

他にもいくつかのことを決め、退出の礼をとった尚書令を見送る。

一人になった部屋で、小さくため息をついた。

凜は今、部屋にいない。

一度東宮府に戻って、下官に指示を出しているはずだ。

陛下のご遺体は、既に殯の宮に移された後。

王夫は荷物の整理をするからと、自室に籠っている。

ため息に反応する人物は、いないはずだった。

「陛下。少し、お時間をいただけますか」

思いがけない方向からかけられた声に、驚いて振り返る。

「一貴、か？」

窓の外へ声をかければ、窓の端に僅かに衣が見えた。

正式に東宮宣下を受けた長男が、気に入って着ている衣の色。

「はい。このような所から、申し訳ありません」

「それはいいが……どうした？ 何か、あったか」

何の理由もなく、真面目すぎるきらいのある一貴がこんなことをするとは思えなかった。

俺でさえ、霊王の宮でこんな振る舞いをしたことはない。

「陛下は……その、父上は、怖くないのですか？」

呼び方が変わったことに、戸惑う。

もう二度と、そんな呼び方をされることはないと思っていた。

親父だって、祖母のことを親として呼んだことはなかったのに。

この真面目な一貴が、どうしてそんな呼び方をするのか。

そればかりが、気になった。

「怖い？」

「帝位にお就きになられることが、です」

一貴が何を思っただけでそう問うてきたのかはわからない。

ただ、その問いかけに、数刻前の会話がよみがえった。

他ならぬ、先の霊王との 祖母との、最後の会話が。

「怖いか、一護」

一目会おうと国中から集まった家族を外させ、二人きりになったところで、祖母はそう言った。

嘘をつくことを許さない瞳に、ただ無言で頷くしかなかった。

「……そうであるうな」

小さく呟いた祖母に、静かに口を開く。

「陛下は、怖くなかったのですか？」

何かの行事で家族が全員揃う度、祖母を尊敬したものだ。誰かが祖母を霊王として、一族の長として戴き、疑い無く敬うその姿を見る度に。

親族だけでなく、それに仕える護衛士や下官、多くの官吏に数え切れないほどの民。

そして、王土以外に息づく全ての魂魄。

霊王は、その頂点に立つ。

全ての魂魄に責任を持つような、そんなことを目前にして、足が竦まないと言えば嘘だった。

そうして、思う。

この人は、どうやってその恐怖に打ち勝ったのだろうか。

その問いかけに、祖母はそっと微笑んだ。

「怖いぞ。今でも怖い。……でもな、逃げたところで始まらぬのじや」

どこともしれぬ中空を見つめている祖母は、それでもはつきりどこかを見つめていた。

それほどに、強い瞳だった。

「逃げるなよ、一護。立ち止まることも、泣くことも許さぬ」

そう言って、祖母は眠りについた。

廊下にいた家族を呼び戻す間、行き場をなくしたその言葉は、身の内でただ反響していた。

その言葉が、今すっかりと俺の中に根付いた。

「怖いさ。でもな、逃げたところで、始まらねえ」

一貴が驚いたように身じろぎしたのがわかる。

そう、逃げたところで、何も始まらない。

恐怖を捨てろ、前を見る。

進め、決して立ち止まるな。

退けば老いるぞ、臆せば死ぬぞ。

「だから、歩き続けるしかねえんだ」

a m a n s t a n d s o n t o p (後書き)

タイトル日本語訳は「天に立つ者」

本編の一護の出番は、ここで終わり(笑)

……というか登場人物ほぼ全てオリキャラという……
まあ、いいか。

次の話が、本編の終わりです。

f r i e n d , y o u - l i b e e t e r n a l (前書き)

98話の少し後の話です。

f r i e n d , y o u ' l l b e e t e r n a l

兄様から伝え聞いた知らせを持って、穿界門を駆けていく。

今開かれている隊首会で、恋次には知らされるはずだ。

あと、伝えるべきは。

膝に力を入れ、更に速度を上げて走り続けた。

白が基調の建物に窓から侵入すると、ちょうど目当ての人物の目の前に出た。

「 工作中済まぬな。今、よいか? 」

近づいてきているのは霊圧で察していたのだろう。

石田は、手近な紙に走り書きした文字を示した。

霊力のない人間のの前では、さすがに話しかけられない。

織姫と茶渡君も呼ぶかい?

頷けば、石田は内線を手を取った。

しばらく話した後、再び紙に書く。

三十分後、屋上

それに再び頷き、窓から外へ飛び出した。

一刻も早く伝えたいが、仕事は仕事だ、仕方がない。

そうして約束の時刻。

しっかり時間通りに集まった三人は、医者らしく白衣に身を包んで

いた。

「それで、急にどうしたんだい？」

「ああ……」

一瞬視線を泳がせたことをいぶかしんだのか、井上が首を傾げた。

「朽木さん？」

動揺した心を落ち着けようと、深く息を吸った。

言わなくては。

それが、私があ奴にしてやれる最後の

最後の、役目。

「……霊王陛下が、崩御なされたと」

漸く口にできたのは、自分でも情けなくなるほど小さな声だった。

三人が、驚きに目を見開くのを見る。

知らせは、もう一つある。

「東宮様が、ご即位なさるそうだ」

誰の目があるか分からない以上、こんな他人行儀な言い方しかできない。

あ奴は、怒るだろうか。

持って回った言い方。

その意味がはつきりと伝わった時、三人は一樣に目を伏せた。

単純に、喜ぶことはできないのだろう。

年齢に見合った落ち着きを得た三人は、言わずとも全ての意味を悟

っているはずだ。

それは、靈王になるということは。

“くろさきいちご”が喪われることと同義だ。

長い沈黙が続いた後、ようやく石田が口を開いた。

「……東宮が即位されることよりも、靈王陛下が亡くなったことの方が、今は重いな」

「そう、だな」

石田と共に会いに行った一護の祖母は、優しい人だった。

靈王とは思えぬほど、ごく普通の、優しい女性。

あの方が亡くなられたというのは、確かに単純に悲しい。

もう二度と会うことはないとわかっていても、それでも、もう一度会いたかった。

同じく、一護にも。

だがそれも、もう叶うまい。

「兄様が、先王陛下の御葬儀などで家を空けられるのだが……長い滞在になるため、親族の誰かを伴うことができるそうだ」
崩御と即位の報せと共に、兄様は一つ提案をした。

共に、行こうと。

「共に行くかと言って下さったのだが、断ろうと思っ」

井上は一瞬驚いた表情をしたが、すぐに泣き笑いの顔で頷いた。

察してくれたのだと、思う。

若し、付いて行ったとして、会うことができるのは“靈王陛下”だ。会いたいのは、そんな御人ではない。

あのときの、あの別れ方で、それが最後でいい。

もう、互いに覚悟はできている。

信じられないほど短い交わりが、これほどに長い縁をもたらすとは思わなかった。

ただ一つだけ願うとすれば、次の崩御の知らせを聞きたくないということだけだろうか。

多分、それで十分なのだと思う。

尸魂界に帰れば、もう喪を示す半旗があちらこちらに掲げられているだろう。

その旗が下げられ、即位を祝って王族を示す紋があちらこちらで掲げられた時、自分はまた何か違うことを思うのかもしれない。

それでも、その時は、その時だ。

もう二度と交わることがない、そうあってほしい道の先に、光が見えるのは気のせいではないだろう。

光の先へ、歩いていこうと思った。

立ち止まることは、自分たちには似合わないから。
歩き続けていこうと、思った。

f r i e n d , y o u ' l l b e e t e r n a l (後書き)

タイトル日本語訳は「仲間よ、永遠なれ」

本編の始まりはルキアの一人称だったので、同じくルキアの一人称で締めてみました。

長かった、なあ……

もっと後書きに書きたいことが多くなると思っていましたけど、案外そうでもないみたいです。

それでは、本当のエピローグへ。

peducibus (前書)

終章の終詩です。

pendulum

権を以て戦う者の 背後に庇うはかつての仲間

共に戦うことはなくとも 戦い続けるさだめは共に

掟の刃をその身に受け 誓いの鎖に絡めとられて

それでも前に希望を見つめ 進み続ける生き様は

彼の少年に教わりしもの

その手に握る責の重さを 分かつことは叶わずとも

覚悟の重みを知り尚立つは 共にあつた絆の為に

尊き立場に身をおけど 仲間とするに変わりはあらず

変わらぬ絆を共に携え 進みゆくことが互いの誓い

誓いは互いの枷にはならず 鎖となりし誓いの重みは

生き抜くための指針と望む

背負うは刀 背にもつは仲間

眼前に見る力の先は

平かを破る秩序の歪み

pendulums (後書き)

タイトル日本語訳は「振り子」

皆さまのご愛読のおかげで、無事に本編の完結を見ることができました。

本当に、本当にありがとうございます。

それでは、また明日。

感想などお待ちしております。

S 1 1 美しい人 前篇（前書き）

繋がる縁 後篇のしばらく前の話です。

S 1 1 美しい人 前篇

a n i m p o r t a n t t o p i c

「おい、一護ー？ お前どうしたんだよ、さっきから」

コンが声をかけるも、一護は寝台に突っ伏したまま一言も返さない。否、返せないのだ。

真っ赤な顔を見られれば、笑われるに決まっているのだから

「一護ーっ！ ちょっとあんた何なのよ！ 鬱陶しいんだけどっ！」

「そうですよ、一護さん。なにか悩みごとでもあれば相談に乗りますよ」

「……………」

…………… 応答なし。

ぐるみ4人は顔を見合わせると、最終手段に出た。

「うひゃっ!？」

一護は飛び上がって首や足の裏に張り付いたぬいぐるみをはじきとばした。

「てめっ何しやがる!」

「何ってくすぐったんだけど?」

しれっとりりんに戻された一護は、言葉もなくうなだれた。

布の力とは恐ろしいものである。

ただでさえ首や足の裏と言つくすぐりの急所とも言つべき場所を狙われ、その上4人はぐるみだ。

人の手よりも柔らかい布でくすぐられるほうが数倍効くというのは、

言うまでもないことである。

4人の策略で布団から引っぺがされた一護は、深くため息をついた。

「……………で、あんた何で部屋に帰ってくるなり布団に突っ伏したのよ」
数分後、一護はぐるみ4人に向かい合うように正座させられていた。
4人はあぐらをかいていたり、立っていたりとそれぞれである。

青年がぐるみ4人に叱られているかのようなその光景は、たとえ事情を知っているものでも噴き出さずにはいられないものだ。

もっとも、細かい事情まで知っていれば、それはそれで噴出さずにはいられないのだが。

「つまり、あんたはさつきまで正宮で陛下と王夫と特務の隊長と、それから尚書令に会っていたと」

「ああ」

「……………そこで、いいかげん結婚しないかと言われたんですね？」

「……………ああ」

「……………いきなりすぎて訳わかんないから一回帰りますって戻ってきたと」

「……………ああ」

りりんと蔵人に交互に確認され、一護はふいつと目をそらした。

その様子を見た4人は、一瞬目を見かわした後、一斉に笑いだす。

「ハハハハハハ！ バカじゃねえのお前！」

「あ、あんたさあ、今自分が何歳か自覚してる！？ 来年30よ！
？」

「いやはや、それにしても……………ずいぶんな話になりましたねえ」

「……………フッ」

コン、りりん、蔵人の三人はともかく、之芭にまで笑われた一護は、

言い訳がましく口を開いた。

「お前らなあ、16でこつち来て10年以上恋愛とかそういうの無縁だったのは知ってるだろ!？」

「知ってる。知ってるけどねえ……これじゃあ中学生以下よ？」

「うるせえ！ 大体突然すぎるのが悪いんだよ！」

「突然と言いましても、一護さんがなかなか動かないのを心配して陛下は声をかけてこられたのでしょうか？」

「……………」

ぬいぐるみのくせに、実態は丸薬のくせにどうしてこんなに弁がたつんだと一護は頭を抱えた。

話題がおかしな方向に転がっていることに気づいていないあたり、相当混乱しているのだろう。

一護はこんがらがった思考を振り切るように頭を強く降った。

それを見ていたりりんが、面白そうにつぶやく。

「ほんと、夏梨が学校でよかったわよね。昨日行ったばかりだもの。しばらくは帰ってこないわ」

びき、と音を立てて固まった一護を見て、りりんは満足そうに微笑んだ。

夏梨にこの一件がばれようものなら、いいように扱われるに決まっている。

その後、何とか4人を追い出した一護は、再び寝台に沈没した。

今回の一件は、完全に不意打ちだったと言っていい。

落ちついて状況を整理し始めた思考が、そう結論付ける。

数時間前の自分を思い出して、一護は低くうめき声を上げた。

数時間前、陛下から急の呼び出しを受けた為に急いで正宮へと向かっていた。

ここまでは、いつも通りだった。

霊王の私室にいたのが霊王と王夫だけでなかったことも、あまり無いとはいえ特に気にすることではない。

ただ、霊王と王夫、そして特務の隊長と尚書令という、国の上層に位置する四人が揃っているのを見て、何かあったのかと思った。何か、政治上の大きなことが。

確かに、あるにはあった。それも特大級。

席に着いた俺に茶を勧めたのち、こともあろうに陛下はこう言い放ったのだ。

「一護、お前もお年頃じゃの。誰ぞ、好きな娘でもおらぬのか？」と。

漫画みたくお茶を噴き出し、派手に噎せこんだのは仕方ねえだろ。今でもまだ肺が痛え。

「つか、他に言い方ねえのかよ。」

ど真ん中に直球で投げて来た陛下に噴き出したのは、俺だけじゃなかった。

他の三人も同じく噴き出し、どうやらツボに入ったらしい隊長はそのまま最後まで笑いつぱなしだった。

……それは、いい。

ただ、その直球発言をなんとかとりなそうとした尚書令が言いだし

たことが、痛かった。

「しかし、殿下には何としても婚姻していただかねばなりません。継嗣が必要ですから」

きつぱりとした口調で、尚書令は言い切った。

わかっていたこととはいえ、まだ先だと思っただけに、これは痛い。

「……好いておられる方がいらっしやり、先方もそう望まれるのであればその方とでも構いません。ですが、そうでないのならば、ご自分の立場をよくお考えになつたうえでお決めください」

「それは……相手を選べということですか？」

「そうは申しません。ただ、これも一つの策とお考えください。それは、選べということじゃねえんだろうか。」

策ということは、つまり政治的に役立てるということじゃねえんだろうか。

ずっと昔、現世にまだいたころに、親父が言っただけ。

「あつちに行けば、お前の自由になるものは何もない。……結婚も、お前の意志からは離れる。あつちに行けば確実に結婚しなくちゃならねえし、相手だつてこつちみてえに恋愛で決められるとは限らねえ」

「政略結婚つてやつか？」

「……まあ、似たようなもんだな」

何が違うんだと問い詰めたが、答えは得られなかった。ただ、本当に微妙な違いなんだと今ならわかる。

「九頭柳さんの娘か、祥瑛んところの誰かか……官吏か、うちの誰か、だよな」

祥瑛はまだ結婚してないし、その上一人っ子のはずだ。

もし蓮杖家からということになれば、祥瑛の従姉妹あたりになるの
だろうか。

九頭柳さんには娘が二人いたはず。

九頭柳家からということなら、そのどちらか……形式から考えて長
姫になるか、俺の年を考えて妹の方になるのか、それは九頭柳さん
に任せることになるのだろう。

後は、年の近い官吏から探すか、うちの誰かから決めるか。

「……んなこと言われたって、わかんねえよ」

現世にいた時はまだ、結婚なんて考える年じゃなかった。
それでも、こんな風になるとは思ってもなかった。

「……あいつら、どうしてんだろうな」

返事もないのに呟いたのは、どうしてだろう。

現世にいたころの仲間たちは、もう結婚したのだろうか。
幸せな、結婚を。

そうだったらいいと、願わずにはいられなかった。

自分も相手も望んでという形は、どうも今の俺からは遠いようだか
ら。

S 1 1 美しい人 前篇（後書き）

タイトル日本語訳は「大事な話」

さて、本編終わっての外伝一本目はこの話でしたーっ！
ちなみに、noteギャグ。のつもり。

活動報告にて今後の活動方針をお知らせしてあります。
ご一読くださいませ。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 1 美しい人 中篇（前書き）

101話の数日後から始まります。

S 1 1 美しい人 中篇

Do I fall in Love?

「はい、今日はここまでにしましょ」

「ありがとうございます」

真向いに座った凜さんに頭を下げれば、彼女は手を横へ振った。

「いいのよ。これも、私の仕事なんだし。一護君、覚え早いから、私だって楽しいわ」

「凜さんの教え方がいいからっすよ」

「また。お世辞言っても何も出ないわよ。じゃ、また明日ね」

ひらひらと手を振って出て行った凜さんを見送って、少し散らかっている机の上を見た。

分厚い法律の本を手に取り、本棚へと納める。

法律や経済、歴史。

その他為政者として必要な知識一切を教授してくれたのが、凜さんだった。

巡察使だった経験も生かして、各地の風土についてもいろいろと教えてくれる。

本当に、いい先生としか言いようのない人。

他にも数冊の本を棚へ戻して、あることに気づいた。

「あー、終わったの?」

部屋の隅で丸まっていたりんが、ぼてぼてと近寄ってきた。

「どうやら眠っていたらしく、目をこすっている。」

「あぁ……」

「一護さん? どうかしましたか?」

はつきりしない返事を不思議に思ったのか、上手に茶を淹れてくれた蔵人と之芭が、首を傾げている。それを見て、首を横へ振った。

「何でもねえよ。茶、ありがとな」

湯呑みを受け取って、もう一度本棚へ視線を戻す。

本の位置は、変わらなかった。

灯りを消し、寝台へと潜り込む。

りりん達も、布団の隅や椅子の上にそれぞれ居場所を見つけていた。普段なら、すぐに眠気に襲われるのに、今日ばかりはそうでなかった。

本棚の 戻した本の位置が、どうしても気になった。

もう、あんなに終わったんだな。

本棚の隅に本を戻して、気づいた。

大量にある本のほとんどは、既に学び終えた後だった。

それは、10年以上かけて来たことの証でもある。

だが、それ以上に。

もう、終わりなんだな。

凜さんにこうして教えてもらうのは、もうすぐ終わりだということだ。

惜しいと思った。

学ぶのは、内容の複雑さもあって大変だが、それでも楽しいのに。

視線だけ動かして本棚を見る。

部屋の反対側にあるために、暗い中では棚の輪郭さえ認められない。やっぱり、惜しいと思った。

だって、せっかく

せっかく？

がばつと飛び起き、布団の隅にいたコンを弾き飛ばす。軽い悲鳴が上がったが、それどころじゃない。

……………俺、今何考えた？

灯りが消えていて、よかつたと思う。

せつてえ、今、顔赤い。

翌日。

「はい、今日もおしまいね」

とんとん、と数枚の書類をまとめ、凜さんが席を立つ。

今日もいつも通り進んで、それだけ、終わりへと近付いた。

「あー……………そつすね。ありがとうございました」

何か別の話題でも見つけようとして失敗した、正確にいえば直前で日和った俺を、内心で殴り飛ばした。

なんでそこで日和る！

「あー、つてなあに？ 何か、質問でもあった？」

「いや、そういうことじゃ……………」

「そつ。じゃ、また明日ね」

「……ハイ」

僅かにうなだれた俺には気づかず、凜さんは部屋を出て行った。

なんで、何にも言えねえかなあ

小さくため息をついた俺をあざ笑うみてえにコンが軽くくしゃみをした。

それから、一週間ほどたった、ある日。

どうにか夏梨の襲来をやり過ごしてほっとしていた俺に、再び陛下から呼び出しがあった。

目に見えて固まった俺を見てか、コンがほくそ笑む。

「いつてらっしゃーっ……テメーこら一護！ 何しやがる！」

なんとなくムカついて放り投げれば、コンはちょうど開いていた引き出しに収まった。

「それで、考えたか？」

やっぱり予想通りの話題に、小さくため息をつく。

それでわかつたらしい陛下は、同じく小さなため息をついた。

「難しいのはわかるがのう……男らしくすぱっと決めぬか」

「男らしいという問題ではないと思います」

むっとして返せば、陛下は笑った。

「私なぞ悩みもせなんだが」

「……陛下は別でしょう」

呆れたように口を挟んだ尚書令は、そのまま話し続ける。

「陛下の兄上さまから打診があり、たった1日でお決めになったではありませんか」

「私と結婚するかせぬか、今ここで答えよ！」って乗りこまれた方の身にもなっってほしいな、全く」

王夫もまた呆れ口調で、それ以上に俺も呆れた。

「なんすか、それ」

思わず素の口調になったにも関わらず、誰も咎めない。それほど、呆れていた。

「好いておれば結婚すればよし、そうでないなら他に探すまで。それだけじゃ」

どういう理屈だそれは。

王夫は王夫で当時のことを思い出しているのか、遠い目で明後日の方向を向いている。

「反射で頷いたらそれで決定だったもんなあ……後から思い出しても、頷いたことが不思議で仕方がないよ」

「まあ、このお二人は特殊例でいらっしやいますから……殿下。私の意見を述べてもよろしいでしょうか」

居住まいを正した尚書令に向き直り、口を開く。

「立場を考えた上で、の続きですか？」

「ええ。殿下は尸魂界に縁深い方でいらっしやいますから、今更婚姻によつてつながりを強める必要はありません。むしろ、その方が関係をややこしくすることになるかと。官吏から選ぶことも、得策ではないと思います」

「相手が官吏を辞めなくてはならないから？」

「そうです。王夫のようにこの立場に満足するような方ならともかく、殿下の知っている官吏は良くも悪くも発展途上。これからどうなるとも知れぬ以上は、その者のためにも、殿下の為にもならないかと。ですから」

「もうやめとけ」

そのまま話し続けようとした尚書令を遮って、特務の隊長が口を開く。

「しゃべりすぎだ。お前のお節介は、男の沽券に関わるどころまで

ばっさりいくんだって、何度言ったらわかる」「
いつ制すればわからなかったので、正直遮ってくれたことにはほっ
とした。

それも、自分でするべきなんだろうけど。

あいにく、それだけの余裕はない。

「殿下」

静かに呼ばれ、隊長の方を向いた。

「お節介だとは重々承知しています。現世生まれのあなたには……
ご両親がごく普通の結婚をされたあなたには、重い話だということ
も承知しています。ですが」

「わかってます。……俺は、ここにいる以上はこのやり方に従っ
て生きます。多分、それが一番いい方法なんだろうから」

そこで耐えきれなくなって、視線を落とした。

長い間国を支えてきたこの兄妹には、えも言われぬ迫力がある。

「……だから、もう少しだけ時間を下さい」

S 1 1 美しい人 中篇（後書き）

タイトル日本語訳は「俺、恋に落ちてる?」

総隊長の師匠の妹がまさかの尚書令。

この人たちのことも、そのうち詳しく書きますね。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 1 美しい人 後篇(前書き)

102話の直後から始まります。

S 1 1 美しい人 後篇

Marital vows

部屋に戻って、ため息をついた。

少しの間に、かなり疲れた気がする。

今日は凜さんも来ないから、早いところ寝るか。
ふらふらと寝台に行けば、先客がいた。

「……コン」

ぐーすかいびきをかいているコンは、この上なく幸せそうな顔を
して寝てやがる。

何の夢を見ているんだか。

「……おい、起きろ」

起きねえ。

投げようとした瞬間、鼻ちようちんがはじけた。

「せつかくいい夢見てたのに、なんで起こすんだ」

「あのな、ここは俺が寝るところだ。とつとどけ」

「わかったよ……なあ、一護」

立ちあがったコンは、また腰を下ろした。

あぐらをかいて、きつい視線で睨んでくる。

「なんだ」

全く、思いもなかった。

まさかコンに言われるだなんて。

「……お前、凜さんが好きなんだろ？」

見事に固まった俺を見て、コンは確信したようだった。

「な、なな、おまつ馬鹿じゃねえの!？」

自分でも情けないことに、見事に声がひっくり返る。

「だよなー。やっぱりそうだよなー」

したり顔のコンに、何も言い返せない。

「この間から、おかしいとは思ってたんだよな。……で？」

「で？」

で、ってなんだ。でって。

「陛下とかから言われてるんだろ？ いい加減結婚しろって。凜さんに言わねーのか？」

「いつ言えるわけねえだろうが！」

情けなく再びひっくり返った声に、自分で慌てた。

頼む、落ちつけ俺。

「じゃーどうするんだ？ 誰か、他に言われた人と結婚すんのか？」

「……それは……」

「お前さ、本当に馬鹿だな」

「あ？」

自覚していても、コンに言われたら腹が立つのは仕方ねえと思う。何で、こんな風に言われなくちゃなんねえんだ。

「馬鹿じゃねえかよ。当たって砕けろって言葉、知らねえのか？」

「……」

それは、どういう意味だ。

「他の人と結婚するにしてもだ、お前、ここで何にもしなかったら後で後悔するだけだぜ？」

「っ……」

確かに、それは事実だ。

だけど、けどだ。

「……言っただけだったら、それこそ後腐れするじゃねえか」

「中学生かよ」

「悪いか」

自覚しているだけに、反論がすぐに出た。それも、情けねえっちな情けねえが。

「ま、お前のことだから、別にいいけどな」

コンはそう言って寝台から飛び降りた。

悔しいことに、その後ろ姿は大きい。

「腹くくつたら教えるよー」

最後にしっかりとくぎを刺して、コンは部屋を出て行った。

部屋に取り残された俺は、そのまま寝台に突っ伏するしかない。

わかんねえよ。こんなの。

愛だの恋だの、そういうのは、こんな風に薄暗く胸の内に渦巻くものなのだろうか。

それともこれは、やっぱり状況が特殊だからなのだろうか。

わかんねえ。

「……………はあ」

結局一睡もできねえってどういうことだ。

しっかりと睡眠不足になったために、コンにはげらげら笑われるし。超の付く低空飛行の気分は、夕方になってますます高度を下げた。あと少いで、また凜さんが来る。

一晩考えたことが、未だに頭の中をぐるぐると回っていた。

そもそも、恋愛の段階すっ飛ばして結婚ってというのが間違いな

んだ。

結論としてはそこに落ち着いたわけで、結局腹はくくれてない。まさか三十路を目前にこんなはじめての叫びをすることになるうとは思わなかったけど。

恋愛、してえ。

そうして、もう一つ思ったことがある。

もし、もし、凜さんに結婚を申し込んだとして、だ。

それは、多分他の人よりも大きな意味がある。

好きとか愛してるとか、そういうのを抜いたとしても。

凜さんは先王の娘で、周りからの信頼も厚い。

彼女と結婚すれば、いろいろと有利になる事柄が出てくるだろう。それは、凜さんにとっても。

東宮妃、いずれは靈王妃としての地位は確実だもんな。

もし彼女がそつちの理由で俺との結婚を承諾して、俺はそれでもいいのか？

わかんねえ。

「それじゃ、今日はここまでね」

「はい、ありがとございました……あ、あの」

よっしょく頑張った俺！

……っつて、あれ？

この後どうするんだ俺？

「うん？」

そんな笑顔で振り向かないでくださいー！

ただでさえこんがらがってる思考は、いっそ見事にそのまま固形物になった。

言えない。絶対言えねえ！

ただ、その瞬間に思ったのが、こともあるつにコンの言葉だった。

当たって砕けろって言葉、知らねえのか？

……知らねえわけ、ねえだろうが。俺は国語が一番得意なんだ。

微妙にずれていると自覚しながらも、それでも、多分腹くくれた。

「あの、さ」

決死の思いで口を開く。

すでに口の中はからからに乾いていた。

落ち着け、俺。

「うん？」

「あの、さ。……凜さんって好きな人とか、いるの？」

直前で回れ右して日和った自分を殴りたくなった。

ちよっと待て俺。

言いたいことはそれじゃねーだろ。

「なぁに突然」

苦笑した凜に、胃がバタつく。

落ち着け俺。

頼むから。

つか何でこれ戦う時みて に上手く気持ちの整理できねーの？
あれの方が百倍マシな気がしてきた。

「あ、あのさ」

俺さっきからそれしか言ってるねー！

これ振られたらどうしようこれからどうやって凧さんに接すればいいのとか中学生か俺。

いやそりゃ恋愛経験はそれ以下だけど、もうすぐ俺30だぜ？
じゃなくてそうじゃなくて。

「一護くん？ どうしたの？」

よしもう俺決めたここは男で行こう俺。

ダメだったらその時だ当たって砕けてみやがれってもんだ。

「もし……もし、好きな人がいないなら……で、俺のことが」
噛みそうになって、いったん口を閉じる。

もう必死だ。

「お……俺のことが、す、きだったら」

次の一言を言うまでに、一体どれほどの気力を要しただろう。

「俺と、結婚してください」

一体どれほどに時間、返事を待ったのだろう。

一瞬だったのか、永遠だったのか。

「もし私があなたと結婚したら、お互いにとって利点は多いわよね。

……それは、気づいてる？」

「……はい」

やっぱり来たか。

賢い彼女が、そこに気づかないわけがないけど。

「……よろこんでつて答えたとして、あなたはそれを私の心からの気持ちだつて信じてくれる？」

「……はい。……えっ!？」

今、なんて言った？

「私、ね」

小さく震えた声で、凜さんが言う。

まるで空気が震えたかのように、背筋が震えた。

「……あなたと一緒にいると、落ち着くの。一人でいる時、あなた以外の誰かと一緒にいる時、何時もざわつている心が、不思議なぐらいに静まるの」

凜さんが静かに息を吸う音が、部屋に響いた。

「私が好きなのは、あなたよ。一護くん。……私で、良いのなら、比翼連理の契りを結ばせてください」

信じられなかった。

だつて。

こんなに美しくて、優しくて、賢くて、強い彼女が、自分を選ぶなんて。

「本当に……？」

「本当。あなたの妻でいさせてください」

凜さんが俺の妻。

うわ。なんかむちゃくちゃ嬉しいぞこれ。

少しだけ現実が現実味を帯びてきて、はーっと溜息が洩れた。傍に行こうとして立ち上がる。

「ね、ひとつだけ、お願い」

同じように立ち上がった凜さんが、そつと俺の胸に手を当てた。

「私の前で、強がったりしないで。私の前では、夏梨ちゃんや月の前と同じように、黒崎一護でいては」と息を呑む。

「あなたが無理をしている姿を見るのは、辛いわ。だからお願い、私の前では強がらないで」

重ねて言った凜さんを、恐る恐る抱きしめる。

その温かさに、無性にほっとした。

「うん。……わかった。約束する」

そういうと、自分を見上げて凜さんが微笑んだ。

そんな凜さんがたまらなく愛おしかった。

「ふーん」

不穏な音を聞いて、派手に固まる。

ふーん、て何だ。ふーんって。

「夏梨殿に報告しなくてはなりませんな」

「……そうだな」

しまった。こいつら部屋にいたんだった。

「……てめえら」

ゆっくりと振り返る。

凜さんがぐすくす笑っているけど、正直それどころじゃねえ。

「なーに、一護?」

「絶対言つなよ?!」

「えー?」

「えー? じゃねえよ! 頼むから黙っててくれ! 特に絶対に夏

梨には言つな! あと秋泉にも!」

「どうしよっかなー」

「頼むから! なあ!」

「どうしましよっかねえ」

「……お前らなあ」

東宮府は、今日もにぎやか。

S 1 1 美しい人 後篇（後書き）

タイトル日本語訳は「連理の枝」

なんだこのオチ。

やっぱり自分には向いていないんだと心の底から実感しますね。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 3 友 達 巻 (前書き)

一 護 達 が 王 土 に 来 て か ら 半 年 ぐ ら い た っ た 時 の 話 で す 。

S 1 3 友達 壺

S i l e n t t a l e

王宮を北の丘の上に頂く王都の東の端には、職人街とも言つべき一角がある。

大通りに面して賑わう東の市から一步踏み入った小路がそこだ。

ある所には染め上がった布が干され、通りを挟んだ向かいからは金物を打つ音が聞こえ、硝子工場を覗けば色とりどりの光の筋が見られるその界限 その隅に、匏が木の上を静かに滑る、指物師の入門が暮らす小さな工場があった。

小さいといえど、その工場の評判は高い。

王宮の出入り職人として認められているところからも、その一端を見ることが出来るだろう。

新築や結婚の祝いとして贈るならば、と多少高価ではあるが王族のみならず市井に広く開かれているあたりから、その親方の気質をうかがい知ることが出来る。

曰く 客に貴賤の別無しという、その工場の理念とも言つべきそれが靈王からも好評を得ていることもまた、その小さな工場が国中に名を馳せる由縁である。

だが、その工場に久し振りに弟子が入ったということは、当然のようにあまり知られてはいない。

しかし知る者ならば、それが親方たつての希望で迎え入れたという、その工場には例を見ないものであったということも知っているであろう。

この工場の親方は、己のみならず他人にも厳しいということでもま

た、有名であった。

特にそれは弟子に対して顕著で、掲げる名に恥じぬ働きが出来ぬ者、それ以上に少しでも怠惰な面を見せる者は容赦なく破門するということは、その看板と共に知られていることだ。

だからこそ、親方に望まれて一門に入ったというその弟子の存在は、極めて異質である。

しかし、その弟子を知る者であれば、その措置もまた納得がいくものであった。

それほどに、その少年は勤勉で、尚且つ才能に満ちていた。

兄弟子さえも手放して認めるほどに才能を持つその少年は、しかし親方の方針の下、他の弟子と同じ待遇を受けていた。

むしろ、そうでなければ兄弟子から可愛がられることは不可能であろう。

親方は、職人にままあるように無口ではあるが、そうした機微もよく知っている者だった。

その弟子が王宮へ納品の同行を初めて許されたのは、弟子入りから10年目の春だった。

数十年に渡って蔓延した病の煽りを受けて、やはり2代に渡って短命の王が続いた。

今の靈王は、その弟子が物心ついた時に在位していた靈王の妹姫にあたる。

そして、数年前に薨去した現在の靈王の二男以来、適任者無しとの理由で空位とされてきた東宮位が半年前に埋まったのは、その弟子にとっても記憶に新しいところであった。

長く行方不明とされてきた現在の霊王の三男、その方が現世において存命していると判り、そうしてその御子達と共に王宮へと迎えられた……

それは長く続いた“次期霊王の不在”という不安感に対する特効薬として、またたく間に市井に広まった。

新しく東宮として就かれた方は、行方不明になる以前は人格者として名高く、現在もその評判に恥じることのない御仁であること、そしてまた現世より病の蔓延を止める術を持ち帰られたということ。それらはまるで、失踪自体も全て高祖が采配なされたかのような出来事で、その継嗣として迎えられたご長男も、尸魂界で起きた霊王への謀反を見事収めたということで、民から絶大な信を得ていた。

今日納めに行く品は、その東宮ご一家の一人が御遣いになるものとしての注文で、親方自らが特に力を入れて製作していた物だった。それはまるで客に貴賤の別無しという工場の理念に反するかのようで、当初弟子たちは首を傾げたものだったが、既に独立した兄弟子から事情を聴いて納得した。

つまり、新しく就かれた東宮は親方の竹馬の友であると。

長年行方不明であった友が、そうして新たに東宮位に就いた。それならば、心配し続けた年月を越えて、表情も口数も少ない親方が喜ぶのも頷ける。

しかしそれならば、ぜひともこの無口な師の親友とされる東宮様にぜひともお会いしたい。

そうして水面下での親方の同行人争いが弟子の内でも激しく繰り広げられているとは露知らず、一人その争いには参加していなかった末の弟子を、親方は指名したのであった。

かくして同行を許されたその弟子は、品を載せた荷馬車の横を歩いているのである。

初めて入る王宮、それも政庁ではなく内宮の光景に、その弟子は思わず息をのんだ。

親方に似て寡黙なところのあるその弟子には、ひどく珍しいことである。

だがそれほどに、内宮のたたずまいはその弟子の心を打った。

王族の歴史は、すなわち王土の歴史。

そしてまた、王宮の歴史でもある。

何千年という時を刻んだその王宮は、時代ごとの一流職人の手によって管理がなされてきたことを伺わせた。

門の金具一つをとつても、それに込められた魂が感じられる。

その弟子は、叱られない程度にあちらこちらの細工に目を凝らした。そうして、その一つ一つの精緻さ、複雑さに息をのむ。

その感性の豊かさこそが、彼が望まれて弟子入りした理由でもあった。

内宮へ入った時点で、馬車から荷を下ろした。

その荷を紐でくくり、紐で作った穴に通した竿の端を、親方と二人で持つ。

息を合わせなくては到底運べないやり方であるために、親方が唐突に足をとめた瞬間に弟子は転びそうになった。

慌てて身体の均衡をとり、その場に同じく立ち止まる。

どうやら横の扉が荷を運びこむ部屋のものだったらしく、先導をしていた下官が静かに扉を開けた。

竿を外し、紐を解く。

手袋をした手で荷を持つ前に、出入り職人の証である白い羽織を整えた。

例えその部屋が無人であっても、そこは王族の住まう場所。襟を正さずには、居られなかった。

どうやらそこは、誰かの私室であるらしかった。

寝台と、装束を仕舞う箆笥と、そして机と一脚の椅子しかない。

これならば、確かにその荷　二段式の本棚　が必要なのも頷ける。

一つ一つの品が良いとはいえ、王族が住むには余りにも質素なその部屋に、注文主の要求通り利便性を追求したその本棚はよく調和した。

親方曰く、以前置かれていた本棚はずいぶん古く、とくに暇をやるべき品だったらしい。

そうして、長く大事に使われてきたその品の代わりに、新しい本棚が据えられた。

親方自ら丹精込めて作り上げたその本棚が、一体東宮府の誰に使われるのか。

下官に問うてみようかと思い、しかしここが王宮であることを思い出して弟子は口をつぐんだ。

こんな所で親方の勘気を被れば、3食抜きでは済まないだろう。

ただ、家具の配置や、寝台に敷かれた布団の図案から、その部屋の主が男であることは推測できた。

そしてそれならば　勘にすぎない部分ではあるが、東宮ではなくその長男ではないかと弟子は思った。

その弟子が本棚に納められる本を見ることがあれば、その推測が正

しいことを知ったかもしれない。

王土の生活について細かく記された、時の東宮であれば必要のない本ばかりがその本棚には納められたのである。

しかし、その作業は師弟が王宮を立ち去ってから下官によって行われたものであるために、その弟子が本の題を見ることはなく、また部屋の主に直接会うことも当然なかった。

しかしその本棚こそが、立場の全く異なる彼らの出会いのきっかけであることは、言うまでもない。

S 1 3 友 達 巻（後書き）

タイトル日本語訳は「静かな物語」

作者の阿呆さ加減にもほどがある今作。

一護が出てこないどころか、これまで登場した誰も出てこない&それ以上に誰もしゃべらない。

特に最初から意図したわけではなく、1800字を超えた時点で誰も出てきていないことに気づいた私が、

「このままいつちゃえー！」
と思っただけにございます。

しかし本気で誰も出てこないとは思いませんでした。はい。

そして思いがけず楽しくかけたこの話。

情景&心情描写の大好きな私には、この手の話は大好物です。

てな訳でして、そのうちまたこんな話がお目見えするかもしれないません。

その時はまた、温かいまなざしで見守っていただけると大変嬉しいです。

さてさて、前半にて書きました、東宮ご一家（笑）の評判。

藍染の一件は、思いがけずよい広告になったのではないかな、と。

確か雷雨にこの手の話をさせた記憶がありますが、そういえば全く関係しない人物からの視点では初めてですね。

色んな意味で、藍染とのつながりを断ち切れないのは、一護にとっては苦しむところでもあったかもしれません。

何せ、“尸魂界で起きた謀反”と称されているのですから。

口伝えに伝わる噂では、細かい部分が改変されていくこともあるで

しよう。

その最たるものの一つとして、この例を上げさせていただきました。……とはいえ冬獅郎が普通に学校に通えたあたり、数年かかったとはいえきちんと真実は浸透したようですが。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 3 友 達 式 (前書き)

1 0 7 話の数カ月後から始まります。

S 1 3 友 達 式

f i r s t c o n t a c t

東宮府から二度目の注文を受けたのは、本棚を納めた年の夏だった。次の品は前回納めたものよりも大きな、やはり本棚だった。親方が作業に取り掛かるのを見ていた末の弟子は、ある種の確信を得た。

やはり、あの部屋は東宮その人のものではなく、その長男のもではないかと。

そうと聞いたわけではないが、新たに作られているその本棚もまた、あの部屋に納めるような気がしてならなかった。

なぜなら、意匠がよく似ていたのである。

同じ品は二度と作らない 依頼主の注文に応じて、その部屋に最も合った家具を作るその工場において、似た意匠のものが作られるのは稀だ。

そしてそういう時はやはり、同じ部屋に納められるものとして作られていることが多い。

だからこそ、推測とするならば全くの勘ではないと言えるが、その弟子が得ていたのは確信であり、その上使用者までをも特定するものだ。

しかし、その弟子とてどうして確信できるのか、全く分からないのである。

それから一月ほどかけて、親方は丹精込めてその品を完成させた。しかし、そこで問題が発生した。

製作中は一切の酒を断つ親方は、反動というわけではないが、完成

させた祝いとしてその晩は浴びるほどに酒を飲む。やはりその晩も大量の酒を飲んだ親方は、足元が覚束なくなつたせいでらう。

立ち上がるうとした瞬間、机につまずいてこけ、そして打ち所が悪かつたのか脚を折つたのだ。

不幸中の幸いというべきか、職人の命とも言うべき手に異常はなかつた。

しかし、問題は誰が代わりに品物を納めに行くかということだつた。

そうして白羽の矢が立つたのが、独立も近い一番年上の弟子と、前回品物を納めるのに同行した末の弟子だつた。

本来ならば、親方の代理として二番目の弟子が行くべきである。

しかし、親方はまたしても末の弟子を代理に指名したのだ。

不思議に思つた弟子たちが問えば、親方はその納め先が前回と同じ部屋だということを理由に挙げた。

そしてまた、その製作中に助手として常に傍らについていた末の弟子が、自分の代わりに最後までその本棚の行方を見るべきだ、と職人らしい理由もつけて。

かくして、その末の弟子は再び王宮の門をくぐつたのである。

親方の言うとおり、下官は同じ部屋へと案内した。

そうして荷を納め、据えた本棚が問題なく動くかどうかを兄弟子が確かめている間、無礼にならない程度に部屋を検分する。

以前納めた本棚に、政治に関する基本的な事柄が綴られた本が入っているのを見て、その末の弟子は自分の確信　使用者が東宮ではなく、その長男であるということ　が正しいことを知つた。

そして、思いがけない訪問　正しく言うならば、思いがけない帰還　を受けたのは、その瞬間だった。

扉が開く音がして、その末の弟子は何気なく振り返った。

誰か下官が入ってきたものだとその程度にしか思っていなかったために、振り返ってから手伝っていた下官共々呆けた面をさらす羽目になった。

立っていたのは、服装でそれとわかる東宮と、そして恐らくその長男だったのである。

次の瞬間に傍に立っていた下官は礼をとり、末の弟子に至っては兄弟子に抑えつけられるような形で叩頭する羽目になった。

しかしどうやら驚いたのは部屋にいた面々だけではなかったらしく、戸口に立っていた二人の青年もまた、硬直しているようだった。

何とも言えない沈黙が数瞬続いた後、おもむろにその二人のうち一人が口を開いた。

「　　そういえば、今日が納品だったか。すまん、邪魔をしたようだな」

それが東宮と長男と、どちらの声かを判別する術は末の弟子には無い。

だが、その後の下官の受け答えから判断して、どうやら東宮のものようだった。

そして、頭を押さえつける兄弟子の手を痛いと思い始めたころ、二度目の思いがけない瞬間を迎えることになる。

「ところで、平蔵はどうしている。足を折ったから自分で届けに行けないとずいぶん悔しがっていたが」

畏れ多くも東宮様が仰られたその名前が師匠のものであると思いだし、そして反応が必要だということに思い至るまでにいささか時間が必要だった。

師匠。こんなことは遣いの用に入っていませんでした。

頭に置かれた手にじっとりと汗が滲み、それにつられて余計に冷や汗をかく。

「だ、大事ではありませぬので、今日も朝から私どもをしば……ご指導くださいました！」

兄弟子がうっかりしばくと言いつらになつたのは、仕方がないと思う。

まさしくそれがぴったりくるほど、朝から機嫌が悪かつたのだ。

「ははは。そうか、あいつらしい……怪我が治り次第、暇を見て顔を出せと伝えてくれるか」

「かつかしこまりました！」

畏れ多いやら何やらで泣きそうになり、師匠を心から恨む。

とにかく早く帰りたい。帰ってこの嫌な汗を流したい。

しかし、その願いはすぐには叶いそうになかつた。

「ところで、本棚はもう据え終わったのか？」

再び向けられた問いかけは、やはり自分たちに向けられたものだ。

滑るんじゃないかと言うほど手に汗をかいた兄弟子は、どもりながら懸命に答えた。

「は、はい。既に終わりましたでございます」

「そうか、丁度いい」

……丁度いい？

疑問形にして内心で反復した瞬間に、東宮様は再び口を開かれた。

「おい、一護。その本仕舞っとけ」

「え？ あ、ああ」

一護と呼ばれた青年が、一步踏み出したのを床からの振動で感じて、兄弟子の手をひっぺがす。

本棚とその青年のちょうど間に、自分たちは平伏していた。

半ば引きずるように兄弟子を壁際へと追いやり、そこで改めて礼をとる。

だがその瞬間、東宮様が改めてとんでもないことをおっしゃられた。

「そうそう堅苦しくする必要はない。何度も礼をとらなくていい…

…楽にしている」

いやしかし。そうは仰りませんが。いや、でも。

「平蔵は使い手の顔を見て物を作る。…それは、弟子であるお前たちも同じだろう？ 構わないから、楽にしている」

内心で呟いたことをすっかり見抜かれて、恐る恐る顔を上げた。

東宮様は相変わらず扉のそばに立っていて、そして恐らくそのご長男…一護と呼ばれた橙髪の青年は、左手に数冊の本を抱え、右手でそれを本棚へ納めていた。

左腕からずりりと一冊の本が抜け落ちたのを見たのは、その時だ。

反射で飛び出し、その本を受け止める。

そのまま差し出せば、青年は驚いたように瞬きした。

「ありがとう。助かった」

そう言っつて本を手に取った青年は、そのまま本を棚へ納める。

謝辞に対して無言で礼をとると、再び壁際へと下がった。

S 1 3 友達 式（後書き）

タイトル日本語訳は「第一接触」

師匠の名前に見覚えがある方、鋭い！

六車九番隊の笠城平蔵さんです………（笑）

職人と言うより、「どの組ですか？」と問いたくなる風貌ではありますが（笑）頑固者、という感じではぴったりかと。

さて、ここで一つお知らせです。

BLEACH El fuego no se apaga. という作品、皆さんもご存知かと思えます。破面を主軸にしたBLEACHの二次作品です。

その作者、更夜さんが、この度Lost gearの三次作品を書いて下さいました！

内容は、Whispers of pendulumsに収録してある“喜びを携えて”から派生したものです。

タイトルは“約束と誓いと翼と”

既に更夜さんの短編として公開されています。

これがもう素晴らしい出来です！

もう更夜さんには感想しきりです。

皆様、ぜひぜひご覧になって下さいませ。

約束と誓いと翼と

<http://nk.syosetu.com/n7734s/>

それでは感想などお待ちしております。

S 1 2 友 達 参 (前書き)

1 0 5 話の数週間後から始まります。

S 1 2 友 達 参

s u b l i m e v i r t u a l i m a g e , i t s e s s
e n c e

本棚を納めてからしばらくが経ち、師匠の足も無事に完治した。それを見計らったかのように王宮から手紙が届いたのは、つい昨日のことだった。

顔を出せと言った通りに、呼び出しがかかったのである。

「……たく、こっちの都合も考えろ」

口調の割に嬉しそうな師匠は、さっそくその場で返事をかいていた。ただし、そこらの紙の切れっぱしに、である。

東宮様への返書なのだから、もっと気を使ってもいいだろうに……いやむしろ使うべきだ、と弟子が囁くのを無視して、師匠は紙に書いたおが屑を払った。

それを苦笑気味に見ていた護衛士は、相変わらずねと呟く。

「東宮が相変わらずなのだから、俺だって変わりようがない」

「そうね。違くないわ」

護衛士はまた笑うと、その紙片を受け取った。

豪快に書かれた了解の二文字に、微笑む。

「確かに、お預かりいたしました」

「宜しく願います、桐生さん」

軽く頭を下げた師匠に礼をとると、その護衛士は王宮へと戻っていた。

「おい、京。支度しろ」

唐突に声をかけられた末の弟子は、道具の手入れをしていた手を止めて振り返った。

「支度つて……何のですか？」

「王宮に行く支度だ。とつととしろ」

それだけ言つて隣の部屋へと姿を消した師匠に、弟子たちは全員絶句した。

「……王宮？」

聞き違いかと繰り返した末の弟子に、二番目の弟子が頷く。

「俺もそう聞こえたが……何でお前なんだ？」

「俺が訊きたいです」

京が無言で一番上の弟子に視線をやると、何故だか彼は訳知り顔で頷いた。

「まあ、何だ……とりあえず支度してこい」

「……理由、知ってるんですか？」

半眼になって問えば、その兄弟子は煙たそうに手を振る。

「ほら、早くしろ」

「……」

他の弟子たちも視線で問うと、兄弟子は素知らぬふりをして作業に戻った。

そうなつてしまえば、いくら目線で問うたところで意味はない。

他の兄弟子たちも作業に戻ってしまったのを見て、京はため息をついて立ち上がった。

「……師匠」

「何だ」

「どうして俺を選んだんですか？」

出入り商人の白羽織をはためかせ、二人で王宮へと歩いていく。その道すがら問いかければ、師は端的に答えた。

「……着けばわかる」
「……」

全く答えになっていないそれに、しかしそれ以上問うことはできない。

夕暮れの雑踏の中では、会話を続けることは難しかった。

王宮に着くと、すぐに東宮府へと案内された。

そこで待ち受けていた東宮様に、静かに礼をとる。

ただ、前に立った師匠がそのまま歩き続けたので、礼をとったまま固まるはめになった。

師匠!?

冷や汗が噴き出た瞬間、師匠の声が聞こえた。

「手紙一つで呼び出すとは、ずいぶん偉くなったもんだな」

「これでも一応東宮だからな。手紙で呼び出すしかねえだろう」

ははは、といかにも親しげに話す二人に、そのまま硬直するしかない。

やっぱり無理を言っても兄弟子の誰かに代わってもらった。そう思うが、もう遅い。

「おい、京」

呼びかけられて、はっと顔を上げた。

「はい」

「隣の部屋の棚、直してこい」

「はい?」

オウム返しで聞き返すと、師匠は扉を示す。

「だから、隣の部屋の棚、直してこいっつってんだ」

いささか低くなった声に、小さく身をすくませる。

弟子にしかわからない危険信号を感じた。

「はい!」

傍に置いていた道具箱を手にとると、そそくさと指示された部屋へと向かった。

とんとん、と扉をたたく。

まさか人はいまいが、それでも一応だ。

「どうぞ」

だから、部屋の内側からはっきりと声が聞こえた時は、本気で心臓が止まるかと思った。

まさかの有人だ。

扉をたたいたままの恰好で、硬直する。

開けていいのか、それとも師匠のところへ戻るべきなのか、目まぐるしく思考する。

そして、そうこうしている間に扉が開かれた。

「あれ？ あんた、この間の」

目の前に立った橙髪に、戦慄した。

こんな目立つ髪を、誰が見間違うものか。

「あー、そっか。棚の修理頼んだんだよな。頼む、こっちなんだ」
いや、そうやって招かれなくても。

たらたらと冷や汗を流した京を、橙髪は不審そうに見つめる。

「どうした？」

「い……いえ。失礼いたします」

ぺこりと礼をして部屋に入ると、その橙髪は僅かに笑った。

「これなんだ。最近、がたがた言うようになってさ」

示された棚は、師匠が納めた本棚のどちらでもなかった。

どこか違う工場で作られたものらしいとあたりをつけて、作業に取り掛かる。

扉ががたつく要因は、どうやら金具が古くなったからだった。

指物師の専門ではないが、幸い代わりになりそうな金具は持ってい

る。

問題は、金具をとりかえる間は誰かが扉を持っていなくてはならないということだ。

師匠を呼ぶか。いや、しかし。

二つの金具で固定されているため、片方ずつ外せば一人でもいけるだろうか。

しかしそれだとずれるかもしれない。

そうなれば、修理する意味がない。

下官を呼んでもらうか？

どうする、俺。

「……………どうした？」

問いかけられて、はっとした。

振り返れば、すぐ後ろに立っていた橙髪とまともに目が合う。

「……………一人では、直せそうにないので……………」

小さく答えると、橙髪は首を傾げた。

何を考えているのか、しばらく棚を眺めた後、おもむろに口を開く。

「ひよっとして、金具をとりかえる間に扉を抑えている人がいる、

とかか？」

「は、はい」

ずばりいい当てられ、少し驚いたがほっとした。

これなら、誰かを呼んでくれるかもしれない。

しかし一拍ののち、橙髪は思いもよらないことを口にした。

「なら、俺が押さえてる。それでいいか？」

「……………」

ただぱちぱちと瞬きを繰り返すことしかできず、それを見た橙髪に再び不審そうな顔をされる。

「俺じゃ、だめか？」

「しかし……お手をわずらわせることに……」

どもりながら呟くように答えると、橙髪は首を横に振った。

「そんなこと、気にしなくていい。俺が使つのを直してもらうんだから、手伝うのは当たり前だ」

それさえも当たり前前のように答えた橙髪に、京はひどく戸惑う。

自分が思っていたよりも、ずいぶん気安い人のようだと、そこで理解した。

「……なら、お願いしてもよろしいでしょうか」

少し逡巡したが、それ以外の方法は思いつかない。

おずおずと頼めば、橙髪は笑顔で答えた。

「もちろん。どうすればいい？」

S 1 2 友達 参(後書き)

タイトル日本語訳は「崇高なる虚像、その本質」

一護がすごい楽しそうです。

色々、極限になってくる時期ですからねえ。

こういう些細な出会いでも、一護にとっては掛け替えのないものと。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 2 友 達 肆 (前書き)

1 0 6 話の少し後から始まります。

S 1 2 友 達 肆

t h i r d c o n t a c t

師匠とともに工場へ戻った京は、物も言わずに自宅へ戻った。ずっと気を張っていたせい、ひどく疲れている。普段は眠りの浅い性質にも関わらず、この日ばかりは起こされるまで全く起きなかったことからそれは明らかだった。

「な、京」

数日後、仕事の合間に兄弟子から話しかけられた京は、無言で振り返った。

「なんで、師匠はお前を王宮に連れて行ったんだ？」

「……………」

そつえば、それは結局わからずじまいだった。

無言で考え込んだ京に、兄弟子は首を傾げる。

「なんだ、わからねえのか」

「……………はい」

師匠に似て粗暴なところのある兄弟子に、言葉少なに答える。

「じゃあお前、何してきたんだ？」

「東宮様のご長男の御部屋の棚を直してきました」

「師匠とか？」

「師匠は、東宮様とお話をしておられました」

「お前一人で修理したのか？」

「金具をとりかえるだけでしたから」

「……………ふーん」

大して面白い話はなさそうだと判断してか、兄弟子は再び作業へ戻っていく。

だが、自分もそろそろ戻るかと腰を上げたところで、一番上の兄弟子から声をかけられた。

「ご長男には、お会いしたんだらう？」

「……はい」

確信から来る問いかけに、内心で首を傾げる。

師匠から聞いたのだらうか。

「どんな方だった？」

「どんな方、ですか……？」

問われて考えてみても、どう言っているのかわからない。

変わった方だとは思ったが、それを答えるのは失礼だらう。

「……手、が」

「手？」

唯一、これとは思ったところを口にする。

橙髪のご長男は、ずいぶん節くれだった手をしていた。

それこそ、師匠や自分たちのように、職人であるかのごとく。

「はい。手が……あれが、反乱を収めるために戦った手なのだとは、思いました」

本を手渡した時、そして扉を支えてもらっていた時。

その手にマメだけではなく、刀傷さえもあることにも気づいた。

その時、思い出したのだ。

東宮様のご長男が、尸魂界で起きた謀反を収められたのだということ。

あの手は、その激しさを物語っていた。

決して軽くはない扉をやすやすと支えていたことから、細身ではあるがしっかりと鍛えられているのだらうと想像できる。

王族というものはつきりと知っているわけではないけれど、それでも王族らしくはないと思った。

「お前らしいな。お人柄ではなく、真つ先に手について答えるとは」
兄弟子は軽く笑うと、自分の作業に戻っていった。
その背を目で追い、小さくため息をつく。
ゆっくりと立ち上がると、自分の作業に戻った。

手以外にも、気になったところはある。

作業が終わってから、師匠を待つ間しばらく会話をしたときに、やはり王族らしくないと思うことはあった。

例えば、その砕けた話し方、気安い態度。

それは自分の学友に近い雰囲気で、余りにも王宮という場所にそぐわない気がした。

ただ、何よりも気になったのは、本人がそれを自覚しているらしいということだ。

時折見せる表情は、どこか寂しさに満ちていた。

それが郷愁なのだ気づくまでには、さほど時間はかからなかった。
だから、思わず問いかけてしまった。

「……現世を離れて、寂しくはないのですか？」

唐突なその質問に驚いてもおかしくないなのに、それでも彼はそんなそぶりは見せなかった。

「寂しくないって言えば、嘘になるな。会いたい奴もいるし。……
でも」

でも、どうにもならないことだから。

彼はそう言い切った。

それが余りにも似合わない言葉だと、彼は気づいているのだろうか。
それ以前に、二度しか会ったことがない自分が、似合わないなどと
言うべきではないのかもしれない。

それでも、その言葉は彼には似合わなかった。

それがずっと引っかかっていたからか、しばらくして再び同行を命じられた時、彼は一も二もなくうなずいた。

「お、久し振りだな」

「またも気安く声をかけられ、しかし二度目の今は前ほど戸惑わなかった。」

「お久し振りでございます」

静かに礼をとれば、困ったように苦笑する気配がした。

「そうやって礼をとるの、やめてくれねえか」

「……しかし」

困ったのは伝わったのだろう、彼は首を横へ振った。

「仕事でとか、そういう時は仕方ないのかもしれないけどさ、あなたの師匠は俺の親父から私的な招きを受けて来たわけで、あなたの師匠は私的にあなたを連れて来たんだから、別に問題ねえんじゃないかな」

「……………」

考えたこともなかった論法に、戸惑う。

果たしてそれは、他の人に対しても通じるのだろうか。

「俺、こつちに知り合いいねえから、あんたが……友達になつてくれたら嬉しい」

そう言った目の前の人は、やはりあの時と同じように寂しさを滲ませていた。

謀反をおさめた英雄にそぐわない、ひどく寂しそうな表情を。

もし、もし彼が、やはり自分たちと同じようにして育ったのだとしたら、いきなりこんなことになって戸惑わずにはいられないはずだ。

そして多分、この気安い態度から考えて、彼は自分たちと同じように、ごく普通の子供として育てられている。そうだとしたら、やはりこの寂しさは、こちらに馴染むことのできない限り消えないのではないだろうか。

「……私で、よろしいのであれば」

やはり小さく呟くように言うと、彼は笑った。

「ありがとな。嬉しい……こっちで友達ができるなんて、思ったなかったから」

その表情から少し寂しさが減ったのを見て取り、内心でほっと息をついた。

まさか、こんなことになるとは思っていなかったけれども、それでも彼の支えになりたいと思った。

あんた、名前なんていうんだ？

京、と申します。

へえ。俺は一護って言うんだ。

一護様、ですか。

……その呼び方、やめねえか。

何故でしょう。

友達はそのような呼び方しねえだろ。あと敬語も。

ですが……

周りに人がいない時だけでいいから。な？

しかし……

頼むよ。な！

……よろしいのですか？

よろしいどころか、頼んでるだろ。そうじゃなきゃやりづらい。様付けをやめたら、どのようにお呼びすれば？

呼び捨てでいいって。

呼び捨て、ですか。

そ。敬語もやめてくれよ？

敬語はもともとです。

そうなのか？　なんか、変わってるな。

……そうでしょうか。

俺は変わってると思うけど……職人さんってのは、そういうもんなのか？

人によると思います。

じゃあやっぱ京が変わってるんじゃないのか？

そうかもしれないね。

そうした他愛もない会話が、一心と平蔵が話し終えるまで長く続いた。

S 1 2 友 達 肆（後書き）

タイトル日本語訳は「第三接触」

やっぱり、王土にも何らかの形での友達はいらっしゃると思っただけですよ。じゃなきゃ、多分やっていけない。

本当に普通の友達かって言われれば、そうでもないけど、でも仲が良くて言える人がいるって重要ですよ。

ところで、この話のサブタイ、“第三接触”

三度目の接触、という以外の意味を御存知でしょうか？

皆既日食はご存知ですよ。

それに関連した用語なのですが、太陽が欠け始めるのを第一接触、完全に欠けた瞬間を第二接触、そして満ち始めの瞬間を第三接触、完全に満ちた瞬間を第四接触と言います。

そしてこの第三接触の瞬間に見られるのがダイヤモンドリングです。

こちらはご存知の方も多いかと。

多分、一護にとって京は差し込む光のような、そんな存在なんじゃないか、そういう風に思うので。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 2 友 達 伍 (前書き)

1 0 7 話の少し後から始まります。

S 1 2 友 達 伍

s u r r o u n d i n g e y e s

奇妙なことになったものだ、と京は思った。

王宮の出入り職人であるとはいえそのはしくれでしかない自分が、
ゆくゆくは霊王となる方の友人になるなんて、誰が思っただろうか。

あつたところで、何をするわけでもない。

そもそも、友人となつてもまめに会えるわけでもない。

それでも、この関係は京にとつても心地よかつた。

そして、一護にとつて心地よいものであつたのは、言うまでもない。
滅多に会えない、だが全く会えないわけではない。

それだけで、満足だつた。

これが、たつた一つ、自分の自由になるものだ、それだけが支え
になつた。

だがそれは、それだけでいいと思えるほどに一護が疲れているとい
う証でもある。

そして、それにまわりが気づいていないわけはなかつた。

「少し、明るくなつたわね」

「あ？」

昼食をとっている時に、桐生はおもむろに呟いた。

それに間抜けな反応を示したのは、桐生の向かい側で丼物をかきこ
んでいた雷雨だ。

「一護君のことよ。最近、ちょっと顔色マシになつたじゃない」

「あー、それな」

雷雨に続き、竜が賛同のため息をつく、桐生もほっとしたようなため息をついた。

「本当によかった……少しはこっちにも慣れたみたいだし、この分ならそのうち何とかかなりそうね」

桐生がしみじみと言うと、雷雨は苦笑した。

「お前は、本当に一護贖身だな」

「あら、悪い？」

「悪くわねえよ。……でも、それはそんだけ尸魂界あっちに想いを遺して
るってこつたる」

言外に、かつての部下　ひよ里　や、そして同僚のことを言わ
れて、桐生は視線をそらす。

「……そうね、そうかもしれない」

長い沈黙の後、桐生はそう認めた。

一護に尸魂界の名残を求めていることは、否定できない。

現世に縁の深かった一心や、そもそも尸魂界に縁のなかった遊子や
夏梨と比べて、一護はずいぶん尸魂界よりの気質だ。

あちらの仲間を大切に思っているところも、その一因だろう。

だからこそ、桐生をはじめとして雷雨や竜、そして他の護衛士たち
もまた、一護を好ましく思っている。

例え忠義の先が変わろうと、あの地が原点であることに変わりはない
のだから。

それでも、桐生は護衛士たちの中で群を抜いて一護に傾倒していた。
自らの部下であったひよ里を、長い追放の時から放ってくれたこと
も大きい。

桐生にとって縁深い五大貴族の子息、今は当主となった彼らや、そ
の彼らに縁深い者、なにより同じ時代を過ごした者を、一護は数多

く知っていた。

だからこそ、桐生が一護に傾倒するのは仕方のないところではある。しかしそれは隊の誰もが承知しているために、誰も何も言わない。言うとするれば、こうして桐生とともに職務に当たる雷雨や竜ぐらいのものだった。

「気をつけるよ。あんまりあいつを死神と重ねるな。……それがあいつの重荷になることぐらいは、わかるだろ」

重荷、と称することに、雷雨は少しためらいを覚えた。

桐生や、その思いが重荷になるわけではない。

他ならぬ尸魂界が、一護の重荷になっていた。

「……わかってる。それくらい」

桐生も、それぐらいはよくわかっている。

それでも止められないのだから、仕方ない。

「気をつけるわ」

そういうことしか、できなかった。

桐生が工場を訪れたのは、それから数日後のことだった。

「平蔵君に、会えるかしら」

取り次ぎを頼み、相変わらず目つきの悪い彼と面会する。

「また、あいつからっすか？」

粗暴な口調で問いかけた平蔵に、桐生は首を横へ振った。

「違うわ。……一護君のこと」

「……あんたがそんなに入れ込むなんて珍しいな。一心だつて随分雑な扱いだっただろうに」

「失礼しちゃうわ。奥さんに告白できなかったときに相談に乗ってあげたのは、だあれ？」

「……あんた、結構根に持つ方か」

「交渉事がうまいと言ってほしいものだわ」

見る見るうちに表情が険しくなるが、桐生にとってそれは珍しいものではない。
そもそもこれよりもずっと怖い人を知っているのだから、恐怖しろ
と言う方が難しいというものだ。

「で？ あいつの息子が何なんだ？」

「うん……あなたの末の弟子、一護君と仲がいいのは知ってるでしょ？」

「京か……まあ、な」

つるりとした頭を搔いて、平蔵は作業場の方を見やった。

物静かで、いるかいないか分からない時さえある末の弟子。

何度か連れて行くうちに 親と師匠が結託して狙ったことではあったが ずいぶんと親しくなったようだった。

「彼の保護者であるあなたには、一度きちんと話しておこうと思っ
て」

「何を」

短く問うた平蔵に、桐生は静かに頷く。

「一護君が、背負っているものについて」

ずいぶん長く話した後、桐生はすつと口を閉じた。

もう、伝えるべきことは全て伝えたはずだ。

桐生が話している間、平蔵は一言も口をきかなかつた。

ただひたすら、一言一句とて聞きもらすまいと耳を傾けていた。

「……それは、俺より京に話すべきじゃねえか？」

話し終えてからもしばらく黙っていた平蔵が、厳しい目つきで問う。
自分に話したところで、自分は一護に何の関係もない人物だ。

それよりも京に話す方が、共に背負うことができるはず。

「いいえ。まずは、あなたが知るべきことよ」

桐生は乾いた喉を茶で潤し、真つ直ぐに平蔵を見つめ返した。

「俺からあいつに話せてか？」

断る、という表情を前面に押し出した更に不機嫌そうな表情で、平蔵ははつきりと言いきった。

こういうことは、人を介するべきではない。

「いいえ。あなたは何もしないで」

「……………はあ？」

その一言は、実に雄弁だった。

どういう意味だ、と文章にするよりも、遙かに。

「時が来れば、一護君が自分で彼に話すはずよ。……………今は、その時の為。彼は若いわ。一人で抱え切れるとは、限らない……………そうなら」

「手は貸さねえぞ」

ぶつきらぼうに言い捨てた平蔵に、桐生は苦笑した。

そう言っているにも、結局はなんだかんだで面倒を見てしまうのだ、この彼は。

ガキ大将がそのまま大人になったような、そんな可愛らしい一面さえある彼を、桐生はこのほか信頼している。

そして、その弟子である、京も。

「残念ね」

思っていることとは正反対の言葉だが、平蔵にはきちんと言わなければならない。

伝わっていないとしても、平蔵が彼に愛想を尽かさなければそれでいい。

全て目論見通りにしてみせた桐生に、やっぱり全て見透かしている平蔵は大げさにため息をついて見せた。

S 1 2 友 達 伍（後書き）

タイトル日本語訳は「周囲の視線」

それにしても、みなさんおせっかいですね（汗）

……一護が自分で友達を確保しに行くほうが私の中でもよっぽどありうると思うし、

何より一心がそんなに一護に手を貸すとは思えないんだよな。

つてすごくすごく思っんですけど、何故だかこういう風に仕上がり
ました……

……完全に自動書記状態で書いているので、本当に結末が予測できないんですよ、いつも。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 2 友 達 陸 (前書き)

108話の数年後から始まります。

一護と凧が結婚して、一貴と彩が生まれた後の話です。

S 1 2 友 達 陸

sincerely, from

一護は、内宮に戻る際に桐生から手渡された手紙に、僅かに口角を上げた。

それは、京からのささやかな私信だった。

一護へ

元気になっていますか。

俺は元気になっています。

春奈もほむらもしくも、みんな。

彩ちゃんはそろそろ二歳になるころでしたか。

もうずいぶん達者にしゃべるようになったでしょうね。

一貴君は、もう七歳になるはずかと。

本当に、子供が大きくなるのは早いものですね。

この間会った時には、一貴君がそんなころだったはず。

だからたまには顔を出せとあなたは言うかもしれないけれど、残念ながら仕事が立て込んでいるから、それは難しそうです。

また落ちついたところに、行かせていただきます。

そうそう、この間師匠のところ顔を出した時にすごいことがあります。

あの師匠が、猫を拾ってきていたんです。

まだ片手に乗るぐらいの小さな猫を、それも三匹。

あれには驚きました。

それをまたすごい笑顔で可愛がっているものだから、もう気色悪くて。

それが毎日らしくて、もう驚きました。

鬼の平蔵の看板、下ろすことを考えた方がいいかもしれません……

……

まめに綴られたその手紙に、一護は目を細めた。

家族のこと、仕事のこと、町であったこと。

すでに独立した京は、何か珍しいことがあるといつも一護に書き送ってくる。

猫の行まで読み進んだ一護は、そこで軽くふきだした。

すごい笑顔というのは、おそらく目つきの悪さはそのままにということだろう。

あの頑固な人が、とひとしきり笑った後、一護は続きを読んだ。

観察眼の鋭い京の書く文章には、いつも驚かされる。

子供のちよっとした仕草、市井で流行っている服装、ふと見かけた珍事。

それらが圧倒的な映像力を伴って、文章として綴られている。

最後まで読み終えた一護は、一番最初の話題に目をとめた。

春奈もほむらもしずくも、みんな元気にしてる。

一護よりも遥かに年上の京は、友人として関わるようになった時にはすでに結婚していた。

そこまでは、特に驚くことではない。

ただ、その里子の名前に驚いた。

“ほむら”と“しずく”

それは、かつて少しだけかわりを持った姉弟の名前に相違なかった。

死んだ時が同じなためか、彼らは双子としてこちらに生まれ変わったらしい。

そして、幸せな家庭に拾われた。

よかった、と思わずにはいられなかった。

それはきつと、ルキアが望むものだから。

そうは言っても、ああだこうだと親馬鹿丸出しの手紙を送り付けられた時は反応に困ったものだが、親になった今ならわかる。

確かに、子供は可愛い。

口数が少なくても綴る文字は果てしなく多い京は、今でもそれは嬉しそくに書き送ってくる。

今日はこんなことがありました、今度こんなところへ行ってきました……

そうして様々なところをじかに見ることができのがうらやましくもあり、そしてまめに書き送ってくれることをありがたいとも思う。現世にいたころに得たどんな縁とも違う関係だが、それでもやはり心地よいと思った。

いや、違う関係だからこそ、心地よいと思った。

もし、何か同じところを見つけてしまえば、比べてしまっただろうというのは容易に推測できる。

だからこそ、この関係を大事にしたいと、もう何があっても得られないものだからと、特に父親を亡くしてからは強く思うようになった。

親を亡くして、子を得て。

そうして、気づいた。

誰か友とできる人物をと、気を使われたに違いない、と。

京に訊いてみたら、多分そうだろうと答えられた。

京もまた、上手く友達を作れないで来て、それを周りから心配されてきたから、と。

「嬉しそうね。何か、あつたの？」

彩を抱えて部屋に入ってきた凜が、一護の表情を見て相好を崩した。穏やかな、暖かな瞳をしていた。

一護が少し笑って手に持った紙を振ると、凜は軽く目を見開く。

「京さんから？」

「ああ。そろそろ来るころだと思ってたんだ」

「なんて書いてあつたの？」

「色々。……平蔵さんが、子猫を拾って来たとか」

「ええ!？」

凜が驚いたように声を上げると、それに驚いた彩が泣き始める。

ごめんごめん、と呟きながらあやし始めた凜を見て、一護はそっと目を細めた。

色々あつて、まだまだ色々あるだろうけど、それでも幸せだと思つ。

例え現世にあのままいたとしても、これ以上の幸せは望めない
と、そう思つ。

京へ

俺も元気にしてる。
そっちも元気そうだな。

彩は予想通り、ずいぶんしゃべるようになったよ。
一貴があんまりしゃべらないやつだから、余計にそう感じるのかも
な。

それとも、娘だからだろうか。
そういえば、遊子も夏梨も小さいころからよくしゃべった気がする。
ほむらとしくはどうかだったか、また聞かせてくれ。

忙しいのか、残念だ。
こっちは少し落ち着いてきたから、そのうちゆっくり会いたいと思
っていたんだけどな。
まあ、またそのうちか。

それから、子猫か。
全く想像がつかないんだが、かといって見に行くわけにもいかない
からな。

また、どんな風なのか教えてほしい。
そもそも笑顔自体が想像できないのは、俺だけじゃないみたいだ。
その話をしたら凜はずいぶん驚いてた。
驚いて大きな声上げたから、彩を泣かせてな。
今あやしているところだよ。

ついでに、桐生は近いうちにその笑顔を見に行く気らしい。
そういえば、あやすっていうのも、一貴の時はあんまり見たことな
かったな。

こっちが心配するくらい泣かないやつだったからさ。
今でも、あんまり俺達を頼ってこない。
親としては、ちょっと寂しいな。

そんなに、親らしいところを見せてやれてないのかなって、凜と話すんだ。

このあたりも、また相談できたら嬉しい。だから早く仕事を片づける。俺が言いたいのはそれだ。

ああ、そうだ。

夏梨が今年州学舎を卒業するんだよ。

卒業した後は、巡察使になりたいんだと。

しばらくはこっちに戻って政庁で研修積んで、それから見習いとして今いる巡察使の助手をするらしい。

もうちょっとだからって、ずいぶん張り切ってたよ。

俺としては、気が気じゃない。

今更反対したらぶん殴られるだろうから、おとなしく応援するしかないんだけどな。

まあ、凜が大丈夫って言うてるから、多分大丈夫なんだろうけど、さ。

なんだからずいぶん関係ない話してるな。

とりあえず、近いうちに顔を見せる。

凜も一貴も彩も、楽しみにしているからな。

それじゃ、春奈さんとほむらとしづくによろしく。

S 1 2 友 達 陸（後書き）

タイトル日本語訳は「心から、」

時系列てきになりにとんだなあ、と自分でもあきれました。

何と言うか、つかずはなれずみたいないい友達になりました。

お互いに仕事がある以上、ある意味自然かなと思います。

京は完全にオリジナルだったんですけど、その子供たちは以前一護と関わりのあったあの二人でした。

繋がる縁ではないですけど、色んな形で一護が今までに繋いできた縁、それが小さな形でも存在する……考えてみればすごいことですよねえ。

来週からは、また新しい外伝の連載をスタートします。

時は折しも梅雨、本編内でも触れてきたある事件……いや、災厄かな。

それを余すところなく書いたとは言いきれませんが、今の自分のできる最大がこれかなと思っています。

Lost Gearの外伝の中では、一番異色の話になるかも……そんな話をご用意しました。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 3 箱舟の詩地（前書き）

一護が二十四歳になる少し前の話です。

S 1 3 箱舟の詩地

わたしは人を創造したが、これを地上からぬぐい去ろう。人だけでなく、家畜も這うものも空の鳥も。わたしはこれらを造ったことを後悔する。

旧約聖書 創世記より

o n l y O n e c a n d o

どうしようもない焦りと不安。

あの頃が一番苦しい時だったと、一護は後から懐古する。

これは、全ての終わりとなり、始まりとなった話 ……

その時、一護は一心の部屋へと向かっていた。

何とか自分に与えられた仕事を終え、疲弊しきった心に鞭を打って。政治というものは、何よりも心を消耗する。

それは現世に居る時も、何となく知っていた事ではあったけれど、こつもひどいものだとは思いましなかった。

「よう、遅かったな」

「うるせー。仕事ほって本読んでやがる奴が、よく言うぜ」

許しを得て部屋に入れば、一心は椅子に座って本を読んでいた。

最近は何事にも出向くこともめつきり少なくなってきたか、こつして好きに過ごしていることが多い。

それもまあ当然の権利ではあるかと、一護は少しばかり諦めてもいた。

一心と一護が話したのは、今の政情の事。

一心の体調が悪くなつていくのを知つてか知らずか、政庁をも何か
が蝕んでいた。

どこか頹廢的な、知らず知らずのうちにあちこちが綻んでいくよう
な。

そのただなかに居ながら、それに気付いていながら、何もできない
でいる。

それが、一護にとっては何より苦しい事だった。

霊王自身は、未だ健在だ。

一時は一心が肩代わりしていた職務を、再び自らこなしている程に
だが、その後継たる一心の命が危うい。

それは、今よりも先を見る事を生業とする官吏たちにとって、何よ
りの痛手だ。

しかし、その現状を話す事は、できない。

一護にとつてそれは何よりの事であり、例え一心がすでに気づいて
いるとしても、決して自分からは持ち出すまいと心に決めている事
でもあった。

一方で、やはりというべきか一心も気づいていた。

そして彼も、自分からは持ち出すまいと心に決めていた。

なぜならば、一護が正式な後継者であるという事は、誰もが知ると
ころであつたから。

例え一心が死んだとしても、一護がいる。

それにも関わらず、政情は悪化する一方。

それはつまり、平たく言つてしまえば一護の力量不足ということだ。
それをわざわざ指摘する程、一心は愚かでは無い。

一護がそれに気付いていることも、彼は気づいていた。

そう思った一心の耳に、先日の会話がふと蘇る。

まだ、時間がいるやもしれぬな

時間、ですか。

確かに成長は目覚ましい。じゃが努力すれば何とかなる事柄ばかりではあるまい。

……ええ

母とのそうした会話の中で、一心はぐつと拳を握りしめた。

時間。

どんな手を使つてでも、贖える物なら贖いたい。

だが、そんなことは不可能だ。

時間さえあれば、一護は信頼できる臣を見つけることもできるだろう。

あるいは周りからの信頼を勝ち取る事もまた、可能なはずだ。

だが時間がない。

自分の命が間もなく尽きようとしているのは、誰よりも自分が知っていた。

「なあ、一護」

名義上は上位である一心に種々の報告をしていた一護は、遮る声に片眉を上げた。

いつもは黙って聞いている一心にしては、珍しい事ではある。

黙ったまま促した一護に、一心は僅かの間唇を引き結んだ後、口を開いた。

「何か、やってみたらどうだ」

何の脈絡もない発言に、一護はますます片眉を吊り上げた。

「何かって？」

「知るか。お前にしかできねえなにかを、やってみろって言ったんだ」

「俺にしかできない？」

眉間に皺を寄せた一護に、一心は頷く。

「お前は、ここで生まれ育ったわけじゃねえ。だから、お前にしかできないことがあるはずだ。お前にしか見えていない物もな」

それが何かは知らねえが、一心はそう付け足すと、口を閉じた。

一方で、一護はその意を図りかねていた。

一心の言わんとしている事は、何となくわかる。

要は、現世生まれという自分の最大の弱点とも言える点を活かせと
いうことだろう。

「あつちのやり方は、こつちじゃ通じねえだろ」

文化も言葉も持ち込めねえんだから。

どこか言い訳じみた口調で一護が言つと、一心は首を横へ振った。

「そうとは限らねえさ。それに、お前がどれだけこつちのやり方を真似たって、他より上手くはいつてねえじゃねえか」

今度は、一護が黙する番だった。

たくさん学んだし、それなりに経験も積んできた。

だがやはり、それでは足りないのだと思わせられる事は多い。

いずれ行く道を考えれば、自分は誰よりもこの人間でいなければ
ならないのに。

黙したままの一護に、一心は首を横へ振った。

「無理をしたって、何も上手くいかねえ。そんなことぐらいはわかるだろ」

一護は小さく頷いた。

それぐらいはわかる。けどわからない。

自分にしかできない事、自分にしか見えていない事が。

それから数日経って、一護はある書類に目を留めていた。

それは土木関係や工芸美術に関する庁、工部からの書類だった。

王土は、5つの州にわけられる。

一つは中央州。

一護達の住む王宮がある、商工業で発展した都を中心とした最も栄えている地域。

続くのが、北・西・南・東のそれぞれの州だった。

山がちで貧しいが、工芸品と薬草で有名な北州。

小麦の栽培と林業が主産業の西州。

海があり、漁業が盛んで温暖な南州。

肥沃な土壌と大河を活かした、稲作のさかんな東州。

その書類は、東州を流れる大河の堤防に関するものだった。

もうずいぶん古びた書類と、そして今年度新たに作成された書類。

新しい方の書類には、今年度も堤防工事を行う予定はないと書かれていた。

しかし去年も一昨年も、更に遡っても堤防工事をするという話を聞いた事はない。

ずっと遡って見つけたのが、数百年前の記述だった。

「なあ、これ」

おもむろに、側にいた官吏に声をかける。

「なんでしよう」

「……もうずっと堤防工事やってないみたいだけど、大丈夫なのか？」

二枚の書類を差し出すと、その官吏は思案顔になった。

しばらくそうして考えていたが、ややあってその書類を返してくる。「堤防というものは、踏み固められることで強くなります。植えられた木が生長して根を張ることによっても同じです。堤防とは、年を経ることに強くなるものですから。切れそうだというような報告もないのですから、心配せずとも大丈夫ではないかと」

「……そっか」

官吏や巡察使達がそんな兆候を見逃すはずがないのだから、確かにそうかもしれない。

何より自分もこの件に関しては素人だ。

担当の部署に任せておけば、問題ないだろう。

そう思いなおした一護は、その時は大人しくその案件をたたんだ。

そうしてまた数日が経った頃、一護は再びその書類を睨みつけていた。

以前と違うところがあるとすれば、それは机の上に地図と数枚の書類 更に以前の堤防工事に関する書類 が増えているという事。睨みつけている理由は、その地形だった。

「天井川」

ぽつりと呟いた一護に、先日の官吏が何事かと顔を上げる。

「これ、この川……天井川、だよな」

聞き慣れぬ言葉に首をかしげた官吏に、一護は内心でしまったと舌

打ちする。

天井川というのは、現世の言葉だった。

「この川の底つてさ、堤防の外にある地面よりも高い位置にあるよな」

一護がいくつかの記述を示すと、官吏は頷く。

外から見ると大人が四人は縦に並べる程高い堤防にもかかわらず、内側から見るとそれは一人に足りるかどうか。

つまり、川の水が運んだ土砂が堆積し、徐々に川底が上がってきているのだ。

これまでに行われた工事も、そうして川底が上がってきたからという理由で堤防を高くするもの。

しかし大人一人の高さとなれば、増水すればもつはずもない。

一護は、そういう懸念を抱いていた。

しかしその事を告げると、官吏は首を横へ振った。

「洪水など、起こるはずがありません。王土は開闢以来、ずっと災害より護られてきた土地なのですから」

またこれだ、と一護は目を瞑る。

王土の人間は、よくもわるくも災害に対して疎い。

下手に心配し過ぎて神経質にならないのは、よいことかもしれない。だがそうして悪化したのが、あの疫病だ。

そうした一護の様子に気付いてか、官吏はくぎを刺すように言った。

「工部に対してお命じになられるのは構いませんが……あれは職人の集まり。素人が口を出すなど、そう言われると思われます」

一護はその言葉に一瞬ひるんだが、それでも首を横へ振る。

「聞いてみなきゃ、わからない」

工部の長官を呼ぶように命じると、官吏は黙して頷いた。

結果としては、官吏の予想通りになった。

口調こそ柔らかかではある物の、それははっきりとした拒絶。

とりようによつては侮蔑にさえ聞こえる言葉で言われた一護は、黙
り込んで同意するしかなかった。

経験や人望があれば、あるいはもう少しまともに取り扱ってくれる
のかもしれない。

それでも、俺にはそれがないから。

青いと評される俺でしかないから、だから。

卑屈にならないようにと心がけながらも、そう思わずにはいられな
かった。

いつか必ず、そう誓った一護に思いがけない　しかし最悪の
転機が訪れたのは、それから間もなくのことだった。

「ほい、これが今回分の報告書な」

「おう、お疲れ」

春月が差し出した報告書を受けとり、一護はざっと目を通す。

東州で巡察使をしている彼からの報告は、とくに変わったところがないように思われた。

しかし、しばらく目を通していた一護は、ある一点で目を止める。
それを見とめた春月は、首をかしげて一護に問うた。

「何か、あつたか？」

「あー……いや。何でも無い」

「そうか」

春月はすぐに引き下がったが、一護はやはりその一点に目を向けたままだった。

三月の会のために集まった巡察使達から次々と上がって来る報告書に、一護はどこかひっかかりを覚えていた。

民や土地を直に見て回る巡察使達からの報告は、例え小さなことでも大きな意味を持つものがある。

何か見落としていることがあるのか。

何度も読み返した一護は、ある事実気付いた。

今年は、雪融けが少し早いようだ……

夏が早く、今年は田植えが早まって……

もう少し先のはずの魚が取れている。初物は高く売れたと……

総合すれば、例年と比べて気温が高いらしいということ。

しかしその微妙なずれが、一護には何かの予兆としてとれた。

そして地図と見比べ、地域ごとのずれの日数を比べることで、それは確信に変わる。

例年と比べて一番気温が上がっているのは、南州。

その熱は海水を蒸発させ、東・北へと吹きつけている。

その熱気は各地の気温を上げ、そうして北州の雪を急速に融かしている。

今起きているのは、ここまでのだ。

だが、これから先に起こることも大まかに予測できた。

大量の水蒸気を含んだ水は北州の山地に当たり、雨を降らせる。
そして大量の雪解け水。それらが行きつくのは。

川底が上がっている、東州の大河。

東州は田園の広がるなだらかな平地だ。
洪水が起きれば、ひとたまりもない。

雨、堤防、増水した川。

一護の目に、あの幻影がちらついた。

S 1 3 箱舟の詩 地（後書き）

タイトル日本語訳は「其にのみ能うもの」

以前活動報告で少しふれた話、これがそれになります。とにかく必死になって、何とか書きあげたつもりです。

本編の方でも、この話には何度が触れてきました。

この大きな災厄の中で、一護がどう動き、どう成長していくのか。本編には納められなかった一護の成長が、ここに表れていればいいなと思います。

それにしても、この話を投稿するドキドキ感が半端じゃない。どれだけって、一心が王族でした的な話を桐生が冬獅郎にした話と同じくらい。

あの時は、果してこんな設定がアリなものかとひたすらに怯えていたような気がします。

それだけ重要な話だということですかね。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 3 箱舟の詩 水（前書き）

1 1 0 話の少し後から始まります。

S 13 箱舟の詩 水

見よ、わたしは地上に洪水をもたらし、命の霊をもつ、すべて肉なるものを天の下から滅ぼす。地上のすべてのものは息絶える。

旧約聖書 創世記より

洪水が起きるかもしれない ……

その事実気づいてからの一護の行動は、素早かった。

必要と思しき資料を各部署からかき集め、過去の少ない事例を辿る。更には現世より持ち込んだ本からも事例を探し、思いつく限りの可能性を検討した。

そうしてやはりと確信した後、一護は急ぎ東宮府へと戻った。

これ以上は、自分の手に余る。

決して無理な判断はしない、それもまた、彼が新たに身につけた能力なのかもしれなかった。

“自分にしかできないこと”

そんな話からたった一週間ほどしか経っていないにもかかわらず、一心の容体は坂を転げるように悪くなっていた。

寝台から出る事さえままならず、何とか体を起こして迎えた一心に、一護は戸惑う。

「……今、大丈夫か？」

案じるように問いかけたものの、事は一刻を争う。

できることならば今話したいと、一護は強く思った。

「ああ」

そんな雰囲気を感じたのだろう、一心は頷く。

本当は休みたいが、一護が理由もなく今の彼に会いにくるわけがなかったから。

一護がまとめた資料に、一心は目を通して行く。

一護は時折口を挟もうとしたが、こらえた。

とにかくどうにかしなくてはいけないと、焦りだけが先行しているのは自覚していた。

だが、資料を見ているその厳しい表情から、その考えが自分と同じであることが嫌でもわかってしまう。

もう、間に合わない……

何もかも、全て遅すぎた。

それが、一護の心に重くのしかかっていた。

川の増水は、少しずつ始まっている。

今はまだ例年の雪融けの量に過ぎないから、誰も時期が早いとしか気づいてはいないのだが、それでも確実に。

「一護」

ぐっと唇を噛んだ一護に、一心は声をかける。

「紙と筆、よこせ」

その思いつめた表情を見ないようにしながら、一心は一護にそう言った。

一心は何かを書いている間、一言も発しなかった。

一護も黙ってそれを見ているだけで、だから何が書かれているのかはわからない。

長い長い時間、病んだ体には過ぎた負担になる程の時間、一心は何かを書き続けた。

ようやくそれが終わり、一心は一護にその紙束を渡す。

「これを、陛下に渡してくれ」

「何が書いてあるんだ？」

知る権利があるはずだ、と問いかけた一護だったが、一心は答えなかった。

「そのうち、わかる」

ただそれだけ言うと、一心は一瞬目を閉じる。

それが考えをまとめている動作だというのは、これまで経験で一護は知っていた。

「お前が今さら何を言ったところで、官吏達は動かない。それは、わかるな？」

すぐに口を開いた一心に、一護は頷く。

「あア」

それは、信頼以前の問題だ。

一護の立てた推測には、現世の知識が多く使われている。

根拠を明かす事が出来なければ、例え一心が言ったとしても誰も信じないだろう。

そもそも、洪水など文献に残っているかさえ怪しいような土地だ。災害に疎い王土の民が、まともにとりあうとは思えなかった。

もっと早く気付いていれば、あるいは何らかの対応を密かに施す事が出来たかもしれない。

例えば救援物資を確保しておくとか、さりげなく避難先や経路を確認させておくとか、対応を考えておくとか。

そんなこと、考え始めればきりがない。
だが、遅すぎた。
結局はそれに尽きてしまう。

すでに川の増水は始まっている。
あの低い堤防が、そう長くもつはずもない。

俺にもう少し力があれば、今からでも何かができたかもしれない。
だがあいにく、俺にはそんな信頼も人望もない。
そう、思う。
だが、思ったところで。

一心はしばらく黙った後、躊躇うように口を開いた。
それが何に対する躊躇いなのか、一護は内心で首をかしげる。
だが、それはすぐに明らかになった。

「王土の誰も、経験したことのないような災害になる」
一護はそれがわかっていているために、黙って頷いた。
誰も、霊王さえも、聞いた事のないような災害。
とはいえ一護自身も、現世に居たところにテレビで見た程度でしかない。
それでも、差は大きい。

「だから、誰も対応できない　お前を除けば、な」
一護が大きく目を見開いたのに構わず、一心は話し続けた。

「護れ。今のお前にならできるはずだ。お前の持つ全てを懸けて、官吏を指揮しろ」

呆気にとられた一護は、一瞬してから己を取り戻した。

「無理だ、そんなもん」

半ば反射で返した言葉に、一心は首を横へ振る。

「無理かどうかなんて、わかんねえだろうが」

「わかるよ！ 親父だってわかってるだろ……俺にそんなこと、できるわけねえよ」

しりすばみに小さくなる声が、一護の自信の無さを如実に表していた。

官吏を指揮するなど、そんな経験は今まで無い。

何かもつと小さな事ならともかく、きつと大きな災害になるこの一件を背負いきれるはずがない。

無理だと首を横へ振る一護の肩を、一心は強く掴んだ。

ひどく痩せてしまったのに、その力の強さは変わらない。

そのことに一瞬動揺したために、一護はまともに一心の目を見てしまった。

「なら、見殺しにするのか？ お前なら助けられたはずの人達を、お前は今見殺しにしようとしてるんだぞ？」

その強い瞳に、一護は目を逸らす。

病んでいるとは思えない、驚くほど強い瞳だった。

見殺しにする、その言葉が強く刺さる。

そつだ、俺が今動かなければ、たくさんの人が死んでしまつ。
俺に何ができるかはわからない、それでも俺にしかできないことがあるかもしれない。

そんなことは、王土（じこ）に来てから いや、あの時から、初めてだつた。

「お前が、護るんだ。……一護」

一護は、その聞き覚えのある言葉にはつとした。
正確に言つなら、少し違つその言葉。

俺達が、空座町を護るんだ

“俺達が”

あの時はそつだつたはずの言葉が、今は違つ。

“お前が”

それは それはもう、時が無い事を明確に示していた。

一心だつて、自分で何かしたいはずだつた。

それぐらいは、一護にもわかる。

自分で、自分の手で、護りたいはずだ。

それでも、できない。

そんな体力は、一心にはとうに残されていない。

一護は、しばらく黙つたままだつた。

だから、一心は待つた。

ぐつと唇を引き結んで、託された手紙に視線を落としている一護を。きつとやってくれると信じられるから、待つことができる。

しばらくして、一護は肩に置かれた手をそつと振り払った。

ただ黙ったまま、その手紙をしっかりと握りしめて、立ち上がる。

そのまま無言で、一護は部屋を後にした。

それが、答だった。

ボタンと閉じられた扉を、一心は一人見つめる。

彼のみになった部屋は、ひどく静かだった。

「……一護」

どこか祈るような口調で、一心は小さく呟く。

一護は立ち上がってから一度も視線を合せなかったから、はつきりとはわからない。

それでも、その瞳の強い光を、一心は見た気がした。

どうか、みんなを護ってくれ。

それは、若い頃に巡察使として東州で過ごし、そして疫病から彼らを護れなかった一心の、強い強い、最期の願いだった。

S 1 3 箱舟の詩 水（後書き）

前話の後書きでは触れませんでした。冒頭に書かれているのはノアの箱舟の一篇です。

この為だけに友人から聖書を借りてきました。

この場を借りて、ありがとうね。Y。

一護が背負おうとしているもの、やらなくてはならないこと。

それらは、一心が死に近づくとつれてより迫ってくる。

何もかもに時間が足りない、そんな焦りはきつと相当なものかと。

ところで、この章ではタイトルに話数ではなく「地」「水」と漢字をいれています。

続くのは「火」「識」「空」「風」

“六大”という仏教用語で、万物の構成要素とされるものだそうです。

……なんかやたら宗教チックだな。そんなつもりもないのに。

その話が一番合う一文字を選択して入れています。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 3 箱舟の詩 火(前書き)

1 1 1 話の数日後から始まります。

S 13 箱舟の詩 火

七日が過ぎて、洪水が地上に起こった。この日、大いなる深淵の源がごとごとく裂け、天の窓が開かれた。

旧約聖書 創世記より

save 2

それからの数日、一護は必死になって自分にできる事をした。官吏への説明や説得など、やるだけむだだ。

すでに陛下に報告したのだから、そっちは任せたらいい。

今“自分にしかできないこと”は、いかにして洪水が起こった後の被害を小さくするか。
その一点に尽きた。

「おい、一護。これでいいのか？」

とたとた、とコンが本を持って走ってくる。

一護はそれを受け取ると背表紙を確認した。

「『気象のしくみ』か……よさそうだな。助かる」

「おう！ 次は何だ？」

「あー……何か昔のこういう事例の……集中豪雨とかの、ねえか？
台風とかでも」

「それなら、もって来ましたぞ」

コンと同じ方向から走ってきた蔵人の差し出した本を手にとって、
一護は頷く。

「ありがとな。じゃあ、保存のきく食べ物とか、探してくれるか」
「任せとけ」
「了解しました」

彼らがいるのは、現世から持ち込んだ本が納められている部屋だった。

何か役に立ちそうなものを、と片っ端から漁る一護をみていたコン達が、自ら手伝いを名乗りでたのである。
そうして四人の手を借りた一護は、着々と準備を整えつつあった。

「はいこれっ！ 昔ながらの保存食品がのってたわ」

「こちらは集中豪雨の記録ですな」

「……」

「こっちは台風の本だ。決壊した川のこと載ってたぜ」
彼らが次々と集めてくる本の内容を、一護は片っ端から頭に叩きこんでいった。

そして、洪水は起きた。

錯綜する情報、広まる噂。

主だった官吏までもが、未曾有の事態に混乱する。

騒然となった政庁のなかで、唯一人、一護だけが冷静だった。

培った経験、積み上げてきた信頼、手に入れた人脈。

他の王族と比べれば、あまりにも些細なそれらを駆使して、一護は事態を理解すべく奔走する。

何もかも、手遅れになどさせないと、ただその決意を胸にして。

そうして開かれた緊急の会議で、一護は啞然とした。

これは一体何だと、自問する。

そうして出た結論は、こいつらはバカかという、ただそれだけだった。

官吏たちは、集まるには集まった。

だが誰もかもが早口に何かをまくしたてるばかりで、意識して聞きとってみれば、それはいつのものだというような古い情報だったり、全くの間違った情報。

災害慣れしていない、確かにそれは痛いかもしれない。

だから混乱しても仕方がない。

最初は、そう思おうとした。

だが、途中で気づく。

彼らには、自分に与えられた職責があるはずだ。

一護自身がそうであるのと同じように。

だから、それを果たす義務がある。

なのに、いくらこんな状況だからと言って、何をすべきか把握する努力さえできないとはどういう事だ。

それでも、途中までは耐えた。

今騒ぎを起こすのは、得策じゃない。

よくて焼け石に水。下手すれば混乱を大きくするだけ。

一刻も早く対策に取り掛かるために、今は耐えるべきだった。

だがそれでも、途中で限界がきた。

ダン、と強い音がざわめきを切り裂く。
誰もがその音のした方を向き、その中心にいる一護は内心で自分に舌打ちした。
手に持った厚い資料を、無意識のうちに机に叩きつけたらしい。
しまった、と思った。
だが、もう遅い。

しかし、それで事態が少し動いた。
静かになった議場に、霊王の声が響き渡る。

「一護や、何ぞ発言でもあるか？」

よく通るその声に、誰もが居住まいを正し、そして一護を見つめた。
一方で一護は、ゆっくりと上座へ視線を向ける。

「少し、確認させていただいてもよろしいですか？」

霊王のすぐ近くに据えられた空席を見ないようにしながら、一護はそう問いかけた。

「構わぬ」

短いた承に目礼すると、一護は未だ自分を見つめる官吏たちへと向き直る。

さあ、はじまりだ。

一護は一瞬目を閉じると、痩せ型の男性官吏を見つめた。

「戸部尚書。被害にあった地区の人口は？」

「ええと……」

わたわたと、もともと部屋に置いてあった資料繰る戸部尚書だが、しばらくしてぴたりと手を止めた。

「……そもそも、被災した地区さえ正確な情報が入っておらぬはずですが」

そんなものをどう調べると言わんばかりの言い種に、一護は内心で溜息をつく。

もう三時間も前に、地区名だけの情報は届いている。

「東州璃鍊郡及び透楼郡全域、更には下流の弧醍郡趙絡村。これらが少なく見積もった場合の壊滅地域。その周辺地域も準じた様であるとの報告を受けているが」

戸部尚書は呆気にとられた。

何故、そんな情報を彼は知っている？

そんな情報など、自分の情報網には欠片も引つかからなかったというのに。

とはいえ視線で促された戸部尚書は、その地区の人口を読み上げた。

「工部尚書。最初に決壊した正確な位置は、璃鍊の役所より北へ八里、大墨橋の付近で間違いないだろうか」

「……え、ええ」

そう言えばそんな情報も合った気がする。

懸命に引つ張りだした記憶と照合して頷いた工部尚書に一護は目礼すると、次々と確認を進めた。

被害を受けた範囲、その種類 浸水か、あるいは土砂災害か

さらにはその程度、送ることのできる支援物資、人材。

しかしそのどれも一護の方が詳しく正確に把握しており、大官達は息を飲む。

何故。

何故、専門家である我らよりも、この現世生まれの公子は詳しい状況を知っている。

だが一方で、議場の隅に居る下っ端官吏たちは知っていた。

彼が下つ端の自分たちにあれこれと聞いて回っていた事を、新しい情報が入ったらすぐに教えてくれと自ら頼んで回っていた事を。それは彼の立場には全く似つかわしくない振る舞いだったが、彼らはそこに彼の誠実さを感じていた。

一方で、一護は状況を整理しながら着々と策を講じていた。その様子を見た凧もまた、舌を巻く。

助け船を出す用意はしてあった。

だが、これは想定外。

ひよつとしたら、と思う。

この場に於いて、一護だけが正確で的確な判断を下せるのかもしれない。

そして、そう思っているのは決して凧だけではなかった。

官吏たちを問いつめていった一護の頭の中に組み上がったのは、これから出すべき指示。

「一護」

短く呼び掛けられ、一護は霊王を見上げる。

壇上に在る祖母と、はっきりと目があった。

「お前の考えでよい、何をすべきか、言うてみい」

指示を出す事を無意識下で躊躇った一護の思考を読んでは、霊王は先手を打った。

そして一護は、ゆっくりとそれに頷く。

これは、信頼だ。

霊王から寄せられた重すぎる思いは、かつて一護が他に寄せ、寄せられていた物に相違ない。

ならば、応えなくては。

「まず、被災地に米を送るという意見ですが、これには賛成しかねます」

ざわつと、空気が動く。

一護はそれを当然の反応と思いながらも、少し考えればわかることじゃないかと官吏たちに苛つく。

「あちらには食べ物がない！ 米を送らねば」

「送ったところで、食べられない。これだけの水害だ。薪は全て使えなくなつたとみていい。火が無ければ、米は炊けない。そもそも清潔な水があるなら怪我の治療や飲料用にまわすべきだろう」

理路整然と言われた官吏は、驚いて一護を見つめる。

確かに、それはそうかもしれない。

全くそこに気づいていなかったために、それに気付いていた一護に驚いた。

「加工が終わり、すぐに食べられる物を送るべきだ。小麦の粉を練って焼いたものであれば、多少あぶつたら食べられる。砂糖や塩で漬けたもの、干した物なら大抵の食品は日持ちする。平等に、その上で栄養のあるものは弱っている者に優先的にわたるように指示を出すべきだ」

一護はそう言つと、自分の持っている資料から、送ることのできる食品の例を上げた。

何人かの官吏はそれを書き留め、部下に即刻で集めるように指示を出す。

それを見た一護は、他に送るべき物資についての意見を述べた。

暖をとるために必要なもの、怪我人や病人の治療に必要なもの、具体的だが簡潔にまとめられたそれらは、混乱した状況を少しずつ収めていった。

そして次に、救助部隊についての意見を述べ始めようとしたが、それは、緩慢な動作で手を上げた礼部尚書によって遮られる。尚書令が促すと、彼はゆっくりとした口調で話し始めた。

「そうした食品や物資を送るということには、異存はありません。……ですが、どうやってそれらを集めるおつもりですか？ 各地の常平倉に蓄えられているのは、主として穀物のみ。毛布や砂糖漬けなど、今からどうやって」

「どうやって？」

驚くほど冷たい声が、礼部尚書の声を遮る。

凜はちらりと視線を動かし、内心の溜め息と共に静かに目を閉じた。

だめだ、完全に怒らせた。

凜が瞬間的に目撃し、そして視界から追い出したのは、眉間の皺が二割増しになっている一護だった。

かつての彼は、怒りはわかりやすく表情と言葉とに熱をもって現れた。だが、今は違う。

むしろそれは冷たさを伴って、限りなく鋭く研がれた刃のように周囲を威圧する。

そちらの方がよほど怖いというのは、もちろん言うまでもない。

「礼部尚書、何か勘違いをされているのでは？」

わー言葉遣いが丁寧になってるあーあすっごい怒ってるわー
もういっそ他人事として凜が内心で呟くのを余所に、一護は再び口

を開いた。

「どうやって、など今は関係ないはず。どうにかしてやるのが、ここにいる我等の責務なのでは？」

だが、礼部尚書も負けてはいなかった。

彼とて長く官吏をやっているのだから、この程度はどうってことない。

そう、この程度ならば。

「正当な手続きを踏み、間違いなくことを進めるのが、我等の責務です。何か勘違いをされているのは、あなたではありませんか？」
そして礼部尚書がそう言った瞬間、王族達はそろって視線をそらした。

こいつ、死んだな、と。

「正当な手続きを踏むのは当たり前。そんなことは常識の問題だ。だがあなたは忘れているのでは？ 今も、東の地では苦しんでいる民たちが大勢いる。それを護るのが、第一の責務とは思わないのか？」

「……法に定められた手続きがあります。それを蔑ろにするわけにはいかぬでしょう。何より慣例では」

「慣例で、人を殺すのか？」

「そうは言っておりません。しかしあなたがおっしゃっていることは道理を外れたやり方です」

「なら、あなたは目の前で人が死ぬのを見たことがあるのか？ 助かったかもしれない命が、むざむざと目の前で奪われていく様を！」
そこで初めて、一護は声を荒げた。

「……そのようなこと、あるはずがないでしょう。ここは王土。霊王陛下御自らの」

「今現実にいるんだよ！ そうやって大事な何かを失っている人が！ 知らないで勝手な口を」

「ならば、あなたはあるのですか？ 先ほどからずいぶんと、見たことがあるかのような言い方ですが」

礼部尚書は、どこか勝ち誇ったような口調で言った。

そんなことが、あるはずがないと。

どこまでも青いこの公子に、そんな経験があるはずがないと、そう信じ込んでいたから。

誰かがため息をついた音が、一護の耳に滑り込んでくる。

何が引き金なのか、もうわからない。

気がつけば、一護は立ち上がっていた。

「俺の母親は！ 川に落ちた俺を庇って死んだんだ！」

ざわりと空気が揺れるのを感じながら、一護は一瞬目を閉じた。

ごうごうと水の流れる音がして、遠くを電車が通っていく音がして、堤防の道路を無機質な光が照らしている。

覆い被さる母の重みも、その温もりが消えていく感覚も、光の抜け落ちた瞳も、濃い血のおいも、雨と涙と一緒に流れていくその全てが、未だはつきりと蘇る。

あんな思いをしている誰かが、確かに今存在しているのだ。

自らの疵を晒すという、本能的に避けがちになることを、反射的と

はいえやっつてのけたのはそのためだ。
もともと、そのうち使うことになるだろうと覚悟もしてあった。

未だ痛みを伴って想起されるそれを、自分の手札として利用する。
やりたくない、でも、こうすることで必ず事態は優勢になるはずだ
から。

護るためなら、彼の人も必ず許してくれるはずだと信じて。
何より、彼の人の死を活かせることが万が一にもあるとしたら、そ
れはもうここ以外には有り得ない。

護るために何かしらの犠牲が必要なのは、何度も痛感してきた。
こんな傷口をえぐるような真似なんて、安いもんだ。

だから一護は、その疵を晒した。
決意は、固い。

さすがに驚いたらしい礼部尚書を真つ直ぐに見据えて、一護は再び
口を開く。

「今でも、あの時のことをはつきりと思い出せる。見たもの、聞いた音、嗅いだ血のおいまで寸分と違わずにだ！ おふくろが死んで、親父も俺も妹たちも死ぬほど辛い思いしてきたんだよ！ 政庁この動き次第で、そんな思いする奴を減らせるんだ！ 慣例だなんだで人の一生めちやくちやにしてたまるか！」
誰も、何も言えないで一護を見ている。
口調が崩れていることを、誰も咎めなかった。

それほどに、吞まれていた。

「あんたらの部下の中にもなあ、趙絡の出身で今すぐにも馬駆つ

て親助けに行きてえの必死でこらえて情報さらってるやついるんだよ！　なのになんだ？！　あんたらのがよっぽど経験もあんのにそんなにばたばたして、下っ端のそいつの方がよっぽど骨あるじゃねえか！　ぎゃーぎゃーわめいてる暇あったら少しでも多く助けるだけの努力しやがれ！　人を見殺しにする道理なんざあってたまるか！

怒鳴り付けられた礼部尚書がびくりと肩を震わせたが、一護にしてはボケだの何だのと罵倒語彙を使わなかっただけ手加減だ。しかしこれだけ言っても怒りは収まらず、握った拳に力が籠る。気持ちを落ち着けようと、一護はもう一度目を閉じた。

そうして一護の声が響く議場の隅で、え、と小さく声をあげた官吏がいた。

議場に席を与えられない下っ端で、内容を知るには傍聴席に滑り込むしかないような　そんな、自分を。

まさか、覚えていてくれるとは思わなかった。

それ以上に、故郷が趙絡ひょうりやくであることを知っているなどと。

確かに、この一件に関して何度か報告をした。

だが、それはあくまで事務的なもので、故郷の話をしたことなど一度もないのに。

それでも、その下っ端が自分であることは間違いない。

小さく寂れた村で、国官なんぞ俺の生きている間では自分が初めてだと聞かされていた。

そして、そう言ってくれた長老はきつともう。

ああそうだ、会いに行きたい、助けに生きたい。

馬は苦手だけど乗れなくはないから、道中虚に襲われようとも構わ

ないから、側に行きたい。 会いたい。

そこまで必死に耐えて耐えて耐えてきた彼女は、そこでついに嗚咽を漏らした。

自分一人が駆けたところで、まして泣いてどうにかなるものでもなく、するべきことを必死に探してこなすことができつと誰かが助かると、自分では力が足りなくても力を持つ誰かが助けしてくれると、そう信じるしかなくて。

でも、上官はあんなで、助けてくれそうになかった。

本当にだめかもしれない。

そんな思いを押し殺してきて、ようやく、今。

大丈夫だ、と。

何の確証もないけど、彼ならきつと助けてくれると信じられた。この痛みを知っている人だから、必ず手を尽くしてくれると。

涙に滲んだ視界に写った橙は、まさしく希望の光に見えた。

間を置いたことでもいくらか冷静になったのか、一護の口調に少し丁寧さが戻る。

「こんなに平和な世界で、人の生き死に出くわすことが少ないのは仕方がねえ。それは、俺もわかってる。俺は確かに特殊な経験を多くしてきて、それで普通の現世の魂魄より見て来たものも多い。だから、この気持ちを理解してくれとは言わねえ。……だけど、推し量ることはできるだろ。遺す者も、遺される者も、同じだけ辛いんだ。そんな思いを、他にさせたくない。今は、慣例についてとかく言ってる時じゃない。そんなのは、全部終わってからもいいだろ」

議場は、しんと静かだった。

一護の言葉が痛いほどに空気を張り詰めさせていく様子が、視認できるところではないかと思われるほどに。

礼部尚書は、もう何も言わなかった。

その様子を見護っていた霊王は、書類の中に混ざった厚い紙束に目を止める。

息子の考えが正しい事を悟って、霊王は口を開いた。

「一護や」

鋭く名前を呼ぶと、一護はピタリと口を閉じた。

その目に灯された確かな光に、霊王は内心で溜息をつく。

こんな力量があるのなら、もっと早くから使うべきだったと。

「この件、お前に預ける。必要な物は何を使っても構わん。これ以上の死者を出さぬよう、尽力せよ」

驚いたのは、一護だけでは無かった。

官吏たちも、他の王族たちも、誰もが食い入るように霊王を見つめる。

こんなに大きな案件を任せれば、下手をすれば潰れてしまう。

王族たちのそんな危惧にも似た視線を、あるいは官吏達のやつかみにも似た視線や、厄介事を押し付けられずに済んだ安堵の視線を跳ねのけて、霊王はただ真つ直ぐに一護を見つめた。

「今のそなたは、誰よりも状況をよう知っておる。我等のなか

で誰よりも適任じゃ。……依存のあるものは、おるまいの？」
靈王が強い視線で議場を見渡せば、誰もがそこから目を逸らした。
この視線に勝てる者がいない事を知っていて、彼女はそうする。
それは何より、これからの事を見据えてだ。

「やれるな、一護」

もう一度名前を呼べば、一護は静かに立ち上がった。

その声を聞き、表情と目を見た一護はようやく得心した。
父から託された手紙、その中身を。

王土に来て一番最初に教わった、靈王に対する正式な礼をとる。

「必ず、護ります」

その短く誠実な言葉に、靈王は満足そうにならずいた。

S 1 3 箱舟の詩 火（後書き）

タイトル日本語訳は「護る 弐」

そうして起こった洪水。

生まれて初めての天災に、官吏たちだつて戸惑わずにはいられない。それよりも何よりも、その場にいる人たちが一番混乱しているのに決まっているのに。

それを知っているからこそ、一護は怒る。

でも怒つても何も始まらない、一護はそれがわかっているからこそ道を示した。

その道の先にあるのは、きっと希望のはず。

奇しくも本日は6月17日。

一護達家族が、真咲さんというかけがえのない人を失った日です。

彼女の存在が今の一護を形作っているというのは、恐らく誰も疑わないと思います。

それほど大切な人で、だからこそ最も辛い日。

もうあんなのはいらぬ　　そう誓った一護が、果たしてどう動くのか。

周りはそのような一護に何を思い、何を見るのか。

そんな彼らを、少しでも書けていたらいいなと思います。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 3 箱舟の詩 識（前書き）

1 1 2 話の少し後から始まります。

S 13 箱舟の詩 識

洪水は四十日間地上を覆った。水は次第に増して箱舟を押し上げ、箱舟は大地を離れて浮かんだ。水は勢力を増し、地の上に大いになぎり、箱舟は水の面を漂った。

旧約聖書 創世記より

hope, it's light

霊王から権を委ねられた一護は、補佐についた凜の助けも得て、次々と指示を出して行った。

大官達も、中には不服そうな者もいたが、それでもその指示の的確さは認めざるを得ない。

霊王の言った通り、誰よりも一護が適任だった。

「まだ、降っているみたいね」

凜の呟きに一護が書類から顔を上げると、東の空が見えた。

王宮のある中央州がかりと晴れ渡っているせいか、墨を流したように真っ黒な東の空が、一層映えて見える。

「早く、止むといいんですけど」

対策をしてはいる、対応もしている。

でも、雨が止まないかぎり、大きな手に打って出る事は出来ない。今はただ、雨が止むのを待つしかないのだ。

「失礼いたします。春月様より報告が届きました」

下官の声にはっとして振り返ると、その手に握られた厚い紙束が差し出される。

一護と凜は一瞬互いの目を見交わすと、その書類に目を通し始めた。東州担当の春月が、応援に駆け付けた巡察使達の代表を務めている。現場からの報告のなかでは、一番あてになる情報だった。

「絳砂村……無事だったみたいすね」

「ええ。あそこの村長殿は賢い方だから」

ずっと連絡が途絶え、向かおうにも氾濫した河川に阻まれて行方不明となっていた村人達。

しかし村長の機転で難を逃れ、生き延びていた。

そのことに胸をなでおろしつつ、他の村についての記述に目を通していく。

他にも似た様な状況で生き延びた村や地域がある一方で、目を逸らしたくなるような現実もそこにはあった。

「葉齊村は全滅、か」

被害に合った地域のなかでは、川から一番離れていた地域。

だからこそ、油断したのだろうか。

土砂崩れに堰止められた箇所から水があふれ、思いがけない方向からやって来た鉄砲水に流されたのだ、と。

「他にもあるわ……避難先も危なくなつて、逃げる途中で巻き込まれた家族もいると。田んぼを見に行つて、帰つてこない人も」

「……そうすね」

よほど急いで書かれたためか、もはや暗号と言っても差し支えない程の走り書きの報告書。

それらに目を凝らしていた一護は、ある報告に思わず息をつめた。

「一護君？」

驚いて問いかけてきた凜に、一護は何でも無いと首を振る。

そうしてもう一度報告書に視線を落とし、気づかれないように重い

息を吐いた。

その報告書に綴られていたのは、一護には殊に重い話だった。

逃げ遅れた子供を庇って、母親が死亡。息子もまた一時は危なかったが、今のところ命に別条はなく……

読みづらいことこの上ない走り書きのなかで、そこだけは妙に丁寧に書かれていた。
書くことを躊躇った、つまりは気を使われたのだというのは、一護にもよくわかる。

あの日の話は、王族ならば誰もが知っている事だから。

一護はもう一度溜息を押し殺すと、ここ数カ月分の巡察使からの報告書の山を一瞥した。

大雪、花の開花時期、動物の動き……それには、予兆とも言つべき事象が見て取れた。

気づくべきだった。

この全てに目を通していたのだから、気づくことは十分に可能だったはずだ。

もっと早くに気付いていたら、あるいはこの母親も死なずに済んだかもしれない。

無意識のうちに、ぐっと唇を噛む。

思ったところで今さらどうにもならないとはわかっている、思う事を止められない。

結局、自分は何も進歩していないのかもしれないと、どこか自嘲気味に考えさえした。

あのころより、精神的にも、身体的にも、もちろん知識的にも力はついたと思う。

王族として与えられた権力もある。

そうだというのに、自分と同じ境遇の子供を作ってしまった。

もうそんなのはいらないと、そう思った筈なのに、今また。

どんなにか、辛いだろう。

残される側も、残す側も、同じだけ辛い。

ただ、自分が残される側であったからこそ、その遺された子供の事が思いやられてならなかった。

一護はぐっとこらえ、立ち上がる。

現世から持ち込んだ本の中から、いくつか資料を探してこなくてはならない。

どの場所に仕舞ってあったかを考えつつ、一護は無理にその一件を思考から追いやった。

現世から持ち込んだ本の納めてある部屋に入った一護は、机の上でつぶして眠っているコンに眉をひそめた。

正直腹が立つ。俺だって、もうずっとちゃんと眠っていない。

だがコンやりりん達も、資料集めを手伝ってくれているせいでちゃんと休んでいないはず。

仕方ないかと思いなおした一護は、コンの下敷きになっている目当

ての本を手を取った。
中身に間違いがないか表紙を開いたところ、ひらりと数枚の紙が舞い落ちる。

「これ、は」

思わず呟いてしまったのは、その内容に驚いたからだ。それは求めていた資料を王土で使えるように改変し、書き写してある物。

見ればコンはあちらこちらが墨で汚れていて、彼が写したというのは明らかだった。

「う……ん……」

不意に後ろから声がかかり、一護ははっとしてふり返る。

そこに広がっている光景は、あまりにも思いがけないものだった。

「夏梨……冬獅郎……りりん……」

長椅子の上で、机に突っ伏するように、本に覆いかぶさって。

それぞれ力尽きたように眠っている三人。

少し視線をずらせば、蔵人と之芭も見える。

彼らの周りに置かれているのは、気象や物理、地理学の本とその写し。

役に立ちそうな事柄を探し、片っ端から探して行ったのだろう。

一護は冬獅郎と夏梨に毛布を掛け、本に潰されていた蔵人を救いだし、机から落ちている之芭を拾い上げた。

そうして、本につぶしているりりんを振り返り、その本にはっとした。

それは、小さい頃によく読み、今はもうすっかり古びてしまった、とある絵本だった。

動物がたくさんでてくるからという、それだけの理由で好きだった絵本。

その中でもとりわけ好きだった場面がひらかれていた。鳥が、そのくちばしに青々とした葉のついた枝をくわえ、舟へと舞い戻ってくる場面。

幼いころの自分は、その鳥の背後に大きな太陽を描いていた。赤や橙、黄色、思いつく限りの明るい色を使つて。

一護はそつと手を伸ばし、その太陽に触れる。

そうして、以前にもこうしてこの太陽に触れたことを思いだした。

小さい頃は、この本が大好きだった。

それこそ、雨のたびに読むほどに、妹たちにも読みきかせるほどに。でも、雨を象徴するこの本を、あの日から読めなくなった。

そうしていつしか押し入れの隅においやられ、忘れさられていたあの本を再び読みたくなったのは、雨の止んだあの夏の終わりだった。止まない雨はないのだと、雨は必ず止むのだと、そう強く思ったことを思いだした。

一護はそつと目を閉じる。

大丈夫、まだやれる。

だから、諦める訳にはいかない。

手書きの資料を手にとると、一護は踵を返した。

雨に消えかけた光を、その瞳にはつきりと宿して。

S 1 3 箱舟の詩 識（後書き）

タイトル日本語訳は「希望、それは光」

途中で出て来た絵本は、もちろんノアの箱舟。

母親が読み聞かせてくれただろうし、自分でも読んで、妹たちにも読み聞かせた、思い出のたくさんある話。

雨の先に希望がある、それは直接的な意味でも、一護にしかわからない意味でも、忘れそうになっていたことだと思っんです。

諦めるわけにはいかない。

交わしたたくさんの約束を、反古にはできないから。

一護の瞳、その強さ。

その見据えるものを、次話で少し触れます。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 3 箱舟の詩 空（前書き）

1 1 3 話の少し後から始まります。

S 1 3 箱舟の詩 空

水はますます勢いを加えて地上にみなぎり、およそ天の下にある高い山はすべて覆われた。

旧約聖書 創世記より

t h e m o s t i m p o r t a n t t h i n g

「……はあ」

ある官吏は、小さくため息をついた。

もう何日も、こうして重い空気が政庁に立ちこめている。

どこもかしこも戦いのような もっとも彼は本当の戦いを知らないが 忙しさで、東州の雨が信じられないほどに晴れ渡った空にもかかわらず、誰もが手元の書類にばかり目を落としていた。

それはまるで、東の黒い空を見たくないと行動で示しているかのようで、かくいう彼も自身の名と同じ色の空を見上げることが無くなって久しい。

この忙しい中では、誰も聞き咎める事はないだろう。

そうして吐いた小さな息に応えたのは、彼が思いもしない人物だった。

「溜息なんて、吐くな」

「ああ、すみませ……っ!？」

何気なく振り返ったそこに立っていたのは、橙色の髪をした青年。

ここ最近少しばかり関わりがあり、そうしていつしか自分の名前も覚えて下さった彼その人。

慌てて礼を取ろうとしたその官吏を遮って、一護はある言葉を言った。

呆然としたままの官吏は、礼を取る事さえ忘れて一護を見つめる。一護は彼に少し笑いかけると、足早に歩み去った。

しばらくの間呆然と立ち尽くしていた官吏だったが、ようやく我に返り、小さく呟く。

「止まない雨はない、か」

彼は、一護の去った方角へ小さく礼を取った。その言葉に、救われた。

「おい、蒼純！ 油売ってないで戻ってきてくれ」
資料を取りに行つたまま、中々戻ってこない自分を不審に思つたのだろう。

廊下の反対側で名を読んだ親友に、蒼純は手を挙げた。

「今いくよ、忍」

そうして彼は、自分のするべき事をすべく歩き出す。少しだけ、光明が見えた気がした。

止まない雨はない。

その言葉に、先の見えなさに沈んでいた官吏たちは奮起した。当たり前前の事を忘れてしまう程、情報だけでも飲まれてしまいそんな状況が続いていた。

そうして、本来の能力を取り戻した官吏たちは、素早かった。

「もともとの能力、だよなあ」

一気に書類の回りがよくなった状況を見て、一護は呟く。

「何のこと？」

凜が問いかければ、一護は苦笑した。

「官吏達のこと。あいつら、もとが優秀なやつらばかりだろ？」

だから、一回軌道に乗ったらこんな速いんだなって」

すげえな、そう付け足した一護に、凜は内心で苦笑した。

その軌道に乗せてやった一護こそ、凜は誰よりもすごいと思う。

それでもそれは後回し、今はするべきことがある。

凜は曖昧な笑みで返すと、再び自分の仕事へと戻った。

書類の回りがよくなれば、同じだけ書類の先の動きも良くなる。

次々と送り出されていく物資、救援部隊。

情報伝達の経路も確立された現在では、現地の情報も滞りなく入るようになってきていた。

「止まない雨はない、ね。言ってくれるじゃない」
東州の州宮で、桜は一人呟いていた。
政庁とも遜色ない程忙しい州宮の外では、ひどい雨が降り続けている。

例えいくら救援が進もうとも、雨がやまない限りは民たちの活気も戻らない。

そう思っていたからこそ、この言葉の力の大きさには驚かされた。

その言葉を聞いたのは、つい先ほど。

だが数日前から、官吏や民の間に少しずつ活気が戻るのを、桜は肌で感じていた。

それを不思議に思った桜が手近な者に問いかければ、その言葉を教えられたのだ。

大丈夫、必ず助ける。

彼の心からの言葉は、それを示す物資や人材と共に、確かに届いていた。

止まない雨はないから、手を尽くして護るから、だから

生き延びてほしい、と。

あの甥っ子にしては、ずいぶん気の利いた言葉だと思う。

自分も同じようにいくらか励まされた桜は、最前線に居る息子へと手紙を書き送った。

「ほんと、言ってくれる」

春月はずぶ濡れになった顔を拭きながら、どこか不満げにそう漏らした。

「何をです？」

付き合いの長い官吏に問われた春月は、にやりと口角を上げる。

「それ、見てみる」

先ほど桜から届いた手紙を示すと、春月は一緒に届けられた州宮からの報告書に目を通し始めた。

そして、促されたものの私信をどうしていいか戸惑っていた官吏は、ようやく覚悟を決めて手紙を読み始める。

その言葉で始まり、その言葉で終わった手紙を読み終えた官吏は、疲れも吹き飛ぶような気がした。

その官吏も、彼の雨にまつわる話を聞いていた。だからこそ、その彼が言うのだからと、いつともしれない雨の止むその時を信じられる。

官吏は手紙を置くと、王宮のある西へ目礼した。

その様子を見ていた春月は、再びにやりと口角を上げる。

どうやらあの従弟には、こういった才能があるらしかった。

それなのに、雨は止まなかった。

降り始めてから二週間が経ったにも関わらず、それは衰える気配さえない。

何かが違う。

一護は本能の鳴らす警鐘を素直に受け取って、一度被害状況を頭から追いだす事にした。

地形、気温、風向き、雨の降り方、降水量……

命じて計らせたそれらをまとめた一護は、わずかなひっかかりを覚えた。

何度も何度も見直し、そのひっかかりの正体を掴もうとする。

事務作業を放り出して計算を始めた一護に、側にいた官吏が問いかけた。

「何……してるんすか？」

王族に対するにはあまりにも砕けた口調のその官吏は、状況整理の有能性から一護が見出した者の一人だった。

「いや……なんか変なかんじがするんだよな」

「変って？」

「それがわからねえから、困ってるんだ」

がしがしと頭をかいた一護に、その官吏は首をかしげる。

「この雨……どう考えても普通じゃねえだろ」

「……まあ」

そんなことは誰だって最初から知ってる。

そう言いたげな官吏だが、一護が言いたいのはそういうことではなかった。

ある意味災害慣れしている一護だからこそ、雨は雨、いつか止むだろうとぐらいにしか思っていなかった。

しかし、止まない。止む気配が全くない。

何故止まないのか、そんな理由はさっぱりわからないが、徹底的に叩き込んだ現世の天気図や災害の系譜と比べても、なんだか妙な気がした。

「せめて、正確な地図さえあればなあ」

一護が小さく呟いたのには、訳がある。

現世や尸魂界と比べて、王土というのは技術的に大きく立ち遅れている。

それは化学的なものはもちろんだが、測量や土木技術といった電子機器がなくても多少はなんとかかなりそうなものさえ、全く発展していない。

伊能忠敬を見習えと内心で小さく呟いた一護に、その官吏は思いがけないことを言った。

「地図はないっすけど……模型ならわりと正確なのがウチにありますよ」

「……は？」

地図がなくて模型ならあるというのはどういうことだ。

「つかそんなモンが何でふつうの家にある。」

そんなこんな疑問を一緒くたにして全てその一音に乗せた一護の気持ちは、確かに届いたらしい。

その官吏は、苦笑しながら言い添えた。

「じさま……ってかその更にじさまぐらいから代々の趣味っていうか……暇さえあれば野っぱらにでてあつちこつち計って回って、そんで模型作ってるんすよ、ウチの男連中」

俺はそんな細かい作業は嫌いなんすけど、官吏はそう付け足すが、一護の頭には更に疑問符が増えた。

趣味ってなんだ。趣味って。

「……精度は」

「その地図よりは上つすね」

一護が広げているのは戸部と工部が製作した正式なものだ。

国で一番精度の高いものと言っていい。

好きこそ物の上手なれ、お前のじさますげえ！

「それ、借りられるか？」

「借りるも何も、差し上げますよ。いい加減ウチに置いとける量じゃないんで」

「何でもいい、持って来てくれ。今すぐ！ よくやった海燕！」

ついでによくわかんないけど浮竹さんありがとう！

心の中で付け足した一護は、ぐつと拳を握った。

何となく、死神としてあつた頃が繋いでくれた縁のような気がした。そもそも海燕を見出したのは、その名前に覚えがあつたのがきっかけだ。

「作つたの俺じゃないんすけど……わかりました」

足早に部屋を後にした海燕を見送り、一護は手元の地図に視線を写す。

わかるかもしれない。

この雨の原因も、対処法も。

ある程度の推測は、すでに立っていた。それに対して自分たちができることも。推測の真偽を確かめることさえできれば、状況を打開できるかもしれない。

漸く見えた光明を逃がすまいと、一護は再び集められた資料を読み始めた。

そうして届けられた模型は、国中の何処を探してもこれ以上のものは見つかるまいと断言できる程のものだった。

この一件が片付いたら、絶対にこの技術を広めてもらおう。一護はそう心に決めつつ、新たに集まった資料も加えて推測を確かめ始めた。

風の向き、強さ、気温、そして正確な地形。思いつく限り全ての情報を集めた一護は、やはり自分の推測が正しい事を悟った。

巨大な低気圧。

それしか、考えられない。

雨とともに吹く強い風、その向き。それから考えられる事はただ一つ、巨大な低気圧が南州の温かな海風を得て、大量の雨を降らせているのだ。

逆に、南州は高気圧の為か晴れ渡っており、そのせいで余計に蒸発が進んでいる。

中央州が晴れているのはその余波を受けてだ。

そしてその高気圧も低気圧も、解消される見通しはない。災害の多い現世でさえ、何千年に一度起こるかどうかという程の様々な要因が重なっている。

だが一方で、東州がこれ以上持たないこともはっきりしていた。

一護は、その対処法について考えあぐねていた。彼らなら、可能かもしれない。彼ら、なら。

厳しい表情で何かを考えている一護を、凜は不安そうに見つめる。だが一護はそれに気づかず、孝策だけでもと筆をとった。

各地の気温、降水量、地形。

何一つ、正確な数値はない。

そもそも自分に複雑な計算は出来ない。

だが少しでも間違えば、違う災害を引き起こすだろう。

どうすれば低気圧を、あるいは高気圧を解消できるか。

そうして一護は結論を出し、ぐつと唇を噛む。

理論的には、あるいは可能かもしれない。

彼らの事だ、多少の無茶は形にしてくれるだろう。　だが、その

方法が問題だ。

「一護君？」

ずっと眉間にしわを寄せたままの一護を案じて、凜が声をかける。

一護はちらりと凜を見やると、無言でその方法を記した紙を渡した。

「……これは……」

「俺が思いつく限り、一番早く雨を止ませる方法です……かなり、強引っすけど」

一護が考えているのは、雷雨・竜・桐生・冬獅郎の四人の斬魄刀の能力だった。

彼らの斬魄刀の能力は全く違う。

水、風、炎、氷。

だが、一つだけ大きな共通点を持っていた。

それは、天候を操作できるという事。

もちろん、完全には無い。

能力の特性にもよるし、範囲だって限られる。

「……可能な？　こんなこと……」

「わかりません。どこか、間違っているところがあるかもしれない。それでも、俺が考える限りでは上手くいくと思います」

凧には、現世の技術はわからない。

だから、一護の言う事を信じるしかない。

だが、一護が躊躇っている理由がその確実性以前の問題であるという事は、凧にもはっきりと理解できた。

斬魄刀は、死神の象徴だ。

魂魄の調整者のみに与えられる、魂を導く特別な力。^{バランサー}

だからこそ、それ以外のためにその力を使う事を、彼らはよしとするだろうか。

死神としてかつてあったからこそ、一護は悩んだ。

命令すれば、彼らは従うだろう。

自分の意志を押し殺してでも、必ず。

だが、そうして彼らの誇りを傷つけるのは嫌だった。

それでもこのままでは、犠牲者を増やすだけだ。すでに、衛生面の悪さから感染症が広がっている。被災者達の体力もすでに限界だ。

葛藤の末に、一護は立ち上がった。

「一回、東宮府に戻ります。ここ、頼んでも？」
まだ迷いがあるのだろう、微かに震えているその声に、凜ははつきりと答える。

「ええ。大丈夫よ……お願いね」
その返事に一護は微かに笑うと、足早に東宮府へと戻っていった。

ちょうど休憩に入ったところだった四人を捕まえ、部屋へと呼ぶ。
四人は怪訝そうな表情をしながらも、黙って一護に従った。

「どうか、しましたか」
なかなか切り出さない一護を不審に思っ、雷雨が口を開く。
一護はもう一度四人を順に見つめると、漸く口を開いた。

「頼みたい事があるんだ」

「頼みたい事……」

何だろう、と四人はそれぞれに考える。
だが、何もわからない。

今起こっていることには、一護は王族として、公の姿で関わっている。

それに関することならば、何も頼みたい事という必要はないはずだ。
命令として下せば済むことだし、それが正しい形なのだから。

だが一護の表情から、それがやはり洪水に関する事なのだろうというのも明らかだった。

「雨を止ませるのに、力を……お前ら四人の斬魄刀の能力を使って欲しい」

「斬魄刀、ですか」

言われた四人は、一様に表情を険しくした。

確かに、桐生や竜の斬魄刀の能力ならば、可能かもしれない。だが一護は四人と言った。そしてそれ以上に。

「ひどいこと言ってるってのは、わかってる。斬魄刀は死神の誇りだ……死神が、虚を倒して死神として在る為の力だ。だから、こんな風に使いたくはねえと思う。でも、これ以上雨が止まなければ犠牲者が増えるだけだ。だから……」

「誇りを放つてでも、使えと？」

はつきりと言った雷雨に、一護は頷く。

そうして一護は、頭を下げた。

「頼む。力を貸してくれ……俺の力では、足りないんだ」

どのくらい、沈黙が続いたのだろうか。

誰も、時の長さなど考えていなかった。

そうして沈黙が耳に痛くなってきた頃、雷雨は隣に立つ三人を見た。

三人もまた、雷雨を見ていた。

その表情の示すところを悟って、雷雨は僅かに表情を緩める。

「おっしやる通り、斬魄刀は死神の誇りです」

ぴくりと、一護が肩を動かす。

それに気付かないふりをして、雷雨は話し続けた。

「だがあなたは忘れておられる。私どもは、死神ではありません。王族特務、王族の守護を生業とする者です。今の私どもの誇りは、王族特務としてあること、それだけです」

雷雨の言おうとしている事を計りかねて、一護はゆっくりと顔を上げた。

その顔に映った不安を見て、雷雨はおもむろに膝をつく。

「いたしましょう。我等の全てを懸けて、貴方の護ろうとするもの全てを、必ずや護って見せます。お任せいただけますか？」

雷雨に続いて、三人も一護に対して正式な礼を取った。

この時四人は誓った。

自らが一護の刀となって、一護の護ろうとするものを　民を護ると。

S 1 3 箱舟の詩 空（後書き）

タイトル日本語訳は「最も大切なこと」

冒頭で登場した官吏・蒼純は、実は55話「an opening, all truth」の冒頭で登場していました。

……っていつかMasked持っていないと原作転生キャラってわかんないよな。

彼も親友の忍も原作転生キャラです。

詳しくはウィキペディアかキャラブック、若しくは過去篇参照で。

そして。

私には物語しか作れないし、何よりこうした災害に出会ったことありません。

だから、被災地域について触れるのはかなり躊躇った部分がありました。

結果としてほとんど触れませんでしたし、それも正しいのかどうか。ただ、ああした励ましは一護だから赦される台詞だと思っんです。多分、霊王にさえ言うことは赦されない。

雨だから、それを乗り越えた一護だから、こう言っていはいはず。そうした観点から触れてみました。

というわけで（どういうわけで？）次話はあの四人の斬魄刀が勢ぞろいです。

結局戦闘描写じゃないのねという総ツツコミが聞こえてくる……いや、気のせいだ。

書いててすごく楽しかった（笑）

そして次話の私の中でのサブタイトルは“理系の真骨頂”

全ては次週明らか

……悪ふざけも大概にせえよ、と友人から痛烈な一撃を頂きました
が（ちなみに本人にも悪ふざけの自覚アリ）、悪ノリしたのは、A・
S。君だよ？

それでは感想などお待ちしております。

S 1 3 箱舟の詩 風（前書き）

1 1 4 話の少し後から始まります。

S 1 3 箱舟の詩 風

深淵の源と天の窓が閉じられたので、天からの雨は降りやみ、水は地上からひいて行つた。

旧約聖書 創世記より

f o u r d r a g o n s a n d a p e r s o n

事の発端は、気温が例年より高いことだった。

それにより雪融けが早まり、高気圧や低気圧が異常発達した。

ならば、それを完全とは言わずとも元に近い状態にすればいい。

一護は王宮で最も高い塔に上り、東を見据えていた。

予定の時刻に達したことを確かめて、手を前へ突き出す。

「 黒白の羅 二十二の橋梁 六十六の冠帯 足跡・遠雷・尖峰・
回地・夜伏・雲海・蒼い隊列 太円に満ちて天を挺れ」

懸命に練習した鬼道を、確かめるように呟いていく。

これもまた、一護が何年もかけて手に入れた力だ。

「縛道の七十七、天挺空羅」

静かに詠唱を終えた一護を中心に、霊圧の羅が張り巡らされる。

補足対象は、およそ百人。

各地に散らばった巡察使や護衛士、そして雷雨たち四人。

彼らと瞬時に連絡が取れるようにと、一護が提案したことだった。

ここから先は、一つの失敗も許されない。
静かな緊張感が、夜明けの空気を切り裂いていく。

そうして一護の合図をきっかけに百人が更に互いを天挺空羅でつないだところで、桐生が動いた。

低気圧の中心、その真下。

台風の目のように何も無いその場所に、桐生は立っていた。

静かに己の斬魄刀を抜き放ち、意識を集中させる。

研ぎ澄まされていく感覚に身をゆだね、桐生は斬魄刀を天へ突き上げた。

「 炎天に昇れ。輪彩丸！」

強く喚起すれば、その力は間違いなく応えた。

最初無秩序に広がった炎は、すぐに炎龍となって天へ舞い上がっていく。

ぐんぐんと高度を上げ、低気圧のさらに上空へと辿り着いたところで、炎龍は勢いよくその気団へ突っ込んだ。

「ほんと、これで大丈夫なのかしらね」

桐生が呟くのは、訳があった。

冬よりも夏の方が雨は多いのだから、気温が上がれば雨はますます強くなりそうな気がする。

だが一護が言うには、そうではないのだという。

気温が上がれば飽和水蒸気量上がる。そうすれば、雨は自然

と止む。

気温が高いと、蒸し暑く感じるだろ？

そう問われた時には、確かにと納得したが。

要は気温を上げ、空気が水をたくさん蓄えられる状況にしてやればいいのだ。

桐生は僅かに雨が弱まったのを感じると、更に斬魄刀に霊力を込めた。

「冬獅郎、始めてくれ」

東州の護衛士から雨が弱まったとの報告を受けた一護は、北州にいる冬獅郎に言った。

次は、雪融けの量を通常に戻す。雨がやみ、雪融けの量も元に戻れば、川の増水は止まるはずだ。

冬獅郎は一護の言葉を思い返しつつ、斬魄刀を水平に構えた。

「霜天に坐せ。氷輪丸！」

久し振りに呼んだその名に、力は待ちかねたように反応した。

「冷やす、だけどやりすぎるな」

小声で、一護からの指示を復唱する。

一護から一番細かく指示を受けたのは、冬獅郎だった。

冷やして、雪融けを止めなくてはいけない。

だがあまり冷やし過ぎれば、今度は農作物へ被害を出す。

限界として摂氏一度、それが一護から告げられていたことだった。

いつもよりも控え目な氷龍が、あたりを静かに舐めていく。

こんなものと判断して、冬獅郎は早々に刀を納めた。

冷たい空気は地面を這い、より温かいほうへと移動する。

すなわち、山から海の方角へ。

その空気が東州を冷やすより早く、湿った気団を動かさなくてはならない

「天飊てんびょうを起こせ。暁吹丸きょうすいまる」

東州の外れで竜が咳くように名を呼ぶと、その力は大きく震えた。

竜を中心に風が巻き起こり、それはやがて龍の形を成す。立ち上った龍は、巨大な黒雲を取り巻くようにゆっくりと周回し始めた。

その勢いはいや増し、周囲の雲と黒雲とを切り裂いていく。

やがて黒雲がまとまると、竜は風龍をつかって巧みに気団を動かしていった。

その先は、王土の外縁にある砂漠を流れる大河。

東州の大河と水源を同じくするその河は、南州を通って海へ流れ込んでいる。

その川岸で手ぐすねを引いて待っていたのが、雷雨だった。

「滔天たうてんを満たせ。??丸ほうりゅうつまる」

低く落ちついた声でその名を呼べば、やはり力はその刀から飛び出していく。

程無く降り出した雨は、しかしその解号とは裏腹に控え目な霧雨だった。

これも、一護が言ったことだった。

あまり多量に降らせれば。鉄砲水となって下流の南州を襲う。

南州では低気圧へ流れ込むはずだった空気が北州からの冷気で雨を降らせているから、ここでの下手な増水は避けなくちゃいけねえ。

川の上に降らせた霧雨が水龍を形作るのを見て、雷雨はほっと息を吐いた。

どうやら、上手くいったらしかった。

一方で、一護は未だに警戒して空を見ていた。

よくて高校生程度の知識しか持たない自分が立てた計略だ、どこかに漏れがあっても何もおかしくない。

むしろ、何もないほうがおかしい。

だからこそ巡察使や護衛士を各地に配して、何かあったらすぐに報告が来るようにしてあった。

鳩は夕方になってノアのもとに帰って来た。見よ、鳩はくちばしにオリーブの葉をくわえていた。ノアは水が地上からひいたことを知った。

そうしてそれから数時間が経ち、どうやら成功した事は間違いないようだった。

これから乱れた気流が元通りになるまでは天気も回復しないだろうし、これから復興に向けてまた忙しくなるが、それでも。

そろそろ、知らせの第一陣が政庁へと届く頃だろう。

微かに聞こえ始めた歓声を耳に、一護は漸く安堵の息を吐いた。

一護が政庁に戻ると、そこは先ほどまでとは違った意味で大惨事だった。

力尽きたように眠っている者、互いに抱き合っている者、東の空を嬉しそうに眺めている者。

書類を手に行っている者など、いようはずもなかった。

「ほら、まだ全部終わったわけじゃない。むしろここから勝負だ。そろそろ仕事に戻れ」

一護がそう指示すると、官吏たちはそれぞれに気ままな返事をしながら仕事へと戻っていく。

その気やすさの見なれなさに凜は驚いていたが、それでも一護の表情を見てそっと笑った。

形など、どうでもいいのだ。

ただその目的を果たす事さえできれば、それで。

一方で、一護はその喧騒の中で一つの構想を描いていた。

一心に言われた、自分にしかできない事。
それが何かを、見つけた様な気がした。

災害の予防の為に、災害が起きたときに動く、専門的な組織。
この一件で頭角を現した若い官吏、単調な仕事に倦んだ、しかし技術と経験のある古参。

組織という箱を作り、彼らの間を繋ぐ。
それが、俺にしかできない事。

一護はそつとその場を後にし、一心の下へ向かう。
あの時、その話をした時から、一護は一度も会っていなかった。

「よう。終わったみてえだな」

何でも無いことのように言った一心に、一護は苦笑する。
久しぶりに会った一心は、何とか小康状態を保っていた。
さらに痩せてはいたが、話をするにはできそうだった。

何があったか、何をしたか、どうなったか。

一護は事実だけを淡々と述べ、一心はそれを黙したまま聞く。
そうして全てを語り終えたとき、部屋には沈黙が満ちた。

やり遂げたという充足感に満ちた、心地の良い沈黙。

その中で、一心は自分が何を言うべきかを考えていた。

気づくことが遅れたことへの叱責は、必要ない。

それは、どこかにやはり悔恨を含んだ一護の表情からも明らかだった。

一護がこれからやろうとしていることに関しても、何も言うべきではない。

それは一護のやることだから、何も言うてはいけない。
ならば、言うべき事は。

「よく、やった」

それだけ言つと、一心は一護が驚くのに構わず目を閉じた。
心地よい眠りが、すぐ傍まで迎えに来ていた。

S 13 箱舟の詩 風（後書き）

タイトル日本語訳は「四匹の竜と一人の人間」「未来への構想」

ツッコミその他は甘んじて受けます。

ちなみに投稿数時間前まではもつとがつつり理系でした。ボイル・シャルルとか。

……だってこのままじゃうーさまの二番煎じみたいだったんだもん（あきらめたけど）

ちなみにこのために天気図やらなんやらを必死こいて勉強したのは公然の秘密。

理由を知っている友達に冷めた目で見られたことも、もちろん公然の秘密。

そして、雷雨と竜の斬魄刀。

雷雨は「滔天を満たせ。??丸」ほうりゅうまの

竜は「天颯を起こせ。暁吹丸」てんさつすいまる

……ちなみに、ケータイ閲覧の方ですと一部の漢字が表示されない恐れがあります。

ほうりゅうは

“ほう” 雨かんむり+豊

“りゅう” 雨かんむり+隆

という漢字です。ほうりゅうは雷神という意味。

それぞれ漢字辞典などで引いて頂くと、熟語などの意味も出てくると思います。

これで、ようやく本編から大きく欠けたところを補えた気がします。

さて、来週からの外伝の予告をば。

護衛士・雷雨の過去話になります。

護挺隊士であった頃、隊長だった頃の話ですね。

ちなみに、テーマソングは“桜日和”

ということ、ある人達の恋物語です（自分で書いて非常にかゆい。なぜだ。）

雷雨は一体何番隊だったのか、ある人達とは一体誰か、そして一護に出番はあるのか

色々想像できると思いますので、考えてみて下さいねー。

それでは感想などお待ちしております。

S p e c i a l t h a n k s

F o r f r i e n d s

Y・K（聖書の提供）

A・S（理科系統の考察）

F o r r e f e r e n c e b o o k s

聖書 旧約聖書続編つき

ノアの大洪水 伝説の謎を解く

川のなんでも小事典

天気図がわかる

気象のしくみ

ビジュアル博物館

原色ワイド図鑑

高等学校 改訂物理？

フォトサイエンス 物理図録

物理のエッセンス

書ききれなかった叫びは活動報告にて（笑）

S 1 4 桜日和 前篇（前書き）

本編のずっとずっと昔の話。
黒漆の箱よりも前の話です。

S 1 4 桜日和 前篇

For whom she can do it?

「でやあつ!」

「はあつ!」

音とも声ともつかぬ息と、木刀が空気を裂く音が響く。

彼女は一步後ろに退くと、もう一度強く踏み込んだ。

下段に構えた木刀が、正面からの一撃を弾く。

続いて体重を滑らかに移動させ、勢いのままに振りきると、右の人影が吹っ飛んだ。

カランカラン、と木刀が二振り、床の上を跳ねる。

正面で尻もちをついた少年と、右前に立つ青年とを交互に見やり、彼女は苦笑した。

「残念。風^{ふう}琴^{びん}は踏み込みが浅いわね。だから剣速がつかないのよ」
そう言われ、少年は弾かれたように立ちあがった。

いくら模擬試合とはいえ、あまりにも一瞬で決着がついたために、呆然としていたのだ。

「ご、ご指導ありがとうございます、空木副隊長! 以後気をつけます!」

「うん。……雅^{アサヒ}忘^ト人は芯が少しずれてる。だからあつきり手から抜けるの。小細工する事考えずに、とりあえず真っ直ぐに振り下ろす練習ね」

「はい!」

それは、声だけを聞くんらば、普通の光景に思えるだろう。
副隊長が隊士たちの指導をしている、ごく当たり前の。

だが、初めてそれを見た者ならば、いささか困惑するだろう。副隊長と呼ばれた彼女は、吹っ飛ばされた少年・風毬よりもさらに小柄だった。

彼女は、当時の護廷十三隊としては異例なほど若い。

少女としか言えない　短く切った髪と丸みを帯びた顔が更に幼く見せてはいるが　それぐらいの年だ。

だが彼女こそが、護廷十三隊最強との呼び声高い戦闘部隊・十一番隊の副隊長なのである。

烈火という名に相応しい苛烈な戦いざまは、将来の隊長候補としての噂とともに瀟霊挺中に知られている。

剣を主軸とした戦い方には隙がなく、単純に剣道のみ勝負であれば、隊長と同等と言ってもいい。

それほどの、実力者だ。

空木はしばらく風毬と雑談を交わしていたが、不意に修練場の入り口を振り返った。

「……隊長。書類の方は終わりましたんですか？」

戸口に立つ、白い羽織を着た青年。

上司の姿を認め、空木は僅かに頬を緩ませた。

それに応えるように青年は軽く手を上げ、空木の下へと歩いてくる。

「まあ、半分ぐらいはな。おい、俺も混ぜてくれ」

「はいっ！」

壁際に居た隊士に木刀を持ってこさせると、その青年　雷雨は、何の前置きもなく空木にそれを振り下ろした。

「　　かわしたか。やるな」

「一応副隊長ですか、らっ！」
体全体を使って振りぬいた一撃を、雷雨は少し下がること　必要最低限の動き　でかわす。
その一方で、大振りの一撃を出した空木には、大きな隙が出来ていた。
そこを狙って繰りだされた一撃を、上半身をひねることでもかわし、横つとびにとんで体制を整え……そこまでが、第一幕だった。

「お前、本当にすばしっこいよな。体がちまいからか」
「ちまいってなんですかちまいって！　まだ成長止まってませんからっ！」
「そりゃーお前、そこで止まったらいくらなんでもちまますぎるだろう」
「だからちまいって何なんですか！」

第二幕は、口もそうだが細かい剣戟が続いていた。
空木の打ちこみは、数打ちや何とやらといわんばかりものだが、それでも計算されている。
集中を一瞬たりとて途切らせることはなく、確実に隙や急所をついているそれは、その精度にはありえない早さだ。
一方の雷雨は、受けるのと避けるのを半々に、やはり最低限の動きでそれを見きっていた。

「先輩、見えますか？」
「見えていたら、苦労しない」
手合わせを中断された風髭と雅忘人は、霞んで見える空木の腕に目を細めた。

「相変わらず、すごい速さだな」
「ええ」

その剣戟は、終わりそうになかった。

「うーっーぎー」

「……」

「うーっぎさぁーん」

「……」

「うーっーぎーちゃん」

「……」

「れーっかちゃぁん」

「気色悪い声出さないで下さい隊長」

ぴしっつと、それも一息に言いきられた雷雨は、無然とした表情をした。

「おめーが拗ねて返事しねーからだ、バカ烈」

「バカで結構コケッコーです」

「……何だそれ」

「知りませんよ。ほっつとして下さい」

「……あ、そ」

いつも通り惨敗した空木は、いつもの通りに隊首室でへそを曲げていた。

雷雨も雷雨で、少しばかり大人げなかったことは自覚しているため、何とか機嫌を取ろうとしていたのだが、どうやら不味かったらしい。

慣れないことをするもんじゃない、と思ったところで、雷雨は溜息をついた。

普段ならしないことをわざわざしたのには、わけがあったんだ。

「な」。空木

「……なんでしょう」

氷点下の返事が返され、雷雨は片眉を上げた。

どうしたものかと思うが、下手につついて大蛇でも出したらコトだ。諦めて、そのまま話し続けた。

「お前さ、鬼道苦手じゃねえか」

書類をさばいていた空木の手が、ぴたりと止まる。

彼女にとって、それは一番触れてほしくない急所だ。

「……それが、なにか」

動揺を押し隠したような声に目を細めると、雷雨は強いて押さえた口調で空木に言い放った。

「……隊長命令な。半年以内に三十番まで詠唱破棄を修得しろ」

「は……はあ！？ 無理に決まってるじゃないですか！」

予想通りの反応に、思わず口角が上がる。

対して空木の視線が鋭さを増したのを感じ、雷雨は慌てて目を逸らした。

こうなるから、少しでも機嫌を良くしておきたかったのだ。

「いや……副隊長で鬼道からつきしって、まずいだろ。イロイロ」

「まずかないです。っていうかいいじゃないですか、十一番隊なんですし。斬拳走さえできればいいんですよ、それで」

「よかねーよ。俺だっちゃんとは一通り使えるんだし、使えるに越したことはねえからな。やれ」

「嫌です」

絶対に嫌だと示す表情に、雷雨は眉根を寄せる。
それが、よくないんだ。

「十一番隊だから鬼道が使えなくていいなんて、そんなことがどこで決められたんだ？」

「……隊の気風です。もともとウチは刀バカの集まりですから」「それが問題なんだよ」

雷雨の口調が真面目になったのを感じて、空木は雷雨に向き直った。たまにある、こういう口調の時は、決まって本当に大事な話だ。

「十一番隊は鬼道が使えない、なんてワルクチ、もう聞きたかねえんだよな」

そう言った雷雨は、いつもよりもずっとずっと幼く見えた。

「……隊長？」

恐る恐る空木がたずねると、雷雨は小さくため息をつく。

「十一番隊ってさ、ガラ悪いの代名詞だろ。もしくは単純筋肉バカ、不良、アホの集まり」

「……」

そこまで酷評しなくても言いたいが、実際そうなのだ。確かに。

「ガラ悪いとかバカとかアホとかはさ、多分どうにもなんねーだろ。俺らしかり部下しかり」

「……まあ」

否定できないのがすごく悲しい。

馬鹿は死んでも直らないってきつと本当なんだと思う。だって死後の世界の住人だもん、私達。

「だったらさー、せめて鬼道使えるようになったらちよつとマシに

なるんじゃないかなーって」

そういいながら、雷雨はくるくと筆を回した。

「だってそうだろ？ 鬼道が使えるってだけで戦術に幅ができるじゃないか。鬼道覚えるのも戦術作るのも、ただのバカやアホにはできねえ……上手くいったら一石二鳥じゃねえか」

くるくるくるくる。くるくるくる。

「隊士ん中にもさー、俺やお前みたいに始解隠してるやついるだろ、鬼道系なせいで」

くる、くるくる。くるくるくるくる。

「俺とかさー、昔っから始解隠してたせいで隊長になった今でも使いつらいなー、とかただのアホじゃねえか」

くるくるくる。くる、くるくるくるくる。
「だから最終的にはそいつらが大手を振って戦えるの目標。別に俺はこのままでもいいが始解しないせいで隊士が死ぬのはまっぴらだからな。……もちろん戦闘の主軸は斬拳走の今まで通り」

くるくる、くるくる。くるくるくるくる。
「だから、えーっと……鬼道を追加するだけなんだ。それだけ。やっぱり他の隊とは違う……どうしても鬼道ができないやつとか、いるだろうしな。そういう奴らの居場所も必要だし」

くるくるくる。
「なあ、どう思う？」

くるくるつと最後に回って、筆はびたりと動きを止めた。

無意識のうちにそれを目で追っていたようで、改めて空木は雷雨に視線を合わせる。

「……努力、します」

隊長がそこまで考えていて、副隊長が逆らえるわけがないのに。

そんなにも隊の事を思ってくれているからこそ、空木もこの隊が好きなのだ。

「おう。頼むぜ副隊長」

聞こえるかどうかというぐらいの小さな声で呟いたのに、返事があるという事は、どうやら聞こえていたらしかった。

「破道の三十三、蒼火墜！」

空木がそう言くと、彼女の手から紅い光が放たれた。

一瞬、その場に沈黙が落ちる。

彼女の頬が朱に染まるのと、雷雨の笑い声が響くのが同時だった。

「……ッ……ハハハハハ！ お、お前馬鹿じゃねえの！？ 今の蒼火墜じゃなくて赤火砲じゃねえかよ！」

「うっうるさいです！ ちょっと間違えたんです！」

「間違えたって……間違えるかあ！？ 番号と名前言って間違えるやつ初めて見たわ、それも番号一個とんでやがる。……すげーな、敵を攪乱するのに使えるんじゃないかねえの？ な、今度赤火砲の詠唱破棄やってみるよ」

「うるさいって言ってるでしょう！？ もう知りません！」

真っ赤になった顔をそのままに走り去ろうとした空木の肩を、雷雨が掴む。

その手を掴んで投げようとしてきたのを避け、その背を元の立ち位置へ向かって押した。

「ほら、もう一回やってみろって。1年かかってこれだけ出来たんだから御の字だ。な？」

「……じゃあ、いいかげん笑うのやめてください」

ギロリと睨むと、雷雨の顔も赤かった。

大方、笑いをこらえているのに違いない。

「それは無理だな。だって……八八八。間違えねえだろー、こんなの。俺冗談抜きで初めて見たぜ。でもまあ、暴発するより見どころあるって……多分」

「多分ってなんですかっ！ 多分って！」

「じゃー多分を絶対にするために練習あるのみ。ほら、やってみろ」

「……はい」

そうしてそのまま数時間の訓練をし、更に隊士たちに剣稽古をつけた後で、雷雨はそのまま四番隊へ向かった。

「……お前は本当に生傷ばかり作ってやがるな」

開口一番にそう言われた雷雨は、思いつきり渋面を作った。

そういう仕事なんだ、仕方ねえだろうが。

「るせえ。とつとと治せ」

「へーへー」

四番隊に入隊した同期には、こうしてしょっちゅう傷を治してもらっている。

今日も今日とてあちらこちらに傷を作ったために、こうしてやってきたのだ。

……主に鬼道の暴発が原因なのは、黙っておくが。

「……十一番隊、ちょっと変わったな」

「お？ どんな風に？」

「主に怪我の種類。鬼道の暴発だろ、これも」

「……さいですか」

どいつもこいつも霊圧操作の才能がからつきしなせいで、四番隊の世話になりまくっているのだろう。つまり。

でもそれは、鬼道の練習をする隊士が増えているということでもあった。

「変わったって言えば、空木副隊長だろうな、一番は」

「……アイツが？」

驚くと、そいつは真面目な顔して頷いた。

「休みの日とかに四番隊^{ウチ}来て練習してる。今じゃ裂傷打ち身あたりの治療はカンペキだな」

「……初耳なんだけど」

「休日使ってつからだろ。治療速度も実戦級だ。元々霊圧操作の才能があるんだろ。今まで苦手意識が有って練習避けまくってただけだ。隊長のお手柄だな」

淡々とした語り口調の同期だが、言っていることは重大だった。

あんなに嫌々だったのに、そこまで努力してくれているのか。あの副官は。

今でもあーだこーだと文句を言っているのに、そこまで。

見れば、どうやら全てを察しているらしい同期が何やら言いたげな表情をしていた。

「……あいつの好物、鯛焼きなんだ。白餡の」

「ほお」

「……買ってくる」

「いーんじゃねーの？ お前のことだ、他にも色々迷惑かけてるだろうから、たまにはきちつと感謝しとけ」

「まあ、な」

無言で立ち上がり、窓の枠に足を掛けた。ここから出入りするのとは仕様だ。

「なあ、山田」

振り向かずに声をかければ、おーと不真面目な返事がきた。

「……あいつに治癒鬼道教えてやったの、おまえだろ」

「まあな」

恐らく、その治癒鬼道が見られた程度になるまでは、俺にも黙っていたのだろう。

余計な期待をかけずにいられるほど、俺も大人じゃない。

深くため息をついて、背中越しに声を投げた。

「明日の夜、空けとけ。奢る」

雰囲気で、山田が笑ったのがわかった。

「おー、期待しとく」

返事はしなかった。でも、伝わったはずだった。

治療の礼も言わずに帰って行った同期に、彼はため息をついた。本当に、相変わらずどうしようもない同期だ。隊長になっても

「それにしても、どこまで気づいてるんですかね」

「あ?」

不意に声をかけられ、振り返れば、一級下の後輩が立っていた。

雷雨は統学院の卒業生ではないが、自分とそいつは卒業生だ。

「空木副隊長のことですよ。……治癒鬼道の習得なんて、易いことじゃない。それが出来た理由に気づいてるんですかね」

「気づいてる訳ねーな。あいつアホだから」

「相手は仮にも隊長ですよ。アホなんて言わないでください。……

でもまあ、同感ですね」

例えばそう。

生傷が絶えない隊長の為だなんて、隊長が心配だからなんて、そんな理由。

「気づいてないのは空木副隊長もだろ。あの人も自分の気持ちになんて気づいてねえさ。あのアホと同じぐらいガキだし」

「相手は隊長と副隊長です。アホだのガキだのやめてください。：

…まあ、そうでしょうねえ」

あの男所帯の中にいるからそうなってしまっただろうか。

空木は、一向に女らしいようにはならない。

それこそ、朝から晩まで泥と汗にまみれて戦場に身を置いて、自分こそ生傷が絶えなくて、髪が短いのも邪魔だからってだけで、せっかくきれいな黒髪をしているのに。

それでも多分、このままじゃ終わらない。このままじゃ。

それは親友としての何となくの勘であり、男としての確証だった。

S 1 4 桜日和 前篇（後書き）

タイトル日本語訳は「誰がために彼女は為すか」

ということとで雷雨は十一番隊でした。

名前は剣八じゃないんですけどね。その辺りもおいおい。

雅忘人はアニメオリジナルキャラです。

単行本29巻に設定も載っていますので、参考にどうぞ。

山田さんは花太郎の御先祖様。

ちなみに新出オリジナルキャラは山田さん（と後輩くん）だけです。えっ？ と思った方はどうぞそのまま読み進めてくださいませ。

特徴や名前から「あーそゆこと」と判った方はニヤニヤしながら読んでください（笑）

そゆことです。はい。

あ、一護誕生日おめでとー！

それでは感想などお待ちしております。

p . s .

7/10にwhispers更新しました。

S 1 4 桜日和 中篇(前書き)

前篇の数年後からはじまります。

S 1 4 桜日和 中篇

Do you know your own feelings?

執務室に戻ると、隊首機の前に探していた姿はなかった。

はて、と首を傾げる。

霊圧から考えるに、この部屋にいるのは确实なのに。

しばらく思索したのち、足音を殺して長椅子に歩み寄ると、やはりそこで眠っていたのは。

「……隊長、起きてください。もうすぐ隊首会でしょう」

それはもう気持ちよさそうに眠っている雷雨に、空木は知らず知らずのうちに表情をほころばせる。

しかし起こさねばならない、とかけた声に呆れが混じるのは、いつものことだ。

隊首会が迫っていて、しかも机の上には山積みの書類ときたら、それはもう呆れるしかない。

「……隊長、起きてくださいよ」

もう一度呼びかけても、これが全く起きない。

「隊長、隊長！……起きろ！ 起きんかいこの表六玉！」

空木がゆすつても鼻をつまんでも起きず、ついには叫んで長椅子から蹴り落とし、そこで雷雨はようやくうつすらと目を開けた。

「……誰が表六玉だ」

「さあ？ 仕事もやらない、昼間っから惰眠貪ってる、その挙句起こしても起きないという点に何か異論があるのですたら、聞きますが」

空木は冷たく返事をしつつ、山積みの書類からいくらかとりわけて己の席へ向かう。

「ふつーに起こせよなあ」

「起こしました。起きなかつただけです」

「今起きたらう」

「……長椅子から蹴落とされて起きないようでしたら、部下として即刻あなたを糾弾させていただきます」

そう言つて空木がねめつけると、雷雨は肩をすくめて目を逸らした。いつもいつも、こういうやりとりばかりだ。

日常茶飯事すぎるが、なぜか飽きは来ない。

「おー怖い怖い。それじゃ糾弾されないうちにさっさと隊首会行つてきますか」

これ以上ないほど白々しく言いながら扉を開けると、それを一瞥した空木がしつかりと釘を刺した。

「寄り道しないで、さっさと帰つて来て下さいね。でないと今日も残業になりますよ」

そうしていくつかため息をつきながら　だつて今日が期限の書類がいつぱい　事務作業をしていた空木の下へ、近づいてくる気配があつた。

あれ、と空木が顔を上げるのと、呑気な声かけられるのが同時。

「烈火ー。入るわよー」

「……里奈。珍しいわね、あなたが仕事してるなんて」

ひよつこりと顔を出した友人に言つと、彼女はひどく渋い顔をした。

「なあに、その言い方。まるで私が不真面目みたいじゃない」

「まるで、じゃないわよ。あなたそんなに隊長さんの胃痛ひどくしたいの？」

「まさか。あの人の胃痛は体質でしょ。……つて話逸らさないでよ。

今日は仕事で来たんだから」

「今日は、ね」

呆れたように呟くと、里奈は今度こそ反論しなかつた。

「じゃあ遠征の件はウチでやるわ。そのかわりそつちの長期派遣は十一番隊もちね」

「わかったわ。用件、これで終わり？」

合同任務を中心としたいくらいかの確認を終えると、里奈は頷いて立ち上がった。

「終わり、終わり。じゃ、私はこれを隊長に届けて……」

「届けて？」

「新しく出来た茶店の看板、塩饅頭でお茶ってとこね。どう？ 烈

火も行く？」

「あー、清乃だっけ。……ってやっぱり仕事抜けてるじゃない！」

さも当然のように続けられた言葉にうつかり頷きそうになった。危ない。

「えー？ ちゃんと仕事やったじゃない。ホラ」

「ホラ、じゃないわよ！ そんなの今日片づける分の何十分の一よ！」

「五十分の三ぐらいかしら」

ひらひらつと書類を振った里奈に、思わずこめかみが引きつった。

「適当よね、それ。そうよね適当に返すわよねあなただもの！」

「もー、烈火つたら真面目でかわいい。どう？ その可愛さに免じて塩饅頭奢るわよ？」

「免じなくていいから仕事！」

「えー？ だって新婚幸せ気分振り撒いてる上司の手伝いなんてやるだけ無駄だしー。どうせさっさと帰りたくて自分でゼーんぶ片付けちゃうんだもん」

っていうかあの空気どうにかならないかしら、と悩ましげにため息をつく里奈に、思わず空木は目を逸らした。

そうだった、あの隊長は新婚だった。

しかし、だからといって仕事を放り出していい訳もなく という

か新婚だからさっさと帰らせてやれ、居住まいを正して説教体勢に入った空木に、まあでも、と里奈は付け足した。

「あんたみたいに上司がだーいすきならちよつとは書類仕事にも精が出るってもんかしらね」

「わねー職場恋愛、そう言っつて再びため息をついた里奈に、空木は凍りついた。

ちよつとまで、自分にも春よ来ーいみたいな言い方してる目の前のこの女は今なんて言った。

あんたみたいに上司がだーいすきなら

「……………」

上司がだーいすきなら

「……………」

ちよつと待て、いやちよつとどころじゃなく。

「あら、否定しないってことは、もう付き合ってるの?」

咀嚼に時間がかかったために目をぱちくりしている空木の前で、里奈がひらひらと手を振った。

頭に血が上った野生動物は、目の前で動いたものを反射的に追いかける。

何かの論文にでも書いてありそうな一文が、空木の脳裏をよぎった。

「んなわけあるかーっ!!」

「ぜいぜいと息を切らせて里奈を睨みつけると、里奈は掴まれた手をゆるりと振った。

「あら? そんな風に逆切れするっつことは、凶星みたいね」

「だからっ……………違っ!!」

「あーやしい」

「あやしくないわーっ!!」

自分でもまずいと思うのに顔は赤くなる一方で、焦るばかりの空木

は上手く言い返せない。

そして二人が思いがけない期間を受けたのは、その瞬間だった。

「何が怪しいんだ？」

それこそ思いがけず凍りついた二人は、そろって部屋の窓を振り返った。

見れば、窓枠にこの部屋の主が腰かけている。

二人、特に空木に凝視され 里奈に至っては既に目が笑っている

た雷雨は、たじろぐ様に一步引いた。

「……………えつと……………？」

より平静状態に近そうな里奈に雷雨が視線を向けると、空木ははっとして立ち上がった。

「何でも、何でもありません、隊長。ね？ 里奈？」

掴んだままの手に力を込めると、少し上の位置で小さく里奈が息を呑んだ。

「何でも、ないわよね？」

慣れ親しんだものだけがわかる脅迫まがいの口調で首肯を奪取すると、空木は雷雨に向けて極上の笑みを向けた。

「隊長、隊首会が終わったのでしたらご自分の仕事をお願いします。本日締め切りの書類も多々残っているようですので、くれぐれも居眠りなどされませぬよう。私は里奈と共に十番隊で来月の合同任務について取り決めてきますので、後はよろしくお願いしますね」

そう言うなり返事を待たず飛び出した空木と、そして引きずられるように出て行った里奈を、雷雨は首を傾げながら見送る。

その後、机に積まれた“本日締め切りの書類”の山に思わず悲鳴を上げそうになったのは、隊長としての矜持にかけて気のせいだと雷雨は思った。

「……………で、実際のところどうなのよ」

嬉々として尋ねられた空木は、塩饅頭を前にして返事に窮していた。

まずい。この状況は非常にまずい。

「黙ってるなら勝手に言いふらしちゃうわよー」

「わーちよっ……ちよ、ちよっと待って!ー!」

「うん? 白状する気になった?」

「は、白状も何も……」

「そうよねー。言うまでもなくって感じよねー。ゴメン、聞いた私がバカだった」

「……………」

啞然とする空木の前で、里奈は勝手に話を進めていく。

これは本気で止めなくちゃまずい。

そう思った瞬間に、里奈はぴたりと口を閉じた。

「……………里奈?」

「……………で、いつまで私に勝手に騒がせておくつもり?」

途端に真面目になった声に、空木は黙り込んで視線を落とした。

「その……………別に、好きとかじゃ」

「そう? 私の見立てが間違ってるとは思えないんだけど」

わざとらしく小首を傾げた里奈に、慌てて首を横に振る。

「気のせいよ! 私、隊長には今までたくさん助けてもらってるし、それにあのちよっとはっとけないっていうか……………事務能力結構低いし……………じゃなくて、ええと……………」

「ええと?」

「死神目指したいなって思ったきっかけもあの人だし、剣道とか一から仕込んでくれたのも、鬼道だってそうだし……………」

「ふんふん」

「……………あの人がいなかったら、多分、私……………」

「それ最後まで言ったらどういう意味になるか、わかってないわけじゃないのよね?」

「……………」

うう、と黙りこくった空木を見て、里奈はくすりと笑った。

「好きなのよ、あんた。自分が気づくよりもずっとずっと前からね。……ひよつとしたら一目惚れなんじゃないの？」

「まさか！」

「それ、一目惚れの否定にしかなくてないからね。好きってところは認めたわけだ」

ぐうの音もなく再び黙り込んだ空木の頭を、里奈はそつと撫でた。

「十一番隊は基本的に恋愛っ気ないからねー。女はあんた一人だし。そういう環境で認めづらいのもわかるけど、自分の気持ちにぐらい正直になりなさいな」

「……ムリ」

一拍の沈黙の後に一言で返すと、里奈はぶつと吹き出した。

「ムリなんかじゃないわよ。だってあんた、隊長に対する接し方が他と違うもの」

「違うって……そりゃ、隊長だし」

直属の上司が一人しかいなければ、比べるべくもない。

「違う違う。あんたが隊長に向ける笑顔とか声とか、他と別格だから。あれは好きな相手に対してのもの以外のなにものでもないわ。どうやら無意識らしいけど」

「……ど、ういうこと？」

「どうっていわれてもねー。そこはかとなく甘いよ、あんたの隊長に対する態度が」

「甘い？」

「声も視線も仕草も口調も、ゼーんぶ」
言われて、空木は思い返してみた。

甘い？ ……長椅子から蹴り落とすのが？

「私、居眠りしてる隊長のことしょっちゅう長椅子から蹴り落とすけど」

「それよ、それ」

「はあ？」

蹴り落とすことが甘いなんて、どういう理屈だ。

「あんたが加減してやったところで、あんなだけの大男を長椅子から蹴り落とそうと思うと結構な力があるのよ。なのに相手が怪我したことなんて、ないでしょ？」

「……加減してるし」

「加減したところで、よ。そんだけの力が加わったら、ふつーはその場所怪我するから」

「隊長、丈夫だし」

「丈夫でも痛いもんは痛いわよ。眠ってる状況から受身とれるわけ

……あー？」

唐突に奇声を上げた里奈に、空木は首を傾げる。

「あー？ つて、なに」

奇声を上げたまましばらく考え込んだ里奈に声をかけると、里奈ははっとしたように顔を上げた。

「な、なに」

ぎょっとした空木の前で、里奈が再びあごに手を当てて考えるそぶりを見せる。

「……なるほどねえ」

「なるほどつて、だからなにが」

長い沈黙のうちに呟いた里奈を問い詰めるが、里奈は意味深な笑みを見せるだけだ。

「ねえつてば」

「んー？」

「んー？ じゃ、ないわよ。なにが、なるほどなのよ」

「人間ってフクザツねえっていうちよつとした哲学？」

……は？ と問い詰めた空木をもともせず、軽やかに受け流した里奈が向かったのは、十一番隊の執務室だった。

「すーいませーん。今ちよつといいですかー？」

「空木なら戻ってないが」

「ええそうですね、あの赤い顔じゃ当分戻ってこれませんよ？」

「ええ、構いません」

内心で思ったことを器用に押し隠して、里奈は雷雨に向き直った。

すう、と息を吸って、これまで何人も落としてきた極上の笑顔を浮かべる。

「烈火があなたを好いているの、気づいていて知らないふりしてるってどういことですか？」

「っこりと言い放った里奈に向かって、雷雨は思いつきり噴き出した。

「そんな驚くことじゃないですよねー？ だって、里奈に対しての態度が他の隊士たちと比べて別格ですし」

「気のせいだよ。……っていつか前提が色々おかしくないか？」

「あら？ だって気づいてるでしょう？ 烈火があなたを好いていることなんて」

「……知らん。というかそもそもあいつが俺を、好してるなんてこと」

「さっき本人から言質とりましたけど」

「……」

「普通なら第三者である私は介入しない方がいいんですけど、気づいてらっしゃるんなら話は別かなーって。で、どうして気づかないふりを？」

「……」

「そうやって黙り込むところなんてそっくりですね。さっすが恋人通り越して夫婦だけあるわー」

「待てコラ。どうしてそういう風に言われるんだ」

「ようやく硬直を解いた雷雨が言うと、里奈はわざとらしく首を傾げ

た。

「えー？ だってどう考えても夫婦じゃないですか。隊士の面倒見るときとか、子供の面倒見てる夫婦みたいですよ？」

何か反論でもありますか？ と問われるも、言い返す余地がない。

正直どこから突っ込んでいいかわからないというのが正解かもしれない。

「で、どうして気づかないふりを？」

言い逃れは許しませんよ、と無言で告げてくる気迫に、雷雨はあっさりと白旗を掲げた。

「あいつ、まだまだガキだけど美人になるだろ」

「そうですねー。美人になる素養はありますよねー。きれいな黒髪に白いお肌。もうぴっぴち。お手入れしてないなんて信じられないわ」

あーもう嫉妬するわー、と呟く里奈に半眼になりつつ、雷雨は続けた。

「……面倒見もいいし、気立てもいいからな。今に貴族から見合いか話とかくるだろ」

「そこで睡つけとこーって気にならないのは大人の余裕ってやつです？」

「阿呆。どれだけ年が離れてると思ってるやがる」

「そんなの関係ないでしょー？ 愛はなんとやらってやつですよー」

「それは俺があいつを好いているに限り有効だよな」

釘を刺すように低めた声に、里奈は片眉を跳ね上げる。

「あら？ 違うんです？」

「違うな。あんなガキ、だれが相手にするもんか」

「ガキって、今に綺麗になるって言ったのはあなたでしょ？」

「好みじゃねえ。いくら好かれてるからって、俺はあいつをそういう対象で見てねえかぎり、そんなもん関係ねえだろ」

「えー勿体ない」

「大体、あいつもちよつとした気の迷いに決まってるんだ。周りがゴロツキ崩ればつかつて中で、自分より強くて周りより少しくまちな奴がいれば、多少惹かれるのは普通だろ」

「気の迷いー？ またまたあ、あの子本気ですよー？」

「本気なら尚更だ。若気の至りつてやつだ、ほつとけば勝手に現実見るさ……話がそれだけなら、さつさと自分のトコに戻るんだな。」

「ーかお前んとこの隊長を隊舎から出すな、鬱陶しい」

話は終わり、そう告げた雷雨に、里奈は肩をすくめる。

「りょーかいです。お騒がせしましたー」

つままないのー、と呟きながら執務室を後にした里奈の背に、雷雨は大きいため息をついた。

その雷雨の下に、ひらりと地獄蝶が飛来した。

「……で、総隊長。お話つてのは？」

呼び出された雷雨は、ため息交じりに一番隊に参上した。

隊首会の後は副隊長とは思えない気迫を持った女と妙な駆け引きをさせられ、執務室で惰眠を貪っていた数時間前が懐かしい。

およそ真面目とは言えない態度の雷雨を咎めることもせず、総隊長は目を細めただけだった。

その様子に、雷雨は少し居住まいを正す。

こう言う時は、ろくでもない話が転がってくるのが常だ。

そしてやはり、ろくでもない話だった。

「おお。お主にの、王族特務への昇進話が来ておるのだが……受け
て、くれるじゃろつな？」

そしてその話は、特に断る理由もないように思われた。

どこか胸の隅がちくりと痛んだ気がしたけれど、それはきつと気のせいだ。

そう、故郷を離れることへの、単なる郷愁。それ以外の何物でもない。

何物でもない　それが勘違いだとしたら、なおさら断る理由はない。

「お受けいたします」

「……と、いうわけで、俺は再来週から王族特務に異動だ。世話んなったな」

いっそあっさりとした口調でそう告げた雷雨に、空木は反射的に頷き返した。

「わかりました……って、は？」

「は？　じゃねえよ。俺は王族特務に異動になったって言ったんだ。言葉通じてるかー、とからかい口調で問いかけた雷雨に、空木は常にない気迫をもって詰め寄った。

「どういうことですよ！　いきなりそんなこといいだしてっ！」

「辞令がいきなりだったんだ、いきなり言うしかねーだろ」

「だからって……そういう話が来てるんだとか、そういうあたりで教えてくれたって！」

「話が来たのはさっき、辞令を拝受したのもさっきだ。今教えるし

かねーだろ」

辞令をひらひらと振って見せた雷雨に、空木は眦を釣り上げる。

「……そんな、何も考えないで受けたんですか」

「そんなわけねーだろ。俺も俺なりに考えてだな」

「即決したってことでしょ?! その場で、その時に!」

「俺の問題だろうが。それとも、お前に相談しなくちゃいけないなんて義務があるのか?」

「そうじゃっ、ないですけどっ」

言葉に詰まった空木を見て、雷雨は内心でため息をついた。

「なら、一緒に来るか?」

その言葉は、無意識のうちにごぼれ落ちたと言ってもいい。

事実、雷雨は空木と同じくらい呆けた面を晒す羽目に陥った。

「その……なんだ。お前の事務能力とか、治癒鬼道とか……向こうでも役に立つだろ。だから、だな」

まずい、非常にまずい。

特務の隊士として王土に伴うことができるのは、伴侶だけだ。

あーくそ、どうしてこんな話をふったんだ、と雷雨は一瞬前の自分を呪う。

だが、空木の表情は、ひどく硬かった。

まるで地獄を見たかのような、そんな表情に、雷雨は内心で首を傾げる。

何でそんな顔を、と問い掛けようとした瞬間、空木は静かに口を開いた。

「それだけ、ですか」

「……何のことだ」

「それだけかですか、とお聞きしているのです」

だから何を、と問うより早く、空木は右手を振り上げた。

理不尽だということは、わかっている。

こんなのは、一方的な言い掛かりだ。

自分が相手を想っているからといって、相手がそうだとは限らない。そんなのは、当たり前だ。

だから、部下としての有能性しか取り上げてもらえないことにこんなふうに憤るのは、一方的な言い掛かりに過ぎない。

それでも。

引っ叩いた指先がひどく痛い気がして、涙がこぼれた。

目の前で唾然としているであろう上司を見ることもできず、右手を庇うように抱き寄せたまま部屋を飛び出す。

後に残された雷雨は、ひりひりと痛むのが頼なのか、それとも違う何かなのかわからないまま、その場から動けなかった。

「ねーえ、烈火」

「何？」

話し掛けられて、空木は視線を里奈へ向けた。

「あんたさ、死神辞めたら？」

「うーん……」

突拍子もない問いに曖昧な反応しか返さなくなった友人を見て、里奈は確信した。

本当に、辞めさせた方がよさそうだ。

「正直見てられないもの、今のあんた。やっぱさ、あんたはあの人がいなきゃだめだわ」

「そんなこと」

「疲れてるのよ、あんた。じゃなきゃね、あんたがこんなへマするわけないわ」

言って足を軽く叩くと、空木は盛大に顔をしかめた。

ただの虚討伐の任務で、もの見事にしくじって大怪我をしたのだ。「自分でも気づいてるでしょ、ポロポロだって。あの人がいなくなつてから、雅忘人が行方不明になるわ、風琵は隠密機動にとられるわ、踏んだり蹴つたりじゃない」

「……」

「それだけじゃないわ。見なさいよ、この花束お菓子山！ また懲りない貴族どもが揃いも揃ってまあ」

お見舞いと称して空木に贈られたそれらは、早い話がお貴族様からの貢ぎ物だ。

「里奈、それは言わないで。考えるのも鬱陶しいのに」

「……あんたが貴族に靡くとしても、思ってたんのかしらねえ」
細い声による訴えに、里奈も苦言を呈するに止めた。

「総隊長もさ、今のあんたならさっさと辞めさせてくれるわよ。うちの隊長担ぎ出しもいいわ」
だから、と里奈は続けた。

今のままでは、そう遠くないうちに命を落とすことになる。
「死神、辞めてちょうだい」

S 1 4 桜日和 中篇（後書き）

タイトル日本語訳は「あなたたち、自分の気持ちに気づいてる？」

里奈さん、あんたしゃべりすぎや、と書き手からも思わず突っ込みたくなるほどのすごい勢いでトークをかましていた彼女、脳内ビジョンが乱菊さんにそっくりだったりします。

そんなことはさておき、桜日和中篇です。

雷雨さんよー、ぼろっとでた本音を誤魔化したら、そら女はキレるにきまつとるやろうよ。

パソコンの前でそんなふうになりつつ、しかし思い出したのは雷雨の初期設定でした。

何を隠そう彼、「ものすごいタラシ」でした。

泣かした女は数知れず、しかしどうしても落とせない女、それが曳舟桐生。

という、Lostを根本からひっくり返しかねない設定だったわけ……

そういえば当時は凜の存在もなかったよなーと。嫁はルキアだった。遊子も元気に生きていた。最終的に桐生と雷雨は結婚したっけ。

というか再会時すでに一護は霊王でしたし、子供は男の子が二人だったなあ。

そこから比べたら、何とも信じがたい進歩を遂げたものです。うん。

だからこそ驚くのです。

何故に雷雨×空木になったのだと。

空木さん、最初はただの同期だったのになあ。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 4 桜日和 後篇(前書き)

中篇からずっと後の話です。

S 1 4 桜日和 後篇

No, I don't

不意に死神の霊圧を感じて、空木ははつとして振り返った。流魂街の中流地域、極端に治安が悪いわけでも瀟霊邸に特別近いわけでもないこの地域に死神がくるのはひどく珍しい。何かあったのだろうか。そう考えて、目を眇める。

「……烈姉ちゃん？」

不思議そうな声に慌てて振り返ると、腕から血を流した少年が首をかしげていた。

「ごめんなさい。すぐ診るわね」

そう言つて少年の前にしゃがみこむ。

手早く消毒を済ませ、手をかざした。

見る間に治つていく傷口に、少年が目を丸くする。

「やつぱすげエや！ な、それ魔法？」

「違つわ。鬼道つて言つもの。……魔法なんかじゃ、ないわ」

そう言つて笑いかけ、少年の頭を軽くはたいた。

「イテっ。……何するんだよ、烈姉ちゃん！」

「魔法じゃないから、どんな傷でも治せるわけじゃないの。だから大きな怪我をしないように、気をつけるのよ」

少し表情を厳しくすると、少年は神妙な顔になった。

「うん。気をつける」

よろしい、と言つと、少年はぱつと立ち上がった。

「じゃ、今から翔悟達と遊ぶ約束してつから、行つてくる！」

言つた傍から、と呆れた顔をして見せると、少年は再び神妙そうに眉根を寄せた。

「怪我しないように、だろ？ 大丈夫、ちゃんと気をつけるから！」
「……わかったわ、行ってらっしゃい」

矢のように飛び出していった少年を見送って、もう一度感覚を研ぎ澄ませた。

死神の霊圧は消えている。

それでも、しばらく気をつけた方がいいかもしれない。

空木は小さくため息をつく、膝についた埃を払って立ち上がった。

夕飯の支度の前に、家の掃除をする。

家と言っても大した広さはない。

土間と、そして部屋が二つ。

一つは自分用に、そしてもう一つは診療所のような場所として。

死神を辞し、流魂街に降りてから、こうして医者紛いの仕事 と

言っても無償だが をして暮らしていた。

畑を耕せば、一人口を養うことぐらいはできる。

死神をしていた頃の蓄えも十分にあったから、生活にはまず困らない。

そうして暮らし始めて、もう百年近く経つはずだった。

掃除を終え、夕飯の支度をと土間へ降りる。

体力勝負の仕事の死神と違って、流魂街は一日二食が基本だ。

そうして竈に火を入れようとした時、遠くで悲鳴が、次いで死神の霊圧が上がった。

「……あの、声」

昼間の少年と、そして翔悟達のものだ。

虚の霊圧は、消えない。

それどころか、死神の霊圧は減っていくばかりで、それが残り三人を切った瞬間に空木は家を飛び出していた。

いつのまに手に持ったのか、仕舞いこんであった愛刀を、しっかり

と携えて。

袴でないせいで、瞬歩を使えないのがもどかしかった。それでもできるだけ急いで、懸命に駆ける。駆けて、駆けて、そこに広がっていたのは。

「っ……」

鞘を抜き放って、跳躍した。

蛸のような形をした虚の触手を、続けざまに三本、斬り落とす。二本は死神を捕えていた。

それは無視して、残る一本に捕えられていた翔悟を受け止める。驚いたように目を見開いているが、怪我は無いようだ。

それに安堵して、そっと息をつく。

木陰に隠れていた他の少年たちの下へ駆けて、結界を張った。

「……烈、姉ちゃ」

「聞いて。この結界を解いたら、すぐに走りなさい。後ろを見ないで、家まで行くの。それで、今日はもう家から出ないで。危ないから。いい？」

「烈姉ちゃんは？」

一緒に行くよね、と言われて、空木は首を横へ振った。

「虚を倒すわ。それに、あの死神たちも助けなくちゃ」

「危ないよ！」

「危なくないわ。大丈夫……信じて」

そついつて、子供たちの頭を掻き撫でた。

「さあ、行くわよ……走れ！」

子供たちの気配が遠ざかるのを確認して、空木はすうつと息を吐いた。

たかが巨大虚。^{ヒュージ・ホロウ}動きにくい着物でも、遅れをとる理由はない。

自然と口角が上がるのを感じて、自分に苦笑した。

やっぱり、私は死神だ。

右から迫ってきた触手を交わして、正面の触手に飛び乗る。

その上を跳躍して、残った五本の内三本を切り落とした。

二本ぐらいなら、邪魔にならない。

跳んだ勢いのまま後ろに回り込み、着地すると同時に踵を返した。

反撃の為に振り向こうにも、巨大な凶体ではすぐにはいかなければだ。

もう一度跳躍して、そのまま仮面をかち割った。

あっけなく、本当にあっけなく散った虚に、ほっと溜息をつく。

そうして周囲に倒れている死神たちに、うんざりと溜息をついた。

ざっと死神達の怪我の具合を確かめる。

命にかかわる怪我は無いようだった。

その場で手早く治療を済ませ、意識が戻る前に立ち去る。

残っていて、面倒事に巻き込まれるのはごめんだった。

次の朝に様子を見に行くと、既に人影は無くなっていた。

ちゃんと戻れたのだらう。そう思って、家へと戻る。

既に、斬魄刀は柵の奥にしまわれた後だ。

それだけで、終わるはずだった。

また、普通の日常が戻ってきた。
畑を耕して、けが人の手当てをして。

がたりと音がして、戸が開けられる。

ああ、建てつけが悪いんだっけ。

直さなくちゃいけないな、と思ってそのままだった。

「はいはい、奥に入って待ってて下さいねー。すぐに行きますから」
米を研いでいた手を休めて、振り返る。

振り返って、固まった。

「……やはり、あなたでしたか」

「どうして、見つけちゃうかな。……そっか、昇進したのね。風琵琶隊長」

以前よりも背が伸び、白い羽織を纏った元部下の姿を見て、空木はそっと溜息をついた。

そっか。もう百年も経っていたんだ。

「……そうですか。診療所を」

「言っても、そんな大したものじゃないんだけどね。大したこと、できないし」

お茶受けなんてものはないから、出せるのはお茶だけ。

それもずいぶん前に買ったもので、味は落ちていた。

それでも文句一つ言うことはなく、風琵琶はお茶を飲んでいる。

少年だった彼は、成長して立派な青年になっていた。

「大したこと、ですよ。四番隊の隊員が感心していました」

「え？」

「治療をしていただいた、死神たちのことです。彼ら、そんなに長く意識を失っていたわけではないようで……その時間から逆算して、すごいと」

「何のこと？」

「治療速度も、精度も、四番隊の席官級だそうです」

「おだてるのがうまいのね」

「おだててなんて、いません」

そう言つて、風毬は笑つた。

「……治療をしていただいた死神は、私の部下です。それだけでなく、虚の討伐までしていただいたんですよね。本当に、ありがとうございました」

改めて頭を下げた風毬に、そつと苦笑する。

「いいのよ。知り合いの子供たちも巻き込まれていたから、見過ごせないし」

「……やはり、あなたは死神なんですネ」

「そつみたい。自分でも笑っちゃうわ」

「なら、戻ってきていただけませんか」

真面目に、これ以上ないほど真摯な表情をして、風毬はそう言った。

「戻れないわ。一度辞めた身よ。今更」

「それでも、あなたは死神なんでしょう？」

「……それとこれとは、関係ないわよ」

「いいえ。あなたは誰かを護るために虚に立ち向かった。それは、あなたが死神である証です」

「それでも」

「自分に、嘘をつき続けるのですか？」

思いがけず言われた厳しい言葉に、すつと目を逸らす。
自分に嘘をつく。

それは、とても罪なことのように思われた。

「……嘘をついているつもりは、無いわ。私はもう死神じゃ」

「あなたはさつき、自分は死神だと仰ったでしょう」

失言だった、と臍をかむ。

ぐっところえて、風琵琶の目を見る。

「戻る勇気が、ないのよ。空木烈火は、もう死神ではられないの。

……空木、烈火は」

「雷雨隊長無しには、存在できませんか」

ずばり言われて、膝の上に置いた手が震える。

「ごめん。……どれだけ私情を抜いたとしてもね、結局はあの人ありきなよ。だから」

だから、死神じゃいられないの。

ごめん、と謝って、それから長い沈黙が続いた。

長い長い沈黙、そのあとで、風琵琶は小さくため息をついた。

「……それでも、あなたは死神だ。戻りたい気持ちと、戻れないと思う気持ちが、混ざっているんですよ」

「……」

そうだ。

戻りたいと、一度も思わなかったと言えば、それは嘘だ。

そう、今でも思っている。

戻りたい、帰りたいと。

それでも、戻った自分の姿が想像できないのだ。

空木烈火のそばに、あの人がいない。

そんなことは、今までなかった。

「戻ってきて、ください。あなたは、こんなところにいい器じ

やない」

重ねて言った風琵琶は、絶対に引かないという表情をしていた。帰りたい、帰れない。

戻りたい、戻れない。

空木烈火の傍には、あの人がいなくちゃだめだから。

空木烈火の、傍には。

その言葉が伝わったかのように、風琵琶はふと口を開いた。

「もし、あなたさえ望むのならば」

その言葉は、思いがけないものだった。

驚いて、風琵琶の顔を見る。

風琵琶は、何も言わずに頷いた。

それにつられるように、頷く。

もし、あなたさえ望むのならば

「卯ノ花烈つてのは、アンタか」

戸口にもたれて立つその青年に、ぎょっとしたように勇音が振り向く。

まるで気配のないその姿に、今まで気がつかなかったようだった。

「その服……王族特務、ですか？」

青年は、数時間前に驚くべき報せをもたらした日番谷達と同じ服を纏っていた。

恐る恐ると言った風に問いかけた勇音に、その青年は笑って頷く。

「雷雨って言うんだ。……悪いが、少し席をはずしてくれるか。ちよっと話があつてな」

「は、はい！」

失礼します、と慌てて駆け去っていく勇音を見送って、卯ノ花はため息をついた。

「……王族特務の方が、何のようです？」

「うん？ いや、別に。それにしても、よく考えたもんだなあ。」

空木烈火”改め“卯ノ花烈”か」

なるほどな、と感心する風の雷雨に、卯ノ花はふっと目を細めた。本当に、何もかも変わらない。

見た目も、振る舞いも、その全てが。苦しいほどに。

自分は、名前さえも変えなくてはいられなかったのに。

「何のことですか？」

「とぼけなくてもいいだろう？ それとも、そんなに頑なにならなくちゃいけない理由でもあるのか」

「……なさそう、ですね」

そう言つて、笑つた。

こんな風に笑うのは、本当に久しぶりだった。

「風琵も、元気にしているようですね」

「おう、隠密機動にいた経験が役に立ってるらしい。今は竜って名前だけだな」

かつての部下の名前を持ち出すと、雷雨はふっと微笑んだ。

今じゃいい相棒だ、そう言つた雷雨に、卯ノ花はそつと笑う。

「いい名前ですね。土砂降りよりもずつと」

「誰が土砂降りだ」

間髪入れず言い返すそのそぶりに、二人でまた笑つた。

「……あなたに恋した私が、バカでした」

「そりゃ、悪かったな」

ぼつりと漏らした呟きに、返事は思いがけず早く返ってきた。

「バカでしたよ。……本当に、どうしてこんな人に惚れたんですかね。」

「言うじゃねえか。お前だって性懲りもなく若作りしやがって。若い男でもたらしこんでんじゃねーのか？」

「……馬鹿なことを」

ふう、とわざとらしく溜息をつく、雷雨は肩を竦めた。

「なあ、こつちにこねえか」

今度は、雷雨がぼつりと言った。

「お前の実力なら申し分ねえだろ。っつーかな、お前がどん詰まりになってるせいで、治癒鬼道ができるやつがいねえんだ」

それが、形を変えた言葉だというのは、今ならよくわかる。それでも。

「いいえ」

答えると、彼は片眉を上げた。

「いいえ。……私は、若作りするような女ですから」
だから、と続けた。

「だから、女を待たせるバカな殿方の頼みを聞いてやれるほど、若くはないんですよ」

S 1 4 桜日和 後篇（後書き）

タイトル日本語訳は「いいえ」

嫌味じゃない。誰が何と言ってもあれは嫌味じゃない。

ただちよつと口が滑っただけだ。（違

……悲恋でもないですよ？ ちよつと失敗した恋です。それだけです。

卯ノ花、というのは空木の異称らしいです。

そして竜の過去もちよつと出ました。本名も。

彼のこと、またおいおい書く予定です。

そして来週からもある人達の過去話です。

時系列はこれより前です。（つまりあの三人）

これまで名前しか出てこなかったあの御方も登場します。

……一護は出てこれるのかなあ。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 5 真夏の夜の夢 巻(前書き)

本編よりもずっとずっと昔の話。
桜日和よりも昔の話です。

S 1 5 真夏の夜の夢 壱

The old story

生者と死者の境がまだ曖昧な頃、それでも世界は緩やかに分かれつつあった。

生き人の世、現世。

死人の領界、尸魂界。

悪霊の圏域、虚圏。

罪人の獄舎、地獄。

うすばんやりとした曖昧な境界が生まれ、消えていく。

気の遠くなるほどそれらが繰り返された後、ようやく世界は分かれた。

その間にどろりとした曖昧な空間が生まれ、緩やかにそれらをつなぐ。

そうして世界が分かれた後、魂の輪廻が始まった。

それを司るは死神、その頂点に立つ長。

長の一族を中心に貴族が生まれ、死神を組織する。

瀧霊挺が生まれ、流魂街が生まれ。

鬼道の発明、歩法の確立、加えて剣術や武道の流派ができはじめ、

死神は次第に勢力を増していった。

それでも長の権力が絶大で、ようやく陰りが見られはじめたその頃、或る貴族の家に一人の男子が生まれた。

幼名を柳（いづし）、正室の死後迎えられた、側室とも後妻ともつかぬ女を母とする彼は、二人の兄妹のもとで力をつけ、やがて瀧霊挺史に名を残すことになる。

この物語は、その誕生を始まりとする。

「兄上、姉上。お出かけですか」

幼いながらもしつかりとした口調に、二人揃って振り返る。

予想通り、そこに立っていたのは二人の弟、柳だった。

「ああ。長殿おさどのの所に、機嫌伺いにな」

「このところ、ずっと伺えていなかったでしょう？　あまり間を空けては、失礼になるから」

何気ない風を装って言ったが、それでも柳は気づいたようだった。目を数回しばたいて、ちよこんと頭を下げる。

「わかりました。いってらっしゃいませ」

その所作も、口調も、何より聡さも、我が弟ながら大したものだと思ふ。

脳裏をよぎった考えを打ち消すように軽く頭を振ってから、兄・克はゆつくりと頷いた。

「ああ、行ってくる。帰りに市へ寄ってくるから、土産には期待しておけ」

兄妹、二人で黙々と歩いていく。

やがて目指す家が遠くに見えはじめた頃、ようやく妹・礼が口を開いた。

「叔父上に会うのは、久しぶりですね」

「お前はな。俺は、先日お見かけした。……まあ、お話はできなかつたが」

「兄上が逃げたのでしょうか？」

少し顔を上げるようにして、自分より背の高い兄上を見て言う。眉間にしわが寄ったのを見咎めて、少し口をとがらせた。

「……兄上は、叔父上のことが苦手ですか？」

「そうじゃない。……そうじゃないんだ」

また、しわが濃くなる。

「……でも、何かのはずみに柳の耳に入ったらと思うとな」

「それは、私も同じです」

とつとつと、言葉を交わしていく。

年の割に、柳はいやに聡い。

そのの全てが貴族という家柄の縛りから来るわけではないことも、わかっていた。

いや、違う。

全てはその家柄からだ。

あまりにも貴族らしい、その理由。

「……でも、いずれ正面切って話さなければならぬ」

「それはわかっています。でも、まだ……」

「それもわかっている。……ああ、もう着くな」

門番の顔が見分けられるほどに近くなって、兄上は口をつぐんだ。少し話しすぎたかもしれない。

誰かに聞かれていなければいいが、と思った。

「よく来たね。克、礼」

用件を告げれば、すぐに奥の間に通された。

それこそが、私達がこの屋敷に近づきたがらない理由だということに。

「陛下におかれましては、本日もつつが」

「そんな口上が聞きたい訳ではないよ。周りには誰もいないから、楽にしたらいい」
予想通り遮られたそれに、兄上が唇をかんだのがわかる。礼をとっているから、ばれはしないだろうけれど。

「……はい」

勧められるままに席に付き、茶を頂く。

さてどうするかと考えたところで、長殿が口を開いた。

「それにしても、二人ともまた背が伸びたな。……礼は、一段と姉上に似てきたようだね」

「……そう、ですか？」

そんなことを言われても、わからない。だって、私は。

「うん。目のあたりが特によく似てきた。……でも、やはりどこも似ているな、うん」

一人納得したように、長殿が頷く。

隣に座る兄が困った表情をしているのは、見なくてもわかった。

「克は、鼻のあたりだな……どちらかといえば、私の父上によく似ているよ。姉上も私も母上似だから」

「院の方ですか？」

院の方は、もうしわくちやの御老人だ。

正直言つて、まだ成長期の兄上が似ているなんて思わない。

それが伝わったのだろうか、長殿は、また笑った。

「若いころの話さ、もちろん」

そうして取り留めのない話を続けて、ずいぶん時間が経った。

「……あの、陛下。私達、そろそろ」

同じことを思ったらしい兄上が、口を開いた。

帰らなくては、と告げる。

本当は、そういう風に言うのは失礼になるのかもしれないけれど、それでも帰らなくてはいけない。市が閉まるまで、あまり時間がない。

「ああ、もうこんな時間か。そうだな、もう帰った方がいいな」
納得した様子の長殿に一礼して、立ち上がる。

これで、しばらくはもつだろう。
そう思った矢先に、長殿が口を再び開いた。

「二人まで、陛下と呼ぶことはないだろうに。お前たちは、望めばここに住むことも赦される身だ」
ぴくりと、兄上の肩が震える。
でも多分、それは私も同じで。

「いいえ。確かに陛下は私達の実の叔父です。でも、私達の母は降嫁して臣籍に入った身。私達は、曾禰そねの者です」

何かを恐れるように、兄上が声の震えを抑えているのがわかった。

「私達は、曾禰氏です」

確かめるように、兄上が繰り返すと、叔父上がぼつりとつぶやいた。

「……頑固だな。本当に、姉上によく似ているよ」

その意味をはかりかねて、兄上と顔を見合わせる。

それでも何か言うより早く、長殿が再び口を開いた。

「早く、帰ってあげなさい。……弟が、待っているのだろうか?」

「……失礼します」

兄上が頭を下げたのに倣って、同じく礼をする。

長殿 叔父上のことが嫌いなわけではない。決して。

その想いが、母のない自分たちを氣遣つてのことからだを知ってい

るから。

それはただ単純に嬉しいし、有難いと思う。

たくさん問題を抱えるその腕に、自分たちをも優しく抱きとめてくれることを。

政治的に何の役にも立たない、いつそ邪魔になるかもしれない自分たち兄妹を、何でもなく抱え込んでくれることを。

それでも、それでも。

それが継母を苦しませ、今なお弟を苦しめているのだと思うと、やりきれない思いを感じた。

S 1 5 真夏の夜の夢 壱（後書き）

タイトル日本語訳は「昔話」

……ものすごくくっちゃった感じがしないでもないです。
えっと、とりあえず人物紹介しときます。わかりにくい仕上がりにな
った気がするので。

克・礼は両親ともに同じだけど、柳は異母兄弟。

克・礼の母親は長殿の姉、長殿は瀟靈廷で一番偉い人、ですね。
この時代にはまだ四十六室はありません。

曾禰はすいません、ぱつと目に付いた豪族の名字から。

というかまた漢字表記怪しいという恐怖。ケータイからまだ確かめ
ていません（汗）

柳はあのひとです。

また名前と年代から想像して下さい。

それでは今後も宜しくお願いいたします。

S 1 5 真夏の夜の夢 弐(前書き)

吉の数年後から始まります。

S 1 5 真夏の夜の夢 貳

Whose fault

木刀が空を切る、稽古の音が聞こえる。

しばしの間それを聞いていた克は、手にしていた書物を小姓に預けて音のする方へ向かった。

庭の中でも、木花の少ない殺風景な場所。

その中央で諸肌を脱いでいたのは、やはり末の弟だった。

成長期ではないが、それでもぐつと背が伸びた。

細い体つきだが、鍛錬の成果か貧相には見えない。

剣の腕も中々で、死神として名を馳せる日も遠くはないだろう、と想う。

「やっているな、柳」

「あ、兄上」

即座に振り返った柳に、相好を崩す。

「お前は、本当に熱心だな」

「……力が、欲しいのです。それに、私だけが特別熱心という訳ではないでしょう」

「そんなことはないさ。それに、焦ることはない」

ゆっくりと首を振り、否定しても、柳は曖昧な笑みを返しただけだった。

その表情のどこかに焦りが見えるのは、恐らく気のせいではないのだろう。

兄や姉である自分たちでさえ、まだ死神ではない。

そうだというのにここまで熱心になる理由は、わからないでもない

が喜ばしいものでもない。

「礼に、稽古をつけてもらっているようだな」

話題を変えると、柳は素直に頷いた。

「はい。……ご迷惑だとは、わかっているのですが」

「そういうことじゃない。それに、迷惑でもないだろう」

「そう、でしょうか」

小さくなった声に、目を細める。

「そうだ。迷惑じゃない。……お前、まさか俺が勉強をみているのも、迷惑かけてるとか思ってるのか？」

「……」

沈黙が、答えだった。

わかりやすい、とため息をついて、がしがしと頭をなでる。

うわつと声あがったが、無視した。

「俺とあいつとお前は兄弟だ。兄と姉が弟の稽古や勉強を見て、それが迷惑だとしても？」

「……ですが」

「柳」

強く名を呼ぶと、柳は押し黙った。

髪を押さえられた体制のまま、上目遣いに見上げてくる。

その表情に一瞬目を止めると、再び頭を掻きやった。

「お前も、俺も、兄弟だ。変な遠慮をするな、鬱陶しい」

少し強い言い方をすると、柳は目を伏せた。

自分でさえまだ少年で、それよりも幼いというのに、その仕草は年齢に見合ったものではない。

それを見ないように、頭を掻き撫で続けた。

「……迷惑だと、お前がそう考えることの方がよほど迷惑だ。そん

なに俺達はお前の姉にはふさわしくないのか？」

「……そういう、ことでは」

「なら、そう思うのはやめる。いいな？」

「……はい」

もう一度、ぐしゃぐしゃと撫でると、ぽんと肩をたたいた。

「……あいつのアレは、どうにもならないのな」

諦めたように克が呟くと、礼も溜息をついた。

場所は屋敷の書庫、克がいるところへ礼が押し掛けてきたのだ。

その理由がわかっていた克は、礼が口を開く前にそう言った。

溜息が、肯定の意を示していた。

「周りの者の陰口……ばかりでは無いですよ。むしろ……」

「あんまり言うな。ことがややこしくなる」

克はそう言うと、大きく息を吐いた。

柳が自分たちに遠慮するのは、母が違うことからなのだろう。

自分と礼の母は長の一族の出自で、柳の母親の身分はそれに比べれば大きく劣る。

それでも、二人はそれが差になると考えたことはなかった。

身分が劣るとはいえ柳の母も貴族の出自だったし、何より彼女にはとても世話になったから。

「でも、義母上こそが私にとっては母親のようなものです。私は、
実の母の顔を知りません」

「そうだな。俺も、ほとんど覚えていない。……育ててくださった
のは、柳の母御だ」

でもその母親達は、礼と柳を産んで命を落とした。

だから二人は実の母親の顔を知らないし、そして。

「義母上は、私達を実の子のように可愛がってくださいました。柳

を胎に授かってからも、それはかわらず。……だから、私は義母上に申し訳ない……！」
礼が絞り出すように言うのを聞いて、克はその頭を撫でた。
克も、同じ気持ちだった。

出産とは、命懸けだ。

だから、本当に命を失うことがあることも、よく承知している。
それでも、柳の母親が死んだのは、それだけのせいではないのだからと、特に克はよくわかっていた。

いくらお亡くなりになったとはいえ、花姫様を賜りながら他の女を迎えるとは。

克様と礼様と仰ったか。お二人がおいたわしゅうてならん！

実の母子のように接しておると聞いたが、身の程知らずな。

御子の方がよほど身分が上であるにのう。

そついう陰口を、何度も何度も聞いた。

それでも義母は自分たちを変わらず愛してくれたし、母のない自分たちにとってそれが救いだった。

しかし、その中傷が徐々に義母を苛んでいることも、幼心に察していた。

そして柳が胎にいることが分かり、それがきっかけで中傷は激しさを増した。

月を経るごとに大きくなる胎と、細りゆく義母。

何もかも全てが義母を傷つける刃となり、そして彼女は死んだ。

だから、克と礼は誓ったのだ。
自分たちを愛してくれた義母のために、この柳を護ると。

愛して、慈しんで、大切に育ててきた。

周りの者が何と言おうと、そんなことは関係なかった。

二人にとって、それが唯一遺された恩返し^{おんがし}の道に他ならなかったから。

そして何より、愛おしかったのだ。

自分たちを兄と姉と呼び、無邪気な笑みを見せてくれるその弟が。

「義母上に、合わせる顔がないな」

克はそう言つて、また大きく息を吐いた。

その横で、礼が鼻をすする。

「……私は、叔父上が憎いです」

「礼……」

さつと辺りに目をやる。

人気はないが、それは紛れもなく重罪に当たる言葉だ。

「私は、叔父上が憎い……！」

きつと上げた視線が、克の言葉を止めさせた。

その強い視線の中に込められた紛れもない怒りに、克はそつと目を逸らす。

「叔父上だけではありません。私は何もかもが憎い。院の方も、父上も、誰もかも！」

「……礼」

「なぜ柳が苦しまねばならないのです！ この世界の仕組みが、長というこの制度が、柳を苦しめている！ それが憎くなくてなんだ

「というのです！」

「……………」

克は、何も言えなかった。

それは、克も思っていることだったから。

だから、何も言えなかった。

「……………元服の日取りがな、決まったよ」

長い沈黙の後、克が不意に口を開いた。

「俺は、死神になる。いつか柳が死神になるまでに、あいつを護れる立場を手に入れる」

克は強い口調でそう言っつて、視線を天井へと向けた。

書庫特有の暗さで陰影がより濃く見える梁を睨むように、視線を強めた。

柳が公平に扱われることがこの先あるとしたら、それは死神になって実力を発揮するよりほかにない。

それに手を貸せるとは思っていない。

ただ、その時に、いわれのない中傷だけは蹴散らしてやりたいと思う。

だからこそその、決意だ。

「……………とはいっても妹に負け続きの俺じゃ、怪しいものだな」

「……………女は死神になれませんから、兄上に頑張っつて頂くほかありません」

思い出したように言えば、礼も同じように言った。

最初の数年こそは克の方が強かったが、今となつては礼の足元にも及ばない。

だからこそ柳の稽古は礼がつけているのであつて、それは兄としてかなり情けない部分である。

だが、そうはいつても始まらない。

「……努力する。あいつの為にも、お前の為にもな」

その数カ月後、克は無事死神になった。

二人が心配していたようにはならず、順調に席次を進めた克は、ついに六席になった。

それが、柳が元服を迎える直前のこと。

そして、後に三人の命運をことごとく揺るがせた一人の少年の誕生の、数年前のことである。

S 1 5 真夏の夜の夢 貳（後書き）

タイトル日本語訳は「誰のせい？」

兄弟の見た目身長は小学校の低学年・中学年・高学年ぐらいで。

柳はともかく……克と礼の正体もわかりますよね。

ちなみに一番のキーキャラクターは礼ちゃんです。

三人とも一護に大きく関わる人たちですけど、この人は特になんて。

そういえば、S 1 5 真夏の夜の夢 のタイトル由来について。

一護の尊敬する人物「ウィリアム・シェイクスピア」の作品タイトルからとりました。

夏の夜の夢、と訳されることの方が多いと思うんですけど、そこは
何となくです。

……ちなみにこの話とは違ってものすごい喜劇です

それでは感想などお待ちしております。

S 1 5 真夏の夜の夢 参(前書き)

前話の数年後から始まります。

S 1 5 真夏の夜の夢 参

modest resolution

風雨急を告げる、と世には言う。

暗雲垂れ込める世の中に、光の射す余地はない。

ひたりひたりと足音をたて、死神の首を狩りに来る。

斬れ、戦え、刃を手に取りれ。

さもなくば、死ね。

足音こそしないものの、気配が人外の速さで近づいてきた。
やがてきぬ擦れの音が聞こえるようになって、ため息をつく。
ガタタつと音をたてて扉が開き、建て付けが悪いなと思った。

「兄上！」

叫んだ声は、妹のもの。

横になったまま片手を上げれば、縫ったばかりの傷が引き攣る。
思わず顔をしかめると、礼はひどく変な顔をした。

「……無茶をされるからです」

旁りに呆れが混ざった声に、苦笑で返す。

「無茶をしなければ、今頃死人が出ていたからな」

「無茶をしていい理由にはなりません」

「そういな」

ため息混じりに返して、もう一度苦笑した。

無茶をした自覚は、あるのだ。

いくらとつさのこととはいえ、庇って矢を受けるなど馬鹿げている。毒を防ぐために何かで叩き落とすのが定石で、一番正しい形だ。

「……那君は」

低く問い掛け、妹の表情を伺う。

案の定少しく曇ったそれに、眼光をするどくした。

「怯えておいででした。今は……重國の班が護衛をしているはず」

「……そうか」

返事に一拍の間を要したのは、何も怯えていたという言葉のせいではない。

兄妹二人の間ではもはや禁忌となりつつある名前が、不意に登場したからだ。

奇妙な沈黙をごまかすように、礼が咳払いをした。

「那君襲撃の、首謀者のことですが」

「ああ……何か、わかったのか」

「恐らくは、竜堂寺の者かと」

「竜堂寺……ああ、最近のし上がってきた家だな」

職場で見かけた、その当主と息子の姿を思い起こす。

あまりいい雰囲気じゃないな、というのが第一印象だった。

「尉遲、司馬、王……加えて竜堂寺ときたか。厄介だな」

こここのところ、相次いで長の一族を襲う家の名前を上げ、ため息をつく。

既に成人し、政治の表舞台に立つて久しい叔父を襲うのはともかく、まだ幼い従弟まで襲うというのはいただけない。

それら全てが長の座を　　瀟靈廷の、死神の頂点を狙う者であるだけに、なおさら。

「己が為政者に相応しいと思っていることが腹立たしい。かような器でもなかるうに」

腹のうちに溜まっていた毒を吐くように、礼が言った。

瞳には鈍い光が灯り、その本性を伺わせる。

礼は女官として那君についているとはいえ、本来は戦士としての側面が強く、また才能もそちらに傾いている。

力で全て押し伏せてやりたいというのが、本心だろう。

「殺るなよ」

「わかっています、それぐらい」

瞬時に返ってきた言葉に幾らか安堵して、再び口を開く。

「……長殿の求心力が弱まっているのは、事実だ。加えて継嗣である那君は病弱。きやつらが今を好機とのさばるのは、当たり前だろう」

「……それですよ」

礼の声が、一段と低くなる。

鈍い光が、また強くなった。

「……それ？」

「長殿の求心力が弱まっている、だと言つのに長殿は何もなさらない。政敵の粛清も、御自分の足場を固めることさえも。……まるで為政者としての立場を放擲したかのよう」

「……」

それには、気づいていた。

叔父が、長殿がどういう意図でそうするのかはともかく、立場を放棄すると言うことに何の語弊も感じさせない行動をとっていることには。

そして、女官として長殿の邸宅に深く出入りし、また従姉としての信頼と能力の高さから那君の側仕えを命じられている礼にとっては、それがより顕著に感じられるのだろう。

失政

その二文字の言葉が、嫌に重く響いた。

厳密に言えば、失政と言うのは間違いだろう。

政策を誤った、悪法を敷いた訳では、ないのだ。

為政者としての立場を放棄した、ただそれだけで。

悪法は敷かれない、だが善政がなされるでもない。

何も、なされないのだ。

ただ慣例的に、同じように、税制が見直され、役人の配置換えが行われる。

新しいことは、何も起きない。

「長殿がやっておられることは、間違いではないのだろうな」
正しくない。その言葉を飲み込んで、言い換えた。

間違いではない。でも正しくもない。

ただ、大きく時代が変わりはじめている今となっては、それらが既に時代遅れなのだ。

それでも、礼はそう感じないようだった。

「いいえ。間違っておられます」

「礼……」

諫めるように名を呼んでも、礼は横を向いただけだった。

「間違っておられます。……兄上も、気づいておいででしょうか？」

もう、今までのやり方では通用しないと。通用しないやり方を続けるのは、為政者として間違っています」

「……それについては、お前よりもよっぽどな」

礼と違い、得意としたのは政治学だ。

死神業をするよりも、よほど肌にあう、と自分では思う。

でもだからこそ、叔父の一族が長の座にあるべきだと思う。

竜堂寺のような権力を欲する輩は、政務に携わるべきではない。

「……体制というのは、中々変わらない。政のやり方についても、少なくとも俺はそれを知っているし」

「兄上も兄上です！」

突然大音声が叩き付けられて、思わず口をつぐんだ。

礼が、眦をキリキリと吊り上げる。

「……なんだ いきなり」

「変わらないと言っているから変わらないのです。長殿もそればかり。……でも、実際変わってきているのです。変わらないでは、だめなのです。変えていかねば」

数瞬、沈黙が続いた。

口を開いたのは、礼だった。

「……那君は、それをわかっておいでです」

「那君が？」

まだ年端もゆかぬ幼子なのに、と驚くと、礼は首を横へ振った。

「あの方は、私達よりも遥かに聡明ですよ。霊圧の高さといい、その慧眼さといい、長殿よりも遥かに為政者として相応しい」

「……」

そんなことが、あるのだろうか。

まだ幼く、体も弱いせいで世界を知らないというのに、そんなことが。

「いつか、世界が変わるその時に、世界を変えられる力が欲しい……」

「この間、私にそうおっしゃいました」

「世界を変えられる、力」

「ええ。……その過程で、自分が瀟霊廷を追われようとも構いません。そうなれば、それこそが私の生まれた意味なのでしょうから、と」

「っ……」

ただ、息を呑む。

それが本当のことだとしたら、なんと なんと。

「苦勞は人を老成させます。こつも毎日刺客の襲撃を受けていたら、嫌でもこうなるしかないのでしょうか」

「……」

何も、言えなかった。

ただ、似ていると思った。

自分に、礼に、何より末の弟に。

「兄上」

礼は改めて、向き直った。

「私は、父上が柳にした仕打ちを許せません。……それ以上に、父

上にそうさせた世界を、許すことはできません」

「そうだな。……俺もだ。許すことなど、できまいよ」

なぜ、と叫んだ己の声が、今もはっきりと蘇る。

それでも覆すには時遅く、重國が山本姓を名乗るのを見ていることしかできなかった。

「……柳のことを、重國のことを思うなら、それが最良の手だてだというのはわかります。私とて、そこまで子供ではありません。柳があのまま私達の弟として生きるには、世界は厳し過ぎる」

「それが……養子にだすことが、あいつにとっての幸せだと？」

「私達にとつての幸せが、あの子にとつての不幸せなのでしょう」
は、と礼は自嘲ぎみに息を吐いた。

どんなに愛しても、慈しんでも、世界は思い通りにはならない。
その最たるものが、柳の存在だった。

「……だから私は、総てが憎いのです」

「憎い……」

半ば反射的に、言葉を反復した。

憎いというその言葉が、総てだった。

「ならば、どうする。世界をぶち壊すか」

冗談の口調でも、本音は違う。

それは、兄妹にしかわからない間合い。

対して、礼の口調はさっぱりしていた。

「那君がそうなさるなら。私は長殿には従いません」

「奇遇だな。俺も同じ意見だ」

それは、ささやかな口約束。

総てを壊すという、身の破滅へ向けた。

S 1 5 真夏の夜の夢 参(後書き)

タイトル日本語訳は「ささやかなる決意」

このシリーズ、本当は柳が主人公のはずなのになあー。
と思わないでもない今日このごろです。

はい、柳は総隊長でした……
子供期……ごめん想像ムリ。

今回も変わった苗字や名前が出てきたと思うんですけど、竜堂寺さん以外は全て実在の一族やら人物やらが由来です。
竜堂寺は映画第一作、Memories of Nobodyに出
てきた一族から。

総隊長が養子になった経緯とか、那君が誰なのかとか、克&礼の兄妹がこれから何をするかとか、……想定している話数で収まるか甚だ怪しいぐらいまだまだ盛り沢山なんですよ(笑)

特に那君と礼は重要なキャラだから大事に書かないとなあ……

それでは感想などお待ちしております。

S 1 5 真夏の夜の夢 肆(前書き)

前話の数年後から始まります。

S 1 5 真夏の夜の夢 肆

I d o n ' t f o l l o w y o u r p i a n

ささやかな口約束をしたあの時から、さほど時間が経たないうちだった。

全てが、終末に向けて動き出したのは。

ととん、と微かな音がした。

耳を澄ませる。

ととん、ととん。

また、音がした。

とん、ととん、ととん。

その後、ふつつりと音は絶えた。

少年は、少しだけ微笑んだ。

計画は、順調だ。

それから、また時間が経った。

女官達が話す声に、耳を傾ける。

「先頃の宴の、華やかだったこと。こと舞姫は見事で」

「たしか、竜堂寺の者だったかえ」

「そうそう。確か、嫁ぎ先も決まったとか」

「おや、どこに」

「死神だったかと。隊長かも知れませぬ」

「なんと。あれ程の舞い手とあらば、高位貴族の側女も望めように」
「竜堂寺は死神の家柄。家の事情もおありなのでしょう……」

決められた符牒から、言葉を拾い出す。

計画が順調なのを確かめると、少年は再び書物へと意識を移した。
存外、世の中と言うのは単純らしい。

そうして、また月日が経った。

「那君、陛下がお呼びでございます」

「……わかりました。すぐに行きます」

女官に返事を返し、那君と呼ばれた少年は立ち上がった。

年の頃は、見た目と言うならば十代中頃と言ったところか。

しなやかな体は力を感じさせない細さで、色も白い。

萌黄色の衣を着ているものの、少年に若さを補うには少しく足りないようだった。

「おお、来たか」

「はい、父上。御用向きは何でしょうか」

那君の言葉に、長殿は苦笑する。

「特に用があるわけではないよ。親が子を呼ぶのに、特別な理由は
必要ないだろう？ ほら、こっちへ来なさい」

手招きされるのに従って、那君は立ち上がった。

そのまま長殿の間近に座り、しばし語らう。

親子間の会話というに相應しく、内容に政治めいた複雑さは無い。時折、那君の将来や政に話の及ぶことがあるものの、会話は平穩に、少しの闇もなく進んだ。

「父上は、お優しいのですね」

那君がおもむろに言うと、長殿は首を傾げた。

「どうした、突然」

驚いた様子の父親に微笑むと、那君は首を横へ振る。

「いえ。……いつも、思うのです。父上の政策を考える度、優しいなど」

「……」

黙り込んだ長殿に、那君は尚も続けた。

「父上が何故あのような政策ばかり立ててるのか、理由は知っています。……ですから、優しいなど」

「理由？ 何のことかな？」

そこで初めて、彼は父親に本性の一端を見せた。

そう。彼は知っていた。

克や礼がわからないと言った、長である父が政を放擲した理由を。それを知っていて、彼は嘘をつく。

「……いえ。ただ、私は父上に賛成申し上げますと。それが、言いたいだけです」

それを聞いて、長殿は明らかに安堵の表情を見せた。

知らぬ間に詰めていたらしい息を、そつと吐き出している。

「お前には、利のない話だろうに」

どこか驚いたように長殿が言うと、那君は首を横へ振った。

「利が全てと言う訳ではないでしょう」

「そうだな。何より義の問題だ。……お前がわかってくれるなら安心だ」
心底安堵したらしい長殿といくらか話をした後、那君は辞去を述べた。

自室に戻り、人払いをする。

ふ、と息を吐いた後で、那君は天井を見上げた。

「確かに、あなたの意志には賛成ですよ、父上」

でも、と那君は言葉を接いだ。

「あなたの計画には従えない。私は、私の意志に従ってやらせて頂きます」

一人で使うには広すぎる部屋。

その空間に、咳く程度の声は容易く吸い込まれていく。

「さて、世界の終わりは近いようだし……ここも燃えちゃうだろうしなあ。いつそ移住でもするか」

ふふ、と不敵な笑みを浮かべて、那君は床に横になった。

「終わりまであと五年。……楽しくなってきたなあ」

S 1 5 真夏の夜の夢 肆（後書き）

タイトル日本語訳は「私は私の意志に従う」

うわ短い！ ごめんなさい！

那君の動かし辛さがここにきて激しく暴れました……

来週はもうちょっと長くいけると思っています……

それでは感想などお待ちしております。

S 1 5 真夏の夜の夢 伍（前書き）

前話の5年後から始まります。

S 1 5 真夏の夜の夢 伍

C H E C K M A T E

始まりは、突然だった。

少なくとも、大勢の人々にはそう見えた。

暗闇の中を逃げ惑う人々の中で、礼は人波に逆らうように騒ぎの下へと向かっていた。

「司馬か」

「いや、尉遅だそうだ」

「王が主犯だと」

「竜堂寺は関係してないのか」

叫ぶように交わされる会話が的を見ていないことは当たり前で、それがわかっていても少しいらいらした。

目指す屋敷から火の手が上がっているのを目視して、礼は脇道へとそれた。

逃げる先は、こつち。

予め決めてあった全ての可能性を探り、その先へ向かう。

人波から外れたところで瞬歩を使い、屋根伝いに古い小屋へと向かった。

小屋の床下、そこにある扉を跳ね上げて、狭い穴に飛び込む。

身長の三倍ほどを一気に落ちたところで、唐突に景色は開けた。

「外は……大騒ぎのようだね」

問いかけたはいいものの、礼が煤まみれの姿であることから察したのだろう。

那君は僅かに苦笑してから、礼に手ぬぐいを差し出した。

「ありがとうございます。外は、逃げ惑う人々でごった返しています。消火に人手は割かれていないようです」

「ここも想定通りつと。……犯人の特定は？」

「為されていないようです。で、結局どこが動いたんですか？」

「尉遅だ。けしかけた中じゃ、あの家が一番短気だからな」

那君の代わりに答えた克を、礼は半眼で見る。

「……本当に、よかったですか」

「よくは、ねえだろ」

「はい、二人ともそこまで」

場の空気が嫌な緊張で張り詰めた瞬間に、那君が二人の間に割って入った。

「ここからのことを確認するよ。まず、僕はここから克と一緒に父上の下へ向かう。父上は、離宮にいるんだよね？」

「はい。そちらに避難されています。那君のことを案じておられました」

礼が言うと、那君はふつと目を逸らした。

「それはいいんだよ。……で、だ。いくらなんでも夜が明けたら、ある程度の状況は見えてくるはずだ。犯人は尉遅。この家が一番の危険分子のようだからね。一気に肅清する。克、手筈は？」

「抜かりなく」

「よろしい。……それでも、この一件で政治に関わりがない一般の民にまで、何かが起こっていることは知れ渡ったわけだ。一気に情勢は悪化する。残りの家も、動く」

静かに断言した那君に、克と礼は頷く。

そう。全てはそれが狙いだった。

長の一族に取って代わるうとする輩は多い。
しかし、その多くは巧妙な手口で襲撃を行うために、表だって捕らえることはできない。
だから、大きな騒ぎを起こさせたのだ。

これだけの騒ぎで何かしらの証拠が残らない訳がなく、しかも起こることは予めわかっていたため、証拠を押さえる手筈も調べてある。
手始めに、尉遲を肅正する。

そうすれば、自ずと他の家も動き出すだろう。
そこを順番に叩き、それから

「最後の見通しまでたっているんだ。必ずやり遂げるよ」
那君が言うと、二人はまた頷いた。

「父上、ご無事でしたか」

そう言つて、那君は部屋に入った。

静霊挺の中心にある屋敷から、離れたところにある離宮。

供人達に付き添われ、長殿はそこに避難していた。

「ああ……お前こそ、無事だったか」

大仰に胸を撫で下ろした様子の彼に頭を下げ、那君は床に座る。

「ご心配をおかけしました。逃げ道が塞がれていたために、予定とは違う門から逃げたので。そこで逃げ惑う民達に巻き込まれて、到着が遅れました」

「そうか。何にせよ、無事でよかった」

ほう、と大きいため息をついた長殿を、那君は冷静に見つめる。

しばしの時をおいて、那君は改めて口を開いた。

「犯人は、わかったのですか」

「……いや」

長殿は、そうして少し目線を泳がせた。

その仕種に目を留めて、那君は再び口を開く。

「わかっていることは、教えて下さい。私は父上の息子です。できることがあるなら、しなくてはならない」

「お前が関われば……」

「命が狙われているのは昔からでしょう。今に始まったことではありません」

即座に言い切った那君は、強い視線で長殿を見据えた。

「……お前のそういうところは、母親に似たのかもしれない」

どこかつまらなさそうに呟いた長殿に、那君は何も言わない。ただじつと、まっすぐに、長殿を見つめる。

「犯人は、尉遅らしい……追っ手をかけねば、なるまいな」

その口調の中に微かな長らしさを感じ取るも、那君は何も言わなかった。

ただ、首肯をもって返す。

すると、長殿はまたわずかにため息をついた。

「これを期に、他の政敵たちも動き出すだろう。……気をつけるよ」

「はい、十分に。……失礼いたします」

部屋から退出した息子と、遺された父親と。

二人の行く道がすでに決定的に違えていることを、まだ父親は知らなかった。

夜が明ける、空が白みはじめるころ、ようやく事態は落ち着きつつあった。

もちろん、民達の混乱は止まない。

それであっても、長の一族を守護する死神、護衛士と呼ばれる存在たちの間では、すでに収拾はついていた。

「尉遅に、しかける。逃がすな」

総隊長から命令を受け、は、と返事をする一団の中に、その二人はいた。

「……討伐に出るより、若様について差し上げた方がよろしいのではないですか」

低い声で言われ、克はふいつと視線を逸らした。

「若様には他の者がついている。何より、長殿に仇なす者を捕らえる方が先だ」

「そう、ですか」

重國は、そうは言ったものの納得していないようだった。

それを表情から読み取った克は、重國を真っ向から見返す。

「何か、言いたいことがあるなら言え」

「いえ、ただ……」

そう言って、重國はくるりと背を向けた。

「ただ……こういう時、頼りにする人がそばにいてくれることほど、嬉しいものはないですから」

ともすれば聞き逃してしまいそんな声量で、重國はそう言った。

昔から、そつだ。

自分の意思を表にだす性格でなかった柳は、本当に言いたいことほど小さな声で言った。

だから、わかる。兄だから。

「……お前も、そうだったのか？」

そうだったらしい、そうであってほしいと思つて、克は言った。

その、頼りにする人が自分や妹であってほしいとも。

だが返事はなされず、重國は黙つて姿を消した。

瞬歩を使ったのだとわかつていても、その静かさが齒痒い。

「待つてろ、柳。いつか必ず……」

その後の言葉を飲み込んで、克も瞬歩で姿を消した。

そのためにも、しなくてはならないことが山積みだから。

数週間かけて、首謀者 尉遲の当主と、その一族郎党が捕らえられ、多くが極刑に処された。

長の名で行われたそれが、実はその息子によつて決められたものであるということを知る者は、意外なほど少ない。

その中の一人、礼は、刑に処された者の一覽を整理しながら、ため息をついた。

もうすぐ、その時が来る。

覚悟していても、それは辛い。

たとえ憎くても、彼は間違いなく彼女らを愛してくれる、最大の守

護者だった。

そばに置かれた刀を手に取り、礼は立ち上がった。
非常事態のために、女官にも帯刀が許されている。

その気配が近づいてきているのを感じながら、礼は静かに息を整えた。

S 1 5 真夏の夜の夢 伍（後書き）

タイトル日本語訳は「王手」

一話で一氣にことを進めるのはやめなさい、と何度言われたことか。しかし、これはこれで勢いがあるといいんじゃないかな、と開き直っています。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 5 真夏の夜の夢 陸(前書き)

前話の直後から始まります。

S 1 5 真夏の夜の夢 陸

I t ' s t o o l a t e .

刻一刻と迫るその時を、息を殺して待つている者達がいた。

静かに待ち受けている者達がいた。

共通しているのは、ただ、その時が来るのを知っているということだけ。

そして、その時を待ち望んでいるということだけ。

死神の足音が、聞こえた。

「尉遅家、王家……そして、竜堂寺か」

どこか寂しげに、長は呟いた。

その正面に腰掛けた那君も、同じく沈痛な表情でいる。

「父上がお気を落とされることではありませんよ。それに、竜堂寺は廃絶したわけではありません。……次の当主は、見所がある。何が義かを知っている者ですから」

二人が会話するその三日前、それは起こったのだった。

「父上、覚悟！」

うおおお、と鬨の聲が上がった。

竜堂寺の邸宅、その最奥の一番護りの固い場所に住む当主へ切り掛かった者がいた。

首が飛び、血が跳ねる。

一瞬の出来事に、何もできなかつた。

当主の首をはねた刀が、爛と光る。

それを合図に、そこかしこに忍びこんでいた次期当主の手勢が一族の重鎮　反長派に切り掛かった。

それからしばらくが経ち、刀から血の滴る音のみが聞こえるようになった時、立っていたのは次期当主とその腹心、護挺で得た知己や分家の末端に位置する者達だけだった。

中心に立つ青年が、刀を強く打ち振る。

血が床に弧を描き、刀は元の色を取り戻した。

青年はそれをゆっくりと鞘に納め、周囲に立つ手勢を見渡す。

誰も目の迷いが無いのを見てとって、彼は静かに目を閉じた。

沈黙が、部屋に満ちる。

青年が次に目を開いた時、その手勢は歓喜に身を震わせた。

「これより、私が竜堂寺家当主となる。我等一族は、那君の名の下に」

「……だが、父親を手にかけるとは。そんなことをさせた責任は、

私にあるのだろうか」

深くため息をついた長に、那君は首を振ってみせた。

「いいえ、父上。そうせねば、いずれ竜堂寺までも廃絶せねばなりませんでした。彼は、一族を護ったのです。……父上が気に病むことなど、何一つありません」

「先代当主に反乱を起こさせたかもしれない責は、私にある」

何もかも背負い込もうとする父親に、那君はある二人の姿を重ねた。

優しく、強く、何よりも弟を愛する二人は、時折驚くほど弱い。

義よりも弟優先の彼らは、だから、この作戦にのつた。

そして、自分は知っている。

二人が互いに隠していることも、彼らの母が自分の父に隠したことも。

くすり、と内心で笑った。

どうして、皆ばかなんだろう。

自分の傲慢さにも気づかず、愚かで、何も知らないで。

そして、その穏やかな思考は、唐突に打ち切られた。

強く腕を掴まれ、引き寄せられ、何かに視界を覆われる。

「……父上？」

声が、不自然ではないだろうか。

そんなことを思う余所で、何か重いものが空を切る音が聞こえた。

ぬるり、と。

温かい何かが、頬を伝う。

誰かの悲鳴が、聞こえて。

急に、腕に痛かった手から力が抜けた。

「貴様、尉遅の者か！」

二撃目を振り下ろそうとした襲撃者の腕には、これみよがしに尉遅の家紋が染め抜かれていた。

尉遅の生き残りが、いたのだろうか。

そう考えながら、礼は衝撃で固まったままの女官の群から飛び出し、携えた刀を抜いて割って入る。

キン、と刀を弾いて、そのまま、無駄のない動きで襲撃者を仕留めた。

「陛下！ 陛下！」

失敗に焦ってか、次々に現れた刺客を仕留めながら、背後の長に呼び掛ける。

霊圧は下がる一方で、庇われたまま下敷きになっている那君からも返事はない。

悲鳴をあげる女官達と、仕留められた刺客の血で、部屋は、間もなく阿鼻叫喚の地獄絵図に成り果てた。

両手を二回使っても足りない数の刺客を仕留めたあと、礼は思わず歯噛みした。

刺客の数が、多すぎる。

尉遅の残党だけではなく、他の家の者もいるのかもしれない。

それでも、実力的な問題では決して手に負えないわけではなかった。支給された浅打は、首の血管を斬っているだけなので刃毀れはしていない。

だが、血油で切れ味が落ちてきていた。
このままでは、まずい。

早く、と焦りはじめたその時、ようやく、待ち人が現れた。

「すまん、遅れた！」

背後に兄の気配を感じて、礼はほっと息をついた。

それでも力を緩めたのは刹那のごとき間で、すぐに刀を右に払う。濁った悲鳴が上がる傍で、二人は冷静に会話していた。

「なんで、浅打なんかつかってるんだ」

「……女官に支給されたんですよ。一律で」

「お前は自分の斬魄刀があるだろうが」

「あれは、使いたくないんです」

はあ、と克がため息をつくも、礼は何も言わなかった。

何より、未だ呼びかけに応えない二人が気がかりだった。

「お前、陛下の治療できるか？」

「……私程度の力じゃ、何の役にも立ちませんよ。治療班はまだなのですか」

「直に来るはずだ……ああ、来たな」

克と共に駆けつけた他の護衛士がおおよその刺客を片づけたその時、ようやく、治療班が来た。

部屋の奥で倒れる長と、その下に庇われた那君に手早く治療を施し始めた彼らを見て、礼はその場にへたりこんだ。

とんでもないことを、してしまった。

「……助かってくれ……」

そうして茫然とする横で克が呟いた声が、本音なのか、演技なのか、礼にはわからなかった。

「ご気分はいかがですか、陛下」

那君がうつすらと目を開けると、すぐさま一人の女官がその顔を覗き込んだ。

「……平気。何が、あった」

口を開くと、思いがけず舌がもつれた。

それを察してか、女官が心配げに頷く。

「床で、頭を打たれたのです。起き上がったは、なりませんよ」

女官の声が心なしに低いのは、頭痛のする自分を気遣ったことだろうか。

そう思う傍らで、女官の目が濡れているのにはすでに気づいていた。

「……父上は」

ひゅっ、と女官の喉がなった。

それだけで、答え合わせには十分だった。

多分、女官は何か言ったのだと思う。

ただ、それは聞き取れなくて、そっと目を閉じると、返事の代わりにのように涙がこぼれた。

多分、取り返しのつかないことをしてしまったのだと思う。
それでも引き返すつもりはなかったし、後悔さえもしていなかった。
ただ、どうにかして進まなければ、と。
それだけで、頭がいつぱいになった。

S 1 5 真夏の夜の夢 陸（後書き）

タイトル日本語訳は「其はあまりにも遅く」

あまり語るとネタバレになるので、今日は特には
庇護者を失った彼らがどうするかに注目ですかね。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 5 真夏の夜の夢 七(前書き)

前話の少し後から始まります。

S 1 5 真夏の夜の夢 七

Please forgive us

しばらくの混乱を経て再会した三人は、互いの表情を見て同じ気持ちであることを悟った。

何か大きな間違いを犯したかもしれない、その不安。

しかしそれが「かもしれない」というような曖昧なものではなく、「犯した」という確定であることも、口にはしないままであってもわかっていた。

こんなに大きな間違いをしたのは、才にも地位にも恵まれた彼らにとって初めての事だった。

「……それ、でも」

那君は、何かをこらえるように必死に口を開いた。

無理やりに、いつもの表情を浮かべる。

「進む。少なくとも、僕は。……二人が辞めたいというのなら、それは止めないけれど」

「やめませんよ」

口をついたようにすぐに出た返事は、ぴたりと揃っていた。

その思いがけなさから互いの顔を見てもおかしくないだろうに、兄妹は決してそうしなかった。

そのまま、礼が口を開く。

「やめません。私の主は、あなたです。どうか、置いていくなどと言わないで下さいね」

先にくぎを刺され、那君は苦笑する。

そう、事の如何によっては、二人を強引に計画から外すつもりだっ

た。

迷いのあるままでは自分に火の粉もかかる可能性があるし、迷ったままで余計な傷をつけさせる訳にもいかないから。

「このまま進めましょう。何より、計画外の事は何一つ起こっていないのです。ここで足踏みをして、計画を崩す訳にはいかない」
克がゆつくりと口添えをすると、那君はため息交じりに頷いた。
どうにかして、やり遂げるしかない。

二人の声からはそう読み取れて、もう止めようがなかった。

「そうだね。……なら、続けようか。蓮杖の若当主から、何か報告は？」

「このまま続けて問題ないだろうと。それから、境界固定も上手くいっているので、そちらも問題ないと」

「おお、頼もしいな」

「あの場所が使えるとなれば、一気に事を進められるからね」

那君がにやりと笑うと、礼は眉間にしわを寄せた。

「しかし、蓮杖は計画に九頭柳家も組み込むように進言してきています。九頭柳家を、本当に信頼してもよいのでしょうか」

不審そうな表情を隠さない礼は、同時に九頭柳への怒りも少しばかり見せていた。

隣に立つ克も同じような表情なのを見て、那君は視線を鋭くする。

確かに、この兄妹はあの家とは少しばかりの確執があった。

「……確かに、九頭柳を完全に信頼するのはよくないだろうね。あの家は、少しばかりやりすぎるくらいがある。だから、計画の全容を話す事はしない。……ただ、もし話す事になったとしても、そのままです取り込む価値があの家にはある。九頭柳といえば蓮杖に次いだ鬼道の名門だ。境界固定には、あの家の力も必要だと思つよ」

蓮杖と九頭柳、少し前まで、その家格は同等だった。少し前。そう、長という制度が揺るぎ始める、ほんの少し前あたりから、それは崩れ始めた。

「九頭柳は、家格を昔のそれにまで上げようと必死になっている。こちら側につくという事は、それなりの先見の明もあるはずだ。……大丈夫。僕達の不利益になるような真似は、すまいよ」
そう言われて、礼はしぶしぶと言った様子で頷いた。
そこまで言われて、反論できるわけがない。

個人的な感情をしまっておくことは、特に難しいことではないのだから。

礼がそうして感情を封じているのを知っていて、那君はずっと視線を逸らした。

こうすることが彼女の為には良くないとわかっていても、そうするほかない自分に嫌気がさした。

種々の確認を済ませ、計画成功への手はずを整える。

そうして、後は実行へ移すばかりとなった頃に、克が大きくため息をついた。

二人から、礼からは咎めるような、那君からは案ずるような視線を向けられて、克は気まずそうな顔をする。

「……その……いつまでかかるか、何となく気が重くなっただけです。ただ、それだけ」

表情と同じく気まずそうな声に、那君は声をあげて笑った。

「うん。そうだね。……でも、もうそんなにはかからないから。大丈夫。今に枕を高くして眠れるようになるよ」
那君がそう言うと、克は静かに頭を下げた。

もう、体力的にも、精神的にも、限界が近づいてきていた。

この計画を立てたのは、まだ三人とも、自分でさえ、大人というには到底足りない年のころだった。

それから時を経て、あらゆることにずいぶんな耐性がついてきているけれども、それでも、もう。

だからこそ、克は余計に心配になるのだ。

自分では無く、自分よりも更に若い目の前の二人のことが。

二人も、もう子供といえる年ではなくても、やはり大人ではないのだから。

「……たまにね、思うんだ」

克の案じる表情がとれないのを見て、那君は再び口を開いた。

「ずっと先の未来にね、僕の子孫があ土地で暮らしていて、二人がそれを支えてくれてるんだ。……そんな未来がくるって、何となくだけど、信じられる」

「……」

「だから、進もう？ 大丈夫、何があっても、僕が護るよ。僕が。僕達が」

最後につけたした言葉に、那君は自分で驚いた。

僕達、今そうやって呼び表すのは、目の前に居る二人と自分の事のはずだ。

なのに、二人を護る「僕達」が別にいる。

心当たりはないけれど、それでも、嫌な感じはしなかった。多分……そういうことなのだろう。だったら、大丈夫だ。

その安心した感情が伝わってか、克と礼の表情も自然やわらいだものになった。

「参りましょう。那君……いえ、陛下」

「お護りくださらずとも、私どもが護って見せます。　　なんだか、負ける気がしないんですもの」

克と礼がそう告げると、那君はくすりと笑った。

「そうだね。僕も、負ける気がしないや。……それじゃ、世直しと行きましようか」

長の崩御、その継嗣たる那羅延の即位。

それらが一度に報じられて、瀟霊挺は紛糾した。

世界が終わる、誰もがそう感じた時、その革命ははじまった。

前々から行われていた、長の一族にとって変わろうとする貴族の肅清。

そして長派であり、没落しつつあった貴族の救済。

墮落しつつあった死神の統制。

不要な法の撤廃。

恐ろしい程の手際で行われたそれに、いつしか瀟霊挺の動揺は静まって行った。

数か月前まで、それこそ先の長の時代からは、考えられない程に。

「上手くいきましたね、陛下」
嬉しさをこらえきれない様子で礼が言くと、那君は苦笑した。
彼女は、革命に伴って死神としての席次を与えられたのだ。
護廷十三隊へ女性の登用、それも、革命の一つだった。

黒衣を誇らしげに日々死神としての責務を果たす彼女は、周囲からの評判も良いようだった。

それだからだろう、こうして明るい表情をすることが増えた。

「そうだね。ちゃんと、計画通りにいつている。……あとは、成員を選ばないとね」

「ああ、その件ですが。……こちらが、私たちが調べた適正者の一覧です。ご参考に、どうかお使いください」

中央四十六室・候補者

そっけない標題に、那君はすっと目を細めた。
これが、これからの明暗を分けることになる。

それは、三人もよくわかっていた。

S 1 5 真夏の夜の夢 七（後書き）

タイトル日本語訳は「我らを赦し給へ」

一瞬だけでできた那君の本名、那羅延。

実は、ある実在の人物の幼名をそのまま使っています。

ウィキペディアなどで一瞬ででてくるので、出来れば調べてみてください。

克と礼にも由来があります。

「克己復礼為仁」という論語の一部からとったものです。

意味は「自己に打ち克って礼に復帰することが仁の道である」ということ。

彼らしいかな……と思ったので、こちらからとりました。

それでは感想などお待ちしております。

S 1 5 真夏の夜の夢 八(前書き)

前話の数カ月後から始まります。

S 1 5 真夏の夜の夢 八

Hand she

その夜、ぼんやりと思索を巡らせていた那君の耳に、聞きなれた声が滑り込んできた。

「陛下、嵐雀あまつきです」

そういえば、そんな約束になっていたっけ。

聞くともしなしにそんなことを考え、何気なく答えた。

「ああ、入って」

そんなに折り目正しく振舞う必要はないと言っても、この女はいつもそうだ。

規定された、礼儀正しいとされる中でも最も上流のふるまいを見せて、嵐雀は部屋へ入ってきた。

刹那、目が合う。

「……挨拶はいいよ。手短かに頼む」

「は」

それでは、と単刀直入に話した彼女を見ながら、那君は話題に意識を傾けた。

「中央四十六室設立の件ですが、お待ちいただきましたのです」

「……なぜ？ もともと、君が発案したものだろっ？」

那君が言つと、嵐雀は、はいと頷いた。

「それは、もちろんです。……しかし、時期尚早では？ 今はまだ、

陛下のお下知が必要です」

「そうだねえ」

気の抜けた返事に、彼女はいささかムツとしたようだ。

それでも、それを一切表情に見せないあたりはさすが志波の当主と言うべきだろう。

同じ“しば”でも司馬とは大違いだ。

「陛下の御考えが、理解できぬ訳ではありません。ですが、あの革命から時など経っていないも同然の今、委託統治など危険すぎます。もつとずつと先に、それまでに慎重に準備を進めるべき事柄ではありませんか」

那君とて、彼女の懸念がわからないでもなかった。

いや、わからないでもないというよりむしろ、全く同じことを危惧していると言ってもいい。

いくら散逸していた権力を自分の下に統一したとはいえ、それが安定したとは言い難い。

そんな状態の今、尸魂界における全ての権限を貴族でもないものから構成した組織に委譲するというのは、危険すぎる。

「わかっているよ、それぐらい」

だから彼は、考えた通りの言葉を返した。

昔から、政略知略の為なら嘘も方便どころでは追いつかないほどのことをやらかしてきた彼だが、どうにも彼女をだますのは苦手だった。

「そもそも、中央四十六室計画なんて穴だらけだ。尸魂界全土から賢者と裁判官を選びぬくとして、その判断基準はどこにもない。そもそも政治に精通しているのは死神か貴族ぐらいだ。その時点で、尸魂界全土は瀨霊廷全体と同義になり下がる。君が言ったことももちろん問題だ。……でもね、それでいいとも思っただ。少なくとも、そうすることで尸魂界の政策は僕の手から離れる」

特に顔を見て話していたわけでは無かったから、全て言い終わってから那君は彼女の顔を見た。

その表情が、啞然を通り越して愕然としていたのは、特に予想外では無い。

「革命は、全て僕の指示で行われた。世界は、大きく変わったよ。僕の考えで。……でも、それはもう続けるべきじゃない。四十六室への政権移譲は、早ければ早いほどいい。そうでなければ、世界はますます僕の手の中で踊ることになる。そうなるのは、もっと小さな範囲……僕の一族と、それに従うもの好きと、監視されるべき魂だけで十分だ」

だから、と那君は言った。

嵐雀は、すつと目を伏せた。

「四十六室はできるだけ早く完成させる。僕の手によってではなく、できるだけ多くの者の手によって。その結果、完全なものになったら問題なし。いずれは現世も魂魄の記憶によって貴族政治から脱却するはずだ。不完全なものになったら尚良し。災い転じて、というぐらいだからね」

那君は、そこではったりと口を閉じた。

言うべきことは言いつくしたから、あとは嵐雀の反応を待つしかなかった。

「……それで」

ようやく嵐雀が口を開いたのは、それからずいぶん後のことだった。中断していた思索を再び巡らせていた那君は、その意識を嵐雀に向ける。

「それで、あなたはいかがなさるおつもりですか。政権を手放して、一貴族になり下がるおつもりか」

嵐雀の表情は、真剣そのものだった。

だから、那君はつい嘖き出してしまった。

「……私は、真面目にお聞きしているのですが」
すう、と空気が冷えたのを感じて、那君はその笑いを収めた。
笑うつもりはなかったのだけど、などと言っても確実に無駄だ。

「……君は、いちいち予想の斜め上をついてくるよね。答えはいいえだ。長の制度も存続させる。世界を安定させるためには、やっぱり誰か一人が頂点に立つことが必要だから」

「……四十六室に、議長位はなかったはずですが」

「うん。君には、まだ話していなかったから、知らないのも当たり前だね。確かに、僕も僕の一族も、四十六室には加わらない。……僕たちは、尸魂界から出るつもりなんだ」
その瞬間、嵐雀の表情が確かにこわばった。
少なくとも、那君にはそう見えた。

「現世、尸魂界、虚圏、地獄。この四つの世界の狭間に、断界がある。その中に、ごく小さな空間が生まれては消えているのは、知っているよね？」

こくりと、嵐雀は頷いた。

まるで、操り人形のようなそぶりだったけれども、那君は何一つ気にしなかった。

「そのうちの少し大きな一つが、周囲の小さな空間を吸収して広がっている。いわば、原始の世界がもう一つ生まれようとしているわけだ。その境界を蓮杖家が中心に固定している。いずれは、魂魄の輪廻にも組み込むつもりだよ。……僕たちは、そこへ移る。それが、計画の終了段階だ」

それから、やはり短くない沈黙が続いた。

計画の一番最初から協力してくれている彼女には、最も早く知らせ

るべきだと判っていた。
だが、なぜかそれができなかった。
ぐずぐずしているうちに、今になって。

計画を知らされず、加われなかったことを、彼女が屈辱に思ったとして当然だと思った。

だから、彼女が何を言おうと、咎めるつもりもない。

だから、早く何か言ってほしかった。

「……わかり、ました」

予想に反して、彼女はなかなかにもんわりのいい答えを返した。
逆に、それが不審を誘う。

「怒らないの」

それが疑問形の形をとっていないことも、彼女にとっては織り込み済みだったらしい。

「……怒っていますよ。それはもう」

彼女の声は常日頃から淡々としているために、そこから何かを読みとることは難しい。

普段は表情がそれを補っているが、今は表情からも何も読み取れなかった。

参った、と心の中で白旗を上げる。

こうなつては、手の打ちようがない。

「ですが、もう色々突き抜けました。いちいち怒っていたら、身が持ちません」

「……そう」

ありふれたと言えばそれまでの、しかしそうなることは滅多にない

ことを言われて、那君は言葉少なに返した。
下手につついて藪蛇にでもなったららことだ。

「陛下のお考え、私にもよく納得のいくものです。心からとはいえませんが、それでも、その計画の正当性は認めます」

まるで対等な立場の発言だが、那君は気にしなかった。
心の中で、彼女ならと思ってもいた。

「その計画の為なら、どのような力も惜しみません。我が志波家、滅亡するその時まで陛下のお下知のもとに。……ですからどうか、一つだけお許しを」

彼女が、忠誠の引き換えに何かを求めるのは珍しいことではない。
それが志波家や彼女の為だけの利益ではなく、多くは自分の利益にもなるので、那君は往々にしてそれを許してきた。
それは、今回も例外ではなく。

「構わないよ。何？」

ただ、それがあまりにも思いがけなく、那君としては珍しいことに
しばらく固まる羽目になったのは、果たしてだれの意図するもので
もなかった。

S 1 5 真夏の夜の夢 八（後書き）

タイトル日本語訳は「彼と彼女」

志波嵐雀さんは御察しの通り志波三兄弟の先祖です。
あとは朽木と四楓院だなあ……

それでは感想などお待ちしております。

S 1 5 真夏の夜の夢 九(前書き)

前話の続きから始まります。

S 1 5 真夏の夜の夢 九

The beginning of the world

「……靈王陛下」

呼びかけられた那君は、その場で振り向いた。

「自分で考えたのに、なんだか落ち着かないな、その呼称は」
笑いが、さざ波のように広がる。

瀨靈廷の中心にある丘、その頂上。

先端近くに那君を始めとした王族 元、長の一族 と、護衛士
と呼ばれる、死神から選抜された王族の護衛部隊、そして付き従う
ことを選んだ侍官達が、まばらに広がる林近くに瀨靈廷に残留する
ことを選んだ者達が集まっていた。

見送りに集まった者たちも、見送られる側の者たちも、誰もが那君
に親しい者ばかり。

だからこそ、その笑い声だった。

場が再び静かになると、那君は襟を正した。
それを見た残留組が、おもむろに膝をつく。
最後に戴く勅命を一言一句たりとて聞き逃すまいと、誰もが息を詰
める。

そのただなかで、那君は静かに口を開いた。

「 志波森鳩。 靈王としての権を以て、汝をここに志波家当主な
らびに重権貴族筆頭として認める」

「は」

「蓮杖吉祥。汝をここに蓮杖家当主として
四楓院、九頭柳、朽木、竜堂寺、雀賀、虎鏡、龜樂。
重権貴族と呼ばれる初代九家　のちの五大貴族であり四大貴族と
なるそれらの地位を定めたのち、那君は改めて口を開いた。」

「だが、この地位は特権を伴うものではない。その権は全て魂魄を
護るために行使されなければならない。それゆえ、その上位組織た
る中央四十六室の開設を宣言する。　六名の裁判官および四十名
の賢者は、欠員は賢者の推挙により裁判官が審査する。被推挙者の
生来の身分は問わない」

それは、改革を行った那君にとっても勇気のいる決断だった。

貴族と違い、多くの者は政治教育を受けていない。

そうした者が不用意に政治にかかわってよいものか、正直判断には
迷った。

嵐雀にああ言った後でさえ。

だから、決断した代わりに誓いを立てた。

己と、そして己に連なる子孫達。

もし貴族制が乱れ、四十六室が乱れるようなことが　それ以上に、
貴族や四十六室が世界を揺るがすような行動をすれば。

その時は、止めてみせると。自分たちの、全てを懸けて。

那君の後ろ、より先端に近い側に立っていた嵐雀が、わずかに身じ
ろぎをした。

それを気配で悟って、那君は深く息を吸う。

「私は、今を以つてこの地を離れる。生涯、戻ることはないだろう。恐らくは、ずっと先の子孫まで」

尸魂界に残る者たちは、何も言わない。

尸魂界を　ひいては現世と虚圏、地獄を預けられたも同然で、その責務に足が竦まないと言えば嘘だった。

何かあつたら、頼ることができる。でも、それは容易なことではない。

まるで親を亡くしたひな鳥のような心地で、彼らはそこに跪いていた。

ただ一人、元柳斎を除いて。

一番林に近い、残留組の視界に入らない位置で、彼は跪くこともせず真つ直ぐに那君たちを見ていた。

那君はそれを咎めない。だから誰も言わない。

「出来れば、私の跡を継ぐ者が誰一人としてここに来ないことを願う。だが、それは難しいだろう。統べることは、容易なことではないから。だが、何かあつたら、遠慮なく頼ってほしい。それが、霊王の存在意義だ。その時に役に立てるよう、私は子供たちに教育を施す。地位を与え、才能を育てる。知力も武力も、賢者や総隊長にさえ引けをとらないほどにまで。それだけは、忘れないでほしい」
それは、元柳斎と、そして克と礼に向けられた言葉だった。

克も礼も、柳と一緒に来るものだとばかり思っていた。

だが、柳ははつきりとそれを　護衛士としての地位と、そして血統によらぬ純粹な評価を拒否した。

彼が二人に反抗するのは、思えばそれが最初だった。

「お二人が陛下に付き従うのであれば、私はここに残ります。全て、自分の力で勝ち取ります」
付与と庇護を拒絶して、元柳斎ははっきりと自分の意思を示した。なおも言い募る二人を止めたのは、他でもなく那君と、そして嵐雀だった。

那君も嵐雀も兄妹以外の全ての人間が、兄妹が柳一人にかける思いが重荷なのだと判っていた。

元柳斎が、静かに膝をついた。

それを見届けた那君は、己に付き従う者たちを振り返る。

「本当に、いいんだね？」

その言葉に返す者は、誰ひとりとしていなかった。ただ、嵐雀が、静かに膝をついた。

私も、陛下に同行させてください。

そう要求した嵐雀を、那君は何度もいさめたけれど、それでも彼女は意志を曲げなかった。
結局、随伴を勝ち取った彼女は、その最前において那君に頭を下げた。

嵐雀に続いて、克が、礼が。全ての者たちが、膝をつく。それを確認した那君は視線を空へと向けた。

「ならば、行く」

S 1 5 真夏の夜の夢 九（後書き）

タイトル日本語訳は「世界の始まり」

……ということでした。

本当は六話編成だったんですけど……ね……

S 1 6 うたかた 前篇(前書き)

日記形式で、時系列はとびとびです。

S 1 6 うたかた 前篇

R i v e r d o e s n ' t s t o p

王土に来て、数日が経った。

日記と言うほどのものではないが、後の為に今思うことを書き記しておこうと思う

まずはじめにそう書いて、青年 竜は、筆をおいた。

最初の内は、割り当てられる仕事も少ない。

慣れるのも仕事の内だ、と元上司 そして今の同僚 に言われ、隊舎のあちこちを巡った後、竜は自室に下がっていた。

雷雨に頼んで街を案内してもらうこともできるだろうが、それは少しばかり自分が気まずいので、こうしているというわけだ。

しばらく考えた後、竜は再び筆をとった。

王土の気候は、尸魂界や現世とずれがある訳ではないようだ。

強いて言えば、冬が少し厳しいのだと雷雨が言っていたが、それだけだと。

四季もあり、食べ物もおいしい。酒の肴も上等、と付け加えるあたり、どうやら彼女の言い分が気にされている様子はない。

それはともかく、確かに酒の肴も旨かった。酒も、もちろん。そう言えば、王家の方々はあまり酒を口にされないようだ。

死神らしいことに、護衛士は誰かれ問わずいける口であるのは確かだ。

再び筆をおいた。

だめだ。何かが決定的にずれている。

後年これを見て、呆れている自分の様子がありありと目に浮かび、竜は目を細めた。

もう一度慎重に行間をとり、書き始める。

王土の文化は、鮮やかの一言に尽きる。

食においても住においても衣においても、庶民に至るまで、こ

この住人は徹底して鮮やかさを好むようだ。

豊かさ、という言葉もあてはまるだろう。

流魂街のような貧民地区もなく、教育は職能技術に及ぶまで望む限り与えられ、実力と才能さえあれば出世に制限もない。

貴族制そのものが無い、というのが、そもそも大きな驚きだ。

まさか霊王の御膝下で、このような制度が実施されているとは思わなかった。

尸魂界での価値観が全く通用しない、それに戸惑うことも多い。

実力主義という観点のみは同じだが、それにしてもやはり尸魂界とは異なる。

少なくとも、のし上がる道が死神以外にないなどと言うことはない。この世界に死神はいないが。

ようやく満足のいく内容がかけて、竜はほっと息をついた。

そう、自分が書きたかったのはこう言うことだ。

そのようなことをぼんやりと考えて、竜は筆の先を整えた。

尸魂界での価値観と言えば、王族に関する先入観もそうだ。

王族、というからにはさぞいい暮らしをしているのだろう。

その憶測は、誤りではない。

確かに、彼らはいいものを使って暮らしている。

それでも、豪奢というわけではない。決して。

もともとが死神の一族であるからだろうか、それともいつとも知れず命を狙われる生活をしているからであろうか、彼ら彼女達は得てして実用性を重んじる。

正装は確かに潇洒なものだ。

だがそれが過剰に動きを制限することは決してない。

むしろその服は楯となり武器となり、彼らの身を護る。

儀仗一つとっても、それが単なる飾りものであることはない。

完全に無駄なく、しかし遊びを入れた豊かさを、彼らは好むようだった。

豊かさ、というならば、年月にしてもそうだろう。

長い間使いこまれた由来の品を、彼らは等しく好む。

父から、母から譲り受けたものを、それは大事に使う。

その父母もまた、彼らの父母や祖父母から譲り受けたものを、大切に使ってきた。

だから、意外に思われるだろうが、内宮に振り分けられる予算のうち購入費はさほどの比率を占めていないらしい。

むしろそれらは維持費に多く振り分けられ、新しい物を買うことはめったにない。

王土に来てそういった実情を知り、驚かない護衛士はいないと思う。自分も、そうだった。

そこで竜は筆を置き、与えられた部屋を見渡した。

備え付けの寝台はともかく、残りの全ては新しく用意されたもの。

これは新入り護衛士の、言うならば特権らしい。大事に使えよ、と隊長に言われたのを思い出して、竜は心外そうに眉根を寄せた。

少なくとも自分は、物を大切にする性質だ。

ただ、それら全てが質の良いものであるために、何となく気づまりだった。

御仕着せ、と言えば話は早い。

ただ単に苦手なだけであるとはいえ、そもそも物欲が無く流魂街出身の自分には過ぎたものであるという意識も相まって、竜は小さくため息をつく。

もう一周眺め見た後、竜は再び筆を手にとった。

驚いたことは、それだけではない。

方々は、それぞれ驚くほどに気さくであられる。

こちらの習慣に慣れていない自分の非礼を、快く赦して下さい。

あれは、お心の広さと言うだけではあるまい。

上に立つべき者の品位、そういう物を、生来か否かはともかくにして、お持ちでいらっしゃるようだ。

この時点で、残念なことに竜はその決定的な理由に気づいていなかった。

彼らは 王族は、気さくなのではなく単に堅苦しいものが嫌いなだけだ、ということに。

もちろん例外が無いわけではないにしろ、これはほぼ真理と言っても過言ではない。

後年、竜は改めてこの事に触れているが、それはまた別の話である。

*

今日、一心様が国院学舎をご卒業なされた。

来月からは、巡察使見習いとして御着任なさるのだと仰っておられたが、あれだけの腕と才覚をお持ちであるからには、正式に巡察使となる日も遠くはあるまい。

お小さいころから御兄弟の内でも特別秀でていらっしやる方であるから、周りの期待も大きい。

しかし、気負った風もないところは、あの方らしいと思う。どうかつつがなく、功を上げられることを願う。

*

三月の会の為ご帰還なされた折り、一心様に尸魂界について尋ねられた。

貴族のこと、流魂街のこと、四十六室のこと、様々なご質問だったが、あれは一体なんだったのだろう。

桐生とともにわかる範囲でお教えしたが、聞けば聞くほどといったご様子だった。

だが、昔から好奇心の旺盛なお方ではあるし、何より様々なことを学ばれるのは良いことだ。

気にかかることが無いわけではないが、それを気にするのは過ぎた真似だろう。

*

先日より、一心様のお姿が見えない。
もとより巡察使であるため常に居所が知れるというわけではないが、
霊圧が、感じられない。

あのお方に限って、亡くなられたということはないはずだ。
巡察使として十分な技量をもっておられる方であるし、変事の報も
ない。

それよりも、以前尋ねられたことが気にかかる。
現世や尸魂界にひどくご興味を持っておられるようだったが、まさ
か。

昔から、好奇心の旺盛なお方だった。
それゆえに、全くあり得ないわけではない。
だが巡察使としての義務をお忘れになるような方でもない。
早く、何かわかればよいのだが。

*

昨秋の暮れより始まった病の流行が、一向に収まる気配がない。
陛下の命により正月の当主参賀は見送られたが、仰る通り春に収ま
るものなのだろうか。

今日、ついに王族からも犠牲者が出た。
全身に発疹ができ、高熱がでる。

今はまだ子供に多いが、その家族を中心に感染が広がっていくと聞
く。

成人の場合は空咳を伴うことが多く、死亡率も子供と違って高い。
体力の違いからか、護衛士からはまだ犠牲が出ていないが、時間の
問題かもしれない。

一刻も早く終息することを願う。

S 1 6 うたかた 前篇（後書き）

タイトル日本語訳は「川の流れば絶ゆることなく」とある古典の冒頭の英訳の意識です

今回は竜を中心に話が進んでいきます。

来週は、やっと一護が出てくる……はずです。

それでは感想などお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3400n/>

Lost gear and broken pendulums

2011年10月9日08時40分発行